

テイルズオブベルセリア ～争いを好まぬ者～

スルタン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

運命のねじ曲がりにより死亡し、元の世界から弾かれてしまった主人公

途方に暮れる彼の前に現れたのは大天使「ルシフェル」だった。

ルシフェルの提案で自分が行く世界がわかるまで己を鍛え上げることにした主人公。ルシフェルの呼びかけに答えて現れた二人に師事し、時間の概念のない空間でみるみる実力をつけていく。

体感的な時が流れ、ルシフェルに自分がこれから行く世界を知らされた、そこは人が魔物になるという奇病により混乱の最中にある世界だった。彼の生き方はその世界の人たちにどのようなように映るのか、彼とどう不確定要素が世界にどのような影響を与えるのか。それは天使だけが知っている。

気分転換で書き始めました。初の投稿で文章は下手ですが、どうかよろしく願います。ご意見ご感想いただけたら嬉しいです。

目次

序章	1
主人公について	13
第1話	16
第2話	22
第3話	27
第4話	36
第5話	45
第6話	58
第7話	77
第8話	97
船の上で	120
第9話	124
第10話	131
ルシフェルの電話と彼について	150
第11話	152
第12話	164
船の上で2	174
第13話	177
第14話	196
第15話	212
第16話	229
第17話	249
第18話	274
第19話	294

第42話	第41話	第40話	第39話	第38話	第37話	第36話	第35話	第34話	第33話	第32話	第31話	第30話	第29話	第28話	第27話	第26話	第25話	番外編・師と弟子	第24話	第23話	第22話	遙か彼方遠く、そことは全く違う場所で	第21話	第20話
654	639	621	607	595	581	567	553	542	523	509	501	487	471	456	444	429	414	403	388	372	357	353	337	318

第55話	前夜	第54話	第53話	第52話	第51話	メルショオにて	第50話	第49話	第48話	第47話	第46話	第45話	第44話	第43話
823	821	811	802	792	782	779	767	757	745	729	716	702	687	669

序章

序章

「ここは・・・」

自分の第一声はこの言葉だった。地面にへたり込むような体勢で目が覚め、顔を前に向けると視界に映るのはあたり一面に広がる真っ白な空間だった。霞むことなく見える地平線、少なくともここは普通ではないということとは理解できた。

「確か仕事の帰りで信号待ちしてて・・・それから」

最初はこの異様な光景に驚きはしたものの、何もしなければ何も始まらない。そう考えまずは自分の状態を確認してみる。黒の半袖シャツに傷んだ作業ズボン、それに安全靴、荷物と作業用の上着はなくなっていた。

「上着がないってことは携帯や財布もなくなってるな。困ったな、これでは連絡もとれない。」

独り言をつぶやきながらあれこれ思案していると。

「やあ」

短い言葉で声をかけられ少し驚きながらも後ろを振り向く。そこには黒いジーンズと黒いシャツ、シャツは胸元とへその部分が大きくはだけており彼なりのファッションなのだろうとわかる。オールバックの黒い髪、ルビーのような深紅の瞳、この赤い目を見てすぐ彼は普通の人間ではないことがわかった。

「どうしたんだ黙って？そんなに私が珍しいのか？」

「どうやら長い間彼を観察していたらしい」

「あ、いえ。すいません、今の状況を理解するのに時間が掛かりました」

「仕方ないさ、こんな所に突然飛ばされたら誰だって戸惑うさ」

彼はそういうとちよつと満足げな顔を浮かべた。

「なぜ自分はこの場所に？仕事の帰りだったはずなんですが」

「ん？ああすまない。まずは君の身に何があったのか説明しなきゃな

らないな、だがその前にお互い自己紹介をしよう。」

そういうと彼は指を鳴らす、次の瞬間には自分の目の前に二つの椅子と小さなテーブルが置かれていた。テーブルには飲み物も置いてある。内心便利だなと思いつつ椅子に座った。ルシフェルは椅子に座りつつ話し始める

「自己紹介といこうか。私の名はルシフェル。君は？」

「名前は健太郎です。古臭い名前ですがね」

「古臭い？いい名だと思うがね。よし、それじゃ早速君の身に何が起こったのか話をしよう」

そういうと彼は話し始めた。

「まず落ち着いて聞いてほしい。君はあの時”死亡”した」

「死んだ・・・んですか」

薄々感づいてはいたがこうも言われるとくるものがある。

「君はあの時信号待ちをしていたな？バイクに乗っていたはずだが」

「はい、そうです。バイクで信号待ちをしていて・・・それから・・・」

「その先は覚えていないだろう。知りたいなら教えるが、聞くかい？」

「・・・はい、お願いします・・・」

「まずあの時君の後ろからトラックが来た、運転手は酒に酔っていたようでかなりのスピードで君に追突した。追突された君はそのまま押される形で前のトラックと挟まれる形になった。」

ルシフェルからそういわれ自分の体は少なくともサンドイッチになったことは間違いないだろう。顔もわからないぐらいに。

「そうですか。でもそれだけでは私がここに呼ばれる理由にはならないはずですが。それとも私以外にもここに連れてこられるんですかね？」

「いや、そうじゃないんだ、これにはちゃんとした理由がある。説明しよう。基本寿命や事故死などで死亡してもそれはすべて運命づけられているんだ。もっとも運命なんてところろ変わるんだがね。だが例外がある。」

「例外？」

「そう運命が極々稀に捻じ曲がったり、折れ曲がり、崩れたり・・・こ

「ここまで言えば、わかるよな?」

「少なからず自分は運命が捻じ曲がって死んだというわけですか。」

「そうだ。因果も捻じ曲げられてまた同じ世界に生まれ変わらせることができない。つまり君は自分のいた世界から弾かれてしまったんだ。今回は初めてのケースだよ。偶然と不運が重なったとも言える」

その言葉を聞き自分は目を閉じた、自分は死に何より因果から弾かれ元の世界にもいられない。家族を置いていってしまう自分に歯噛みしながら。再び目をあけてこれからのこと、そして自分が死んだ後のことを聞くことにした。

「そのあとどうになりました?少なくとも大騒ぎのはずですが」

「ああ、なんせ飲酒での事故であり人も死んでいる、かなりのものだよ。」

「置いてきてしまった家族が気がかりです。」

「そうだな。君の家族にはどのように対応するか思案していたところなんだ。」

「・・・あの、お願いがあります。」

「ん?なんだい?」

「私が存在していた事実を消すことはできますか?」

「・・・なぜそんなことを?理由を聞かせてくれないか?」

「私が死んだとなると家族が何をしでかすかわかりません。少なくとも父や母のことです絶望して自ら死を選ぶかもしれませんが・・・そういうことはしてほしくないんです。」

それ以上はというのが辛く、口ごもる。

「・・・わかった、君の願いどうり君に関することは全て消去しよう。後悔はないんだな?」

「はい、お願いします。」

これでいい、これでいいんだ。少なくともそんなことするぐらいなら自分の存在を消していつもどおりに暮らしてもらったほうがいい・・・、エゴだと言われればそれまでだが。と自分の中でそう何度も言い聞かせる

「さてとこれで事後処理は完了だ。それでこれからのことだが因果か

ら外れてしまったからには本の世界には戻れない、そこでだ。君がよければ別の世界に連れていくことができるが、どうする?」

「別の世界?という転生というわけですか」

「そういうことになるな、どうするといってもここにいっても何も無い場所だしどうせなら新しく人生を別の場所で始めるのも悪くないだろう?」

彼の言うことも一理ある。ここにいっても何も始まらないし終わることもできない、なら世界は違えど自分の証しを立てたいと純粹に考えた。

「ろおっと、言い忘れていた。連れていける世界は私にもわからない。正確に言えばどんな世界かはまだ決まっていない。このままいってもいいがもし危険な世界だったらまずいんじゃないか?」

「そうか・・・そうなるはずですわね・・・何とかしなければ・・・でも自分はそういうことはしたことがないのでなにをすればいいか」

「なに、気にすることは無い、これから学べばいいじゃないか。何事にも初めはあるというしな、この空間は時間という概念がない。いくらでもいられる、よく考えればここは何かをするにはまさにうつつけの場所だ。だがどうしてもというなら私から君に力を与えることもできるが・・・どうする?」

確かに彼から力を与えられもらえれば楽だろう。でもそれだけじゃいけない、結果だけを求めてはいけない。過程も必要なんだ。それに与えられる物より自らの手でつかみ取ることに意味があるはずだ。それなら。

「いえ、ここで自分をうんと鍛えてみます。与えられるだけでは自分のためになりませんので」

「ふっ、君ならそういうと思っていたよ。よし、そうと決まれば始めよう。私もサポートしよう」

「えっ、よろしいんですか?」

「今回の件はその歪みを直すことのできなかつた私たちにも責任がある。その詫びも兼ねてね」

「わかりました。ありがとうございます。」

「その前に君の魂は因果から弾かれた衝撃で幾分か崩れているし肉体は消滅している。まずはそれらの修復しないと。」

「え？崩れてる？見た目はなんともないですし、体もこの通りちゃんど……」

「あつとすまない、今の君の姿は魂の情報から映し出している幻影にすぎない、簡単にいうと着ぐるみみたいなものだ。そのままじゃなにもできないぞ？だからこそまずは魂の修復と肉体の再構築が必要なのさ、これぐらいは与えてもバチはあたらないさ。」

「そう……ですね。お願いします」

「よし、ではさっそくはじめよう。魂の方は鍛錬をしながら修復していけばいいから先に肉体の構築から始めよう」

そういうとルシフェルは指をはじく、その瞬間自分の周りから光が浮かび始める。

「自分がいいという姿を思い浮かべるんだ。肉体はそのとうり形作られるぞ。やってみるといい。」

アドバイスをもらい自分を思い描く、生前こういう転生関係の小説は興味本位で読んだことがあるがその主人公たちは全員ではないけれども顔立ちはかなり変えていた。でも自分はそういうものにはあまり関心がない。親からもらったこの顔が一番いいと思っている。顔はこのままでいい、体の方は身長はそれなりだったけど鍛錬をするなら背が高い方がいいだろう。身体能力はこれから伸ばしていけばいい。それでいい、これでいい。

「ん、終わったようだな」

光が収まるとそこには一人の人間の姿があつた身長は190以上はあるだろうか、髪は黒く短いスポーツ刈り、瞳の色はこげ茶色、顔の掘りは深く、美男ではなくいかにも男らしい顔つきである。筋肉は元からそれなりにあつた。鍛えればもつとよくなるだろう。

「ほう、顔は殆ど変わってないようだな、てつきりどこかのゲームや漫画のキャラみたくイケメンにするとおもったんだが、そういうのも悪くない。」

「ええ、親からもらったものですから、そこは譲れませんよ。」

「ふふふ、幾分か余裕ができたようだな。よかったよ。最初見た時はかなり憔悴してたから不安だったんだがその心配もないようだ。さて何から始める?」

「まずは体を作らなければなりませんね、できれば師事してもらいたいのですが。」

「わかった・・・と言いたいところだが私はそういうことにはあんまり好きではないのでね。別の世界から適切な人物を呼び寄せることができる、それでいこう」

あれ、サポートしようって言ってなかったっけ、まあサポートの仕事なんて千差万別だし自分の考えてたサポートと彼の言うサポートは違うのだろう。

「そう心配するな。君が旅立つその日までしっかりとついててやるからさ。」

彼はなぜか楽しそうに言う、少しだけ不安になった。

く

それから時(?)が経った。何年なのか何日なのかわからないぐらい

あれから自分はかなりの実力をつけたとはいってもここまでの道は決って楽なものではなかった。なぜかという超スパルタだったからだ。師事をしたという自分の願い出にルシフェルは。

「彼らなら一番の適任者だ」

といってその呼びかけに答えた人物があまりにも規格外だった。

一人はまるで獅子を思わせる頭部、鋭い目、全身が炎のように赤く。へその部分には見覚えのある文字、そう彼は近接最強にして宇宙拳法の達人、全身凶器とまでいわれたウルトラマンレオその人だった

「ほう、お前がが新しい弟子か、鍛え甲斐がありそうだな。」

もう一人は対照的に青く表情は読み取れないがなぜか心が落ち着くウルトラマンレオのような威圧感がなく月のような優しさを放っていた。

「私が君の師匠・・・ということになるのかな・・・うん、君は優しい心の持ち主のようだね、ここをでてでも必ずうまくいく、私が保証しよう。」

この二人のウルトラマン（サイズは人間と同サイズだが）にレオ師匠からは肉体と精神をコスモス師匠からは心を鍛えることになった。だがコスモス師匠は双でもないがレオ師匠の鍛え方がかなり荒かった。まずは基礎的な体力と体作り（これもかなり激しかった）、それまではよかった。だがそれからがまさに鬼のような特訓の連続だった。「これから本格的に訓練をつける、その前にこれをつける。」

と彼は自分に向かって手をかざす、自分の体に鎧のようなものが装着される。その瞬間急に体が重くなる！

「・・・ツッ！」

なんとかその重さに耐える。

「ほう、その重さに耐えるか、そのスーツは150キロ、お前にはその重さに慣れてもらう。その状態で満足に動けるようになったら戦闘訓練を行う！わかったな！」

「は・・・はい！」

初めは満足に動くことすらできず足を引きづるようにしか歩けなかった、それから体感的に数ヶ月ほどたったのかもしれない。やっと普通に歩くことができるようになった、さらに数ヶ月には走れるようになった。そのさらに数ヶ月には体を思うように動かせるようになった。もちろんこの間にもレオ師匠から拳法の型や構えや打撃訓練などを受けた。

「よし、だいぶましになったな。もう少ししたら俺と組手を行ってもらうぞー！」

「は・・・はい・・・」

「なんだその声は！男なら空元気でも威勢を出せ！」

「は・・・はい！」

その後3日もしないうちにレオ師匠と組手を行うことになった、結果はというともちろん全敗だった。

なんせ1発打ち込むと弾かれ、次の瞬間には10発の拳と蹴りが飛

んでくるからだ。拳や蹴りを防御しても骨が折れるかのように痛み、避けても風圧なのかはわからないけれど体には切り傷や打撲痕ができていた。まともにくらった日には立ち上がることもすらできない時もあった。レオ師匠はもちろん手加減してくれている、それでも実力差は宇宙の外側と地の底まであるのは確かだった。

心の鍛錬にはコスモス師匠がついた。彼はルナの状態でいた。肉体と精神ではレオ師匠が担当だからだ。

彼の言うことはいつもこうだった。

「絶対に優しさを失わないでくれ、君は優しい心をもっている。それを忘れないでくれ。」

コスモス師匠は心とは相手を思いやる気持ち、そして無暗に力を使つてはいけないということ、相手を労わることなどを説いた、一種の座学と相手を傷つけずに無力化する戦いを教わった。彼の戦いかたはまさに激流に身を任せ、同化するを体現したような物だった。受け流し、押す、避ける、投げいたっては荒々しく投げるのではなく羽のように軽やかに投げる、これがかなり難しかった。それといくつかに技も伝授してもらった、もちろんレオ師匠にもだ。最初は自分なりに光線など撃つことができたのかと考えたがイメージトレーニングと師匠たちの指導のおかげで使うことができた。

「教えた技の中には今のお前では体力の消耗が激しい物もある、使いどころには気を付けることだ」

「いざという時のものだ」と心に留めといてくれ。」

それから交代で2人の師匠からの訓練が続いた本来彼らは宇宙警備隊としての任務もあるので交代で就いてもらっている。この二人には感謝しかない。

しばらく経ち

「それで？そっちの進展はどうだ？見た限りだとなんの問題もないようだが。」

「ああ、彼は確実に成長している。これなら送り出しても安心だ。」

ルシフェルはレオと組手をしている彼を見ながらコスモスに言う。多少は食らいついているが弾き飛ばされている。

「それで、彼の行き先は特定できたのか？」

「ああ。だがその世界にはある問題があるんだ。」

「問題？その言い方だと小さな問題ではなさそうだな」

「実はその世界は今混乱の最中にある「業魔病」という病が蔓延しているらしい。」

「「業魔病」・・・？」

「人間が魔物になる奇病・・・だ、そうだ」

「聞いたところウイルスや細菌ではなさそうだな、細胞単位での変化では説明がつかない。」

「そう、おそらくこの現象は霊的、もしくは魔力的な物が関与しているかもしれない、あくまで仮説だがね。」

「彼はそこに行く・・・か。今の彼なら不覚を取ることはないだろうが油断はできない。後は彼の成長に任せよう」

「そうだな。私からもできる限りサポートはしよう、といっても向こうの世界では「聖隷」という存在がいるようだ、まあ私たちの足元にも及ばないがね。あちらからには見えて話ができるので精一杯だろうな。もつと会う気もないがね。」

「だがもしもという時もある、用心に越したことはない」

「忠告、感謝する。・・・そろそろ時間だな」

「行くのか」

「ああ」

そしてルシフェルとコスモスはレオと彼の方に向かって歩きだした。歩きながらコスモスはルシフェルに話かける。

「もしかしたらその業魔病、病ではないのかもしれないな」

「というと？」

「その根源は人の中にあるのかもな」

「人の中・・・あり得るかもな。その線も含めて調査しよう」

「役に立つかい？」

「もちろん」

「出発ですか？」

「ああ、君の行く先がわかってねその世界のことを説明しないとな。」

「一体どんな世界なんです？」

「いかにもファンタジーな世界さ」

「ファンタジー・・・ですか」

「だがその世界は今混乱状態なんだ。人が魔物になる業魔病という物が蔓延している。注意してくれ。」

「人が魔物に、わかりました。それでそこにいっても先立つものがないと不安ですね、何があるかわかりませんし。その時は現地調達で・・・」

「その所は心配ない、こちらで用意しよう。」

「ありがとうございます。」

「そろそろ行こう、挨拶を済ませるといい。」

「わかりました。」

そう言う二人の方を向く。組手で顔と体中が痣だらけになっていたのでコスモス師匠のラミーサプラーで直してもらった。この状態が普通だったから何とも思わなかったけどコスモスとルシフェルに指摘されたのだ。

「今までありがとうございます！」

「うむ、まだまだ未熟だが、お前なら大丈夫だろう。鍛錬を怠たらず、力の使い方を見誤るんじゃないぞ。」

「私の戦い方も役立つと思う、気を付けてな。」

「はい！」

その言葉を最後に二人の師匠は光となって消えていった。元の世界に帰っていったのだろう。

「じゃ、行こうか」

ルシフェルが促す

「はい」

ルシフェルが指を鳴らすと空間から裂け目が現れ、そこから眩い光が差し込む。

「ろつとお、忘れてた。ここを出る最後に君に渡しておきたいものが

あるんだった」

「渡しておきたいもの？」

ルシフェルはもう一度指を鳴らすと両手が淡く光りだした。

「これは・・・」

「それは浄化の力、役に立つはずだ。もう一つは向こうの文字を読み書きについてだったんだがここでマスターしたから必要ないようだな。」

「ええ、苦労はしましたが。」

コスモス師匠とルシフェルの指導により文字や文章はマスターしてきた。教え方がかなりうまかったなと心の中で感謝する。

「しばらくは一人での行動になるだろう。それまでは気を付けてな、私もその内そちらに会いに行く。」

「その内、ですか。」

「ん、すまない、少しやることがあるのでね。」

「はあ、わかりました。では行ってきます」

そして光の中に入る、この先は一体何が待ち受けているのか、業魔とはなにか、不安と疑問もあるが踏み出さないと始まらない。その決意を胸に歩を進めた。

その後には彼の元いた世界では一つの変化があつた。彼の存在自体が消えたことにより。事故があつたと言う事柄が消えた。つまり事故自体起こらなかつたと言うこと。運転手も飲酒をせずに安全運転していたこと。彼が存在しないことにより彼の身の回りの物もなかつたことになつたこと。そして彼の家族、友人、知人も彼の存在のことを忘れた、正確には消滅したこと。元からなかつた事。そしていつも通りの日常がいつも通りに始まること。ただそれだけの小さな変化だった。

↳

裂け目が消えた空間を見ながらひとりルシフェルがひとり呟く

「彼があの世界に行く以上事に変化が現れるだろうな。どうなるかわからないが」

呟いた瞬間ルシフェルの姿は消えていた。後に残るのは音もない

唯々白い空間がどこまでも続いていた。
序章 終わり

主人公について

名前 ケン 本名 健太郎

本編開始時の年齢は17歳 精神年齢も相応になっているが元から大人びていたため全く変わりなし

仕事の帰りにバイクで信号待ちをしていた時後ろからトラックで追突されそのまま前にいたトラックの荷台コンテナにサンドイッチになり、死亡。原因は極々稀におこる運命のねじ曲がりによるもの。因果から弾かれるのは初めてのケースで元の世界に戻れなくなり、別の世界に行くことに。性格は相手の話を聞いてから話すタイプで基本受け身。言い合いを好まない。物腰は低いのが合わさってしまえばよく言いくるめられる。

初対面の人にはそのガタイでよく怖がられる。格闘技などは性格上したことないのだがこの世界に行くかわからない以上、身を守る必要からルシフェルの呼びかけに応えたウルトラマンレオから肉体と精神を、コスモスからは心を鍛える。レオの地獄の特訓で体のあちこちには生傷ができている。(ジープの特訓はなかったのが幸い)

髪は短く切り詰めたスポーツ刈り、顔は彫りが深く目つきは少し切れ目だがどことなく穏やか、誰にでも優しい。美男ではなく無骨で男らしい顔立ち 典型的な黄色人種 言うなれば日本人

普段の表情は少し硬さがある。

身体情報

身長195センチ

体重120キロ

体つきは筋骨隆々、服で隠してはいるが観察力のある人にはすぐわかる。

服装

漫画トリコに登場したライタースーツのような黒一色の一体型ボディースーツの上に灰色の薄手の長袖に白の半袖Tシャツの3枚重ね。ズボンにはルシフェルからもらったエドウェイ○の紺色カーゴパンツにゆとりを持たせたものであちこちにポケットがついている、靴は

足首上までの登山靴を履く、ジーンズの裾は靴の中に入れてい。ちなみに背囊は米軍の70リッターのアサルトリュックを背負う。かなり大きい彼の図体のおかげでちょうどいい感じに収まった。

戦闘スタイル

彼自身争い自体を好まないのが基本的にはウルトラマンコスモスのルナモードと同じ太極拳に似た技で戦う敵のの攻撃を受け流し、弾き、避ける、押す、そして投げという相手を極力傷つけない戦い方をする。訓練のために、ウルトラマンレオを相手にこの戦い方で組手を行つたが未熟なためにめつた打ちにされた体中の傷のなかにもこの時のものもある。

助けることができない相手、避けられない戦いに対してはウルトラマンレオの宇宙拳法で戦う

かなり破壊的なので彼自身の性格もありこの戦い方は極力使わなようにしている。レオの「力の使い方を見誤るな」という言葉を従い、最後の最後までルナモードで戦うようにした。

使える技 いくつかの技は体力の消耗が激しくて乱発できない。

レオキック

レオ2段蹴り

急降下キック

回し蹴り

ハンドスライサー

レオパンチ

レオスウイング

エネルギー光球

スパーク光線

ウルトラシヨット

フルムーンレクト

ルナエキストラクト

ルナレインボー

コスモフォース

コスモシユートレス

第1話

光を抜けた先に最初に目にしたのは牢屋が並んだ通路だった。

周りは暗く壁と床は全て石で出来ており、石柱には必要最低限の灯りであろう松明が灯されていた。灯りとしてはかなり心許ない。

「ここはどこだろう。てつきり街かなんかに出ると思ってたんだけど。」

これからどうしようと思案しつつおもむろにポケットに手を入れた。何かが手に当たった。なんだろうとポケットから取り出し確かめる。

そこには二つ折りの紙が入っていた。

(これを仕込めるのはあの人しかいないか)

心の中でばやきながら紙を開く

これを見ているということは無事辿り着けたようだな。すまない、君が出る場所は適当に決めさせてもらった。そこは監獄島タイタニアという場所だ、文字どうり島一つを監獄に利用している。囚人は業魔病に侵された者や既に業魔化したものが収容されている。君の目で業魔がどういものか確かめてみるんだな。世界の現状は早めに理解しておくのが得策だぞ?じゃ、そういうことで。

出る場所適当ってそんなのないよホント。だがこれはある意味チャンスだ、業魔と言う存在がどんなものなのかを知る事ができる。そうと決まれば早くここから移動しよう。そう思い紙を閉じようとしたら一番下部分に書き加えた後があった。

追伸・忘れていた。そこには警備が巡回している。そいつらは対魔士と言って業魔と戦う勢力だ。もし見つかったら業魔でないとわかってても侵入者扱いになるから気をつけろ。どうするか君の選択に任せる。じゃ、また

前言撤回、適当にしては出来過ぎている。彼の事だ、こう言いつつワザとここに連れて来たのが丸わかりだった。今更ゴネても仕方ないが。

「とにかく移動しないと、島って事だから本土から船かなんかで物資

や囚人を移送しているはずだ。時間はわからないけど、そこは一か八かか・・・」

それから直ぐに移動を開始した。どうやらこの区画は誰も収監されておらず、巡回はいない別の所に行っているようだ。特にめぼしいものもなく。少し思案した後別の区画に行くことにした。

「二度他の所に行ってみるか・・・ここがどこかもわからないけど。」

物音を立てないように自分が向いていた方向を逆に向け別の通路へ向かう、その途中に物資であろう積まれた木箱と宝箱のようなものがあった。それとなぜか鎧を着た兵士が二人倒れていた。気にはなったが今は現状把握が先だ。僕は無視して階段へ向かった。

↳数刻前

ベルベット視点

彼女暗く、深い独房にいた。そこは普通の物と違い天井は高く、まるで凶暴な生物を閉じ込めるための物のようだった。ベルベットはそこにいた。だがその姿はかなり酷い物だ、髪は伸びきり纏めてはあがるが所々跳ねている。服はここで過ごすうちに傷み、破け、千切られたのだろう。一部を残して辛うじて機能を保っている。

・・・あたしの世界は終わった・・・あれから三年・・・墮とされた闇の底で、あたしは食らい続けた

ベルベットの目の前には虎のような業魔がいた、だがその姿とは裏腹にひどく怯えている。まるで蛇を前にした蛙のように。ベルベツトは異形と化した左腕を顔の前まで上げる、一瞬だけ赤く発光した。それを皮切りに虎の業魔はベルベットに背を向けて逃げ出した。もつとも高い壁に仕切られ天井は高くいくら業魔といえど逃げるのは不可能。だが生き物の本能か、一目散に逃げた。ベルベットは屈んだ次の瞬間に跳躍する。数瞬で虎の業魔の頭上に迫り、左腕で頭を掴み床に叩きつける。

業魔の血と肉を

左腕から異様な音を立て、紫色の靄を出しながら。

まるで食らうかのように。

「ふうっー」

唸るかのような声をあげた瞬間、何かが潰れた音と同時にベルベットの頬に血のようなものがかかる。それと同時に虎の業魔は霧散した。

生きるために　生きて、あの男を

ベルベットは上を見上げる

弟の仇を殺すために

くケンが思案している間く

???

暗く冷たい石の空間を進む人影があった、その影はベルベットの牢に向かう。影は牢の鍵を開け戸を開け、飛び降りる。落ちるスピードは早くもなく遅くもない、羽の様に軽やかだ　床に着地し、その後には鉄の梯子か荒々しい金属音を立てて地面に落ちる。その影の正体は女性だ。紅い髪の毛の先に白いメッシュ、服は蝶を連想させ、目の部分には視線や正体がわからない様にするためだろうか、黒と黄色の鳥が翼を広げた姿を模した目隠しをしている。

彼女はゆっくり歩きながら周りを見る。灯りという灯りはなく、暗い。数歩ある歩いた時足が止まった、闇の中で何かが蠢いている。そう、ベルベットだ。彼女は半身を後ろにさげる。ベルベットは立ち上がると同時に彼女に向かって走り出した

「おおおおっ!!」

「ぐううっ!」

ベルベットは顔面を掴み壁にたたきつける。だがその瞬間ベルベットの左腕が突然燃え上がった。

「がああああっ!!」

熱に耐え兼ね、投げ飛ばす。だが女性は何事なかったかの様に空中で体勢を整え、着地する。ベルベットは自身の左腕で燃え上がる火を払う様に消す。

「あの男はどこにいる、シアリーズ」

「・・・まずは試さねばなりません　教える価値があるかどうかを」

シアリーズと呼ばれた女性はそう言い、構え、ベルベットに向かっ

て走り出した。

「はあああっ！」

シアリーズが炎を纏わせた手を横に振りかぶる。ベルベツトはそれを防ぐ

「価値がなければ殺します、お覚悟を！」

「うるさいっ！」

防ぎざまサマーソルトキックを放ち、続け様に蹴りを繰り返す。しかしほとんど防がれる。当たっても掠る程度だ。

「だああっ！」

焦りと苛立ちで僅かに隙ができる。シアリーズはそれを見逃さなかった。

「ふんっ！」

「ぐうう!?!」

炎を纏った腕を下から上に振り上げ、それに従うかの様に火柱が上がりベルベツトを吹き飛ばす。壁に激突しずり落ちながらも体勢を整え、相手を見る。その目はまさに闘争心剥き出しの獣の目。

「ああああ!!」

地面に着いたと同時に跳躍、足を振り上げ踵落としを繰り返す。想定外の攻撃でシアリーズは反応が僅かに遅れた。咄嗟に両腕でガードする。

「あうー！」

「甘いー!」「ぐっ！」

地面に手をつけ回転する様に横蹴りを叩き込む、シアリーズはまともに食らったが受け身を取るかの様に空中で回転し着地した。ベルベツトはそれを見逃さず接近する。しゃがんだままの彼女に回し蹴りを放とうとした時足元から炎を伴った爆風があがる。

「っっ！」

すかさず回し蹴りを止め、勢いを使い距離を取る。一時の無音、ベルベツトが口を開く。

「・・・何故全力を出さない」

「合格ですね。それがわかるなら」

ベルベットは姿勢を変え、続ける。

「あの男の聖隷が、この程度のはずないでしょ」

今度はシアリーズが構えを解く。

「もうあの方の聖隷ではありません」

「・・・」

「まず、この3年間に起こったことからお話ししましょう」

シアリーズはベルベットの前を歩きながら話し始めた。

「今、世界には多数の対魔士が存在し、組織立って業魔に対抗を―」

「言え」

ベルベットが話しを遮る。

「アルトリウスはどこだ」

シアリーズは首だけ動かし

「・・・ミッドガンド領にある王都ローグレスにいらっしやいます」

それを聞いたベルベットは踵を返し梯子に向かい始める

「知らなくて良いのですか？あの夜見たものが何なのか」

足を止めたベルベットの脳裏にあの光景がうかぶ

「あの夜・・・あの方が成された儀式を境に世界は変わりました」

「多数の聖隷が降臨し、(それ)を従えた対魔士たちが業魔の氾濫を食い止めたのです」

「今や、対魔士の組織「聖寮」を率いるあの方は、王国からも民衆からも絶大な信頼を得ています。人を護る盾にして業魔を狩る剣。救世主アルトリウス・コールブランドとして」

その言葉を聞いたベルベットの目つきが変わる

「ライフセットを犠牲にして得た力でしよう」

シアリーズは頷く

「ですが、まだ完全ではありません。今なら殺すことができます」

それを聞いたベルベットが振り返る

「何故あんなが？」

「理由は、無事脱獄できたらお話しします」

「脱獄・・・か、いいわ。誰が何を考えようがあたしはアルトリウスを殺す、それだけよ」

それを聞きシアリーズはもう一度頷いた、そのまま指を二本立て、自分の前に出す。指の先から光が灯りそれを横に振る。すると天井に光の糸と紋章が浮かび音とともに割れる。

「頸木は断ち切りました。急ぎましょう」

その言葉と同時に二人は歩きだした

）

梯子を上った二人は辺りを確認する。巡回はいない

「こちらに上へと通ずる階段があります。行きましょう」

「わかった」

二人は右手の通路にある階段に向かおうと歩き始めたが、その歩みはほんの2歩でとまった。理由は通路の先から気配がしたから。重圧を感じるかと思いきや。恐怖は感じない。不思議な感覚に戸惑う内に、気配の主が現れた。背は2メートルあるかと言わんばかりに大きく、服で隠しているが体はガツチリしている。髪はベルベットと同じ黒で短く切り詰めてあり顔はとても美男ではないがかなり男らしい顔つきだ。目つきはほんの僅かだけ切れているがその目はこげ茶で視線はどことなく優しく見える。あちこちキョロキョロしながらも二人を見ると歩を止めた。身構えている二人に少し首を傾げながら短く喋る。

「ああ、やっと人に会えた」

これがケンとベルベットの初の出会いになった。

第2話 終わり

第2話

くケン視点

「ああ、やっと人に会えた。」

僕は純粹に安心しつつ、話しかける。本当に誰もおらず彼に面白半分で飛ばされたんじゃないかと考えていた。だがそれは杞憂に終わった。何故なら現に自分の前に人がいたからだ。なんか身構えてるけど、ここじゃこんな反応されても仕方がない。姿を見る限りここを警備しているようには見えなかった。なるべく刺激しないように話しかける。

「すいませんが、こここの人ですよ。外に出たいので出口教えて欲しいんですが・・・」

「・・・」

彼女たちは何も言わない。そりやそうだよ。

「あの一」がああっ!!」「ちよっ、ちよっど!?!」

突然黒髪の女性が右腕にはめてる籠手から刃を出し、切り掛かってきた。心臓めがけて迫り来る刃を半身になって避け、両手で上下から刃を挟むようにして止める。驚いた僕は彼女の方を見る、だが次に見た光景は布で巻かれていた左腕がどす黒く、禍々しく巨大なものに変わっていた。あの状態で攻撃されたらどうなるかわからない。僕は止めていた刃を基点にし、ねじる様に投げて空中に側転させた。

「うわっ!?!」

黒髪の女性は驚く、あの体制から投げられるとは思ってもなかったのだろう。このまま地面に叩きつければ完全にこちらが有利になる。そうなれば抵抗してきても組み伏せることができる。だが彼女の琥珀色の瞳はまるで肉食獣のような目つきを見て正気ではないと見えた。恐らくあの変異した左腕が原因なのかもしれない、隙は数瞬、やるなら今しかない。僕は右の手のひらに自分のもう一人の師、コスモスから教わった「フルムーンレクト」を薄く纏わせる。完全には使えないがこれぐらいならなんとかなる。一回転し終わる瞬間、左腕を右手のひらで叩く。一瞬左腕全体が白く光る。すると鼓動す

るように赤く明滅していた左腕が伸縮し、元の布で巻かれた状態にもどる。それを確認しすぐさま彼女の肩と腰を掴み、反動を吸収しながら立たせた。セクハラと言われないことを祈りつつ。

くベルベツト視点

(なんだこいつ、どこから湧いて出てきたんだ?)

ベルベツトは身構えながら目の前の男を観察する。こんな大男なんて今まで生きてきた中で一度も見たことがない。

(対魔士? いやこいつが対魔士なら既に応援を呼ばれてるか攻撃してくるはずだ。だがこいつはそうには見えん。)

などと考えていると

「すいませんが、ここの人ですよ。外に出たいので出口教えて欲しいんですが・・・」

どっちに向かって言ったのかはわからないが一つ言えることはこいつはこの状況をわかっていないということだ

(こいつは無視していくか、どうでもいいし。)

そう考え動こうとするが、奴の眼があつた。その眼はどこか優しさと力強さが感じ取れた。内心イラつきながらもその眼を見ているうちに感情が高ぶるのを感じた、左腕が疼く。こいつを喰えといわんばかりに。あたしはその衝動を抑え込もうとするが、頭の中がやつを喰うという思考で支配される。

喰いたい喰いたい喰いたい喰いたいクイタイクイタイクイタイクイタイクイタイ!!!

「あのー」「がああつ!!」

男が言葉を発つした瞬間、あたしの何かが切れた。刺突刃を出し、やつの心臓を狙う! あたしは全力でやつの懐まで突撃した!

「ちよっ、ちよっど!?」

男が驚いた表情を浮かべたがそんなの関係ない! 衝動のまま突っこむ!

(もらっタ!!)

そう確信し、刃を突き立てる。その瞬間、男は半身を刃先に合わせるように後ろに下げ両手であたしの刺突刃を上下から挟んで止めら

れる！

(ちい！)

すかさず空いていた左腕を業魔手に変える、こうなったら直接頭から喰らってやル！その瞬間。視界が反転する！

「うわっ!?!」

何が起こったかわからずぶれる視界から男を見る。混乱する中男は右手のひらを白く光らせあたしに迫る！くそっ!!やはり対魔士か！早く体勢をっ!!。だがそれも叶わず男の右手があたしの業魔手を素早く叩く、業魔手と自分の中から何かが消え去る感覚が伝わる、その感覚が消えた時には腕は元の状態に戻っていた。何が何だかわからないうちに男はあたしの肩と腰を掴み、何事もなかったかのように地に足をつけさせ、立たせた。あの喰いたいという衝動もなくなっていた。状況も飲み込めないうちに男は数歩下がり、口を開ける。訳のわからない事だらけであたしは無性に苛立った。

くシアリーズ視点

彼は一体ベルベットに何をしたのでしよう。ベルベットが急に彼に襲いかかり彼は驚きながらも攻撃を躲し、刺突刃を止め業魔手で掴みかかろうとした瞬間には彼女の体上下逆さまになっていたから。次に見えたのは彼の右手のひらが白く光っていたこと。あれは浄化の力？というのと彼も聖隷・・・いえ、彼からは私と同じ気配を感じない。彼は真正銘の人間、ではあの光は何？彼女の中にある穢れが消し飛ぶ、というか綺麗になくなっていくのを感じた。その瞬間業魔手も元に戻っていた・・・もしかしたら彼なら・・・これから確かめる必要があるそうですね。私は彼に近づく

くケン視点

危なかった、つい反射的に投げてしまったけどちゃんと立たせました、大丈夫・・・だよな？

女性はかなり驚いた顔をしていた。投げた拳句左腕の異形化を元に戻した訳だし。状況に頭が追いついていないようだ。僕は手を離

し、数歩下がる。

「済まない、手を出す気もなかったし、争うつもりもなかったんだ。つい反射的にやっちゃって・・・」

取り敢えず謝罪と言いつつ謝をした。

「・・・チッ！」

黒髪の女性は舌打ちをする

「なかなかのお手前ですね」

赤髪の女性が歩いて近づいてきた。

「あー・・・いえ・・・傷つける訳にはいかないですし。それn「おいつ！・・・あつはい」

「あたしに何をした！」ベルベットが食いつくように迫る、それに合わせて下がる。

「いやーなにをしたというか、なんというか」

どもるしかない僕

「今のはなんだ！お前は対魔士じゃないのか!？」

「ええと・・・少なくとも対魔士じゃないです、はい」

「じゃあさっきのアレはどうs「うちのものがお手数かけました」っておい今あたしが話してるんだぞ!!」

「初めまして、私の名はシアリーズ。以後お見知りおきを・・・」

「はあ・・・」

「そしてこっちがベルベット」勝手に話を進めるな!」「今はここを出ることが先決ではないのですか」

「~~~~ッ!!」正論を言われたのだろう声にならない声で唸る

「あなたの名前は？」シアリーズが尋ねる

「あつはい、僕の名前はケンっていいいます地味な名前ですけど」

「ではケンさん、あなたはさっきここから出たいとおっしゃいましたね？私たちもここから脱獄するのです」

どうでしょうか利害が一致していますからここは私たちと共に行くといいのは

「うーん、なんで脱獄するかはわかりませんが。わかりました。やりましょ」

「では先を急ぎましょう」「はい」「だから勝手に進めるな!!あと置いていくな!!」

彼女の言葉が辺りに木霊しながらも来た道を引き返す。

こうして僕はベルベットとシアリーズの3人で脱獄(?)劇が始まるのだった

第2話 終わり

第3話

くケン視点

「まずは装備を。この先の部屋に武器がありました。」

今僕たち三人はこの監獄から脱出するため、シアリーズさんと僕の来た道を引き返している。

シアリーズさんの言っているのは自分が通った部屋のことか、物資が積んであったので武器の一つや二つはあるだろう。部屋へ続く扉を開ける。倒れたままの兵士ももちろんいる。

「騒がれてはいません」

「・・・当然ね」

この二人はシアリーズさんが片したのか、言葉から察つすると息の根を止めていたようだ。

「この部屋で装備を整えましょう」

そう言うのと物資のほうへ歩き出す、しばらく調べる。

「囚人から没収した品が保管してあるようですね」

没収品、この量だとかなりの人数になる。

「ロープか、これは使える」

ベルベットさんはロープを手取る。

「・・・すごい刀」

次は大太刀がでてきた、かなりの業物に見える

「その太刀は・・・號嵐!?^{ごうらん}なぜこんなところに?」

シアリーズさんが驚く、此処ではそれほどの物なのだろう。

「あたしには大きすぎる」

当の本人は興味なさげ、どう見ても振り回すタイプじゃなさそうだし。

「いいのですか? 號嵐は希代の名刀ですが・・・」

「どんなにすごくても、使いこなさなきゃ意味がない」きっぱり言う。

「そうですか・・・ケンさん、貴方はどうですか? 貴方ほどの力と技量ならこの刀を使いこなせるでしょう。」

自分を見て言う。確かにこの刀は素晴らしい物だ、だが鼻っから使

うつもりもない。武器なんて使ったことないし防御に徹する自分の戦いには合わない。

「いえ、僕も必要ないです。」「そう・・・分かりました」

そんな話をしているとベルベットさんの方から何やらゴソゴソ音が聞こえた。何かかと思いい、そちらを向くとベルベットさんは没収品から手頃な服や布、装飾品を取り、着替えようとしていた。

(やれやれ) 僕は後ろを向く、一声ぐらいかけてもいいのに。

「見てもいいわよ? 気にしないから」「少なくとも僕は良くないですよ」

ため息を吐きながら背負っていたリュックを床に降ろし、中身を探る。食糧に水、医薬品が入っている。あとは大きめの皮袋いっぱい硬貨、この世界では「ガルド」だっけ。それを仕舞い、代わりに水の入った容器を取り出し、喉を潤す。

「あの、いくつか聞いてもいいですか?」「? あ、はい、何でもしよう」
シアリーズさんに話掛けられた、何だろう。

〜シアリーズ視点

「見てもいいわよ? 気にしないから」「少なくとも僕は良くないですよ」

彼は後ろを向いたまま呆れたような感じで答える。背負っていた大きなカバンを降ろし、中身を確認するように探っている。持ち物を確かめたと同時に何かの容器を取り出し、口を付ける、中身は水のようね。私は気になったことがあるので思い切って聞いてみる。

「あの、いくつか聞いてもいいですか?」
すると彼は気付いて。

「? あ、はい何でもしよう」そう答えた。

「あなたは何処から来たのですか? ここは島、何か手段が無ければここには来れないはずですが」

「あく自分は旅の者でして小舟で当てもなく航海してたら嵐で壊れちゃいました。沈みかけの舟で遭難してる途中で此処に流れ着いたんです」

彼は詰まりながらも答える。怪しいがそのことはどうでもいい、本

題は次。

「ではあの時彼女に打ち込んだ力、あれは何ですか？あれを打ち込んだ時彼女の中から穢れが消えるのを感じました。あなたは聖隸なのですか？」

「穢れが消えた？（可笑しいな、あの技はあくまで沈静化させるため技で浄化なんて・・・）えっと、あれは旅の途中で教わったんですよ。誰にも喋るなって言われてますんで・・・（嘘だけど）それに自分はそんな大層な者じゃないですよ。僕はただの人間です。」荷物を背負いながら答える。

「そう」やはり彼なら・・・

話している内に彼女が着替え終わったようね。

ベルベットは着替え終わって新しい服の感触を確かめるかのように体を動かす。服装は赤と黒を基調とした露出が高い物だ。これじゃさっきのと変わらないような気もするが。

「よし」何を持ってよしなのか

「準備はよろしいですか」二人は目で答える。「なにをしている！」

3人は声のした方を見る、そこには白に金と青が縁取られた服と兜をまとった男がいた。手には剣と盾を持っている。

「きをつけて！ただの兵士ではありません 二等対魔士です」

「お前たちなにをしていると聞いているんだ!!」対魔士は剣を構えつつこんでくる。こつち3人なんだけど。あとケンは無視、荷物持ちとでも思われてるんだろうか。意識が二人に集中している隙にケンには横から剣を持った腕と肩を掴み相手の勢いを利用して体勢を崩し、押えこもうとした。だがそれと同時にベルベットが男の顔に蹴りを入れる。

「ガフッ！」男が蹴られて仰け反ったところでシアリーズが火球を放ち、男を吹き飛ばす。

「ぐあああ・・・！」

男はそのままうごかなくなかった。えげつないなこの人たち。

「慣れたものね」

「行つたはずです。私はもうあの方の聖隷ではないと」

それを聞いたベルベットは歩き出す。数歩歩いて立ち止まる。

「船の用意は？」

「ここが島だとご存じだったのですね」

「ええ、凶悪犯を集めた監獄島つてことも、業魔が大勢収監されてるつてことも。業魔^{ユッサ}が、命乞いをしながら教えてくれたわ」 そう言つて左手を握りしめる。

「・・・港は島の表と裏の一つずつ。私の船島の裏手に着けてあります」

「了解、裏の港ね」

そう言つてまた歩き始める。そしてケンの前で止まる。

「・・・ふん!!」

横目でケンを睨み、鼻を鳴らしました歩き出す。当の本人は「僕嫌われてんのかな」とぼやいた。

「あ、そうだ、これどうぞ」ケンはベルベットとシアリーズにある物を渡す。

「・・・なにこれ」「これは一体」

銀色の包み紙の上に茶色い包装紙が巻かれた板状の物、そうチョコレートだ。リュックの中にこれだけ異常に入っていたので二人にもお裾分けすることにした。全部食べたら糖尿になりそう。

「チョコレートです。これから休めるかも分かりませんし。少なくとも腹に何か入れたほうがいいと思ひまして。」

「私は味がわからないから要らな「人の厚意をむげにするのはいただけませんよ」っ！うるさいわね分かつたわよ！」ケンから荒っぽくチョコを取り上げる。それを噛み砕くように食べる。途端に動かなくなる。

「どうしたんです？もしかして腐ってました？」ケンはベルベットの顔を覗き込むように見る。

「!?うるさい見るな!!」ベルベットがケンの顔面にパンチを放つ。

「えっ!? ああすいません」パンチを後ろに下がり避けつつ謝罪するケン

「たくほら行くわよ!!」ズカズカ扉の方へ向かうベルベット。シアリーズとケンは何を見合わせ頭に?マークを浮かべながらも後に続いた。

ベルベット視点

「あ、そうだ、これどうぞ」男から何か渡される

「・・・なにこれ」

「チョコレートです。これから休めるかも分かりませんし。少なくとも腹に何か入れたほうがいいと思ひまして。」

あたしは業魔になつて以来血の味しかわからない。こんなもの喰つても意味ない、第一食べた感覚もない。

「私は味がわからないから要らな」人の厚意を無下にするのはいただけませんよ」っ!うるさいわね分かつたわよ!」

そう言つてあたしはアイツからチョコを奪い取り齧り付く。まったく、姉さんぶつてこんなことしても意味なんか・・・その瞬間無くしたはずの感覚が蘇る。

甘い・・・!?甘い!?なんで!?どうして!?

「どうしたんです?もしかして腐つてました?」あたしが固まつていとアイツが心配そうにのぞき込んでくる

顔を見られたくなくて咄嗟に拳を振るう

「!?うるさい見るな!!」「えっ!?ああすいません」しつかり避けた。コイツはホントに!!

「たくほら行くわよ!!」あたしは扉に向かった。調子狂うわまつたく

く

それから3人は裏の港に向けて走つていた。その道中聖隸の魂とやらを見つけた、これを集めれば協力を取り付けることができること。それからしばらくしてシアリーズが注意を促す。

「警備が来ます。数は二人」「こつち」物陰に隠れる「あんたはそつち」
「・・・へい」やっぱ嫌われてるのかな

隠れたと同時に警備が話しながら歩いてくる。

「聞いたか?島の外周道が立ち入り禁止になった。地盤が緩んで崩落の危険があるらしい」

「監視塔の下を通る道か。元々間道だし、問題はあるまい」

「港を繋ぐ近道だったんだがな……」

(港を繋ぐ外周道……監視塔の下……)

そこへもう一人の巡回がやってきた。

「警備兵が数名、所在不明になった。何者かが島に入り込んだらしい。全対魔士は二隊に別れ、表門と裏門に集合せよ」

「了解。これで袋のネズミですね」「油断はするな。賊がネズミとは限らん」「はっ！」

警備が走っていくのを確認し、物陰から出る。

「さすがに手強いですね」「なら、こつちも戦力をそろえる。牢獄はどこ？」「なんかしでかすぞこの人。」

「この階にあるはずですが……囚人たちを巻き込むのですか？」
「そうよ。利用できるものは利用する」

確かにここをでるにはその方が騒ぎに紛れて逃げられる可能性も高くなる。ベルベット達は牢獄のある部屋に向かった。扉を抜けると対魔士が一人と重厚な鎧を着た兵士が一人。計二人いた。

「!?なんだ貴様らは！」相手の対魔士が気づく。

「あたしが対魔士を相手する！あんたらそっちの鎧の方をやって!!」

「わかりました」「へーい……」

ベルベットはそう言い。突っこむ。

「では自分が抑えますので、攻撃をお願いします」「はい」ケンとシアリーズは構える。

「でいやっ！」衛兵はケンに向かって獲物を振りおろす。

「ふんぬっ！」裏拳で剣の腹を叩き軌道を曲げる。次は盾で殴り掛かってくる、盾の表面を滑るように横流れの一回転で躲す。その隙を ついて横っ腹に両手を当て、押す。相手は自分の勢いによって大きく 体勢を崩す。

「竜神楽！」シアリーズが爆炎を起こし衛兵に向かって放つ。

「ぐあああー！」衛兵は炎に晒され悲鳴を上げる。だが持ちこたえたよう 度引いて体勢を崩し。シアリーズの方へ放る。

「羽二重！」手の動きに合わせて前後に炎が走る。

「があああ!!」二度目の熱に晒されそのまま倒れる。衛兵は動かなくなった。

「あなたの技には目を見張るものがありますね」「いえ、自在に炎を出せるあなたに驚きますよホント」

「終わったわ」ベルベットの方も片付いたようだ。

「さて・・・」そのまま周りの独房を見る。しばらく観察してシアリーズの方を見る。

シアリーズは頷くベルベットは正面の独房に向かい叫ぶ

「聞け！今から檻を開ける！全員でこの島を出る！」「うおお!?マジかよ!」周りが騒がしくなる。

「二手に分かれて表門と裏門へ向かえ！門を突破すれば船が手に入る！」

「でも、対魔士守ってるんだろう?ここから生きて出られたのはバン・アイフリードって海賊だけなんだぜ?」

「ヤツだって、メルキオルとかいうジジイ対魔士が連れ出したんだ。自力で出たわけじゃねえ」

(・・・海賊アイフリード?・・・メルキオル・・・)「強制はしない!この檻で生きたい奴は残ればいい!」

俺はやるぜえ!やってやる!やってやるぞ!俺もだ!檻を開けるネエチャン!不味い餌にも飽きたとこだしな!

「シアリーズ」その呼びかけでシアリーズは術を解く。それと同時に囚人は勢いよく外にでる。

「行くぜ!!対魔士を殺せ!」「ほかの牢も開けろ!」

「これで警備の目は、あいつらに集まる。こっちは監視塔を探すわよ島から外周道に降りて、港に抜ける」

ベルベットはそっくり次の扉に向かう。

「・・・共に戦うのではないのですね」「言ったでしょう。利用するつて」そのまま歩いていった。ケンとシアリーズも後を追う。ついでに色々な話も聞けた。聖寮のこと。その頂点に立つのがベルベットの仇だということ。

監視塔を探すため次の扉をくぐると砕けた爺さん言葉で話しかけられた。

「いやはや、わびもなしかえ？」そのまま止まり周りを見るベルベツト、その後ろに道化のような衣装を着た女性がにやにやしながら立っていた。

「!?」すかさず刺突刃を出し横に振るう。女性は分かりきったように上半身を前に倒して躲した。

「ふう・・・なんじゃの、主らは？スヤツと安眠しとる儂を起こしおつてからに。まさに極楽から地獄！と思ったら、マジ牢獄じゃし！この切なさ・・・わかるじゃろ？」オーバーなりアクシヨンで話す女性。

この人ちよつと苦手なタイプだ・・・とケンと思った。

「あなたは・・・？」シアリーズが問いかける、やめといた方がいいよ？こういうの後々面倒だから。

「よう聞いたー！」手を叩いて合わせる「自分で言うのもうれしいが、儂こそは八紘四海を股にかけ、ドラゴンも笑う大魔法使い！」またもやオーバーに言う

「その名も、マジギギカ・ミルデイン・ド・デイン・ノルルン・ドウ！略してマギルウと覚えおけい！」最後に歌舞伎みたいな構えをした、ちよつときついな。

「マギルウ？」

「違〜う。『トナリノキヤクハヨクカキクウキヤクダ』の『カキクウ』のアクセントで『マギルウ』じゃ」3人は無表情だ。

「はあく、かく力説してもわかりあえぬ。人とは悲しいものじゃて・・・ま、どーでもいいがの♪」そう言うのとツカツカと去っていく。

ベルベツトとシアリーズは逆の方向に歩いていく。ケンも続いているとしたがなにか腹部に触られる感触があった。ケンは自分の体を見るといつのまにかマギルウが前から腹筋を弄って恍惚な表情を浮かべていた。女性に触られたことがないからしどろもどろしてしまう。

「ちよっ!?ちよっとー!?何してるんですかあなた!!」「おほー♪睨んだとうりいい体じゃの〜♪一見堅そうに見えて柔らかくて見事な筋肉じゃの〜♪足も腕もええの〜♪顔は・・・男らしくて好みじゃ♡」どこまで本気なんだこの人。

「さすがにダメですよ!」「じゃあ、頼めばええのかえ?」「ちがう、そうじゃない」

今度は頬を擦り付け始める。さらに尻をも触ろうとしている。逆セクハラもいいとこだね。さすがにまずいので手を掴んで引きはがす。

「なんじゃ?もう終わりか?もう少し堪能したいんじゃがの〜まあ、いいか♪また触らせてくれよな〜」そして今度こそ去っていく。ああ疲れた。

「おい!何してるんだ!早くしろ!」「へーい・・・」ケンは何も言わずトの元へ走る。

〜マギルウ視点

「うっしっし、いや〜久しぶりにええもんに触れたの〜♪久しぶりに楽しめたわい♪」

マギルウは心底嬉しそうだ。

「ふむ〜どうしようかの〜ここにいてもつまらんからに・・・そうじゃ♪」なにかしでかしそうだねこれ

「あちやくあいつの名前聞くの忘れてた〜・・・まっいつか♪直接聞けばいいんじゃし〜♪」マギルウはふと考える

(あいつの反応を見るに女と付き合ってたことがないとみた。これは楽しめそうじゃ〜♪)

笑みを浮かべながらケンたちの方を見た。

第3話 終わり

第4話

マギルウと出会った後。

「背後をとられた。あいつは……？」

「僕は前ととられましたけどね……」「あんたがボケっとしてるからよ」「へい……」

「やはりここは特別監獄。囚人ひとりとして油断はできませんね。〃大魔法使い〃と、名乗っていましたか」

「……あいつ、聖隷を使役してた？」

「いいえ、聖隷の気配はありませんでした。ただの人間……のはずです」

「なら、魔法使いじゃなくて奇術師ね。次に仕掛けてきたらタネごと潰す。それで終わりよ」

3人は独房区画を抜け監視塔を探す。だがとある区画の一角に差し掛かったところで金属がぶつかる音が聞こえた。3人は止まり、顔を合わせる。そのまま音を立てないように角から覗こうとした時ひと際大きな金属音が響いたその瞬間、角の向こうから対魔士が飛んできた。急いで抜けるとそこには数体の業魔と数人の対魔士が倒れていた。その倒れてる先には一人の男が背中を向けて立っている。その男は黒い髪を後ろで結っており服装はどことなく侍の恰好に似ていた。

その男は背を向けたまま喋る。

「新手か……」そう言い、振り向く

振り向いた瞬間右目は髪で隠れているがその奥で赤い光が灯っている。

「この物は……業魔！」シアリーズが喋る。

業魔と呼ばれた男はニヤリと笑うと懐から一対の短剣を抜き、構える。嬉しそうな表情を浮かべる。強い者と戦える喜びだろうか。

「来る！」ベルベットが告げる、3人は構える。

「ハアッ!」「甘い!」ベルベットが刺突刃で切りかかるが男は短剣で防ぐ。金属同士の嫌な音が響く。男はそのまま地面擦れ擦れの足蹴りを繰り返しベルベットの足を蹴る。「うあっ!」ベルベットは支えを失くし、宙を浮く。

「もらったあ!!」男はそのまま宙に浮いて身動きのできないベルベットの切りかかるが。「させません!!」シアリーズが炎を繰り返し攻撃を妨害する。

「ちい!!」舌打ちをしながら後ろに下がる。その隙にベルベットが手を床に着けそのまま回る様にして勢いを付け男の腹に回し蹴りを叩きこむ。だがその蹴りは掠っただけだ。ベルベットは急いで立ち上がる。

「どうやら人間じゃないようだな」

「あんたもね!」

「はは、違くない!」男は二人〃を見る、案の定ケンは無視である。戦闘狂なのか笑みを浮かべて2人に接近。ベルベットとシアリーズが構えようとした瞬間男の姿が消える。2人が一瞬困惑した時にはベルベットの目の前に短剣が迫る。「くううっ!!」バク転で何とか躲すが次の瞬間ベルベットの背中に蹴りが当たる。「ぐっ!」そう、回避させた攻撃は囷で本命はこれだった。

「危ない!!」シアリーズが助けに入ろうとしたが瞬時に男の顔がシアリーズに迫る、まるで獲物を喰らうと言わんばかりの顔だ。完全に懐に入られ、短剣がシアリーズの腹部に迫る!「うっ!!」シアリーズは痛みに備えた。だがいつまでたっても激痛は訪れない。シアリーズが顔を上げると短剣を持つ男の両手首を〃片手〃で纏めて掴んでいくケンの姿があった。

「ほう、やるな。てつきり荷物持ちかと思っただぞ。」「その言葉前にも聞いた気がしました」そのまま引つ張り手首を捻り小手返しをする。

「おおっと!」男は驚きながらも華麗に受け身を取り様に短剣で下から上に斬りつける。「・・・」ケンの左腕が斬られて出血する。服にジワリと血が広がる。

「ふん、かなり深く斬ったつもりなんだが顔色一つ変えないとはな。

面白いやつだな」

「・・・まあ、あの人に比べればこんな擦り傷にもならないですから・・・」もちろん師匠のことだが。その隙にベルベットがケンの肩に足を乗せ跳躍、そのまま男に蹴りを放つ

「お返し!」「ぐお!」男の腹に蹴りが入り数歩下がるがその顔は嬉しそうだ。ベルベットはそのまま走り、跳躍、刺突刃で切りかかる。男は蹴りにも意を介さず構えて迎撃する。刃と刃がぶつかる「はああつ!」「ふん!」一段と高い金属音が響いた。その瞬間二人は少し跳躍して距離をとる。

「・・・強い・・・」ベルベットが呟く

「これしきで刃こぼれするか。対魔士のナイフもナマクラだな。早く號嵐を取り返さないと」ひとりごちる

「ゴウラン・・・あの太刀のこと・・・?」それを聞いて男の表情が変わる。短剣を放り投げると男はベルベットにむかって走り両腕を掴む。

「號嵐をみたのか!?どこで?頼む、教えてくれ!!」男は急かすように聞いてくる。ベルベットはきよんとししながらも

「地下の・・・倉庫みたいな部屋」

「地下だな!かたじけない!!」そっくり走り出す

「・・・変な業魔」

シアリーズとケンの横を通り抜けるときに男は声をかける。

「おまえ!強いんだな。またどこかであったら手合わせしてくれよな!」ケンは呆気にとられながらも後姿が見えなくなるまで見つめていた。

(あの荷物持ち、只者ではないな。これで楽しみが増えた)

「騒ぎが収まったら隙はなくなる。急ぐわよ」そう言うとベルベットは先に進む。二人も後に続く。

歩きながらシアリーズがケンに話しかける。

「先ほどは助けていただきありがとうございます。ですがそのせいで怪我を・・・私の術で・・・」

「え?ああ大丈夫ですよ。気にしないでください」ケンは歩きながら

リユックから医薬品を取り出し、切り口に消毒液と止血剤を使い血を止める、そこに糸を通し、器用に縫っていく。痛いのは嫌でもなれた。「ですが・・・」それでも心配そうに話す。

「こんな怪我一度や二度じゃないですから。平気ですよ」最後に包帯を巻いて手当が終わった。本当に一度や二度じゃないです。

「なにしてんの。早く行くわよ荷物持ち」

「僕いつの間に荷物持ちに？」ケンはベルベットに追いつくよう歩を早める。シアリーズも少し俯きながらもすぐに顔を上げ二人の後を追う。

くシアリーズ視点

私はあの時死を覚悟しました。目の前に迫る短刀。それが近づくとに恐怖に耐えられなくなり。私は動けなくなつた。ですがいつまでたつても痛みが来ない、恐る恐る目を開いたらケンさんが男の両手首を掴み。攻撃を止めていたのです。ケンさんが男を投げ飛ばしますがその時反撃にあつたのか左腕を斬りつけられていました。その後ベルベットさんが男に太刀のことを話し、そのまま走り去って行きました。私は術での治療を申し出ましたがケンさんは気にしなくていいとおっしゃいました・・・なぜ彼はこんなに優しいのですか？その優しさはどこから？

私は顔を上げ二人を追いかけます。

しばらく進むとふとシアリーズが呟く

” 號嵐・・・まさか、あの業魔は・・・”

「なに？」

「いえ、あの剣士の業魔に少し驚いただけです。もの凄い殺気だったのに、太刀の話が出た途端、別人のようになったものですから」

「確かに変わった人でしたね」

「真面目に考えても仕方ないでしょ。業魔のことなんか」

「それにしても風変りな囚人ばかりですね」

それを聞いてベルベットが睨む

「あ……あなたのことでは……」「べつにいいわ。聖隷なんかどう思われようとね」

道中業魔が徘徊しており、ベルベット達を見つけると襲い掛かってきた。

ベルベットが刺突刃と蹴りで、シアリーズは炎で片付けて行く。ベルベットが業魔を喰らう。そんな戦闘が何度かあった。

区画を走り続けると高い建物が見えた。

「監視塔は、この先のはずです」「わかった」「はい」

階段を駆け上がる。少し広めの部屋に出る、その隅に上に行くための梯子がある。

「あれね、行くわよ」そう言うのと梯子に手を掛けようとした、が。

「暴動はほぼ鎮圧した！お前も逃がさん！」対魔士が警備兵を二人引き連れて襲い掛かってきた。

「くそっ！こつちは急いでんだ！」

「あちらは3人こちらも別れて個別に戦いましょう」

「分かりました」

ベルベットは対魔士に向かって走る、シアリーズめ警備兵に向かって走る。ケンは構え、敵が攻撃してくるのにそなえる。

ベルベットは刺突刃を出し、素早く横に切る。対魔士は盾を構えて防ぐ。

「だああー！」「ぐう!!」対魔士がよろける。

「遅い！」素早くベルベットは蹴りを叩き込む。鞭のようにしなる蹴りを盾で何発かわ防げていた対魔士だったが。

「ふん！」「ぐああつ！」遂に盾を弾き飛ばられ。腹に蹴りと刺突刃の斬撃が襲う。対魔士は倒れるかと思われたが

「負けるわけには……」「？」「業魔に負けるわけにはいかん！」

対魔士は瀕死にも関わらず剣で斬りかかる。

「そう……」ベルベットは剣を躲し、業魔手で対魔士の顔を掴む。

「ガハッ！」「あたしにはそんなのどうでもいい」ギリギリと音がする

「ぐああああ!!」対魔士はもがくがやがて手足が垂れる。ベルベットは放り投げ。そのままベルベットはケンの戦い方を見る。

くベルベット視点

対魔士を片付けたあたしはふと気になりあいつの方をみた。戦い方が気になったからだ。あいつの戦いは防御に徹した物だと言うのはわかっている。

でもあたしはあいつの戦いが気に入らない。あいつとあたしでは戦い方が正反対だ。どうしても時間もかかる。あたしは苛立ちながら援護に向かう。

その後ベルベットがケンの援護に向かい追っ手を撃退する。

「囚人たちはもう・・・」

「時間がない。この塔から外周道に出るわよ」

ベルベットが数歩進むが足を止め、ケンを見る。

「おまえ、なんでそんな戦い方しかない。おまえほどならあんな奴らなんて一人で十分だろう」

「・・・」シアリーズは黙って聞いている。

「・・・」「あれだけの力があればアイツだって「僕は、力だけでは駄目だと思うんです」ッ！」

ケンが言う。

「確かに力があれば敵を倒せるでしょう。ですが倒すことだけが全てではない。僕にとって。「倒す」は最後の手段なんです。どうかそれだけはわかってほしいんです。」

ベルベットはしばらく黙る。

「それに」ケンが続けて言う。

「僕が敵を抑えていれば態勢もたてなおせるでしょう?」

「・・・わかったわよ。あんたのやり方には黙っというてあげる。その代わりちやんと壁にはなりなさいよ」

ベルベットはそれだけ言うとうつ梯子を登り始める。

「私は、あなたの考えも間違っていないと思います」シアリーズもそれだけ言う。梯子を登る。

ケンは二人が登り切るまで敵が来ないか確認しつつ。自分も後に続く。

梯子を登り塔の屋上に出る。外は夜、更に雨も降っている。視界は悪いがその分見つきりにくい。ケンも少し遅れて上がってくる。

3人は塔の隅まで行く。

「ちっ……！」ベルベットが舌打ちをする。

「道が崩れてしまっている。これではロープも役には……」

下に道が見えるがかなりの高さだ、地下で手に入れたロープでもこれでは無理だ。だがベルベットは左腕を変化させる。腕を見て縁石の上に立つ。

「まさか……!?!いくらあなたでもー」シアリーズが止めようとする

「あの子」が落とされた祠ほどじゃない」（あの子？言い方から身内……）言い終わった瞬間に飛び降りる

「!!」「おお……」

「はああっー」ベルベットは落ちる最中近くの岩肌に強引に業魔手を引っ掛ける。滑るようにして速度は幾分落とすがそれでもかなり早い。地面が近づき手を離し飛び降りるが速度が速すぎてバランスを崩し。右肩から地面に激突し滑りながらもなんとか止まる。

「う……くう……」ヨロヨロと立ち上がり右腕をおさえる。脱臼したようだ。

「あなたは、これほどまで……」「先に行ってください」「ですが」

シアリーズの言葉に察したケンが彼女を促す。

「大丈夫です。これならなんとか行けますから。早くベルベットさんの所へ」

「……はい！」その瞬間シアリーズの体が炎に包まれ消える。ベルベットの元へ移動したのだ。

「さて……」ケンは後ろに下がる。

「はあ……はあ……」ベルベットは近くの岩に近づく。

「ぐうう……ッ!!」右腕を岩に思い切り打ち付けはめ直す。痛みを耐えながらも腕の感触を確かめる。そこにシアリーズが炎を上げ現れそのままベルベットの右肩に手を当てる、その手から青白い光が灯り治療術をかける。

「・・・強いのですね。まるで”誓約”のよう」その言葉にベルベットはシアリーズの顔を見る。

「自身の言動に枷をかけて、特別な力を得る儀式のことです。厳しい枷で縛るほど、強い力が手に入る。その誓いは、ある意味―」

”呪い”ね」ベルベットが後ろを向く「それをかけたのは、あんたたちでしょう」妬ましく言葉に出す。

「・・・わかっています。たからこそ、あなたを・・・」

「それで、あいつは？」ベルベットがケンの事を聞く

「先に行ってくれと言われましたが・・・」シアリーズが答える

だが彼の姿はない、まだ塔にいるのだろうか。

「全く・・・なにしている・・・」その時とてつもなく大きな地面にぶつかる音が響く。

「なっ!?!」「一体!?!」

土埃が辺りに舞う中その中央に人影、そう、ケンだ。ケンはあろうことかそのまま飛び降りて地面に着地したのだ。地面はへこみ、辺りに地割れが走っている。

「お待ちせしました。ベルベットさんかなり派手に落ちましたが、大丈夫ですか？」まるで何事もなかったかのように歩いてくる。

「・・・」二人は黙ったままだ。

「あれ?どうしました?」ケンは首を傾げる

「おまえ本当に人間か?」ベルベットは呆れたように言う

「え?あ、はい人間ですよ?」

「怪我はありませんか!?!」シアリーズが心配そうに話しかける。

「ああ、大丈夫ですよ。さ、先をを急ぎましょう。」ケンは促す

「・・・全く調子狂うわ・・・」「無理はしないでくださいね」

「あれ?僕なにかしたかな?」ぼやきつつその先の扉をくぐる。

く

「このまま進むと表の港に出てしまいますが・・・」シアリーズが聞く
「侵入を察知された以上、あんたの船は見つかったと考えるべきよ。
ここは裏をかいて表を抜く!いくわよ!」「はい」「分かりました」

3人は表の港に向かい、走り出した。

第4話 おわり

第5話

崖から降りた後、3人は港に向けて走っていた。扉をくぐり開けた部屋に出る。

「港はこの先ね」

ベルベットは走りながら言う。その時だ、前方から声が響く。

「そこまでだ」

男の声。そこには青と緑の上着を着て、棒状の武器を持った人影が二人、その間から対魔士であろうもう一人の男が前にでてきた。今まで見てきと対魔士とは違うと一目で分かる。

「オスカー・・・一等対魔士がこの島に派遣されていたなんて」

シアリーズが驚愕する。ベルベットとケンは何を見る。

「驚いたよ、シアリーズ。君が賊に協力していたとは。まさかアルトリウス様の命なのか？」

オスカーがシアリーズに問いかける。

「・・・いいえ、私の意志です」

シアリーズははつきりと答える。その言葉に嘘はない。

「聖隷が意志とはね・・・どうやら君を操っている者がいるようだ」

そう言い、ベルベットを睨む。まるでシアリーズの答えなど最初から聞いていないように。ベルベットは身構える。

(彼の言い方はなんだ、まるで聖隷を物のような言い方だ)

ケンはオスカーの言い方に不服を覚える。

「まっってください。一等対魔士は、二等とは格が違います」

「もう小細工はきかない」

ベルベットはきつぱり言う。

「第一、こいつに勝てないなら、先に進んでも意味がないわ」

確かに、一等対魔士といっても彼以上の力を持つ者がいるだろう。ここで倒れればそれこそ彼^{アルトリウス}を倒す事など無理だ。

「業魔とはいえ女性。礼は尽くさせてもらおうよ」

よく言えば紳士、悪く言えば性差別だが。

「我が名は、ミッドガンド聖導王国聖寮一等対魔士 オスカー・ドラゴニア、そちらは？」

何も言わず、構える3人

「・・・」 無礼な業魔 と覚えておこう

オスカーは剣を抜く。先が無くまるで首を刎ねるような剣だ。抜いたと同時に接近する。

「アルトリウス様より授かりし我が退魔の剣！受けられるか！」

「私に対魔士の相手をする！あんたたちは他のを相手して！」

ベルベツトはそう言いオスカーに突っ込む

「危険です!!」

シアリーズが反論するが、ケンが制す。

「シアリーズさんここはベルベツトさんに任せましょう。」

「ですが！」

「相手は前衛と後衛。前衛に気を取られれば背中に手痛い一撃をもらいかねない。ここは別れて戦いましょう」

「・・・分かりました。ではケンさん、あなたは後ろの術使いを抑えてください。相手は私と同じ聖隷、気をつけて」

「分かりました。」

ベルベツトはオスカーに向かって回し蹴りを放つ、オスカーはそれに向かって剣を振るう。脚絆と剣がかち合う。

「ヤアアア！」

ベルベツトはすかさずもう片方の脚で回し蹴りを放つ。

「ふんっ！」

オスカーはそれも剣で止める。

「はっ！」

「ふうっ！」

今度はオスカーがベルベツトに横切りで攻撃する。それを機に何度も斬りかかるがベルベツトは紙一重で躲す。隙の大きい縦切りでベルベツトはバク転、刺突刃を出し着地と同時に地面を蹴りオスカーに突きを放つ。それに反応したオスカーは刃を剣の腹で止める。そのままお互いの刃同士が鏝迫り合いになる所に緑色の上着を着た聖

隸が槍を振りかぶる。ベルベツトは反応に遅れる。

「しまった!？」

「させない!!」

そこへ炎が地面を走るように燃え上がり攻撃を遮る。槍を持った聖隸はシアリーズの方を向く。

「貴方の相手は私です」

シアリーズが手に炎を纏わせ対峙する。青の上着を着た聖隸が杖を振る術式を発動させようとする、が横から杖を掴まれ術を遮られる。

「!？」

「攻撃させるわけにはいきません。」

ケンはそう言うのと杖を自分の方に引つ張り、相手を引き寄せたと同士に両手で相手の腹を押す。聖隸は大きく後ずさる。

「これで一対一ね」

ベルベツトがオスカーと、シアリーズが槍を持った聖隸と、杖を持った聖隸がケンと。距離を離しながら対峙する。

「くっ……」

オスカーが苦い顔を浮かべる。

「いくわよー!」

ベルベツトの声を合図に戦闘が再開した。ベルベツトの刃と蹴りを、オスカーが剣での応酬。シアリーズが炎を巻き上げ相手を追い込む。

術の攻撃を撫でるように躲すケン。一進一退の攻防が続く。

だが連戦による疲労からか徐々に押されて行くベルベツトとシアリーズ。ケンは防御と持久力に特化した戦い方なので消耗はごく僅かだがほぼ防戦一方、やがてオスカーの剣がベルベツトを弾き大きく後ずさせる。シアリーズも隣まで後退する。

「はぁ……はぁ……」

息を上げる二人

「……手強いな。聖隸を一、二体は潰す覚悟がいるか」

オスカーが目で合図する。杖を持った聖隸が僅かに振り返る。

「その前に貴様が邪魔だ！」

オスカーが杖を持った聖隷と戦っていたケンに接近する。

「危ない！」

シアリーズが叫ぶ

杖を持った聖隷が光となって消える。術による瞬間移動だろう。消えた光を目くらましにしてその後ろから剣を構えてオスカーが斬りかかる。

「そこだっ!!」

右から左への横切り

「!!」

こんどは右の腕を斬られる。あの男より広い傷ができる。数歩後ずさる。オスカーはそのまま後ろに下がり杖を持った聖隷に目で支持する、杖を持った聖隷が別の術を展開し放つ。黒い炎のような物が地面を走りベルベットとシアリーズを襲う。

「くううッ！」

「ふうっ！」

二人は左右に別れて回避する。オスカーが槍を持った聖隷に目で指示する。聖隷は槍を捨てベルベットに向けて走り。掴みかかる。聖隷ごと術を当てるつもりのようなのだ。オスカーの指示でもう一度術を放つ。

ベルベットが気づき聖隷を蹴りうずくまった所で背中に足をかけ跳躍し回避する。結果術は聖隷だけに当たる。

「ウギャアアアアアア!!」

聖隷が悲鳴を上げながら黒い炎に包まれる。

「なんとということを！」

シアリーズが叫ぶ

『「非情の戦いは非情をもつて制すべし」』

オスカーがそう言いながらベルベットに接近するベルベットは刃を出しかち合わせる。お互い後ろに下がる。

「それがあんたたちの理ことわりよね」

ベルベットが皮肉めいて言う。その直後刺突刃で突きを出しオス

カーが避けると同時に顔に向かって後ろ回し蹴りを放つ。オスカーもそれを避け、反撃する。そしてまたお互いの獲物が鏝迫り合っている最中、術を受けた聖隷に変化が起きる。

「うあああ・・・おおおっ!!」

聖隷が悲鳴を上げ、その体に変化し始める。ベルベットとオスカーが気づき、お互い離れる。

「いけない!」

シアリーズが悲鳴を上げるように叫ぶ。

「あれは一体・・・」

ケンは傷など気にせず聖隷を見る。

「うがあ・・・があああ〜っ!!」

聖隷を包んでいた炎が大きくなる。その直後、炎の中から鋭い爪を持った前足が出てくる。

「聖隷が業魔病に!」

ベルベットが驚愕する

「くっ?!制御がっ!」

オスカーが焦るように言う

「ギャオオオオオオン!!!」

聖隷がドラゴンに変異した。ドラゴンが羽を羽ばたかせ、オスカーの方へ向く羽を一層に動かすと突風が吹き荒れオスカー達を吹き飛ばすし壁に叩きつける。

「ぐああ・・・!!」

そのまま崩れ落ちる。ドラゴンが今度はベルベットに狙いを定める。最早理性もないようだ。空中からベルベットに襲いかかる。

「くっ!!」

ベルベットが構える、正面ではまず無理だ。

「危ない!!」

ケンが走るが距離が離れている。これでは間に合わない。その時シアリーズがベルベットに向かって走る。

「ベルベットー!」

シアリーズかドラゴンに背中を向けベルベットを庇う。

「あああっ!!」

シアリーズの背中に深い爪跡ができる。

「!!」

「なんてことだ・・・!!」

ベルベットが驚愕し、ケンが無意識に喋る。

「くううあああ!!」

シアリーズは切り裂かれ、倒れながらも術式を発動しドラゴンを吹き飛ばす。

「シアリーズ!」

ベルベットが駆け寄り抱きおこす。ケンも近くに寄る。ベルベットはシアリーズを起こすがその手には血が付く。

「致命傷ですね・・・」

「・・・」

「諦めてはいけない!」

ベルベットは何も言わず、ケンはシアリーズの傷にすかさずガーゼを当て止血しようとしている。だがシアリーズが

「ケンさん・・・もういいのです・・・」

「何を言ってるんです!船はすぐそこなんです!諦めちゃダメだ、こうなったら!」

ケンが右手を光らせコスモフォースを使おうとするが

「ケ・・・ンさん!」

「!」

意志の籠った声がケンを止める。シアリーズがベルベットに顔を向ける。そして。

「私を・・・喰べてください」

「何を言ってる!」

ベルベットが言うが

「私の体には、命を捧げることを枷とした”誓約”がかかっています。私を喰らって”力”を手に入れて下さい。”前に進むための力”を」
「どうして・・・」

「私の心にもあるのです。あなたと同じ、消したくても消えない炎が」

シアリーズが懐から櫛を取り出す。

「これはラファイの!!」

「・・・」

ベルベットが驚く。ケンは黙って聞いている。

「だから許せない・・・凍てついた世界も・・・人も・・・げふっ!!」
「つまさか内臓にまで!!」

ケンが驚く。

「・・・結構、面倒な女なのですよ」

「・・・」

「早く・・・!私の命が、尽きないうちに・・・!」

「あああ・・・」

ベルベットは俯く。ケンは何も言わずに立ち上がる後ろを向きドラゴンと対峙する。

グルルル

ドラゴンはダメージから回復し3人を見る。

「ベルベットさん、ここはお願いします。僕があいつを抑えます」

「!?でもお前一人じゃ幾ら何でも!!」

「貴方はシアリーズさんの意志を受け継がなければならない。彼女の「選択」を受け入れなければならない!」

「でも・・・」

「僕はいいつを『倒す』覚悟をしたんです。それに、彼はもう・・・」
「っ・・・」

ドラゴンの眼には理性はない、もう助からない。

「だからお願いします・・・お願いしますから・・・」

「・・・分かった」

「・・・ケンさん」

シアリーズが苦しそうに話す。

「・・・彼を・・・楽に・・・」

ケンは頷く。ケンはドラゴンに数歩近く。ドラゴンが吼える。ケンは構える、がいつもの手を開く構えではなく右手を捻り上へ左手を胸の前にやる。次に左腕を脇に締め右腕を水平に払い戻すと同時に

両腕を交え右腕を脇へ左腕を前に出し手を開ける。そう、彼のもう一人の師ウルトラマンレオの構えを取る。

「何あれ・・・今までの構えとは違う・・・」

「・・・やはり、彼なら・・・」

構えと同時にドラゴンに向かい駆ける。ドラゴンは爪を振り下ろす。

「でいやッー」

ケンは爪を躲し、ドラゴンの顔に回し蹴りを放つ。

ガオオ!?

蹴りが顔にめり込む。すかさず首に打拳と手刀を連続で打ち込む

ガアアアア!!!

ドラゴンが負けじと噛み付こうとするがケンは跳躍し躲す、両手を合わせ前に突き出す。そこから一発の光弾が放たれ、ドラゴンの顔に直撃する。

ガア!!ガフツ!?

怯んだ隙に眉間に向けてチョップを叩きつける。そのまま地面に叩きつける。

「おおおー」

ケンはドラゴンの懐に飛び込みそのまま持ち上げ、投げる。大きな音を立てドラゴンが転がる。

「さあー早く」

ケンが声をかける。ベルベットが決意を決めた顔になる。左腕を変異させシアリーズの顔を掴み持ち上げる。

「例も謝罪も言わないから」

ベルベットは言う。だが顔が強張る。

「必要ありません。私の望みもー」

シアリーズの面が割れ、砕け散る。目が見えた。それでいて穏やかだ

「同じ・・・ですから」

「!?!」

ベルベットが驚く

「大好きだった」

腕に手を添えるシアリーズ、腕に力を込めるベルベット。歯を食いしばり、耐える。

「あなたたちと・・・アーサーと過ごした・・・あの日々が」

シアリーズの目から涙が流れる。

「うああああくくくっつ!!!」

「ケンさん・・・」

シアリーズはケンに言う。ケンはドラゴンと対峙したままだが。

「妹を・・・お願いします・・・」

聞こえないほどの小さな声だがそれが届いたのかケンはほんの僅かに頷く、そして。

なにかが潰れる音が辺りに響いた。

シアリーズの手が垂れる。その瞬間炎と光に変わりベルベットの左腕に入り込む。ベルベットの中にシアリーズの記憶が蘇る。

アーサーとの出会い、家族の団欒、挫折、そして裏切りを決めたその時の記憶。それが終わりベルベットの前に一つの指輪が現れる。それを左腕で掴み取る。ベルベットにも言わない。青い炎を纏いながら。

「ぐっ・・・なにが起こっている・・・?」

オスカーが気が付きよろめきながらも立ち上がる。そこにはダメージが残りながらも滞空するドラゴンと構えるベルベットとケンがいた

「・・・どけ。さもないと」

ドラゴンが吼える

「お前も喰らうっ!!」

く

「ケン!!あたしに合わせろ!」

「分かりました!」

二人が左右に別れて走る、ドラゴンが混乱する。

「うおお!」

ケンがドラゴンの右の腹に拳を打ち込む

「今です！」

「はあああっ!!」

ベルベツトが左腕でドラゴンを喰らう。ドラゴンが叫ぶ中

「フアランクス・レイド!!!」

喰らった力を相手に向かって放出する。

「喰らった力を撃ち返した!? こんな業魔がいるのか!」

オスカーが驚愕する

ドラゴンがベルベツトにブレスを吐こうしたが。

「させないぞ!」

ケンがドラゴンの口の上から膝落としを食らわせる。

「だああっ!!!」

その隙に喰らう。怯んだと同時にケンが背中に垂直蹴りを打ち込むベルベツトはダメ押しに刺突刃と蹴りのラッシュを放つ。

ベルベツトがケンに合図する。

「トドメを刺すぞ!」

「はい!」

ケンが構えをとり5メートル程跳躍する、錐揉み回転をし蹴りの放つ、右足が赤く発光しながらドラゴンに突っ込む。レオキックはドラゴンの横っ腹に直撃し、大きく吹き飛ぶ。その先にベルベツトがいた。

「はあああ!!!」

そしてドラゴンに渾身の力をぶつけた。

「フアランクス・レイド!!!」

技を受けたドラゴンは叫ぶが力なく倒れる。ベルベツトは息を切らせる。

「はあ．．．はあ．．．」

ケンは着地するがその瞬間よろける。

「ぬっ．．．」

「おいっ!? 大丈夫なのか?」

「まだ未熟ですからね．．．」

「あれで未熟か・・・」

その瞬間ベルベットに術が当たる

「ああっ!!」

「ベルベットさん!」

ベルベットは吹き飛ばされる

「ううっ!」

「悪く思うな。お前のような強力な業魔を世に放つわけにはいかない!」

オスカーが叫ぶ。だがベルベットが立ち上がる

「・・・ベルベットよ」

オスカーが驚く

「あたしの名前。アルトリウスに告げなさい」

ベルベットはそう言いドラゴンに近づく。左腕を変異させ顔に喰らいつく。

「あたしはベルベット・クラウ。業魔も、聖隷も、対魔士も喰らい尽くすー」

ドラゴンの身体が左腕に取り込まれる。

「最悪のっ!!」

左腕に火球が現れる。

”喰魔” だっ!!」

火球をオスカーに向けて放つ、それがオスカーに、正確には左眼に直撃する。

「うおおおーっ!!」

オスカーの身体が燃え上がる聖隷がすかさず駆け寄り光のように消えた。

ベルベットは息を切らせたが呼吸を整えシアリーズから渡された櫛を見つめる。ケンは斬られたところに包帯を巻きながら近づく。その時扉が開く音が聞こえた。

「ほほっうーよさ気なトコ出れたわ」

砕けた喋り方は聞き覚えがある。

「いやはや、塔から飛び降りた時には死ぬかと思っただわい」

「お前は突然きて、俺に負ぶさっただけだろう、だがあのへこみはなんだったんだ？」

もう一つの声も聞き覚えがある。

「おう、お前らは！」

「貴方達は確か」

「お前のおかげで號嵐を見つけられた」

男は太刀を見せ、頭を下げる。

「俺は、ロクロウ・ランゲツ、號嵐これは俺の命の太刀なんだ。この恩は、必ず返す」

「挨拶は後じゃ。急いで逃げんと、囚人どもは、ほとんど制圧されたよ
うじゃぞ」

「またもやオーバーな動きで喋る、ついでにケンの尻も触る。」

「おわあ！ちよつとマギルウさん！勘弁してくださいよ！」

「よいではないかく減るものでもあるまいし」

今度は太ももと腹筋をねつとりと触ってくる。

「あーも！ホントやめてくださいよ！」

「うっしっしっし」

マギルウはニヤニヤしながら触る。ベルベツトは無視して話す。

「港はこの先よ。手伝って」

ベルベツトは踵を返し歩き出す。ロクロウが後に続く。ケンはマギルウに引っ付かれながら後を追う。

）

4人は港に出る。外は嵐だ。

「天気もご機嫌ナナメじゃよ」

「そろそろ引っ付くのやめて欲しいんですけど・・・」

「イヤじゃ」

「ええ・・・」

「こりゃあ外洋はもつと荒れるぞ」

「船に詳しいの？」

「いや。帆と舵の基本を知っているくらいだが」

ロクロウが頭を掻きながら話す。

「贅沢は言えないわね。頼むわよ」

「素人だけで船を出す気か？」

マギルウがベルベットの目の前で抗議する。やっとな離れた。

「・・・わかった。これも”號嵐”の礼だ」

ロクロウが腕を組む

「ゆつてもものー、こんな天気じゃ、すぐに方角も分からなくなるぞ？」

「わかるわよ。船には羅針盤つてもものがあるんだから」

ベルベットが言い聞かせるように話す

「牢のコヤシか、魚のエサか・・・ま、どーでもいいがの」

そう言いつつケンにへばり付く、ケンは何も言わなかった。というか諦めた。4人は船に乗り込む。ベルベットは一人呟く

「待つてなさい・・・アルトリウス！」

港から警備兵が飛び出してくるが船は海に向かって進み出す

この嵐を切り抜かれるのだろうか。それは誰にも分からない。あ
る一人を除いて・・・

ふむ、なんとか島を脱出できたようだな。初めはどうなるかと思つてヒヤヒヤしたよ。　ん？君なら知ってるんじゃないのかって？
ふん、まあ、そこは気にしないでいいだろ？

さて、シアリーズがベルベットに喰われた訳だが、消えたわけじゃないな。彼女の存在がどのようになるか、楽しみだ。え？どうしてそんな事言うのかだって？　フへへ、それは昨日いっただろう。・・・あ、いやすまない。君たちにとっては明日の出来事か。ではまた会おう。

第6話

あの後船で脱出したのはいいものの、案の定嵐に揉まれ船は大破、難破してしまった。幸運にも陸地に座礁したのが救いか。雪が降る地域なのか、雪化粧をした大地に4人は船から投げ出され、気を失っている。

そこに白いローブを着た子供が近づく。子供はベルベットに近づくとしやがみこみ手をかざす。青白い光が彼女を照らす。そして意識を取り戻す。

「ライ・・・フ・・・」

ベルベットは今は亡き弟の幻影を見る。が、すぐに現実に戻される。そこには10歳ほどの男の子が手をかざしていた、目に光はない。

「・・・聖隷!?」

ベルベットが驚く、少年はすかさず立ち上がり、手元に落ちていた羅針盤を持って走り出す、が少年のいく先に業魔がいた。ワーウルフ2体。

「ああ!？」

「下がって!」

ベルベットが前に出て少年を下がらせる。ベルベットは刺突刃を構え、魔物に突撃する。ワーウルフが爪で横振りに振るう、ベルベットはそれを地面ギリギリまで屈み回避する。そのままの体勢で足払いをしワーウルフの足を蹴る。体勢を崩したと同時に素早く刺突刃を下から上に振り上げ一体のワーウルフを斬り捨てる。後ろからもう一体のワーウルフが噛み付こうとするが、それより早く業魔手で顔を掴む。ワーウルフはもがくがやがて動かなくなった。そのまま喰らい始める。その間にケンが意識を取り戻す。

「あいてて・・・やっぱり無理があったか・・・」

ケンが周りを見るとロクロウとマギルウが伸びているのを、ベルベットが業魔を喰らっているのが見えた。その奥で子供が走り去る

姿も見えた。

「・・・あの子は・・・」

気になりながらもベルベットに近づく、彼女は喰らい終わったにも関わらず動かない。

「ベルベットさん？どうしたんです？どこか怪我でも「アアアッ!!」べ、ベルベットさん!」

ケンが近づいて来たと同時にベルベットがケンに飛びかかる。咄嗟のことで反応が遅れたケンはベルベットに抑え込まれる様に仰向けに倒される。

「ベルベットさん!? 一体どうし「クイタイ・・・」・・・え?」

ケンがベルベットを見上げる。そこには目が獣の様に開き、口からは寒いのもそうだが猛獣の様な息遣いと荒い白息が出ている。

「あたしのナカで暴れまわるんだ・・・お前を喰らえって・・・腕の疼きとあたしノナカの何かがオマエをクラエツテッ!!!」

「まさか!あの時と同じ・・・!」

そう、ベルベットたちと初めて出会った時にケンに襲い掛かって来た時と同じ現象だ。

(穢れとやらが関係してる?でもその前に・・・!)

「アアアアアッ!!!」

馬乗りの状態でベルベットは左腕を振りかぶり、ケンの頭を狙う。

「ふっ!」

「グウツ!」

ケンはすかさず右手でベルベットの腕を掴む。変異した腕がビタリと止まる。

「ガアアアッ!!」

今度は右腕の刺突刃でケンの胸を貫こうと刃を突き立てて来る。

「ぬうっ!」

刃を突き立て様として来る右腕を横から掴み掬い取る様にして止める。だかベルベットは。

「フウウ!!」

あろうことか己の歯でケンの首筋に噛み付いて来たのだ。ケンは

想定外の行動に反応出来なかった。ベルベットの犬歯が皮膚に食い込む。

「……っ！」

ケンは痛みを感じながらも右手にフルムーンレクトを発動する。コスモスの様に上手く放てないが直接なら出来る。右手から光が溢れベルベットの左腕を照らす。その腕から黒い瘴気の様なもの霧散していく。

「ふう!?ツグウー！」

ベルベットは抵抗するかの様に噛む力を強める。皮膚を突き破ったのか、ベルベットの口から血が流れ出す。

「あの時はほんの少しだったですが今回はそれなりにやりますよ！」

「うう！あああああっ!!」

ケンはフルムーンレクトを強めベルベットの左腕を照らし続ける。ベルベットは噛み付くのをやめ逃げる様にもがき始める。だがケンは逃すまいとしっかり掴む、やがて左腕は脈打つ様に元の包帯の巻かれた腕に戻る。

「う……ああ……」

ベルベットはそのまま気を失うように前のめりでケンの胸に倒れる。

「ふう……なんとかなったな。いてて……」

ケンはベルベットに噛まれたところを庇いながら彼女をどかし両脇を持ち上げ、難破した船の積荷の箱に背中を付けさせる。

「むっふっふっおあついことじゃの〜」

「……いつから見てたんです？」

「あの女が業魔と戦っている時からだ」

マギルウとロクロウが立っている。マギルウはニヤニヤしながら、ロクロウは腕を組んでいた。今まで気を失っていたふりをしていた。

「それなら助けてくださいよ……」

「それは無理じゃ。あやつと正面からなんて命がいくつあっても足らんからの〜」

「武器があればよかったんだが生憎な」

(背中の太刀は・・・言わないでおこう)

ロクロウの背中の太刀について言おうと思ったがやめた。

ケンは何れベツトから噛まれた箇所を手当てしようとしたが。マギルウに止められる。

「それに関しては悪かったと思つとる。じゃから謝罪も兼ねてわしが手当てしてやるぞ」

「え、でもこれくらいなら・・・」

「いったじやろ、謝罪も兼ねてとな。それにこんなわしのようなピチピチ美少女に手当てしてもらえるなんてお前の様な男には一生に一度もない大大大チャンスじゃぞ〜!」

「・・・はいはいわかりました。それじゃお願いしますよ。」

上手く乗せられた感はあるが断れば延々と話されるかも知れないのでケンは手頃な箱に座る。マギルウが傷を診る。

「けっこー深く噛まれとるのー、あやつ力なら喰い千切られてもおかしくないのにこれだけで済むとはおんし人間かえ?」

「僕は真正銘のただの人間ですよ。それ以上でもそれ以下でもないです」

「だがそれにしても女とはいえ業魔。それを素手で止められるやつは見た事が無い。それにあの手から光を出して大人しくさせた技。一体誰から学んだんだ?」

「それは・・・教えられません。すいませんが。」

「ふむ、そう言うなら仕方がない。」

「教えられないと言われ詮索を止めるロクロウ。」

「ただ、これだけは言えます。」

「ん?」

「教えてくれた人達はとても偉大な人だと。」

「・・・そうか、」

、

「・・・ん・・・」

「お?気がついた様じゃなく殆ど時間も経つとらんのに。にしても業

魔を喰らうとはエグイの〜」

ベルベットがほんの1・2分で意識を取り戻す。これも業魔の力故か。

「おーいケン、ベルベットが気がついたぞ。」

「はーい」

ロクロウがケンを呼ぶ

(あたしは・・・確か業魔を喰らって・・・それで・・・あいつを・・・)
ベルベットは思い出す。また衝動に抗えずケンを襲ったこと。そしてまた助けられた。

「あ、よかった。なんともなくて。大丈夫ですか？少し強めにやっただけですけど。」

ケンは両腕の縫い糸を抜き取りながら歩いて来る。

「お？もう大丈夫なのか？あの時結構深く斬ったつもりだったんだがな」

「はい、後は包帯しておけば元通りです。」

「まだ怪我してから1日経ったか怪しいもんじゃぞ？全くお前の体は一体どうなつとるんじゃ？」

「はは・・・」

ロクロウとマギルウからの質問に乾いた笑いではぐらかすケン

ベルベットはケンに聞く。

「あたしはお前を襲った。二度もだ、でもなんでお前はそうやって平気でいられる。どうしてあたしを気にかける」

それに対してケンが答える

「最初に襲いかかってきた時。貴女の目は正気ではなかった。まるで何かに操られたかの様に。僕はそれを止める術があった。だから僕はそれを実行したまでです。それに貴女を操ったなにかを突き止められれば対策も立てられます。それに・・・」

「？」

「シアリースあの人に頼まれましたから。」

「・・・そう」

それを聞いたベルベットはそれだけをいい立ち上がる。

「すまん。武器があれば力になれたんだがな」

ロクロウが謝罪を言う。

「背負ってるでしょ」

ベルベツトはロクロウの太刀を見ながら言うがロクロウは。

「いや、號嵐これは使えん。話すと長くなるんだがー」

「さつきの子は？」

ベルベツトはロクロウの話を変える様に話題を変える。本当に話すと長くなりそうだったからだ。

「なんかこまいのが、ピューと逃げていったわ」

マギルウが頭の後ろで手を組みながら話す。

「逃げていいわよ。あんたたちも」

ベルベツトがみんなに呟く様に諭す

「まだ恩を返していない。受けた恩は返すのが俺の信条だ」

「逃げるにしても、ここがどこか確かめんど。儂らは哀れな遭難者じゃろ？」

「旅は道連れ・・・と言うやつですか。」

「そう言う事だ。中々いい事言うじゃないか？」

「・・・」

「それと、こんな地図もが落ちていたぞ」

「地図？さつきの子が落としていったのか。」

4人は地図を見る。島がいくつか描かれている。

「どうやらここはノースガンド領らしいな」

ロクロウは地図を見て話す。

「ノースガンド領・・・つまり船を修理しないとミッドガンド領にある王都には行けないってことか」

ベルベツトは顎に手をやり考える様に話す。

「ローグレスにどんな用があるんだ？」

ロクロウが聞く

「・・・」

ベルベツトは何も言わない。

「・・・脱獄してでも行きたい用だよな」

ロクロウは察して聞くのを止める

「へぶしよいつ！ううう立ち話はあとじや。どこかに温かいスープと、心温まる小話はないかのう？」

マギルウはわざとらしいくしやみをし、砕けた感じに話す。

「近くにヘラヴィーサという街があるはずだ。小話は知らんが、メシも船大工もそこで探せるだろう」

それを最後に4人は移動を始める。移動中マギルウがベルベツトに話しかける。

「ベルベツトは、さっきの坊と知り合いなのかえ？何やら呼びかけておったろう？」

坊とは先ほどの少年の事だろう

「別に。聖隷に知り合いなんていないわ、もう」

ベルベツトはシアリーズから託された指輪を見て、言う

”もう”・・・のう

マギルウがニヤつきながら言う

「なに？」

「なにもマジもないが、あの坊は変わっておったのー」

「確かにな。命令もないのに回復術で業魔を助けやがった」

「おまけに羅針盤を盗んでいきおった。対魔士に従う聖隷のくせに、我欲のあるヤツじゃわー」

「まあ、こつちもあいつの地図をいただきいちまったけどな」

「いやはや悪党ばかりじゃなー、儂以外は」

「あ、それ自分も入るんです？」

マギルウは目を光らせる

「うむ、まっただくだな」

なぜか賛成するロクロウ

「ちよい！そういうボケ潰しが一番の悪じやよ！？」

「そうなのか？」

マギルウとロクロウの漫才が続く中、ベルベツトが一人呟く。ケンがフオローする。

「脱獄囚が、いい気なものね」

「何も無いよりかはよいのでは？」

「ふん」

「はいこれ、まだたくさんあるので、皆さんもどうです？」

ケンはず人にチョコを渡す

「おほくチョコかく！丁度小腹もすいとったし遠慮なくいただくかの
」

「すまない、恩に着る」

「・・・ふん」

3人は歩きながらチョコを頬張る。

(・・・甘い)

ベルベットは心の中で呟いた

う。
4人は雪の中を進む、北国である以上気温は低く寒さが体力を奪

「ううくさむさむっ！お主、よくそんなカツコで平気じゃのう？」

マギルウは震えながら3人に話しかける。その恰好なら寒いのも
当たり前だが

「・・・人間じゃないからね」

「業魔だから感覚がないからな」

「ううくケンツ！お前はとうじや？寒くないのか！寒いと言ってくれ
！」

「鍛えてますからこれぐらいなら平気です」

「がくん」

道中業魔と遭遇したがケンがいなし、ベルベットが倒すという場面
が続いた、ロクロウとマギルウは武器なしなので後ろに下がっている

「娑婆シヤバはいいな。体を自由に動かせる」

「ロクロウや、お主は、なにゆえ囚われておったんじや？」

マギルウは何気なくロクロウに聞く

「家のしがらみで、色々あってな」

ロクロウは含みながらも話す

「ほほう、呑気に恩返しをしとつていいのかえ？」

マギルウはまたもニヤつきながら言う

『借りたものは返す』——それが「ランゲツ家」の教えなんだよ」
ロクロウはきっぱり答える。

「なかなかお行儀のいい家族じゃなー」

「長く捕まつてたの？」

ベルベットがロクロウに聞く

「3年ほどかな。だから今の世界がどうなってるかは、よく知らん」
「農もじゃよー。聖隷とかいう術を使う奴らがおるとはビックリ
じゃ。マジナイとノロいは魔女の専売特許じゃのに営業妨害もはな
はだしいわ」

マギルウが大げさな動作で話す。

「お前の捕まった理由って・・・」

「うむ、インチキ魔女じゃってしよっぴかれたんじゃ。身内にヒドイ
裏切りにあつてのう」

「・・・」

ベルベットが苦い顔をする

「聞きたいか？聞くと涙、語るも笑顔の物語」

「興味ない」

ベルベットは足早に先に進むロクロウがケンに話しかける

「そういえば、ケンはどうしてあそこにいたんだ？お前も捕まつてた
のか？」

「お、農も気になるの〜」

マギルウも食いつく

(マズいな、なんて答えよう・・・まあそれっぽいこと言うか)

「あー、実は旅をして、船で航海中に嵐にあつてそれで難破しちゃつ
て・・・」

「ふーん、それであの島に流れ着いたという理由だな」

「なくくんかいまいち信じられんがな、それなら今の世界の情勢ぐら
い知つてるとおもうがの・・・」

「あちこち転々としてたもんで・・・はは・・・」

なんとかはぐらかしながらベルベットの後を追う

「う〜む怪しい、怪しいぞ〜あやつは、なにか隠しておるな。うむ間違いない」

「そういうのは追々話してもらえばいいだろ？」

「そう言いつつ二人の後を追った。その後には”ねこにん”というのにあった。どうやら聖隷の一種らしい。色々あったが割愛。

貸しは作っておいた方がいいらしいことと無下にすると呪うらしい。ベルベットは酷く嫌っていた。

）

しばらく歩くと街の門が見えた、が対魔士が警備にあたっている。

「対魔士がいる」

4人は岩陰に隠れる

「まずいのー。脱獄の噂は、まだ届いとらんはずじゃが」

マギルウは相変わらず能天気と言う

「俺たちの風体では入れてくれそうにないな」

「まあ・・・そうですね」

ロクロウの言葉にケンが答える

「さつき・・・ごめんなさい。これ・・・盗むつもりじゃなかったけど」
横から声が聞こえる。そちらを向くと先ほどの少年が立っていた。

謝罪をしながら羅針盤を取り出す。

「羅針盤・・・」

少年は羅針盤を地面に置き、横道に向かって走り出す

「いいのか？あやつ対魔士の配下かもしれないぞ」

「それだったらとっくに対魔士連れてきてるのでは？」

「それもそうだな」

「後を追うわよ」

ベルベットが立ち上がる

「食後のデザートか？」

「マギルウさん・・・」

「・・・必要なら」

マギルウが皮肉めいた事を言う。ベルベットがそれに返す

「この道を進んでいったはずだ」
海に面した小道を進むと横穴があり、そこには梯子がかかっている。

「ほう、こんなところに梯子があるとはな」

「どこに続いているんでしようか」

「登ればわかるわよ」

「ううなんでもいいから早く行こうぞ・・・」

4人は梯子を上る

梯子を上りきる、そこは倉庫につながっていた。木箱と樽が山積みになっている

「倉庫・・・？」

「クンクン、この臭いは・・・」炎石”じゃな」

「炎石？」

「別名メルキオナイトともいう。ノースガンド領だけで採れるレアな鉱物じゃ。硫黄と混ぜれば爆薬に、油と混ぜれば燃料になる」

マギルウが説明する

(硝石みたいなものか・・・)

「ぶっそうなものね。本当なら」

「疑うのは自由じゃよー」

「あの少年には逃げられたか」

ロクロウが少年について考える

「とにかく街には入れた」

「船関係の組合に行ってみよう。その手の組織が、荷や船大工も仕切ってるはずだ」

「できれば航海士も欲しい」

「うむ、それは激しく勧めるぞ。次も漂着で済むとは限らんからのう」

マギルウが含みを込めた感じで話す

「武器も探そう。そうすれば俺も助太刀できる」

「だから、背中」

「いや。それは断る」

ベルベットがまた背中の太刀について言おうとしたがロクロウに

きっぱり断られた。倉庫を探したが使えそうな物資が極わずかだった。ケンはそれに関しては何も手につけない、武器はなかった

倉庫を出ると船着き場にでる。組合探しついでに街の住人たちの話を聞く。道中子供たちの話声が耳に留まる

「僕は、大きくなったら対魔士になるんだ！」

「あたしも！パパやママを守ってあげるの」

「違うぞ。対魔士は、業魔から”世界”を守る戦士なんだ。パパとかママとかじゃなくて、みくんなを守らなきゃいけないんだぞ」

「う・・・そんなのむずかしいよ・・・」

「そう！そういう難しいことをしてるから対魔士様は偉いんだ」

「うん！対魔士様ってえらいね！」

子供たちはどうやら将来対魔士になりたいようだ

「ふん、まるで正義の英雄ね・・・普通の人間にとっては実際そうなんだろうけど」

ベルベットが皮肉を込めて言う。だが正論も吐き捨てる。

（個を捨て全を助ける対魔士・・・確かに対局的に見てそれは正しい判断だろう。だが個を捨てればそこから恨みや憎しみの負の感情がでる、それが重なり大きくなればいずれ全だの個だのという問題じゃなくなる・・・難しいな）

ケンは心の中で考える、小さいことでも時間がかかれば手に負えなくなるという事柄などいくらでもあるからだ。

立ち去り際子供たちの声がまた聞こえる。一等対魔士のテレサという人物、どうやら子供の聖隷を2体同時に操るらしい。あとこの海域に海賊もいるらしい。

（もしかしたらその対魔士とも遭遇するかもしれないな、知っておいて損はない）

その後4人は船着き場を後にし、門から市街地に入る、住人から話を聞き組合の場所を聞いた。広場を抜けそれらしいところが見えた

「船員が集まってる。あそこが組合?」

「お、良さそうな武器屋がある! 船大工の話は任せた」

そういうとロクロウは足早に武器屋に向かう

「男って生き物は、オモチャを見るとガマンできんのじゃなあー」
「ほんと」

ベルベットが珍しく賛同する。どこか懐かしむように

「お前はええんかえ?」

マギルウが呆れながらもケンに聞く

「僕はいいです。そういうのは使わないもんで」

「ふくん、変わったやつじゃの」

「そりやどうも」

そう話しながらベルベットが組合の一人に話しかける

「ここ、船の組合?」

「ダイルめ、悪あがきをしやがって」

「まったくだ。あいつが死んでいればこんな面倒なことには——」

組合員はベルベットを無視して話している

「ねえ、ちよつと。船の修理を頼みたいんだけど」

少しイラつきながらも再度話しかける

「悪いが、今はできない」

「なんで?」

「なにか理由でも……」

ケンが聞こうとしたその時後ろから声が聞こえる

「商船組合は業務を停止しているのです」

3人が後ろを向く対魔士であろう制服の女性、恐らく1等対魔士だろう。その一歩後ろの両隣で聖隷が付いている、2体だ

「聖寮対魔士テレサの名において」

テレサと名乗る女性の傍らに先ほどの少年がいた

(この人が聖隷を2体同時操る対魔士……か)

「テレサ様——」

「二号、口をきいていいと許可しましたか?」

「……」

二号と呼ばれた少年は口を閉じる

(・・・どうやら聖隷を物同前の扱いは本当のようだ)

ケンは口には出さないが心の中で呟く

「テレサ様、我々への罰はいつまで続くのでしょうか？全部ダイヤルがやったことで——」

組合長らしき男がテレサに聞く

「ダイヤルが”炎石”の密輸を行っていたことは明らか。放置した組合にも連帯責任を負ってもらいます。それが秩序維持のために”聖寮”が敷いた規則です。違いますか？」

「い、いえ・・・」

テレサの言い分に組合長は反論をやめる

「ダイヤルは我らが捕らえ、聴取の上、処罰します。事件の決着すれば、営業再開の許可を出しましょう」

テレサはそう言いつつその横にいたベルベットをふと見る。

「そのの娘。そんな恰好で寒くないのですか？」

その服装で疑問に思ったのだろう。当然といえば当然だが

「南方から着いたばかりで、ノースガンド領がこんなに寒いとは・・・くしゅんっ！」

適当にはぐらかし、わざとらしくくしゅみやみをするベルベット。

「女子が体を冷やしてはいけませんよ。そのあなた」

「あ、はい」

テレサがケンに注意するようにいう

「あなたも男性なら少しは気にかけてらどうです」

「あ・・・はい、すみません」

「お気遣い、感謝します」

ベルベットが一応礼をいうテレサは会釈して歩き去っていった。

マガルウは石階段に座りつつテレサを見てニヤついていた。

そして立ち上がり

「いやはや、これが聖寮のやり方か。キュークツ、クツクツの世界じゃのー」

マガルウは砕けたように喋る。窮屈でもそれなりに統制が取れな

ければ治安は維持できないが……

「事情はわかった。ダイヤルって奴を捕まえれば修理を頼めるのね？」

ベルベツトはスルーし組合長に話す

「そうだが……今の奴は業魔だ。逮捕に向かった兵士を何人も殺して逃げた。対魔士でなきや捕まえるのは……」

組合長の隣にいたもう一人の男性が口を開く。

「ダイヤルは、郊外の小さな村の出身だと聞いた。故郷に手がかりがあるかもしれないトカゲの顔をした凶暴な業魔だ殺す気でいった方がいい」

「おいー！」

「万が一ってこともある。打てる手は打っておこう」

組合長が制するのように言うが男は言い切る。

「航海士も欲しいの。用意しておいて」

ベルベツトはそれだけ言うとは組合を後にする。ケンとマギルウも後をついていく。

「さて、ロクロウの方はどうなったかのう」

マギルウがロクロウの事を口に出す

「武器屋に行ってみるか」

ロクロウを迎えに武器屋に向かったロクロウはいい物を見つけたのだらう、心底嬉しそうにしている

「なにかいい物あったんですか？」

「ああ！いい掘り出し物を見つけたぞ！」

ケンの言葉にロクロウが返す

「ひどく錆びていたが、研ぎ直してみたらなかなかの業物だった」

「ううむ……まさか投げ売りの品に、そんな上物が混ざっていたとは……勉強させてもらった。それは、あんたに贈らせてもらうよ」

「ありがたい」

ロクロウは店主に礼を言う

「……で、手伝ってくれるの？」

「もちろんだ。そっちの首尾はどうだった？」

↳

ベルベットから事情を聴いたロクロウが話す

「なるほど。ダイルというトカゲの業魔を捜すんだな？」

「とりあえず、ダイルの故郷を当たってみるつもり」

「がんばっての？」

マギルウがきびびつを返して歩き出す

「一緒にいかないのか？」

「儂も、なかなか忙しい身でな。裏切者を捜さんといかんのじゃ。それに喰べられたらかなわんしの」

マギルウがベルベットに視線を向ける

「こう見えてもグルメなのよ」

「ではなおさら危ないのう〜♪」

ベルベットは皮肉を込め言い返す、マギルウは聞き流しつつ歩き去った

村に向かおうとしたが英気を養うために一泊することになった。宿に向かう途中雑談している住民の声が聞こえる。聖隷についてのことだったどうやら世間的には聖隷は物言わぬ道具という認識が広まり、3年前に突然見えるようになったらしい。そしてこのアースガルド領は以前はそこまで寒くなかったらしい。

↳

3人は宿屋に入る受付でケン手続きをしている。

「3部屋お願いします。個室で、空いています？」

「はい、大丈夫です。空いていますよ」

それを聞いたベルベットとロクロウが口を挟む

「別に相部屋でいいじゃない・・・持ち合わせそんなにないし」

「俺も別に構わんぞ？」

「さすがに男女一緒じゃまずいでしょ？」

ケンはプライバシーを理由に諭す

「そうなのか？」

ロクロウがそう答える。ケンは少し落胆する。

「とりあえず部屋は個別にしますからね？」

「わかったわ」

「お前がそういうんなら構わんぞ」

「ふう・・・では料金はいくらですか？」

「はい、色々込みで500ガルドになります。」

「わかりました。はいこれで」

ケン は 料金を払う

「なんだお前もつてたのか」

「旅で稼ぎましたから」

ケン は 受付から受け取った鍵を二人に渡す

「ではまた後で」

「おう」

「・・・」

そこで3人とも一時解散して部屋に向かった

）

宿に入り夜が更ける。ベルベツトは用事を済ませ自分の部屋に戻るため渡り廊下を歩いていった。

「・・・噴っ！破っ！勢っ！」

「・・・ん？」

ベルベツトは何かに気付き足を止める。何かを振るう音と掛け声が聞こえる、覗いてみるとそこには木刀の素振りをするロクロウがいた。上半身裸だ

「勢っ!! 呀っ!! 斬ッツ!!!・・・よし。今のは、なかなかいい太刀筋だった。明日はもつと速くだな」

「いい加減な業魔かと思っただけど・・・案外そうでもないのね」

ベルベツトはそう言いつつ廊下を渡る。その後階段を上り自分の宛がわれた部屋に入ろうとした時、ふと窓を見る。月明かりが雪に反射して思ったより明るい。下は中庭なのだろうか広いスペースがある、そこに人影がいた。

「あれは・・・ケン？何してるのかしら」

ケンはロクロウとまでとはいかないが上半身は黒のボディースーツを着ている。ケンは構えを取り一つ一つ確認するように動くあの体

型からは信じられない流れるのように音もなく動き、跳び、止まり、また構える。その動作に合わせて雪が舞う。

「綺麗・・・」

ベルベツトは自然と呟いた。ケンは一としきり鍛錬を済ませたのだろう。息を切らせて中に入る。ベルベツトはそれを確認し自分の部屋に戻る。

(あいつ・・・一体なんなのかしら)

ベルベツトはそんなことを考えながらも横になった。

↳

その次の日宿を後にした3人は昨日の船着き場そ倉庫を経由して村に行くことにした。雪道を歩きながらロクロウがぼやく

「やれやれ、どこまでも氷と雪ばかりだな」

「寒いのか？」

「いいや。お前は、ヘソでも冷えるのか？」

ロクロウはベルベツトに聞く

「別に・・・っていうか、どこ見てるわけ!？」

ベルベツトが威嚇する

「おっと、すまん。そういうつもりはなかった」

ロクロウは素直に謝罪する

「そうか。お前は、まだ恥じらいとかそういう感情が残ってるんだな」

「お前は・・・って、じゃあ、あんたは？」

ベルベツトが逆に聞く

「応、人間らしい感覚が大分なくなってる。業魔ってのは、そういうもんだと思ってたよ」

「人間の感覚が消える・・・」

ベルベツトさんはロクロウの言葉を呟く

「それでも、俺が俺である根っこは変わらないがな。相変わらず心水も旨いのも、ありがたい」

「・・・そう」

そのまま3人は歩き出す

(業魔は肉体と精神の変化に留まらず五感にも影響を与える・・・力と

引き換え、ということか)
ケンはロクロウの話聞き考えながらも村へ歩を進める

第6話 終わり

第7話

ベルベット、ロクロウ、ケンの3人はダイルの故郷である村に向かうべく雪道を進んでいた。その途中で岩陰に隠れるように花が数輪咲いていた。

「お、こんな場所に花が咲いてる。健気だなあ」

ロクロウが花に興味を示す

「・・・プリンセシア・・・」

「ほう、なかなか雅な名前だな」

「姉さんが大好きだった花・・・」

「・・・」

）

3年前

ベルベットは用事を終え自宅の前まで来る、そこに墓の前でアーサーと二人の男が話している

「・・・そうか。全員、担当の土地に着いたか」

「はい。皆、準備を整え”例の刻”を心待ちにしています」

「間もなくだ。よろしく頼む」

「もちろんです」

「貴方なら、必ずなしとげられますよ」

二人の男はアーサーに頭を下げ歩き去る。ベルベットの前を通り過ぎる

「いよいよだよ、セリカ。俺はお前たちのために為さなければならぬことを成す」

アーサーがセリカの墓の前で決意に満ちた語気で呟く

「・・・」

ベルベットは戸惑う。そこでアーサーが気づく

「どうした、ベルベット?」

アーサーが先ほどどうつてかわり、柔らかい声で話しかける

「あ・・・邪魔しちゃ悪いと思って」

ベルベットが謝る

「遠慮する必要はないだろう。これは、お前の姉さんの墓だ」

ベルベットはアーサーの話を聞きながら姉の墓に歩み寄る

「そうだけど、セリカ姉さんが一番好きだったのは義兄さんだし。アーサー義兄さん一番、お姉ちゃんを愛してたと思うし……」

その言葉にアーサーが首を振る

「……家族に順番なんかあるものか。セリカも、お前も、ライフィセツトも……みんな俺の大切な家族だよ」

「みんな……家族……」

ベルベットが家族という言葉に明るくなる。

「もうすぐセリカの命日だ。今年も岬に行つて、プリンセシアの花を摘んでこないとな」

「うん。きつとお姉ちゃんも喜ぶよ」

「……ああ、そうだといいな」

ベルベットの言葉にアーサーは静かに応えた。

く

「よくもあんな嘘を……」

ベルベットはかつての記憶を思い出し、吐き捨てる様に呟く

「そういえば、花には花言葉つてのがあるんだよな。こいつのはなんていうんだろうな?」

ロクロウは思いついた様に話す。

「……『裏切り』よ」

ベルベットはそれだけ言うとそのまま歩き出す。

「ほう?」

ロクロウはそれだけ呟き後を追う。ケンはずいぶんプリンセシアの花を見る。

(裏切りと言う花言葉は……嘘だな。)

ケンもベルベットの後を追う

く

雪道を移動中に小さな集落が見えた

「集落がある」

「聞き込みしてみましょ」

3人は集落の門を開け、中に入る。

「はああっ！」

そこで最初に目に入ったのは一つの影が槍を振るい業魔を倒していたところだった。

「居合わせてよかった。でも、次に襲撃があったら・・・」

女性はそう言うのと顔を伏せる。白と青を基調とした制服。対魔士だ。

「対魔士・・・まさかダイルが？」

「違うわ、トカゲの業魔じゃない」

ベルベツトがロクロウに話すと女性は気付いたのか3人の方を向く。

何故か目に涙を浮かべている。

「・・・なんで、泣いてるの?」

ベルベツトが指摘する

「これは・・・現実を噛みしめていただけです」

涙を拭い、3人を見る。まだ涙ぐんでる

「辺境では、いまだ業魔の被害が絶えない。それは聖寮が警備を放棄しているせいです。全域を守る戦力が無いのも事実。辺境に住むのが聖寮の規則にそわない人々なのも事実。非情な決断であることは、わかっています。でも、これが今最善の”理”なのです！」

「あたしに言い訳されても」

彼女の言葉にベルベツトが言う

「言い訳では——！」

「まあ、そう熱くならないでください」

ベルベツトの言葉に反論しようとした彼女とベルベツトをケンが仲裁する

「この人も聖寮と民衆のわだかまりに心痛めてるですよ。使命感もそうでしょうが、純粹に人のためにやろうとしてるんですよね?」

「ええ、そうです・・・」

「その心構えは尊敬しますが、思いつめるのはいけませんよ」

「・・・はい・・・じゃなくて！」

彼女は慌てて身だしなみを整える

「聖寮巡察官、一等対魔士エレノア・ヒュームです。御用件は？」

エレノアと名乗る女性は聖寮式のなのだろう敬礼をし、自己紹介をする。

「ヘラヴィーサで人を殺して逃げた業魔の話を知りたいんだけど」

ベルベットは例の業魔について聞く

「商船組合の事件ですね。私も聞き込みをしましたが、まだ手がかりは・・・」

エレノアは申し訳なさそうに話す

「そう」

短く返すベルベット

「御安心ください。非道な業魔は、我らが必ず討ち果たします」

エレノアはそれだけを言うときびつを返して立ち去る

「仕事熱心というか・・・」

「ま、そうだろうな」

「どうでもいい」

3人はそれぞれ感想を述べる。その時横から声がかかる

「対魔士のヒト、帰った？」

そこには女の子がいた

「ああ、帰った」

ロクロウがそう知らせる

「よかったあ、これで食べられない」

「食べられる・・・？」

少女の言葉にベルベットが疑問を浮かべる。ケンも顎に手をやり考える

「し、知らないよ！業魔のことなんかなんにも！」

バレバレである

「頼む、教えてくれ。誰にも言わないから」

ロクロウが子供にあやす様に頼み込む

「・・・北のドウクツに、トカゲの業魔がいるの。このことしやべった

ら、村のみんなを食べちやうって・・・ぜつたい言っちゃダメだよ！
これあげるから」

そう言う少女は懐からリンゴを取り出し、渡してきた。所謂賄賂だ。

「わかった。約束だ」

ロクロウは約束し、リンゴを受け取る。その言葉を聞き少女は走っていった。ロクロウは2人にリンゴを投げ渡す。

「北の洞窟・・・か」

リンゴを受け取りつつ呟く

「しかし、意外に対魔士は信頼されてないんだな」

3人はリンゴを齧りながら歩く。

「・・・」

ベルベットが立ち止まるがロクロウとケンは気づかない

「ん！なかなか美味しい」

「寒冷地だと甘味が出ていい感じですね」

ロクロウとケンは率直な感想を述べる。2人はベルベットが立ち止まったことに気付く

「そんなに腹減ってたのか？」

ロクロウが冗談を飛ばす

「薄い・・・」

「薄いつてなにがです？」

ベルベットの言葉にケンが反応する

「あの時もらったチョコは確かに甘い味がしたのに・・・」

「あれ？あのチョコ薄味なんてあったかな」

ケンは見当違いな発言をする

「・・・？」

ロクロウはそんな様子を見て頭に？マークを浮かべる

）

「手がかりはできたわ、北の洞窟に探ってみましょ」

ベルベットたち3人は北の洞窟へ向かうため集落を進む。ふと先ほどの対魔士の事をベルベットが話し出す

「聖寮の巡察官か」

「王国の各地を回って、業魔対策の状況を確認したり、対魔士たちの行動を^{あらた}検めたりする精鋭らしい。いわゆる憲兵みたいなものだな。」

ロクロウが説明をする

「民衆にあれこれ我慢を強いてる以上、自分たちにも裏がないことアピールしたいんだろう」

ロクロウは捕捉する

「そんなの置いてる時点で、白じゃないって言ってるようなものですよ」

「逆に、そっちの方が”誠実”って考え方もある。理想だけじゃ、世界は変えられないからな。だから泣いたんじゃないか？志の高い巡察官殿は」

ロクロウは含みを込めて話す。

「理想と現実の差ってやつですか」

「・・・そうね。いかにも、って感じだったわ」

「ま、女の涙つてのは、簡単に信じるもんじゃないがな」

「・・・」

「だたの一般論さ」

ロクロウの言葉を最後に3人は集落を進むその間の聞き込みでこの集落の現状が分かった。以前は硫黄の交易で潤っていたが今では他の所に需要を取られてしまい衰退したこと。あとヘラヴィーサに行く時にこの集落の出は口にはいけならしい。つまり迫害されているということだ。聖寮のやり方に馴染めないもの、逃げて来たもの、罪を犯した者、そして自ら望んで来た者。この集落はそれで構成されている。所謂追放、もつとも聖寮は理というだろうが。小を捨て大を救う、だがそれでは何処まで行っても理屈でしかない。だが情だけで行動しても駄目。難しいことだ。

一通り調べ、集落を出ようとした時一人の老人に呼び止められる

「・・・待て。孫が世話になったようだな」

「孫？ああさっきの女の子ですね」

「脅してたんじゃないわよ」

「分かっている。お前たちは、旅を続けるんだろう?」

「これを持ってけ。ささやかな礼だ」

老人は包みとカードをケンに渡す。

「あ、どうも」

「気をつけてな」

↳

カードには料理のレシピ。包みには食材が入っていた。ベルベツトが料理をし、それを食す。美味かった、が作った本人は苦い顔をしている。大体予想はつくが

「よし、腹ごしらえはできたな!」

「・・・」

「ひとつ聞いていいか?」

ロクロウは何か気になったのかベルベツトに質問する

「好きにきなさい。嫌なことは答えないけど」

「さっきの話だな。もしかして、お前、味を感じないのか?」

「・・・ちゃんとわかるわよ。血の味だけわね」

「それ以外は?」

「なにも。満腹感も感じないみたい」

「みたいって、初めて食ったように」

「でも・・・あいつがあたしに変な技かけてきてからしばらくの間、味がわかるようになった。満腹感もでてくる。時間がたてばまたわからなくなるけど。」

「あいつに会うまではなにを食ってたんだ?」

「わかるでしょ。あの監獄にいたなら」

ベルベツトの眼が鋭くなる

「・・・すまん」

「気にしなくていいわ。あたしがそういう業魔ってだけだから。レシピがあれば、料理自体は作れる」

「そうか」

「・・・戦う力は維持できる。それで十分よ」

↳

「にしてもあいつの技は変わってるよな」

ロクロウはケンの後姿を見て言う。ケンは辺りを珍しそうに見ながら歩いている

「・・・そうね、確かにあいつは変わってるわね・・・」

「あいつは自分から攻めることもないし反撃という反撃もしない。避けたり弾いたりするぐらいだな。あの時は不意打ち紛いな事をしたからな。少なくとも正面からじゃ斬れないな」

「斬ることしか考えてないのね」

「そういう業魔なのさ」

雪道を進み北の洞窟、ハドロウ沼窟に入る。中には虫の様な敵がいた。

「ダイルって業魔は奥かしら」

「だろうな、張り切って行くか」

「結局力づくですよね・・・」

進む途中で敵がこちらの存在に気付き襲ってくるムカデの様な敵と蛸みたいなやつだ。数は5

「行くわよ！」

「応！」

ベルベットが蹴りをムカデの様な敵の頭部に放つ。蹴りは頭部にあたり数瞬よろける。その隙にロクロウが腹部を切り裂く、まずは「おっと」

ロクロウが敵を一体倒した瞬間もう一体が襲い掛かる。ロクロウはすぐに反応、横に動いて躲しその直後地面を蹴り飛びかかる。真横に切り払い両断する。ロクロウは次の獲物に目を付け走り寄り牙を向いて噛み付こうとした敵の懐に潜り込み二本の短刀を突き立てる。

「せいっー」

敵がもがいている間にベルベットが跳躍し頭に踵落としを叩き込む

「やああっー」

バク転し距離を取る。頭を蹴られた敵は崩れ落ちる。これで2

「やるわ、ね！」

「そういうお前も、な！」

お互いの顔をみる、次の瞬間お互いの獲物を突き立てる。二人は交差する様にすれ違う、獲物の先には敵がおり二人同時に攻撃したのだ。ベルベットの刺突刃は顎を貫き、ロクロウの短刀は腹を切り裂く。4

「あと一つ・・・」

ベルベットは敵を探す。最後の敵はケンに襲いかかっていたその敵は蝟の様な物でその足を鞭の様に振るう。ケンはそれを紙一重で交わし

続ける。何回か躲し攻撃が緩んだ所で足を一本掴みそのまま引つ張り投げ飛ばす。敵は地面にぶつかり転がる。

「はあっ！」

ベルベットはその隙を突き刺突刃を頭に突き刺す。蝟は暫く暴れてやがて動かなくなった。

「これで全部だな」

「奥にもまだいるでしょうね」

「さっさと行くわよ」

3人は一旦集まり奥に進む内、なんとも言えない匂いが漂ってきた。

「う・・・なんの臭い？」

「・・・油か？」

「ああ・・・嫌だな、これ。気分が悪くなる」

目の前の穴に油が溜まっている。流石に越えるのは勘弁なので別の道を探す。あったにはあったが落石だろうか、大きな岩が道を塞いでいる。

「・・・この岩、壊せそうね」

よく見るとヒビが入っている

「まさか力づくで壊すんですか？」

「お前、強引だな・・・」

ケンとロクロウはまさかと思いつつもベルベットに言う

「無茶でもないでしょ。お互い業魔なんだから」

「それもそうか」

あつさりと受け入れるロクロウ。以前似た様な事でもしたのだから
うか

ケンは間を置いてベルベットに言う

「あの一、自分業魔じゃな・・・」

「あんたも似た様なもんでしょ」

「そうだな。どっちかという超人だな、なんせ業魔と力比べしても
余裕でねじ伏せるくらいだからな」

「ええ・・・」

そんな事を言いつつベルベットが回し蹴りで岩を蹴り飛ばす

「行くわよ」

「・・・ほんと強引だな・・・」

「もう自分ら要らなくないですか？」

ベルベットが一足先に進む、他の二人は台詞を言いながら後について行く

敵を倒しつつ進むと先ほどの油が湧いている穴に出くわす

「臭いの正体はタールか。気をつけろ、はまると底なしだぞ」

3人は点々とある岩場に飛び乗りながら向こう側に渡る。その先
にも同じ様な箇所があり同様に飛び移る

「・・・飛ぶわよ」

「落ちるなよ」

沼窟を進む、ここには虫やら蛸やら蝙蝠など生態系がめちやくちや
だが二人はそんなの御構い無しに叩き潰し斬り伏せて行く

「剣捌きはさすがね」

「いや、まだまだだ。この程度じゃー」

ロクロウは拳を握りしめながら話す

「あんたって、どういう業魔なの？」

”夜叉”だよ。戦いの鬼神だ」

「戦いの鬼神・・・どうりで」

(やり合う時眼がギラついているもんな)

ベルベットが納得し、ケンは心の中で呟く

「ベルベットこそ、なんなんだ？ずいぶん変わった業魔みたいだが」

ロクロウが逆に聞いてくる

”喰魔”よ」

「喰魔？聞いたことがないが、どういう業魔なんだ？」

「敵を喰って力に変える化け物。それ以外は知らない」

ロクロウの問いに対して、短く答える

「ふうむ・・・女で、敵を喰らうというところ」

(あ、なんか嫌な予感がする)

”オニババ”の一種かな？」

「はあ？」

ロクロウがオニババと言った瞬間ベルベットの目つきが鋭くなる

「今の顔・・・ちよつとソレっぽかったぞ・・・」

「ロクロウさん、流石に不味いですよ・・・」

「・・・すまん」

ロクロウは少ししよげながら謝る、だいぶ奥まで来たところでロク

ロウが話し始める

「お前の剣技、どこの流派だ？誰に教わった？」

「我流よ」

「それにしても太刀筋がいいし、基本もきちんとしてる。それなのに、

いきなり蹴り技を使ったりするのが面白い」

ロクロウはベルベットの戦い方に興味津々だ

「だから、我流って言うてるでしょ。あんたこそ、なんなのその二刀流

？”命の太刀”とやらを抜きもしないで」

ベルベットは面倒そうに答えつつ逆に聞く。ベルベット自身もロ

クロウの背中の太刀を気になっていたのだろう

「抜かないからいいのさ」

ロクロウはただそれだけ言う

「・・・は？それも、ランゲツ家の教えってヤツ？」

「応、『借りたものは返す』ーすべてはその為にある」

「わけわからない・・・」

二人はそのまま奥に進む、ケンもそれに続きながらロクロウの言葉を考える

(借りたものは返す・・・か、いろいろ訳ありみたいだな)

「お前、基本味がしないって言ってたが、匂いはどうなんだ？」

「なんで？」

「味覚つてのは嗅覚とセットみたいなもんだ。鼻をつまんで食うと、味がわからなくなるだろ」

「・・・匂いは、人間だったときよりも敏感かもね。あんたは違うの？」

「俺も五感は鋭敏になってる。しかし、匂いはするのに味はしない、か。ううむ・・・お前は、自分のことを『喰魔』と言っていたが、ずいぶん寂しい食生活だな」

「そういうあんたは、何を食べてるのよ？」

「主に”心水”だな」

ロクロウは意気揚々と答える。心水とは所謂酒の事だ

「飲み物じゃない、寂しいのはあんたもでしょ」

ベルベツトは呆れる。食べ物じゃなくて飲み物を答えられればこうもなる

「ばかを言うな！心水ほど奥深いものはないぞ。素材も製法も千差万別、甘いも辛いも融通無碍、舌の上に広がる熟成された味わい。鼻をくすぐる芳醇な香り。お子様にはわからん世界さ」

頼んでもいないのに語り出したロクロウ。そこが彼の個性というべきか

「あつそ」

興味ないと言わんばかりに返すベルベツト

「業魔になって以来、回るのが早くなったのがたまにキズだがな」

「業魔の味覚って・・・」

「なあケン、お前も心水の奥深さよく分かるだろ？ベルベツトはお

子様だがお前なら分かるはずさ、そうだろ?」

「・・・全く」

「あ、すいません。自分未成年なんで分かんないです」

「・・・は?」

ロクロウの力説にケンはそう答えるしかない。事実だから

「・・・お前、歳いくつだ?」

「17です」

「・・・は?」

「17です」

、

その後3人はなんとも言えない雰囲気の中最深部についた

(・・・あいつ、あんなガタイで私より二つ下ってなんなのよ)

(せっかく飲み仲間が増えたと思っただがな)

そんな事を考えながらも辺りを見回す、タールが池のように溜まっている。そこにぽつんと白い塊が見える。よく見ると対魔士の遺体が油に半分沈んでいる

「対魔士・・・」

「うっかり落ちたのか?」

「どうなんでしょ」

その時三人の後ろから足音がした。振り向くと剣と盾を持った業魔が唸り声をあげて襲い掛かってきた

「こいつに落とされたか!」

ベルベットが業魔に向けて刺突刃で斬りかかる業魔はそれを盾で受け、剣で横薙ぎに振るう

「オラア!」

「っと」

ベルベットはそれを難なく避ける。業魔はそのまま接近し斬りかかるが横からロクロウの短刀が伸び止める

「こいつが例の殺人犯だな」

「ヘラヴィーサのクソ野郎どもが!俺を狩りに来やがったか!」

「そのようね」

ロクロウが剣を弾き業魔に蹴り飛ばす

「ぐわあ！」

「ふんっ！」

「ぐわっ！」

そこに更にベルベットの回し蹴りが頭部を捉える。業魔は痛がりながらも武器を振る

「ここで死んでたまるか……！」

「……でいつ！」

「あだっ!？」

だが武器の扱いがぎこちなくとても対魔士をヤレるとは思えない。

「ほらよ！」

「グエエ！」

ロクロウからの攻撃でほぼ一方的にやられる業魔。顔が膨れ上がっている

「うろう……チクシヨー!!」

痣だらけの顔を晒しながら今度はケンに襲い掛かる

「ウラァ!!」

「……」

真上から振り下ろされる剣を白刃どりで止める

「んなあ!?!？」

「もらった！」

「覚悟！」

業魔が驚愕している隙にベルベットとロクロウが両サイドか顔に蹴りと拳を見舞う

「グエエ……」

業魔は武器を落とし両手で顔を庇いながら膝をつく。業魔はモゴモゴしながら喋る

「まだ死ねねえ……ヤツらに復讐するまでは……！」

「復讐?！」

ベルベットが業魔の言葉に攻撃を止める

「俺を殺そうとしやがった組合のクソどもにだ！密輸の責任を俺に押

し付けやがって!」

「密輸は組合がやってたってこと?」

「そうだ!俺みたいな不良船乗りがひとりで仕切れるわけないだろうが!」

業魔が怒鳴るように反論する

「そりゃあ、手伝って美味しい思いもしたけどよ・・・」

「確かに、倉庫の抜け穴なんて、個人でつくれるものじゃないよな」

ロクロウがその言い分にある程度納得する

「調子に乗って規模ををでかくしすぎたんだ。聖寮にバレるのも時間の問題だった」

『死人に口なし』。お前を殺して罪を最小にするつもりが、計算が狂ったというわけか」

「どうやって復讐するつもりだったの?」

「ヘラヴィーサに殴り込みをかけて船員どもをぶつ殺す」

「幾ら何でも無茶ですよ」

「自殺行為ね。何人对魔士がいると思うの」

「どうせ逃げても狩られる!奴らに一泡吹かせられればそれでいい!」

一矢報いたいのだろう言葉からそう伝わる

「・・・はあ」

ベルベットがため息をつく

「・・・と思ってたが・・・それも叶わねえか」

諦めて後ろを向く。その時ベルベットが刺突刃を構える。

(ベルベットさん何かするな・・・まあ殺すことはしないな)

ケンがそう心の中で考えるなか。ベルベットが彼の尻尾を切り落とす

「ぎゃっ!」

痛みのあまり転げ回る業魔を尻目にベルベットは尻尾を拾い上げる

「尻尾これを届けて、あんたは死んだと報告する。そうすれば、対魔士たちも警戒を解くはず」

「どうしてだ・・・？」

切り口を抑えながら彼はベルベットに聞く狩られると思っていたが違った。その疑問もあるだろう

「こっちの都合よ。ひとつは、船を修理するため。で、あたしが出発した後、騒動を起こして追っ手を足止めしてくれば好都合」

「・・・そういうことなら、ご期待に応えるぜ」

そう答え立ち上がる

く

「ところでお前ら、どうやって俺を見つけた？」

「偶然よ。勘が当たっただけ」

「・・・俺の生まれたのは、何も無い陰気な村でな。そこが大嫌い。船乗りになつたんだ。だが、このザマだ。生まれ変わったら、俺は二度と故郷を捨てねえよ」

「・・・そう」

そう答え、出口に向かい歩き出すベルベットとロクロウ。ダイヤルはその後ろ姿を見る

「あの・・・」

「ん？どうしたガタイのいいニイちゃん」

ケンが近づいてくる

「すいません。かなり手酷くやってしまつて・・・」

「なに、気にするな。これから俺は散るんだからな」

「お詫びといつてはなんです・・・」

ケンは右手を光らせダイヤルに向ける。手から優しい光が放たれる、コスモスのコスモフォースだ。光が治るとダイヤルの膨れ上がっていた顔が元に戻っていた

「こりやあ一体？」

「すいません、尻尾は無理でした。できればちゃんと治したかったのですが。」

「・・・いやこれだけでも感謝するぜ。ありがとな」

「いえ、ではこれで・・・」

ケンは走ってベルベット達の後を追った

3人は出口に向かう

「いいんだな。これで」

「こっちに追っ手がかかるのも時間の問題よ。同情してる余裕はないわ」

(同情・・・ね)

それからしばらく経ち3人はヘラヴィーサへと戻った。そのまま組合へ向かう組合長に尻尾を見せる

「これはダイルの尻尾!? あんた・・・あいつを殺ったのか!？」

「タールの沼にはまって死んでるのを見つけたの。これしか持ち帰れなかったわ」

「本当・・・か?」

組合長が疑う

「疑うのは勝手だけど、嘘でも業魔の体を持つてこれる奴がいる?」

「・・・確かに」

「じゃあ、船の修理をお願い」

ベルベットの言葉に組合長が口を挟む

「そうはいかん。テレサ様から正式な許可が下りないとー」

その言葉にベルベットの声が低くなる

「急いでって言ってるの。密輸の真犯人がバレたら、営業停止じゃ済まないでしょ」

「お前・・・!」

組合長の顔が歪む

「取り引きよ。浜辺の船を直してくれば、黙って出て行く」

「・・・わかった。船大工を手配する。浜辺で落ち合おう」

取り引きを終えひと段落した後

「おい、ベルベット。いい機会だから武器屋で装備を強化していこうぜ」

「装備を強化?」

「知らないのか?」

「・・・ええ。故郷では、やってなかったから」

「なら、なおさら丁度いい！やってこうぜ」

ロクロウはそう言い武具屋に向かつて歩き出す

「ちよ・・・あんたって、結構強引よね!？」

「応！押し弱い男はモテないからな♪」

ロクロウの発言に呆れながらベルベットとケンも武具屋に足を運ぶ

ロクロウとベルベットが装備品を整えている中、武器を使わないケンは適当に武器や防具を見る。前の世界ではこういう類はまず無かったからだ、珍しいという気持ちもある。使わないだけで鍛冶関連の知識ややり方は修行中に教わったが。その時武具屋の店主から声をかけられる。

「おお、あんちゃん。ここに居たのかい」

「え？はい、なんでしよう」

「実はあんたにこれを渡してくれて頼まれてね。体がでかくて大きな背囊背負ってる男が来たらこれをつてな。」

店主から布で包まれた包みと手紙を手渡される

「いまここで見ても？」

「ああ大丈夫だ」

ケンは布を取り中身を見る。それは短剣だった。柄頭と鍔の縁は水色の宝石、所謂藍玉がはめ込まれほのかに光っている。極め付けは柄の真ん中に丸々一つの綺麗にカットされた藍玉がはめ込まれていた。

「こりやすげえ・・・こんなもの見たことないぞ・・・」

「これは・・・」

鞘から刃を抜くと40センチほどの細身の両刃、真ん中にはこれも藍玉の装飾が施されている。

「すごいな・・・世の中これほどの業物があるなんてな、これまた勉強になった。見せてくれてありがとな確かに渡したぞ」

「はい、ありがとうございます」

店主か店に戻るのを確認し、一緒に渡された手紙を開く

「やあ、これを読んでるつてことは贈り物は無事届いたという事だな。どうだい？その短剣、君のいた世界にあるとあるゲームを見て部下に作らせた物だ。かなり頑丈に出来てるから壊れることはない、勿論元の物と同じ使い方もできるから、試して見るといい。君が武器を使わないのはわかってる。だが御守り程度に持っているぐらいならいいだろ？私の方も少しかかる。だから会えるのはまだ先になる。旅の方も気をつけてな。それじゃ。」

(やつぱりルシフェルさんからか・・・御守りか・・・)

ケンは手紙を仕舞い短剣を鞘に戻して腰のベルトに取り付ける。
丁度ベルベット達の方も終わったようだ

「よし！これで取り敢えずいいだろう。だいたいわかったか？」

「・・・一応。けど、なんか面倒ね」

「一見な。だが、何回かやってコツを覚えるとハマるぞ。この先どんなやつに出くわすかわからん。戦うなら強化は必須だぞ押し弱い男がモテないように、戦いの準備を怠るやつに、勝利はないからな」
ロクロウが力説する

「・・・もつともね。これで強くなれるなら、使いこなしてみせる。あいつに迫り着くために」

ベルベットが胸に手を当て呟く

「お、ケン。その腰の剣はどうした？お前もとうとう武器を使う気になったか！」

「これはある人からの贈り物ですよ。使う気は無いですが御守り程度にと」

ケンは短剣を取り出し二人に見せるロクロウがマジマジと見る

「おお、これは凄いな剣自体の出来といい装飾といい非の打ち所がない。これほどの業物は見た事がない。まるでこの世の物じゃないくらいにな。お前の知り合いつて一体どんな奴なんだ？会ってみたいものだな」

「はは・・・」

「その刃の部分になんか書いてあるわね。見た事ない文字ね」

ベルベットが文字の存在に気付く

「確かにな。なんて読むんだ？」

「えっと・・・『旅の無事を祈る』だそうです」

「読めるのか？」

「はい、考古学も少しかじってますので」

「ほう」

「そろそろ船に戻りましょ」

「応！」

「はい」

ベルベットの声に二人は答え、組合が修理してるであろう浜辺に向かって歩き出す

第7話 終わり

第8話

装備を新調したベルベットとロクロウ。ルシフェルからの贈り物を受け取ったケン是一同組合の待つ浜辺に向かう。いつも通り隠し戸から裏道へ出る

「船の修理はなんとかかなりそうね」

「それで問題が解決するわけじゃない。船をまともに操れなきゃ、また難破するだけだぞ」

「さすがに難破は勘弁です・・・」

「でも航海士なんて探してるヒマはないし、かといって定期船は許可なしじゃ乗れないわ」

「俺たちだけで、なんとかかするしかないってことか。だが、俺の操船の腕は、前の通りだぞ?」

船が修理されても今のままじゃまた事故が起こる。だが航海士を探すにも時間がかかる定期船も聖寮に抑えられているため手段がかなり限られる。

「無理強いはいしないわ。独りだってやるだけよ」

「どっかにフリーの航海士はいないもんかなあ」

「そんな都合良かったら苦労はしませんよ・・・」

浜辺に続く道を進みながらロクロウがベルベットに話しかける

「なあ、ベルベット。お前が殺すと業魔は人間に戻るのか?」

「・・・は?どういうこと」

「海岸で襲ってきた業魔のことだよ。死んだら人間に戻っただろ」

「今まで俺が斬った業魔は、死んでも業魔のままだったから、ちよっと気になっただけ」

確かに海岸でケンがベルベットに飛び掛られる前に業魔を喰らっていた。その時人間に戻っていた。

(業魔は死んでも業魔のまま・・・?でも、あたしが殺したニコヤ村の人たちはー)

「業魔の方にアタリハズレがあるのかな?」

「くだらない。死体がどうなろうが意味なんてないでしょう」

ロクロウのなんともな推理にベルベツトは呆れを覚えながら答える

「・・・だな。死んだあとにアタリが出ても仕方ない」

「そう。重要なのは、喰らった業魔があたしの力になること・・・それだけよ」

（・・・ベルベツトさんの業魔の力は確かに特殊・・・決定的な違いは業魔を喰らう、いや穢れと力を吸っていること。だが何か引つかかる・・・まるで集めさせているような感じ、何か重大な事に思える）

その後組合員と合流する。だが組合員は深刻な表情を浮かべていた。ケンには大体予想がついた

「だめだな、この船は。」竜骨 がいつちまつてる。新しい船をつくった方が早いぜ」

「やつぱり・・・」

「竜骨？」

ベルベツトは初めて聞く言葉に復唱する

「人と言えば、背骨」が折れた状態つことだな」

ロクロウがわかりやすく説明する

「・・・大体、なんでこんなところで座礁した？普通は、ありえないぞ」

「直せないことはわかった。戻っていいわ」

「どうする？街で新しく手配させるか？」

「それしかないか。その時間があればいいけど・・・」

「ですが、あまり大きな動きを見せれば聖寮に怪しまれますよ？」

「うーん、どうしたもんかな・・・」

「そうね・・・」

ヘラヴィーサの中にある教会。聖堂の祭壇の前で跪き祈りを捧げる女性が一人、一級対魔士テレサである

「偉大なる聖主カノヌシに願い奉る。彼の物に幸運と栄光を」

テレサが祈りを捧げる中、一人の人物が近づいてくる

「我が身は、そのための贄なり。礎なり……」

「姉上」

その言葉を聞いたテレサはすぐ様後ろを振り向く

「まあ、オスカー！突然、どうしたのです？」

テレサは嬉しそうな表情を見せるが、直ぐに驚愕に変わる

「その傷は!?!なにがあったのですっ!!」

オスカーの顔、正確には左眼全体を包帯で覆った姿に声を荒げながら駆け寄る

「業魔に不覚を取りました。その件で本部に召還される途中に寄ったのです」

「ああ、こんな……かわいそうに……」

テレサはオスカーの顔に手を添える。彼女にとってオスカーは大切な存在だとわかる

「痛みますが、まだ戦えます。この傷は、我が未熟さの戒めとしましう」

オスカーは首を振りながら話す。慢心故の負傷、それを改める辺りオスカーの向上心は並ではない。テレサは一步下がる

「さぞ卑劣な相手だったのでしょうか？」

「いえ、左手でこちらの力を喰らい、撃ち返す力を持った業魔です。見た目は、燃えるような瞳をした黒髪の女性なのですが……後もう一人、こちらにも黒髪で短髪、背がかなり高い男性。その男性はドラゴンと化した聖隷を素手で叩き伏せる程の者です。私では不意を突いての一太刀が精一杯でした。」

オスカーの言葉にテレサは目を見開く。脳裏に横を向くベルベツトと石段に座るマギルウ、そして頭を下げるケンの姿が浮かぶ。シニールである

「油断すれば一等でも危うい相手です。どうかお気をつけください」

(あいつらか!!)

オスカーの忠告を聞いているのかいないのか。テレサは歯を食いしばる

「姉上？」

オスカーが心配して声を掛ける。テレサはハッと気付く

「わかりました」

そう言うのとテレサはオスカーの左手を取る

「大丈夫。この程度の失策、なにほどのことでもありませんよ」

テレサはオスカーに励ましの言葉を掛ける

「実は、姉上に励ましてもらいたくて寄ったのです」

テレサは微笑みを浮かべオスカーを見る。家族故に分かるのだらう

「着けてくれているのですね、その耳飾り」

「もちろんです。あなたがくれたものですから」

テレサは左耳の耳飾りに触る

「思った通りだ。姉上によく似合う」

テレサは恥ずかしそうな仕草をする。

「では、これでおいとまします」

オスカーは聖寮式の敬礼をテレサにし聖堂を出る。テレサはその後ろ姿を見送った。何処と無く寂しそうな表情を浮かべるが、部下の声で一気に険しい表情に変わる

「テレサ様。密航者を捕らえました」

部下の対魔士が密航者を連れてくる。派手な服装と癖のある前髪。そうマギルウだ

「濡れ衣じゃよく！許可を取らずに乗っただけじゃの〜」

マギルウは言い訳にもならない言い訳を言う。人はそれを密航と言う。そんな彼女にテレサは近づき頬を叩く。辺りに乾いた音が響く

「女業魔の仲間ですね。あの者はどこです」

「ふん、このマギルウ様に拷問は無意味じゃぞ」

マギルウはいつになく真剣に喋り、鋭い眼つきでテレサを見る。辺りの空気が張り詰める、マギルウがニヤリと笑い

「なんでもペラリと喋るからの〜♪」

確かに無意味だった

丁度その頃三人は一度ヘラヴィーサに戻っていたが入り口近くで
撤収した筈の組合がいた

「聖寮から告知があった。業魔を街に呼び込もうとした魔女の公開処
刑を行うそうだ」

「・・・へえ、そんな悪い奴がいるのね」

ベルベツトは心辺りはあるが適当に流す

「街には近づかない方がいい。テレサ様がよく使われる手だ。悪党の
仲間を誘き出すためにな」

「悪党はお互い様でしょ」

ベルベツトが正論を吐く

「だから忠告した。テレサ様は一等対魔士のトップクラスだ。悪いこ
とは言わん。今のうちに逃げろ」

組合長はそれだけ言うのと部下を連れ街に帰っていった

「魔女って・・・マギルウだよな?」

「あの人以外に誰がいます?」

ロクロウの言葉にケンが答える。それしかないのだが

「聖寮に気付かれたわね。抜け道も見つかったと思っただ方がいい」

「船の手配も、もう無理だな」

「どうします?」

「・・・手配出来ないなら、奪えばいい」

「奪うって・・・ヘラヴィーサの船をか!?こっちは三人だぞ」

ベルベツトの言葉にロクロウが驚愕する。無理もない

「まだ協力できる奴がいる」

ベルベツトが言う。それにロクロウが気付く

「ダイルか」

「あいつは航海士だって言ってた。仲間ができれば一石二鳥よ」

「そうかもしれないが・・・マギルウはどうする?」

ロクロウはマギルウを心配してるのかしてないのか、マギルウの事
を話す

「・・・それは聖寮次第ね。ダイルの洞窟に行くわよ」

「すまん、マギルウ・・・成仏しろよ」

「ちよつと早すぎやしません？」

「

　　ダイルがいる洞窟に再び訪れ、奥に向かう

「お前つて、徹底してるよなあ」

「なにが？」

　　ロクロウ歩きながらベルベットに話しかける。道中の敵を倒しながらだが

「行動がだよ。ダイルを利用し、商戦組合を脅し、マギルウを見捨て
る・・・自覚してるだろ？」

「別に見捨ててない。気にしてないだけよ」

「・・・やっぱり徹底してるな」

「よくわからないヤツだけど、マギルウは、そう簡単には殺せないわ
よ」

（それもそうか）

　　ベルベットの言葉にケンは一瞬は監獄島の事を思い出す。初めて会った
時、ベルベットの刃を簡単に避けたからだ

「第一、あいつは、こっちの手の内を全部聖察にバラしてるはず」

「マギルウさん鋭いとこありますし」

「・・・それはそうかもな」

「だから、あいつも知らない手札が必要なのよ。例えば”死んだはず
の業魔”・・・とかね」

「・・・なるほどね。」

　　ベルベットが意味深に言う、ケンはなんのことも理解した

「

　　あれからベルベットとロクロウは敵を切り捨てながら進むケンが
出る幕もないくらいに。粗方片付き、ロクロウは自分の獲物を見る

「さて、刃をもうひと研ぎして、仕上げておくか」

　　先ほどの戦闘で切れ味が落ちたのだろう。手早く研ぎ始める

「・・・」

　　ベルベットは黙って見ている

「ブレードの手入れはしてるのか？なんなら一緒に研いでやるぞ？」

ロクロウが気づき一緒に研ぐのを提案する

「いい・・・命綱を気安く他人に預けるなど教わったから」

「応、なかなかいい師匠に巡り合っただな」

ベルベツトはロクロウの言葉に苦い顔を浮かべる

「俺が研ぐ必要はないが、手入れは小まめにしておけよ。教えるまでもないだろうが、研いだ後はクローブ油を塗って、羊毛で拭くようにな」

「・・・それも、教わったわ」

(弟を殺した、あの男に・・・)

、

「なんで戻ってきやがった？」

「事情が変わった。あんたの襲撃に手を貸すわ」

暫くしてダイルと合流し、襲撃に参加する皆を伝える

「ふん、ずいぶん勝手言うじゃねえか」

「仕方ないでしょ。業魔なんだから」

お互いに皮肉を言う。しばらくしてダイルが笑う

「くははははっ！ちげえねえ！業魔になって初めて笑ったぜ。だが、いいのか？自殺行為だぞ」

「そうならない策戦がある。今。対魔士たちは、人質をとってあたしを街に誘い込もうとしている」

「なら、倉庫に通じる抜け道から攻め込めばー」

ダイルが倉庫の隠し戸からの奇襲を提案する

「だめよ。多分、敵はそこで待ち伏せている。だから、逆を突いて正面から切り込む」

「そんなのが策か!？」

ダイルが驚きの声を上げる。それもそうだ、はたから見ればこれでは単なる力押しだ

「正面は囿よ。敵を正面に集めたところで別働隊が抜け道から港を襲い、船を確保。正面から斬り抜けた隊と合流して、船で脱出する。あなたには操船を頼みたい」

策戦の説明を聞き、ダイルが質問する

「・・・ひとつ聞かせろ。誰が正面から攻める？」

「もちろん、あたしが」

「いいだろう。決行は？」

「明日。それまで一休みさせてもらえる？」

「お好きなように。タールのベッドの寝心地は最高だぜ」

ダイルがジョークを飛ばしながら承諾する。奇襲は明日、それまでここで待機することになる

↳

「お姉ちゃん・・・お姉ちゃん」

ベルベットの耳に懐かしい声が聞こえる。眼を開けるとそこには実の弟であるライフィセットが心配そうに自分の体を揺すっていた

「・・・ライフィ？」

ベルベットは朦朧としながらライフィセットの名を言う。ベッドで寝ていたようだ

「うなされてたよ。怖い夢でも見た？」

ベルベットはすぐ様起き上がり弟の顔を見る。あの時と変わらな
い、笑みがこぼれすかさず抱きしめる

「うん・・・すごく怖い夢だった」

ベルベットは弟がここにいると言う実感を確かめる。アレは悪い
夢、幻だったと

「ねえ、離してよ。僕、行かないやいけないんだ」

「行くって？」

ライフィセットがベルベットを引き剥がす。ベルベットには何の
ことか分からないが次の言葉でその意味がわかった

「鎮めの祠。アーサー義兄さんが来たって」

「!!」

弟の言葉にベルベットの顔色が変わる。弟を殺され、左腕を失い、
全てを失ったあの場所。そこに弟が行くと。固まっている内にライ
フィセットが歩いていく

「行っちゃダメ！ライフィセット！」

ベルベットが止めようと走り出すが両手両足が突然火に包まれ身動きが取れなくなる

「あいつはツール・アルトリウスは、あんたをツ!!」

必死に叫ぶ。だがライファイセツトはそのまま歩いて行く姿を最後に視界が暗転する

「!?」

ベルベットが眼を覚ます

「大丈夫か? ひどくうなされてたぞ」

隣にいたロクロウが立膝をつきながら心配そうに言う

「平気。何でもないわ」

ベルベットはそうぼやき前を見る、そこには何かを繰り返そうと構えを繰り返しているケンとそれを見守るダイルがいた

「あいつなにしてるの?」

「ああ。技の訓練だそうだ、一つでも使えるようにならないととか言ってたな」

ケンはダイルに何かを話す、ダイルは何故か驚いている。ケンが頼み込みダイルは渋々頷く。二人はタールが溜まっている方へ歩いて行った

「・・・今度はなにするのかしら?」

「さあな? 火遊びでもするんじゃないか?」

ロクロウが冗談交じりに言った瞬間タールの溜まりから火が上がる

「ちよつと!! あんたがそんなこと言うから!!」

「まさか本気でやるとは!!」

二人が慌てているのを余所にケンは構え両手にエネルギーを集中させる

「おいおいあんちゃん、大丈夫か? かなり火がデカいぞ? ちゃんと消せるのか?」

「今ならいけます。では!」

ケンは両手を斜め上に突き出しそこから青色の光線が放たれる。

その光線は火の真上に到達すると同時に破裂、光が広がると同時に一瞬で火が消えた

「よし、これで使える技が一つ増えた」

「おうおうあんちゃんやるじゃねえか。まさかあんなどでかい火をあつという間に消しちゃうなんてな！他にもあるのか？」

「ええ、あるにはあるんですが。まだ満足に使えなくて」

「ほーうそうか」

ケンとダイルが話し込む姿を見ながらロクロウが喋る

「・・・あいつの技、変わってるな」

「そうね。あたしもほとんど知らないけど」

「だな」

「・・・」

「・・・」

無言になる中最初にベルベットが口を開く

「・・・つきあわなくても恨まないわよ。別に」

「そうはいかん。お前が死んだら恩が返せない」

きつぱり返すロクロウ、ダイルはケンと話し終え出口に向かっていった

「変わってるわね」

「そうかな。だが、俺は”こう”なんだ」

親指を自分の胸な向けるロクロウ。こういう生き方なのだろう

↳

「ベルベット・・・アルトリウスって誰だ？」

「・・・仇よ。弟の」

ベルベットが怒りと悲しみが混じり合った表情を見せた。ロクロウは察したのかそれ以上なにも言わなかった

「準備はすんだ。ダイルは出口で待ってるはずだ」

「・・・出発しましょう」

↳

「よく休めたか？」

「おかげでね。”アレ”の準備は？」

「ぼつちりだ。名前、まだ聞いてなかったな」

「ベルベットよ」

ベルベットはダイルに感謝する。ダイルは準備ができたことと、名前を聞いてくる

「生き延びたら一緒に出航しようぜ、ベルベット。死んだら墓に名を刻んでやる」

「口の悪いやつ」

「はっはっは！そりや元からだ！」

ダイルのジョークにベルベットがそのまま返す

「ケン、あんたはダイルと一緒に行動して、念のためにね」

「大丈夫ですか？」

「あくまであたしたちは囷。機を見て港に向かうから」

「じゃあ、行くか。ヘラヴィーサを襲撃に！」

ロクロウの声を合図に4人は洞窟を出る

く

洞窟を出てヘラヴィーサに向かう。ダイルとケンは二人で打ち合わせをしている、ついでにケンはリュックをダイルに預けた。今はウエストポーチだけ

「そういえば、あの羅針盤を持って逃げた少年、どこ行っちゃったんだろうな？」

ロクロウがあの子の事を思い出す

「たぶんヘラヴィーサでしょ。聖隷は対魔士に使役されてるんだから」

「となると、襲撃の時に出くわすかもな」

ロクロウの心配をよそに鼻で笑うベルベット。少なからず聖隷、対魔士に使役されている以上敵であることには変わらない

「治療してもらった恩があるから斬りたくないともいうの？」

「否、立ちはだかるなら斬るだけだ。だた・・・」

そっけなく斬り捨てると言い放つロクロウ、夜叉故かそこに関してはなんの情けもないようだ。だが最後に言いよどんでベルベットが聞き返す

「ただ・・・？」

「礼を言うのを忘れないようにしなきゃな」

「・・・そうね」

「お前は心が痛まないのか？」

「・・・別に。聖隷はあまり美味しくないって思っただけよ」

シアリーズが残した指輪を見る「そういう」意味を含めて

「ほう、聖隷は不味いのか。ひとつ賢くなった」

ヘラヴィーサの街へと続く門。そこに二等対魔士二人が今も警備にあたっている。

「それじゃここから別れましょう」

「しくじらないですよ」

「任せときな、行こうぜあんちゃん」

ダイルとケンは抜け道の方へ向かう。ベルベット、ロクロウは文字どおり真正面から攻める。ベルベットが先頭に立ち対魔士の目の前まで行く

「お前たちは!？」

対魔士が気づき警戒する

「そつちの目論見通り、来てやったつわよ！」

ベルベットとロクロウが走り出しそれぞれ別の対魔士に向かう槍を持った対魔士が盾を構えながら槍を突き出す

「ふっ!!」

ベルベットが縫うようにぎりぎりで躲し対魔士の懐に飛び込む。対魔士は反応できずに隙ができる、それを見逃さず腹部に蹴りを見舞う

「げふっ!？」

対魔士が腹部の激痛で崩れ落ち腹を抑え嗚咽する

「はあっ!!」

「がっ!!」

追い打ちと言わんばかりに背中に踵落としをし完全に黙らせる。

「貴様あー！」

「おつとー！危ない危ない」

剣をもった対魔士が仲間を倒され激昂しながらロクロウに斬りかかる。ロクロウはそれをたやすく躲し短刀で捌きながら徐々に追い詰める

「そらー！」

「うわあ!!」

いつの間にか攻守が逆転してロクロウの短刀が対魔士を斬る。どうすることもできず対魔士は前のめりにそのまま倒れる、警備を片付け二人はそのまま門をくぐる。街には住民の姿はない

「街人を避難させてる。やっぱり罠か」

「そういうことなら望むところよ」

く

街の中央まで進むと商船組合の隣にある教会の前に対魔士たちが集まっている。待ち伏せだ、だが二人はお構いなしに教会の前まで近づく。その間に対魔士たちが二人を囲うように移動する。ロクロウはそんな彼らを見てどこか楽しそうだ。教会の門の前に聖隷の少年が二人、そして一等対魔士のテレサ両手を後ろに縛られたマギルウがいた

「おお、まさか助けにきてくれるとはく！お主、意外にいい業魔だったんじゃない♪」

「あなたが監獄島を脱した業魔ですか？」

能天気話すマギルウと冷たく問いただすテレサ。対照的だ

「だったら？」

ベルベットが肯定する。テレサは杖を回して突きつける

「オスカーを傷つけた罪！楽に死ぬると思うな！」

テレサの声を皮切りに、対魔士が近づいてくるケンの存在はオスカーに知らされていたが目の前の敵にそれどころではないのだろう。好都合だ

「かかってきなさい、対魔士ども！」

「義によって助太刀する！」

「その女の左手に注意なさい！」

数人の対魔士がベルベットに剣と槍を振りかざす。ベルベットは左腕を業魔手に変え横弄りに振る。リーチの増加で反応できない対魔士がそのままひつかかれるように吹き飛ばされる

「はああ!!」

「ギヤアア!!」「ぐああああ!!」

負けじと他の対魔士が後ろから斬りかかるが回し蹴りで頭部を蹴り飛ばされる。ベルベットは蹴り飛ばした相手を見向きもせずに出の獲物に飛び掛かる。刺突刃で剣をもった対魔士とかち合うが左腕で対魔士の顔を掴む

「ぎー……あー」

対魔士はベルベットの左腕から逃れようともがくがそのまま持ち上げられる。やがて対魔士は動かなくなる。そのまま数人の対魔士に目掛け放り投げる

「ふんー」

「うわああ!!」

「ぐあつー」

ロクロウは素早い太刀筋で敵を翻弄し次々に斬り捨てる。縦斬りをしてくる対魔士を半身で躲しすれ違いざまに斬り捨てる

「ほらー」

「ぎやあつ!!」

そのまま走り過ぎ後ろにいた対魔士に接近する。その対魔士が盾を構え迎撃しようとしたがその瞬間ロクロウは前方へジャンプし対魔士を飛び越え後ろに着地する咄嗟に振り返るがそのまま切り捨てられる。ロクロウは目をぎらつかせながら他の対魔士を見る。その眼に怖気付きながらも対魔士たちは突撃する

「オラオラオラー」

「おおうー」

「ぎいや!!」

対魔士たちが槍を、剣を振るう、だがロクロウはそれをギリギリで避け一太刀で切り捨てていく

「どうした、この程度かー」

「業魔二人くらい止めてみせろ！」

二人は対魔士たちを挑発する。それに反応したのか3人ほどの対魔士が獲物を構えて突っ込む。ベルベツトは左腕を振り上げる

「くらえーアンビバレンツ!!だあああつ!!」

業魔手を上から下へと振り下げる地面には引つ掻き傷を作りかまいたちの様な波動が飛び対魔士を吹き飛ばす

「さあ、次に斬られたいやつはどいつだ！」

「おのれ！全対魔士を終結させよ」

「よしー！」

ベルベツトの策は見事成功するこれで港側は手薄になりダイルも動ける

「攻めを緩めるな！一気に押し込め！」

「耐えろよ、ベルベツト！」

「あんだこそね！」

く

丁度そのころダイルとケンが抜け道に続く道の物陰から様子を伺う。対魔士が数人見張りをしている

「ベルベツトのやつ大丈夫なのか？ここにはそれなり人数の対魔士が駐留してるからいくら業魔といえどこりや厳しいぜ」

「確かにそうですが現時点じゃこの作戦しかありませんからね。博打みたいなもんですよ」

「博打か・・・まっそれもそれで悪くないな」

そんなことを話していると警備にあたっていた対魔士の後ろからもう一人見張りが来て何かを話すそれを聞いて慌てて全員が抜け道の奥に消えていく

「お？こりやしめたぜ！ベルベツトがうまくやったんだ！よしそんなじゃ俺たちも行くか!!」

「はいー！」

ダイルとケンは素早く抜け道に入り倉庫に続く扉を開ける中には誰もいない

「よし、これだけあればでかい花火が上がるぞ」

「少なくとも騒ぎを起こせるぐらいにはありますね」

「おう。出航の準備もしなきゃな」

　　ダイヤルとケンは爆薬と船の出航準備にとりかかった

「はあ．．．はあ．．．」

　　ベルベットとロクロウは背中合わせになり対魔士たちと対峙する切れ目のない増援でさすがのベルベットも消耗している。だがその眼に宿る闘志は失われていない。テレサが二人に近づくと

「大した生命力ですが、すぐに後悔させてあげましょう。二号」

　　テレサは命令すると二号と呼ばれた少年は聖隷術で火球を形成し放つ。火球はベルベットに命中する

「ぐうう．．．！」

　　ベルベットが吹き飛ばされる。ロクロウも動きたいが対魔士に囲まれる中無暗に動けないテレサは無言のまま警戒するがベルベットの声でわずかに表情が変わる

「自分でとどめをさせないのか？臆病者」

「挑発には乗りません。お前の左手は油断ならない、それに、汚らわしい業魔の処理に聖隷どうぐを使うのは当然でしょう」

　　ベルベットの挑発にテレサは冷静に返す。少なくとも自分の手を汚したくないタイプのようだ

「じゃあ、あたしも道具を使うわ。」炎石”に”硫黄”と”油”」

　　その言葉に二号と呼ばれた少年が反応する

「それ．．．爆発する」

　　二号の反応に驚き視界をそちらに移すテレサ。その瞬間大きな爆発が起こる、テレサが振り返ると港の方に火の手があがっている港を手薄にしていたためダイヤルとケンにまんまとしてやられたのだ

「貴様、倉庫の”炎石”を!？」

　　テレサがベルベットの方を向くが既に目の前まで走ってきていた。

　　ベルベットはそのまま右後ろ回し蹴りを放ちテレサを弾き飛ばす

「あああつー！」

「ロクロウ！」

対魔士を切り捨てロクロウが答える

「承知！」

二人はそのまま敵を港の方へ走り出す

「こらー！・儂もつれてけえー！」

ちやつかりマギルウもそれについていく。テレサはよろめきながらも立ち上がり部下の対魔士に指示を飛ばす

「なにをしている！・追いなさいっ！」

「テレサ様！・船が！・港が！」

商船組合長がテレサに助けを求める

「全部燃えちまうよおっ!!」

「くっ！・二等対魔士は消火に当たれ！」

平和を守るといふ聖寮である以上市民の助けを無視するわけにもいかない、テレサは歯噛みしながら新たに指示を飛ばす

ベルベット、ロクロウ、そしてマギルウは港に入る建物や船に火の手が上がっている、3人はそのまま船着き場に走りこむ。一隻の船の上にダイルとケンがいる。ダイルは身を乗り出しながら声を上げる

「出航準備はできてるぜ！」

だがその時ダイルに火球が当たる

「うおっ！」

「ダイルさん！」

ダイルが吹き飛ばされるのを目の当たりにしてベルベットとロクロウが後ろを向き迎え撃つ。マギルウもさすがにやばいと感じたのか札のような物を構える。そこに聖隷二人とテレサがいた

「逃がさない・・・お前だけは！」

「くっ！」

「やるしかないな！」

だがベルベットもロクロウも先ほどの戦いで消耗している。明らかに疲労の色が見える

(まずいな、万が一のことがあれば・・・やるしかないか)

ケンはすかさず船から降りベルベット達の前に立つ

「あんた、なにしてんのよ!？」

「ここは自分が時間を稼ぎます。その内に体勢を」

「だがいくらなんでもお前一人じゃ厳しいんじゃないか？」

ケンの言葉にロクロウが返す

「あくまで時間稼ぎですよ。こういう戦いなら自分が一番向いてる……でしょ?」

「……わかったわよ、その代わりちゃんと役目はこなしなさいよ」

「わかってますよ」

その言葉を最後にケンはテレサ達に数歩近づき構えを取る。持久戦に長けたルナモードだ

「あなたがオスカーの言っていたもう一人の脱獄者ですね?」

「ぼくは別に囚人じゃないんですけど……ね!」

ケンが言い終わらぬ内に一号から放たれた黄色と紫の光弾が螺旋状に回転しながらケンにむかってくる。ケンはその光弾を真正面から裏拳でそらす様に弾き霧散させる、二号からも火球が放たれる。ケンはそれをウルトラショットを片手で放ち相殺する。テレサは苛立つ

「!?あなた、ただ者ではありませんね。オスカーからは人間と聞かされましたが本当にそうなのかわからなくなりますね」

「……あの人たちにも同じこと言われますよ。それよりも」

ケンはテレサに問いかける

「あなた、弟さんが傷物にされた事に対してかなり感情的なってますね」

「!!」

「襲撃のあの時あなた達に向かって来た時には“2人”でしたよね? 同じ男性ですが短髪じゃありません。武器も使ってます、その時点で気づくべきでしたね。自分が言うのもなんですが感情的になるのは聖寮としてはよろしくないのでは?」

「……」

ケンの正論にテレサは歯を食いしばる

「これで時間も稼げましたし」

「待たせたわね」

「ようし！仕切り直しと行くか！」

テレサが前を見るとそこにはベルベットとロクロウがケンの前に出ていたテレサが負け惜しみに叫ぶ

「なんと卑劣な手を！」

「業魔に説教は通じないわよ」

「ならば、その命で償え！」

ベルベットとロクロウがテレサ達に向かって走る一号と二号は術を繰り出し迎えうつが軌道が真っ直ぐなため容易く避けられる。ベルベットは業魔手で聖隷を吹き飛ばし力を喰らう

「はああ!!」

「うう!!」

「うあっ！」

ロクロウはテレサに攻撃を仕掛けている

「せいっ!!」

「くっ!？」

テレサは抵抗するが近接に遠距離では分が悪い。直ぐに隙が生まれる

「ベルベット、今だ！」

「しまった!？」

「とどめ！ゼロ・インパクト!!」

「あああっ!!」

ベルベットの攻撃で大きく弾き飛ばされたテレサ達。ベルベットとロクロウもケンとマギルウの前まで戻る片膝をついたテレサは苦痛の表情を浮かべながら聖隷に命令を下す

「二等の対魔士テレサの名において命じますーやりなさい！二号っ!!」

テレサが手をお前にかざす。すると二号はベルベット達に向かって走り出す

4人は構える、二号は両手の間から炎を生み出す

「そやつ自爆する気じゃぞー！」

マガルウの警告にベルベットが反応。右脚で両手を蹴り上げて術を阻止、その勢いで回転左回し蹴りで二号を蹴り飛ばす

「あううー！」

ベルベットはそのままテレサに接近し刺突刃をだし飛びかかる。

一回転してテレサを斬り裂こうとしたがそれを何者かに阻止された

「あなたが業魔だったとはー！」

「涙目対魔士か」

そう涙目対魔士ことエレノアがテレサを守ったのだ

「誰がー！」

エレノアが憤慨しベルベットの刺突刃を弾き飛ばす。ベルベットが跳躍しロクロウ達の前まで戻る

「まずいぞ。一等二人相手は」

ロクロウの言う通り、聖寮のトップクラス二人ではどうなるかわからない

その時ベルベットが蹴り飛ばした二号がふらふらと立ち上がる。

ベルベットは二号を見てすぐさま左腕を業魔手に変え二号を掴み持ち上げる

「ひっ!?!」

二号が短い悲鳴をあげる

「命令よ。あいつらを吹き飛ばせ。さもないと、あんたを喰らう！」

「命・・・令・・・」

二号はその二文字を復唱し両手を合わせその間に炎を生み出す

「!!」

二人はベルベットの言葉に従った二号に驚き反応が遅れる。辺りが振動しテレサ達が立つ地面から爆炎が上がり吹き飛ばす

「あああつ！」

「今だっ！」

ベルベットの言葉を合図にロクロウとマガルウが船に乗り込む、がケンが急に立ち止まる

「おいケン！なにしとるんじゃ！早く乗らんか！」

「ケン！時間がない急げ！」

だがケンは動かない。彼は周りを見て意を決して4人に告げる

「先に出てください！直ぐに追いつきます！」

「あんちゃん！追いつくってどうやってだ!?水の上でも走る気か!？」

いつの間にか回復したダイルがケンに聞く

「なるべく船速を落として下さい！後は自分が！」

「なにバカなこといつとる!!急げと言うとるんじゃ!!」

「あんたなに考えてるのよ！あいつらに捕まったら業魔じゃなくても殺されるわよ!!」

マギルウとベルベットが止めようと渡り板を通ろうとしたが横から光弾が飛来し板を破壊される。ケンが飛来した方を見るとテレサが怒りの表情を浮かべてケンを睨みつけていた。エレノアも槍を構えている

「さあ早く!!」

「つくそ！どうなっても知らないからな!!ダイル！」

ロクロウの言葉にダイルは決心する

「あんちゃん生きて戻れよ！なるべく船速は落とすからな！」

「はい！お願いします！」

ケンはテレサ達の方を向く、正確には違うが

「あなただけでも・・・!!」

「なにを考えてるかわかりませんが無駄な抵抗はやめて下さい」

テレサとエレノアの感情は正反対だ。テレサはケンだけでも始末したい。エレノアは捕縛するのが狙いだろう

「・・・抵抗はしません。ですが捕まる気もありません！」

ケンは両手を脇に締めエネルギーを集中させるテレサとエレノアはそれを攻撃と判断する

「させない！」

エレノアは槍を構え止めようとするがケンが数瞬早く両手から水色の光線を繰り出す

(しまった!?!遅かった!でも!!)

光線がエレノアに向かう、が突然光線は真上に曲がり急上昇する

「え?」

エレノアは急な出来事についていけずそのまま槍の刃がケンの腹部に差し込まれる。元から攻撃ではなかったのだ、刃の三分の一ほどがケンの腹部を刺し貫く。

「どうして・・・!!」

「・・・言つたでしょう。抵抗はしないと」

エレノアは槍を離して数歩下がる。

「危ない!」

テレサの声が響くエレノアが気付いた時には巨大な火球が迫っていた。テレサはエレノアが隙を作るとふんでいたがケンの予想外の動きでタイミングがずれてしまったのだ。エレノアが眼を閉じて痛みに備える、その時ケンがエレノアの肩を掴み庇うように位置を逆転させる。その瞬間ケンの背中に巨大な火球が直撃する。服が吹き飛ばぶ

「え・・・?」

ケンはエレノアから数歩下がり刺さっている槍を掴み引き抜く、ズブリと嫌な音を立てる。脈動に合わせて出血し始める

「あれは自分なりの尻拭いです」

ケンは上を見上げる、エレノアもつられて上を見る。そこには先ほどはなつた光線が玉状になり滞空しているそれは弾け光の粒子となり港に降り注ぐ。

「綺麗・・・」

エレノアはいつの間にか呟いていた。光が降り注ぐと瞬く間に火が治った

「これでいいかな?では自分は退散させてもらいますよ」

ケンはそれだけ言うと槍を置き後ろを向く。背中にはひどい火傷を負い爛れているケンは走り出し足場ギリギリで思い切りジャンプする。衝撃で地面が吹き飛ぶ。エレノアはただそれを見ているだけだった。そこにテレサが駆け寄る

「ごめんなさい。大丈夫でしたか!」

「え?は、はい!申し訳ありません。取り逃がしてしまつて」

「いえ、私こそ貴女を巻き添えにする所でした」

テレサの謝罪にエレノアが慌てる

「一体何だったんだ？あの男。かなり燃えちまったが全焼よりか遙かにマシだ。・・・これが因果応報ってやつか」

商戦組合の声が聞こえる

「・・・このことは直ぐに聖寮本部ーアルトリウス様に報告しなければ」

エレノアは自身の槍を拾いながら言う。刃先には彼の血がついたままだ。それを拭う。あの時庇ってくれた彼を思い出し落ち込む

(今度会うことになったらどんな顔をすればいいのでしょうか)

遠目に彼が船にしがみついているのが見えた。あれだけ傷を負いながら。どこにそんな力があるのだろうかと思いつつながら

第8話 おわり

船の上で

ベルベット達は出航した船の上で残ったケンを遠くから見ている。「おいダイル、やつぱり船を戻せ！このままじゃケンがやられちゃうぞ！」

「すぐには無理だぜ！時間が掛かりすぎる！」

ロクロウがダイルに指示をするが拒否される。今の状態で引き返すのは命取りだし船のスピードも限界まで遅くしてある

「あやつ一体何考えとるんじゃ!? 一等対魔士二人相手に敵うわけなからうに！」

「・・・あのバカ!!」

マギルウの言葉にベルベットが吐き捨てる。あの二人に加えて二等対魔士の増援が来れば幾らケンでもどうなるかわからない。その時ケンが両手を構え、それに反応したエレノアが槍を構えケンに突っ込む。ケンが放った光線がエレノアに向かう

「お、ケンのやつ手から何か出しおったぞ？見たことない術じやの」

「あいつ・・・！」

「まずいぞありや！」

「何がまずいんかえ？」

「あの技は目の前で見たからな、あれはあくまで火を消し止める技だ。攻撃するためのものじゃない」

ベルベットとロクロウは知っている。あの水色の光線だ、あれは攻撃ではない。それに気付いた時光線は真上に曲がり急上昇する。エレノアの槍がケンを刺し貫く。後ろ姿しか見えないが刺されたのは確かだ。だがエレノアの後ろから巨大な火球が迫ってくる、テレサの誤射だ、その時ケンがエレノアを庇うように素早く移動し火球を背中で受ける

「はあ!? あやつはな〜にしとる!」

（なんで涙目対魔士なんか庇って!）

ケンが放った光線は空中で弾け光の粒子が火を消し止めて行く。

槍を引き抜き何かを話した後、ダイルが操船する船に向かって走り始める。

「あやつまさか本当に水の上でも走る気かえ？」

「いや、それはないだろう」

マギルウの冗談に冷静に返すロクロウ。ケンが足場ギリギリまで走りジャンプする。あまりの衝撃に足場が吹き飛ぶ、ケンが近づいてくる。船に到達する寸前に体勢を整え腰の短剣で船体を突き刺ししがみつく

「あんちゃんを引き上げてくれ！手が離せん！」

「承知！」

ダイルの指示にロクロウが答える。ロクロウがロープを掴みケンのところに向かい垂らす

「ケン！これに捕まれ！」

「すみません。ありがとうございます」

ケンがロープをつたいよじ登る、ロクロウも引つ張り手助けする。

「あんちゃん大丈夫か？かなり酷い怪我だぞ？」

「まあ・・・流石に背中への攻撃は痛かったですよ・・・」

ケンはそう言いながら手近な箱に座る。少しこたえたようだ、声に少し元気がない

「ケン、見せろ」

「・・・」

ロクロウの声でケンは上着全部とボディーツを破りながら脱ぎ捨てる。腹部はエレノアの槍が深々と刺さった痕と背中には酷い火傷を負っている。ここで今まで黙っていたベルベットが少年と手を繋いだまま近づいてくる

「・・・あんた、一体どういうつもり？」

「と・・・いうと・・・」

「さっきの行動よ、やろうと思えばあの涙目対魔士を盾がわりにする事が出来たはず・・・なのにあんたはあろう事か抵抗もせずに槍を受けた。そしてあの女の術から彼女を庇った。なんであんな事をしたの・・・答えて」

それを聞いたケンは少し疲れた声で答える

「・・・まあ、対峙した時抵抗しないと云っちゃいましたからね。それにわざと刺される事で精神的動揺を起こして隙も作れましたから・・・ただあの人の攻撃の誤射は自分でも予想していませんでした・・・無意識で庇ってました」

ロクロウから応急処置を受けながら話す。ベルベットはもう一つ聞く

「ついでに聞くけど。なんで火を消したの？」

「確かに・・・あの商戦組合がした事は良くない。ですが、あの街には普通に暮らしている人をいる。全てを燃やし尽くしたらあそこに住む人たちが露頭に迷う事になる・・・今回の騒ぎで遅かれ早かれ因果は自分に返ってくるという事を思い知らせただけです。彼らも分かった事でしょう」

「・・・わかったわ、この話はこれでおしまいね」

ベルベットはそう答え質問を切り上げる。少年はベルベットと手を握ったままケンの顔を見る

「・・・」

「・・・？」

それをよそにロクロウとマギルウはケンの傷を診る

「こりや酷いな・・・治るには時間が掛かるぞ」

「うへっ・・・こりや今まで見た中で一番酷いの・・・」

「そういえばおまえマイルにやったようなアレは使えないのか？」

「・・・すいません。自分には使えないんですよ、アレ」

二人の言葉に反応したのか手を繋いだままケンの背中に回る

「ちよ!?ちよつとあんた!?何してんのよ!」

ベルベットをよそに片手をケンの背中に翳す。白い光が傷を照らす

「・・・お・・・」

光が治ると火傷が治っていた。次に腹部に翳す

「おお・・・これは」

「聖隷は命令なしには動かんはずじゃがの、坊はやっぱり変わつとる

の、それにしても・・・ほえーこれほどまでとわの」

腹部の刺し傷も光が治ると塞がり治っていた

「・・・ごめんなさい・・・傷痕は・・・治せなかった」

途切れ途切れに謝る少年。ケンは優しく少年の肩に手を置く

「いや、ありがとう助かったよ。借りができてしまったね」

「・・・」

ケンは少年にお礼を言う。相変わらず黙ったままだが

「これまでケン、少し休んだらどうじゃ？怪我は治ってもお前さんだ
くいぶ疲れとるようじゃし？なんなら添い寝してもええんじゃぞ？」

「・・・なんかマギルウさんが言うと怪しく聞こえますけど、ここは大
人しく聞きますよ。あと添い寝は必要ありませんよ」

「うむ♪素直なやつはいろんな意味で好きじゃぞ♪」

ケンはダイルに預けていたりユックから替えの服を取り出し船内
に入っていた

第9話

「色々あったが、なんとかうまくいったな」

ロクロウはマギルウと顔を見合わせる

「・・・オマケもついたが」

顎に手を当てながらベルベツトを見る

「オマケ？」

ベルベツトは自分の手を見る、二人は未だに手を繋いだまま少年と顔を見合わせた。

「あ」

ケンを治している最中でも離さなかった辺り無意識だったようだ。少年、呼び名は“二号”は、何も言葉を発することなくただ、ベルベツトの顔を見ている

「・・・」

「ベルベツトのオヤツ代りには丁度よさそうじゃの」

マギルウは本気とも冗談とも発言で少年を見る。ベルベツトはその言葉に顔を背ける

「オヤツ・・・」

少年はすこしだけ顔を俯かせる。自分はそのまま喰われるのか、それともまた道具として使役されるのか。考えているのかは定かではないが・・・

「冗談だからな」

ロクロウがフオローを入れるが

「ううん。それが命令なら」

少年は拒否することはなかった。今まで道具の様に使われてきた故か、はたまた諦めなのか、命令であれば従う。今の彼にはそれだけが己の存在意義となっているなの様に

「・・・いいのか？連れて行って」

ロクロウは少年の反応に困惑しながらベルベツトに聞く。オヤツだの何だの言った張本人のマギルウは知らん顔をして頭の後ろで手

を組みそつぽを向いている。

「この子の術は役に立つ。やばくなったら捨てればいいわ」

「じゃの。聖隸なんて道具みたいなものじゃし。のう、二号？」

ベルベツトはナニかを抑え込むように目を閉じながら冷たく言い放ち、マギルウはそれみよがしに少年に問いかける。その問いに少年は短く答える

「うん」

「・・・」

マギルウの挑発にも聞こえる言葉にベルベツトは静か睨み、そのまま目を閉じた。

）

ベルベツト視点

船はその後ダイルの操船で海の上を進んでいる。ケンはその後着替えを終え、今は甲板の隅に座り眠っている。少年はケンの隣ですつと海を見つめている。あたしわ二人を後にして忙しそうに動いているロクロウを見つける。現に船の事に関しては余計に手出しをすることはできない

「忙しそうね」

「全く手が足りん！急いで方角を確認して、倉庫の荷を固定しないと。とりあえず帆は張ったがロープの結び方はこれでいいのか？」

ロクロウは基本的な操船はできると言っていたが分からないところも多々あるようで困惑しながらも仕事をこなしている

「・・・多分、解けなきゃ問題ないわ」

ベルベツトはそこらへんはわからないので、当たり障りのない返答をする

「できればケンにも手伝ってほしいんだが、あの様子じゃ、しばらくは無理だろうな」

「ロクロウは手を動かしながらもケンを見る

「・・・そうね。その内起きるでしょうからその時手伝ってもらえばいいでしょう」

「それもそうだな」

ロクロウがそう返事しながら別の持ち場に向かう。あたしはそんなロクロウの後ろ姿を見ながらも船の前方にいるマギルウの方を見る。当の本人はのほほんとしている。あたしは近づき話しかける

「・・・何してんのよ。ボーっとして」

「いやあ、港のことを思い出してのお。かなり景気よく燃えとつたの〜っと思っておつたのじゃ♪まあ、ケンが火を消しはしたが船もそれなりに被害でとるし、追うのは無理じゃろうなくそれ以前に復興に時間も食いそうじゃし？返って好都合じゃの♪」

「あんだ。聖察にどこまで喋つたの？」

あたしは率直にマギルウを問いただす

「美貌の魔女が極悪非道な業魔に攫われてイビられる『エピソード2』怒りのマギルウ』までじゃよ♪」

即興で思いついたかのようなタイトル発表しはぐらかすマギルウ。それを聞いたあたしは溜息を吐く

「・・・よくわかるわ。奴らが処刑しようとした気持ち」

く

「目的地はローグレスよ。よろしくね」

ダイルに行き先を再確認させる

「わかつてるが、この人数で船を動かすのはキツイぜ。どっかで船員を雇わねえとな。それにこのまま進めば・・・」

ダイルは口ごもる

「このまま進めば・・・なに？」

「いや、何でもない」

「？」

あたしはダイルの言動に疑問を感じながらそこから離れた。

ベルベット視点終了く

少年は相も変わらず、ただ海を見ている

「・・・」

ベルベットはそんな少年を見る。そこにロクロウの声が響く

「ベルベット！方角はどうだー？」

ロクロウから方角の確認を頼まれ、ベルベットは羅針盤を見る。

が、ベルベツトは羅針盤など使ったことがないので本体を傾けたり横に向けたり悪戦苦闘している

「ええつと・・・見にくいわね・・・」

その時声がかかる

「違うよ。持ち方」

今まで海を見ていた少年がベルベツトのそばまで来ていた。羅針盤に指を指す

「船が揺れても大丈夫な工夫」

アドバイスを聞いたベルベツトは台座を持つ、羅針盤が安定し、方角が見やすくなった

「・・・ふうん」

ベルベツトは感心する、が

「ベルベツトー！」

ロクロウが急かす。先ほどの事を思い出しすかさず返す

「問題ないわよ！」

ベルベツトは少年の方に向き直り質問する

「あんた、名前は？」

少年は短く答える

「二号」

「じゃなくて、本当の名前。あるでしょ？」

ベルベツトは更に聞くが少年は首を横に振るだけ。別の話題に変えようと手に持っていた羅針盤を前に出す

「もつてみる？」

少年はその言葉に反応し羅針盤に手を伸ばそうとしたが何かを思い出したのか、それを引っ込める

「・・・命令なら」

「どうしたいか聞いてるんだけど」

「答えるのが・・・命令？」

ベルベツトの多少のイラつきと呆れ

「・・・そうよね。命令すれば自殺だってするのが、あんたたち」

「それが聖隷」

当たり前のように少年は答える。今までそうやって生きていたように

「やっぱり道具か」

毒づくベルベットだがある事を思い出す

「そういえばあんた。なんであいつを治したの？」

少年にケンの事を聞いたです

「・・・わからない」

「どういうこと？」

「自然とそうしてた・・・」

この少年でさえ自分の行動の理由がわからないようだ

「まあいいわ、取り敢えずこれから余計な口をきかないで」

舌打ちをし冷たく言い放ち後ろを向くベルベット。少年はまた俯

く

ベルベット達が慌ただしく動いているその頃、ケンは夢の中にいた。あの時と同じ空間だった

「ここは、最初に目覚めた場所・・・」

「やあ」

ケンは聞き覚えのある声に反応し後ろを向く。そこにはルシフェルが立っていた

「ルシフェルさん。どうしました？わざわざ夢の中に」

「さすがに人前に入るわけにもいかないからな。それにしても酷くやられたな。彼らが怒るぞ？」

「ええ・・・面目ないです・・・」

腕を組みながら呆れたように頭を振るルシフェルに申し訳なきそうにするケン

「これからは気をつけるんだ。君は無敵じゃないんだからな。それはそうと私からの贈り物は気に入ってくれたようだな」

「ええ・・・といっても使用は控えようと思います」

「それでいいさ君らしくて。そうだ、君の師匠からトレーニングメニューの追加だそうだ」

「追加ですか」

ケンが反応する

「今にわかるさ。時間だ、またその内に」

「あっはい」

その言葉を最後に辺りが霞み始める。ケンの意識は現実へと覚醒する

ベルベット達の乗る船のすぐ側を水柱と轟音が襲う

「なに!?!」

突然の出来事にベルベットと少年が大きく体制を崩す、ベルベットが船の舷縁げんえんにぶつかり手に持っていた羅針盤を手から離してしまう

「しまった!?!」

羅針盤が海に落ちる直前、突如横から釣り用の網が飛び出し羅針盤をキャッチする。ベルベットが網の柄を辿るとその先にケンがいた。落とさないように網を手繰り寄せ

「間に合った」

「あんだ、もう大丈夫なの?」

羅針盤をベルベットに渡すケン。船が揺れてるにも関わらず普通に立っている

「取り敢えずは・・・それにしてもかなり撃ち込まれてますね」

「そうね、一体何処から」

ベルベットの疑問に答えるようにロクロウが声を上げる

「後方から砲撃!海賊船だ!」

「あの旗は・・・まさか『アイフリード海賊団』!?!」

船の後ろにもう一隻の船がこちらを砲撃している

「バッチリ狙いをつけられとるぞく海の上でやり合うのは、ちとヤバそうじゃの」

一発の砲弾がベルベットとケンの背後の荷物に当たり、吹き飛ばす。幸い命中弾はそれだけだが至近弾が船を揺らす

「陸に着けて!陸おかで迎え撃つ!」

ベルベットの指示で回避運動を取りながら陸に向かう。その頃ケ

ンはある違和感を感じていた

(なんか体が重いな・・・体というかボディスーツが・・・ああ、そういうことか・・・)

ベルベット一行はなんとか陸に着いたものの海賊達は素早く、すぐに囲まれてしまう

「うっはー！本当に業魔の集団だ。これは使えるかもな」

海賊帽の上に取りを乗せた一人の男が近づく

「業魔と知ってやるか。いかれた奴らだな。陸の上なら容赦はせんぞ」

ロクロウが警告する

「命令よ、一二号。こいつらを蹴散らせ」

ベルベットが少年に命令し、少年はそれにうなづく

「おっと、相手は俺たちじゃないぜ」

その言葉を合図に一人の男が前に出る。片方は折り曲げられもう片方は伸ばしっぱなしの革のブーツ。オレンジ色の肌着の上にカッターシャツと茶色のベストを着ている。黒のコートは袖が曲げられ、左の胸元に短剣が差し入れている。黄色がかった色合いね金髪。肌は白く、目は蒼眼でベルベット達を見据えている

「俺だ」

第10話

少年は自分の武器である紙葉を男に向かって放つ、が、それが届く前に男の足元が光る。そこから岩が飛び出し、少年の紙葉を防ぐ

「聖隸!」

ベルベットが驚くのも無理はない。聖隸が海賊をしているなんて聞いたことも想像したこともないのだから

「いいや・・・」死神だ」

死神と名乗った男はそれだけ答えて構えを取り、走り出す。男は真っ直ぐベルベットに向かい、対してベルベットは迎撃するために刺突刃を出し斬りかかる

「ふん!!」

「・・・っ!」

横の薙ぎ払いを男は分かっていたかのように屈んで避ける

「っ!!このー!」

ベルベットは今度は刺突刃で切り払った勢いを使って男のこめかみに回し蹴りをする

「ほらよ・・・!」

「ぐっ!」

手を地面に着けそれを軸にベルベットに同じく蹴りを放つ。脚と脚がぶつかり合い相殺される

「ベルベット!助太刀するぞ!」

ロクロウが小太刀を構え男に向かって走り出す。男がベルベットを弾き飛ばしたと同時にロクロウの小太刀が喉を捉える

「ふん!」

それも紙一重に躲かれ、距離を取られる。その隙を狙って少年が術を展開し、螺旋を描く光弾を放つも先ほどと同じく地面から岩が現れ防がれる

「なんなの、こいつは!」

そう言いながら刺突刃と蹴りで応戦する

「聖隷が海賊をやっているのか!？」

ベルベットと同じく小太刀で攻め立てるロクロウ

「剣に双刀に紙葉・・・ペンデュラム使いはいない様だな」

男は斬撃を躲し蹴りを防ぎ術を岩で防ぐ。その行動は何処と無く試している様な感じにケンは見えた

「ケン、お前は行かなくていいんかえ?」

マギルウは知ってか知らずかケンをたきつける

「・・・いえ、ベルベットさん達三人で大丈夫ですよ。少なくとも自分の出る幕はない様です」

「それもそうじゃのゝ何せお主は『病み上がり』じゃからの♪」

「気づいてたんですか」

「まあ、ほんのちよつぴり動き鈍つとるし?。寝とる間に幽霊にイタズラでもされたんじゃないのかのゝ」

マギルウの言葉はある程度当たっていた。ワザと外したか本気なのかはわからないが。そうこうしている内にベルベット達と男はお互いに距離を取り、睨み合っていた

「・・・合格だ。力を貸せ」

「は?随分勝手な言い草ね」

男の言葉にベルベットが反論する

「ヘラヴィーサを燃やした奴ら程じゃない」

「知ってて試したのか」

「ついでに助けてもいる。あのまま進めば”ヴォーティガンの海門”

に潰されていた」

男の隣にいた青年が代わりに話す

「あんたらミッドガンド領に向かってるんだろ?それには、この先の海峡を通らなきゃならない」

僅かに間を置く

「けど、そこは王国の要塞が封鎖してるんだ。文字どおり”巨大な門”でね」

ベルベットが顎に手を当てる

「そんな要塞が・・・」

「事実なら借りができたな」

「俺たちも海門を抜きたいが、戦力が足りない。協力しろ」

それに対してベルベットがまた反論する

「海賊の言うことを真に受けるほどバカじゃない」

それを聞いた男は組んでいた腕を解く

「自分の目で確かめるか？いいだろう、命を捨てるのも自由だ」

言い終わると男はベルベット達に向かって歩き始める。ケンとマギルウ以外は各々身構える。だが男はその真ん中を通り過ぎていく

「なんじゃ、断つてもいいのか？」

マギルウが男に聞く

「お前達はお前達で、俺たちは俺たちでやる。それだけのことだ」

青年が男に走り寄る

「けど、副長独りじゃ！やっぱり俺たちも一緒にー」

青年の言葉を男が遮る

「足手まといだ。お前らは、計画通りバンエルティア号を動かせ」

伝えると男は崖の上にある横穴に向かう

「無念じゃが、儂には航海も戦いも手伝えん。見守ることしかしたくないんじゃ・・・」

「でしようね」

マギルウは近くの岩に座る、ベルベットは分かっていたと言わんばかり答える

「ダイル、ヴォーティガンの海門つてのはそれ程のものなのか？」

ロクロウがダイルに尋ねる

「警備艦隊付きの大要塞だ。なによりでっけえもんがついててな、あれを閉じられたら、戦艦だって突破は無理だ」

「海峽を避けて王都に行く航路は？」

ベルベットが別のルートを聞く

「あるにはあるが、外洋を大回りすることになる。無理に進んでも遭難するだけだ」

「・・・」

「あんたたち、何する気なの？」

「言った通り海門を抜けるのさ。手伝わぬ奴には、これ以上言えぬいね」

ベルベットに嫌みたらしく返す青年

「・・・できるの？」

「副長ならやってくれる」

「随分信頼してるんだな。あいつは聖隷だろう？」

ロクロウが青年に聞く

「そんなの関係ない。副長へ、ウチの船長が認めた”男”なんだ」

「あんたたちなら、海峡を避けて航海できるでしょ？」

それを聞いた青年は少し俯きながら話す

「・・・今は無理だ。前の襲撃で仲間と羅針盤をやられちゃったからな」
「・・・羅針盤ならあるわよ。もう少しで海に落とす所だったわ。誰かのせいで」

ベルベットが羅針盤を見せる

「あー・・・いや、それは謝るよ。んじや後は海門の方を任せませ！」

「調子いいわね・・・」

「俺たちは海賊だからな、行く手を塞がれたって、引き下がるわけにはいかねえんだ」

「それが海賊・・・か」

「利害は一致してる。海賊たちと手を組むしかなさそうね」

「まあ。進むも破滅、引くのも無理なら抜け道に賭けるしかあるまいて」

「手伝う気ないくせに」

肩をすくめるマギルウにベルベットが嫌みたらしく返す

「当然のゝ♪」

悪びれないマギルウ

「あの聖隷は只者じゃない。まだ力を隠しているきがするが」
「坊も同じ聖隷じゃろ。何かわからんか？」

ロクロウは聖隷に対する感想を、マギルウは同族である少年に聞く
「……」

少年は何も答えない

「思惑があるのはお互い様よ。とにかく、あいつを追う」

ベルベットたちが男に追いつくために歩き出す。それを横目にダイ
イルが忠告する

「言っても無駄だろうが、アイフリード海賊団には関わらない方がいい
いぜ。アイフリードといえば、どんな船乗りもびびる最凶最悪の海賊
だ」

「業魔のクセに情けないこと言うわね」

ベルベットがまくし立てる

「業魔だってコワイもんはコワイ！」

「アイフリードって奴は、そんなに強いのか？」

ロクロウがダイイルに尋ねる

「そりゃあもう！傍若無人のケンカ師で人間なのに鬼のように強
ええって噂だ。仲間も、命知らずの暴れん坊揃いでな。事実、王国海
軍を何度も返り討ちにしてる。それに奴らのバンエルティア号！異
大陸まで航海したってという伝説の船なんだぜ」

「ほう、中々骨のある奴らみたいだな」

ダイイルの力説を聞いたロクロウが感心する。未開の海という危険
な場所を乗り切ったという実績はかなり大きい

「それにやたら詳しいわね」

「ま、まあな。アイフリード海賊団の自由奔放さは海の男の憧れでも
あるっつーか、なんっつーか……」

「ふうん……」

夢とロマンという男なら誰しも一度はあるであろう性。船乗りで
あるダイイルもアイフリードに憧れているのだろう。ベルベット本人
は気にもならないようだが

「別にいいだろ！憧れに業魔も人間もトカゲも関係ねえし！」

「それじゃ俺たちは船で海門に向かう。オタクらの船も一緒に来ても

らうぜ」

「どんな作戦で行くの？」

「そこら辺は副長に聞いてくれ。副長なら詳しく説明してくれるはずさ」

「不本意だけど仕方ないわね。」

海賊一味とベルベット達は一度別れる。乗って来た船もバンエルティア号に追従していった

「あの男を追うわよ」

「応ー」

ベルベットとロクロウは聖隷の青年を追うためツタを登り始める。その次に少年が、最後にケンが登り横穴に入っていた。

く

横穴というか正確には洞穴。ここらバン洞穴は後に説明するブルナーク台地の地下に位置する洞穴。本来地下である以上植物には過酷な環境であるにも関わらず内部にはコケ類や植物が繁殖している。発行性の食虫植物の群生の存在により明るく。独自の生態系が広がり、幻想的な雰囲気醸し出している。強いていうならば

「でやっ!!」

ベルベットが回し蹴りで子供ほどのサイズの虫蹴り飛ばす。ここに敵がいなければちよつとした探検になっただろう、世の中そう甘くないということだ

「嘖っー!」

ロクロウのエモノが虫を両断する。少年とケンの出る幕はほとんど無く。二人が敵を蹴散らしながら奥へと進んだ、その先にさそりのような敵をたった今始末した先程の男がいた。男は4人を見ずに話す

「海賊を信じる気になったか？」

ベルベットは腕を組む

「まさか。けど、要塞を抜けた後、王都まで船と船員を貸してくれるなら協力してもいい」

海賊は信用できない。だが、このままでは罅が開かないのも事実、

自分達だけではこの状況を乗り切るのはあまりにも困難。少なからずの利害の一致、交換条件ならばとベルベットの判断だ。

「……いいだろう。がこっちも一つ言っておくことがある」

男はおもむらに一枚のコインを取り出し指で弾く。女性の横顔とドクロの描かれたコインを金属特有の音を響かせながら再び男の手の中に収まる。所謂コイントスだ

「俺は、周囲に不幸をもたらす”死神の呪い”にかかっている」

男が手を開きコインを見る。ドクロが上だった

「千回振つても”裏”しか出ないほどの悪運だ。要塞を抜けようとした時も、五人犠牲が出た。同行すれば、何が起るからからんぞ」

「そこまで聞いたベルベットが質問する

「なぜ、そんな不利な情報を教えるの」

「業魔も、理不尽に死にたくはないだろう」

男はそこまで答えるとコインをベルベットに向かって投げ渡す。ベルベットほ少し驚きながらもそれを掴む

「知った上で来るなら自己責任ということだ」

一瞬の間を置き、ベルベットはコインを投げ返す

「どうでもいいわ。”裏”なら自力で”表”にひっくり返すだけよ」

男がベルベットから返されたコインを見る。そのコインは女性の横顔、つまり”表”が出ていた。男の顔が驚きの表情と僅かに歯をくいしばるも直ぐに元に戻る。男は4人を見る

「名は？」

男が尋ねる

「ベルベット。”これ”は二号」

「……」

”これ”と呼ばれた少年は顔には出さないが俯く。それを見た男が何か思ったのだろうか。だが言葉を出さずに腕を組む

「俺はロクロウ。よろしくな」

ロクロウは笑顔を見せながら自己紹介する

「ケンです」

ケンも短く自己紹介する

「アイゼンだ」

一通り自己紹介した一行。短い間ではあるが少なくとも名を聞かなければ支障をきたす、ベルベットはこの後の事についてアイゼンに質問する

「要塞を攻略する策があるんでしょ。聞かせて」

「結論から言えば、ヴォーティガンの守備は鉄壁だ。海から攻めても陸から攻めても、落とせない」

「おいおい」

初っ端から無理と断言するアイゼンにロクロウがツツコミを入れるがここでケンが口を挟む

「ようは片方だけじゃダメだという事ですよね」

「・・・なら、同時に攻めれば」

ケンの発言にベルベットが気付く

「そうだ。まずバンエルティア号で攻撃をかけ、警備艦隊を海峡から引きずり出す。その隙に、俺たちは要塞に進入し海門を開く。バンエルティア号は艦隊を振り切って海峡に再突入。俺たちを拾って駆け抜ける」

「ひとつ間違えれば全滅だな」

ロクロウが言う通り、それだけその要塞が難攻不落である事を物語っていると言う事だ。陸が失敗すれば海門が開かず警備の戦艦に沈められる。海がやられたら陸の方が敵に押しつぶされるだけだ

「けど、間違えなければ勝ち目はある」

「死神同伴でか・・・」

要はしくじらなければいいと言うベルベットに死神という要素になんとも言えないロクロウ

「作戦はもう始まっている。行くぞ、要塞の入り口は洞窟を抜けた先だ」

アイゼンを加えた5人は改めて洞窟の奥に進む。ここの生態系は特殊で植物の繁殖力が高く木の根とツタが道を塞いでいる。アイゼ

ンが着火剤を持っておりそれで道を作る事になった

「こんな所で火を使って平気？」

「普通は平気じゃない。だが、俺たちは業魔と聖隷だ」

人間じゃなければ問題ないと言わんばかりのアイゼン

「・・・ああ、普通じゃなかったわね」

ベルベットが肯定し火を放つ

「・・・」

ケンは何も言わなかった

）

道中の敵はアイゼンがいることもありかなり楽になったといつてもいい。アイゼンは素手だったが少年と同じ精霊術と徒手格闘で敵を蹴散らす。だいたい奥まで進んできた、もうすぐ要塞近くに出るだろう

「少年、随分大人しいな。具合でも悪いんじゃないか？」

何かと少年に気をかけるロクロウ、彼なりの気遣いだろう

「元々こうよ、二号は」

ベルベットは気にしてないようだ。少年は周りをキョロキョロしながら歩いている、今までこういう環境を体験した事がないのだろう。少年にとって全てが初めてなのだ。無理もない

「やめろよ。二号なんて可哀想だろ」

ロクロウが少年を庇う。確かに番号で呼ぶのは酷である。ロクロウは少年を”個人”としても見ているのだろう

「あんたの名前の意味は？」

「兄弟の六番目でロクロウだが」

「それと同じよ」

「同じじゃないだろ」

ベルベットとロクロウは側から見れば漫才とも取れる会話をしている。ケンはそれに見ながら後に続こうとしたが足を止めている少年に気付く。どうやら植物が気になるようだ。ケン自身この世界に来て初めてこれだけの緑は初めて見た。彼の気持ちもわかる。他の3人はどんどん先に進んで行ってしまいうら、ケンは少年を呼ぼうとそ

ちらに顔を向けた時、少年の背後からスコープオンが迫って来た。少年も気付くが声を上げかけた口を手で抑える。ベルベットの命令を守っているのだ。ケンは少年の元へ走り出す

「・・・!!」

「危ない！」

ケンはスコープオンに体当たりを仕掛ける。スコープオンは思い切り後ろに転がるが直ぐに起き上がり尻尾の針で攻撃しようとするが

「・・・！」

ケンは体を半身にして躲し自分の横を通り過ぎる尻尾を掴み相手の勢いを利用して一本背負いの要領で投げる。スコープオンは仰向けに倒れる

「フンツ!!」

スコープオンのから空きの腹に緑色の槍が突き刺さり、スコープオンは力尽き消える。アイゼンの精霊術だ、ベルベット達が少年の所に駆け寄る

「大丈夫か、少年！」

ロクロウが声をかける。

「なんで声を上げないの！ケンが気づいたから助かったけど、もしかしたら死んでたかもしれないのよ！」

ベルベットが声を荒げる。どちらかというとただ単に怒りではなく情の籠ったものだ。少年は顔を下に向け、理由を話す

「・・・命令だから。『口を聞くな』って・・・」

その言葉にロクロウとベルベットは驚く。特にベルベット自身、まさか本当に命令に従っているとは思わなかったからだ。ベルベットの少年の肩を掴む

「あれは違うっ！あなたは・・・なんでそんな！」

ベルベットは本気でなかったのだらうとしても『そういう』環境で生きて来たのだ。少年にとってはそれが全てなのだ、彼女と少年の認識の違いが今回のトラブルを生んだといってもよかった

「落ち着け、ベルベット」

ロクロウがベルベットの肩に手を置き制す。アイゼンは何か思うことがあったのか、少年にひとつ聞く

「お前、対魔士に使役されていたのか？」

少年は頷き答える

「やはりそうか・・・こいつは”意思”を封じられているんだ」

アイゼンの予想は当たっていたようだ

「本来、聖隷は人間と同じ心を持つそんざいだ。だが、対魔士どもは強制的に聖隷の意思を封じ込めている。道具として使うためにな」

命令されることしか知らない。この少年だけではない、聖寮に所属している他の聖隷も同じだろう

「ずっとこのままなの？」

ベルベットがアイゼンに尋ねる。

「わからん。対魔士な配下から脱した聖隷は初めて見た」

「・・・」

ベルベットほアイゼンの言葉に何も言えなかった

↳

「少年、困ったことがあったら言っていいいんだぞ」

「困ったこと」

ロクロウは少年に声をかけながら一緒に歩く

「ケン、さっきの事は礼を言うわ」

「いえ、自分がいなくてもアイゼンさんが気付いてくれたでしょう」

ベルベットはケンに礼をいう。本人はアイゼンにこそ言うべきと促す

「だがあいつを救ったことには間違いない。素直に受けとっておけ」

「まあ、はい」

アイゼンがベルベットをフォローした

↳

「対魔士が聖隷の意志を封じるって言ってたよな」

ロクロウがふと思い立ち、アイゼンに聖隷の事について聞く

「ああ。本来は人間同様、それぞれが自我を持つ存在として、ずっとこの地で生きて来た。」

俺たちの存在を知覚できるのは対魔士のように霊応力が強い、一部の人間だけだったが……」

そこでロクロウが気付く

「あの『降臨の日』で変わったんだな」

「聖隷は並の人間達にも見えるようになり、意志を奪われ、命令通りに動く道具にされた。業魔に対抗する術を得たと人間どもは喜び、アルトリウスの奇跡だと讃えたが聖隷はモノじゃない」

アイゼンは言い切る。対魔士達からいいようにされ、奴隷のようにこき使われる環境を憤りながら

「聖隷はモノじゃない……」

「モノよ……」

少年の言葉に反応したのか分からないがベルベットが吐き捨てる「？」

それを聞いたアイゼン

「アルトリウスにとっては、聖隷も業魔も人間もみんな御大層な”理”を実現する為のの道具でしかない」

ベルベットは顔を歪ませる

「モノにしか見えないのよ……弟すら……」

く

洞窟をもう直ぐ抜けようかとした時、隅に亀の甲羅を背負った如何にも胡散臭い少年が立っていた

「トータス、トータス」

「……カメの業魔？」

ベルベットが訝しむ

「いいえ、業魔じゃないっすよ。リオイラは、ホワイトかめにん”っす驚かせてしまって恐縮っす”

ホワイトかめにんと名乗った少年は自己紹介をする

「業魔じゃないなら聖隷か？」

「いえ、”かめにん”は”かめにん”っす。諸々のご不安はごもつともつすが、これ以上の追究は、どうかご勘弁いただきたいっす」

「お、応……これは”丁寧”に」

ロクロウは思わぬ反応に戸惑う

「恐縮つす」

アイゼンが補足する

「かめにん一族は、遣り手の旅商人。俺たちのような裏稼業には、なにかと重宝する存在だ」

「行商人か。役に立ちそうね」

「はいっすー！『お客様の笑顔が第一』それが”ホワイトかめ屋”のモットーっす！ただ・・・場所が場所だけに、お値段は少々お高めになっ
てしまっすがー」

ホワイトかめにんが最後の最後で割高宣言してくる。こう言う場所
所で売買するならばそれ相応の費用がかかると言うもの、多く取りたい
といのも分かる。が、笑顔が第一という営業理念に合うかどうかは
分からないが

「嫌よ、まけて」

ベルベツト本人は御構い無しだ

「・・・誠に申し訳ないっす、辺境の商売は、なにかと手間賃が掛か
りまして・・・」

彼が言うのはもつともである。商品を仕入れから運送を込みで考
えると手間も時間もかかる。あくまで売り手の場合だが

「それはそつちの都合でしょ？」

「う・・・確かにそうっすが・・・」

買い手には関係ない事である

「素直に認めたわね。じゃあ、通常価格で手を打ってあげるわ」

「・・・エゲツないですね・・・」

「感謝の印に『お客さまの笑顔』って奴をやつとくか。にっ♪」

ロクロウが笑顔を見せる

「きよ、恐縮つす・・・」

く

かめにんから値引き交渉を成功させ、持ち物の補給を済ませる。か
めにんは暗いオーラを出している。通常の価格では儲けなど出る訳
もない。ケン
は流石に気が引け、かめにんに歩み寄る

「うう・・・こんなんじや完全に赤字つす」
「すいません」

「・・・はい。何つすか・・・」

かめにんは半端諦めと泣きべそかいている。

「はいこれ、手間賃と差額分の代金です」

「・・・え!? ホントにいいつすか!？」

かめにんは驚く、暗闇から一筋の光が差し込んだようなものだ

「流石にこのままだと貴方が営業を続けられなくなって自分達も困りますからね。こつそりとですが払いますよ」

「おお・・・あなた様は聖人様つす! このご恩は一生忘れないつす!」

かめにんは涙を流しながら感謝する

「それではこれで、あの人を待たせると何言われるか分かりませんか
ら」

「お氣をつけて! これからお得意様にさせてもらおうつす!!」

く

「ははは! すごい値切りだったなベルベット」

「当たり前前の交渉よ。喰い殺して品を奪うよりマシでしょ?」

楽しそうなロクロウにやたら物騒なことを言うベルベット。差が凄まじい

「お前、死神より恐ろしいな」

「かめにん」

たじろぐロクロウ。少年は先ほどのかめにんが気になるようだ

「あんな変な奴がいるなんて世界は広いよなあ少年」

「・・・うん」

「ふっ・・・あっちも俺たちを見て同じことを思ってるだろうさ」

アイゼンが皮肉る

「ふむ、業魔と聖隷と死神の御一行・・・か」

「でしようね」

ロクロウは特に気にもしない。ベルベットは少し沈んだ声で答える。反論はできないのだから

(・・・)

一人はどちらでもないのだが

↳

「かめにんってなんだ？」

ロクロウはかめにんについてアイゼンに聞く

「名前の通り、かめにんだ」

「だから、なんなんだ？」

「かめにんは、かめにんだ。行商が得意な種族だと考えればいい」

アイゼンはそれだけ答える。答えになっているかどうか分からないが

「ま、ウミガメみたいな甲羅をしょってたし、名は体を表すってヤツか。俺は六番目でロクロウだしな」

「ぼくは二番目の使役聖隷だから、二号・・・」

「それは名前じゃない、ただの称号だ」

「・・・？」

「いい加減、少年にも名前をつけてやらんなあ」

「・・・僕の、名前・・・」

「・・・」

ベルベットは少年の言葉に只々黙るばかりだった

↳

アイゼンがコイントスをする。もちろんウラだ

「・・・」

「アイフリード海賊団の副長は変な験を担ぐのね」

「癖みたいなものだ。どうせウラしか出ない」

「その金貨って、どこの国のものなんだ？表は女神、裏は死神なんてのは、初めて見た」

ロクロウが聞く。確かにこういうものは余程の理由がない限り製造されることはない

「裏側は厳密には死神じゃない。これは『魔王ダオス』だ」

「なんか、どっかで聞いたような名前だな」

「(こ)で言うのもアレだが中の人繋がりである

「・・・女神マーテルと・・・魔王ダオス・・・『ラグナロック』第7章『ユグドラシル戦記』より」

少年が補足する、ナムコにファンタジアにシンフォニアだ

「ほう、よく知ってるな。これは、異国の古代遺跡から発掘されたカーラーン金貨と呼ばれる貨幣だ。柔らかいキンで出来ているが、特殊な加工で高度が高められていて、傷がつきにくい」

（純金だと流石に無理だから、合金かな?）」

アイゼンの言う通り金、特に純金ともなると硬貨どころか装飾品としても使えない。一般的には銀や銅を合わせて合金にするのが多い

「へえ、随分珍しいものなんだな」

「あんた、本が好きなの?」

ロクロウが感心し、ベルベットが少年に聞く

「好き・・・?テレサ様の部屋にたくさん本かまあって僕はいつも本を読んでいた・・・。『ラグナロック』は神話時代の戦記で何回も読んだ・・・」

「・・・」

ベルベットは感じているのだろう、弟との共通点を、ケン少年の肩に手を置く

「それを好きって言うんだよ。何回も読んでいるなおさらね」

「・・・うん」

ケンは少年の肩を優しくたたく

「それにしても、そんな珍しいコイン、どこで手に入れたの?」

「話せば長くなるが・・・」

「ならいい」

本当に長くなりそうなのでベルベットが流す

「ちなみにさつきは、コインで何を決めたんだ?」

ロクロウが気になったようだ

「・・・今話すようなことでもない」

「そうか、余計な詮索だったな、すまん」

アイゼンの返しにロクロウはすっぱりやめた

一行は洞窟を抜け外に出る、ここはブルナーク台地、大陸中央から北寄りに広がる大地で世界七不思議であるブルナーク間欠泉なるものがある。熱水により溶けた鉱物から染み出す塩分が光に反射し虹が発生するという。残念ながらここからは見えないが。アイゼンが下見したという入り口に向かう。人気がない

「警備がないな。押してみるか？」

ロクロウが一步踏み出すがアイゼンが止める

「待て、調べた状況と違う」

ちやうど風に煽られた草の葉が入り口の扉に向かう。が直前で電撃のようなものが走り、葉を木っ端微塵にした

「結界が貼られてるのか」

「あれ、触った瞬間にあの世行きですね……」

「警備を変えやがったな」

「なるほどね。さっきのサソリや、この結界が死神の不幸ってわけか」

「……この程度で済めばいいんだがな」

ベルベットの皮肉にアイゼンは口元を僅かに吊り上げる

「正面突破は難しいな。どう攻める？」

ロクロウが案を尋ねる

「崖を降りた先に建設時に使われた搬入口があるはずだ。そっちを探る」

「よく調べたわね」

「この程度は当然だ」

く

アイゼンの言う通り崖の下にも入り口があった。見張りもいるが二人しかいない

「あれが搬入口か」

「こつちには警備がいるな」

「つまり結界はないってことね。行くわよ」

ベルベットとロクロウは見張りの兵を片付けるため走り出す。その時少年が声を上げベルベット達を止めようと声を上げる

「だめ……その人は……！」

一瞬後にアイゼンも気付く

「気をつけろ、そいつは！」

「あれは……！」

見張りの兵が暗いオーラを放ち苦しみ出す。次の瞬間兵はトカゲの業魔となりベルベット達に襲いかかる。ベルベット達は反応に遅れる

「間に合うか……!?!」

ケンはずぐ様業魔2体に両手からウルトラショットを放つ。威力は通常よりかなり弱くなるが時間稼ぎにはちょうど良かった。光弾は業魔に命中し、体制を崩す。ベルベットとロクロウはそれを見逃さず一気に攻める

「いきなり業魔になりやがった！」

ロクロウが小太刀で業魔の剣を弾き飛ばし、がら空きの腹を横に一太刀ち斬り捨てる

「どういう不運……よ!!」

ベルベットは業魔の頭に足を掛け地面に叩き付ける。ケンの援護で事なきを得た

「……だから言っただろう」

「警備が業魔病に罹ってるとはな。これも死神の力か？」

小太刀を収めながら言うロクロウ

「まあな」

アイゼンが答える。言い方からして何度もあるのだろう

「けど、突っ込んでたら危なかった。止めてくれて助かったわ」

「俺じゃない。気付いたのはこいつだ」

アイゼンは少年に顔を向ける

「……」

少年は命令を破ったことに責任を感じたのだろう。俯いている

「これからも、しっかり警戒頼むわよ。死神が一緒なんだから」

ベルベットはそれだけ言う入り口へ向かうその声には明らかに温もりがあった。少年は何のことかわからず首をかしげる。そこに

ロクロウが近づくと

「喋ってもいいってことだよ」

少年がそれを聞き彼女をみる。彼女はケンと話している

「・・・さっきの援護。礼を言うわ」

「礼を言われるほどじゃありません。あの少年のお陰ですから」

「相変わらず素直じゃないのね」

「そこら辺はほんの少し難しいんですよ。自分は」

ベルベットから一歩下がって搬入口に向かうケン

「警備はしっかり」

その後ろ姿を見ながら言葉を復唱する少年。その目に光が一瞬宿った

ルシフェルの電話と彼について

うん、漸くヴォーティガンに入ったようだ。そう。ここを抜ければ一息つけるよ。正直、あの時は彼についての報告が先でよかったよ。ヘラヴィーサの事を喋ったら踏み込んできたかも知れないからね。特に獅子の方が、分かった。また連絡する。リュタの方もあるしね、私はあくまで時の旅人だ。傍観者としてあの二人の行く先を出来るだけ手を出さず見届けるとするよ。じゃ

ルシフェルが電話を切る

あちらの方も動き始めたようだ、天界と墮天使と悪魔の三つ巴だ。ある意味楽しくなりそうだ、”選民”に選ばれた彼はどんな選択をするかをね。

さて今回は別の世界に行った彼の詳細について教えようと思う。彼、ケンは今私達がいる世界。すなわちリュタとは別の世界から弾かれる形で魂だけの状態でここに来た、元の世界では彼という存在、居たという事実も、物的証拠も、誰の記憶にも彼の存在は”無い”。彼の家族は父と母そして姉が一人の4人家族だった。今では一人娘となっている。そう、彼は家族から、世間から、そして世界から忘れ去られた。

魂だけの彼を神は哀れんだ、何もかもから忘れ去られた彼を。私達の世界に流れ着いたのは偶然なのか必然なのか、神は彼を掬い上げ。この世界の住人として生まれ変わらせる事にしようとした。が一つ問題があった。彼は所謂外の人間だ。不確定要素である彼をリュタに送った場合どんな事が起こるか分からない。どんなに小さな事でもだ、だが彼をこのままにすることは出来ない。評議会の中には彼の魂を牢獄に繋ぎ止めておけばいいという者もいた。だがあれは罪を犯した者を閉じ込めるものだからな。何もしていない彼を牢の中に入れることなど出来ない。神は悩んだ、悪魔と墮天使の事もあるからな。だがある時、神は別の世界から助けを求め声聞く。正確には世界の意志な訳だが、その世界こそ今ケンのいる所という訳さ。神はその声に応える為にケンを送り込む事にしたんだ、実は最初から彼が

行く所は分かっていたんだが神は彼の中にある可能性を引き出すべく、彼を私の所に預け力をつけさせる事になった。鍛錬をさせるのもあるがその世界の情勢を把握するのに時間が掛かるからというのもある。そのお陰で二人の師に鍛え上げられ、強くなれたのだから私としても良かったと思うよ

これが事の始まりだ。彼のいる世界がどうなるのか、ちよつと気になるんだ。

そろそろ彼に会いに行ってもいいかな？ 場所は考えないとな
それじゃまた。そのうちに

第11話

資材搬入口から侵入した一行の目の前に映ったのは業魔にやられたのだろう王国兵士の死体とそれに目もくれず徘徊している業魔の姿だった

「うお、要塞中に業魔がいるようだな。まさかアイゼン、お前が業魔病の原因じゃないだろうな？」

アイゼンを訝しむ様な顔で見るロクロウ。不運であるのも程があるが

「・・・いや。偶然蔓延したところに俺たちが来たんだ。死神の道連れとは、こういうことだ。悪く思うな」

偶然って怖い

「むしろ好都合ね。敵は、組織的な対応ができなくなってる」

「こっちは少数だ。確かに乱戦の方が有利に立ち回れるな」

ベルベットとロクロウの考えは正解だ。兵の数が多ければ多い程指揮系統がマヒした場合立て直しには時間がかかる。その間に攻撃をかけられて総崩れなどよくある話だ。

「・・・」

ベルベット達の反応に何か思ったのか黙り込むアイゼン

「アイゼン、海門を開くにはどうすればいいの？」

「開閉装置は、海門の上部にあるはずだ。それを起動して、合図の狼煙をあげる」

「了解。海門の上ね」

ここヴォーティガンらウエストランド領とノースガンド領の海峡に聖寮が建造した巨大要塞、物理的に封鎖することで人の往来や物流が厳しく管理されている。ここを避けるならばダイルの言ったように外洋を大周りする必要がある。ここには戦艦も配備されており、正面突破はまず不可能だ。だが現在業魔の発生で要塞の機能は著しく低下している今が好機なのだ。ベルベット達は業魔を退きつつ、搬入

口を抜ける

「おい、船が残ってるぞ」

「戦艦だ。マズいな」

ロクロウが停泊している船を見る

「海門要塞か・・・海峡ごと鉄の門で塞いじまうなんて聖寮もとんでもないもの作りやがるな」

「少し前には、こんなの考えられなかったのに」

ロクロウとベルベットの疑問にアイゼンが答える

「聖隷を道具として使えば、造作もないことだ」

これだけの施設を人の手だけで建設するにはそれだけ時間がかかるといふもの。見た限り何処もまだ新しい。これは短い期間で造り上げたのも聖隷の力があつたのは間違いない

「聖隷は、業魔を斬る刃にもなれば、鉄を鍛える金槌にもなるってわけだな」

「そうやって聖寮や王国は、自分たちの力の大きさを民衆に知らしめてるのよ。逆らうな、従えってね」

ベルベットの言う通り聖隷という力、もとい武力は抑止にもなる。何処かの勢力が攻め込んでくるのを防ぐことができる。またはそれをチラつかせてお互いに牽制しあうという方法もある。だがそれを民衆に向ければ弾圧になる

「胸糞悪い話だ」

アイゼンが同族の扱いにそう吐き捨てる

「むなくそわるい・・・」

「まっただわ」

、

海門を開く装置を目指し一同は上へと続く梯子を登る。先頭はベルベットだ。ベルベットが梯子を登り切る直前、王国兵であろうかひどく怯えており何かから逃げるようにベルベット達の方へ走り出すが、当の本人は気づかなかつたようで一瞬驚いた顔をした瞬間既に登り終えたアイゼンに殴り飛ばされる

「ぐおっはあ!!」

殴り飛ばされた王国兵は何回か転がり倒れ伏す。アイゼンは横にある扉に足を運ぶ

「この扉から海門に出られるはずだが、鍵がかかっているようだな」
アイゼンの言葉を聞きながらベルベットが近づいてくる。同時に腕を業魔手に変える。一瞬アイゼンがベルベットを見て察したのか横に退く。ベルベットが業魔手で扉に殴りかかるが余りに頑丈で弾かれる

「壊すのは無理か」

ベルベットが毒づく、その時後ろから声が聞こえる

「侵入者ども！ワシの要塞をよくもー」

先程アイゼンが殴り飛ばした王国兵が起き上がり声を荒げる

「扉の鍵はどこ」

「ワシは誇りあるミッドランド騎士だ！業魔なぞに屈するものか！」

ベルベットの問いに言い返す王国兵、ベルベットはそんなの御構い無しに数歩進むと王国兵はビビったのか後ろに後ずさるが意地があるのか身構える。その時アイゼンがベルベットの前に歩み出る

「俺がこの世で一番むかつくのは、生き方を他人に曲げられることだ」

アイゼンは歩きながら続ける

「自分の舵は自分で取る。そうでなければ本当の意味で生きていくとはいえないからだ」

アイゼンが近づくと王国兵の顔が引き攣る

「自分の舵・・・」

「如何にも！この要塞を死守するのがワシの生き様だ！」

アイゼンが鼻で笑う

「だが、それにはどんな結果も受け入れる覚悟が要る」

目の前まで迫ったアイゼンが王国兵士の顔を殴り腕を後ろ手でねじり上げ壁に押し付ける

「お前の覚悟が本物かどうか、試させてもらおうぞ」

「ひい・・・!!」

ギリギリと音を立て最後に嫌な音が響いた

「いぎやあああつ!!」

男が激痛に叫ぶ

「慌てるな、まだ一本目だ」

それを聞いた王国兵が慌てて待ったをかける

「ま、待て！鍵は扉の奥にある管理室だっ！」

アイゼンが溜息を吐く

「もう一つ。戦艦のある船着場はどこだ？」

アイゼンの質問にすぐさま答える

「正面の階段を進んだ先です！」

なぜか敬語

「わかった」

王国兵を振り向かせアイゼンは顔面に拳を叩き込む。その光景に少年はほんの僅かに声を上げる

「手間をかけたわね」

「単なる適材適所だ」

アイゼンは腕を組み今後の方針を告げる

「鍵も必要だが、戦艦もつぶすぞ。バンエルティア号が迎撃される前にな」

「だな。管理室か船着場か、どっちに舵を取る？」

アイゼンの案に賛成したロクロウはベルベットに判断を委ねる。

ベルベットは手を口に当て当て考える

「何方にせよ二つともこなさなければなりません……」

ケンが言う

「管理室を探し出してまずは鍵を見つける、行くわよ」

「……うん」

少年には少しキツイ出来事だった、後にもっとキツイ事が起こるが

「……開かない。中から鍵がかかっている」

ベルベット達は管理室であろう建築物を見つけるが、そこも金属の扉で塞がれている

「かなり分厚い扉だ。ここが管理室じゃないか？」

ロクロウが推測する

「恐らくそうね。他に入り口は・・・」

「窓はあるが、鉄格子かかっているな」

「独立した建物のような。周囲をくまなく回ってみよう」

アイゼンの提案で周りを探る事になった。その結果一部壁が損壊し蔦が生い茂った場所を見つけ、その後格子がひしゃげている箇所を見つけた。恐らく業魔が暴れて壊れたのだろう。ケンには狭すぎて通れなかったのでベルベット達に中から鍵を開けてもらい中に入った

「ここが管理室のようね。手分けして鍵を探すわよ」

「俺たちは奥の部屋を探す」

アイゼンとロクロウは奥の部屋へと向かう。ベルベット、少年、ケンは今いる部屋を探る

ベルベットは机を、少年は探すつもりが本に夢中になっている。仕方ない事だか。ケンは棚を探っている。少年はふと本棚の上にある羅針盤に気付く

「あ!!」

それを背伸びをして手に取ろうとするが僅かに届かずぐらつく羅針盤

「あつた! 鍵——」

その時ベルベット達の横から何かが落ちる音が響く。二人はそちらに顔を向けると少年が頭を抑えながら呻いている

「あうう・・・」

ベルベットは状況を察し、呆れながら少年に歩み寄る。ケンも近づき羅針盤を取る。ベルベットは少年の頭を小突く

「痛っ!」

「これくらい我慢しなさい。生きてる証拠よ」

「タンコブ・・・が?」

少年は痛みに耐えながら言う

「痛いって事がよ」

「でも、痛いのは・・・怖い・・・」

「そりゃあ、誰だってそうだけど」

少年の言い分にベルベツトは肯定する

「ベルベツトも？」

少年の問いかけにベルベツトは僅かに笑みを見せる

「それにしても変な物が好きよね。男の子って」

ベルベツトはケンが持つ羅針盤を見る

「好き・・・？」

「好きなんですよ？」

ベルベツトは懐からもう一つの羅針盤を取り出し少年に手渡す。
もう一つはケンが元の場所に戻した

「流石に2つは要りませんよね。持ち物はなるべく少なくしません
と」

「まあ、そうね」

その時少年が呟く

「よく・・・わかんない」

ベルベツトとケンが少年を見る

「でも・・・本を見てから、ずっと不思議な感じがして・・・なんか・・・」
少年はなんとか言い表そうとするがどうすればいいのかわからない
ようだ。そこでベルベツトが助け舟を出す

「ドキドキする？」

「・・・うん、なんで針は北を向くんだろう・・・？誰が仕掛けを考え
たんだろう・・・？これがあつたら、色々なところを冒険できるの
かって思うと・・・」

少年は嬉しそうに顔を上げる

「ドキドキする」

「そういう時は言えればいい。好きか嫌いか、楽しいか怖いか——あ
んたは生きてるんだから」

「ぼくは・・・生きてる・・・」

それを聞いたベルベツトは続ける

「これはあたしの意見、命令じゃないから。いい？」
「素直じゃないですね」

「あんたに言われたくはないわよ」

ケンは先程言われた事をそのまま返す。少年はその光景を見てはつきりと答えた

「わかった」

その言葉に答える様に背の目にはつきりと光が、その心に意思が宿った

その後アイゼンとロクロウが奥の部屋から戻ってきた

「鍵があつたか。これで海門を開けられるな」

「羅針盤も必要だ。よく見つけた・・・二つもあつたのか」

「こっちはあたし達が使っていた物よ。あの時砲撃してきて海に落とすところだったけど」

「・・・ああ、すまなかつたな」

「まあまあ、どっちにせよ必要になったかもしれませんし。彼が見つけたんですから。その事は褒めるべきでしょう」

「・・・そうだな、よくやった」

アイゼンが少年を褒める。少し恥ずかしながらも

「うん」

それに答えた

鍵を入手した一行は次に戦艦の機能を停止させるために船着場に向かう

「・・・ふう・・・」

少年は少し調子が思わしくない。当然だが

「何処か具合でも悪いのか？」

アイゼンが少年に聞く

「羅針盤が落ちてきて、タンコブができた・・・」

「どれどれ・・・おお、結構腫れてるな。こいつは痛いだろう」

ロクロウは少年の頭を診る

「うん・・・でも、ぼくは生きてる・・・」

「痛みも生きている証と言いたいのか？」

「ベルベットが、教えてくれた・・・」

少年はベルベットの方を見る。当の本人はそっぽを向く
「よし、じゃあ、俺がそのタンコブを押してやる」

ロクロウが悪い笑みを浮かべる

「えっ・・・えっ・・・」

やめなされ

「ははは、冗談だって」

「馬鹿やってないで、急ぐわよ」

ロクロウとアイゼンは一足早く行く。少年も続くがさきほどの事
でしょんぼりしている。そこにベルベットが話しかける

「ここを陥落して、船に戻ったら砂糖をもらってコブに塗りなさい。
腫れが引くわ」

それだけ言うとベルベットも先に行く

「・・・うん」

く

「戦艦を潰すってどうやるんだ？」

「戦艦は強力な大砲を積んでいる。その火薬を利用するんだ」

ロクロウとアイゼンがそんなことを言いつつ船着場へと続く通路
を走る一行、だが目的地に続く扉の前に一人の対魔士が立っていた。
傍には業魔が転がっている。対魔士がベルベット達に気づいてこち
らを向く。二等とは装飾が違う

「二等対魔士!？」

「船着場はその先だな。通してもらおうぞ」

一等対魔士は剣を抜く

「貴様達は侵入者が?・・・いや、どうでもいいか。業魔に関わる者は、
すべて斬り伏せる。我が「ランゲツ流」の剣でな」

対魔士のランゲツ流という言葉にロクロウが反応する

「・・・どけ、アイゼン」

「お前こそ下がれ。こいつは俺がやる」

アイゼンの制止を聞かず、前に出るロクロウ

「いいや、”これ”は俺の獲物だ」

小太刀を構えるロクロウ。対魔士は自分の体から使役聖隷を繰り出す。人型ではなく動物だ、猪と鼠に見える。対魔士は己の剣を肩にかける変わった構えを取り、ロクロウ達に向かって走り出す

「邪魔をするなら斬る！」

「てめえ、死神を舐めるなよ」

ロクロウはアイゼンに警告したのだろうが、アイゼンは御構い無しだ。二人は対魔士に攻撃を仕掛ける、残りのベルベットと少年、そしてケンに向かって来る。ベルベットは飛びかかって来る鼠の聖隷の横っ腹に蹴りを見舞う

「ふんっ!!」

蹴られた鼠は勢いよく横に飛んでいき壁に激突するが直ぐに立ち上がる。並でないことは確かだ。少年は援護するべく聖隷術を展開しようとするが

「危ない!!」

ベルベットか声を上げる。助けようにも鼠が邪魔をしてそちらに行けない。少年の横から猪が突進してきた

「ああっ!?!」

少年は術の展開をやめ躲そうとするが間に合わない。その間にも猪は少年目掛けて突進して来る。少年は思わず目をつぶり位痛みに備える、が衝撃も痛みもやって来なかった。少年は恐る恐る目を開ける。目の前にはケンが猪の牙を掴み突進の阻止していたのだ。

「大丈夫？」

ケンは少年の無事を確かめる

「う、うん！」

「良かった、僕はこのまま此奴を抑えるから先にベルベットさんの方を手伝ってくれないかい？」

「うん、わかった！」

少年は鼠と対峙しているベルベットの方へ駆けて行く。ケンは今だに押して来る猪に力を込め逆に押し込んで行く、少年は鼠と格闘しているベルベットを援護する為改めて術を展開する。ベルベットが

それに気付く

「あたしが隙を作るからそこに撃ち込みなさい！」

「うん！」

少年が返事すると同時にベルベツトは体勢を立て直し飛び掛かる鼠を畳み掛ける

「飛燕連脚！」

一撃目の蹴りが相手の腹に食い込み大きく浮かせ即座に二撃目で地面に蹴り落とす。鼠が大きくバウンドする

「今よ！」

「行け！シエイドブライト！」

二色の光弾が鼠の聖隸に直撃する。力尽きたのか倒れ消える

「後は……」

ベルベツトはロクロウとアイゼン、ケンの方を見る、ロクロウとアイゼンは二人で何か言い合いながらも代わり番こに小太刀と拳と脚で攻撃している。ケンは猪を組み伏せている、猪は荒い息を吐いている。ベルベツト達はケンを助けに入る

「肩、借りるわよ！」

「またですか？」

ケンの肩に足を掛け跳躍する

「崩牙襲!!」

猪の背中に踵落としを決める。ケンは素早く後ろに下がる。ベルベツトはバク転し直ぐ様着地した瞬間に猪の足を払い、浮かす

「もう一度よ!!」

「わかった！シエイドブライト！」

少年がもう一回先程の光弾を放ち猪に当たる。猪は足を震えさせながらもなんとか立ち上がろうとしたがやがて力尽き消えていった。丁度ロクロウ達も決着が付いたのだらう一等対魔士が大きく吹き飛んだ。だが対魔士はまだやるつもりなのだらう剣を支えに片膝をつく

「時間がない。お前達は戦艦を潰せ」

「ロクロウ、そいつはまだ——」

「ああ。力を残してる」

アイゼンが察しベルベット達を促す

「・・・行くぞ」

船着場へ走るのを見送るロクロウ、そして立ち上がった対魔士に顔を向け質問する

「誰からランゲツ流を習った？」

その問いに対魔士が答える

「・・・聖寮特等対魔士シグレ様だ」

それを聞いたロクロウは口角を吊り上げる

「嘘をつけ。あいつが弟子なんか取るか。暇つぶしに二、三個技を教えただけだろう？で、同じ技で叩き潰された」

ロクロウの言葉が当たったのか対魔士が剣を構え向かってくる

「う・・・うおおおっ!!」

辺りに金属音が響き渡った

「はあぁっー」

ベルベットが目的の船の上で業魔と化した王国兵を斬り捨てる、後ろからアイゼンが船室から戻ってきた

(戦艦っていうからどんなものかと思ったけど、これじゃ巡洋艦。まあサイズを小さくして火砲増やしたやつもあったっけ、それと同じものだろう)

「アイゼン、火薬は？」

ケンがそんな事を思い、ベルベットはアイゼンに確認を取る

「仕掛けた。こいつをバンエルティア号への狼煙代わりにする」

ロクロウは終わったのか小太刀を納める

「ふう。・・・このまま程度じゃ修行にならないな。だが、奴の居場所はわかった」

ロクロウの目付きが鋭くなるが扉の開く音で元に戻る。ベルベット達が戻ってきた

「応！俺の目的も聖寮になったぞ。恩返しもできるし、丁度いいな」

ベルベットとアイゼンとケンはロクロウの話を聞いている。少年は周りを見回し片隅の対魔士に目が止まる。正確には対魔士だっただが、その対魔士の足元にその腕と頭が転がっている

「あ・・・!?!」

無理もない

「あんたがやったの?」

「ん?まずかったか?」

「別に」

ベルベットはそれ以上聞くのをやめた

「死神の連れには丁度いい」

アイゼンの言葉と同時に後方から爆音が響いた。船を無力化したのだ

「これで準備は整った。海門を開門するぞ!」

「・・・」

ロクロウのギャグに誰も突っ込まないし誰も反応することはない。誰か帰ってね

第12話

管理室から入手した鍵を使い、海門を開く装置へと続く扉を開ける
「よし、開いた！」

ロクロウの声とほぼ同時に遠くから大きな音が響く。少年は思わず体を縮める。ベルベツトが音の正体を聞く

「今のは？」

「バンエルティア号が近づいている合図だ、急ぐぞ！」

アイゼンが急ぐよう促し、先に進む

「わかった。とつとと海門を開けるわよ」

「うん、とつとと！」

少年はベルベツトの言葉の一部を真似て後を追う

「あの少年、だいぶ話すようになったじゃないか」

「ええ、ベルベツトさんのお陰ですよ」

ロクロウの言葉にケンが答え、二人も後に続いた。やがてそれらしい部屋を見つけ中に入る。実に大きなレバーがある、それだろう

「これが門を開ける仕掛け・・・」

「二つ目の、だな」

少年が呟く、アイゼンが付け加える

「海門は巨大な二枚の扉だ。開ける仕掛けも左右に二つある」

「なるほどな」

ベルベツトが装置に近づきレバーを操作する。一見重そうだがすんなり動いた。歯車が多い程負荷が軽くなるがこれもその類だろう

「よし！もう一つの仕掛けを探すわよ」

ベルベツト達は装置のある部屋から屋上へ梯子を使い反対側のもう一つの装置を見つけ操作する。巨大な鉄の扉がゆつくりと開き始める

「これで全開！」

「バンエルティア号と合流する。船着場に降りるぞ」

一行は合流ポイントに向かうためもう一度屋上に上がりまた反対

側へ進む。だが全員が進む中屋上の真ん中にアイゼンが殴り飛ばした王国兵がいた。だが様子がおかしい

「好きにはさせんぞ・・・ここはワシの・・・」

全員が身構える。正確には四人だが。少年はベルベットから受け取った羅針盤を見ながらそのまま歩いていった。転んだら危ない、というかこういう状態でそこまでできるのは大したものである。ポ○モンGOでもあるまいに、それほど好きなのだろう

「ワシの要塞だあつ!!」

王国兵が突如業魔に変わる。少年が漸く気付くが遅すぎた。業魔が少年に向かって体当たりを仕掛ける、少年は咄嗟のことで反応できない。ベルベットが少年の腕を掴み、引き寄せる

「ああつ・・・!」

少年の手から羅針盤が離れてしまう。転がる羅針盤に業魔が通り過ぎる。業魔は止まりベルベット達の方を向き唸り声を上げる

「ちっ!こいつも業魔病に!」

「ふん!だが前より随分マシだ」

ベルベットの舌打ちにアイゼンは皮肉たつぷりに付け加える。業魔、ガーディアンはベルベット達ににじり寄る

「羅針盤が」

少年は己が持っていた羅針盤の心配をしている。ベルベットと口クロウがガーディアンに突っ込み刺突刃と小太刀で各々斬りかかる、が刃がガーディアンの前足に当たった瞬間一寸も切り裂くことも出来ずに弾かれる

「くうう!」

「うおっ!」

二人は反撃と言わんかの如く足を振り上げるガーディアンからすぐ様飛び退く。二人のいた場所に振り下ろされた足がめり込み大きなへこみができる

「なんて硬さ・・・」

「くうく手が痺れるぜ」

二人は腕を抑えたり手を振りながら感想をいう。どうやら相手は

細かな動きは出来ないもののパワーと防御に優れているようだ。だが相手はもっぱら前足で防御している。異常に肥大化しているのもその為だろう。ケンはその少年に指示をする

「なるべく頭や胴体を狙って見て。多分頭も硬いだろうけど足程じゃなさそう、出来れば腹も見せてくれればいいんだけどね」

「う、うん……」

少年は羅針盤のことが気掛かりのようだ

「後で一緒に探そう。今はこの事態を打開する事に専念しないと」

「……うん！」

アイゼンがベルベットとロクロウの間を駆け抜け隙をついてガーディアンに頭に拍子を叩き込む、正拳から繰り出される圧縮された空気が打ち出され、直撃するが少し怯む程度であまりダメージがない。ダメ押しに拳と蹴りを叩き込むが前足で塞がれる

「ちいっ！」

アイゼンがバク転して距離を取る

「何か策はないか……」

アイゼンが静かに思案する、ロクロウが一太刀入れようとするがガーディアンがすかさず足を引っ込め防ぐ、刃が通らない

「ぐっ！これじゃ罅が開かんぞ！」

「でああ!!」

ベルベットが間髪入れずに頭に向けて紅火刃で斬りかかる。炎を纏った刃が頭部を捉えるがアイゼンと同じく怯む程度で致命打とはならない

「これでもダメか……うあっ!？」

苦虫を噛み潰したような表情を浮かべるベルベットにガーディアンの前足が横ぶりに振るわれベルベットを殴り飛ばす。ベルベットはすぐ様空中で体制を整え着地する

「大丈夫か!?ベルベット！」

ロクロウが声をかける

「たいした事ないわ。でも、少しキツイわね……」

「あの固い防御をなんとかしないとな」

「・・・一つだけあるわ」

「そうなのか？」

「でも、それにはかなり近づかないと意味がないの。如何にかして隙を作らないと」

ベルベットの”空破絶掌撃”なら硬い装甲を破る事ができる。だがその為には敵に接地する必要があり危険度が高まる。そうしている間にもアイゼンと少年が聖隷術でガーディアンに応戦している

「なんとか反撃の糸口を見つけないとな」

「・・・僕が攻撃して隙を作りましょう。あの敵、さつきから胴体を庇つてるみたいですからあそこなら皆さんの攻撃が通るはずですよ」

「何でもいいから早くして。船が来るまで時間がないのよ」

ロクロウが呟き、ケンが名乗り出、ベルベットが急かす

「では行きます」

ケンが意を決してガーディアンに向かって進む。ガーディアンもケンに気付き躍り寄る。ケンは止まり両手を振りかざしてウルトラショットを連続で放ち始める

「ふん！はっ！」

片手でのウルトラショットは両手で撃つよりパワーは下がる。尚更連射する物なら威力はかなり下がる、ガーディアンは前足で防御し耐える。ケンは尚も放ち続ける

「ケンの奴大丈夫か？あれじゃ足止め程度にしかないぞ？」

「一体何するつもりなの？」

ロクロウとベルベットはケンの行動に疑問を抱くガーディアンは光弾を防ぐのに夢中で横がガラ空きだ。

「そういう事ね！」

ベルベットが気付く。ケンは攻撃を止めガーディアンを横に素早く回り込む

「これなら！」

ガーディアンを横つ腹にドロップキックをする。前しか見ていなかったガーディアンはまともにくらい横倒しになる、一番の弱点であろう腹が剥き出しになる

「今です！」

「白黒混ざれ！シエイドブライト！」

「蹂躪せよ！ウインドランス！」

螺旋の光弾と風の矢が胴体に命中するガーディアンは初めて大声を上げる。それをロクロウは見逃さない

「さっきのお返しだ！風辺剣！」

距離を詰め拗らせた腕を高速で回しながらの一突き。衝撃波を生み出しそれがまた胴体に刺さる

「行け！ベルベット！」

ロクロウが声を上げ、ベルベットがすかさずガーディアンの頭に拳を打ち付ける

「くらえ！空破絶掌撃！」

腕から刃が勢いよく飛び出し頭に直撃する。ガーディアンが声を上げながら大きく仰け反る。ベルベットがトドメにかかる

「容赦しない！」

ベルベットが跳躍し、右足を回し上げそれが赤く光る。振り上げた足を下ろしガーディアンの頭を荒々しく叩きつける、反動で浮き上がる

「消えない傷を、刻んで果てろ！」

追撃する為自身も飛び上がり刃で斬り裂き地面に叩き落とす。トドメにベルベットは業魔手を繰り出す

「リーサル・ペイン!!」

ダメ押し of 業魔手の一撃が決まり、ガーディアンが沈黙した。

戦いが終わりそれぞれ構えを解く。倒したガーディアンを尻目にベルベットとロクロウが端に近づき下の様子を確かめる。下は業魔が我が物顔で闊歩している。少年とケンと一緒に羅針盤を捜している

「船着場は業魔の巣だ。あれじゃ船に乗り込まれちゃうな」

ロクロウがそれを言った直後、また大砲の音が響く

「ちっ時間がない」

ベルベツトは顎に手をやり何か考え、アイゼンに聞く

「アイゼン、船に止まらずに海門を抜けるよう指示できる?」

ベルベツトの考えにロクロウが質問する

「それなら船は助かるが、俺たちはどうする?」

それに対しベルベツトは

「この下を通る船に飛び移る」

大胆である

「お・・・おう!？」

そう言われて驚きの余り言葉が出ないロクロウ

「それしかないでしょ。アイゼン、何とか合図を——」

「必要ない。バンエルティア号は海門を突っ切る」

「伝えなくても?」

「俺も同じ策を考えた。アイフリード海賊団の流儀だ」

アイゼンはそれを言うと後ろを振り返りながら口角を上げる

く

程なくしてバンエルティア号が見えた。船は波を立てつつ海門を進む

「本当に真つ直ぐ来た!」

「こつちも行くわよ!」

ベルベツトが船に乗り込む為反対側へと移動を始める、ロクロウとアイゼンもそれに続く。その横で少年とケンは今だに羅針盤を探している

「おお・・・無事で済むかな?」

下を見ながら呟くロクロウ。恐怖なのかあるいは楽しみなのか、恐らく後者だろう

「死神に保障してほしいか?」

その隣でアイゼンがいじったらしく言う。そんな中少年は地面を見ながら捜し。ガーディアン of の足元に落ちている羅針盤を見つける。少年はすかさず走り寄ると同時にロクロウとアイゼンは飛び降り、ベルベツトは寸前で気付く

「ちよつ、なにを!？」

少年は羅針盤を拾い上げ安心した表情を浮かべるが突然ガーディアンが動き出し驚愕に変わる

「ひ・・・!？」

ガーディアンが足を振り下げ少年を叩き潰そうとする。少年は横に跳びのき躲すが間髪入れずにもう一撃、風圧で少年の体は宙に吹き飛ばされる

「うわあああ!!！」

少年と羅針盤は一緒に吹き飛ばされるが必死に手を伸ばし羅針盤を掴む。ベルベツトは少年の元へ駆ける。彼女の脳裏には三年前、祠に落ちて行く弟の姿が浮かんだ。ベルベツトは自然と叫んだ

「ライフイセット!!！」

ガーディアンが前を通り過ぎようとするベルベツトに足を振り上げた瞬間横から砲弾が飛来しガーディアンに直撃する

「うああああ・・・」

落下する少年の手をベルベツトが掴み左手でへりを掴み壁に足をかける

「まったく、あんたは!！」

「ごめんなさい・・・」

怒っているというより世話がやけるといふ雰囲気のあるベルベツトと謝る少年。ベルベツトはその言葉を聞き穏やかな表情を見せた。

「大当たりい～～～っ!!！」

バンエルティア号からマガルウの声が響く、なぜか大砲の横で大はしゃぎ。ロクロウとアイゼンがロープを滑り降り甲板に着地する

「さっすが儂じゃのー♪」

撃ったのはマガルウだった

「さっさと行くわよ」

「うんー」

ベルベツトはへりに力を込める。がその時へりが突然崩れる、先ほどの戦いであちこち損傷していたのだ

「しまった!？」

「うわっ!？」

ベルベットと少年はそのまま落下を始める。業魔手に変え壁を引つ掻こうにもとても間に合わない。祠でアルトリウスに左腕を切断され落ちて行く瞬間と重なる

(そんな・・・!あの時と同じ・・・こんなので・・・)

ベルベットはスローモーションで離れて行くヘリを見つめながら心の中で叫ぶ。その時逆光の中から一本の腕が伸びベルベットの左腕を掴む

「間に合った」

そこにはケンがいた。ベルベット達とは離れた所で探していたのだ

「あんた・・・」

「大丈夫ですか?今引き上げます」

ケンはベルベットを少年ごと引き上げる

「さあ、急ぎましょう。船が離れてしまう前に」

「ええ」

三人は走って船の方に向かう。幸いにも間に合う距離だ

「行くわよ」

ベルベットは少年の手を取り飛び降りる

「うわあああ~~~~!!」

少年は叫び声をあげる。ケンも後に続く

(あれ破けないよな・・・)

そんな事を心の中で思いながら飛び降りる。三人はバンエルティア号の天幕に落ち、無事帰ることができたのだった

程なくして海門を抜けたバンエルティア号の甲板でベルベットと少年は息を切らせて膝をついていた。ケンは仕切りに腕や足首を回している

「ふう・・・」

ベルベットは息を整え立ち上がる

「お見事!」

ベンウィックが言う

「まずは命の恩人への感謝が欲しいのう？」

マギルウの言い分にベンウィックのツツコミが入る

「いやいや、触るなって言ったのに大砲いじって暴発させたんでしょ！」

「そくじやが、あれはいい暴発じやよ〜」

結果オーライとばかりのマギルウ。面々は呆れたと言わんばかり仕草を見せた。少年はベルベツトの方を向いて頭を下げる

「ごめんなさい」

ベルベツトはやれやれという感じの仕草をし、片膝について羅針盤を持った少年に目線を合わせる

「ちゃんと持つてなさい。そんなに大事なら」

ベルベツトは言い聞かせるように言う。アイゼンが一步出て手を出す

「貸せ。進路を出す」

少年はアイゼンを見るとそつぽを向いて拒否する。アイゼンは一瞬驚くも直ぐに笑みに変わる。彼の意志を見たのだろう

「・・・なら。お前が羅針盤を見ろ」

その言葉に少年の顔に笑みが出る

「うん！」

「ただし、読み間違えたらサメの餌にするからな
!？」

アイゼンの言葉に固まる少年

「しつかりね」

ベルベツトが鼓舞する。そんな中少年はベルベツトに聞く

「あの・・・『ライファイセット』って？」

ベルベツトは自然と叫んだため気にしてなかったのだろう。改めて言われて少し口ごもりながらも答える

「・・・名前よ、あんたの」

少年はそれを繰り返す

「僕の名前・・・ライファイセット」

「いい名前じゃないか」

ロクロウが賛同する

「マギルウほどじゃないがのー」

一言余計なのは実にマギルウらしい

「海峡を抜けるぞ。進路を取れ、ライファイセット!」

ライファイセットに指示を出すアイゼン

「うん!進路は・・・ローグレス!」

仕事を任されたライファイセットはローグレスの方角に指をさした

船の上で2

ローグレスに向かってバンエルティア号が進む中、短いながらも休息を得ていた。ケンは甲板の隅で頻りに体を動かし感触を確かめていた

(やっぱりルシフェルさんから伝えられた時よりもっと重くなってる・・・僕が不覚を取ったことが原因かな・・・)

ケンの予想はある程度当たっていた。レオはケンの鍛錬のためにボディースーツをウエイト代わりにしたのだ、一番最初に師事した時よりまだ軽いがそれでも100キロある。50キロ軽いだけでまだましであるが・・・だがその負荷は自分にもみ伝わり周りには影響が出ないという謎仕様だ。防御効果などある訳なく唯々重いだけだ

(あーあ、師匠カンカンだろうなあ・・・)

そんなことを思いながら肩を落とす。そこへ後ろから声がかかる
「なにしてんのよ、そんなにしよぼくれて」

ベルベットがそこに立っていた。ケンが直ぐに取り繕う

「あーいえ、ちよつと考え事をして。それで何か御用ですか？」

「いや、あの時は助かったわ。また助けられるとわね」

先ほどの礼を言いに来たのだ

「いえ、礼には及びません。あれは完全なアクシデントでしたし」

「それでもよ。借りができたことには変わりないんだから」

「自分は借りはいらぬ人間なので」

「やっぱり変わってるわね・・・あんた・・・」

「変わってるのは僕だけではないでしょう？」

ケンがふとベルベットの左腕を見る。そこから黒い靄が出ている

(またあの症状か・・・これからは水際で防がないと・・・)

「それもそうね、むしろ、あんたとライファイセットが一番まとも・・・つてなによ」

ベルベットのすぐ前にケンが近寄り、彼女の左腕を手に取りフルムーンレクトを当てる

「また」なの？」

「はい。ですが今回は軽いので大丈夫です」

ベルベツトは察し、ケンが答え腕を話す

「流石に今ここで暴れられるのもアレですし、なにより・・・」

「なにより？」

「あの子もいますから。そうでしょ？」

ケンはライフィセットの方を見る。羅針盤を弄り回しているようだ
ベルベツトもケンの視線を追う

「・・・そうね」

ベルベツトが短く答えた

）

どこからか電子音が響く

ん？・・・やあ、海門を抜けたよ。いよいよ彼女の・・・いや、弟の仇がいる王都に行くわけだよ。・・・うんまた連絡する。それじゃ電子音が響き携帯電話をしまう

おっと、すまない。彼と連絡をされていてね、今回はケンのボディスーツについて簡単に説明しておこう。ヘラヴィーサを抜ける前に私は彼の師。つまりレオに彼の近況を報告したのさ。それついでに鍛錬として最初に50キロのウエイトにしてやれって頼まれてね。だがヘラヴィーサを抜ける直前、ケンがあの人から不覚を取っただろう？さすがに不味いと思って隠そうとしたんだがつい口が滑ってしまつて。ワザとじゃないぞ？それを聞いたレオは案の定怒つてね、ケンに直接怒鳴りに行くと言い出すもんだから私も必死で止めたよ。いやホント、あの時はどうなることやらとヒヤヒヤしたよ。なんとか説得して彼のボディスーツの重量を倍にすることで落ち着いたというわけだ。ああ見えて弟子が心配なのさ。彼はローグレスに着いたら私も観光がてら会いに行くとするかな・・・

選民も例の物を手に入れたか。こちらにも動く、ん？全部知ってるんじゃないかだつて？ふふふ。まあ、そう慌てることもないさ。それ

じやまた

第13話

バンエルティア号がゼクソン港に入港する。この港は毎日100隻の船が物流、渡航、旅行者などでごった返すミッドガンド領最大の港である。今は聖寮の管理下に置かれており船乗りにとつてはやりにくい状態

ベルベット達が船から降り、船着き場に降りる

「いやあ、新鮮だな！まともに船に着けた」

ロクロウは腕を組みながら言う。確かにアイゼン達に会うまで港に着いたことがなかったのは事実である

「坊や、よかったのー。サメのエサにならずにすんで」

「うん、よかった」

マギルウはいつものものにやけ顔でライフィセットに話しかける。ライフィセットも返す。その横でアイゼンがベルベット達の横を通る「いいの？海賊船がこんな堂々と」

ベルベットの発言に応えぬままアイゼンはこちらに歩いてきた一人の男に近づく

「北の海はいかがでしたか、アイゼン副長？」

「ヘラヴィーサは一時的に機能停止、みはらしだい海門要塞が沈んだ。当分、ノースガンド領の流通は大混乱するはずだ」

「それは耳よりな。早速手を打たせていただきます」

「船長の手がかりはあったと？」

「はい。大分前の噂ですが、アイフリード船長はタイタニア島に送られたとか」

男の言葉にベルベットの目つきが変わり腕を組む

「対魔士が管理する監獄島だな。わかった、行ってみよう」

「いつも通り、我が社の商船として停泊届を出しておきましたが、お気を付けて」

アイゼンが頷く

「ローグレスで盛大な式典があるせいで、ここも一目が多くなってお
りますので」

「そこまで聞いてロクロウがなにかわかったのか顎に手を当てる
なるほど。情報が”船止め”^{ボラード}の見返りってわけだな」

「情報が・・・見返り？」

ライファイセットが聞き返す

「最新情報をいち早く教えてやれば、商人は儲ける機会を得られるで
しょ」

「だから、海賊でもかばってくれる」

情報を制する者が得をする。どの時代もどこの世界も変わらない
ということだ。海賊、自由であるからこそ情報の入手が早いのだろう
「アイゼンたちは、あちこちの港にこういうコネをもってるんだらう
な」

「聖寮の規律でも、人の”欲”までは縛りきれんということじゃ」

「・・・そうなんだ」

アイゼンが戻ってくる

「監獄島に行っても無駄よ。アイフリードはそこにはいない」

「なぜそれを？」

「あたしは監獄島から脱走してきたの。監獄の囚人が言ってた『この
島から生きて出たのはアイフリードだけ。メルキオルというジジイ
の対魔士が連れ出した』って」

ライファイセットが補足する

「メルキオル様は、特等第魔士で聖寮の長老。いつもは本部にいるは
ずだよ」

「様”はいらない」

ベルベットが語気を強めライファイセットに言う

「・・・海賊バン・アイフリードは、俺たちの船長だ。あいつの失踪に
は、聖寮の上層部が絡んでいるようだな」

「その本部は王都にあるのかの？」

マギルウが口をはさむ

「うん、王都ローグレス離宮に。行ったことないけど」

「ベルベットと目的も”そこ”にいる男だろう？」

「目的は同じというわけだな」

「謝らないわよ。巻き込んでも」

「それは死神こっちのセリフだ」

あくまで利害が一致しているだけであるため、意外とさっぱりしている。いい意味で

この後異海についてと探査船についての話を聞いた、これについては別話で

ロクロウが思い出したかのようにマギルウの聞く

「お前、なんでまた戻って来たんだ」

「主らが寂しがると思ってたのー」

マギルウは意気揚々と答える

「ぜんぜん寂しくないけど」

ベルベットが面倒そうに話す。実際疲れるのだろう

「裏切者を捜すとか言ってたのはどうなった？」

「取り逃がした・・・手がかりもない」

「魔女なんだから、魔法で探せばいいでしょ？」

「あいにくと儂の魔法は二人三脚方式のお、裏切り者のあやつがおらねば発動せぬのじゃ」

「共犯者ありきのペテン魔法というわけだな」

ロクロウからペテン師扱いされるマギルウ

「ちがわい!!」

そこだけは即座に否定するマギルウ。現状ではそう思われるのも仕方ないが

「その裏切り者とやらを捜す手伝いはしないわよ」

「バナナで釘が打てるほどの冷たさじゃのー」

ベルベットの発言につくりと肩を落とすマギルウ。ふとロクロウが問い詰める

「そいつの他に仲間はいないのか？」

「はて・・・おらぬのー」

「帰りたい故郷はないのか？」

「ないのお・・・」

「魔法の他に、やりたいことはないのか？」

「ないのお・・・」

あっけらかんとするマギルウ

「あ・・・」

「どうした、ライフイセット」

それを見ていたライフイセットが何かに気づいたのだろう。アイゼンが声をかける

「うん・・・マギルウの話聞いてたらなんか胸がもぞもぞして・・・鼻がつんとした・・・」

友も居場所ま目的もない空っぽの人生を送る魔女を、お前は憐れだと感じたんだ

「憐れ・・・？」

「相手をかawaiiそうと思う気持ちのことだ」

皆マギルウに対して辛辣、ひどい

「・・・マギルウは憐れ・・・」

「そういう目で儂を見るでなくく!!」

かわいそうなマギルウであった。一連の出来事を聞いていたケン
は内心複雑な気持ちだった

(・・・過去の無い僕は、一体なんなんだろう。)

く

ローグレスへ向かうためダーナ街道へ出る

「ではでは！改めてローグレスへ！」

いつもの調子に戻っているマギルウ

「・・・あんたも来るの？」

ベルベットがぼつりと言う

く

街道を進み橋に差し掛かる時、その先に大きな壁が見えた

「わあ・・・あの壁・・・すごく大きい・・・」

「この国の王都ローグレスだ。巨大な壁で街を囲み、業魔の侵入を防いでいる」

ライフィセットの感想にアイゼンが説明する

「聖隷をこき使うことによつて、人は身の丈以上の文明を手に入れたのじゃよ」

「始めてじゃないだろ、ライフィセット？」

ロクロウがライフィセットに聞く

「前にも来たことあるけど、その時は、僕は今みたいじゃなかったから・・・」

「そうか。対魔士に使役されてる聖隷は、景色を見ることもままならないんだな」

「次にままならなくなるのは、儂らじゃがのー」

「・・・？」

マギルウの発言に首を傾げるライフィセット

「王家も聖寮もある国の中枢じゃ。王国兵も対魔士もあちこちで見張つておる。儂ら悪党にとつては、居場所のない街じゃ」

マギルウの言葉にベルベットが口を挟む

「居場所なんていらぬ。アルトリウスの居所さえわかれば、それでいい」

「

王都の門の前にたどり着く、流石に警備はいるが

「検問・・・！」

「全員を調べるものじゃない。自然にかわすぞ」

ベルベットの反応にアイゼンが注意し先に歩き出す。それに続いてライフィセット、マギルウ、ロクロウ、ケンが続く。

「顔、硬いぞ」

「わかつてるわよ」

ロクロウの指摘にベルベットが返す。緊張するのは仕方ないが、皆ある程度間隔を保ちながら警備の前を通り過ぎるがベルベットが通り過ぎた直後警備の一人が彼女に気づき後をつけた。まあ、あの格好

じやね

王都ローグレスへ到着する。此処ローグレスは巨大な王城を中心に鮮やかな石造りの街並み、整えられた水道設備の象徴である大きな噴水が人々の憩いの場になっておりインフラも充実している。ちなみに王国の大陸統一記念に大聖堂があり。内部は現在の人類が持つ建築技術の粋を持ってかなり豪華な構造なのだがそれはまだ一部しか完成しておらずその奥側の巨大な神殿は今も尚建設途中、完成には数百年かかる模様。

ローグレスに入ったのはいいもののベルベットが呼び止められる

「そこの黒コートの女。」手形”を見せてもらおう」

ベルベットが戸惑う。アイゼンはコインを弾く、呪いだろうか

「ええと・・・」

「どうした？聖寮が旅人に発行する”通行手形”だ」

皆が振り返りロクロウは腕を組む、マギルウは何か思いついたのかにやける。次の瞬間ベルベットの頭をはたく

「!?」

「この未熟者！奇術師見習いの基本は、ニツコリ笑顔と教えたじやろーが！」

マギルウが大道芸な仕草をしながらベルベットを叱咤する

「奇術師？」

警備兵が奇術師というフレーズを聞き返す。マギルウがニツコリ笑顔で応対する

「いかにも！ご覧の通りクセ者揃いの我が一座。その名も”マギルウ奇術団”と称しまする♪」

奇術団と聞いて周りに住民が集まってくる

「式典の余興か？」

「タコにもその通り！いやはや、我がバカ弟子が失礼いたしました。ほれ、兵士様の御不審を解くのじや。お前の得意芸、ハトを出してみせよー！」

「は!？」

突然の無茶振りにただ驚くしかないベルベット。兵士も見ている「すみません、師匠・・・仕込みを忘れました」

咄嗟の言い訳、もといできるはずもないわけで

「な、な、なんと情けない奴じゃ！芸の道をイカに心得おるか！」

怒る振りをするマギルウに兵士が止めに入る

「待て・・・こんなところでハトを出されても困る」

「いいや、勘弁できませぬ！お詫びにハトのモノマネをせいっ！」

ベルベットが後で覚えてるとばかりの表情

「ハ・ト・マ・ネー！」

カメラがあるわけがないが・・・一文字ずつズームする。同じ視点なので正確には1カメラだけでも。ベルベットは屈辱的な表情を浮かべながら右手を嘴の形にして口の前にやる

「ポッポ・・・」

周りから笑いが起こる。アイゼンもロクロウも笑っている、当の本人は顔を赤らめる無理もない。その直後マギルウの右手が光りそこから鳩が出現し飛び立つ。紙吹雪も舞う

「おおお~~~~!!」

「^{かよう}斯様に泣く子も笑うマギルウ奇術団！ローグレスの皆さまにご挨拶の一席でございました♪」

マギルウの決めポーズに周りから歓声と拍手が送られる

「こら、こんなところで宣伝をするな！さっさと散れ！」

兵士が声を荒げる

「かしこまり〜♪」

こうしてうまく誤魔化せた。門を後にする一行、一人を除いて「待て！お前はこいつらの仲間ではないだろう。手形を見せてもらおうぞ」

兵士はケンを呼び止める。奇抜な格好でない故に一回りも大きい彼は目立つ。逆に

「・・・ええ」

アイゼンが目線だけをケンに送る。ケンも目線を合わせる「行くぞ」

一行もそれを察し先に移動していく

「さ、手形を見せてもらおうか」

「すいません。手形は盗まれてしまいました」

「そんな事など理由にならん。手形がなければ聖寮に再発行手続きをしてもらう。それまで足止めだ」

ケンと兵士はお互い向き合ったまま問答する。何とか誤魔化して追いつきたいケンと仕事である兵士、このままではでは埒が開かない(困ったな・・・)

その時後ろから聞き覚えのある声が聞こえた

「やあ、暫く振りだな」

ケンが後ろを振り向くとそこには黒いジーンパンと着崩したシャツ、黒髪のオールバックの男、ルシフェルがいた

「ルシフェルさん」

「ほら、これが必要だろ?」

ルシフェルがケンに何かを投げ渡す。ケンがそれを取り見て見ると何かの証明証だ

「それは手形、盗まれたんじゃないのか?」

「すまないな兵士さん、私が取り返したんだ。盗人はそれを使ってここに入り込もうとしたんだろうな。でもこれで何も問題ないだろう?」

そうか言われ兵士は渋々許可する

「むう・・・釈然としないが。通れ、問題を起こすんじゃないぞ」

そのまま持ち場に戻っていく兵士

「すいません、助かりました」

「別にいいさ。私も観光で来たようなものだしな」

「しかし、手形は一体どうやって?」

「そこら辺はちよこつとさ。造作もないさ」

「はあ・・・」

ケンは少し訝しむが聞くのも野暮なので流す

「急いだ方が良いんじゃないか?待ってるぞ?」

「あ、そうですね。貴方は如何なさるんです?」

「ブラブラするさ。それじゃまた後で」

ルシフェルはそのまま裏路地へ消えていった

「おっと、急がないと」

ケンもベルベット達に追いつくため走り出す

」

「ははは！なかなかの手口だったな、マギルウ」

「あんな子どもダメシはら、今回限りポツポツ」

ロクロウが笑いながらマギルウを褒める、当のマギルウはこんな朝飯前なのだろう、煽りは余計だが

「・・・」

ベルベットがマギルウを睨む、言わんこつちやない

「おお、怖い怖いポツポツ・・・」

ロクロウの後ろに隠れ尚も煽るマギルウ。殺されるぞ

「ハト、すごかった」

ライファイセットが年相応の感想を述べる。今までそういうものを見たことがなかったのだろう。疑問だがどつちのハトだろうか。ベルベットは少し呆れている、怒る気が失せたのだろう

「その子どもダメシで入れた。王都も大したことないわね」

「それだけ守りに自信があるんじゃないやろうて。ライファイセット、王都の戦力を知っておるか？」

マギルウがライファイセットに聞く。この中ではライファイセットが一番王都に詳しい筈だ

「王都に配備された対魔士さ・・・対魔士は千人以上。守備兵士は二個師団」

「・・・流石は王都だな。油断ではなく余裕と見るべきだろう」

アイゼンの冷静な分析、聖隷を使役し高い能力を持つ対魔士、一等は人数がかなり少ない、二等がいるのは明らかだ。それでも油断ならない。更には聖隷を使役出来ないが戦闘訓練を積んだ兵士が二個師団。師団一個で一万から二万人前後、ざっと数えて二万から多くて四万。これなら誰も襲うなんて考えないだろう

(通行手形がないと厳しいか・・・)

「民衆がニコニコなのも納得じやの。業魔に怯えまくった数年前とは大違いじゃわー」

「でかい式典があると言ってたしな。そんな余裕があるほど、ここは平和なんだろう」

「・・・その平和は・・・ラファイの・・・」

マギルウとロクロウの会話を他所にベルベットが頭を抱え苦しうに呟く

「ベルベット・・・？」

ライファイセットが心配そうにベルベットを見ていた

「所でケンの奴遅いな。まだあそこにいるのか？」

ロクロウがケンのことを思い出す

「ケンは地味じゃからの。奇抜な儂らがいたからかえって目立ったんじやろう」

「地味で悪かったですね」

ケンが追いつき、合流する

「もう大丈夫なのか？」

「ええ、なんとか通してもらえましたよ」

「ケンもハトマネをしたのかえ？見せて欲しいの〜♪」
「・・・」

マギルウの煽てにベルベットがまた気を悪くする。やめたまえ

「違いますよ、交渉したんです。ここで暴力沙汰を起こすわけにはいかないですからね」

「王国兵ならまだしも対魔士もいる、眼を付けられたらそれまでだ」
「無事通れたなら、先を急ぐわよ」

ベルベットがハトに関してこれ以上触れたくないのだろう急かす

ベルベットたちは噴水の広場を抜け王城の前まで来る、城門はしまっているがその前に民衆が集まり口々に声を上げている

「ミッドガンド!!ミッドガンド!!ミッドガンド!!ミッドガンド!!」

「すごい歓声じやのう。驍が行き届いておるわ」

マギルウがあきれながらも皮肉を言う。継るものが聖察しかない故だ

「王国民よ！ミッドガンド聖導王国第一王子パーシバル・アスガードである！この良き日を皆と祝えることを、父王と共にうれしく思う」

「おおお〜〜!!」

城の中から声が響く

「式典が始まった」

「こりやあ、割って入るのは無理だぞ」

アイゼンが腕組みをし、ロクロウが思案する

「十年前の”開門の日”以来・・・業魔病と業魔の脅威によって我が王国は存亡の危機を迎えていた」

そんな中ベルベットは辺りを見回している。ふと上を見ると見張り台に目が留まる

「だが、命が朽ち、心が尽き果ててゆかんとする地に奇跡の剣をもち立つ者があった」

「あそこー」

「登るのはいいが、ここで襲うのは無謀——」

ロクロウが言いかけた時パーシバルがある男の名を言う

「誰であろう・・・アルトリウス・コールブランドである」

「!!」

「アルトリウス!!!アルトリウス!!!アルトリウス!!!アルトリウス!!!」

その名前にベルベットの目つきが変わりすぐさま走り出す

「アルトリウスの偉業は、誰もが知っている。彼は、業魔に苦しむ民の救済にすべてを捧げた」

（でも、殺した）

ベルベットが縁に足をかけ見張り台に向かってジャンプする。業魔手で城壁にしがみつくと

「五聖主の一柱たるカノヌシを降臨させ、聖隷の力を我らにもたらした」

だがそのまま擦り落ちる

（でも、殺した！）

「ベルベット！」

ライファイセツトが真下まで駆け付け声を上げる

「混沌の世に”理”という希望を与え、今、その希望が”絆”となって我々を結んでいる」

(でも、お前は！)

ベルベットが歯を食い縛る

(あたしの大事なものを全部ー！)

業魔手で壁を突き刺し登り始める

「アルトリウスの偉大なる功績と献身を讃え、今、ここに厄災を祓い民を導く救世主の名ー」

ベルベットが壁を登りきり見張り台の上に立つ

”導師”の称号を授けん！」

「導師！アルトリウス！！導師！アルトリウス！！」

一気に沸き立つ民衆を眼下に見据えるベルベット。その目に怒りが宿る

「導師・・・アルトリウス！！」

パーシバルが後ろを向くと奥から一人の男が歩み出る。アルトリウスその人だ、アルトリウスが前に出て語り出す

「・・・世界は厄災の痛みに満ちています。なのに、私は皆さんに頼まねばならなかった。」

その後ろでオスカー、メルキオル、テレサ、そして一等対魔士が彼の話の聞いている

”理”による苦痛に耐えてくれと。”意志”という枷で自らを戒めてくれと。なぜなら、揺るがぬ理と、それを貫き通す意志。これが厄災を斬り祓う唯一の剣つるぎだからです」

アルトリウスが左腕をあげる

「今ここに、その剣がある。私は誓おう！我が体と命を、全なる民のために捧げることが。すべての人々に聖主カノヌシの加護をもたらし、厄災なき世に導くことを！」

左腕を振り払い前に向ける

「世界の痛みは！私が必ずとめてみせる！」

アルトリウスの宣言に民衆は一層沸き立つ。ベルベツトは左手を握りこむアルトリウスの言うことに嘘はないだろう。だが具体的な内容は明言していない、あくまで式典というのものもあるだろうが。仮に宣言した事をそのまま実行するのであればそこには意志はない

「でもお前は・・・」

ベルベツトが言いかけた時、後ろからロクロウの手が頭を掴み押さえ込み姿勢を低くさせる

「バカ！見つかるぞー！」

後ろからライファイセットとケンが合流する

「ライファイセットを殺した・・・!!」

「え・・・!?!」

その言葉がライファイセットの耳に入る。ベルベツトの握りこんだ手から血が滴り落ち、ケンがそれを横目にアルトリウスを見る、その時指を弾く音と共に周囲、いや世界が時を止める。ケンにはそれが誰なのか分かっていた

「あれが導師アルトリウス、どうだ？感想は」

「・・・確かにあの人はこの世界を救おうとしている。国民の殆どが彼について行くでしょう」

ルシフェルが縁の上に立ちケンの横で腕を組みながらアルトリウスを見ている

「そうだな。客観的な立場から言えば彼のやろうとしていることは極立派だ、民たちも活気が出るのも当然だ」

「ですが。具体的な事は何も言っていない。仮に彼の言葉どりに平和を体現するならば・・・」

「そこに意思や感情はないってことかい？」

「・・・」

ルシフェルの言葉に口を閉ざすケン

「まあいいさ。現状ではああ言わないと団結は難しいからな。それじゃ私は行くとするよ」

「またどこかにっ？」

「そんなところさ、じゃ」

ルシフェルが後ろを向きながら指を弾く。それと同時に時が動きだす

ベルベットたちは一度見張り台から降りる

「・・・導師アルトリウス。あれがお前の標的か」

アイゼンの問いにベルベットが何も言わずに目を閉じる

「いきなり飛びかかるかと、ヒヤヒヤワクワクしたわい」

「それじゃ無駄死にでしょ。」理”と”遺志”の剣が要るのよ」

マギルウの煽りに冷静に答えるベルベット、あの状況で飛び込まない程度の冷静さはあったようだ

「アルトリウス様を・・・殺す・・・」

ライフイセットは殺すという言葉に少しショックを受けているようだ

「手堅くてつまらんのか。そろそろ、儂はおいとまするかの。なごりおいしいじやろうが、捜し物があるでな」

「お好きにどうぞ」

「さよなら」

ベルベットはどうでもいいと言わんばかりに手を振りライフイセットは残念そうに別れを言う

「じゃあの。皆の大願成就、七転八倒を祈つとるぞ♪」

それを最後にマギルウが去っていった

「敵は導師様とやらだ。姿を隠すような相手じゃない。じっくりいこうぜ」

ロクロウの言葉どうり導師である以上こそそこそできない。十分爪を研いで首を搔つ切ることまでできる

「奴の後ろにいたジジイがメルキオルだな」

「そう」

アイゼンがライフイセットに確認を取る

「奴らの情報を集めよう。なにをしているかわかれば隙を突ける」

「といっても、王国の最重要人物だ。探るにも手掛かりがないとな・・・」

「アイゼン、王都に裏の知り合いはいないの？船着場の時みたいな」
「内陸には疎いが・・・アイフリードが懇意にしていた闇ギルドがあつたはずだ。バスカヴィルというジジイが仕切っていて、確か、王都の酒場が窓口だと」

「闇ギルド・・・そんなものがあるのか？」

ベルベットが小さく呟いたと同時にライファイセットの腹の虫が鳴く

「わっ!？」

「ははは、とにかく酒場へ行ってみよう。腹ごしらえはできるだろう」
「そうね」

「あの式典、導師のお披露目だけあって、対魔士軍団勢揃いだったな」
「お前が追つてる奴はいたのか？」

アイゼンがロクロウに聞く

「いや・・・ああいう場に、すまし顔で並ぶ奴じゃない」

「勢寮の上位対魔士なんだろう？」

「あいつには関係ない」

「そうか」

「ところで、ベルベット、あの導師様は右手をケガでもしてるのか？」

「あいつは昔、大ケガを負って・・・利き腕は使えない」

「やっぱりな」

「でも、左腕だけでも超一流よ」

「動きを見ればわかる。体に無駄な力みがなく、ぶれもないし、意識も丹田に置かれていたからな」

「タンデンってなに？」

聞き慣れない言葉にライファイセットがアイゼンに聞く

「腹の底・・・臍下から指二本ぶんくらいあたり、全身の気が集まる場所だと聞いたことがある」

「なにより、殺気を微塵も感じさせないくせにどこにも隙がない・・・

あの導師様は、強い」

「・・・」

「あいつ」がアルトリウスのそばにいる理由は、おそらく・・・」

ロクロウがそこまで言った途端に目がぎらつく

「俺もあいつを斬りたくなってきたぜ」

それからしばらくして一行はアイゼンが闇ギルドがあるという酒場に入る。中はいかにもな感じでテーブル席とカウンター席、その奥に酒が入っているであろう大型の樽が並べられている。そのまま注げる様に蛇口が付いている。ベルベットがバーテンであろう男に近づく

「いらっしやい」

「この子になにか食べ物を」

横にいた老婦人が話しかけてくる

「あら、小さなお子様連れなんてめずらしい。ここは酒場だけど、食事もなかなか美味しいわよ。この店の名物はマーボーカレーよ。一週間も煮込んでつくるの」

「マーボーカレー・・・」

「じゃあそれを」

ベルベットがそれを注文するライフイセットは初めて聞く言葉に食いつく

(マーボー・・・カレー・・・。普通のカレーとは違うのかな?)

聞き慣れない言葉にケンは思考していた

「ところで、バスカヴィルって人を知らない?ここで会えるって聞いたんだけど」

バーテンの男が話始める

「・・・そのジイさんは勢察の規律に逆らった悪人だ。とつくに処刑されたよ」

「・・・そう」

ベルベットは短く答えた

その後ベルベットたちは食事と取ることにした。ベルベットとライフイセットとケンは例のマーボーカレーをロクロウとアイゼンは

その横で心水を立ち飲みしている。ライフィセットはマーボーカレーをがつついている。

「ベルベット、マーボーカレー美味しいよ」

それを言った後またかつ喰らい始める。ベルベットもスプーンをとりカレーを口に運ぶ。ベルベットの表情が変わる

「・・・おいしい。」

「でしょー！こんなの食べたの初めてだよ！」

ベルベットの感想にライフィセットも賛同する。ベルベットはチラリとケンの方を見る、当人はというところ

「ハムツ、ハフハフ、ハフツ!!」

ライフィセット以上にカレーを掻き込んでいる

（うまい。「豆腐入りのカレー聞き慣れなかったけど逆にそれがアクセントになって食べば食うほど癖になる」

「あらあら、そんなに美味しそうに食べてくれるなんて作った方としてうれしいわ。お代わりはいかが？」

「え？ああはい、ありがとうございます」

勧められるままに皿を婦人に渡す姿を見ながら食事を続けるベルベット。お代わりを出したあと婦人が話しかけてきた

「仲がいいのね。ご姉弟？」

婦人はベルベットとライフィセットを見ながら言う

「いえ・・・」

ベルベットがライフィセットを見ながら短く答える

「そうよね。あなたの弟さんは殺されたんですものね」

婦人の一言で場の空気が一瞬で変わる。ベルベットがそれを聞いた途端すぐに立ち上がる

「なぜそれを!？」

アイゼンとロクロウも警戒する。ライフィセットも婦人を見る。ケンはそのままカレーを食べている

「闇は、光を睨む者を見ているものよ」

「バスカヴィルが捕まっても闇ギルドは動いているのか？」

アイゼンの質問に婦人が答える

「ええ。船長が消えてもアイフリード海賊団がとまらないように」
「・・・あなたが窓口なの？」

今度はベルベットが尋ねる

「御用はなにかしら？」

「アルトリウスの行動予定が知りたい」

「それは、ちよつと値が張るわね」

婦人はそういったあと一枚の紙を出す

「非合法の仕事よ。”これ”を全部こなしてくれたら、こちらも情報を提供するわ」

仕事内容は全部で三つ

・ゼクソン港の倉庫に集められている”赤箱の物資”の破壊

・”メンデイ”という学者を捜索してもらいたい。彼は”ガリス湖道”に向かった後、行方不明に。

・”ダーナ街道”のどこかで”王国医療団”が襲撃されるとの情報あり。襲撃者を排除してもらいたい

一通り確認した後婦人はもう一つの紙を渡す

「“通行手形”を持って行って。偽造だけど、まず見抜ける者はいないはず」

ベルベットがそれを取り確認するが

『『マジルウ奇術団』って書いてあるんだけど』

「あら、門前でそう名乗っていたでしょう？」

婦人は微笑みながら面白そうに話す

「・・・そちの力は、よくわかった」

「達成したらここに報告にきてね。でも、失敗した時は・・・」

それにベルベットが口を挟む

「あたしが勝手にやったこと、でしょ。迷惑はかけないわ」

「その心がけに応じて今晚は宿をサービスするわ。依頼は明日からになさいな」

ベルベットがその言葉に頷く。その後ろでロクロウとアイゼンは心水の続きをしていた。ケンも新たにカレーのお代わりをバーテンに頼んでいた

第13話 終わり

第14話

依頼の遂行を明日に控えたマギルウを除くベルベット達はその夜の夜、各自各々の時間を過ごす。ロクロウはテーブル席で夜の酒を始めるのか心水の入った土瓶を置いている。一方アイゼンはカウントーで老婦人と何か会話している

「・・・わかったわ。アイフリード船長の行方ね、船長には借りがあるの。この件に関しては、情報がはいたら無条件で教えるわ」

「頼む。あいつが失踪した現場にはペンデュラムが落ちていた。それに、どうやら特等対魔士メルキオルも絡んでいるようだ」

その言葉を最後にロクロウの座るテーブル席へと向かう、ロクロウは心水を飲み始めている。アイゼンがそこへ氷の入ったグラス二つとボトルを置く、ロクロウがそれに気づき土瓶を上げるがアイゼンが手を振り椅子に座る。ロクロウはそのまま自分の御猪口に心水を注ぎ、アイゼンはボトルのコルクを開けグラスに心水を注ぎ入れる。そこでロクロウが話しかける

「大変そうだな。俺たちにつきあっている場合じゃないんじゃないか？」

そのまま御猪口を口につける

「・・・お前こそ、なぜベルベットにつきあっているんだ？」

アイゼンがボトルに栓をしながら逆に聞き返す。質問を質問で返すとある人が怒る

「ん？だから恩返しだよ。刀の在処を教えてもらった恩があつてだな

「業魔が恩だど？笑わせるな」

アイゼンの言葉にロクロウが返す

「海賊をやってる聖隷の方が冗談だろ？」

「・・・」

アイゼンも分かっているのか否定せずに僅かに笑いながら首を縦に降るお互い皮肉を言い合う

「なんにせよ、俺たちは理からはみ出したハグレ者だ。こんな理が仕切る世の中じゃ、ハグレ者は、俺みたいに開き直って化物になるか、さもなきや——」

「海賊団おれたちのようにハグレ者同士でつるむしかないだろうな」

ロクロウの言葉に付け加えるアイゼン

「だろ？なのにベルベットは、ひとりで世界に牙をむいた。なかなかできることじゃない」

そう言いながら心水を注ぐロクロウ。土瓶を置く

「あいつの”強さ”の正体がなんなのか・・・俺はそれに興味があるんだ」

「つまるところ自分のためか」

「いかんか？」

悪びれること無くまた心水を飲むロクロウ

「・・・いや、俺も同じだ」

あくまで自分のため。綺麗事を一切言わない

「聖寮の理による支配に抵抗するために意志と力を持った仲間が欲しい」

ハグレ者に対しての仲間、結構な不釣り合いである

「だが、アイフリード海賊団のバカな流儀に付き合えるのは、同等以上のバカだけだ」

それを言い終わるとグラスの心水を一気に飲み干しテーブルに置く

「俺も、あいつがどこまでのバカか興味がある」

ロクロウがそれを聞いてニヤつく、同じ事を考えていたのだろう

「ベルベットが聞いたら怒るぞ？」

ロクロウが心水を注ぎ直すとアイゼンがもう一つのグラスを差し出す。御猪口とグラスがかち合う

「誉めてるんだ。そんなバカはめったにいない」

グラスに心水を注ぎ入れる

「・・・そうか。お前たちの船長も、そういう人間なんだな？」

ロクロウがグラスを取り、アイゼンは御猪口を取る

「ああ。アイフリードこそ、立派なバカ野郎さ」

ロクロウはグラスに口をつけるが一瞬引つ込めるも直ぐに飲み始める。アイゼンは気に入ったのか土瓶を取り新たに注ぐ。ちゃんぽんは良くないのだけれど

二人が心水を飲み合う中正面の扉が開く、ロクロウとアイゼンがそちらを見るとケンが少し息を上げながら入ってきた

「ふう・・・」

「おう、ケン。今まで外にいったのか、どうりでいないわけだ」

「外で何をしていたんだ。夜は外出禁止令が出ている、見つかると思っただぞ」

ケンが腕で汗を拭いながら話す

「ええ、分かっています。そこは見つからないようにコソツと街の外に出て外れで鍛錬していました。見つかったはいません」

「見つかってないって街の門は警備がいるはずだぞ？一体どうやって」

「ちよつと手荒いですけど壁をよじ登って・・・」

「ふん、何をしたかと思えば本当に手荒いマネだな」

ケンの言い分を鼻で笑いながら心水を口に含む。ケンはそれを聞き流しながらカウンターの方向へ向かう。老婦人が飲み物を差し出す

「これはサービスよ。マールボーカレーを美味しいって言ってくれたことへのね」

「ああ、ありがとうございます」

飲み物を頂くケンを見ながらアイゼンが口を開く

「ケン、一つ聞きたいことがある」

それに気づいたケンがそちらに顔を向ける

「はい。何でしょう」

「お前が海門で業魔に放ったあの光弾の様なもの、俺たち聖隷が使う聖隷術や魔法とは違う。あれは何だ」

アイゼンが単刀直入で聞いてきた

「応！俺もあの時お前が答えた時から気になってたんだよな。減るも

んじゃないし答えてくれてもいいだろう？」

「あの時？」

「ヘラヴィーサで難破した時にな、あの時はライフィセットと初めて会った時なんだがその時業魔とやりあってその後目を覚ましたケンにベルベットが襲いかかってきたんだ。生憎俺とマギルウは丸腰でな、敢えて気絶してるふりをしてやり過ぎた時ケンの右手から光が出始めてベルベットの左腕を黙らせたのさ、その後聞いたんだがはぐらかされてな、そこから先は聞いてない」

「ほう・・・」

「なあいいだろう？」

ロクロウとアイゼンがケンに顔を向ける。ケンは渋々答える

「・・・ええ、分かりました・・・」

）

「導師アルトリウス・・・なかなか見事に民衆をまとめあげおったな」

マギルウが城壁の上に座り、王城を見ながら一人呟く

「さてさて、悲劇のヒロイン気取りの小娘の牙が、この世界に如何ほどの傷をつけ得るか・・・」

「言いながら立ち上がる

「裏切り者捜しでもしながら、見物させてもらおうか」

その言葉を最後にいつものニヤリとした顔を浮かべた

）

そして次の日の朝、いよいよ依頼を遂行する。昨日の出来事を振り

返りロクロウが話す

「優しそうな顔して、したたかなばあさんだな」

「奇術団のことも、あたしのことも知ってた。情報網は本物のようね」

「情報だけじゃない。偽造とは言っていたが、通行手形も本物だ」

「王国内にも仲間を潜り込ませてるってわけか」

「先代のバスカヴィルは、反権力の塊の男だと噂に聞いたことはあるが・・・処刑されていたとはな」

「カリスマを失っても組織は揺らいでいない。底が知れない連中だな」

トップが倒れても体制が崩れない組織はこの上なく厄介であるのはどこも同じである

「それぐらいの連中できなきゃ、聖察とは渡り合えない。情報を手に入るためにも、依頼を成功させないと」

「旨い心水を、もう一杯呑むためにもな」

「・・・気が合うな。あの店は、いい心水を出す」

ブレない飲兵衛二人。そこへファイセットのお腹がなく

「・・・あ」

「あんたもがんばりなさい。またマーボーカレーを食べるために」

「・・・うん！」

、

「さてと、依頼はどれから始めるんだ？俺はどれからでも構わんど」

「だが時間も惜しい。人数を分けて依頼をこなすという手もある。ベルベット、どうするかはお前が決める」

「・・・」

アイゼンの提案でベルベットは顎に手を当てる

「僕もその意見には賛成です。なるべく早くことを済ませて準備を整えた方がよろしいかと」

「・・・わかったわ、じゃあ二手に分かれましょ。」

「よし、決まりだな。どっちに分かれるんだ？」

ロクロウの問いかけにケンが答える

「僕はメンデイという人物の捜索に行きます。個人の意見ですが、一人で行くこうと思います」

「待て。幾ら何でも、単独での行動は危険だ」

アイゼンがケンに意見する

「わかっています。ですがこれはあくまで捜索ですので極力面倒ごとは避けます。自分ならそれほど目立ちません」

「・・・ケン、その依頼はあんたに任せるわ。あたし達はそれ以外の依頼を済ませるから。そっちもちゃんと終わらせなさいよ」

ベルベットが了承する

「本当に大丈夫？」

ライフィセットがケンを見上げる

「大丈夫。こう見えても逃げ足も速いから何かあったらここに戻るよ」

「死ぬなよケン」

ロクロウの言葉にケンは返す

「はい、わかっています」

「あたし達はゼクソン港にある赤い箱を潰してくるわ」

ベルベットが老婦人に依頼を始めることを伝える

「わかったわ。」赤箱はゼクソン港の一番奥の倉庫にあるはずよ。成功したら、ここに戻ってきてね」

「ええ」

ベルベットとロクロウ、ライフィセットとアイゼンは先に酒場から出て行く

「僕はメンデイという人物の捜索に行きます」

「あら、あなた一人で大丈夫？」

「あくまで人探しですので何かあったら逃げますよ」

「うふふ、メンデイは『ガリス湖道』に向かった後に行方が分からなくなっただわ。お願いね」

「わかりました。では」

ケンも続いて酒場から出ようとした時、老婦人が声を掛ける
「気をつけてね」

「ええ、またマールボーカレーが食べたいですから」

今度こそ酒場から出て言った

酒場から出るとベルベット達の姿はない。もう行ったのだろう

「さてと、僕も行かないと」

その時噴水の方から声が聞こえた

「この世界に来て初めての仕事だな。ケン」

ルシフェルが噴水のベンチに足を組み、携帯電話を見ながら話しかける

「仕事とは言っても、人に褒められるものではありません。」

「確かににはたから見れば決して善行とは言えないだろう。だが物事を視点を変えて見れば例え善行に見えたとしても悪行に見える事もある。逆もそうだ」

「・・・」

「そう深く思い詰める事はないさ。丁度私も少し時間があるから同行させてもらおうか」

「よろしいんですか？」

「君の仕事が終わったら戻るけどね。さ、行こう」

「

ケンとルシフェルが合流した少し後、ベルベット達はゼクソン港に入っていた

「ねえ、本当にケン一人で大丈夫なの？ やっぱり一緒に行った方がいいと思うんだけど・・・」

ライフィセットがベルベットに聞いてくる

「心配ないわよ。あいつはそんなにヤワじゃない。何かあったら酒場に戻るっていったから。今は仕事に集中しなさい。」

「ライフィセット。お前もヴォーティガンで見ただろう、ケンは守りに関しては俺たちの中で一番優秀だ」

アイゼンがライフィセットを諭す

「ん？ 待てよ」

ロクロウが何かを思い出す

「どうした？」

「否ほら。俺たちが街の外に行く途中で兵士が話してたのを思い出してな」

顎に手を当て思い出しながら話し始める

「それがどうしたっていうのよ」

「甲種業魔」って奴さ。並の業魔より遥かに強く聖寮ですら迂闊には手を出さないうってな」

ロクロウが続ける

「で、その内の一体がガリス湖道に出没してるらしい。俺としては是

非とも斬りたかっただと思つてな」

「・・・ガリス湖道だと・・・？」

ロクロウの言葉にアイゼンが口を挟む

「ガリス湖道つて、ケンが向かった所だよ!?？一人じゃ危ないよ！早く戻ろうよ！」

ライファイセットが声を大にするがベルベツトは構わず先に進む
「良いのか？今ならまだ間に合うぞ？」

ロクロウは特に慌てる素振りを見せる事なくベルベツトに聞く
「言つたでしょ。あたし達は倉庫の赤い箱を潰しに行くつて」

「でも！」

「戻れば貴重な時間を失うわ。それだけアルトリウスに近づくチャンスが遠退く事になる」

「その言い方から察するにそれ程心配していない様だな」

一見冷たく聞こえる言葉にアイゼンが目を細める

「だからよ。あいつはヤワじゃない。」

く

ベルベツト達は目的のブツがある倉庫の近くに来る。

「よし、警備がない。今のうちに倉庫の中へ！」

「ベンウィックたち、上手くやったようだな」

見張りはアイゼンが事前にバンエルティア号に連絡し引き離してある。素早く倉庫の中へ入る、中は立て掛けられた武器や樽、積まれた麻袋や木箱がある。その反対側には目的の赤い箱が保管されていた。

「赤い箱。これを壊せばいいのね」

ベルベツトは箱を調べる。箱には紙が貼られている

「ミッドガンド教会の封紙・・・？」

「中身を確かめるか？」

アイゼンが提案する

「・・・必要ないわ。燃やして、ライファイセット」

ベルベツトも思う事があるのか、それを拒否しライファイセットに指示を出す。裏の仕事には知ったらまずい事もあるという事だ

「うん」

ライファイセツトが聖隷術を発動し爆発音と共に箱に火がつく

「依頼達成。撤収よ」

これだと建物自体が焼け落ちるがその方が事故と思われる。聖寮の目を欺けるという事だ

く

ベルベット達が倉庫に火をつけた直後の事、港の船着場から歩いてくる一人の女性がいた。

「嵐のせいで手間取った、一刻も早くアルトリウス様に報告しなくては」

涙目対魔士ことエレノアが速足で歩く中、その横にある倉庫からベルベット達が走ってくる。案の定鉢合わせになりましたとき

「あなたは!?!」

ベルベット達がエレノアの前で立ち止まる

「つと、涙目の」

双方が対峙する。それを聞いたエレノアが聖隷と自身の武器である槍を繰り出す

「二等対魔士エレノア・ヒュームです!」

反論と同時に聖隷が二体現れ、ベルベット達も戦闘態勢に入る。その時エレノアがベルベット達を見渡し口を開く

「・・・一人いないようですね・・・」

それを聞いたベルベットの口角が僅かながらに釣り上がる

「ああ、あいつ? あいつなら」

ほんの少しためる

「死んだわ」

く

ベルベットがケンが死んだと嘘をついた瞬間当の本人は街道を抜けガリス湖道に入ろうかとした時クシヤマをした

「どうした? 風邪でも引いたか」

ルシフェルはさもどうでも良さそうな雰囲気を出し歩く

「んんっ、いえ。体調は良好ですからそれはないと思うんですが・・・」

「ふふ。もしかしたら誰かが君の話をしているんじゃないかな？」

「うーん」

ルシフェルは含み笑いをした

「

「・・・死んだ・・・」

エレノアは表情を変えることはなかったが驚いているようだ。ベルベツトは続ける

「あんた達二人から受けた傷でね。死体は」

「・・・」

ベルベツトは敢えて揺さぶりをかける

「丁度お腹空いてたから、あたしが喰ったわ。案外美味かったわよ」

「!!」

その言葉にライフィセットは驚きの表情でベルベツトを見る、ロクロウとアイゼンは顔を背ける。笑い顔を見せないように

「あなたは・・・!」

エレノアが槍を構え走り出し、ベルベツトは刺突刃を手甲から繰り出す。聖隷も細剣を手に駆ける。ロクロウとアイゼンは聖隷を一体づつ、ライフィセットは三人のアシストに回る。

「ハア!!?」

エレノアが槍を回しながら下から上へ斬り上げる

「フッ!」

ベルベツトは刺突刃を槍の刃先から滑らせ向きを逸らし躲す。直ぐさま躲した勢いを使いエレノアの顔目掛けて右脚で後ろ回し蹴りを叩き込むがエレノアが顔を引つ込め紙一重に避ける。今度はエレノアが横薙ぎに槍を振るう

「仲間を喰らうなんて! 貴女は!!」

ベルベツトは槍を後ろに跳び退き避ける

「あたしは一度も仲間だと思った事ないし、第一あいつが勝手に付いて来たのよ」

地面に足が着いたと同時にエレノア向かって跳ねる

「あいつがどうなろうと知った事じゃ・・・!」

刺突刃を仕舞い込んだ手甲をエレノア目掛けて振りかぶる

「つつ!!」

「ない!!」

勢いをつけた手甲から刺突刃が飛び出しエレノアの腹部に迫る

「ダアッ!」

エレノアはすかさず槍の柄で刺突刃の横を叩き攻撃を避ける。お互い距離を置く様に離れる

「あの女、意外とやるな。一等対魔士も伊達ではない。」

ロクロウは細剣の突きを躲し、小太刀をかち合わせながら回避しながら時々ベルベット達の方を見る

「おっと」

己の眼前に迫る剣先を寸前で上半身だけで避ける

「それなりだな、だがそれだけだ」

精霊の攻撃が徐々に防戦一方になる。ロクロウの剣撃が勢いを増す

「!!」

「今度は俺が行かせてもらおうぞ!」

ロクロウが攻め立てる横でアイゼンがもう一体の精霊と戦っている

「・・・」

「!」

アイゼンは同じ細剣で攻め立ててくる攻撃をコートをたなびかせながら避け、当たるものだけ拳で横から弾く。やがてロクロウと同じく攻勢に出るアイゼンの拳と蹴りが確実に相手を追い詰める

「フンッ!」

「!？」

アイゼンのパンチを剣で防ぐも大きく後ずさる

「せいっ!!」

その後ろでロクロウの斬撃でもう一体の聖隷が後退し丁度背中合わせになる

「今だ!ライファイセット!」

アイゼンがライファイセットに合図を送る

「重圧砕け！シルクラッカー！」

ライファイセットが術を発動させたと同時に地面が割れそこから発生した重力波に聖隷が囚われる。そこにロクロウとアイゼンが距離を詰める

「風迅剣！」

「オラッ！」

斬撃と打撃が二人のすれ違いざまに叩き込まれ聖隷がよろめいた時ライファイセットが決める

「シエイドブライト!!」

光弾が直撃しエレノアの方へ吹き飛ぶ

「飛燕連脚!!」

「くうっ!!?」

ベルベットの二段蹴りをエレノアが防ぐも勢いを殺しきれず数歩下がる、その横で吹き飛ばされた聖隷が地面に落下する

「くっ・・・」

エレノアが息を切らしながら横目で聖隷を見る

「聖隷なしでまだやる気？」

ベルベット達は構えを解く事なく挑発する。そこへ何処からか何が燃える音が聞こえて来た。エレノアが音の主を探ると先程火をつけた倉庫から煙が上がっている

「まさか・・・倉庫に火を!？」

エレノアがベルベット達を鋭い目で睨む

「災厄の中で、人々が築きあげたものをどうして・・・どうして壊せるのですか!？」

エレノアの問いにベルベットは冷たい目と言葉で言い放つ

「人間じゃないからよ」

たったそれだけを答える。それだけしかない。答えを聞いたエレノアが石突きを地面に打ち付ける

「許しません！業魔！」

そのまま手を前にかざしエレノアの体からもう一つの光、聖隷を繰

り出す

「こいつ、まだ聖隷を!?？」

ベルベットが驚くのも無理はない、今まで二体しか使役している対魔士しか会った事がないからだ。光が地面に着き聖隷が姿を現わす、が、現れたのは人型でも動物型でもないかなり小さな聖隷だった。赤いリボンのシルクハットを被りクラウンの根元に開けてある穴から目が見える

「エレノア様は、ボクが守るでフよ〜! かかってこいでフ〜!」

余りの拍子抜けにベルベット達が構えを解く。ただ一人その聖隷に興味津々なライファイセットが率直な感想を述べた

「・・・かわいい」

それを聞いた聖隷が照れる

「そ、そうでフか〜?」

そんな中何処からか声が聞こえてきた

「見いつけたぞおお・・・」

その声を知っているのか聖隷が驚愕し震え上がる

「このバッドなお声は〜!?？」

「裏切り者ビエンフリー! 珍妙にお縄につけ〜いつ!」

船のバウスプリットからいつからいたのかマギルウが立っておりそこから飛び降りる。珍妙ではなく神妙だと思うのだが

「で、でたあああ〜!!?？」

まるで幽霊が出たが如く叫び声を上げ光となってエレノアに引っ込んでしまう

「こ、こら! 戦いなさい!」

そんな事をしている間に港の作業員が倉庫の煙を目撃する

「おい、煙が上がってないか?」

「本当だ! 火事だぞ!!?？」

騒ぎ始めたのを確かめベルベットがアイゼン達に合図する

「火が回る時間は稼いだ。逃げるわよ」

ベルベット達は港の出口に向かって走り始める

「お前も来い」

「はくなくせく！魔女さらいくく!!？」

ロクロウに担ぎ上げそれに抗議するマギルウ。人さらいならぬ魔女さらい。エレノアは追いたい気持ちと火事の収束しなければならぬ使命感が板挟みになり動けなかった

「対魔士様！これは一体!!？」

「ああ！ひどいお怪我を・・・」

作業員がエレノアの元に集まる。エレノアは槍をしまいながら作業員に指示を出す

「私よりも人を集めて倉庫の消化をお願いします！」

「は、はいっ！」

作業員と別れエレノアが倉庫に走り寄る

「この倉庫には、何があつたかわかりますか？」

エレノアがもう一人の作業員に確認する

「たしか・・・滋養薬『赤聖水』です。教会のギデオン大司祭が手配された薬で、各地の医療機関に送るために大量に——」

そこまで聞いたエレノアは額に手を当て思考する

「教会の薬を？なぜそんなものを・・・」

エレノアがベルベット達が走り去った方を見つめた

く

ゼクソン港を出た一行は街道で一息つく

「ふう・・・なんとか逃げ切れたな」

ロクロウが息を落ち着かせる

「よよよ・・・無念じゃよくせつかくあいつを追い詰めたのにく」

項垂れるマギルウにライフイセットが近づき慰める

「まあ、居場所がわかったからよしとするかの♪」

「あんだ、あの変な聖隷を捜してたわけ？」

ベルベットがマギルウに聞いたです

「そうじゃ。ヤツの名は聖隷ビエンフー。儂の可憐な乙女心を傷つけおった、憎さあまって可愛さ全開なノルじゃよ」

そこまで言うのと今度はニヤつきながら

「ふっふっふ・・・捕まえたらどうしてくれようか」

そんなマギルウを尻目にロクロウが率直な感想を述べる

「意味がわからん」

「わからん……」

ライファイセットも実際わからないのだ。ロクロウの真似する形になる

「いいの、わかったら困るわ」

ベルベットが二人を引き戻す。彼女の言う通りマギルウの言葉がわかってしまえば面倒ごとが増えるからだ

「さてと。ローグレスに報告に戻るわよ」

「時にベルベットや、お主のボーイフレンドの姿が見えぬが……逃げられたのかの？」

「……は？」

マギルウの言葉に目くじらを立てる

「おや？雪の中若い男女、ましてや女が男を押し倒してあつくいひと時を過ごしていたではないか」

一人抱きしめポーズをしながら細目でベルベットを煽てる

「あんたねえ……」

頭に筋を浮かべ拳を震わせるベルベット、オイオイオイ、死ぬわア
イツ

「……あやつがおらん時にまたあんな事になったらどうするんかえ？」

「……」

急に声色を変えベルベットに問うマギルウ。ベルベットは口を閉じ黙り込む

「儂らならともかく坊に手をかけることにもなる……その時お主はその衝動に抗えるのかえ？」

「ベルベット……」

マギルウの言葉にライファイセットがベルベットを不安そうに見る

「……此処に来る前あいつに祓ってもらったから暫くは大丈夫よ。次が来る前に全部の依頼を終わらせて合流すれば問題ないわ」

「それが最善だが、問題はケンの方だ。いつ戻るかだがな」

アイゼンは腕を組む

「暴れたら斬るしかないが、それじゃ恩も返せなくなる。そうなつてくれるなよベルベット」

「わかってるわよ」

「途中で暴れたら・・・」

マギルウがベルベットをニヤリと見つめ

「その時は逃げるがの〜♪」

いつものマギルウだった

〜

湖道を進むケンとルシフェル、そんな中またケンがくしゃみをする
「おいおい、またか？これは本当に誰かが君の話をしているだろうな」
「・・・自分の話となるとベルベットさん達か聖寮のあの人たちになる
でしょうけど・・・」

鼻をすするケンを横目に楽しそうに話すルシフェル

「いいじゃないか、少なくとも誰かが君のことに関心がある証拠さ。」

「そんな顔するなよ？」

「うう〜ん」

「ま、早く事を終わらせよう」

「まあ、はい」

二人は道を急ぐ

第14話 終わり

第15話

ゼクソン港からローグレスに戻り老婦人に報告する最中、アイゼンが気になっていた事をベルベットたちに聞く

「エレノアという退魔士と、なにか因縁があるのか？」

ロクロウが顎に手をやりながら答える

「ノースガンドで初めて会った時にあいつが泣いていたのをベルベットが茶化したんだ——涙目退魔士ってな」

「退魔士がなぜ泣く？」

アイゼンの問いに代わりにベルベットが答える

「“金”を守るためには“個”の犠牲をよしとするアルトリウスの“理”に、後ろめたさを感じたんでしょ。甘ちゃんなのよ」

「・・・それであれだけやれるのか。一等退魔士の肩書は伊達じゃないようだな」

「・・・？」

そこまで聞いたアイゼンの感想にベルベットはどういう事なのかとアイゼンを見る

「油断はするな、という話だ」

そこまで言い終わると同時にロクロウが話題を変える

「ところで、マギルウが追っかけてたビエンフーとかいうのは、本当に聖隷なのか？」

「俺たちとは異なる種族だが、聖隷だ」

「なら、マギルウは退魔士ってことか。魔女とか魔法使いって言ったのはなんだったんだ？」

聖隷を使役できる以上、退魔士であるのは確実。だがそれを偽っているということに疑問を持つロクロウにベルベットが私見を口にする

「監獄島に捕まっていたことを考えれば、聖寮から弾き出された奴なのかもね」

「あるいは、ただのペテン師か」

「そうね。退魔士じゃなくても、あの妙な聖隷がいれば奇術ごっこぐらいはできる」

アイゼンも加わり散々に言われるマギルウそこにロクロウが声色を変えてさらに煽る

「エレノア様は、ビエンフーが守るでフよ〜！かかってこいでフ〜！だもんな」

「ふふっ……」

ロクロウのモノマネにライファイセットが笑う

「おっ、笑った！」

「……！ごめんなさい」

ライファイセットは怒られると思いきロクロウに謝る

「なんで謝るんだよ。ビエンフーが面白かったんだろ？」

「……うん」

「笑いたいときは笑えばいいんでフ〜!!」

「はは……はははは」

「そんなにおかしいなら、お前もやってみろ。ほら、僕はライファイセットでフ〜!!」

ロクロウに言われてライファイセットも挑戦する

「あ、うん……僕はライファイセットで——」

「やめなさい！」

いいかけたところでベルベットが声を上げる

「えっ!？」

「なんでだよ?」

声でビクつくライファイセットにそれに抗議するロクロウ

「……ほら、人が見てる。目立つのは困る」

「……ごめんなさい」

「まったく余裕のない奴だな。ライファイセット、あとで二人でやってみような」

「う、うん……」

く

なんやかんやで老婦人がいる酒場へ戻ってきたベルベット達。ソ

フアーに座る老婦人に報告しようとした時老婦人が口を開く

「港では一騒動あったようね？けど、目的を果たせたなら問題ないわ」
「もうここまで届いているのね」

「あら、お気に召さなかったかしら？」

「別に。あいつは戻ってきたの？この様子だとそうでもなさそうね」

口元を隠しながら笑う老婦人を目を細めながらもケンが戻っていないことを確認する

「まだよ。一人ですもの、時間がかかるのも仕方のないこと。その間にもう一つの仕事を終わらせてきたらどうかしら？」

「わかってる」

ベルベツトが短く答えもう一つの依頼である護衛の仕事に向かうため外にでる

「ダーナ街道で”王国医療団”を襲撃しようとしている者たちがいる・・・か」

ベルベツトが依頼内容を確認するようにつぶやく

「王国医療団は、あちこちで診療や治療をする『動く病院』」

ライファイセットが護衛対象の詳細を説明する

「民間の寄付で活動している慈善団体のはずだ」

「うーん、狙われる理由がわからん」

アイゼンとロクロウがそれぞれ私見を言う。医療活動に従事する当たりどころかの組織または個人に因縁をつけられるのはあり得ないはずである

「いるんでしょ。善意とかが大嫌いなひねくれ者が」

「だとして、闇組織が守る理由は？」

ロクロウが慈善事業に対して非合法的な組織が関与しなければならぬ理由をベルベツトに聞く

「知らないけど・・・襲撃者の方に原因があるのかもね」

「しかし護衛もそうだが人探しの件も腑に落ちないよな」

「そうだよな・・・消えた場所がわかるなら、捜しに行けばいいのに」

「だよな。しかも人探しが、なんで非合法的なんだ？」

ロクロウとライファイセットが考え込む

「・・・可能性はいくつか考えられる。けど、こっちは依頼を果たすだけよ」

「

それと同時刻。湖道奥に差し掛かりつつある二つの人影があった

「ここにもいないとなるとまだ奥かな・・・」

ケンはいそうな場所を隅々まで捜しつつ歩く

「これは骨が折れそうだなケン?」

ルシフェルは更々捜す気がないのだろう。携帯を弄りながらケンの後ろについている

「ええ、行方不明ですからね。目撃場所がわかっているだけでもマシということですよ」

ケンは草の茂みや岩の影を覗き込みながら話す。

「となると・・・」

「ん? なにか気になるのかい?」

ルシフェルが手を止めてケンの顔を見る

「この件は第三者が絡んでいる可能性があるということですよ」

「ほう」

ルシフェルが意外そうに答える

「理由は?」

「少なくとも行方不明であればわざわざ依頼、ましてや裏組織に協力を求めること自体必要ないはず。身内や人を集めて探す。なにより聖寮に救助を求めれば聖寮も断る理由がない」

ケンは向こう岸へ渡るために岩に絡まったツタをどかしながら話す

「ふむ。君の推測も一理あるな。彼女たちが進めている仕事もかなりきな臭い、といっても裏での仕事だ。それはわかっているだろう?」

ケンが岩を押し始める

「あくまで僕の推測ですよ。ですからこの確証を確信に変えたいんです・・・よつと!」

岩が転がり湖に落ち足場ができる

「全てを知ろうとは思いません。ですが引き受けた以上最後まで果た

さなければなりません」

そこまで言い切りケンは足場を跳びながら渡っていく

「全てを知ろうとは思わない……か」

ルシフェルは水面を歩きながらそんなことを呟いた

↳

「ここにもいない……か」

あれからしばらく捜したがメンディという人物は見つからない

「これだと一番奥としか考えられない」

ケンは周囲を見渡す。人影はなく今ここにいるのはケンとルシフェルだけだ

「これは君の予想が現実味を帯び始めてきたんじゃないか？」

「うーん」

ルシフェルは岩に腰掛け足を組む。だが遠くの草むらから一對の目が二人を、正確にはケンに狙いをつけていた

「こんな状況だ。最悪のケースも覚悟しなければならんじゃないかな。ここまでやって見つからないんだもしかしたら手遅れかもしれない」

「……」

黙り込むケン

「君が責任を感じる必要はない。あくまでこれは依頼だ、そのことを……」

その時ルシフェルの携帯がなる

「ん？すまない、ちよつと待っててくれ」

「はい。自分に構わず」

それを聞いてルシフェルが電話にでる。

「……」

ケンは何かを感じ取ったのか周りを見る

(誰か……いや何かから見られている気がする……)

ルシフェルが電話を切りケンの方を向く

「すまない。急用が入ってね、戻るよ」

「わかりました」

「なるべく早く済ませるよ。君との旅もアイツと同じくらい楽しいからね・・・別の意味で」

言葉を濁したルシフェルにケンが首を傾げる

「アイツ？」

「こつちの話さ、それじゃ」

ルシフェルが指を鳴らした瞬間そこにいたルシフェルの姿はなかった

「さて・・・僕も役割を果たさない」と

ケンは先程の気配を気にしつつ逆の方向へ向かおうとしたその時、後ろから何かが高速で向かってくる。

「！」

ケンは気配を察知して素早く後ろを振り返る。が、その眼前に蛇の下半身に女性の上半身の業魔、エキドナが迫っていた。ケンは反応に遅れてしまい蛇の尾で締め上げられてしまう

「ぐ・・・」

もがいて抜け出そうとするがエキドナはまるで楽しむかの如く締め上げる力を強くする

(力が思ったより強い・・・この敵はまた特別?)

そう考えるが爪を振りかざすエキドナに思考を邪魔される

「ふん！」

力をこめ両腕を尾から抜き取りエキドナの腕を掴み引き寄せそのまま顔面に頭突きを叩き込む。思わぬ事態とダメージで尾の拘束が解かれ、それに乗じて素早く後ろへ転がり距離をとる。

「待ってくれ、何故こんな事を」

ケンが会話を試みるが当のエキドナは先ほどの頭突きでも大したダメージはなく。今度は一直線に飛び掛かってくる。ケンがそれを横に避けるがエキドナが体を捻り尾をしならせそれがケンの胸に当たると

「ぐっ・・・！」

僅かに顔を歪ませ怯んだ隙に爪で体や腕を何度も引き裂く。まとも喰らい大きく仰け反るケンにエキドナが追い打ちをかけようと

再び飛びかかる

「(やむを得ないか・・・)ぬう！」

ケンはずかさず身を屈め。エキドナはそのままケンの頭上を通り過る。最後に尾の先がケンの頭上を越えようとした時それを片手で掴み一気に振り下ろし叩きつける。エキドナは逃げようともがくがそれを許さず引つ張り上げ反対側に投げ飛ばす。

「ふんっ!!?」

投げ飛ばされたエキドナが地面に叩きつけられダメージを受けたのかよろめきながらも起き上がる。ケンは追撃する為にエキドナに速足で接近する、エキドナの間近に来た時その目がギラつく

「ジャアアアッ!!?」

「ぬおおっ!!」

エキドナは己の尾を高速で地面に滑らせケンの足を払う。油断していたわけではないが予想外の反撃に驚愕の声を上げるケン、エキドナは空中高くで体制を崩すケンをまるで抵抗できない獲物の如く口角を吊り上げる。鋭い爪を前に突き出しケン目掛けて突進する、ケンの目の前にエキドナが迫る

「とあっー！」

掛け声と共にケンが体を捻り両腕で地面を叩く、反動で高度が少し上がり横捻りで回転。エキドナの爪をすれすれで避け、後ろに着く頃には体の向きが同じになる。その瞬間ケンはエキドナの首に腕を回し締め上げる

「ギッ!!?・・・アッ・・・ゲボッ！」

地面をもみ合いながらも必死で逃げようともがくエキドナ。ケンは力をこめる。抵抗とばかりにケンの腕を掴み外そうとするエキドナ。もみ合いはまだ続くと思われたが一つの鈍い音でそれは終焉を迎えた

「ゲッ・・・ガッ・・・」

エキドナは短い断末魔をあげた後ばたつかせた腕と尾を地面に力なく落とし、息絶える。仰向けになっていたケンが亡骸をどかし立ち上がり、動かぬ業魔を見る

「・・・やむを得なかった。とはいえ僕の判断が正しかったのかはわからない。だけど」

ケンが亡骸に近づき片膝をつき手をかざす

「業魔であろうと人であろうと、死者は弔わなければならぬ」

ケンの掌から緑味がかかった光が放たれる。その光が当たり徐々に亡骸が光となって霧散する

「死は等しく平等だ、案外神様も有情なんだろう」

立ち上がり振り返る

「・・・最後の最後には殺めることを覚悟しなければならぬのか・・・」
それを最後に歩き出した

↳

それからしばらくしてガリス湖道の最奥に到達したケンの前方に鎧を着た二人組がおりケンは素早く身を隠し覗き込む

「・・・何故こんなところ人が、ここに何かあるのだろうか。・・・もしかしたら依頼と何か関係が？」

見張りの後ろには小道が続いている。ケンは少し考えた後に後ろに下がり装備を外す

(あまりこういうのはしたくないけど・・・)

心の中で呟きながら水の中に入っていった

↳

見張りの傭兵が目を光らせている中彼らの横少し離れたの水面からゴボゴボと気泡の音が鳴り一人が気づく

「ん？」

気づいた傭兵が確認しようと水に近づき覗き込もうとした時水面から腕が伸び傭兵足を掴み引きずり込んだ

「うー！うわああ!!」

「なんだ!? どうした!」

もう一人の見張りが聖隷を出し引き摺り込まれた所へ駆け込み水面を見る

「くそっ！ 一体なんだってんだ!」

傭兵が水面を凝視している中その後ろからケンが引きずり込んだ

もう一人を片手で掴みながら忍び寄り傭兵と聖隷の首に手刀を見舞う

「ぐあっ!？」

傭兵と聖隷は気絶し倒れこむ。どうやったかは単純で傭兵が近づくと泳いで最初に入った所から上がり横から後ろに回り込んだだけである。ケンはずり込んだもう一人を離し奥の小道を進んだ。そこには天幕がありその下には寝床であろう柄が違う敷物が横一列に敷いてある

「もしかしてここにいるのかな・・・」

「お、おい。あんたは誰だ」

ケンが声をかけられそちらを向くと数人の男達が警戒しながら話しかけて来た。中には採掘用のシャベルやツルハシを構えているものもいる。ケンは急いで事情を説明する

「待って下さい。僕は人探しでここにたどり着きました、メンデイという方を知りませんか？」

「メンデイ？その人ならそこにいるぜ」

男性がメンデイという人物がいる方へ顔を向けるとそこに目的の人がいた

「私がメンデイだ」

「よかった。貴方に捜索の依頼が出ています」

「そうなのか！助かったよありがとう。奴らに監禁されて無理矢理作業をさせられていたんだ。これで帰れる」

ケンの言葉を聞いて周りに活気付く、ふとケンが木箱に入れられている赤い鉱石が目に残る

「あの赤い石は」

「ああ、あれは”赤精鉱”って言うんだ。私はこの鉱石の精製法を発見したんだが、それで目をつけられてしまったんだ」

それを聞いたケンが疑問を感じメンデイに尋ねる

「この石には何か利用方法があるか？」

「こいつには薬効成分が含まれているんだが、薬品を生産すると同時に毒性が出てしまうんだ」

「その薬品とは一体？」

「赤聖水ネクターという滋養薬、それを作らされていたんだ」

ケンが顎に手を当てまた尋ねる

「ではその毒性というのは」

「赤精鉱には強力な依存性と中毒性を引き起こす事が判明しているんだ。私はそれを奴らに警告したんだが・・・」

(中毒・・・まるでヤクだな・・・この世界にもあるなんて・・・)

しばし目を閉じた後メンデイ達に顔を向ける

「ともかく無事でなによりでした。では戻りましょう」

「あんたは先に戻っておいてくれ、私たちはこの赤精鉱を処分してから戻る」

「わかりました。お気を付けて」

「あんたもな、今更言うのもなんだが濡れたまんまじゃ風邪引くぞ」

メンデイに言われたとうり身体は濡れたままだ

「・・・道中で乾かしますよ」

く

ベルベット達はもう一つの依頼である襲撃者の排除の為ダーナ街道に赴いていた

「はてさて、その襲撃者とは一体どんな奴なのか。慈善団体を襲うという事は賊か？野盗か？」

「どうだろうな、唯の賊なら聖寮が検挙していてもおかしくない。或いは」

「・・・力を持った組織って事？」

「わからない。でも襲撃者が誰であろうと倒す、それだけよ」

そこまで話していると前方に横転した馬車と散乱している積荷、輸送員であろう何人かが倒れている。そのすぐ側には襲撃者であろう

三人の男が立っていた

「噂をすればなんとやらってな！」

「ちっ、遅かったか」

走るベルベット達に気づいた三人組が振り返る。

「邪魔をするな・・・」それは「・・・」

それはとはベルベット達の後ろの赤い箱のことだろう

「俺たちが喰らうツ!!?」

その瞬間に彼らが業魔に変わり襲いかかってきた

”それ”を「よこせえーツ!!」

テナガザルの爪がベルベットを切り裂こうとするもそれをバク転で回避する

「あんたらの目的が何かは知らないけど仕事は果たさせてもらおうわよ!」

着地して横回転しつつ回し蹴りをテナガザルの顔にぶつけ蹴り飛ばす

「そういう事だ、恨みはないんだが覚悟してもらおうぞ」

もう一体のテナガザルがロクロウに飛びかかる、覆いかぶさる瞬間ロクロウが横に素早く避け小太刀で斬りつける

「フンツ!」

アイゼンは自ら接近しインファイトに持ち込み拳と蹴りを繰り出す。ベルベットと戦っているテナガザルが負けじと応戦する、が、かなり大振りな攻撃にベルベットは難なく躲し刺突刃と蹴りで追い詰める。

「セイツ!」

ロクロウもかなり押ししており爪の攻撃を片方の小太刀で受け流しとはじき返しては斬撃を浴びせ徐々に肉薄にしてい

「どうした!もつと向かってこい!」

ロクロウが相手を挑発しそれが頭にきたのか、それとも赤い箱が欲しいのか、吠えながらがむしやらに飛びかかる。三者三様の戦いをしていようだが確実に敵を一箇所に集めるように追い詰める。

「ライフイセット!!?」

ベルベットが合図をかけライフイセットが聖隷術を発動させる

「重圧砕け!シルクラッカー!」

業魔達の足元に地割れが入りそこから重力波が発生し動きを封じる、それを皮切りに三人はトドメを刺すべく走り出す

「これで終わり!空破絶掌撃!!?」

「注射された刺突刃が業魔を貫き

「お命頂戴！・参の型・水槌！」

「圧縮された水の刃が切り裂き

「破碎しろ！・ストーンエッジ！」

「聖隷術から繰り出され地面から石の針が弾き飛ばす。三体の業魔は各々の技を受け動かなくなった。それを確認した後構えを解く

「襲撃者は業魔か。そりゃあ計画がわかってても、止められないよな」

「ロクロウが馬車を見た後振り返り頭を搔く

「医療団は？」

「ベルベツトが赤い箱に向かうアイゼンに聞く

「逃げ去ったようだ」

「アイゼンは赤い箱を探り始め青いガラス瓶を取り出す

「やつらが欲しがっていたのは、この薬か」

「教会の封紙・・・薬・・・」

「ベルベツトは教会とこの薬がどういう関係なのか思考する。その時ライフィセットが地面に落ちているある物に気づき、拾い上げる

「それ、奴らのか？」

「ロクロウがライフィセットが拾い上げた赤いスカーフを見る

「うん。三人みんなつけてた。なんなのかな・・・？」

「・・・ただの業魔よ。慈善団体を襲うような、ね」

「ベルベツトは知ってか知らずか、それだけ言った

「これではあさんの依頼は二つこなした。後はケンのだな、もしかしたら戻ってきてるかもしれないし酒場に戻ろうぜ」

「ロクロウが提案した直後ライフィセットのお腹が鳴る、本人が恥ずかしさから顔を赤くする かわいい

「はは、マーボーカレーがずいぶん気に入ったんだな」

「そう・・・なのかな？」

「ライフィセットはその感覚がわからずベルベツトに聞いてみる

「あたしに聞かないで」

「ベルベツトは美味しくなかったの？」

「・・・それは・・・美味しかったけど・・・」

ベルベツトはそれだけ言うと歩いていく

「え?」

ライファイセツトはベルベツトのはつきりしない回答に疑問を抱く

「あいつは、本来は食い物の味がわからないんだ」

ライファイセツトの疑問にロクロウが代わりに答える

「いくら食っても満腹感もない。感じるのは血の味だけ・・・そう言つてた」

「そう・・・なんだ」

「だがケンがあいつの腕に光を当てると味がわかるようになったらしい」

「光?」

「お前と最初にあつた場所だ。お前が逃げた後ベルベツトがケンに襲いかかったんだ」

「え!」

ロクロウの話にライファイセツトが驚く

「どうして襲いかかったの!?!」

「さあな、何しろ突発的だったし原因も分からん。だがケンがあいつの腕に光を当てると落ち着くんだ。理由は分からん」

「でもそれと味がわかるのはどういう関係なんだろう」

「多分副作用かなんかだろ。とにかく戻ろうぜ」

く

その後ローグレスの酒場に戻ってきた一行は老婦人に報告する。因みに道中指名手配な話があり地域によつて似顔絵が違ふということとを聞いたライファイセツトは早く世の中をかき回したいとかとんでもないことを言っていた。教育に良くないメンツだ

「おかえりなさい。大変だったでしょう。マーボーカレーはいかが? それとも特製ピーチパイの方が・・・」

マーボーカレーと聞いてライファイセツトの顔が明るくなるがベルベツトの一声で表情が変わる。ピーチパイアアアアアアイ!!!

「約束よ。本題を」

ライフイセツトが顔を俯かせるそれを見たのか老婦人は僅かに笑いながら答える

「導師アルトリウスの居場所は、ダーナ街道の北にある聖寮の新神殿『聖主の御座』しばらくここにこもる予定よ」

「引越してもしてるのか？」

ロクロウがかいつまんで尋ねる

「ある意味そうね。聖主カノヌシの遷座儀式を行っているとかな」

そこまで聞いてベルベットが腕を組み話を纏める

「聖主カノヌシ・・・聖寮が掲げる新しい神様ね」

「厳粛な儀式だから、つきそうなのはメルキオルたち数人の高位対魔士だけらしいわ」

「都合だ」

アイゼンがチャンスとばかりかの返答

「あいつ”もいるかもな”

ロクロウが意味深な事をつぶやく

「十分よ。それなら襲う隙が必ずある」

「ただし、御座の手前には厳重な検問が敷かれているわ」

「なんとか破ってみせる」

その言葉に老婦人が首を横に振る

「無理ね。人は誤魔化せても御座の周囲に張り巡らされた結界は欺けない。部外者の侵入を拒む術の壁が作られているのよ」

ベルベットが口元に手をやり考え、あることに気づく

「・・・けど、奴らが通るための”鍵があるはずよね？」

「ええ。今、仲間が鍵について調べているわ。ただし、それは・・・」

「・・・別会計」

察したベルベットが先に答える。老婦人がわかっていたかの様に微笑む

「そうなるわね。お代は”これ”」

懐から一枚の紙を差し出す。ベルベットがそれを手に取り確かめる。ロクロウも横から見る。そこには一つの依頼が書き記されている。

ミッドガンド教会”大司祭ギデオンの暗殺

ロクロウがその依頼内容を特に驚くことなく腕を組む

「・・・これは最高に穏やかじゃないぞ」

「わかったわ」

ベルベツトが了承し後ろを向く。老婦人が問いかける

「聞かなくていいの？大司祭を殺す理由を」

「大方、大司祭が”赤聖水”の元締めなんですよ」

ベルベツトはわかっていたのだろう。宗教団体が宗教をダシに商売なんてよくある話なのだから

「教会のお墨付きで、常習性のある薬をばらまいて製造を独占。大儲けの影で、素人どころか貴方達の仲間にも被害が出てる・・・ってとこか」

そこまで答えた時扉が開く

「すみません、遅れました」

ケンが扉を閉め老婦人に報告する

「あら、お帰りなさい。メンデイが見つかったという報告は聞いているわ」

「早いですね」

「目はどこにでもあるものよ」

その後ケンは自分が聞いた事を皆に話した

「あかし達を試したのね」

「ええ、合格。二つの依頼で気付くなんて大したものだわ」

「ケンの話で確信になった。それだけのことよ」

「いくら凄腕でも、ケンを振り回すだけの人は信用できないもの」

ケンは椅子に座りながら話を聞いている

「勘違いしないで。あかしはアルトリウスに辿り着くためならなんだってする。鞘なんてとつくに捨てたのよ」

ベルベツトの覚悟に老婦人が目を閉じる

「・・・そう。あなた”剣”そのものなのね」

老婦人は目を開け己の胸に手を添える

「改めて名乗りましょう。私はタバサ・バスカヴィル。闇ギルド――

”血翅蝶”の長よ

ベルベツトは腕を下げ自分の名を名乗る

「ベルベツトよ。大司祭の情報を教えて」

「大司祭は、毎晩、ローグレス王城の離宮で災厄払いの祈りを捧げているそうよ。しきたり通りなら礼拝は単身で行うはず。狙うならこの時でしょう」

「離宮に入るしゅだんは？」

タバサは今度は記章を取り出す

「この記章を持っておゆきなさい。」血翅蝶”の仲間か手を貸してくれるわ」

「わかった。”鍵”の情報は頼んだわよ」

く

「あ、いたいた」

話がひと段落した時一人の女性が酒場に入ってくる。女性はケンを見つげ近づく

「君がガリス湖道に行った人？」

「あ、はい、そうですが」

「はいこれ」

ケンが答えないなや麻袋をケンに差し出す

「これは？」

「甲種業魔を討伐した報酬よ。君ってすごいよねー対魔士が数人がかりでやっと倒せるのを一人で倒すんだから」

「はあ・・・」

「んじや、私はこれで。じゃあね」

ケンが呆気にとられているうちにロクロウが食いつく

「ケン！どうだった!?？甲種業魔の強さってやつは！」

そこにアイゼンが加わる

「お前がどうやってたおしたのか、興味がある。教えろ」

二人からの質問責めにあう直前タバサが割って入る

「二人共？戻って来たばかりで疲れてるのにあれこれ聞くのは可愛そうよっ。」

「ぬ、すまん」

「悪かった」

タバサがケンの隣に座り、その腕を取る

「あ、あの」

「いいのよ、隠さなくても」

タバサがケンの服の袖を捲り上げる。そこに治癒しかけているがまだ十分に回復しきっていない傷が残っていた

「あ、気になさらないでください」

「これはサービスよ、直せる時になおしておきなさい」

ケン達が集まる中ベルベットが疲れたのか息を吐く

「・・・ふう」

「ベルベット、どうかした？」

ライファイセットが心配そうに話しかける

ベルベットがライファイセットを見た時彼女から喉がなる音が聞こえた。ベルベット自身驚き顔を背ける

「・・・なんでもないわ」

「でも、なんか・・・」

それでも食い下がるライファイセット

「なんでもない！」

声を上げてしまうベルベット

「・・・!!」

そこにケンの話を後回しにしたロクロウが夜襲について提案する

「城に忍び込んで襲うなら、徹夜仕事になりそうだな。今の内に酒場で一休みさせてもらおう」

「・・・そうね」

ベルベットは先に部屋に向かっていった。タバサに手当してもらっているケンの血の滲む腕を見てしまう。それから逃げるように階段を上がる。内なる衝動を抑えながら

く 第15話 終わりく

第16話

ギデオンの暗殺を請け負ったベルベット達はそれに備え、酒場で夜になるまで休息を取る事になった。そんな中カウンターでアイゼンとタバサが何やら話し込んでいる、アイゼンはタバサに背を向けテーブルに寄り掛かっている

「：アイフリード船長が、一時、監獄島に囚われていたのは事実だったわ。特等対魔士メルキオルに連れ出されたことも。でも、その後の消息がつかめないの」

アイゼンが寄り掛かかるのをやめタバサの方へ向く

「いずれにせよ、聖察があいつを捕らえているのは間違いないな」

「目的はなんなのかしら？海賊討伐のためなら、見せしめで処刑するか、あなたたち海賊団を誘い出そうとするはずよね？」

「今のところ、どちらの動きもない」

タバサが顎に手を当てる

「もしかしてアイフリードが異大陸から持ち帰ったという"遺物"が狙いなんじゃないの？」

タバサが己の推理を述べる。カマをかけるとも言おう。アイゼンは口元に手を当てて思考する、指は伸ばしたままの特徴的な仕草である。イカす

(異大陸の遺物・・・あの"妙な道具"の噂が出回っているのか・・・)
そこまで考えた後仕草をやめる

「可能性はあるな。あいつは"ある遺物"を妙に気に入って大切にしていた」

「どんなものなの？」

それを聞かれて答えるアイゼンではない。首を横に振る

「海賊団の機密だ。今はこれ以上は言えん。だが、もし目的がそれなら、離宮に囚われている可能性は少ないだろうな。あそこには拷問の設備がないだろう？」

アイゼンは腕を組み自身の見解を述べる

「・・・その通りね。一部でも機密を明かしてくれたこと、感謝するわ」
「その線を含めて、引き続き情報収集を頼む」

アイゼンはそれを最後にカウンターを後にした

く

白一色の風景の中古い遺跡の石柱が数本、あるものは根元から折れ上の部分は横倒しになり。あるものは中程から上までがないものもある。日が差している訳でもないが柱に沿って影ができていものその影は赤い、むしろ血のような影がくつきりと浮かび上がっている。その柱の間に一人の女性、ベルベツトは地面にしゃがみ込んでいる。そこから何かを咀嚼する音、むしろ口に詰め込みながら噛む音の様な響いている

「もつと・・・もつと・・・」

ベルベツトは目を見開き手で何かを掴み口に入れる。遂には我慢できないのか業魔手で喰らい始める

「もつとつー」

次のナニかに業魔手で喰らおうとした時ベルベツトが我に帰る

「!!」

業魔手で掴みかかったモノは弟ライファイセットの遺体だった、瞳孔の開いた死人の目が彼女を見ていた。

「うああああっ!!」

悲鳴をあげ跳びのき、後ろ手で下がる。そしてそれを見たくないばかりに手と足を組み顔を伏せ縮こまる

「違うの・・・！そんなつもりじゃなかった！」

必死に弁明をするベルベツト。弟に対する懺悔か

「けど、お腹がすいて・・・お腹がすいて・・・」

ベルベツトが顔を伏せる中直ぐそばである男の声が彼女に語りかける

「病で消えゆく弟の命で姉が長らえるなら、その行為には"理"がある」

ベルベツトが顔を上げ振り返る。そこにはアルトリウスが立って

いた。

「我慢しなくていいんだ。ベルベット」

彼は優しく語りかけるも次にあまりにも残酷な言葉を発した

「ライフセットを食べなさい」

その言葉にベルベットの瞳は揺れる。震えた声で拒もうとするもそれは余りにも弱々しいものだった。

「い……や……」

アルトリウスの言葉を拒みたいという反面、その事実を否定できない己の業の板挟みにただ彼女は叫ぶしかなかった

「嫌だあああつ!!」

夢から醒める

「ああああ!!」

ベルベットは無我夢中で目の前のものに掴みかかる

「聞くもんかっ!お前の言うことなんかっ!!」

ギリギリとベルベットの両手が何かを締め上げる、アルトリウスの言葉から逃れる様に力を込める。だが当の本人が締め上げているのはアルトリウスではなくライフセットであった

「あ……あ……」

ライフセットの呻きでベルベットが自分が何をしているのか理解する

「!!」

すかさず手を離すベルベット。ライフセットは床に手をつきなから咳き込む

「あんた……どうして……?」

ベルベットが震えた声でライフセットに問いただす

「ベルベットが……うなされてた……から……」

ライフセットが顔を上げた時、ベルベットは弟の面影を見た。

「気安く近寄るな!あたしが業魔だってわかってるでしょ!」

ベルベットはライフセットを突き放す様に強く言い聞かせる。同じ様な事をしてしまいかねない自分に対しても。自分からライフセットを突き放す様に。立ち上がり後ろを向く

「ごめんなさ……い……い……」

泣きそうな声で謝りながら走り去るライフセット。

「くそっ……!」

辛そうに言葉を漏らすベルベットの横で柱に寄りかかり腕を組んだマギルウが語り出す

「寝ても覚めても悪夢の続き、「モノ」は石をぶつけると壊れるが、キモチをぶつけると「イキモノ」になる」

マギルウは語りかけながら目を細める

「扱うにも捨てるにも「モノ」の方が楽じゃぞ?」

そこまで言い終わると柱から離れベルベットの方を向く

「……なにが言いたい」

ベルベットはその真意を聞き出そうとするがそれをマギルウははぐらかす

「休憩はお終いということじゃよ。お出かけの時間じゃ♪」

マギルウがそれだけを最後に先に階段を降りていった

く

いよいよギデオンの暗殺の仕事が始まる、ベルベットが外を出る頃には全員集まっていた。外は日中とは打って変わってかなり静かである

「……」

ライフセットは先程の事もありロクロウの後ろに隠れる、ベルベットはそれを見て顔を横に向ける。そこにマギルウが割って入る

「むふふ、間に合って良かったわい」

「あんたも来る気?」

ベルベットに言われたマギルウは片手を上に上げもう片手をない胸にあてて芝居めいて答える

「『お主らと一緒におれば、ビエンフォーを使う女対魔士が現れるぞよ』……と、マギルウ占いに出たのでな」

「当たるのか、それ?」

ロクロウは煽てながら手に顎をやる。うさんくささき満天

「儂は昔、王城に入ったことがある。一緒だと便利かもじゃぞ」

「邪魔したら捨てていくわよ」

ベルベットが釘をさす

「敵の本拠地だ。警備は堅いぞ」

「けど、闇はあるはず。赤いスカーフをつけた兵士を捜すわよ」

アイゼンの忠告を聞きつつ一行は行動を開始した

「マギルウさん、ビエンフーって誰なんです？」

ケンはゼクソン港の報告は聞いてはいるがビエンフーの言葉初耳だった

「そやつが儂の探していたいじめがいがあつて弄りがいがあつてとて
もしい儂の子分、いや、奴隷じゃ♪」

「はあ、子分」

「ちがーう！子分ではなく奴隷じゃ！間違えるでない！」

「はあ、奴隷」

「なんじゃその顔は、むふふ♪なんなら代わりにお前を儂の奴隷にしてやってもいいぞ♪」

マギルウはニヤニヤしながらケンを誘う

「いえ、結構です」

ケンは淡々と切り上げる

「ガクツ！なんじゃ人に最後まで言わせてからに〜!!」

「自分は人の話を最後まで聞いて答える様になっていますので」

マギルウがよよと崩れ落ちながら泣く振りをする

「な、なんと罪深いやつなのじゃ・・・」

「・・・僕まだ何もしてませんけど」

王城に続く道の脇に赤いスカーフを巻いた兵士と見張りの男を見
つける

「・・・手形を拝見」

ベルベットが記章を見せ兵士がうなづく

「確かに」

兵士が退いた所に一つのマンホールがある

「この地下道は、王城に繋がっている。離宮の中に出られるはずだ」

ベルベット達は兵士から説明を聞いた後地下道へ降りる。離宮へ向かう途中浸水した場所があり、マギルウが地下道にはワニが出るだの人の血を使うとワニの肉が柔らかくなるだのその肉がマーボーカレーに使われてるだの、そんな話でライフイセットを怖がらせていたが、じゃあ本当にいるかマギルウで試してみようとなり、マギルウは冗談と謝ったのはいいものの今度は人食いナマズと言い出して最終的にベルベットに突き飛ばされ盛大に水の中に突っ込んだ。それはさておきここには当然ワニはおらず業魔がうろついていた。路面一枚隔てた空間にましてや王都に業魔がいるのは予想外だった

「業魔から市民を守るための城塞都市じゃというに王家の足元に業魔がおるとは、聖寮の怠慢じゃー!」

「確かに、聖寮にしては脇の甘い警備だよな。巨大な防壁で街を囲って、その内側を守るってのが、王国と聖寮の対業魔政策だもんな」

マギルウの悪態にロクロウが肯定する

「壁の内側で発生した業魔にとって、外に逃げるのは容易じゃないともいえる」

「王宮は広いし、建物も大きいから、隠れる場所もたくさんある。取水口を通り抜けるのは業魔にとって難しいことじゃないよね」

「それくらいのごときは、聖寮もわかっておろう。むしろ、誘い込んで一網打尽にすればよかろう」

「業魔の存在に気づきながら放置してる?でも、そんな理由なんて・・・」

「さぱらんのおー」

皆が口々に推測を立てる中、水の流れを見ているケンはふと考えを巡らせる

(うーん、みんなの言うとうりわざわざ業魔を残しておく意味なんてないし、それをしないということは・・・根絶やしにするとかえって困る事がある?)

その後地下道を進みやがて一つの梯子を見つける。これが離宮へと繋がるのだろう。梯子を上った先は広めの部屋になっておりそこ

には本棚が設置されている。

「図書室……？こんなところに出るなんて」

「わぁ……！」

ライファイセットが所狭しと並べられている本に目を輝かせ、それをベルベットが見ている。何を思っているのだろうか

「ほほう、さすがは王城の書庫じゃ。珍本が揃っておるのう」

マギルウは一つの本に触れると棚が横に動く

「わぁ！古代語の本」

そこには古い言語で記される書物が隙間なく並べられていた

「読めるのか？」

「ううん。でも、僕……」

ロクロウの問いにライファイセットが首を横に振る

「暗殺には必要ないものね」

ベルベットの冷たい言葉、実際いらないのだが。それを聞いたライファイセットが肩を落としてしまうが彼女が本棚に近づき無造作に本を一冊抜き取りライファイセットに渡す

「え……？」

「欲しいなら持っていけばいい、いい子ぶっても仕方ないわよ。業魔に協力してるんだから」

ベルベットはそういいながらそっぽを向く

「お前なあ……もっと素直に優しくできないのか？」

「人を殺しに来てるのに？無茶言わないで」

部屋の外へと通じる扉に向かうベルベット

「そんなボロでいいのか？もっと高そうな本もあるぞ？」

マギルウが勧めるがライファイセットはその本がよかったのだろう顔を横に振った

「ケン、行くぞ」

「ええ」

アイゼンが本を読んでいるケンに声をかける。ケンは本を戻し歩いて行く

（この土地についての資料があったから読んで見たけど、"開門の日

「以降に業魔病が発生している。これ以前は発生していないなんてことは無いんだろうけど・・・けど偶然にしては出来すぎている」

「図書室から出ると廊下で今のとこる人の気配はない」

「さて、マガルウ。礼拝堂はどっち？」

「さあて、どっちじゃろ？」

「ちよつと」

「儂は、王城に入ったとは言ったが詳しいとは言っておらん」

ベルベツトが青筋を浮かべる

「あたしは言ったわよ。邪魔をしたら捨ててくつて」

「では、まずゴミ箱を探さんとう」

「・・・あてにしたあたしがバカだった」

「・・・そうそう、肩の力を抜け。さすれば道はおのずと見えてくるものじゃ♪」

相も変わらずマガルウの煽り方は冴えている。その後緊張しているライフィセットにマガルウがまじないだか呪文だの教えたのまではよかったが何回も繰り返してうるさいのでアイゼンがマガルウに拳骨を頭に叩き込まれた

「やがて離宮の奥の部屋、ここが礼拝堂だろう広い場所に出る左右には椅子が並び中央奥には大きな祭壇が配置されている。その祭壇の前に男性が祈りを捧げている、あれが依頼の標的だろう」

「あんたがギデオン？」

「祈りの途中だぞ。何者だ」

「先に聞いたのはこつちよ」

「無礼な。だが、業魔ならば当然か」

「!!」

「そこまです！」

まるでここに来るのがわかっていたとばかりな言葉、ベルベツトたちが驚いているとエレノアがギデオンの前に立ち聖隷と対魔士が左右を挟む

「マギルウ占い、大当たりじゃ♪」

「待ち伏せか」

「これも死神の力か？それとも、あの婆さんに売られたかな？」

「調べたのね？『赤聖水』の元締めが大司祭あいつだつて」

「そう。あなたたちが起こした事件の関連を洗って、ギデオン大司祭にいきつきました」

「知った上で守るの？」

「・・・処罰は聖寮が厳正に下します」

エレノアの言葉にギデオンが声を荒げる

「処罰だど!?私が、どれだけ聖寮に便宜を図ったかわかっているのか!」

そこまで聞いたマギルウは戦えないので後ろに下がる

「ベルベットや、そやつを追い詰めてくれたら、いいことが起こるかもじゃぞー」

エレノアはベルベットの中にケンがいるのに気づく

「あ、あなたは！生きてたんですか!？」

「え？なんか自分死んだことにされてたんですか？」

「と、とにかく！覚悟してもらいます!」

エレノアの声を皮切りに対魔士と聖隷が一斉に駆け出し各々の武器を振るう。ベルベットは高く跳躍し対魔士達を飛び越えエレノアに向かつて突っ込む

「どけ！後腐れなく片付けてあげる!」

「させません！聖寮の規律にかけて!」

刺突刃を出し横に一回転して振られる斬撃をエレノアは槍の柄で受け止める

「あなたは、嘘をついていたのですか!」

「・・・普通業魔の言うことを信じる？それにあんたも見たでしょ、あれだけ深手を負った人間があんな距離を跳べるワケないわよ。」

「!!」

そこまで話した両者はお互い離れ距離をとる

「あいつの相手はベルベットに任せておくか!」

「ケン、お前はライフイセットと一緒にいろ」

「はい」

ロクロウが一足先に小太刀を構えて聖隸と二等対魔士に向かう、アイゼンもケンに軽い打ち合わせをしてロクロウに続く

「紅火刃!!」

「ふっ!!」

ベルベットの刺突刃から炎が帯び、それがエレノアに迫るがそれを後方に下がることで躲す

「裂駆槍!」

エレノアがベルベットに向かって走り込み槍のリーチを最大まで生かしての刺突を繰り返す。ベルベットがそれを真横スレスレに躲し、お返しとばかりに後ろ回し蹴りを見舞うがそれもしやがまれて躲される。今度はエレノアが槍を振り上げる

「くっ!」

ベルベットが槍の軌道を刺突刃の腹で滑らせて逸らす。金属がこすれ合う音が響く

「破っ!!」

ロクロウが掛け声と共に一对の小太刀で二等対魔士の剣撃を浴びせる対魔士の方は何とか防いでいるのがやっつとだろ後方に下がりはなしだ

「こいつも歯ごたえがないな。ヴォーティガンにいた対魔士の方が『まだ』マシンだな」

その言葉と同時に攻撃のペースも上がっていくロクロウ、対魔士もとうとう対応できなくなり武器が弾き飛ばされる。ロクロウは素早く対魔士の前で印を切る

「壺の型・香焰!」

「うわああっ!!」

対魔士の眼前で火の霊力が集約し爆発が起こる。その爆発に対魔士が大きく吹き飛ばされる。アイゼンはもう一人の対魔士をボコつていた。斬撃をスウエーバックで躲しては脇腹や顎、脚に拳と蹴りを叩き込んでいる

「ググ・・・ダア!!」

「・・・」

対魔士も負けじと剣を振るうがダメージが蓄積していく体ではまともに当たることはなかった。拳が腹にめり込み大きく体がくの字になり両膝をついた時アイゼンが少し下がり聖隷術を発動させる

「蹂躪しろーウインドランス!」

風の槍が対魔士の体に命中しこれもまた大きく吹き飛ばされた

「ハッ!!」

「ダアッ!」

ケンとライファイセツトは二体の聖隷を相手にしていた。だが近接に弱いライファイセツトを守るように戦うため二体分の攻勢をケンが引き受けている。細剣の刺突と聖隷術を平手でのたたき落としと受け流し、払い避けてライファイセツトに攻撃が行かないように守っている。その後ろでライファイセツトが聖隷術を詠唱している

「ケンーぼくが足を止めるからその隙に!」

「わかった!頼むよ!」

ライファイセツトの合図でケンが後ろに転がり距離をとる

「重圧砕け!シルクラッカー!」

聖隷に重力場がかかり動きが鈍る

「今だ!ふんっ!」

ケンが接近し片手で聖隷の腹を押し大きく突き飛ばす。聖隷はお互いの武器をかち合わせるベルベットとエレノアの近くまで後退させる。その時ベルベットが何かに気づき跳躍しアイゼンがいるところまで戻る

「ちっ・・・!」

ベルベットが舌打ちしたと同時に奥から増援であろう対魔士が駆けつける

「エレノア様!」

前方から対魔士が二人、そして後方からもう二人現れる。後方の対魔士が聖隷を繰り出す、ついでにマガルウがその前を通る。邪魔である

「ちいつ、増援か」

ロクロウが毒づきアイゼンと一緒に後方から来た対魔士に接近するが聖隷の放った火球がロクロウとアイゼンの攻撃を阻む、二人はダメージこそないが後方へ吹き飛ばされる。ケンはライファイセツトを念のため手を引いて自分の後ろに下がらせる

「飛び道具は向こうの方が上か」

「頭を潰せ！」

「わかつてる！」

アイゼンの指示でベルベットは業魔手をだしエレノアに飛び掛かる

「くっ！」

エレノアが身構えると彼女の体から一つの光が現れる、その光の正体はビエンフーでエレノアの前で浮きベルベットを迎え撃つ

「エレノア様をいじめるなでっ！」

と威勢を張ったのはいいもののサイズの差と純粹に力の差で業魔手の裏拳で殴り飛ばされる

「ビエ~~~~~!!?」

ビエンフーは吹き飛ばされながら何かキラキラしたものが尾を引きながらちようどライファイセツトの所に落ちてくる。ライファイセツトがそれに気づき両手で頭を掴むように受け止める。ライファイセツトとビエンフーの目と目が合う

「わぁ・・・」

ライファイセツトが笑みを浮かべるなかその後ろでマガルウが満遍な笑みと目を光らせながらぬつと現れる

「会いたかったぞくビエンフー♪よくも契約主わかしから逃げてくれたのう」

「マ、マ、マガルウ姐さんく!?!」

マガルウがビエンフーの頭、正確にはシルクハットの天辺を掴み上げ、ビエンフーが宙ぶらりんになる

「元鞘に戻してもらおうぞ」

マガルウはそのまま詠唱に入る。その周り陣が現れる光り始める

「七つ目の杜もりに生まれし一族よ、今、再び契りを交わし我が悶々もんもんたる
祈念きねん、混沌を極めし一滴とならん。覚えよ、汝に与える"真名まなを！
『フューシィーカス』」

「ビエーン！ソッソッバット！」

ビエンフーは悲痛な叫びを上げながら光となりマギルウの中に入り込む。彼女の体から気の様なものが見れる

「ふっふっふ……みなぎってきた〜！」

ベルベットと戦っていたエレノアがマギルウの力に気付く

「この力は……対魔士!?!」

聖隷を無理矢理引き剥がした挙句に意図も簡単に契約を済ませるマギルウの正体に驚くエレノア、それを聞いたマギルウが不満な表情を浮かべ彼女に指を指す

「ちがう!? 儂けんこそは乾坤けんこん宇天うてんを玩具にし、鬼をもおちよくる大魔法使い!」

そこまで言うとは後方の増援に向かって回りながら水球を放ち、全員まとめて吹き飛ばす

「あ、マギルウ姐さんと覚えおけ〜い!!」

一歩進んで歌舞伎めいたポーズをとるマギルウ。それをライファイセツトとケンがなんともいえない表情をしながら呆然と見ていた

「人の身で業魔に味方するとは……恥を知りなさい!」

エレノアが歯噛みをしながら叫ぶ。業魔と聖隷だけならまだしも人間と一緒に暗殺をしようなどと考える訳もない

「一つ貸しよ、マギルウ」

「儂はロクロウと違ってすぐに忘れるぞ」

「じゃあ今すぐ返して」

「ご利用は計画的にじゃなく」

ベルベットの言葉を屁理屈で返しながら術を詠唱するマギルウ

「時間も惜しい、一気にいくぞ」

「応!!新たに編み出した奥義、試させてもらおうぞ!」

アイゼンの提案にロクロウが答え小太刀を構え直し体勢を低くし、同じ二刀流の対魔士に突っ込む。対魔士が反応し応戦しようとする

が時すでに遅くロクロウの剣閃で武器を弾かれる。それが決定的となる、ロクロウが大きく踏み込む

「瞬撃必倒！この距離なら！」

踏み込みからの左の小太刀の斬り上げで対魔士が打ち上がる

「外しはせん！」

右眼が赤く光り今度は右の小太刀で突き上げる

「零の型・破空！」

更に突き上げられた対魔士はそのまま吹き飛ばされ部屋の壁に激突し動かなくなる。それを見たもう一人の対魔士が怖気付いたのか数歩下がる、アイゼンはそれを見逃すことはなかった

「覚悟はいいか？」

アイゼンがコインを取り出し指で弾く。対魔士はそれにつられてアイゼンから視線を外してしまう。拳を握りこみ対魔士の眼前に一気に接近し打拳を叩き込む

「躲せるもんなら、躲してみな！」

デンプシーロールの様に身体を回しながら素早いフックで相手をたたき伏せる

「ウェイストレス・メイヘム！」

最後のアッパーが対魔士の腹にめり込み、高く舞い上がりやがて地面に叩きつけられる。先程の対魔士同様意識が途絶える

「ほれほれどんどんいくぞく!!もつといくぞく!アクアスプリット
!」

マギルウが次から次へと水球を繰り出しエレノアを追い詰める。エレノアはそれを槍で斬り払うものの徐々に追い込まれる

「くっ・・・うう!!」

「本命はこっちよ!どこ見てんの！」

「しまっ!!」

マギルウの攻撃に集中しきっているエレノアの横でベルベットが回し蹴りを繰り出しエレノアを蹴り飛ばす。

「ああっ!!」

ベルベットから少し離れた所でマギルウがにやけながらベルベッ

トに声をかける

「これで借りは返したぞ〜ベルベットや」

「それでいいわよ、後は・・・」

ベルベットが後ろを見るとエレノアが使役している聖隷が細剣を構えてケンとライフィセットに向かって走っていた。

「やべえ！」

「くそー！」

ロクロウとアイゼンが走るが到底間に合わない

「ダメ！術が間に合わないよ！」

「ライフィセット、僕の後ろに隠れて。一か八かでやってみる」

ケンがライフィセットの手を引いて後ろにつけさせる。ケンが両腕を広げ掌を開く

(上手くできるか・・・むしろこれを通じるかどうか！)

聖隷が眼前に迫る中ケンはその目の前で掌を打ち合わせる。乾いた音はほんの数瞬だったがそれが余りにも長く感じられる。聖隷の動きが止まり剣が二人の目の前で止まる

「ど・・・どうなったの・・・？」

ライフィセットがおずおずとケンの後ろから聖隷を見る。その時聖隷が剣を落とし周りを見始め動揺している。まるで今までなにをしていたのかすら覚えていないように。それをケンは見逃さず素早く聖隷の首に手刀を当て気絶させる

「大丈夫かケン」

「全くひやひやしたぜ」

アイゼンとロクロウが近くまで来てケンとライフィセットを見る

「ケン、何したの？」

「いや、これも学んだ技なんだけれどまさか成功するとは思わなくつてね」

「また新しい技か、後いくつ隠してるんだ？」

「隠してるつもりはないんですけど・・・」

それを遠目で見ていたベルベットとマギルウ

「・・・全く、見てるこっちが焦ったわ」

「ほほ、あやつはやつぱり面白いやつじゃ」

「あいつが何したっていうの」

「簡単に言えばの……」

そこまで言いかけた時エレノアの震える声が聞こえた

「そ……そんな……聖隷の契約を打ち破るなんて」

ベルベットがエレノアを睨みつけ歩いて近づく。聖隷の戦力が削れてしまっただけでどうすることも出来ない。ベルベットが目の前まで近づき無言で腹パン（^U^）

「ぐえ……っ！」

エレノアは鈍い痛みで両膝をつき倒れる、槍の金属音がこだまする。ベルベット以外が集まるなか彼女は本命のギデオンに近づく。ギデオンは必死で弁解する

「ま、待ってくれ！全て聖察のためにやったことなのだ」

ギデオンの言い訳をベルベットに言っても仕方のない事なのだが

「神殿建立の費用が要ると言われて、それで赤聖水を……」

無言のベルベット、ギデオンは後退りながらボロを出していく

「勝手に製造量を増やしたのは悪かった！だが、それもワシなりの救済のつもりだった」

理由はさておき元々聖察を憎んでいるベルベットにとってはどうでもいいこと

「話し合おう。誰に頼まれた？被害者か？医者どもか？それとも——」

迷いなく刺突刃を出すベルベットにギデオンが尻餅をつく

「まさか……アルトリウスか？そうなのだな！くそ！私を消して闇に葬る気か！」

ギデオンが勝手に怒りに震えるなか黒い瘴気が彼を包む

「おのれ……！私がどれほど援助をしてやったと……」

「いかん！」

ギデオンの変化にアイゼンが警告した瞬間、彼から穢れが噴出する。それが収まりライフセットがベルベットに向かって走る。

「ベルベット!!」

穢れが噴出したギデオンはトカゲの業魔に変わり果てていた。汚いダイルといえはいいか

「救世主面の若造がああ〜〜ツッ!」

ギデオンがライファイセットに向かって飛びかかる。アイゼン達が走るが到底間に合わない。業魔と化したギデオンの爪がライファイセットに迫る

「くうっ!!」

ベルベットがライファイセットを庇うように背中を向ける。爪がベルベットを切り裂こうとした瞬間、丸太のような腕がギデオンの首にラリアットをかます

「ゴワワアツ!?!」

ギデオンは飛ばされ祭壇に叩きつけられる

「ケ、ケン!」

ライファイセットが叫ぶ、二人前にケンが険しい顔でギデオンを睨みつけていた

「費用がいるからヤクを売りさばいたと・・・しかもそれが救済? ふざけるんじゃない!」

ケンが決して大きくない声ではあるが響く声で怒りを露わにする

「依存性のヤクを生産してそれを人民にばら撒き中毒者を増やし、拳げ句の果てに薬欲しさに人を襲ってまでヤクを手に入れようとする者まで出て来ているんだぞ! あなた達はヤクが売ればそれでいいのか!?!」

「ググ・・・」

ギデオンが首を抑えながらよろよろと立ち上がる

「宗教を商売道具に利用すればそこから腐敗が始まる。例えそれを嘘という白で塗り固めたとしても・・・貴方がそれでもわからないというのなら、僕が貴方を始末する」

ケンが拳を固め走り出す

「くそー消されてたまるかっ!!」

ギデオンが無我夢中で跳び上がり奇跡的にケンのパンチが外れる、パンチは祭壇に当たりそれは粉々に吹き飛んだ、その隙にギデオンが

奥へと逃げる。覆いかぶさっていたベルベットがライファイセツトに言い聞かせる

「ぼさつとしない、死んだら本は読めないわよ」

「ご、ごめんなさい」

「追わんと逃げられるぞ」

「逃がさない。追って殺す」

ベルベットが立ち上がりギデオンを追うべく立ち上がり走り始める。ケンは祭壇の前で動かない。アイゼンがケンに声をかける

「大丈夫か」

「ええ、自分とした事が」

「お前の気持ちも分からんことはない、だが今はギデオンをやるのが先だ」

「はい」

皆が奥の扉を開けようとした時、どこからか指を弾く音が聞こえた。全ての時が止まる

「落ち着いたか？君があればほど感情を露わにするのは珍しいな」

「いけなかったでしょうか」

「自分を見失わなかった、それで上出来だ」

ケンの後ろでルシフェルが携帯を弄りながら立っている

「急用の方は済んだんですか？」

「ああ、済んだには済んだけどちよくちよく戻る必要が出てきてね。それで、こいつらはどうする？」

ルシフェルの足元には気絶した聖隷が倒れている

「ここにもてもまた・・・どこか安全な場所に、お願いできませんか」

「あまりこういう事はしたくないんだが、まあいい」

「ありがとうございます」

「なに、気にするな。それじゃ」

ルシフェルが指を鳴らし時が動き出す。ケンはベルベット達に追いつく為走り出した

離宮の最深部、そこは地下へと続いていた。階段の踊り場に松明の

灯りがぽつぽつと足元を照らす

「ギャアアア〜!!」

「今の悲鳴は!?!」

ベルベツト達の前方からおそらくギデオンのであろう悲鳴がこだました。最深部の部屋に辿り着くとそこには想像していなかった光景が広がっていた

「こいつは．．．なに!?!」

ベルベツト達の視線の先には鳥と獣が合わさった業魔がギデオンを捕食していた。業魔が喰らう内にギデオンは人間に戻っていく。後ろからは意識を取り戻したエレノアが信じられないとばかりに呟く

「業魔が．．．人に戻った．．．!?!それに．．．この業魔は!」

ギデオンを喰らい終えた業魔はベルベツト達に気付き翼を広げ飛ぼうとしたが障壁によって阻まれる

「結界が張られている」

「聖寮が、こいつを捕まえてるってことか!?!」

「この結界．．．前にも」

ベルベツトは以前自分が閉じ込められていた時の結界を思い出す

「なにはともあれ依頼は果たせたの。結果的にじゃが」

「．．．そうね。報告に戻るわよ」

マギルウの言葉で気を取り直し皆一斉に元来た道に戻ろうとするがエレノアが槍を構えそれを阻む

「大司祭にないを．．．!?!それに、この業魔は一体．．．??」

威勢を張るが戦う力もなく目の前の状況で一杯一杯だという事は目に見て明らかだ。ベルベツトはそんなエレノアを冷たくあしらう

「知らないし、興味もない」

「ふざけるな!?!」

それを見てベルベツトがエレノアに向かって歩き出す

「ふざけてるのはそっちよ。対魔士の力なしで、あたしとやるつもり?」

ベルベツトは自分の胸を矛先の寸前まで近づける

「う……」

気圧され、力なく槍を下げるエレノア、ベルベット達はそんなエレノアを横目で見ながらその場を後にする。皆が立ち去った後エレノアが膝をつき目から涙を滲ませる。

「一体なんなのだ！お前達はっ！」

第16話 終わり

第17話

ギデオンの暗殺は間接的であるが成功したベルベットたちはエレノアを置いて離宮の図書室から地下道を通り、最初に入ってきたマンホールから地上に出た

「なかなか盛りだくさんな一夜だったなあ」

「気を抜くな。まだ夜は終わっていないぞ」

体を解しながら呟くロクロウに忠告するアイゼン。油断するのは酒場に戻ってから、である。酒場に足早に戻る途中ロクロウはマギルウに自身が気になっていることについて聞きだす

「対魔士から聖隷を奪うとはな。どうやったんだ、マギルウ」

「元々ビエンフーは、儂の聖隷なのじゃ。それを裏切って家出しよつてからに」

マギルウは見下すような横目でビエンフーを睨みつける

「うう・・・マギルウ姐さんの聖隷遣いのバッドさに耐えかねたんでフ・・・」

ビエンフーは涙を流しながら白状し始めた、というよりか本音を漏らし始めた

「さすらっていた所をエレノア様に拾われたんでフ・・・エレノア様は優しくかったんでフよ・・・」

マギルウとエレノアの扱いの差を遠慮なしに話し始めるビエンフー、それを本人の前で言うのはどうかと思うが

「そうかそうか。今の発言含めて、どうお仕置きしてくれようかのう〜♪」

マギルウの人差し指がビエンフーの頬に食い込みその顔は邪悪で楽しそうな笑みを浮かべている

「ビエ〜ン！またバッドな日々が戻ってきてしまったでフ〜！」

ビエンフーはこれから自身に起こるであろう受難の日に唯々叫ぶしかなかった

「あんた対魔士だったのね」

そこまで聞いたベルベットがマガルウに話す。だが当のマガルウは己が対魔士であることを否定し訂正する

「違おう、魔女じゃよ。こやつは魔法のタネと仕掛け的なアレじゃ」

「だから聖隷と契約できるのは対魔士だけでしょ」

「そんなのは大人が勝手に決めた儂いルールじゃよ」

ベルベットの問い詰めにもマガルウは答えようともせずただはぐらかす

「・・・」

そんな対応にベルベットの頭に青筋が浮かぶがそこをロクロウが制する

「やめておけ、ベルベット。問い詰めるだけ無駄だ」

「儂に問い詰めるのは確かに無駄じゃ、じゃがアヤツは答えてくれるやもしれんぞ？あの時聖隷にしでかしたことをな♪」

マガルウのいらぬ言葉に全員がケンを見る。視線が集まったことにケンはほんの僅かにたじろぐ。ケン自身いままでもこんなに注目されるのは久しぶりだからだ

「おお、そうだったそうだった。あの時は取り込み中だったもんな、そろそろ教えてくれてもいいだろ？なあ」

「俺もだ」

「・・・僕も」

食いつき始めるロクロウに応呼してアイゼンとライフィセットも同様にケンに迫る

「・・・マガルウの事は置いといてケン、あの時のことについて話してもらおうよ」

そこまで言われてケンは少し考えて提案する

「ええ、わかりました。ですがまずは報告が先です。酒場についてからお話しします。ですが自分でもあの時の現象はよくわからないんです」

「わからない？」

ケンの返答にベルベットが聞き返す。そこまで聞いたアイゼンが皆に急かすように声をかける

「とにかくまずは報告だ。行くぞ」

それから酒場に戻りタバサに依頼成功の報告をする

「無事依頼を果たしてくれたようね」

「相変わらず早耳ね」

「それだけが取り柄なのよ。自分の耳は遠くたったけど」

ベルベットの皮肉に対してジョークを交えて返すタバサ、早速ベルベットが本題に入る

「結界を通る『鍵』の情報は？」

「わかったわ。アルトリウスが居る神殿を守る結界内には高位の対魔士しか入れない。そして高位の条件はAランクの聖隷を四体以上連れていること」

ロクロウがそれを聞き自己の見解を語る

「ふむ。つまり四体の強力な聖隷がいれば俺たちも結界を抜けられるってことか」

「だが、聖寮に従わない聖隷はめったにいない。考えたな」

「・・・」

同じ聖隷であるアイゼンがアルトリウスのやり方に一定の評価を送る、ベルベットが対策を思案しようとしたところでビエンフーが飛び出し手に腰を当てふんぞり返りながら声を上げる

「こう見えてもボクはAランクなのでフヨーー！」

それを聞いたロクロウはアイゼンとライファイセットの方を見る

「アイゼンにライファイセットに、ビエンフー。あと一体聖隷が要るな」

「対魔士から奪うしかないわね」

「儂も行くのか？メンドイんじゃないが・・・」

マギルウが嫌そうに体をだらけさせ遠巻きに行きたくないと駄々をこねる。ベルベットはため息をつく

「来なくていい。けど、ビエンフーは置いていってもらうわよ」

「礼儀がなっていないのー。そこは『御同行ください、マギルウ様』じゃろ？」

ライファイセットが不安そうにベルベットとマギルウの問答を見る。

「頼んだら来てくれるっていうの？導師を襲う場に」

「頼まれ方次第では、導師と業魔の決闘なぞ、めったにない見世物じゃし」

「マギルウ姐さんはこういう人なのでフ・・・」

ビエンフーが肩と頭を落とす。マギルウにとつてはスリルがあつて面白そうといったところなのだろう。その問答を聞いていたライファイセットは意を決したように椅子から降り、二人の方に近づく

「僕、みんなに一緒に来てほしい・・・です。お願い・・・します」

ライファイセットがマギルウに頭を下げる。その行動にロクロウとアイゼンとケンは自然と姿勢を変える

「ライファイセット・・・」

「そこまで頼まれては仕方ない。もうしばらく付き合おうとするかの」
♪

「もちろん俺もだ」

「神殿にはメルキオルがいる。目的は同じだ」

「自分も行きますよ」

マギルウが了承し、他の三人も快諾する。それを聞いたライファイセットが安心したようにまた席に着く。ベルベツトはカウンターにいるタバサの方へ向かい記章を差し出し返却しようとしたがタバサはそれを拒否する

「用は済んだ。これは返すわ」

「もっておいきなさい。それがあれば、私たちの身内として援助が受けられるわ」

「救世主を殺そうっていう奴を援助？後悔するわよ」

警告するベルベツトにタバサは口を当て笑う

「ほほほ、ずいぶん御行儀がいいのね。お嬢さん、私たちはそういう”理”の外に生きているんじゃないかって？」

「・・・警告はしたから」

ベルベツトはそれだけという階段の方へ向かうがコイン弾きをしているアイゼンが呼び止める

「待て、ベルベツト」

呼び止められたベルベットが思い出したかのように横を見る。そこにはライファイセットがテーブルに突っ伏して眠っている

「おやまー」

「無理もない。長い夜だったからな」

ベルベットがライファイセットの傍に歩み寄りタバサに尋ねる

「援助頼める？」

「ええ、もちろんよ」

く

ライファイセットを2階の部屋で寝かしつけてしばらくした後、1階でライファイセットを除いた全員が集まっている。理由はケンの事だ

「じゃあ、話してもらおうわよ。あの時涙目対魔士の聖隷にしたことをね。で、あの対魔士が漏らしたけど契約を打ち破るとかどうとか言っていたわね。マギルウ、あんたあの現象わかるんでしょ」

「まあ、ケンがああ聖隷どもにネコだましを仕掛けたときに対魔士と聖隷の契約、まあ所謂繋がりをみたいなものと思えばよい、それが吹き飛ばされたといえればよいかな」

全員思い思いの場所で座ったり寄りかかったりしてケンを見る

「あの時聖隷に向かって仕掛けた技はどちらかというところと暴走したり正気を失った相手を元に戻すための技なんです。その聖隷と対魔士の契約を破るなんてことは自分でも知りませんでした。」

「知りもしなかったのになんで使ったんだ？いまさら言うのもなんだが賢いやり方じゃないぜ」

ケンの言い分にロクロウが指摘する

「すいません。ライファイセットを守るのに必死で土壇場で思いついたのがあれだったもので・・・」

「それならもつと他に方法があっただろう。お前の力なら聖隷二体なんともないはずだが？」

「・・・」

アイゼンからもその事について指摘されてしまう。ケンは何も言うことができずただ黙るばかりだ

「・・・今回は結果論でしかないがな、ケン。お前の戦い方に文句は言

わん、だが時には倒さなければならぬことは・・・わかっているな」
「・・・ええ、既に・・・」

「そう攻めるなアイゼン、今回は結果オーライってことでいいだろう？
ケンもわかっているし甲種にも痛い目にあつたから次はうまくやるさ」
「そうだな、俺からはもう言うことはない」

ロクロウがケンにフォローを入れ、アイゼンも言うことはいったよう
うでそれ腕を組み壁に寄り掛かる。

「じゃがこれからケンも聖寮から目を付けられることになるの〜」
「？」

マギルウの呟きにベルベットが反応する
「確かにそうね」

「あの対魔士の前であんな芸当をやって見せたのじゃ。対魔士と聖隷
の契約を打ち破る者が現れたとなればアルトリウスにいち早く報告
が行くじやろうて。それに全ての聖隷と対魔士にも通じるとも限ら
ん」

「そんなうまい話あるはずないわよ。気を引き締めていかないところ
ちの首が飛ぶことになるんだから。ケン、あんたも気をつけなさい」
「ええ」

その後自由時間となりロクロウとアイゼンは心水の続きを、マギ
ルウはビエンフーを弄り、ベルベットは一足早く宛がわれた部屋に
戻っていった。ケンはカウンターの席に座り一人考え込んでいた
(・・・師匠から学んだ時は正気に戻すとしか聞いてなかったけど・・・
あくまで僕は初歩的で師匠はあれぐらい簡単にできるってことなん
だろうか。となれば僕はまだまだ未熟だ)

心の中でのため息をついてる時に彼の前に飲み物が出される
「浮かない顔ね」

タバサが微笑みながらケンを見ていた

「ありがとうございます」

「その顔は自分は未熟だとか考えてるでしょ」
バレバレだったようだ

「わかりましたか。どうやらあなたには勝てそうにはありませんね」

「人を多く見てきたからね、そういうのわかるのよ」

飲み物を一口飲むと気分が幾分か落ち着く

「あなたはまだ若いもの色々悩むことだってあるわ、でもその悩みがあるのも人間の在り方の一つよ」

「・・・そうですね」

↳

次の日の朝小鳥のさえずりの中ライフィセットが目を覚ます。急いで起きるとその側でベルベットが身支度を済ませていた。ベルベットがライフィセットに気づく

「起きたわね」

「ごめんなさい・・・」

「別にいいわ。眠くなるのも、お腹がすくのも自然なことよ」

ライフィセットは昨日そのまま寝てしまった事を謝っているのだろうがそういうものは自然な事だ。ベルベットがライフィセットに近づくが彼はその行動に一瞬身構えてしまう

「食べたりしないって」

「痛いのも・・・自然なこと・・・」

「痛いのは平気よ、慣れてるし」

「強いんだね、ベルベットは」

ライフィセットの強いという言葉に反応したベルベットは小さな声で呟く

「・・・強くなきゃいけないのよ。仇を討つためには」

「仇・・・」

弟の仇を討つために強くならなければいけない。強がりなのか、本望か

「出発するわよ」

↳

ベルベットとライフィセットが酒場の外に出る、空は晴れ清々しい朝である。ここで全員が揃う

「うーん、晴れやかサワヤカナ朝じゃわー♪裏切り者にみっちりオシオキしてやったでな」

「ビエレン……みっちりすぎでフよく……」

「昨晚はお楽しみでしたねってか、違う意味で

「鍵を殺さないでよ」

「そっちも、坊を食べないじゃろうな？ 大事な『鍵』じゃぞ」

ベルベットの忠告に煽るように返すマギルウ、その内やられるぜ

「……わかってるわ」

「……」

ライファイセットが胸をなでおろす

「じゃが、相手は導師と聖主。導師はともかく、聖主とは世界を創った神様じゃぞ。戦って勝てると思うのかえ？」

「聖主なんて偽物に決まってる。アルトリウスは民衆を操るために神話を利用したのよ。本当に神様なら、業魔病くらいどうにかできるはずでしょ」

マギルウの疑問にベルベットはバツサリと切り捨てる。まあ仮に本当に神様がいたとしても喧嘩売るのがこのシリーズですしお寿司

「……」

それを聞いたアイゼンは何も言わずに後ろを向き顔を逸らす

「カノヌシは存在しないっていうのか？」

「……ううん。カノヌシと呼ばれている『なにか』はある。特殊な術で聖隷を降臨させた聖隷が」

ロクロウの質問にベルベットが自分の推理を言う。断定はできないがそういうものを感じているのだろう

「言い切るのう」

「三年前にこの目で見た」

「ほほう、神様じゃないなら勝ち目はありそうじゃの」

「もちろんよ。第一、狙いはアルトリウス。それ以外はどうでもいいわ」

「アルトリウス様は……弟の仇……」

ベルベットとマギルウの物騒な会話を聞いてライファイセットの表情が暗くなる。ロクロウがそれに気づき、気分を変えるためライファイセットに目的地を聞き出す

「さて、ライファイセット。目指す『聖主の御座』は、どこにあるんだっけ？」

ライファイセットが反応し少しもたつきながらもそれに答える

「えっと・・・ローグレスの北。ダーナ街道を進んだ山の中」

「対魔士が検問を守ってるなら、聖隷を奪えるかもしれない。ケン、あんたの力も使えるかもしれないから、準備だけはしておいて」

「はい、わかりました」

「仲間に検問の様子を調べるよう、シルフモドキ連絡を飛ばしておいた。その情報を元に襲撃計画を立てる」

「ゼクソン港あたりで合流できそうね」

「その予定だ」

今後の予定を立て、ダーナ街道に歩をむける。街道に出るまでに連絡役として使っているシルフモドキの話があった。どうやらシルフモドキは伝書鳩とは違い一箇所を往復するのではなく電話の様に別々の人物のところに行けるといふ。躡けるのが難しく、ベンウィツクが母親代りになることで信頼関係も厚いとの事。そこまでは良かったのだが

ロクロウが食う食わないの話になり一悶着あったのはまた別の話、それと街は司祭の身に何かあったという噂で持ちきりだった。教会側も火消しに大忙しな模様

ゼクソン港に到着しバンエルティア号の乗組員に確認を取る

「シルフモドキ連絡は届いてる？」

「ああ。検問に偵察を出した」

「まだ戻らないのか」

「はい。もうちよつと待ってください」

まだ時間がかかるようだ

「小休止するか。小腹も空いたし」

「・・・うん。空いた」

ロクロウが休息を提案しライファイセットも賛成する

「偵察が戻るまで休憩しましょう」

偵察が帰って来るまで待ったがやがて夕方になる。しかし帰って来るまでなにも出来ないので皆フリーで別々の場所で暇を潰している。ベルベットがブラブラしているなかでメンバーが何をしているのかが目に入る、ロクロウはダイルと船の後部でコソコソしていた。貴重な心水が手に入ったから二人で内緒に飲もうとしているらしい。ケン上半身ボディイスーツ姿で背中に250L樽二つを背負い手の甲を地面につけ負荷をかけるようにゆっくり腕立て伏せをしている。アイゼンはペンウィックと打ち合わせをしている。自分らが出発した後は、すぐ動けるように準備しておくこと、最悪の場合にも備えておくこと、と。そのあとまた暫く散策するとマギルウとビエンフーが座り込んでおり売店で買ったであろう林檎に舌鼓をうっていた。「坊にも、リンゴをひとつやったわ。儂って優しいじゃろ〜?」「リンゴ・・・」

その呟きに何時ものなにかを企んでいる目付きをしたマギルウがベルベットにつつかかる

「お主も欲しいか?ならば、今度はニワトリのマネを——」「必要ない」

マギルウの要求を言い終わらぬうちに拒否しその場を後にするベルベット。その姿を面白くなさそうに見るマギルウにビエンフーがひとつ聞き出す

「姐さん、本気でアルトリウス様と戦うつもりでフカー?」

「まーの。坊に頼まれてしもうたからのー」

「で、でも絶対勝ち目ないでフよ・・・」

能天気必答えるマギルウに必死に訴えるビエンフー

「逆らうのう?なんぞお師さんから言い含められたかえ?」

「と、とんでもないでフー!」

「ならば付き合ってもらうぞ。なあに、危なくなったら逃げればよい。万一死んでも——」

マギルウがそこまで言いかけてビエンフーが知っているのだろう言葉を続ける

「『それだけのこと』でフね・・・」

「さすがよくわかっておるのう、ビエンフー♪……とはいえ、なるべく長くあがいてほしいものじゃ。儂の暇潰しのために……の」

ベルベツトがマガルウ達の話の切り上げ棧橋の方へ向かう。棧橋の先に置いてある荷物であろう木箱の上にライフィセットが座っておりマガルウからもらったであろう林檎にかぶりついていた

「……美味しい?」

ライフィセットがベルベツトに気づき喉を鳴らして飲み込む

「すっぱくて、甘くて……」

自分が持っていたもう一つの林檎をベルベツトに差し出す。ベルベツトは少し躊躇したがそれを受け取りライフィセットの横に座りながら一口頬張る

(……もう殆ど分からない)

内心溜息をつくが目線の先に羅針盤がありベルベツトは話題を変え

「海が好きなのね」

その言葉にライフィセットはたどたどしく答える

「海……波は……怖い。あとサメや変な魚も……でも、すごく大きくて、不思議で……あの先になにかあるのかなって考えると——」
ライフィセットがベルベツトの方を見る、その顔には探究心をのぞかせている

「ドキドキする」

そこまで聞いたベルベツトは顔を僅かに下げ家族、弟の話の始めた

「……あたしの弟も海が好きだった」

「ベルベツトの弟……も?」

ベルベツトが腰かけていた木箱から降りる

「岬で、よく海を見てた。潮風は体が冷えるって叱っても全然いうこときかなくて——」

数歩進んで海を見る

「あんたも、この子と同じように思ってたんだね。羅針盤……買ってあげたかったな……旅だつてさせてあげたかった……」

自然と己の弱さが出始めるベルベット。それから暫くお互い無言の中ライファイセツトはベルベットの背中を見つめていた

「おーい！偵察が戻ってきたぞー」

その静寂を破るようにロクロウがベルベットライファイセツトに声を上げる。ベルベットが集まるために歩を進めるが途中で立ち止まりライファイセツトに告げる

「ライファイセツト・・・あなたは残ってもいいのよ？」

不意のその言葉にライファイセツトは驚き躊躇する

「僕は・・・」

だがそのその迷いもほんの数秒で終わる。ライファイセツトは意を決した顔でベルベットを見る

「ベルベットと一緒に行く」

その言葉にベルベットは背中を向けたまま静かに呟く

「・・・そう」

ベルベットがアイゼン達と合流する、がなぜか彼らの目の前には甲冑を着た警備兵が数人倒れていた

「そいつはペンデュラムを使ったんだな？」

「うん！しかも検問の対魔士を全員吹っ飛ばした。あいつなら船長とも遣りあえる」

アイゼンが偵察から戻ってきたベンウィックから報告を聞いていた。ベンウィックの慌てようからかなり重要なことのようにだった

「・・・わかった。直接俺が確かめる」

アイゼンがそれだけ言うと一人で街道に向かって走っていった。状況の呑み込めないベルベットがロクロウに聞く

「ちよつと、どういうこと？」

「検問がペンデュラムを使う聖隷に襲われてるらしい」

ベンウィックがそのペンデュラムについて説明する

「ペンデュラムは、船長が行方不明になった現場に落ちてた武器なんだ」

「そいつが連れ去ったってこと？」

「わかんないけど、無関係とは思えないよ」

ベルベットの推測にベンウィックが語気を強める。確証はない、だが疑念がないというわけではない

「アイフリードは対魔士が捕えているはず。なぜ連れ去った奴が聖寮の検問を襲う・・・？」

ベルベットが顎に手をやり思考するが判断材料が少ない。その間にマギルウがベルベットを焚きつける

「どうする？ 鍵が一本独走したぞ」

ベルベットは一先ず考えるのをやめ目的に意識を向ける

「追いかけるわよ。混乱してるなら、もったかき回して突破する」

ベルベットがアイゼンを追うように街道に向かう

「ひよえ〜！カゲキ〜！」

マギルウがあまりにもわざとらしいリアクションをとりながら口クロウ達もベルベットを追うため同じく街道に続く門に向かい始めた

「しかし、アイゼンの奴も勝手じやのー」

「仕方ないわ、船長捜しが、あいつの目的だし」

ダーナ街道にある検問の近く来る頃には夜を更け、辺りは月明かりが地面を照らしている。だがその道沿いに幸か不幸かホワイトかめにんが露店を開いていた。いや、開いてしまったというべきか。

「ホワイトかめ屋へようこそっス・・・って、あなた方は!？」

かめにんが営業スマイルで対応しようとしたがその対象がベルベット達だったので顔が絶望へと変わる

「丁度よかったわ。また品を見させてもらおうわよ。もちろん値段はいつもどうりでね」

「いつもどうりって・・・ひーん、これじゃ赤字っすよ・・・」

その後いくつかの物品を補給しベルベット達は店を後にする。が、案の定据え置き価格だったので明らかな赤字になってしまい。かめには滝のように涙を流している

「うう・・・また赤字っす・・・」

「かめにんさん」

肩を落とすかめにんの後ろでケンが声をかける

「あ！あなたは！」

「すいません、またベルベットさんが無理を言っつて」

ケンは懐から手数料分の代金を差し出す

「ああ・・・なんて優しいお方、やっぱりあなたいい人つす」

「・・・どうでしょうか・・・これから世界を敵に回すかもしれないのに。実はお願いしたいことがあるのです」

「へ？なんですか？」

彼はかめにんに大きな革袋を持たせる、かめにんがその中身を見るときガルドがぎっしりと入っている

「こ、これは!？」

「この資金で一つあなたの手腕を買いたいのです」

「それってどういう意味っすか？」

「実は・・・」

それから暫く話し込んでケンはかめにんと別れベルベット達と合流する

「あんだ、あの商人となに話したの」

「今言うことではありませんよ、それよりアイゼンさんを追いましよ
う」

「・・・腑に落ちないけど。まあいいわ」

検問に近づくにつれ金属音がかち合う音が聞こえてくる。ベルベット達がそこにたどり着くと衛兵と対魔士が倒れている中アイゼンとその検問の警備を一蹴したという聖隷がお互い構えをとりながら相対していた。聖隷が袖からワイヤー状の武器を繰り出しアイゼンに向かって飛ばす、ワイヤーの先についている刃がアイゼンの顔を捉えるがアイゼンはそれに身を横に振って躲し攻撃した隙を狙って拳を振りかぶり殴りかかるが、聖隷はそれを楽しむかのように余裕で後ろに下がり避ける

「ちっ・・・」

「やるじゃないの。なに者^{もん}だい?」

聖隷は顔をにやつかせ名を聞いてくる

「死神アイゼン。アイフリード海賊団の副長だ」

アイゼンの名乗りに聖隷は笑う

「アイフリードの身内か!こりや、また楽しめそうだ!」

「・・・やはり、お前がアイフリードをやったのか」

アイゼンの目つきが鋭くなる

「いいねえ・・・いい気合いだ!」

「落ち着きなさい、アイゼン!」

一方的ではあるが即発状況にベルベットが近づき制止しようよ声を上げる

「こいつは聖隷で、聖察を襲った。協力すれば結界を通れるわ」

その言葉に聖隷が面倒そうな態度はぐらかす

「つもらねえ理屈言うなって」

聖隷がペンデュラムを構え戦闘態勢をとる

「俺は、俺のやり方でケジメをつける」

アイゼンも同じく構え、二人同時に声を上げる

「邪魔をするな」

二人の態度と言葉にベルベットも何かキチやったらしい

「・・・そう。じゃあ、あたしもあたしのやり方でやらせてもらうわ」

ベルベットも同じく戦う構えをとる。今更だけどみんな勝手だよ
ねほんと

「あんたたちをうごけなくして、結界を開ける!」

マギルウとライファイセットとケンはその言葉に驚きの表情を浮かべている。なし崩し的にはあるがここに三つ巴の戦闘が始まった。ベルベットが刺突刃でマジに斬りかかろうと二人に向かって走り出す

「なんでこうなるんだ!」

「とにかくベルベットを助けるんじや!そうせんと後が怖い」

「確かに。すまん、アイゼン!」

「う、うん・・・」

ロクロウもアイゼンに謝罪の言葉をかけながらもこの事態を打開すべく小太刀でアイゼン達に向かう。マギルウとケンは聖隸の方を何とかすべく相対する。マギルウもそうだがケンはかなり気が進まない様子だった

「ケン！しつかりせんとまたベルベットにドやされるぞ！」

マギルウは聖隸術を展開しながらケンを急かす

「なんだあんちゃん、気のすすまねえ顔だな」

「あー・・・こういう事態は初めてですからね、なにより同行してた人とやりあわなければならぬとなるとどうも」

聖隸がペンデュラムをちらつかせつまらなさそうにため息を吐く

「そうゆうなつて。安心しろ、命までは取りはしねえよ・・・ただ」

その瞬間ペンデュラムをケンに向かって超高速で放つ

「痛てえめにはあつてもらうぜ！」

向こう側ではベルベットとロクロウ、そしてライフィセットがアイゼンと戦っている

「邪魔をするなど言つたはずだ!!」

アイゼンの右ストレートがベルベットの顔に迫りそれをぎりぎりで躲し、お返しの回し蹴りをアイゼンに後ろに下がられ回避される

「言つたでしょ。あんたらを動けなくして結界を通るつて、そのままの意味よ。最悪生きてりやいいわけだし」

怖いことを言つてのけるベルベットの横からロクロウが小太刀を突き立てようと走りこむ

「こんなことしたくないんだがベルベットが怖いんで、な!!」

「くっ！」

アイゼンが聖隸術で地面から岩を隆起させそれを盾代わりにロクロウの刃を受け止める

「今だライフィセット！」

「アイゼン、ごめん！シェイドブライト！」

螺旋の光弾がアイゼン目がけて飛んでいく

「うおっ!？」

光弾を横に回避し体制を立て直そうとした時、後ろからベルベット

が刺突刃を繰り出しアイゼンの胸に刃を突き出す。それを身を屈んで避けたと同時に今度はロクロウ地面スレスレから抉り込むように小太刀を切り上げる

「静っ!!」

「ちいっ!」

上体を逸らしなんとか躲し今度はアイゼンが二人に攻撃を開始する

「やりやがったな!ウインドランス!!」

回避中に聖隷術を唱え風の槍がロクロウとベルベットに迫る

「くっ!」

「うおっと!」

二人は攻撃をそれぞれ別の方向に避ける

「こうなったらやるしかないか!」

「そういうこと!!」

二人はそれぞれの獲物をきらめかせアイゼンに向かい合う。一方ケンとマギルウは聖隷との戦闘を続けていた。マギルウの援護の水球を受け聖隷のペンデュラムの縦横無尽な攻撃をケンが体を逸らしたり折り曲げながら回避しつつ相手の出方を伺う

「おもしろえな!おい!大方俺の攻撃の隙を突こうと考えてるだろおまえ」

「・・・」

ケンは言葉を発することなく唯々攻撃を避けるばかり、その後ろでマギルウが聖隷術を唱え高速の水球を射出する

「これでどうじゃ!?アクアスプリット!」

「おっとっと」

聖隷はペンデュラムを引き寄せ自身の前に巡らせる。水球はワイヤーから発せられる光の壁に阻まれ水しぶきと化し無効化される

「きー!蛇のようにウネウネしとるくせに亀のように固い紐じゃなそれは一!」

マギルウがキーキー文句を垂れる中聖隷がケンを捲し立てる

「で?おまえさんはなにもしねえのか。避けてばかりじゃケリはつか

ねーぞ」

「そうですね、ちよつと強引ですがこちらから行きます」

「やつとかケンよ。いつまで焦らすもんじゃから待ちくたびれたぞ」

「援護の方はお任せします」

ケンは今度は聖隸に向かって速足で接近すると聖隸は楽しそうに口角を上げペンデュラムを操り始める

「いいねえー！そこなくっちゃなあー！」

ペンデュラムをしならせそれをケン目がけて放つ、普通ならそれを避けるものだがケンはそれを下から掬い取るようにつかみ取る

「なっ!？」

聖隸はペンデュラムを引つ張り離そうとするがピクリとも動かない

「よー！ー！しい!!いいぞケン！とどめはこのマギルウ様に任せておくがよい！」

「やっべ!!」

マギルウは悪い顔を浮かべ一枚の式神を取り出す

「伸びろ、伸びろー！」

掛け声と共に式神が縦に伸び天にも届かんかとばかりである。伸びきったところでそれを一気に振り下ろす

「光翼、天翔くん！」

「うおおっ!!」

聖隸はペンデュラムの持ち手を放し避けるには避けられたが判断が僅かに遅れ風圧で吹き飛ばされる、それをケンが見逃さず腰に下げている短剣を抜き走り出す

「ぬう〜外れたか、まあいいわい」

「あの野郎やりやつ・・・!?ちっ」

毒づきながら体制を立て直そうと立ち上がった時ケンが後ろから首筋に短剣を翳す。聖隸は降参するように両手を上げ。ケンは短剣を収める

「そつちも終わったようね」

ベルベツトの方も決着が着いたようでロクロウと前後から刃を振

りかざしている。その後それぞれの獲物をしまい面向かって聖隸と向かい合い目を合わせる

「・・・わーっただよ、俺の負けだ。で？この結界を開けてどうする気なんだ？え？」

聖隸は結界に近づき壁を叩くように結界に触れる。結界は弾力があるようでブヨンブヨンしている

「導師を殺す」

「ひゅ〜♪そいつはスゲエ！」

ベルベットの言葉に聖隸はオーバーなりアクションをとりながら笑うがアイゼンが忠告する

「こいつは本気だぜ」

それを聞いて聖隸は観念したようだ

「へーへー、ケンカに勝ったのはあんただ。どうすりやいいんだい？」

そこにビエンフーがマギルウの中から出てくる

「では、聖隸のお歴々！結界の前へ〜♪」

マギルウの掛け声を合図に聖隸達が結界の前に立つ、ライフィセツトが一足先に結界に手を翳すと結界が雪のように砕ける

「あ・・・っ!？」

ライフィセツト自身驚いておりアイゼンもこの出来事に驚いている。聖隸はライフィセツトを一瞥し後ろを振り返る

「あとは任せませ。その方が、対魔士どもの慌て顔が見られそうだ」

聖隸がベルベット達が来た道に戻り始めるがアイゼンがそれを呼び止める

「待て。まだ肝心なことを聞いてねえ」

「それ以上はやめとこうぜ、アイゼン。命のやり取りになっちまう」

アイゼンの方を向き直り警告する聖隸

「!!・・・何者だ、お前は？」

それを聞かれて聖隸は初めて自分の名を名乗る

「風のザビード。ただのケンカ屋さ」

それを最後に元来た道に戻る。それを見届けベルベットはアイゼンに聞く

「結界は開いたわ。追うなら止めないけど」

「・・・いや、神殿に向かう。アイフリードの行方に近いのはメルキオ
ルの方だ」

「バカね。割り切れるなら、最初からそうすればいいじゃない」

「そんなに器用じゃない。だからここにいる」

アイゼンは目を逸らすことなくまっ直ぐに言い切る。自分、不器用
ですから

「・・・バカね、ほんとに」

「アイゼン。さつきは・・・ごめん」

ライファイセットが先ほどの戦闘の事でアイゼンに謝る

「戦ったことか？気にする必要はない。殴られた回数を一生覚えて恨
むだけだ」

「!？」

ライファイセットが震え上がる。怖い

「冗談だ」

それにライファイセットが胸をなでおろす

「どうすればいいのか・・・わからなかった」

「悩むのはいい。だが、最後は自分で決める。その結果が俺と戦うこ
となら、殺されても文句は言わん」

「うん・・・」

「逆に、俺がお前を殺すことになるかもしれないがな」

ライファイセットがまた震え上がる

「・・・うん」

「ふっ、しゃべりすぎちまった。あの野郎のせいで血がたぎっている
ようだ・・・」

神殿のすぐ近くにやってきたがそこには人間はおらず代わりに獣
型の聖隷が結界を見張っていた。わざわざここに神殿を作ったのは
疑問だったがライファイセットとアイゼンがここが地脈というエネル
ギーの流れの集中点であるとのことだ。だがこの地脈の集中点にな

ぜ神殿を立てたのかはわからないが奇襲にはもってこいの場所であつた。一方そのころその神殿内部ではアルトリウスが地面に座り目を閉じ瞑想している。その後ろから足音が聞こえアルトリウスが僅かに顔を上げる

「誰も入るなど言つたはずだが」

その足音の正体はエレノアだつた。かなり緊張しているようだ

「も、申し訳ありません。ですがローグレス離宮で異変が発生して――」

そこまで言いかけた時アルトリウスが口を挟む

「エレノア。自分の聖隷はどうした？」

アルトリウスの冷たい指摘にエレノアが顔をうつ向かせ小さく答える

「・・・契約を破られ、無理やり引きはがされました。業魔手の左手を持つ者の仲間の男に」

「業魔手・・・ベルベットか。」

「ご存じなのですか!？」

エレノアが顔を上げ驚愕する

「昔の教え子だ。オスカー、テレサに続いて、お前まで退けたか。その男についても二人から報告を受けている。」

そこまで聞いたエレノアが意を決してアルトリウスに進言する

「アルトリウス様、私に新たな聖隷をお与えください!必ずあの業魔を倒して見せます!」

アルトリウスは別段語気を変えることなく淡々とエレノアを制する

「強い『感情』だな。お前は、憎悪で業魔を討つのか?」

その指摘に我に返つたエレノアは弱弱しく謝罪する

「も、申し訳・・・ありません」

「模範生のお前も、ベルベットに当てられたようだな」

エレノアは今まで疑問に感じていたことをアルトリウスに聞いた
だす

「ひとつだけ、教えてください。離宮に捕らわれていた巨大な業魔は

なんなのですか？」

「・・・あの区画は特等以外、立ち入りを禁じているはずだ」

「ですが、あれは聖寮の結界で捕らえられていた。あんなものが王都にいていいはずがありません！」

客観的に見れば至極当然の言い分のエレノア、アルトリウスは彼女にひとつの問いをかける

「・・・エレノア。なぜ鳥は空を飛ぶのだと思う？」

「は・・・？」

エレノアはその問いにひどく困惑する

「それは・・・餌を捕らえるため・・・でしょうか？」

エレノアは生物学的上の正解を言い当てる。半分正解であるが

「下がりなさい。お前が知る必要のないことだ」

「・・・」

アルトリウスの冷たい言葉にエレノアはなんにも言えず、黙って引き下がるしかなかった。エレノアが部屋から出た後アルトリウスは独り言のように呟く

「・・・ベルベットが来るか。この縁えだしに決着をつけねばなるまい」

アルトリウスはそこで初めて眼を開けた

く

結界を守っていた聖隷を倒しながら仕掛けを解除しつつ先に進むベルベット達、なんで解除方法が外にあるかは疑問だけど。クツソ無駄に長い階段を上がりきり神殿内部へと続く入り口に向かって走るが、ロクロウの質問で足を止める

「ベルベット。アルトリウスはどんな技を使うんだ？」

ベルベットは振り返りながら答える

「左手一本で振るう長刀よ。それにシアリーズっていう火を操る聖隷。けど・・・そいつはもう殺した」

「・・・」

ケンはその言葉に僅かに顔を下げる

「そいつの代わりに、カノヌシを名乗る聖隷を使役しているのか」

「おそらく。けど、そいつがシアリーズ以上の連携を取れるとは思え

ない」

「ずいぶん希望的な観測じゃのう」

ベルベツトは策戦を説明する

「シアリーズ以上なら、あんたたちの出番。一對五で使役聖隷を抑え込んで。その隙について、あたしが喰い剥がすか、ケンの力で繋がりを吹き飛ばす。そうすればアルトリウスはただの人間よ」

ロクロウはそこまで聞いて問題を提起する

「だが、どうやってアルトリウスの間合いに入る？」

「ライファイセットの術を使う。あたしは斬られようが焼かれようが、かまわずアルトリウスにつっこむ。あんたは、あたしが動けるように回復し続けなさい」

ライファイセットはベルベツトのあまりの捨て身の策戦に開いた口が塞がらない

「攻撃を受けるのを前提にした特攻か。確かに虚をつけるかもしれないが」

「即死しなければのう」

「でもそれじゃベルベツトが——！」

「これは命令よ」

ライファイセットが反対しようと声をあげようとしたが命令と冷たい語氣にただ小さく答えるしかない

「……はい」

ベルベツトは振り返り神殿入り口へ進む

「結局モノ扱い。惨いもんじゃな」

「……」

入り口までまた無駄に長い通路を進む途中ビエンフーが痺れを切らしたのかマガルウに質問する

「マガルウ姐さん……あのベルベツトという業魔、本気で導師アルトリウス様を殺す気なんでフか？一体なにを考えてるんでフ??」

「さあての。案外なくんにも考えておらぬのではないか」

マガルウのはぐらかしにライファイセットが口をはさむ

「違うよ……『殺した』って言った」

「演説の時だな」

「俺も聞いた。アルトリウスは『仇』だと」

「それにしたって、すっごい憎しみでフよ。アルトリウス様とはどんな関係なんでフか?・・・」

「ここでマギルウはビエンフーにある指摘をする

「様”はいらんぞ」

「ワット?」

ビエンフーはその意味を理解できていないようだ

「その時がくれば、わかるだろう。生きてアルトリウスに牙を突き立てられればな」

「その通り。全てを焼き尽くす憎悪の炎が、一体誰を焼くかも・・・のう」

「!!」

マギルウの言葉の意味が分かったのだらうライフイセットは肩を落とす。ロクロウがそれに気づきすかさず声をかける

「危ない橋だが、付き合うのも恩返しだ。行こうぜ、ライフイセット」

「・・・うん」

皆が進む中ケンには言葉には出さないが心中で結論をだす

（憎悪の炎・・・自分自身を焼く事にならなければいいが・・・いや）

長い通路を抜け神殿内部に入ったベルベット一行。内部は備品はなくまるで氷で作られたかのように白と青の床と壁で温もりのない冷たい雰囲気醸し出している奥に続くもう一つの扉を開けるととうとう目的のアルトリウスが床に座っていた。彼の頭上には何かの紋章が僅かに光っている

「アルトリウスツツ!!」

因縁の相手を見つけベルベットが名を叫ぶ。アルトリウスは眼を開き振り返る事なく話し始める

「業魔に聖隷・・・ずいぶん風変わりな仲間を集めたな」

「シアリーズもいるわよ。あたしの胃袋の中に」

「母鳥となることを望んだか・・・」

アルトリウスが立ち上がりベルベット達と相対する。ベルベットの目が憎悪で開く

「今度は前のようにはいかない！あの子の・・・ライフィセットの仇を討つ！」

「!!」

ライフィセットは初めて自分の名がベルベットの弟のものだったと知るが。すぐに切り替えてアルトリウスと向かい合う。

「・・・いいだろう」

アルトリウスは長刀を鞘ごと床に突き刺し自身を抜く。それと同時に彼の体から青いオーラが出始める

「かかってこい！」

く 第17話 終わり

第18話

アルトリウスが剣を横に振りかぶると彼を纏っている気が一気に噴出する。離れていてもその圧が凄まじいものだと思われる。

「これが導師の剣気か！」

「こりや死ぬかもの〜」

ロクロウが驚愕しマギルウが怖気づく

「だが聖隷はいない！」

「策戦通りにいくわよ！」

「う、うん！」

アイゼンがもう一つの目的である聖隷がないことでアルトリウスに狙いが絞れる、戦力を一方に集中でき勝機が上がる。それを理由に皆を鼓舞する。一足先にロクロウが己の獲物を構えアルトリウスに接近する

「先手必勝!! 衝皇震！」

真正面から左へ踏み込み文字どおり大地ごと切り裂く斬撃がアルトリウスを襲うが当の本人は表情一つ変えることなく瞬時に後ろに下がる。初手が躲されてもロクロウは尚も喰らいつく。

「うおおっ！ 風迅剣!!」

小太刀を構え直しアルトリウスの心臓目がけ渾身の突きを放つ、が

「ふっ！」

「なっ!？」

アルトリウスが己の長剣を小太刀の真下から切り上げるように払いロクロウの胴がから空きになってしまい、そこにアルトリウスの鋭い蹴りが刺さる

「ぐわあっ！」

ロクロウが蹴りで大きく吹き飛ばされる後ろにベルベットとアイゼンがロクロウと入れ替わる形で攻勢に出る。ベルベットが飛び上がり脳天をたたき割ろうと踵落としの体勢に入る。

「はあああ!! 崩牙襲！」

アルトリウスの頭部に向けられた踵落としが当たる瞬間、眉ひとつ動かすことなく横に体一つ分移動する。その横でベルベットの脚が目標を見失い唯々地面を削った所でアルトリウスがベルベットに長刀の柄頭でベルベットの脇腹を穿つ

「ぐふっ！」

ベルベットが脇腹の鈍い痛みにもつれる中その首を刎ねんと刃を振り上げる。それを阻止すべくアイゼンは拳を握りアルトリウスに殴りかかる

「オラッ!!ハッ！」

ジャブとフックの素早い攻撃でベルベットから引き離すが如く連撃を続けるがそれも躲されるか掠る程度で決定打が与えられない。アイゼンが横目でライファイセットとマギルウに指示を飛ばす

「ライファイセット!マギルウ!今だ!!」

「重圧砕け!シルクラッカー!」

ライファイセットの聖隷術が発動すると同時にアイゼンが後ろに飛び退き重力場がアルトリウスを捕える

「ぬっ・・・」

「これでもくらくらえじゃ!アクアスプリット!!」

マギルウの水弾が動きの鈍っているアルトリウスに向かって直進する

「無駄だ・・・!」

「そんな!」

「な、なんじゃとく!!」

アルトリウスは長刀を振りかぶり思い切り振るとその剣気がライファイセットとマギルウの術を纏めて吹き飛ばす。その隙にアイゼンと吹き飛ばされたロクロウが合流し二人同時でアルトリウスに迫る

「強いと確信していたが全く底が見えんぞ!」

「ここまで手も足もでんとは・・・!」

二人は走り出し二手に分かれ左右から攻撃を仕掛けるアイゼンが先に聖隷術を展開するロクロウが攻撃できる隙を作るためだ

「っ!破碎しろ!ストーンエッジ!」

アルトリウスの足元から石の槍が飛び出し彼を貫こうとするが表情一つ変えずに後ろに下がる、そこにロクロウが空中に印を切り水流を発生させる

「ぬおおっ!!参の型・水槌!!」

圧縮された水流の刃がアルトリウスを切り裂かんとするもそれを瞬時に見切り跳躍しアイゼンが作り出した石の槍の後ろに回り込む、水流の刃が石を切り裂く。石の陰からアルトリウスが飛び出しロクロウの胸部に回し蹴りを放つ

「がはっ!!」

ロクロウが蹴り飛ばされる横からアイゼンが拳を振り上げアルトリウスに向かって走る

「ハアアッ!!冬木立(クラストー)!!!」

スウエイからの冷気を纏ったフックが顔面に向かって放たれるもののそれですら僅かに顔を逸らされ躲かれ膝蹴りを腹部に叩き込まれ体を折り曲げた所で背中を柄頭で殴打され両膝を着いて崩れ落ちる

「ガフウ!・・・」

アイゼンにアルトリウスが一瞥すると次はライファイセットとマジルウに冷たい視線を移す驚く二人にケンが前に立つ

「・・・お前が報告に聞いた男だな・・・」

「・・・」

アルトリウスの言葉にケンは表情を変えることなくお互い目を見据える

「実際に見てわかった。お前は危険だ、生かしておけば後々面倒なことになる・・・その前に——」

「お前の相手はあたしだー!!!」

アルトリウスの背後からベルベットが刺突刃から炎を纏わせながら走り込む。それにアルトリウスは迎え撃つべく体の向きを変える

「紅火刃!!!」

炎の刃がアルトリウスの首に迫るが表情を変えずに長刀で受け止め弾き返す。ベルベットが体勢を崩す中長刀を構え直し今度はアル

トリウスが初めて攻勢に出る

「ベルベット……まずはお前から仕留めさせてもらう」

「しまった……っ!!」

アルトリウスが地面をすべるように滑走しベルベットに一太刀を入れる

「一太刀とは言わん!」

次に分身したかのように多方向からベルベットに斬撃を浴びせる

「全身に死の慟哭を刻め!」

最後の斬撃の後にベルベットに背を向けたまま地面に剣を突き立てるとベルベットを霊力の爆発であろう光が彼女を吹き飛ばす

「漸毅、狼影陣!」

「ああああ!!!」

ベルベットが悲鳴を上げながら後方へ大きく吹き飛ばされ地面に叩きつけられる。

「ぐうううっ!!」

アイゼンとロクロウは何とかライファイセットとマギルウに合流する

「くっこれは不味いぜ……」

「ライファイセット……マギルウ……頼めるか」

「うん……!快癒瞬け!ファーストエイド!」

「もうどうにでもなれじゃ!ハートレスサークル!」

二人の回復の聖隷術で二人のダメージが回復するも状況は圧倒的に不利、ケンは後衛である二人を守るため動けない。アルトリウスは改めてケンに己の長刀の刃先を向ける。ケンは意を決しライファイセットに声をかける

「僕があの人を引き付ける、その間にベルベットさんをお願い」

「!?一人じゃ無茶だよ!!死んじやうよ!」

「時間稼ぎにはなるよ。その間に体制を立て直してほしい!早く!」

ケンがそれを最後にアルトリウスに向かって走り出す。ライファイセットも決意を固めベルベットに駆け寄る

「お願……い……」

ライファイセットがベルベットに回復の術をかけてベルベットが立ち上がる

「まだだッ！」

ベルベットが刺突刃と出しケンとアルトリウスが戦う中走り出す。ケンはそれに気付き刃を躲しベルベットが攻撃するチャンスを作り出す

「はあっ！」

刺突刃を振り下げ斬り裂こうするが半身で避けられるが地面に着地すると同時に飛び回し蹴りを放つ、がこれも後ろに下がられ刺突刃を横薙ぎに振るい喉笛をかつ切ろうとしても半歩後退し躲される。次に間合いを詰めての斬り上げをするが全て分かっているかの様に半身を下げて避けてしまう。斬り上げの跳躍で距離が出来そこから走り出し刺突刃の切っ先をアルトリウスの顔面目掛けて突く。が、アルトリウスは首を逸らし刃を躲すとお返しに長刀をがら空きのベルベットの腹部を貫く

「かは・・・」

「いけない・・・！」

ケンがベルベットを助けようと近づこうとするがベルベットの真後ろにいる為、迂闊に手を出せない

「もう一回よーライファイセット！」

アルトリウスがそれに気付きライファイセットの方を見る。ケンの陰に隠れていて見えなかったがライファイセットが聖隷術を発動させながら走り寄りベルベットを回復する

「ううっ!!」

ベルベットのダメージが回復した所でベルベットが呟く

「戦訓その四！はあああッ！」

ベルベットの腹部に長刀が刺し貫いたまま刺突刃を振りかざす

「ぬっ・・・」

アルトリウスは瞬時に察して長刀を引き抜き距離を取る。刺突刃の斬撃は空振りに終わりベルベットが倒れこむ。ライファイセットがすかさず駆け寄り出血する傷口に回復の聖隷術をかける。そこでア

ルトリウスが口を開く

「ふっ……『勝利を確信しても油断するな』か」

ライフィセットの術を受けながら苦悶の表情で息を切らしながらも仇を睨むベルベットにそれを後ろから見るケンとアイゼン達にアルトリウスは宣告する

「お前を取りこぼすわけにはいかない。戦訓通り、全力で相対そう」

アルトリウスが長刀を真上に翳す

「『聖主カノヌシ』と共に」

その瞬間彼の後ろにある紋章が眩い光を放ち始める。その時今までの死闘で僅かに与えた傷が一瞬で治る

「一瞬で回復しやがった!」

「この力……まさか本物!?!」

「そりゃ反則じやろ〜!」

ロクロウが驚き、アイゼンは聖隷の力が本物であると悟り、マジルウは文句を垂れる。だがライフィセットは皆と少し違う

「こ、この感じ……は……!?!」

「これは……こいつは、あの夜の!」

ベルベットはこの光景を見たことがあるのだろう目を見開き、それを凝視する。アルトリウスの背後から光を纏った波動が噴出しアイゼンとロクロウとマジルウが吹き飛ばされる

「おわあ!」

「ぬおおっ!」

「ひよええ〜」

ベルベットはライフィセットを庇いながら抵抗するが耐えきれずに二人とも吹き飛ばされる

「きやああ!!」

「うわあ!!」

「皆さん!」

ケンは光の波動を物ともせず耐えたがベルベット達を見て声を上げる。波動の力は余りにも強く、皆満身創痍だ

「……うう……まだよ……回復を……」

ベルベットの指示でライフィセットは手をかざし聖隷術をかけるがライフィセットが抗議する

「もう無理だよ……！逃げないと！」

皆が重い体に鞭を打ち蹠跟めきながら立ち上がるがその横から聞き覚えのある声が響いてきた

「今度は逃がしませんよ」

建物の入り口に目をやるとそこにはエレノアにテレサにオスカー、そして一人の老人が立っていた。これではケンはあるトリウスと対魔士に挟まれる形になる、マギルウはその老人を睨みつけるが本人は意に返さない。オスカーは一步前に出聖寮式の敬礼をし謝罪する

「申し訳ありません、アルトリウス様。シグレ様が警護していると思いい、油断しました」

「!!」

シグレという言葉にロクロウが反応する

「シグレなら修行に出た。そもそも、私を一番斬りたがっているのはあいつだ」

「変わらないな」

そこに老人が口を開く

「まったく。アイフリードの時といい、勝手なやつだ」

「やはりこのジジイが……！」

アイゼンが老人に目寝付ける

「違う……誰よりあんたを斬りたいのは……」

ベルベットが蹠跟めきながらも立ち上がり尚も導師に牙を向ける

「あたしだツツ!!」

アルトリウスの前にテレサが割って入りベルベットに立ちほだかる

「アルトリウス様。この業魔の始末はお任せください」

「そうはせない！」

ケンがベルベットを援護する為動こうとした瞬間横からオスカーが剣を振りかざし行く手を阻む。

「あの時は不覚を取った……だが、今度はそうはいかない！」

「く……」

「……テレサ、その業魔は任せる」

「は!!」

アルトリウスが長刀を構えケンに向き直る、老人が遠目から両方を見て顎髭をさすりながら様子を伺う。テレサが手を翳し自身の前に聖隷の一号を出す

「ハアアアツツ!!」

ベルベツトが刺突刃を構えテレサ向かって突っ込み刃を突き立てる

「どけえー!!」

テレサが杖を回転させ一号と同時に聖隷術を発動させる

「思い知れ! 忌まわしい業魔が!」

無数の氷の針がベルベツトを襲い吹き飛ばす。ダメージが残る体ではそれをいなす力も残っていないかった。ライフィセットが駆け寄り聖隷術でベルベツトを回復しようとする

「まだ……だ……」

うわ言のように呟く様にライフィセットが疑問をぶつける

「なんで……? すごく痛いでしょう? 苦しいでしょう? なのに、なんでベルベツトは戦うの?」

その問いが聞こえたのか。それともうわ言かベルベツトは途切れ途切れに話し始める

「あの子は……ライフィセットは、もつと痛かった……なのにあたしは……なにもできなくて……」

ライフィセットがベルベツトの後悔に涙を浮かべる。ベルベツトが手を伸ばしライフィセットはそれを取る

「ごめん……ごめんね……」

「ベルベツト……」

ベルベツトの懺悔にライフィセットは唯彼女の名を呼ぶことしか出来ない。それを聞いたエレノアが気まずそうに顔を下げる。だがそこにライフィセットにテレサが杖を突きつける

「業魔と馴れあうとは。二号、お前は罰を与えましょう。その業魔を

殺して、お前も命を断ちなさい」

ライファイセツトが俯きながらも顔を横に振り明確な拒否を伝える

「……いやだ」

「契約を忘れたか！これは、お前の主の命令です！」

テレサが手をかざすとライファイセツトが苦しみだす

「あああつ!!」

ライファイセツトはそれでも尚拒み続ける

「命令なんて……いやだ！僕は！僕は……っ！」

その時カノヌシの紋章が再び輝き始める。アルトリウスがケンとの戦闘に一旦距離を置きその異変に気付く

「この力は……！」

「ベルベットが死ぬなんていやだっ!!」

ライファイセツトの叫びと同時に波動が噴出しテレサは一号共々吹き飛ばされる

「あああつ!!」

ケンと相對していたオスカーがテレサが吹き飛ばされ事に驚愕する

「姉上ー！」

「ライファイセツトのあの力は……」

それと同時に空間からオレンジ色の球体に真つ黒な裂け目、まるでドラゴンの眼の様な形のもが現れた。アイゼンがそれがなんなのかわかつているのかすかさずベルベットを抱え上げる

「あれに飛び込め！ロクロウ！」

「おう！ケン！お前も急げ！」

「儂を忘れるな〜！」

ロクロウが気絶したライファイセツトを小脇に抱え裂け目に向かって走り出す。マジルウが後を追う様に裂け目に飛び込む。それを見ているエレノアがそれを止めるべく自らも裂け目に向かって走り出す

「逃がしはしません！」

そこまで言ったのはいいが裂け目が一瞬大きくなりエレノアが吸

い込まれる様に体が浮き上がる

「あああつ!？」

なんとも情けない体勢で吸い込まれたエレノア、ケンも続こうとしたが横から長刀が伸び、それを掴んで止める

「……」

「言つたはずだ、ここでお前を仕留めるとな」

そうこうしているうちに裂け目が閉じ始めるが老人は紫色の球体を飛ばし裂け目の中に送り込んだところで完全に閉じる。オスカーがテレサに駆け寄りながら老人がぼやく

「カノヌシの力と地脈の反応とはな。珍しいものを見た」

ケンと距離を置いたアルトリウスが呟く

「そういうことか……」

アルトリウスは走り始めた

「しかし、聖隷に弟の名をつけるとは。お前はどこまでも——」

く

「起きなさい、ベルベット」

いつか見た白と赤の空間に今度はベッドと一つの椅子、なにも映さない窓。そのベッドに蹲るベルベットの横で彼女の姉セリカがいた

「やあ……もう少し寝かせて、お姉ちゃん……」

低血圧なのか、それとも唯寝たいだけなのか、駄々をこねるベルベット

「しよのない子ね。私のお願いはどうなるの?」

「お願い……?」

ベルベットが眠そうに聞き返す

「ええ。あの人を頼むわね……って」

セリカの後ろ姿がシアリーズに変わる。

「!!」

ベルベットがその言葉を思い出し後ろを振り向いた時、意識が途絶えた。

「う……」

次に気がついた時、そこは外でも洞窟でも海の上でもなくなんとも

形容し難い空間だった

「ここ・・・は？あたしは奴らに——」

そこまでいうとベルベツトは自分の容態に異変がある事に気づく
「傷が治ってる!!」

ベルベツトが驚いていると自分の背後に何かがあることに気づき
振り向く、そこいたのはライファイセットだが彼の周りに黒い何かがハ
エの様に彼の身体にたかっている。ベルベツトはすぐ様近づき黒い
ものを払いライファイセットを抱き起し、彼の額に手を当てる

「ひどい熱」

「うう・・・」

ライファイセットは熱と苦痛に魘されながらも自身の手をベルベツ
トの手に当てる

「死なな・・・で・・・ベルベツト・・・」

うわ言でもベルベツトを守ろうとする意志に彼女はライファイセッ
トを抱き寄せる

「あんたが助けてくれたんだね。今度は、あたしが！」

ベルベツトは顔を上げ、ライファイセットを抱える

「とにかくここから出なきゃ！」

ここが何処か分からない以上動くのは危険だが何もしなければラ
イファイセットが危ない。賭けになるが移動するしかない

「はあ・・・はあ・・・」

「頑張つて、ライファイセット」

移動して出口を探すがそれらしきものは見当たらない。その間に
もライファイセットの容態は悪化するばかりだ。ベルベツトも必死で
走り回るが時間が無情にも過ぎるばかりだった

「うう・・・う・・・」

「くっ・・・どつちだ？」

しらみつぶしに行けるところを全て探したがそれでも見つからな
い。ベルベツトもかなり焦っている

「出口は・・・ここはなんなのよ!?!」

「地脈だ」

突然後ろから声がした。ベルベットが振り返るとそこにはアイゼンが立っていた

「無事だったのね」

「そうともいえん。『地脈』に閉じ込められたようだ」

ベルベットが一旦ライファイセットを下ろす

「もつとも。あの場に残っていたら今頃生きていなかっただろうかな」

「地脈・・・この空間のことね」

「ああ、自然の生命力が流れる河のようなものだ。世界中に存在するが、普通は見ることも触れることもできない空間だ」

「そんな場所に、なんで・・・？」

「カノヌシとライファイセットの力がぶつかって地脈が開いたのは間違いない。つまり、そいつの力があれば元の空間に戻れる可能性があるが・・・」

「うう・・・」

アイゼンがライファイセットの状態を見て結論を出す

「この状態では無理か。もうすぐ業魔化するぞ」

「バカなこと言わないでー!」

ベルベットがその宣告に驚愕し反論する。彼女の脳裏に監獄島での聖隷の成れの果てが浮かぶ

「力を使いすぎたせいなの?」

アイゼンが組んでいた腕を解き、一つの解決案を出す

「・・・まだ止める方法はある。清浄なモノを『器』とし、それに宿れば聖隷は業魔化を防ぐことができる」

「あんたも?」

アイゼンが懐からコインを取り出し指で弾く

「幸運の金貨が俺の『器』だ。だが、こいつはワケありでな。死神の力をもつてないと宿れない」

アイゼンが金貨を見せる。相変わらず裏、というかそれを頻繁に指で弾いてて大丈夫なのだろうか

「じゃあ、他になにか——!」

「対魔士なら可能です」

ベルベットの背後から声が聞こえ彼女が振り向くとそこには槍を携えたエレノアが立っていた

「我ら対魔士は、自らの心身を『器』として聖隷を宿らせ、使役していただきます。私が、その聖隷の『器』となりましょう」

「・・・なるほど」

ベルベットが刺突刃を出し構える

「つまり、あんたを動けなくして器にすればいいわけね」

達磨にする気なのだろうか。エレノアは槍の刃を自分の首元に当てる

「近づけば死にます！ そうなれば、その聖隷は業魔になり、あなたたちはここから出る術を失いますよ」

「・・・えげつない駆け引きするわね」

『敵を知り、その弱きを攻めろ』戦いの基本です」

「ふん、アルトリウスの弟子らしい卑劣さね」

エレノアが槍の石突を地面に刺し反論する

「違います！ 私は対魔士の力を取り戻した上で」

槍の刃先をベルベットに向ける

「業魔ベルベット！ あなたに決闘を申し込めます！ 私が負けたら、なんでも言う通りにしましょう！ 死でも器でも、好きに命じなさい」

ん？

「ほう・・・」

エレノアの覚悟にアイゼンが感心する

「ベルベット・・・死なない・・・で・・・」

ライフイセツトは意識が朦朧としながらもベルベットの名を呼び続ける。ベルベットは観念したのか刺突刃をしまう

「わかった」

ベルベットが了承しエレノアがうなづきライフイセツトの側まで近づきしゃがみベルベットに質問する

「この聖隷の名は？ 本来は、主がつけるものですが、今はまだ、私の『もの』ではありませんから」

ものというフレーズにベルベットの表情が変わる、その表情は色々な感情がこもっている

「〴〵もの〴〵じゃない。ライファイセツトよ」

「ライファイセツト・・・それなら・・・」

エレノアがライファイセツトの手を両手で取り契約の儀式を始める

「原始の泉に生まれし者よ。今、盟約の契りを交わし、我が赫奕たる真意、清浄なる世を生む一助とならん」

エレノアが包むライファイセツトの手の内から光が漏れ、彼女の頭上にマギルウのと似た陣が現れる

「覚えよ、汝に与える『真名』を——」

陣が降り、ライファイセツトは光となりエレノアの中に入る、その瞬間彼女から光が溢れ出し苦悶の表情に変わる

「くっ・・・なんて力・・・！」

その光は大きく膨れ上がり、驚くベルベットとアイゼン諸共辺り一面を包んだ

く

「いきなりこんな場所に!?なにがどうなってるんだ?」

遺跡の様な場所に状況を呑み込めないロクロウと腕を組んだマギルウがいた、辺りは長い年月が経っているのだろう石の床の隙間には草が生えている

「あの坊、まさか地脈を開くとは・・・」

「マギルウ?」

「ふん、ベルベットの復讐見物もこれまでじゃな。つまらんオチじゃったわ。ま、どーでもいいがの」

「まだ死んだとは限らん」

マギルウの決め付けに反対するロクロウ

「生きておつても終いじゃよ。あれだけの力量差を見せられて折れんはずがない」

マギルウは何か思いついた様に顔をにやけさせ、頭の後ろで手を組む

「10ガルド賭けてもいいぞ?」

ロクロウはその賭けに迷うことなく承諾する

「・・・その賭け、のった」

その直後二人の目の前に小さな光が現れる。その光は大きくなり始め辺りを白に染める。いきなりの事でオロオロするロクロウと平然としているマギルウをも包みこむ

「みゆわわっ!？」

流星のマギルウの驚くのも無理はない、なんせいきなり目の前にベルベットが現れたのだから。その横にアイゼンが腕組みをして立っている。暫く沈黙するがベルベットが周りを見渡す

「ライフセット!?!あの女対魔士は・・・?」

ベルベットが動くごとに足元がぎゅうぎゅうとなる、ベルベットが不審がり足元を見るとロクロウが踏んづけられている。辺りが静まり返る。ベルベットが退くとロクロウが立ち上がり文句の一つでも言うと思っただが

「なにがあつた?」

予想と全く違つた

その後、ベルベットは地脈での出来事をロクロウとマギルウに話した

「・・・そうか、例の女対魔士がライフセットの器にな。で、そいつはどこに行つたんだ?」

「ロクロウたちがここにいたということは、あいつも近くに出ているはずだ」

「なんとしても捜し出す」

「もう、そんなにムキにならんでもよからろー?」

マギルウが宥めようとするがベルベットは己の胸の前に拳をやる

「助けるって決めたのよ。それに・・・」

ベルベットはなんとも悪そうな笑みを浮かべ

「あの子の力は戦力になる」

マギルウの呆れた表情とロクロウは少し楽しそうな顔をしながらもマギルウに先程の約束を言う

「・・・さっきの賭け、忘れるなよ」

マギルウがその宣告に頭をがっくりと下げる

「へなぶしゆく・・・儂の10ガルドが・・・」

今更言うのもあれだがその賭けは負け前提で賭けたのだろうか。エレノアを探す為に遺跡を探索しようとした時、ロクロウがもう一つ思い出す

「そういえば、ケンもいないな。あいつもまた違う場所に出たのか?」「おそらくそうだろう。道中で合流出来るといいんだけど」

答えるアイゼンの横でマギルウがジト目でだるそうな顔をする

「対魔士に続いてケンも捜がさんといかんのかくめんどーじやの。その内見つかってくれるとありがたいんじやが・・・」

「グダグダ言つてないでさっさと行くわよ」

ベルベットがマギルウを急かすがジト目そのまままで一つの可能性を言い出す

「もしかしたらあやつ、聖主の御座に取り残されたのかもしれないぞ。儂らと離れとつた上に、対魔士達に一番近かつたのもケンじやつた」

アイゼンが顎に手をやりあの時の事を思い出す

「・・・可能性が無いわけじゃない。あの地点で地脈に飛び込もうものなら対魔士の妨害を掻い潜る必要がある。並の対魔士ならまだしも彼処にいたのは特等と一等のトップクラスだからな、いくらあいつでも今回ばかりはマズイだろう」

「俺は生き残る方にかけるぜ。あいつのしぶとさはよく知ってるからな」

マギルウがロクロウの言い分に良からぬ顔を見せる

「なんならまた10ガルドかけても良いぞ♪」

「おう！俺が負けたらさっきの10ガルドはなしだ。だが、勝ったら20ガルドな」

「うぐ・・・!」

先程のことで盛り上がる二人にベルベットがささえぎる

「話はそこまで、ほら、行くわよ」

四人はエレノアを捜す為遺跡を進み始める

同時刻、聖主の御座では取り残されたケンがアルトリウスと戦っていた。だがそこにオスカーとテレサが加わり状況は最悪だった

「ぬあ．．．！」

ケンがアルトリウスの攻撃を受け、大きく後ずさる。既に傷だらけだ。そこにオスカーが剣を振りかぶり斬りかかる

「はあっ!!」

「くっ．．．！」

上段からの斬撃を横に動くことで躲し次の横薙ぎの攻撃を後ろに下がる事で避ける。オスカーが次の攻撃に移る瞬間を見計らい、突き飛ばそうとしたが横からアルトリウスが近づきケンの脇腹を長刀で切り付ける

「っ．．．うっ！」

動きを妨害されて脇腹を押さえ半歩下がってしまう。そこにオスカーが後ろに回り込みケンの背中を下から上へと切り裂く。ダメージで僅かに体勢を崩すが二撃目が来る寸前に前方に転がりすかさず距離を取る

「しづとい男だ。直ぐに投降すれば苦しまずに死ねたものを」

アルトリウスの後ろから老人が髭をさする

「．．．」

「．．．まあよい、抵抗しようがしまいが死ぬのは変わらない」

アルトリウスの前に守るようにオスカーとテレサがケンに立ち塞がる

「お前達は聖察に逆らった。その罪、今ここで罰してやろう」

「オスカーを傷つけたこと。後悔させましょう」

二人がそれぞれの武器を構える中、アルトリウスが口を開く

「殺す前に一つ聞こう、お前はなぜベルベットと共にいる。人間であるお前が何故業魔の味方をする」

肩で息をしながらルナモードの構えを解かないケンは答えない

「答える気はないか．．．」

アルトリウスが長刀を構え直し跳躍、オスカーとテレサを飛び越え

凄まじい速さケンに接近する

(何とか……ここから脱出しなければ……!)

長刀の横薙ぎをふらついた脚で躲すものの次の斬撃を完全にいなす力は残っておらず弾いて受け流すのが精一杯。その隙にオスカーがケンの横から仕掛ける

「アルトリウス様！援護します！」

オスカーの獲物が先程アルトリウスに斬られた脇腹を剣で突き刺す

「っがほっ！」

激痛に気を取られた瞬間アルトリウスがケンの太ももを切り裂く。脚が意思に反して両膝を着く

(!?……臆をやられた……!!)

アルトリウスの後ろでテレサが一号と共に聖隷術を詠唱するのが見えた。オスカーとアルトリウスが横に飛び退く、脚が動かないケンはどうする事も出来ない

「これで終わりです！業魔に味方した罪、後悔するがいい!!」

聖隷術の陣から氷で出来た針が大量に射出される。ケンは両手の前に出しコスモシユートレスを放つ。光線に曝された針は静止するが体力が低下している今では全てを止めることができず、何本かがケンの身体に刺さる

「ぐあっ……くっ……!!」

身を屈め氷を引き抜くがその眼前に長刀の刃先が突きつけられる。ケンが顔を見上げた時、アルトリウスが一度戻し勢いをつけケンの眉間目掛けて刃を突き立てようとする

「ハアッ！」

「ぬおおお!!」

ケンは白刃どりで防ごうとするが己の血で手が滑り刃を止めることが出来ない。すかさず顔を右に逸らすが遅かった

「ぐあっ!!」

長刀の刃先がケンの左眼に突き刺さった。

「ぬう……くっお……」

長刀に力を込め引き抜くも既に左眼の視界はなかった

「これだけやっても死なんか、本当にしぶとい男だ……ん？」

アルトリウスは今度こそ斬り捨てようと左腕を動かすが彼の握っている長刀は一寸たりとも動かない

「……ここまでやられたからには……せめて、一矢報わせてもらいます!!」

ケンが素早く立ち上がり右手で長刀を掴んだまま左手を赤く発光させる

「イヤア!!」

「何……!」

ハンドスライサーで長刀の中程を叩き折り、右手で掴んでいた刃を投げ捨て拳を構える

「おおおっ!!」

「グハ!!」

今出来る精一杯の打拳をアルトリウスの腹に叩き込み数歩後退させる

「ほう……」

「アルトリウス様!」

オスカーとテレサがアルトリウスに駆け寄る、老人は僅かに驚く。

ケンは限界を迎え大きく後ずさり仰向けに倒れこむ

(駄目だ……身体が動かない、ベルベットさん達と……合流しないと……いけ……ない……の……に……)

ケンの意識が途絶えそうになるなかそれを見ていた者達がいた。その世界じゃない所で

彼の言っていたとおり、この男も面白い

突如ケンの周りに電気が走り始めやがて大きくなる

「これは一体?!」

「聖隷の力ではないな……」

テレサが驚愕しアルトリウスは冷静に分析する。電気はやがて一際大きな稲妻になり辺りを照らす、それが過ぎた時ケンの姿はなかった

「消えた!? 一体何処に」

オスカーが辺りを見回すなか老人が近づいてくる

「あれは地脈ではないな・・・もっと別の何かだったが・・・」

老人はケンのいた場所を見つめていた

第18話 終わり

第19話

ベルベットとロクロウ、アイゼンとマギルウの4人はエレノアとライファイセットを捜しつつ遺跡を探索している。因みにここはイボルグ遺跡、名前の由来すら残されていない太古から在る遺跡。扉や壁の様式で地の聖主ウマシアの紋章があることからウマシアを祀る為の聖殿かもしれないが詳細はまるで分からない。資料集漁りながらだと大変。

遺跡の奥に進み外に出るとそこにはエレノアが立っていた。エレノアが4人を見据える

「てっきり逃げたと思った」

ベルベットが腕を組む

「姿を消したことは謝罪します。覚えず、別の場所に出てしまいました」

みんな、人にポンコツとか言っちゃいけないぞ！お兄さんとの約束だ！

「ライファイセットは？」

「私の中で眠っています。容態は落ち着いたようです」

ベルベットの質問にエレノアは己の胸に手を当て答える

「エレノア・・・だっけ？あたしが勝ったら、器として死ぬまで従ってもらおうよ」

「承知しました。代わりに、あなたが負けた時は命をもらいます」

その言葉と同時に構えるエレノア、アイゼン達はベルベットから少し離れる

「サシでやるのか」

「一人で十分よ」

アイゼンに聞かれ短く返すベルベットはエレノアと戦うために歩き出す。エレノアとベルベットが間合いを開け対峙する。ベルベットは左手を前にし、エレノアが槍を廻しながら同じく構える。一瞬の

静寂の後両者が走り出す。業魔手に変えた左手でエレノアの頭部を引き裂かんと振りぬくもエレノアはそれをしやがむ事でギリギリで躲す。今度はエレノアが槍を突き上げベルベットの首を狙う

「フッ！」

ベルベットは首を傾け刃先を躲し刺突刃で柄を横から払うように逆の方向へ逃がす。それと同時に体を捻り後ろ回し蹴りで攻撃する

「くうー！」

「ちっ！」

エレノアは反応に一瞬遅れるが直ぐに後ろに下がる、ベルベットは攻撃を避けられたことに舌打ちをしつつも追撃を掛けるため刺突刃を踏み込みながら振りかぶる。エレノアもそれに合わせ槍で防ぎながらも反撃を加える

「せいっ！やあ！！」

エレノアが徐々に攻勢に出始め槍のリーチを生かしながらベルベットの射程範囲外から攻撃する間合いに入ることができないベルベットは後ろに下がりながら隙を伺う、エレノアは槍の連撃から平行線の戦いを変えるべく槍を地面に突き立てそれを軸に跳躍する

「蔓落！！」

ベルベットの頭上高くからの踵落としに対応すべく己も技を繰り出す

「飛燕連脚！！」

エレノアの踵落としとベルベットの回し蹴りがぶつかり合いお互いに弾かれる

「くうー！」

「あうっ！」

二人とも大きく吹き飛ばされる。エレノアは空中で体制を立て直し着地、ベルベットは地面を滑りながら止まる。伏せられた顔を上げる両者は鬪志は消えておらずそのまま走り始める

「はああああ！！」

「でややや！！」

ベルベットの刺突刃とエレノアの槍の切っ先がお互いに迫る

「空破絶掌撃!!」

「裂駆槍!!」

両者の獲物がかち合い火花を散らす、ベルベットはそれを狙っていたかのように素早くエレノアの懐に飛び込む

「しまった!?!」

エレノアが急いで身を引こうとしたがそれより早くベルベットの蹴りが彼女を捉える

「遅いつ!」

「ああつ!?!」

蹴りを受けたエレノアが膝を着き、そこにベルベットが刺突刃を突き付ける

「勝負ありよ」

『勝利を確信しても油断するな』!」

エレノアが顔を上げ素早く槍を振り上げベルベットにつき返すがそこで止める

「・・・なぜ止めた?」

「あなたは、器の私を殺せない。同じ条件で戦ったままでです」

「勝ったら殺すんでしよう!」

「それはそれ、勝負は勝負です」

そこまで聞いたベルベットは観念したかのように武器を下す

「面倒な奴ね・・・けどっ!」

そこまで言い目を見開いたベルベットは素早く横から掴み一度捻った後自分の方に引っ張ると同時にエレノアの脚を引っ掛ける。エレノアは突然のことで反応できず転んでしまう。起き上がろうとしたエレノアにベルベットが槍を突き付ける

『剣を抜いたら迷うな。非常な戦いは非情をもって制すべし』よ」

「アルトリウス様の戦訓・・・!なんて不甲斐ないっ!」

エレノアは顔を背ける目に涙を浮かべる。まーた泣くんだからホント

「約束は・・・守ります。あなたの命令に従う——」

エレノアがベルベットが握っている槍を掴む

「私が死ぬまで！」

掴んだ手を自分の方へ引き寄せ己の首に突き立てようとした時
だめっ!!

ライフイセットの声のエレノアの中で響いた時エレノアの腕が止
まる

「体が動かな．．．!?聖隷が器に．．．干渉するなんて．．．」

そこまで言うと同時に倒れ気を失うエレノア。そこから光が飛び
出しライフイセットが現れる

「ライフイセット!もう大丈夫なの?」

「．．．うん」

ベルベットの心配していた事に申し訳なさそうに答える。戦いが
終わったことでアイゼン達が後ろから歩いてくる

「器になった反動がたようだ」

「儂も覚えがある。高熱を出して、しばらくは目を醒まさんじやろう
て」

「足手まといを連れてどこだかわからん土地を進むのは危険すぎる
な」

「こいつが回復するまで休もうぜ、ケンを捜すのも明日だ。道連れな
んだろう?ライフイセットの器なんだから」

「．．．そうね」

ロクロウの言葉にベルベツトは上を見上げ呟いた

）

エレノアが目を醒ますまで遺跡の中で急速をとることになったベ
ルベツト達。ベルベツトはロクロウやアイゼンにライフイセットが
夜風に当たりて外に出たことを聞き自身も外に出るとライフイセッ
トがいた。ベルベツトがライフイセットに近づくと

「無理しちゃだめよ。まだ」

「．．．ごめんなさい」

「なんで謝るの?」

ライフイセットが手を握り込む

「僕．．．ベルベツトの命令破っちゃったから．．．」

ベルベットが片膝を着いてライファイセットに目線を合わせる

「おかげで、あたしは生きてる」

ライファイセットがベルベットを見てまた顔を伏せる

「・・・僕、ベルベットが死んだら嫌だと思った。だから・・・助けたかったんだ」

「・・・ごめん。偉そうなこと言って、あたしは、あんたをモノ扱いしてた」

ベルベットの謝罪にライファイセットが首を振る

「一緒に行くって決めたのは僕だよ。ベルベットは、どうするか聞いてくれた」

「これからもうきつとまた酷い目に合うわよ」

ベルベットが立ち上がり横を向く

「・・・まだ戦うんだね、ベルベットは」

「退けないのよ。あたしは」

「それでも・・・僕はベルベットと一緒に行く」

幼いながらも決意を見せる分彼も成長していることがうかがえる

「・・・そう」

「ここ、どこだかわからないし」

「それもそうよね」

ライファイセットの言葉にベルベットが笑みを浮かべる、が、そこに水を差すような声が響く

「いやはや、モノよりイキモノを弄ぶ方が残酷じゃというに・・・」

案の定マギルウがにやけながら二人に歩み寄る

「・・・どういう意味？」

「聞きたいのはこっちじゃ。仇を前にして爪痕一つ残せんかったんじゃぞ。これからどうするか、策はあるのかえ？」

ベルベットは自分の胸に拳を当てる

「・・・認めるわ。カノヌシの力は想像をはるかに超えてた。けど、あたしはあきらめない。何度だって、あいつらに喰らいついてやる」

「折れる方に100ガルド」

「はっ」

マギルウの突然の賭け疑問符を浮かべるベルベット

「お主の牙が折れる方に100ガルド掛けたんじやよ。お主が生きておったせいで、ロクロウとの賭けに負けてな。10ガルドとられてしまった。それにケンが生きておったらまた10ガルドとられてしまふ、それを取り返したいんじや」

ベルベットは呆れて手を上げる

「・・・勝手にすれば」

「おお、賭け成立じゃな♪これでお主に同行する楽しみができたわい」指を鳴らし大喜びするマギルウ。楽しむからこそこの賭けなのだろうか。捻くれだろうか、そこで腕を組む

「ヒマが潰せれば、あとはどーでもいいんじやがな」

そこでライファイセットがあることを思い出す

「ベルベット、カノヌシのことだけど、これ・・・」

ライファイセットが懐から一冊の本を取り出す

「離宮から持ってきた本？」

「うん。でね、この表紙の紋章って・・・」

ライファイセットが本の表紙をよく見せる

「神殿にあったのと同じ！これ、カノヌシのことが書いてあるの!？」

「うん。古代語だから読めないけど・・・」

落ち込むライファイセットにマギルウが助け船？を出す

「しよげるな、坊よ。グリモワールという儂の知人なら解読できるやもしれん」

「ほんとう？」

「・・・かどうかは、聞いてみなければわからんがな」

「どこにいるの？その知り合いつて」

ベルベットの問い詰めにマギルウは腕を頭の後ろに組む

「さてのう。最後の便りは、サウスガンド領のイズルドからじやつたが」

「当てにならなさそうな当てね」

「そこにあがいて見せるのが、お主の仕事じやよ」

「ふん。ご期待通りにやってみせるわよ」

「せいぜい折れんようにのう」

それから暫くして休息をとり皆が寝静まった後、一人エレノアが目
を覚ます。起き上がり周囲を見ると皆それぞれの場所で眠っている。
ロクロウが尻搔いてておっさんくさい

(私は・・・業魔に看病されてたのか・・・)

その事実を声を出さぬように口を押える。ほら泣くぞ？すぐ泣く
ぞほくら泣くぞ

(未熟ッ！未熟ッ！なんとという失態だ！)

エレノアはベルベツトの方を見て立ち上がる

(この罪を償うには・・・)

エレノアは取り出した槍を見、ベルベツトに近づくも思うことあつ
てか今度は槍の刃先を自分の首元に当てる

(こうするしか・・・！お許してください、アルトリウス様)

その時エレノアの横で光が溢れ始める、そこには光を放つ球体が宙
に浮かんでいた。その光は遺跡の外へと向かっていった。エレノア
はその正体に気づいたのかそれを追いかけて走り始める。エレノアが
走り去った後ベルベツトとアイゼンが顔を上げる、早い話が起きて
た。遺跡の外へ出ると球体が止まる

「これはメルキオル様の・・・交信聖隷術！」

その聖隷術からアルトリウスの声が響く

「メルキオルに地脈を辿らせてみれば、妙なことになっているようだ
な」

エレノアがすかさず膝まづき、頭を垂れる

「アルトリウス様！この失態は・・・」

「・・・顔を上げなさい、エレノア。お前に、導師の特命を授ける」

「導師の特命！」

「ライファイセットと名乗る聖隷を保護し、ローグレス聖寮本部に回収
せよ。なお、この特命は特等対魔士以上の機密事項とする」

「あの聖隷を守って、王都に連れ帰れと？」

「しかも内密にだ。巧ず器になれたのは好都合だな」

「ですが、あの者は器である私の行動に干渉できるのです」

エレノアは表情を曇らせる

「聖隷が意思をもつなら、それを操れば済むことだ。導師アルトリウスの名において、特命完遂に必要な以下ある行動も許可する」

エレノアは驚きながらも口を挟む

「業魔に従うことも含めてですか!?!そこまでするとは、あの聖隷は一体……」

「……できないか?」

アルトリウスに焚きつけられエレノアは拳を握り込み伏せていた顔を上げる

「屈辱は屈辱は所詮一時の感情。『理と意志』こそが、災厄を斬り祓う剣。この命は、アルトリウス様の教えに従って使います」

一時の間を経てアルトリウスが再び話す

「まもなく地脈が閉じる。以後は、独自の判断で任務を果たせ……ふむ、その様子ではあの男はそちらに来ていないようだな」

「え?は、はい。今のところ見てはいませんが……」

アルトリウスの突然の言葉に戸惑いながらも答えるエレノア

「まあ、よい。どのみちあの傷では長くはない。お前が気にする必要もあるまい」

「は……はい」

エレノアが立ち上がり空を見上げている後ろの物陰でベルベットとアイゼンが今までの話を最初から最後まで聞いていた。スパイにすらなっていないという

「聞いたな」

「ええ」

アイゼンがベルベットに小声で話す

「スパイの話はそうだがケンも何とか逃げれたらしい。問題は奴が生きているかどうかだが……今回はかりは駄目かもしれない」

「そうかしら」

ベルベットが戻るため歩き始めアイゼンも同じく付いていく

「その言い方からして、生きていると確信しているのか」

「あいつのしぶとさはあたしとロクロウとマギルウがよく知ってる、あいつを殺すには首を刎ね飛ばすしかないでしょうね」

「ふっ、それもそうだな」

「」

それから夜が明け辺りも明るくなりいよいよ出発の時間となった

「起きたな。具合はどうだ？」

「問題ありません」

ロクロウの気遣いに表情を変えることなく受け答えをするエレノアにライフィセットが話しかける

「あの・・・もうあんなことしないでね。痛いのは怖い・・・でしょ？」

「・・・大丈夫。私は、もう逃げません」

「僕はライフィセット。よろしくね、エレノア」

「え・・・ええ、こちらこそ」

聖隷にここまで話しかけられたことがないのだろう驚きながらも返事をするエレノアにベルベットが警告する

「逃げようとしたら、あんたの手足を喰って動けなくするわよ。生きてさえいれば、器の役割は果たせるんだから」

「ヒエツ・・・」

「・・・その必要はありません。私は、あなたとの決闘の前に『誓約』をかけました。『負けた場合、相手に従う』という枷によって自身の力を引き上げる術です。一度発動した術は自分でも解除できない。私は、あなたとの約束を守らざるを得ないのです」

「ふうん、誓約・・・ね」

ベルベットが訝しむのも無理はない、自決しようとしてた時点で矛盾出まくりなんですけれど・・・

「なら、さっそく質問に答えてもらおうわよ。聖察はカノヌシを使ってなにをする気なの？」

「・・・もちろん業魔を消し去る事です。開門の日から続く大災厄の時代を終わらせるために」

そこにアイゼンが割って入る

「具体的に、どうやって業魔を消す？ 願えばカノヌシが業魔を皆殺し

にするとでもいうのか」

「そこまでは・・・知らされていません。カノヌシの祭祀は聖寮でも機密事項で、メルキオル様を取り仕切っていることくらいしか・・・」

エレノアが答えている最中にアイゼンとベルベットが目で会話する

「やっぱり、カノヌシの正体を知るにはライフィセットの古文書を解読するしかなさそうね。古代語を読めるっていうマギルウの知り合いにあたってみるか」

「サウスガンド領のイズルトに行けば、そやつの手掛かりがあるはずじゃよ」

「その前に、ここがどこか調べんとな。まずは人か集落を探すんだ」

「ははは、わからんことだらけでなんとも頼りないなあ」

「それでも、知ろうとしないと。ずっとわからないままだよ」

「応！こりゃ一本とられた」

お、そうだな

「こんな聖隷もいるのね・・・」

驚くエレノアにベルベットが釘を刺す

「エレノア、あんたの役目はライフィセットの護衛よ。相手が対魔士でも守り抜きなさい。逆らえば・・・」

「わかっています！逆らえないと言ったでしょう」

エレノアが先に歩き出したのを確認しベルベットがライフィセットに耳打ちする

「いい、ライフィセット。エレノアが妙な行動をとろうとしたら、すぐにとめるのよ」

「でも、エレノアは悪い人じゃないと思う。それに“誓約”で約束は守るって・・・」

「“誓約”なんて嘘に決まってる。あれは命を懸けて使うようなものよ」

「じゃ。複雑な術式と試練を経て、やっと完成するめんどくさい術じゃよ」

二元対魔士であるマギルウが言うからにはエレノアが嘘をついてい

る可能性が高いのは間違いない

「いったでしよ。あいつの目的は、あんたを連れ去ることなの。女を見かけて判断しちゃだめよ」

「う、うん……」

はたから見ると姉と弟のようにも見える

「そうじゃぞ……というかそもそも悪者はベルベットの方じゃけどな」

「……否定はしないわよ」

今現在ベルベット達がいるのはブリギット溪谷。風と水の浸食で出来た棚状地が複雑な重なりでアイルガンド領中央部の険しい谷、今でも地殻変動が起きており地形が変わりつつあるらしい。僅かな足場と足場につり橋を張り、なんとか交通を確保している。道中にライファイセットが煌鋼という希少鉱石を見つけ、アイゼンがそれを元にエンドガンドかアイルガンド領であろうと推測する彼の知識は何度も助けられる。

「あんた、ちよつといい？」

更に進むとその先に革の鎧を着た一人の男が立っている。ベルベットは聞き込みをするためにその男に近づくが当の本人はベルベット達を見るや否や怯えだす。そりやまあ女性組やライファイセットはともかくロクロウやアイゼンのような者がいたらビビるのも無理はないが……

「ひっ！刀斬りの仲間か!？」

「は？」

男は震えながら剣を取り出しなぜか謝りながら斬りかかる

「俺が悪かったー!」

「謝りながら斬りかかるな」

男の剣をロクロウが受けとめいなす、男はがむしやらに剣を振るうがそれはあまりにも大振りかつ直線で見切られやすくロクロウに触れることさえできない

「なんでこうなるのよー!」

その横からベルベットが面倒そうな表情を浮かべ横から男の兜越

しに踵落としを見舞う

「あだあ!!」

かなり痛かったようで片手で頭を押さえながら数歩下がる、それを見逃さずロクロウは小太刀を回しながら急接近し一閃

「斬!」

その剣閃は男の獲物である剣の三分の一を一刀両断した

「剣が・・・斬られた!?!」

男は観念したのか身を屈め命乞いを始める

「ああ・・・業魔様・・・命だけは勘弁してくれえ・・・」

「だから話を聞きなさいって」

ベルベツトは腕を組み、指を叩いている。相当いら立っているがライファイセットがエレノアを紹介する

「怖がらないで。この人は対魔士だよ」

ライファイセットに詰まりながらも合わせるエレノア

「わ・・・私は一等対魔士のエレノアです。落ち着いて話を聞かせてください」

「確かに対魔士だ・・・けど、なんで対魔士がこんな奴らと一緒に?」

「極秘任務の途中なのです。ここがどこか教えてもらえませんか?できれば港の場所も」

「どこって・・・アイルガンド領のカドニクス島だ。この溪谷を進めば港に出る」

男は先の溪谷を指さす

「バンエルティアにシルフモドキを飛ばす」

「お願い」

そこにロクロウが気になっていたのか質問する

「もうひとつ。刀斬りってのはなんだ?」

「ああ・・・最近、この辺りで暴れてる業魔でな。剣士ばかりを狙って、その刀を叩き斬るんだ。一等対魔士まで何人もやられてる」

「だから『刀斬り』か」

「そいつの刀は異国でつくられた業物でな。盗んでやろうと棲家を探してたら、襲われちまったんだ」

「異国の業物・・・」

異国という言葉に続いて業物と来てロクロウが反応する

「あんたも気を付けた方がいい。背中の大太刀、刀斬りに見つかったらやばいぜ」

「応、やばそうだな」

「しっかし、業魔相手に盗みを働こうとは自業自爆じゃな」

自爆はわざとだったね

「へっ、バカすぎたよ・・・」

肩を項垂れる男にエレノアが近づき諭す

「きつと、これを機に足を洗えということですよ。業魔に殺されなかった幸運な命を、もう悪事で穢さないでください」

「・・・」

今この男にはエレノアが聖母マリアか天使に見えたのだろうか

）

港に出るために溪谷を進む一行、その中でロクロウが一番早く目の前にある以上に気づく

「・・・」

「なに？」

ライファイセツトは皆が止まる中一人だけ疑問符を浮かべるが彼が前を見るとそこには黒い気を纏った武者甲冑が立っていた

「敵よ」

でしょうね。武者甲冑が刀を抜き構える、ロクロウにはそれに見覚えがあるようだ

「その刀、征嵐か」

「異国の業物を振るう業魔・・・あんたが刀斬りね」

刀斬りは言葉を発することなく獲物を振りかざし走り始める。ロクロウが前に出て最初の一太刀を小太刀で受け止める

「問答無用か！」

受け止めている横でマギルウが術を詠唱する

「言語道断蒟蒻問答怨敵退散じゃ！アクアスプリット！」

水球が迫る中刀斬りがロクロウを押し返し刀を振り、それを切り裂

く

「い、一度とならず二度までく!？」

「崩牙襲!!」

「シェイドブライト!!」

口をあんぐりさせて脱力するマギルウの傍でベルベットの踵落としてライファイセットの聖隷術二段攻撃、これには刀斬りも少し戸惑ったのかベルベットの攻撃は躲すことができたがライファイセットの術が命中する。刀斬りは少し効いたのか僅かにのけ反る。ベルベットの初段が不発に終わろうが関係なく刺突刃で追撃する

「はっ!でやっ!!」

刀斬りと切り結ぶベルベットだが刃物の熟練度はあちらの方に分があるのだから徐々に押し返される刀斬りの後ろからアイゼンとエレノアが強襲を掛ける

「蹂躪しろ!ウインドランス!」

「連なれ真紅!霊槍・獣炎!」

風の槍と火球が刀斬りの背中辺り大きく体制を崩す。そこでマギルウが挽回するべく別の聖隷術を唱え始める

「ぬぬぬ、このままではこの話で儂の活躍する場面がなくなってしまう!これでどうじゃ!!ブラッドムーン!」

ベルベットが気づき後ろに跳ねるように距離をとるとそこに赤い球状の霊場が現れ刀斬りを包み込みダメージを与える。が一連の攻撃が命中しても相手は対して傷ついていない

「ほげ〜」

「なんて固い奴!」

灰になるマギルウに毒づくベルベット、その横からロクロウが前に出て小太刀を構える

「まかせろ」

「ちよつと!」

ベルベットが答える間もなく当のロクロウはそんなのお構いなしに刀斬りに斬りかかる

「破あ!!」

霊場が晴れたと同時に刀斬りに一太刀浴びせ尚も斬りかかろうとするが相手も好きにはさせまいと刃と刃をかち合わせる。何度も切り結ぶ中迂闊に攻撃できないベルベット達は周りからそれを見守るしかない、だがウエイトと体格差もあるのだらうかロクロウが大きく弾き飛ばされる

「ぐああっ!」

地面を滑りながらも素早く立ち上がり顔を上げる、その目はぎらつき業魔の部分である目は赤く光る

「・・・斬り甲斐があるぜ」

刀斬りが迫るのを阻止すべくライファイセットが聖隷術で援護をする

「ロクロウ!」

ロクロウが走る横で光弾が通り過ぎ刀斬りを大きく吹き飛ばす。

その光景を見たロクロウが立ち止まり後ろを振り向く

「邪魔をするな!!」

戦いの邪魔をされたロクロウが激昂し今度はライファイセットに斬りかかる

「ひっ!」

そこにエレノアが槍を構えライファイセットの前に立つ

「仲間を殺す気ですか!!」

そこにベルベットも加わる

「なら、あんたを殺す」

その言葉で我に返ったロクロウは先ほどの殺気が嘘のように静まり返る

「・・・すまん。つい熱くなった」

二人はそれを聞いて武器を収める。ロクロウは刀斬りが去った方角を見る

「知っている奴なのか?」

「刀だけな。あれは『征嵐』って刀だった」

アイゼンが横目での問いかけにロクロウが答える

「セイラン・・・？」

「マガルウもそれについて何か知っているようだがベルベットが急かす

「なんだっていいし、刀に用はないわ。港に急ぐわよ」

「

「ライファイセツト、さつきは悪かったな」

「ロクロウが先ほどの事でライファイセツトに謝罪する

「僕・・・ロクロウがやられると思って・・・」

「わかつてる。あれは、お前の『意志』だったんだよね」

「・・・だと思う」

「ならいい。俺も『手を出すな』とは、はっきり言わなかったからな。次にああいうことがあったら、必ず言う」

「助けちゃ、いけないの？死ぬかもしれないのに・・・」

「そうだ」

「・・・どうして？」

「俺にもよくわからん」

「えっ？」

「俺には、どうしても斬りたい奴がいる。そいつを斬りたい、そいつに勝ちたい。そのために剣の腕を上げなきゃならん」

「勝ちたい人・・・」

「剣の勝負でな。あいつに勝つためなら、なんだってする。どれだけ血を流そうが、命を落とそうが、人の心をなくそうが。そう思い続けているうちに本当に人間じゃなくなっちゃった」

「意地故に業魔になったロクロウ、そこまでしてなぜ勝ちたいのかライファイセツトが聞き出す

「・・・なんで、そんなに勝ちたいの？」

「はは、それもわからん。業魔だからそうなのか、そんなだからごうまになっちゃったのか・・・とにかく、命より大事なことなんだ」

「命・・・よりも・・・」

「けど、助けてくれたことは恩にきるよ。死んじまったら、あいつを斬れないからなあ」

「う、うん・・・」

ライファイセットが先に歩いていくが後ろからエレノアがロクロウに口を挟む

「今のが命の恩人にかける言葉ですか！」

「なにがだ？俺はホントのことしか言っていないぞ。それに、なぜお前が怒る？」

「おかしいとすら思わないとは・・・やはり業魔ですね」

「ああ、業魔だ」

「・・・」

会話がかみ合わない

）

カドニクス港に出るためにはヴェスター坑道を通る必要がある、港と行動は直接線路が繋がれており坑道から産出された鉱石資源を速やかに港へ運び入れられるような構造になっている。今ベルベツト達はその行動に入るようだが・・・

「むむう、きいた覚えがあるんじゃないか・・・」

ロクロウとアイゼンの後ろで必死に思い出そうとするマギルウ、そのまた後ろのライファイセットがエレノアに先ほどの事で感謝を述べる

「・・・エレノア。さっきは、助けてくれてありがとう」

「私は・・・命令通り、あなたを守っただけです」

詰まりながら答えた言葉に命令というフレーズにライファイセットはまだ苦手意識があった

「命令通り・・・」

「もちろん、命令されなくても誰かが業魔に襲われていたら助けますけど」

「おきれいなことね」

ベルベツトの煽りにエレノアが文句の一つでも返そうとした時マギルウが大きな声を上げる

「思い出した！」

「な、なにをよ？」

ベルベットエレノアとライフイセットが驚く

「世にも悲しい征嵐の由来をじゃよ。さくて、お立ち合い！それは、いつ、だれが打ったのか、知る者はおらぬ。じゃが、誰もがその切れ味を認める太刀があった。その刃風は猛獣の如く號び声をあげ、山をも吹き飛ばす嵐を呼んだ。この世にふたつとないその太刀を、人は神の刀——神刀と讚えた」

「神の刀・・・それが征嵐ですか？」

エレノアの質問にマギルウが制する

「話はここからじゃ。さような神刀に魅せられた男がおった。名はクロガネ。稀代の才を持つ刀鍛冶じゃ。そやつは心血を注いで神刀を超える刀を打とうとし、自らの刀に『征嵐』の名を与えたという・・・『號ぶ嵐を征する』という意味じゃな」

「すごい刀はできたの・・・？」

ライフイセットの質問にマギルウが首を横に振る

「いいや。クロガネは何十度も神刀に挑んだが、その数だけ征嵐は折られ、砕け散った。絶望したクロガネは、神刀の持ち主に首を刎ねられたとも、自ら命を絶ったとも言われておる。もう何百年も昔の話じゃ。じゃが、奴の神刀への恨みは征嵐と共に今も生き続けているとかいないとか・・・」

「何百年も続く恨み・・・か」

「よくある怪談話ですね。さっきの刀も、何者かが銘をマネただけかもしれない」

「かもの。じゃが、もしあれが本物の征嵐なら、儂らは枕を高くして眠れんぞ」

「なんで？」

そこまで聞いていたロクロウが口を開く

「クロガネが倒したかった『神刀』こそ、俺の生まれたランゲツ家に代々伝わる太刀——『號嵐』だからな」

「・・・」

3人は黙ったままだ

「野郎が、また襲ってくる可能性があるわけだな。急ぐぞ」

アイゼンが皆を急かし坑道に入ってしまった

坑道内部は人はおらず寂れている、嘗てここで採掘で人がいたであろうがあちこち痛み、朽ち、繁栄と衰退を思わせる

「・・・ライフィセット、ちよつと」

「なに・・・？」

ベルベットが小声でライフィセットを呼び止める

「命令じゃなくても助けるなんて言葉、真に受けちゃだめよ。対魔士は、聖隷をモノのとしか思つてないんだから」

「でも、助けてくれたのは本当だから・・・」

「恩を感じるのは仕方ないけど、あんまり嬉しそうな顔しないの」

「・・・ごめん」

「謝つて欲しいわけじゃなくて・・・あいつには、こつちの警戒が鉄壁だつて思わせておきたいの。いくらあんたと親しくなつても、あなたの方が優先だつて意識させたいわけ」

「ええつと・・・どうすればいいの・・・？」

「つまり・・・わかりやすくいうと・・・あたしを一番、エレノアは二番にしなさいつてこと」

「・・・わかった。ベルベットが一番で、エレノアは二番」

「そう、あたしが一番・・・つて、なに言つてるのよ、あたし・・・」

「大丈夫。ちゃんとわかったよ？」

「そうじゃなくて・・・」

「・・・これ要約するとただ単にエレノアに嫉妬してるだけなんだよねこれ」

奥に進むと金属音のぶつかるおとが坑道内に響く。ベルベット達はその音の源に急ぐと先ほどの武者甲冑の刀斬りと刀を持った一人の男とその横に猫が一匹がいた。刀斬りのすぐ傍に折れた刀が落ちてゐる。ロクロウがその男を見ると目つきが変わる

「む、無念・・・」

刀斬りが言葉を漏らす

「おいおい、おもしれえ業魔だなあ！刀より体の方が硬えってか」
「こいつは・・・？」

ベルベットの後ろでエレノアがその人物が誰なのかすぐに分かった

「シグレ様！聖寮に二人しかいない特等対魔士です」

「特等・・・メルキオルと同格か」

アイゼンの声に気づいたのかは分からないがシグレと呼ばれた男がこちらを向く。中井さんも大変だよね先端恐怖症なのに刃物キアラの役多くて

「おう、エレノアじゃねえか。なんだお前、業魔に捕まったのか？それとも裏切ったか？」

シグレは鞘に収めた刀で肩を叩きながらエレノアに聞き出す

「わ、私は——」

「ま、どっちでもいい。好き勝手やってる俺が言えた義理じゃねえわな」

シグレが背後の地面に刺さっている刀身を横目で見る、しつかし、今日はアタリだった。まさか『征嵐』に出会えるとは思わなかったぜ」

シグレの傍にいた猫が話しかける

「シグレ、なんかすつごく睨んでる子がいるわよ。無視しちやかわいそう」

「はっはっは、悪い、悪い！昔から弟をイジメちまうのがクセでな。なあ、ロクロウ」

「弟!?!」

ベルベットの言葉に皆の視線がロクロウに集まる

「変わらないな、シグレ」

「バカ野郎！メチャクチャ強くなってるっての。そつちこそ相変わらぬ、俺を斬るなんてできもしないことを考えてんのかあ？」

「ロクロウが勝ちたい人って・・・お兄さんなの!?!」

驚くライフィセットの横で小太刀を構えるロクロウ

「こつちも、あの時の俺じゃないぜ」

ロクロウの業魔の部分の目が光る

「おおっ!?お前、業魔になったのか?そりゃあ、おもしれえ!」

聖隷の猫が光となってシグレの中に入る

「だがよ、結果まで変わるかな?」

シグレが鞘から刀を抜く

「おれの號嵐しんうちに、號嵐かげうちを折られてシヨンベン漏らした“あの時”とよ」
言葉が終わると同時にシグレが上段から振り下ろす。その剣気が空気を震わせ嵐のように吹き荒れる。ロクロウがその圧に怯むことなく立ちふさがる

「こいつは俺が斬る。ライフイセット、今度は手を出すなよ」

「・・・う、うん」

ロクロウがそれを聞いてシグレに向かって走り出す

「破ア!!」

「おっと!」

號嵐と小太刀がぶつかり合い火花を散らす

「何年ぶりだ、お前と斬り合うのは?」

「死んで後悔しろ!あの時、俺を殺さなかったことをな!」

お互い距離を取り先にロクロウが仕掛ける

「斬っ!」

初段の突きを半身で躲されるがすかさずもう片方の小太刀で喉を搔っ切ろうと振るうが

「おらよー!」

「ぐっ!?!」

シグレが號嵐の柄頭で下から弾いていとも簡単に防がれてしまう。
ロクロウが空いていた小太刀を振るい脇から攻めるが

「遅えって」

腕を掴まれ捻り上げられ投げられる

「ぬおおっ!?!」

受け身を取り立ち上がり前を見た瞬間そこには號嵐を振りかざし斬りかかろうとするシグレが眼前に迫っていた

「おいおい!こんなもんかよ?もつと攻めて来いよ!つまんねえよ

！」

「くっ!!」

シグレが上段の振り下げや切り上げ、横薙ぎの斬撃でロクロウを追い詰める。ロクロウは小太刀で嵐のような攻撃をなんとか受け流すのが精いっぱいだ。

「なんだよ前とは違うんじゃないの・・・かあ!!」

「ぐわああ!!」

ひと際強い攻撃にロクロウが耐え切れず吹き飛ばされ地面に叩きつけられる。ここまでされたのにも関わらずロクロウはすぐさま立ち上がる。まったく闘志は衰えていない

「ほお、あれ喰らって立ち上がるか、さっきの言葉は嘘じゃあねえようだな」

「ああそうだ！お前を斬るまで何度でも立ち上がってやるさ!!」

「さすが業魔だ、悪くねえ」

「うおおおッ!!!」

ロクロウとシグレ、両者が走り出す。お互いの獲物が一閃でかち合い火花が散る、そこから二閃、三閃と続きシグレの横薙ぎをシグレが躲し両者が振り向きざまにもう一度斬り合うもロクロウの方が大きく下がる。シグレが號嵐を振り上げ、持ち直したロクロウが小太刀を交え今まで一番の金属音が響く。お互いの刃が拮抗するがシグレが押し出しロクロウが弾き飛ばされる

「ぐああっ・・・!!」

ロクロウが地面を跳ねながらも止まり顔を上げるがそこにシグレの號嵐が目の前に突き付けられる

「だが、ここまでだな」

「ロクロウ!!」

ライファイセットが叫ぶが助けたいと言われている側ら、代わりにエレノアが槍を構えて走り始める

「え・・・体が勝手に・・・!?!」

そこに空気を引き裂いてロクロウの片方の小太刀が飛びこんできてエレノアの槍を弾く

「邪魔をするなっ!!」

激昂したロクロウが己の背負う大太刀を抜く。が、その刀身は三分の一もない

「勝負はこっからだ」

「ほう・・・今度は折れねえか」

號嵐を担ぎ隣の猫の聖隸をだす

「今日はここまでだ」

シグレの宣告にロクロウが聞くはずもなく走り出す

「シグレエツ!」

シグレが號嵐を向け制する

「はやるな。今のお前が強ええ刀を持ったら、面白えと思ったのさ。そこの爺さんに打ってもらえ、で、もういつペンやろうや」

「爺さん・・・?」

ロクロウが刀斬りを見る

「その業魔はね、クロガネっていうのよ」

「征嵐の刀鍛冶!」

猫の聖隸の言葉に驚くライフィセット。無理もない、何百年も前の刀鍛冶が在命しているのだから

「この先のカドニクス港で待つてやる。俺を倒さねえと島からは出られねえぜ」

「勝手なことを!」

「気に食わなきや、かかってきな」

舌打ちするベルベットにシグレが煽り號嵐を横に振るう。その剣圧にベルベット達は動けない

「くっ・・・!」

「はっはっは!せいぜい精進しろよ、業魔ども!」

シグレが後ろ手に手を振り港の方へ歩き出すがそれをエレノアが止める

「シグレ様、私は特命を——」

シグレは含みを持った顔を浮かべエレノアの言葉を遮る

「ああ、エレノア。お前マジで裏切りやがったんだな。次に会ったら

叩き斬る」

「う……」

そして今度こそシグレが立ち去る

「野郎、まだ本気を見せてないぞ」

「けど、全員でかかれば……」

毒づくアイゼンにベルベットが提案するがそれをクロガネが止める

「無駄だ。だが策はある」

「どんな手だ、クロガネ？」

「……ついて来い」

ロクロウの質問にクロガネは別の方へと進む。ロクロウもそれについて行く

「ロクロウ……」

ライファイセットが呼び止めるが本人はそのまま奥へと進んでいった

「ベルベット、ロクロウを追わないの？」

「……あいつの戦いよ。あたしには関係ない」

「だが、船着き場にはシグレが陣取っている。イカれた野郎だが、俺たちを見逃すようなマヌケとは思えん」

「その通りです。シグレ様は、剣技ならアルトリウス様をも凌ぐ最強の剣士ですから」

やたら得意げに話すエレノア

「ネコに睨まれた袋のネズミじゃなー」

「クロガネは、なにか考えがあるみたいだった」

「……わかった。それを聞いてみましょう」

ライファイセットの説得に観念したベルベットは一同クロガネとロクロウは進んだ方へ足を向けた

第20話

ベルベツト達はロクロウとクログネに追いつく、やがて二人を見つめる。二人がいた場所には炉と金床に熱した金属を掴むためのつかみ箸、木製の棚には薪や麻袋が積まれている。そこで一番目を引くのがあちこちに打つ捨てられるように散乱している刀だった。その刀も根元から折れているのもあれば中ほどで真っ二つになっているのもあった

「すごい・・・刀がこんなに・・・」

「伝説の刀鍛冶クログネは、號嵐に勝つために生き永らえてたんだな」「そうだ、俺はすべて捨て、號嵐を超える刀を打つことだけを考え続けた。そして気付けば——」

「業魔になっていた・・・か」

クログネの言葉をロクロウが続けて答える

「貴様も、あの刀の継承者——兄を斬りたいがために、その身を墮としたと見える」

「同じ穴の貉だ。俺にお前の刀をあずけてくれないか」

ロクロウの願いにクログネは頭を下げ苦言を呈す

「・・・俺は無数の刀を打ったが、結局、號嵐には歯が立たなかった。お前は、そんな俺の刀を求めるのか？」

ロクロウは迷うことなく躊躇することなく答える

「応とも！何十回、何百年負け続けても、お前は折れていない。俺も同じだ。シグレと奴の神剣を斬れるものがあるとしたら、この『恨み』だけだ」

ロクロウの執念に観念したクログネは少し間を置き話す

「・・・奇しくも、貴様等兄弟が同じ手がかりをくれた。その策で新たな刀を打とう」

「煌鋼を探す？」

ライファイセットの提案にロクロウが制す

「いや、その必要はない」

「え？」

ロクロウがそう言いながら歩き出す。ライファイセットはその意味がわからず疑問符を浮かべる。ロクロウはクロガネに近づく

「“上の方”でいいか？」

「頼む。腕さえあれば刀は打てる」

ロクロウとクロガネがお互い一言だけ言葉を交える。その言葉を聞いたロクロウは小太刀を取り出し振りかぶり、クロガネの首に一閃「破ッ！」

クロガネの首が地面に落ち胴体が両膝を着く

「なんてことを！」

ライファイセットとエレノアが驚く。無理もない、いきなり首を落としたのだから。エレノアが声を上げる。ロクロウが後ろを振り返る

「慌てるな。“刀の素材”を切り離しただけだ」

後ろでクロガネの胴体が動き出し首を拾い上げ立ち上がる

「そういう業魔だったのね」

ライファイセットが安心したかのように息を吐くがあることに気づく

「この頭を刀にするの!？」

「そうだ。恨みの塊である “これ” で號嵐・影打ちを打ち直す！」

クロガネの提案にロクロウが待ったをかける

「待て。影打ちは、昔の弱い心を忘れないための戒めにすぎん。俺は、シグレに勝つためにランゲツ流の裏芸、二刀小太刀を磨いてきたんだ」

「・・・わかった。ならば、お前のために短刀を打とう」

ロクロウの頼みを聞き入れたクロガネは後ろの金床にある椅子に向かい腰を下ろし、己の首を掲げる

「はあああっ！」

クロガネに声と共に首が燃え始め右手が光り、そこから金槌が現れる。クロガネは躊躇することなく自分の首を叩き始める

「すごい」

ライファイセットが驚くのも無理もない刀鍛冶を見るのも初めてだ

ろうからだ。・・・自分の体の一部を叩き潰せる者を目の前にしているが・・・狂気の沙汰ともいう

「俺たちは外で待とう」

アイゼンの提案にロクロウ以外は鍛冶場から離れていく。ロクロウは腕を組みクロガネに作業を見届けていた

ロクロウの武器が出来上がるまでの間、つかの間の休息を取るため各々少し離れていた

「・・・ケン、いなかっただね・・・」

ライフセットは道中にでも合流できると考えていたが、それが外れてしまい少し元気がない。エレノアがそんなライフセットを励ます

「も、もしかしたらこの先の港にいるかもしれない。偶々違う場所に出て先についているのかもしれない。」

「だといいんだけど・・・」

それを横目で見ていたベルベットの隣でアイゼンが小声で話しかける

「船は、順調にこちらに向かっている」

「当然ね。死神が乗ってないんだから」

ベルベットの皮肉をアイゼンはスルーし、話を続ける

「もうひとつ。シグレは、導師アルトリウスの用心棒だそうだ」

「つまり、避けられない敵か」

「単独行動している今、倒しておきたい相手だ。だが、ロクロウでは勝てん」

「ただでは負けないはずよ」

聖隷の中では若輩だが長年生きているアイゼンの経験と勘でシグレとロクロウとの差を考慮した決断を下す。だがロクロウの性格を知っているベルベットが反論する、アイゼンもそのことをわかっているように最初から全否定はしていない

「当然だ。だから。あいつがつくった隙を突いてシグレを仕留める」

「他人ひとのケンカに手を出す気？」

「俺のケンカにも繋がる話だからな」

「・・・あたしだって同じよ。戦力を無駄死にさせるわけにはいかないし」

アイゼンもベルベットも関わりがある人間が全員聖寮である。あくまで利害の一致で同行している、まあそれだけではないだろうが「ロクロウは生き死ににこだわる男じゃない。二、三回斬られる程度で許してくれるだろうさ」

「・・・」

実際それだけで済めば御の字だが多分、無理だろう

く

少し離れたところでマギルウは岩に背を預けのんびりとしている、そこにはビエンフーはいない

「ビエンフーは？」

「あやつは船着き場へ猛ダツシユで偵察にやったぞ。要はパシリじゃ、儂って気が利くじやろ？」

「ビエンフーに同情するわ」

相も変わらずビエンフーの扱いは悲惨である。マギルウに捕まっってしまった時点で運の尽きだが

「しかしクロガネめ、自らの体を使って剣を打つとは、まるで生贄の儀式じゃのう」

「生贄・・・業魔ならではの手よ。強い力を手に入れるためには必要な犠牲」

「必要な犠牲か・・・非情じゃのう」

「今更ね」

「ま、結果をご覧しろじゃのく♪神の腹を満たすだけの供物ならば命を丸ごと差し出そうとも、餌に過ぎぬ。じゃが、志を宿した血肉ならば、それが蟹の毛一本でも、贄となる。彼の者が捧げしは、生餌か贄か・・・」

万物において犠牲はどうしても発生してしまう。人にも物にも関わらずだが、例えそれが必要だったとしてもそれに見合った見返りは無いというのがほとんどだ。それが正しくても間違っていようとも

正解というものが無い。残酷だが

「少なくとも儂にとつて楽しみが一つ増えたわい」

「・・・」

「大変でフ〜！船着き場にいた一等対魔士たちが、こっちに向かつてくるでフ〜！裏切り者エレノアを肅清するつて言つてるでフよ〜」

沈んだ空気をビエンフーの情けない声が吹き飛ばす。偵察から戻ってきたのだ

「肅清・・・」

エレノアは、事情を知らないのは仕方ないが同じ対魔士からその言葉が出てきたことに動揺する

「ベルベット・・・」

「迎え撃つわよ。エレノア、あんたにも戦ってもらおう」

「命令・・・なのですぬ」

ライファイセットが皆まで言わずともわかっているようでベルベットがエレノアにも戦うよう命令する

「そうよ。ライファイセットを守つて、対魔士を倒しなさい」

「・・・わかりました」

エレノアが了解しライファイセットと共に先に向かう。そこへアイゼンがベルベットに近づき釘を刺す

「忘れるなよ。エレノアが壊れたらライファイセットが業魔化するぞ」

「わかつてる。けど、足手まといを連れていく余裕はないわ。あいつの思惑を利用して、こっちの戦力にする」

「・・・限界を見誤るなよ」

「やれやれ、真面目な対魔士じゃったろうに。お主に絡んだのが運の尽きじゃな」

「なんとも言いなさい」

エレノアの最大の不幸はこの面子に絡んでしまったことだ。運命か因果か、この先どうなるのやら

工房を出て、先に行っていたエレノアとライファイセットと合流する。ほぼそれと同時に向かい側から白い装束を着ている、対魔士が

やって来た。人数は4人、三人は槍と盾を持ちもう一人は他の者に比べ装束が豪華である事から一等対魔士だ。

「一等対魔士エレノアだな！業魔に屈するとは恥を知れ」

一等対魔士は剣を抜きつつ続ける

「対魔士の墮落は大いなる災厄の種となる。この罪は死をもつて償ってもらうぞ」

エレノアは何も答える事なく、否、理由も話せない話すわけにもいかない、裏切っていない事を弁明したいがベルベット達がいる中、特命故に口外出来ない。辛すぎる板挟み、複雑な表情を浮かべながらエレノアは槍を取る。その行為が合図となったのか対魔士達はベルベット達に向かって走り出す

「来るわよ。覚悟はいいわね？」

ベルベットが刺突刃を出しエレノアの横につく、要は警告だ

「・・・わかっていきます・・・」

それを聞いたベルベットが少し離れ二等対魔士の槍を躲し後ろに飛び退く。一等対魔士の方は元からエレノア狙いのようで剣を上段で構えながら向かってくる

「裏切者には死あるのみ!!」

「くぅ!?!」

エレノアは槍の柄で受け止める槍と剣の接触で火花が散る。エレノアは剣を柄で滑らせ対魔士の体勢を崩し距離をとる。それを横目にベルベットは二等対魔士の槍を躲しながら状況を観察している

(・・・体制崩したと同時に切り上げればいいけど同じ対魔士だからできる理由ないか・・・)

敵対してしまったとはいえエレノアからすればまだ仲間である対魔士を傷つけることはできない。だがベルベットにはそんな事は関係ないのだ。ベルベットはそこで思考をやめ二等対魔士へ攻勢に転じる

「ふんっー」

アイゼンとライフセットとマギルウは残りの二人の対魔士を相手にしている。アイゼンが前衛で対魔士を拳と蹴りでダメージを与

えつつライフィセットとマギルウが術で追い込む。アイゼンの拳が一人の対魔士の腹部に当たる

「おらっ！」

「ぐああっ!!」

続け様にアイゼンは対魔士の脚部に蹴りを叩き込み態勢を崩す対魔士に容赦なく顎にアッパー、顎に受けた衝撃が骨を伝わり、脳を揺らす。意識を刈り取られ対魔士は崩れ落ちる

「なっ!?!」

「余所見厳禁じゃぞ！アクアスプリット！」

もう一人の対魔士が仲間を倒された事に驚愕し、足を止めてしまう。マギルウはそれを見逃さず水弾を放ち対魔士の槍を弾き飛ばす

「しまっ・・・！」

「重圧砕け！ジルクラッカー！」

ライフィセットは隙を見逃さず足元に重力場を発生させ対魔士を捉える

「でかしたぞ坊！前は活躍が無かったから今回こそ！ブラッドムーン！」

動けない対魔士の周りを真紅色の力場が包み、対魔士を襲う。対魔士は声にならない声を上げながらもがくも力場が晴れたと同時に力なく倒れる

「やったぞく!!これで名誉挽回じゃ！」

「ふう。ベルベットは大丈夫かな」

ライフィセットは一呼吸置きベルベットの方を見る。ベルベットは蹴りで対魔士の防御を崩し一方的に攻めている

「はあっ!!」

「遅いわよー！」

対魔士は負けじと槍を振るい反撃するがベルベットからみたらエレノアよりか遅く見切る必要が無いほどの攻撃、突き出された槍を横から蹴り上げ武器を弾き飛ばす

「これで終わりっ！飛燕連脚！」

「う、うわあ!!」

一撃目の蹴りが横つ腹に当たり対魔士は浮き上がる。続く二撃目が浮き上がった背中を捉え叩き落とす

「ぶっはっ!!」

力強く地面にバウンドした対魔士にベルベツトは業魔手を繰り出しひっかく様に横薙ぎに振るう。対魔士は圧倒的な腕力に意識を持っていかれ殴られた勢いのまま岸壁に叩きつけられる。数秒張り付いた後重力に従い地面に落ち動かなくなった

「殺したの?」

「別に殺してもよかったけど時間かけてらんないし・・・でも必要ならやる」

ライファイセツトが近づき不安そうに聞くがベルベツトの言葉を聞き一安心する

「さてと、後は・・・」

ベルベツトは依然として戦っているエレノアの方を見る。一等対魔士は膝を着き方で呼吸している。決定的なチャンスにも関わらずエレノアは手を出さない。対魔士は手加減されているのもあるのだろうが何より自分たちの理想に泥を塗ったエレノアが許せないのだ。吐き出すように話し始める

「お前は民を裏切り、アルトリウス様の理想を汚した!」

「ち、違・・・」

エレノアが否定しようとしたがベルベツトの視線に気づく

(ベルベツトは私を試している・・・アルトリウス様の特命を果たすためには戦わなくては・・・でもこれ以上は殺してしまう・・・)

「死をもって粛清を!」

対魔士は尚も食らいつき、剣を降りかざしエレノアに斬りかかる。金属どうしがまたぶつかり合う

「エレノア!」

ライファイセツトが助けに行こうとするがベルベツトが手を出し制する。槍で剣を受け流し体制が崩れたと同時に槍を振りかざすが途中で止めてしまう

(私には殺せない!)

対魔士がまたも斬りかかるがそれも防ぎ、受け流す、それしかできないのだ

「まだだ……!」

苦悶の表情で迷い続けるエレノアの横を影が通り過ぎ対魔士に×字の一閃がきらめく

「ぐああっ!」

対魔士が倒れ込んだ傍にロクロウが立っていた。ロクロウはエレノアの方を振り向く

「借りは返したぞ、エレノア」

ロクロウの両手には新しい小太刀が握られている。刀身がどす黒く怨念の塊が刃となっっているようだ

「新しい刀!」

「ほお……禍々しいのー」

「準備はできたんだな」

アイゼンの確認にロクロウは小太刀を収めながら答える

「ああ。あとはシグレあいつを斬るだけだ」

「俺も見届ける」

アイゼン達の後ろから首のないクロガネがやってくる

「……」

ベルベットは何も言わず優れない表情のエレノアを後ろから見ている。指で腕を叩いているから結構不機嫌だ

「わ、私は……」

「今みたいな戦い方じゃ死ぬわね。あんたが死ぬとライフセットの器がなくなる」

正論にエレノアは何も言えない

「わかっています」

「う……う……」

ロクロウが倒した一等対魔士はダメージは負っているが息があった。ベルベットはそれに気づき業魔手を出す

「あっ!」

エレノアが叫びを上げる中アイゼンが直ぐ様止めに入る

「やめろ、ベルベット」

ベルベットは一瞬アイゼンを見て業魔手を収める

「殺さない……のですね？」

「今は、お腹空いてないの。命令よ、エレノア。対魔士とは死なないように戦いなさい」

「わかりました」

エレノアは表情は暗いが返事をする。幾分かの猶予が与えられたというべきか。皆が集まる中ベルベットの横にアイゼンが並ぶ

「今のがエレノアの限界つてことか」

「そのようだ。あれ以上追い詰めれば、心が壊れる」

「ふん。おキレイね、対魔士様は」

「だからこそライファイセットの器になれる。それに、屈辱に耐えてま
で使命を果たそうとする意気は嫌いじゃない」

「へえ、案外優しいんだ」

「優しい奴は、そんな人間を利用したりしない」

「……わかってるわよ」

「ロクロウとシグレは同じランゲツ流なのに、戦い方が違うよね？」

ライファイセットの疑問にロクロウは答える

「ランゲツ流には、大太刀一刀の表芸と、小太刀二刀の裏芸——二つの
剣技があるんだ」

「シグレが表で、ロクロウが裏の技ってわけね」

「通常の武術では、裏芸は表芸を補助する技のほずですけど」

エレノアの質問にロクロウが続ける

「ランゲツ流でもそうさ。小太刀は、大太刀の修行相手として覚える
技だ」

「そんな不利な技で、シグレ様に挑む気なのですか？あの方の剣は尋
常では——」

「嫌ってほど知ってるさ。シグレが本物の天才だってことは。ガキの
頃から十年……あいつの修行相手をしたのは俺だからな」

「……」

直に体験してきたからこそ言える言葉の重みにエレノアは何も言えない

「あいつの大太刀はまさに神技だ。だから俺は……シグレに勝つためのあえて小太刀を選んだ。この身に一番染みこんだ裏芸をな」

「間合いの不利は明白だぞ」

アイゼンが忠告するがロクロウには分かり切っていることだ

「恐怖を消せば、可能性はある。一刀両断にされる恐怖を制してあいつの間合いに深く踏み込めれば……手数は二倍だ」

「恐怖を消す……か。人間じゃなくなつた業魔ならではの剣ね」

「だろう?」

「この兄弟は、もっておる刀そのものじゃのう」

「え……?」

マギルウの意味深な発言のライフィセットは疑問を抱く

「最強の誉れも高い神の剣『號嵐』と、それに打ち勝とうと足掻き続ける業をもつ『征嵐』、陽向を歩く対魔士の兄と、日陰を行く業魔の弟。正反対の二人が求めるのは、ただひたすらに——」

「相手を斬ることだけ」

「じゃろ♪」

「どちらも名刀……でも、対魔士と業魔が似ているなんて……?」

エレノアの考えもわかるが。対極だが本質はどちらも同じなのだ。

どちらも何かを斬ることには変わらないのだから

一行はヴェスター坑道の出入り口の扉を抜けカドニクス港へと出た。行動と港が隣接しているのは地面に敷かれているレールから察するに採掘した鉱物を短時間で輸送船や加工施設へと移動できる様にするためだろう。だが港には人がいない、対魔士達が事前に住人に警告したのだろう。船着き場に進むとそこにはシグレと護衛の対魔士がいた

「来たか」

ベルベット達が身構える

「てことは、出向いた対魔士たちはみんな返り討ちにあっちゃつたの

ね」

「だからやめとけって言ったんだ」

ムルジムの予想が的中したようでシグレも部下の行動に呆れているようだ。シグレはロクロウに顔を向ける

「で、どんな刀を打ったんだ？」

「・・・」

答えないロクロウに最初からわかっていたかのようにシグレは號嵐を抜く

「ま、やってみりゃわかるな！」

ムルジムは光に変わりシグレの中に入る

「僕たちが、あの対魔士たちと戦う。ロクロウはシグレに勝ってね」

「・・・頼む」

ライファイセットの横でベルベットがアイゼンと目を合わせ、彼は小さくうなづく。先ほどの作戦で隙があれば不意打ちをするための合図だ

「よっしゃ、おっぱじめるか!!」

シグレの声を皮切りにロクロウが跳ねるように走り出し首を刎ねるかの如く小太刀を振るう、が、シグレには見切られており、號嵐で防がれる

「いい太刀筋だ！もつとできんだろ!？」

「舐めるなあ!!」

もう片方の小太刀で號嵐を弾き空いた方の小太刀の刃先をシグレの胸に向かって伸ばす

「遅え!!」

「ぐあっ！」

號嵐の横薙ぎで小太刀ごとロクロウは後方へ吹き飛ばされる。空中で体制を整え地面に着地すると同時に顔を上げる、業魔の部分の目が赤く光る

「シグレエエエ!!」

「ははあ!!もつと斬りかかってこい！」

「黙れえ!!」

ロクロウは身を低くし小太刀を構えシグレに向かっている。一方ベルベット達は対魔士達をシグレから分断させ各個撃破に努めている。ベルベットは横目でシグレとロクロウの戦いを見ながらも自分の役割に専念する

(さすがに特等対魔士・・・ロクロウ一人じゃ、でも、今は任せるしかないわね)

心の中でつぶやきながらも対魔士に向かっていく。ロクロウは食い下がりながらも小太刀の得意な間合に何とか入りながらシグレと刃と刃をかち合わせる。シグレは意外なロクロウの成長に喜んでいいのか表情に出る

「おっ？なんだやればできるじゃねえか。それにその刀中々上等なものを見た」

「貴様の命を吸う刀だ！死ぬ前によく見ておけ！」
「言うようになったな！だがよおっ!!」

シグレは號嵐を上段に構えそして一息で振り下ろす。刀身に込められた剣圧がロクロウを襲う

「なっ・・・!?!ぐああああっ!!」

ロクロウは済んでの所で防御するがその行為はほとんど意味をなさず、大きく後ずさる。その破壊力にクロガネの打った小太刀は耐え切れず両方とも折れてしまった。シグレは號嵐を突き付ける

「お前の腕は悪くはねえよ。だが、せっかく業魔になったのに、ただ出来のいいランゲツ流じゃねえか。それじゃあ、当主の俺に勝てるはずねえだろ？」

「・・・なら、見せてやるよ」

ロクロウは折れた小太刀の一方を投げ捨て、走り出す

「俺の剣をな！」

ロクロウが折れた小太刀で斬りかかる。

「はあっ！」

「おおっとおー！」

ロクロウの突きがシグレの首筋を狙うが躲される、だが空かさず胴を斬りかかる。しかしシグレには通用せず號嵐で弾き返される。攻

撃しては返されるを何度も繰り返すが次第に押し返され最後は後方に弾き飛ばされる。

「おらあつ!!」

「ぐおあつ!」

ロクロウが地面に足を着いたと同時に顔を上げる。今まで赤かった目が一層光り真つすぐシグレに向かって走り出す

「うおおおおおっ!!」

シグレは號嵐と突き出す。普通であれば避けるのだろうかロクロウは違った、小太刀を捨て空いた左手を號嵐の切っ先に突き刺した

「ぐあああああッ!!」

「おおうつ!?!」

ロクロウは躊躇せずに左手を押し鏢に押し当てる。敢えて刺さることので一刀を封じ隙を作る捨て身の戦法、業魔だからこそできるのだ「もらったあ!!」

ロクロウが右手の折れた小太刀を振りかぶり首を狙う。対魔士達を退けたベルベットとアイゼンは先ほどの策戦を決行するため走り出す。その刹那シグレは左手でロクロウの背中の鞘から折れた影打ちの號嵐を抜き、ロクロウの一撃を防いだ

「なっ!!?」

「勢ッ!!」

突然の事で動きが止まったロクロウを弾き飛ばす。

「ぐああー!」

ベルベットとアイゼンはロクロウがそちらに飛ばされたので足を止めてしまう。地面へ叩きつけられたロクロウは息を切らしながら起き上がる

「はあ．．．はあ．．．」

「はっは〜!今のはよかつたぜえ!片手を捨てて首を狙うとはなあ!」

シグレは影打ちの號嵐の柄を自身の首に当て評価する

「気付くのが一瞬遅けりゃ、死んでたぜ!それでいいんだよ!それで!」

シグレは嬉しそうにロクロウに影打ちを放り投げ、ベルベット達を指さす

「よっし！今日はここまでだ。いいか、てめえら！もつとすげえ刀を打って、もつと腕を磨いて、俺を斬りにこい!!」

ロクロウは屈辱を味わいながらも絞り出すように答える

「・・・斬ってやるさ。何百回負けようが、何百年かかろうがな」
「・・・」

ロクロウの後ろ姿を見て唸るクロガネ

「いい悪い顔になったな。うん、いい悪い顔だ！あつははははっ！」

「なんという人・・・」

笑いながら船に乗るため立ち去るシグレを見ながらそう答えるエレノア、否、それしか言えないのだ。だがそこにムルジムが口を挟む
「自分の心配をした方がいいんじゃない？あなたが裏切ったことは聖察中に伝わったわよ」

「う・・・」

エレノアが言葉に詰まる中ムルジムはシグレを追うため走っていった。不憫としかいいようがない

「あの人、強かったね・・・」

「ああ、奴は・・・奴らは強い」

ライファイセットが率直な感想に嘘偽りなく賛同するアイゼン

「けど、必要なら倒す。どんな手を使ってでも」

ベルベットの言葉と同時にアイゼンの目線の先に迎えるバンエルティア号がやってきた

「バンエルティア号が来たぞ」

「行きましょう」

ベルベット達が船に向かう中、クロガネは海を見つめるロクロウに声をかける

「・・・俺も連れて行ってくれ」

ロクロウがその言葉に気づきクロガネの方を見る

「俺は、必ず神剣を超える刀を打ってみせる。だが『號嵐』に勝つには、その刀を振るう・・・神業を超える剣士が必要だ」

ロクロウがクロガネの決意を聞き届けアイゼンに聞く

「アイゼン、船にこの鎧を乗せる場所はあるか？」

「なければ誰かに着せろ」

「はは、そいつはいい！頼むぜ、クロガネ」

「任せろ」

また一人同行者が増える中マガルウはライフィセットに次の目的地を聞く

「ではでは、グリモワールを見つけて古文書解読じゃ！坊、進路はわかっておるな？」

「うん！サウスガンド領、南洋諸島イズルト！」

、

バンエルティア号が出航してしばらくして次も目的地までまだ間がある、船員やベルベット達はそれぞれ自由に過ごしている。ライフィセットがその光景を見ている中後ろからベンウィックが船室から出てくる

「なんだか海賊っていうより、サーカスみたいになってきたな」

「ベンウィックは、業魔とか平気なの？」

「関係ねーよ。バンエルティアに乗ったからにはみんな『海賊』！それが俺たちの『流儀』さ・・・なーんて、船長や副長の受け売りだけどな」

「船長・・・アイフリードってどんな人？」

「そうだなあ・・・ひとことと言うと、この『海』みたいなアゴヒゲ男、かな」

「海みたいなの・・・アゴヒゲ？」

以外な例えにライフィセットはいまいちパツとしない

「俺たちは、みんな世の中から弾き出されたヤツばかりだ。そんな俺たちを、脛の傷ひつくるめて全部受け入れてくれたのがアイフリード船長なんだ」

「うくん・・・優しいってこと？」

ライフィセットの答えにベンウィックが指摘する

「海って、優しいだけか？傷があるときに飛び込んだらどうなる？」

「しみるし、痛い」

「だろ。それに穏やかな日もあればあれる日もある。浅いところ、深いところ、渦巻きだつてある」

「怖くて・・・不思議・・・」

「そう。厳しいけど、不思議で果てしない。だから命張つてでも飛び込みたいって思う。大海賊バン・アイフリードはそういうデツケエ人なのさー!」

ベンウィックは大海原を見ながら豪語する。バン・アイフリードはそれほどのカリスマとリーダーシップがある証拠だった

「ベルベットみたいな人・・・かな」

「なくんでそうなるんだよ!?俺か、俺の説明が悪いのか!」

「うーん」

ベンウィックは頭を項垂れる。ベンウィックの説明は悪くない。

ライフィセットはアイフリードに会ったことがないので話を聞く限りベルベットと近いと感じたのだ。そこにアイゼンが甲板から船尾にいる二人に階段を上がりながらベンウィックを呼ぶ

「ベンウィック、進路変更だ。レニード港へ向かう」

「副長、急にどうしたんですか!」

「懐賊病だ。かいぞくびょう下で三人倒れた、最初の兆候は三日前。お前はどうか?」

「俺はまだ大丈夫。けど、三日前つてことはこの船全員もらつてますよね?」

「おそろくな。しかし、レニード港に行けば治療薬が手に入るはずだ」
「すぐにみんなの状況確認します」

「全員水分を多めに摂らせろ。自分の分も忘れるなよ」

「了解!全員、緊急体勢ー!」

ベンウィックが急いで甲板にいるメンバーを集める

「死ぬかもしれないのに、胆の据わった連中だな」

「死ぬ?、懐賊病つて死病なの?」

ロクロウが関心する横でベルベットはその病について疑問符を浮かべる

「うむ、原因不明の高熱を発し、最後には砂の如く崩れて死ぬという奇病じゃ」

「人が砂に!？」

マギルウの懐賊病の説明にライファイセットが驚く、熱や細菌で人体が破壊されるならいざ知らず無機物に変化して死亡するのは本来あり得ないことだ、壊血病に似ている

「かつて四海を制した大海賊団の船で流行し、一味が全滅したことから『懐賊病』と呼ばれるようになったとか」

「そんな病に、私たちも感染した……?」

「人間はな」

エレノアの不安にロクロウが付け足す

「懐賊病に罹るのは人間だけなんじゃよ」

「じゃあ……マギルウもでしょ?」

得意げに話すマギルウの横でライファイセットが指摘する。マギルウは業魔でも聖隷でもない

「うう……そうじゃった……儂の人生もここまでのようじゃあ……」

「器に死なれちゃ困るわ。発症したら、すぐに言いなさい」

「……ええ」

ワザとらしいマギルウを無視しベルベットはエレノアに忠告する

「さて、俺たちも助っ人に行くぞ。エレノア以外は、みんな働けよ」

「えっ……」

ロクロウは無意識だろうがエレノアを除外しライファイセットと共に航路を変えるための準備をしに動き出す

「エレノア以外とはひどいではないか!儂だって感染しとるかもしれんのにー」

「あんたは『魔女』でしょ。黙って働きなさい」

ベルベットがぶつくさ文句を垂れるマギルウを置いて先に行く

「やれやれ……これも『死神の呪い』か魔女にまで迷惑かけるとは、けしからんのー」

「死神の呪い?」

ぐちぐち言いながらもしつかりと仕事をしに行くマギルウ。事の

重大さは認識しているようだ、まあ自業自得というか日頃の行いのせいもあるだろうが。エレノアはマギルウが愚痴っていた死神の呪いに疑問符を浮かべていた。バンエルティア号が途中で折り返し、レニード港へ舵を切る

〜第20話 終わり〜

第21話

アイルガンドからマギルウの師がいるというサウスガンド領へ行くこうとしていたベルベット達だが海洋で発生する奇病、懐賊病が発生し治療薬を入手するため急遽ウエストガンドへ進路を変更した。バンエルティア号が寄港したレニード港、正確にはレニードはここウエストガンドの開拓拠点と外洋での航海の拠点として利用されており、さらに此処の土地は肥え、農業が盛んとされる。だがそこから西にある監獄島と潮の流れが合流することから囚人の死体がよく流れ着くという黒い噂もある。ベルベット達は薬を入手するべく船から降りる

「さて、薬屋はどこだ？たしか、懐賊病には特効薬があるんだよな」

「『サレトーマ』という野草の花だ。その絞り汁を飲めば、懐賊病は治る」

「今回は大事にならずに済みそうだな」

あくまで薬の入手、今までより圧倒的に簡単なのでロクロウは安堵するもベルベットが横やりを入れる

「安心するのは薬草を手に入れてからよ」

「ああ。行くぞ」

「待ってください。感染している者が街に出たら懐賊病が広まってしまいます」

アイゼンが先に進もうとするがエレノアが病気の感染拡大を危惧する。当然である。そこにマギルウが口を挟む

「案ずるには及ばん。不思議なことに、懐賊病は海の上でしかうつらんのじゃ。空気中の塩分濃度が関係しとるとも、海水に潜む微生物のせいとも言われておる」

「真相はわからんが、陸で懐賊病が広まった例はない」

「・・・そうですか。本当に奇病ですね」

エレノアが安堵と納得の表情を浮かべる側らアイゼンがベンウイツクに話しかけ打ち合わせをする

「すぐに戻る。お前たちは待っている、だが動ける奴がいたら一応ここでもケンについての情報は集めておけ。ここで駄目ならもう諦める」

「お願いします、副長！俺らもできるだけやってみます」

「無理はするな。今はこの事態の打開が最優先だ。急ぐぞ」

アイゼンの掛け声と共にベルベット達は歩き始める。その後ろでエレノアは優れない顔を浮かべる

「でも、サレトーマ・・・あれを・・・飲まないといけないのか・・・」

「エレノア？」

その横でライフィセットが不思議そうにエレノアを見る

「いえ、高熱の病気によく効く薬草なのですが・・・この世の物とは思えないほど不味いの。『業魔も泣く』っていうくらい」

「でも薬だから・・・死ぬよりイヤ？」

「あ・・・泣き言ではありませんよ。子どもの頃のことを思い出しただけです」

エレノアは恥ずかしいのは顔を僅かに赤くしている。味覚が完成していない幼い子供だと過剰に反応してしまいトラウマになることもあるのだ。そういう事は誰にでも一つはあるであろう

レニードの薬屋に向かう途中でライフィセットは不安そうにアイゼンに尋ねる

「ねえ・・・アイゼン、本当にケンを捜すのやめちゃうの？」

「ああ、ベンウィックや血翅蝶がローグレス中を探し回ったがあいつは発見できなかつた。カドニクス港にもいなかった以上もう諦めるしかない」

「で・・・でも・・・」

それでも中々引き下がろうとしないライフィセットをベルベットが止める

「止めなさい、ライフィセット。こんだけやっても見つからないなら人手を割くのは無駄よ。諦めなさい」

「ほほーベルベットや、案外諦め早いんじやの。まあその方が儂とし

ては100ガルド返ってくるからどうでもええんじゃが♪」

マギルウはにやつきながらベルベットを捲し立てるその横でロク
ロウは腕を組みながらも尚諦めてはいないようで

「俺はまだ諦めたわけじゃない。第一、聖主の御座で殺されたなら俺
達への見せしめに晒し首ぐらいはするはずだ。決めつけるのは早計
というものだぞ」

「なんじゃなんじゃ！ロクロウ！えーかげん認めい！早く俺の100ガ
ルドを返せ！」

「応、返すとも。ケンの死体を見たらな」

「ガクツ!!」

マギルウがこける中エレノアが声を上げる

「自分が言うのもなんですが、貴方達に仲間意識というものがないの
ですか？」

「ないわ」

「ないな」

「ない」

「ないのー」

4人からの即答にエレノアは啞然とする

「あいつは勝手についてきただけだし」

「俺は、恩返しのためについてきた」

「最優先はアイフリードの捜索だ」

「俺は暇つぶしに引っ付いてるだけじゃし〜」

「・・・」

各々の返答にエレノアはないも言えずに黙るしかなかったが最後
にベルベットが煽りともいえる言葉を放つ

「別にあんたが気にしてどうすのよ、邪魔者が一人消えてやりやす
なつたんじゃないの？」

「っ！・・・それは」

「話は終わりだ、急げ」

アイゼンはエレノアの状態を知ってか知らずか皆を急かした。ち
なみにベルベットとアイゼンは話に合わせて喋っているだけなので

半分嘘でもある

ベルベット一行はレニードに入り真つすぐ薬屋に向かう途中街の人と対魔士の問答が聞こえる

「繰り返すようだが、そのような事実はない」

「でも、大司祭様はいつまでたつても、お仕事にお戻りになってないっていうじゃないですか？本当は、業魔に襲われたんじゃないかって、王都から来た人が言ってたんです」

「隠そうとした真実が漏れ始めたか」

問答の内容を聞いたロクロウが呟く中。二等対魔士が住民を納得させるため必死に答える

「王宮の警備は他のどの場所よりも嚴重だ。業魔が侵入するなどありえない」

「じゃが、業魔の群れが城に押し寄せたらどうじゃ？」

「王宮を守る対魔士は、トップクラスの实力を持つ精鋭部隊だ。業魔の群れなどものともしない」

「でも、巨人みたいな業魔だったら、いくら精鋭部隊でも厳しいんじゃないですか？」

住民の過大な妄想に二等対魔士は制するように口を挟む

「そのような業魔が王都に現れたら、もつと大騒ぎになっているはずだ。不安な気持ちもわかるが、我々の発表を信じて、冷静に考えてほしい。不安であなたたちが混乱状態に陥れば、それこそ業魔に入り込む隙を与えてしまう」

「それはわかっているんですけど、やっぱり不安で・・・」

今の情勢では正義感でまじめな者が一番苦勞する。どこも変わらない、何事も最初に責められるのは現場にいる者なのだから。外部はそれを知らずに只吐き出すだけ

「・・・王都の噂が、広がってきてるみたいだね」

「少しくらい街がざわついてるほうが、こっちは動きやすくて助かるわ」

ライファイセットの呟きにベルベットはただそれだけ喋った。この

出来事の後直ぐ、アイゼン達は薬屋に立ち寄る

「いらっしやい」

「サレトーマの花が欲しい」

「珍しいモノを欲しがるね。もしかして、壊賊病かい？」

アイゼンの注文に店主が察するよう続ける

「ああ、最初の奴が熱を出して三日経つ。早いとこ手当をしてやりた
い」

だが店主は一瞬言葉を詰まらせる

「そうか・・・生憎、切らしちまつてるんだ」

「なぜ品切れになる？今が花の季節だろう」

アイゼンが食い気味で問い詰める、この時期に大量に自生するならば在庫があつてもおかしくなく、先ほどに店主の言葉を勘ぐれば花が必要な者はそれほどいないことも推測できる

「サレトーマの咲くワアーダ樹林に業魔が出てな。聖寮が樹林への立ち入りを禁止しちまつたんだ」

これもアイゼンの死神の呪いか。エレノアが禁止という言葉に反応する

「立ち入り禁止・・・？退治していないのですか？」

「よくわからんが、探してもめつたに見つからんらしい。百回に一回出くわすかどうかだとか」

「それ、危険じゃないだろう？」

ロクロウが遭遇率の低さにツッコミを入れる

「だが、出会って生きて帰った者はいないんだ」

「壊賊病、薬はない、聖寮に、妙な業魔。いよいよ“死神の呪い”全開
じゃのー」

「・・・？」

マギルウの死神の呪いという単語に更に疑問を深めるエレノア、店主は別の提案を出す

「他の街から取り寄せられるかもしれないけど、発熱三日じゃ、間に合うかどうか・・・」

「ワアーグ樹林に行けば、サレトーマの花は咲いてるのね？」

ベルベットは手つ取り早く花が咲いている場所を聞き出す

「たぶんな。でも業魔が・・・」

「ワァーグ樹林へ向かうわよ」

ベルベットが話を打ち切りレニードの外へ歩き出す。店主は戸惑いながらもベルベット達の背中に声をかける

「なんでもいいが、とにかく気をつけるよー!」

ベルベット達はワァーグ樹林へ向かうためノーグ湿原を通る、湿地帯特有の湿気で不快度指数が上がりそうだが動植物達にとつては楽園である

「あの、ライファイセット、死神の呪いってなんですか?」

橋を渡りながらエレノアがライファイセットにアイゼンの事について質問する

「・・・アイゼンは自分の周りの人たちを不幸にする力をもってるんだって」

「それは・・・聖隷の特殊な力ですか?」

「ただの不幸ではないぞ」

そこにマギルウが加わる

「海門要塞では、突然業魔病が大発生したし、海賊団にも、多くの死者が出ておる」

「そんな話・・・にわかには信じられません」

「死神の呪いは本物でフリー!!ボクがエレノア様から引き剥がされ、マギルウ姐さんにフン捕まったのも呪いのせいだフリー!」

ビエンフリーが湧き出て泣きじやくりながら悲痛な叫びをあげるアイゼンの責任にする前に自分の行いを振り返るべきなのだろうか

「そう・・・なの?」

「エレノア様の涙が乾くよう、頬をフリーフリーした日々が、恋しいでフリー」

「えっ!?!ちよつと・・・!」

エレノアが止めようとするがビエンフリーは気づくことなく話を大きくし始める

「ここでエレノア様に再び会えたのも不思議なご縁。改めてエレノア様のもとへ……」

「好きにするがよい」

マギルウは止めることなくビエンフーを促す

「いいいでフか!?!」

「止めはせぬ。乙女の秘密をペラペラしゃべる聖隷が欲しいならのー」

「結構です！私にはライフイセットという守るべき聖隷がいますから」

「そんなあく！今はライフイセットに涙をフーフーしてもらってるのでフーフーか?」

ビエンフーがどんどん話を大きくする中エレノアが必死で誤解を解こうとする

「してもらってませんってば！もう、あなたなんて知りません！」

「ビエ〜ン……！」

「ふう……」

エレノアが疲れた表情でため息をついている間にベルベットがライフイセットを自分の方へ引き寄せエレノアから離れる

「なんですか?」

「ライフイセットには、そういうことさせないでよ」

「させません!というか、以前もそのようなことは……!ああ、もう〜!」

弁明しようにもビエンフーのせいで收拾がつかなくなり、諦めにも似た叫びを上げるエレノア

「これも死神の呪いかの……」

「……」

マギルウの眩きにアイゼンは何も言わずただため息だけついた

ノーグ湿原を経由してワアグ樹林の入り口に到達する。この樹林は珍しい虫が生息しており昆虫マニアがこぞって採集に来るらしい、時には虫を巡ってマニア同士が物理的な命のやり取りが発生して

いる。今は立ち入り禁止となっているのでそのような光景は見ることはないが

「ここがワアーグ樹林だな」

「対魔士が巡回してるかもしれない。注意して」

サレトーマを探すため奥へと進む一行、道中にそれらしきものを見つけた。草はあるが花はない

「おお、あの赤茶けた草はサレトーマじゃ。シユミが悪い紫色の花を探すのじゃ」

「シユミの悪い、紫の花・・・うん」

ライファイセツトが群生している草から花を探すために皆から無意識に離れて先に走りだす

「ライファイセツト、あまり離れないの・・・っ!？」

ベルベツトが呼び戻そうと声をかけた瞬間、ライファイセツトが下を向きながら歩いている目の前の岩の陰から二等対魔士二人が突然現れ鉢合わせになる。二等対魔士はライファイセツトがいたことで驚き、少なくとも待ち伏せしていたわけではないようだ

「なっ!?!子供・・・いや聖隷がなぜこんなところに!」

「えっ!?!ええ!?!」

「ライファイセツト!!」

「ここで対魔士と出くわすとはな!これも呪いか!？」

「言ってる!」

ライファイセツトは何が何だかわからず慌てふためく。ベルベツトとアイゼンとロクロウが弾けたように走り出す、ライファイセツトの後ろから迫りくる三人に反応が遅れながらも対魔士は各々武器を取り出す。

「静ッ!!」

「ぐおっ!?!」

初めにロクロウが俊足で細剣を持った対魔士の前に躍り出て小太刀で抑え込み押し返す。鏑迫り合いになるもロクロウの方が優勢に對魔士が後ろに下がるその横で、双剣を構えたもう一人の對魔士はベルベツトとアイゼンを相手に戦っている。が、数と戦闘力の差は歴然

で勝敗が決するのにそう時間はかからない

「でやあつー！」

「ぐあー！」

ベルベットの回し蹴りで片方の武器が飛ばされ大きく体勢を崩した対魔士の横つ腹をアイゼンの拳がめり込む。

「ごへあ!？」

「寝てろ」

内臓から発せられる鈍い痛みには耐えきれず嘔吐し、両膝を着く対魔士の首にアイゼンが手刀を見舞い対魔士は顔面から地面に倒れ伏す。隣でロクロウは細剣を弾き飛ばした対魔士を切り伏せていた

「儂が出る必要はなかったみたいじゃの」

「ライファイセット、大丈夫ですか!？」

後ろから頭の後ろに手を回しながらゆったりと近づくと近づくマガルウとは反対にエレノアは走ってライファイセットの無事を確認する

「うん、大丈夫」

「しかし、この対魔士たち、さっきの様子からして業魔を探しているとは思えん、どちらかというとなにか見張っていたようだな。だいたい気楽な様子だったが」

「・・・あつ」

その時ライファイセットの羅針盤の針がまるで手で回して遊んでいくかの如く回り始める

「あなたが動かしているのですか?」

「違うよ、急に動き出したんだ」

「アイゼンの金貨のように、この子と同調を・・・」

「アイゼン、お主は『地の聖隷』じゃろ。なにか感じるか?」

「いや。俺よりライファイセットの感覚の方が鋭いようだな」

アイゼンが腕を組みながら答えた後、羅針盤の針が止まった

「止まったけど・・・なんか変な感じがする」

「どんな?」

「この前、地脈に閉じ込められた時と似てるっていうか・・・」

「つまり、カノヌシの力に近い・・・?この先にいるのは、ただの業魔

だけじゃなさそうね」

ベルベツトは顎に手をやり思考しながら対魔士たちが出てきた方向を見る

対魔士がやってきた方向に何かがあるか確認するためベルベツト達は進む。だが最深部に到達しかけたが野良の業魔が襲ってきただけで特別強い敵には合わなかった

「この先・・・行き止まりみたいだけど、何か感じる、ライフィセット？」

「ううん・・・今は何も」

そこで丁度樹林の最深部についた時、そこにサレトーマが群生していた。今度は花がついている

「あつ・・・紫色の花が咲いてる！」

「サレトーマの花だ」

漸く目的のものを見つけたライフィセットはいち早く近づき花を観察する。一見枯れた草の上に偶然別の花が乗ったかのような外見だが、これがこの植物の正常な形態なのだ。少なくとも観賞用にはまず向かない

「・・・聖察は、業魔を警戒してただけなのか？」

ライフィセットの後ろでベルベツトは先ほどの対魔士の行動について思考していた。先ほど倒した対魔士はどちらかというと暇をつぶしていたようにも見えた

「今は、サレトーマが採ればそれでいい」

「そうね」

サレトーマを観察しているライフィセットの横にマギルウがやってくる

「どうじゃ坊、サレトーマはシユミが悪いじゃろう？色の組み合わせなんぞ、最悪じゃし」

「うん、サレトーマはシユミが悪いね。でも、これでみんな助かる」

ライフィセットがふと視線を動かすと花の傍らに一匹の虫がいることに気づく、虫はライフィセットに気付いたと同時に黒い気を噴

出させ巨大な禍々しい姿へと変わった

「うわああつ!!」

「ライファイセツト!!」

ベルベツトとエレノアの声が重なり両者が同時にライファイセツトを助けるため走り出す。ライファイセツトから切り離すため二人が各々の武器で業魔に斬りかかる。業魔はそれを難なく躲し距離を話す。ちなみにマギルウは真っ先に逃げた

「薬屋が言ってた業魔は、こいつか!」

「大丈夫?」

「うん」

「滅多に出会わないと言っていたのに……これが『死神の呪い』!」

「まだ序の口だ」

業魔は威嚇するかのように音を出しながら飛ぶがある程度飛んだところで結界が行く手を阻み業魔を跳ね返し地面に落とす

「またあの結界!」

(これは……一等対魔士でも張ることのできない結界術!?こうまでして業魔を生け捕りにしているなんて……一体なんのために?)

ベルベツトが毒づく横でエレノアは戸惑う、業魔と相對するはずの聖察がなぜ業魔をそのままにしているのか。なぜ隠蔽しようとするのか、疑問が疑問を呼ぶ

「なんにせよ、この空飛ぶ虫を倒さぬとサレトーマの花は手に入れられぬぞ」

「わかつてる。やるわよ」

全員が構える中業魔、グロッサアギトがかみ合わせるような音を出し向かってくる

「まずは小手調べ!先陣を切る!行くぞ!」

ロクロウが最初に飛び出し小太刀を煌めかせ真っすぐグロッサアギト目掛けて走り出す。グロッサアギトもそれに呼応して飛び掛かる

「破アツ!風迅剣!!」

ロクロウの音速を超える一突き、切っ先がグロッサアギトの頭目掛

けて伸びる。だがそれをグロッサアギトがロクロウの腕を縫うように躲す

「なにっ!？」

ロクロウは相手の意外なスピードに判断が遅れる。ロクロウの首を切り落とさんと大顎が迫る

「あの速さは厄介だ!! ウィンドランス!」

「ロクロウっ! 危ない! シェイドブライト!!」

ライフィセットとアイゼンが攻撃を阻止するために聖隷術を放つ。アイゼンの風の槍を後ろに下がることで躲し、二段目の光弾を上昇して避ける。ロクロウは後ろに飛び跳ね、走るベルベットとエレノアと交代する

「相手は業魔! 手加減するんじゃないわよ!」

「わかっていきます!」

ベルベットは刺突刃を構えながら前転しながら跳躍し、グロッサアギトを両断せんと上から下へと振りぬこうとしたが、ガキンという音が響く

「ッ!!」

遠心力を利かせた斬撃は確かに当たった、だが、甲殻に余りの固さに刃が一寸たりとも入っていない。弾かれて体勢を崩した時、グロッサアギトは身を回転させ長い尾で殴りつけ、ベルベットを弾き地面にたたき落とす

「うああっ!？」

「ベルベット!」

ライフィセットがベルベットに駆け寄る前でエレノアは聖隷術を発動させる

「これなら! 霊槍・獣炎!!」

槍の先から火球を放ちグロッサアギトを襲う、追撃をかけようとしたグロッサアギトはそれを見た瞬間慌てたように高度を取り避ける

「速い! これでは」

「なんとかして動きを止めて仕留めんとジリ貧じやの! ブラッドムーン!」

マガルウが聖隷術で発生させた力場がグロッサアギトを捕らえ靈力が敵を痛めつける。グロッサアギトは苦しみながらも体を振り脱出する

「ほほ〜どうやらあやつ、熱いのは苦手と見えるの」

「弱点は掴めた！俺が隙を作る、その後攻めろ！」

「応!!任せろ！」

アイゼンとロククロウが短く会話した後走り出す。グロッサアギトは顎をかち合わせ突撃する、それを見計らいアイゼンが聖隷術を発動させる

「破碎しろ！ストーンエッジ！」

グロッサアギトの目の前に石の槍が飛び出し進路を塞ぐがそれを意に介さず突っ込み槍を粉碎する。その数秒前ロククロウは石の槍を駆け上がり前方捻り宙返りをしながらグロッサアギトの真上で印を切る

「隙あり！壺の型・香焰！」

靈力が収束、圧縮され爆発が起こる。グロッサアギトは苦しむ様な鳴き声を上げるが直ぐに怒りを表したかのように顎をガチガチと鳴らし爆炎から抜け出す。煙を引きながら着地したばかりのロククロウを大顎で捕らえる

「なにっ?!ぬおああ!!」

ロククロウはもがいて抜け出そうとするが圧倒的な力で組み付かれたまま結界に叩きつけられ、地面に突き落とされる

「ぐああっっ!!」

「ロククロウ！」

エレノアがロククロウを助けようと走り出す。しかし、それを察知したグロッサアギトはその大顎をそちらに向ける

「くうっ!!届け！裂駆槍!!」

大顎に捕まる前にエレノアが自身の槍で敵の頭を捉える。だが「そっ、そんな・・・」

渾身の一突きがグロッサアギトの顎で捕まれる。今度はお返しと言わんばかりに顎を乱暴に振り始める

「くっ!!うあっ!!」

業魔の力に耐えきれなくなり槍を手放してしまう。グロッサアギトが槍を放り投げ丸腰のエレノアに飛び掛かる。アイゼンと立ち上がったロクロウ、ベルベットが走って来るのが見えるが、距離が開いており間に合わない

(こ・・・こんなところで・・・!!)

エレノアはこれから来る結末に目を瞑る、その時

「諦めないで!重圧砕け!ジルクラッカー!」

「対魔士の癖に諦めが速いの!ブラッドムーン!」

ライファイセツトの展開した重力場で動きを止め、マギルウの紅い霊場で敵の体力を削り、エレノアを危機から救い出す、そこへ立て直したベルベットが刺突刃を振りかざしながら走る

「さつきはよくもやってくれたわね!!これはお返しよ!裂甲刃!!」

一撃で駄目なら斬れるまで何度でもといわんばかりに連続で斬撃を繰り返す。耐えていたグロッサアギトも流石に耐え切れずによるめきながら高度を取ろうと飛び上がる

「おやおや?逃げるのかえ、それはちといただけんの。もちつと付き合え!光翼、天翔くん!」

マギルウはいつの間にか式神を伸ばし上から思い切り振り下ろし、グロッサアギトを地面に叩き落とす。すぐ横でロクロウが右目を光らせる

「今度は不覚は取らん!!零の型!!」

地面に突っ伏したグロッサアギトを切り上げ腹に小太刀を突き立てる

「破空!」

突き上げで吹き飛んだ先にアイゼンが手首を回し構えを取る

「そろそろカタを付けるぞ。ウェイストレス・メイヘム!」

アイゼンの鉄拳は、グロッサアギトの顔や胴体に何発も撃ち込まれた最後のアッパーが顎にクリーンヒット。これだけの連続攻撃を受けたグロッサアギトは耐えきれず、吹き飛ばされる

「ライファイセツト!お前が決める!」

「うん！」

アイゼンの掛け声に呼応し紙葉を操りグロツサアギトを捉える

「霊子解放！仇なす者に、秩序を齎せ！バインド・オーダー！」

霊力の衝撃波がグロツサアギトを吹き飛ばしもう一度結界の壁に叩きつけられ地面に落ち元の大ききの虫に戻る

「ふう、まったくとんだ昆虫採集じやったのー」

「大丈夫かエレノア。ほら」

ロクロウはエレノアの槍を拾い上げ、もう片方の手をへたり込んだエレノアに差し出す

「・・・え、は・・・はい・・・ありがとうございます」

少し放心状態だったエレノアが気が付きロクロウの手を取り、立ち上がる。その横でライフィセットは先ほどまで戦っていた虫の業魔に近づきしゃがみ込む。虫もそれに合わせてライフィットを見上げる。そしてその虫を両手で持ち上げベルベットの方向を向く

「この虫、連れて行っちゃ——」

「ダメよ、処分するから退いて」

「あう・・・」

即答で却下し虫を始末するため近づき業魔手を出す。だが何か思ったのかベルベットは自らの腕を見る、そこから行動が止まったままの二人にロクロウが助け舟を出す

「聖寮が守っていたんだ。殺さずに様子を見た方がいいんじゃないのか？」

「・・・」

ベルベットはふとライフィセットを見る

「・・・」

ライフィセットの無言のお願いの如くベルベットを見る。彼女はため息を業魔手をライフィセットのすぐ横の結界に当て喰らう。結界は手に吸い込まれるように消え、やがて光となって消える。業魔手を戻しながら仕方ないとばかりにライフィセットに告げる

「自分で世話をするのよ」

「うん！世話するー」

許しを得たライファイセットは満面の笑みを浮かべた

「サレトーマの花は確保できた、これで船の連中も、エレノアも大丈夫だ」

「こらー！ 儂も数えーい！」

自分が入っていないことに抗議するマギルウ、船の連中の中に入っている願う

「壊賊病という『死神の呪い』も解けましたね。昆虫業魔には驚きませんでしたけど、『呪い』なんて、やはり大げさな気もします」

皆が集まる中エレノアがアイゼンの呪いについて感想を述べる。それを聞いたアイゼンは小さくため息をついて顔を横に向ける

「・・・俺と旅をして、三年以上生き延びている奴は数えるほどしかない。油断すると五十人目の犠牲者になるぞ」

「五十人!?!」

「呪いで死んだ仲間の数だ」

「えっ・・・あ、あの私・・・」

それを聞いたエレノアは気ままずくなり何か言葉をかけようとする
「気も抜くなということだ」

「・・・はい」

アイゼンの言葉にエレノアはそれしか返せなかった。ベルベツトはそれを確認し皆に声をかける

「目的の花は取れた。船に戻るわよ」

それを聞いた一同は樹林の出口に向かって進み始める。皆が歩く
中ライファイセットは先ほどの虫をまじまじと観察する

「この虫・・・名前、なんていうんだろ・・・?」

「案外のんきね・・・」

ライファイセットの横で小さくため息をついたベルベツトであった
)

第21話 終わり

遙か彼方遠く、そことは全く違う場所で

ふむ、調べれば調べるほど面白い男だ。左眼球の損失と内臓の損傷、切創、刺創・・・すべて言えば夜が明けるところだ。しかし左眼球以外はほぼ全て治療しかけている、あれほどの状況下にも関わらず生き残れるのも頷けるな

白衣を着た数人の男がいる先に裸のケンが仰向けで寝かされている、その周りには所狭しに機械と培養槽が並べられ、培養槽からはゴボリと泡を立てる

さて・・・そろそろ目覚めてもいい頃合いか。さあ、起きたまえ

「ん・・・つう・・・ここは？僕は確かあの時」

ケンは意識を取り戻し、起き上がり手術台に腰掛け右目だけを開け周りを見渡す

「聖主の御座じゃない・・・僕は一体どうなったんです？まだ生きているのですか？」

以前にもその様なことを聞かれたね。では、左目を開けてみない。そうすればわかる

「左目、ですか・・・ですが目は、もう」

安心したまえ、君には新しい目を与えた。恐れなくていい、さっつけてみたまえ

ケンはその言葉に従い恐る恐る左目を開ける。本来ないはずの左目があった、それに気づいたと同時に左目から猛烈な速度で文字と電子表示が流れる

「これは一体!？」

君の左目は新しく生まれ変わったのだよ。その眼には各種超高感度センサーと高性能コンピューター端末になっている。その端末を使えばありとあらゆる機械や電子機器、コンピューターやシステムを君の思いのままに操ることができる。そして君が見たもの聞いたものを世界中のコンピューターが分析し、情報を与えてくれる。国のシステムに入り込み人工衛星や兵器を自由に動かすことができるのだ。

やろうと思えば世界を支配することも破滅させることもできる．．．
といつても君が居るところでは使うことはないだろうがセンサー類
が助けになるだろう。それに君はそんな野蛮なことをする人間では
ないからな

ケンは説明を聞きながら左目の感触を確かめている。何度も瞬きを
をしたり、上下左右に眼球を動かし未だに流れ続ける電子表示に戸惑
いながらも一つ質問する

「．．聞けば聞くほど話が大きいですね、その前になぜ僕にこんなこ
とを？あなた達になんの得が？」

得といえど君を使つて実験できたということかね？君の知り合い
から交渉を持ち掛けられた時は正直驚いたものだよ、こことは違う次
元から君を連れ出す代わりに好きにしたいと言われたのだからな

その言葉にケンは固まる。知り合いといえどどこからどう見ても
ルシフェルの事に違いない、正直実験と言われるとあまりいいイメー
ジがわからない

「実験．．．？」

ああ、とは言つても何も君を全身サイボーグにした訳ではない。で
は左を向いてみなさい

ケンは言われた通りに顔をそちらに向けると並んだ培養槽の中の
一つに人間の骨格丸々一人分が収められている

「あの骨格は？」

驚かないでくれたまえ、あれは君のだ。君の体の中にあつた骨格だ
よ

「あれが僕の!?なぜ？」

ケンは少し驚きながらも立ち上がろうとするが違和感に気づく、体
が少し重いのだ

君はこれから更に激しい戦いに身を置くことになる、その為に保険
として君の骨格を実験ついでに特殊超合金の骨格に代えさせても
らった。詰まるところ左目と骨格は交渉の報酬ということだ。だが
君は行く先々、いや、君の行く末は何かと危険が待ち構えていること
だろう。

「・・・」

ケンは何も言わないが改めて立ち上がり体を動かす。僅かにぎこちないが直ぐに慣れる程度のものだ

君の骨格を構成する合金は高度、強度、弾性に遥かに優れ、理論上破壊は不可能、耐熱、耐氷耐電は勿論金属特有の弱点である磁力の影響を全く受けることなく活動ができる。重量はあるが君には問題ないはずだ、ついでに伸縮率も考慮してあるから仮に身長が伸びても縮んでも大丈夫だ

「はあ・・・それはどうも・・・」

最後の説明はどうかと思ったが丁度左目が落ち着いたように表示に Setup Completeと出て視界が開ける、以前と変わらないように胸を撫で下ろす

「ふう、終わったみたいかな」

ふむ、システムに異常はない。骨格と眼による拒否反応もなし、これで全てが完了した。さ、裸のままでは不便だろう、そこに君が着ていたものと同じものと修繕した装備を用意してある。支度を始めたまえ

照明が照らした先にケンが普段着ている服と装備が置いてある。ケンが着替えながらも男は話を続ける

そろそろ君を元いた次元に返す。行き着く場所は君の同行者の近くにしてあげよう、言い訳は自分で考えてくれ

「あー・・・分かりました」

どちらにせよ、いざれ話すべき事ではあるがね。隠し事はいつまでも押し通せる事ではない、忘れない事だ。さ、時間だ。その台座に乗りなさい。ああすまない、一つ言い忘れていたことがあった

「なんででしょうか」

君の肉体の精密検査をした時わかったことだが君の体は自身の免疫機能と自己回復能力が普通の人間より余りにも異常に高い、これが何を意味するかわかるかね

「と、言いますと」

つまり君の肉体はこれから先外的要因による恩恵も、損害も受ける

ことはない。仮に重傷を負えば外科的な施術を行わなければならぬ
いということだ。留意したまえ

「・・・わかりました」

ケンの目の前にある台座から光が灯る、ケンが台座に乗ると辺りに
電流が流れ始める

では始める、あとは君次第だ

「またあなた方達に会うことはありますか？」

それはどうか？君の行い次第だ。ではな

部屋一面が電流と光で真っ白に染まる。それが収まった時には台
座にいたケンは居なくなっていた、それを見ながら白衣を着た男達は
部屋を後にする

私達と君は本来合間見えない者、だが縁があればまた会えるだろ
う。縁があればな

）

第22話

ワアーグ樹林でサレトーマの花とついでに虫を手に入れたベルベット一行はベンウィック達に花を届けるため足早にレニード港へと向かっている。道中、男連中が先の戦いで保護した甲虫について議論を交わしていたが、名前を決める時にロクロウがクワガタと言った直後にアイゼンはこれはカブトと言いつ張りかなりどうでもいいギスギス感になったこと。サレトーマの花がどんな物なのかなど話があった。花については要約するとクツソ不味いとのこと、もう少しで樹林を抜けようとしたところでベルベット達の先に巡回であろう二等対魔士が二人いた。見つからないように陰に隠れ様子を窺っていると彼らの話し声が聞こえた

「なあ・・・例の『手配聖隷』、こつちを襲うと思うか?」

「奴の狙いは『ロウライネ』だろう。だが、気を抜くなよ。陽動で『虫かご』を壊しにくる可能性はある」

「手配聖隷・・・狙いはロウライネ・・・?」

ベルベットは断片的に重要そうなワードを復唱する

「しかしヘラヴィーサを破壊した業魔といい、裏切り者のエレノアといい、問題ばかりだな」

「それに対処するのが我らの使命だ」

組んでいた腕を解きながらため息交じりに先に進み、もう一人も後についていった。対魔士達が行ったのを確認してベルベット達が出てくる

「・・・」

エレノアは先ほどの会話を聞き溜息を吐く

「聖寮がなにやら動いてるようだな」

「『虫かご』とはさっきの結界のことか?」

「じゃとしたら、儂らが襲ったことがバレるの」

「早めに立ち去るのが正解ね」

ベルベットの掛け声とともに皆は森を抜ける

樹林を出て、ノーグ湿原に入りいよいよレニードへは目と鼻の先と
いうところで一行の目の前に一人の男が歩いてきた

「よう〜！元気がいい？」

まるで友人に久しぶりに会ったかのように手を上げるザビータ

「ザビータ！」

それとは正反対に血相を変えてザビータに向かって走り出すアイ
ゼンにザビータは己の獲物を相手に向ける

「おっと、ケンカの相手はまた今度だ。デートに遅れるわけには行か
ないんでな」

「・・・『それ』はアイフリードの物だ。なぜてめえが持つてる？」

「拾ったんだよ、どっかで」

立ち止まるアイゼンにザビータはそれをちらつかせながらはぐら
かす

「茶化するなケンカ屋。力づくでも話させる」

「はっ！副長さんよ、あんたは殴られたら口割んのか？」

「試されるのはてめえだ」

「話したけりゃ話す。殴りたきや殴る。それを決められるのは、俺の
意志だけだ」

それを言ったザビータは己の蟬谷に銃口を当てる

「!?」

「なにを・・・!?」

エレノアが声を上げた時ザビータが自らの頭を撃ち抜く。その瞬
間彼の体から霊力があふれ出す

「ちよいと『アゴヒゲ』のキレイコちゃんを待たせてんだよ。終わっ
たら語り合おうぜ・・・拳でな！」

それを最後にザビータは風となって消える

「待ちやがれ！」

アイゼンはザビータを負うべく走り出す。ライファイセットが声を
上げて止めようとする

「アイゼン！みんなにサレトーマを渡さない」と

「お前に任せる！」

「でも……」

アイゼンはそれだけ言うとは単独で走っていった。ベルベツトはため息をつく

「船へ急ぐわよ、ライフイセット」

「……う、うん」

）

アイゼンになし崩し的な頼まれたサレトーマの調達を果たすべくベンウィック達がいるレニード港へと入る

「サレトーマの花、採ってきたわよ」

ベルベツトはサレトーマの花をベンウィックに渡す

「助かったよー！……って、副長は？」

「ケンカ屋の聖隷を追いかけてピュ〜と消えよった」

マギルウの話にベンウィックが声を荒げる

「その聖隷ってザビーダって奴だろ！なんで一緒に行かなかったんだ！？」

「壊賊病のあなたたちを放っておけと？」

「そうだよ！副長が危ねえんだ！」

「聖隷がザビーダを狙ってるから？」

「知ってんじやねーか！こつちも聖寮に出入りしてる商人から聞き出したんだ。ロウライネで、メルキオルって対魔士が大掛かりな罠を張ってるって。そんなところに飛び込んだら、副長もただじゃ済まない！」

「メルキオルが動いてる……」

つぶやくベルベツトの隣でエレノアが疑問を口に出さないが己の中で思考する

（なぜメルキオル様が直接指揮でザビーダを……？いえ、それより――）

（ここまで考えながらライフイセットの方へと顔を向ける

（この子をメルキオル様に回収してもらえば聖寮に戻る）

「相手は特等対魔士よ。罠じゃなくても強敵よ」

「クソツ、お前ら全然あてになんねえ！もういい、俺たちが助けに行く！！」

ベンウィツクの発言にエレノアが制する

「あなたたちが行ったところで、かないっこありませんよ」

「あんたは自分が危なかったら、仲間を見殺しにすんのか？」

「え・・・!?」

ベンウィツクの言葉に詰まるエレノア

「仲間を助けたいから行く。負けるとわかってたって戦う！やるかどうかを決めるのは自分だ！それが、俺たちの『流儀』なんだよ！」

「・・・」

何も言えなくなるエレノアを横目でベルベットはため息をつきながらフオローする

「・・・短気な連中ね。誰も行かないなんて言っていない」

「へ・・・?」

「副長と船長がいつ戻ってきてもいいように、さつきと薬を飲んで、船の準備をしておいてよ」

「船長が!？」

豆鉄砲をくらった鳩のような顔をしながら驚くベンウィツク。ベルベットが続ける

「アイゼンが、罨に飛び込む理由なんてアイフリードしかないでしょ」

「はは・・・！わかった！こっちは任せてくれ！」

先ほども悶着が嘘のように過ぎ去りベンウィツクは出航の準備をする為船に向かう

「ほら、あんたも」

ベルベットは懐からサレトーマの花を取り出し、エレノアに渡す

「まったく海賊は理不尽ですね」

「理屈じゃなく守りたいものがあるのよ」

「・・・理解に苦しみます」

花を受け取っても中々手に付けようとしないエレノアにベルベツトは指で腕を突きながら待っている。エレノアは観念して花を絞って花汁を絞りだし、飲み込む。

「ぐええっ!!」

次の瞬間、苦悶の表情を浮かべエレノアが倒れこんだ。因みにその後ろでロクロウは笑っていた

しばらくしてエレノアが持ち直したところでロクロウがこれからの事について話す

「さて、肝心のアイゼンの行き先だが」

「樹林で対魔士が言ってた『ロウライネ』ってなんなの？」

「ウエストガンド領の北方にある対魔士の訓練を行う塔です」

「ベンウィツクの情報とも整合する。そこね」

「きつと対魔士がたくさんいる。アイゼン・・・」

アイゼンの安否を心配するライフィセットをロクロウが声をかける

「そんじよそこらの対魔士にやられるような奴じゃないさ」

「死神を相手にする方も気の毒じやて」

マギルウも付け加える。確かに気の毒だが

「うん。追いかけて合流だね。そうだ、ねえベルベット、サレトーマの花、まだある？」

「ん？あるけど、どうしたの？」

何かを思い出したようにライフィセットがベルベットに尋ねる

「その花一輪、僕に出来ないかな」

「別にいいけど、どうするのよ。花はエレノアが飲んだじゃない」

「ううん、ケンのために持っておくんだ」

「ケンのためって・・・あんたねえ・・・」

ベルベットはため息をつく。がライフィセットが口を開く

「僕はケンが生きてるって信じてる。例えみんながケンはもう死んだって言うてもね、それに・・・」

「それに・・・なんだ？」

ロクロウが首をかしげる

「なんかわからないけど、もうすぐ会えるような気がするんだ」

「もうすぐの・・・あんまり当てになりそうもないが。儂としては」

0 ガルド返ってくればそれでいいんじゃないか？」

「約束、忘れるなよ？」

「うぐー！わかつとるわい！」

ロクロウと賭けをしているマギルウ、フラグである

↳

その後ベルベット達はアイゼンを追うべくもう一度ノーグ湿原を抜け、ブルナーク台地に向かった。道中マギルウがベルベットを味がわからないことについて煽ったためお礼にサレトーマの花をねじ込まれたのはまた別の話。ロウライネの近くにやってきたベルベット達は塔近くに設営された聖寮の野営地にアイゼンとその周りに倒れている対魔士達を見つけ、走っていく

「アイゼン！」

「船の連中にサレトーマは飲ませたか？」

「うん！」

「そうか。例を言う」

アイゼンがライファイセツトに確認をとっている間にロクロウが倒れている対魔士の傍で片膝を着き、様態を見る

「この兵士は、おまえがやったのか？死んではいないようだが」

「俺が来た時にはこうなっていた。ザビーダの野郎だろう」

「一人も殺さない流儀・・・か」

「聖寮は、よほどザビーダを捕まえたいらしいな」

「だが、あいつも罨だとわかつている。わからんのは、俺を巻き込んだ理由だ。手を組む気がないなら、アイフリードの存在をほのめかす必要はない」

「罨と知ってて、なぜ行くのですか？」

エレノアがアイゼンに聞く、アイゼンは振り向きざまに返す

「確かめるためだ。アイフリードは、死神の呪いを解く方法を見つけようと躍起になっていた俺に言った。『無駄なことはやめろ。呪いの力をもって生まれたなら、呪いごとお前だろう。自分の意志で舵を切れば、死神だって立派な生きる流儀になるはずだ』・・・ってな。だから、俺はバンエルティアに乗った」

「生きる流儀・・・」

「例え、アイフリードが殺されたとしても、それがあいつの意志の——流儀の果てならそれでいい」

「・・・」

アイゼンが己の生き方とアイフリードの事を話すその近く、正確には天幕の陰でザビーダが聞き耳、というか盗み聞きをしている

「だが、あいつの流儀を踏みにじったとしたら、誰だろうが絶対に許さん」

アイゼン達の横から物音にベルベットが感づく

「誰だ!？」

先ほどから盗み聞きしていたザビーダが天幕の陰から歩いてくる。

アイゼンが盗み聞きしていた事に不満を口にする

「立ち聞きとは行儀が悪いな」

「内緒話なら、お家うちでやんたって」

「ザビーダ、アイゼン。一緒に行くことはできないの?」

「ケジメをつけなきゃ、手は組めん／ねえ」

ライファイセツトがなんとか協力できないかというお願いをアイゼンとザビーダは二人揃ってきっぱり断る

「ちっ・・・」

「ま、そういうこと」

舌打ちするアイゼンを余所にザビーダが塔の方へ向かって歩いていく

「わざわざ出てこんでもいいのに、訳のわからん奴じやのー」

「まったくね」

「」

ベルベット達は道中警戒しながら目的のロウライネの目の前にたどり着く。エレノアの話ではこの塔は元々古代文明の遺跡で聖寮が管理すると同時に対魔士の適正試験と共に聖隷術の訓練並びに聖隷の付与を行う施設となっている。因みに等級は適正試験の時に決定される。霊力の強弱で一等二等と決められ霊力は基本成長することなく一度二等と決められたらそこから動くことはない

「警備もおらぬとは罨丸出しじゃな」

「こつちが罨を警戒するのは織り込み済みなんですよ。その上でどんな手を打ってくるか・・・」

ベルベット達は塔の中へ入る。ロウライネの内部一階は水路があり水は青く淡く光り。仄かに当たりを照らしている。一行はそんなことは眼中になくアイフリードを探すため手早く階段を見つけ、上階に上がる。階段を上った所で光が差し込んだ場所を見つける、どうやら塔の中央は中抜きになっているようだ。その真ん中に誰かが磔にされている

「誰か縛られている？」

「もしかしたらアイフリードかもしれん。行くぞ」

ベルベットが人の姿を確認しアイゼンが確かめるべく一行は広場にでる。そこで磔にされている男は赤紫色のロングコートと海賊帽を着用している

「アイフリード・・・」

「あれが海賊アイフリード・・・」

アイゼンが言ったことでこの人物がアイフリードであることは確実のようだ。アイゼンが近づいてくるのに気付いたのかアイフリードが頭を上げる

「アイゼン・・・久しぶりだな・・・」

「・・・生きてたんなら、手紙くらいよこせ」

「くく・・・お前、男に手紙出したことあるのかよ？」

「ふっ・・・弟以外には一度もねえな」

「弟・・・ああ、そうだったな・・・」

アイフリードが答えた瞬間アイゼンの左拳が彼の腹にめり込む

(^U^)

「・・・なぜだ・・・アイゼン・・・？」

「俺に弟はいねえんだよ」

アイゼンの拳が離れた瞬間アイフリードの体は透けて消えていった。その後方でベルベット達は驚く、もつとも別の意味でだが。アイゼンが後ろに顔を向ける

「下手な幻覚は——．．．!!!」

アイゼンが攻撃しようとした手が止まりその顔が驚愕へと変わる。そこにいたのは少女だった、さしていた傘を畳むとアイゼンと同じ髪色、白と黄色のワンピース．．．肩紐は片っぽずれているが．．．傘を畳んで伏せていた顔をアイゼンに見せようとした瞬間。その横顔を緑色の弾丸が当たり、少女が跳ね飛ぶ。アイゼンが驚くなかその少女の姿は先ほどのアイフリードと同じく消えるが、今度は対魔士が使役する聖隷の姿に変わる

「うう．．．」

弾丸が飛んできた方向にはザビーダが窓から身を乗り出し銃を構えていた

「囷役、助かったぜ！副長！」

ザビーダが窓から飛び降り床に着地する

「ザビーダ」

「出てきやがれ、ジジイ！」

ザビーダが声を荒げる先にメルキオルが現れる

「メルキオル様．．．」

エレノアが声を上げる最中倒れた聖隷を回収するメルキオル

「儂の二重幻術を破るとはな」

「二度も同じ手食うほどマヌケじゃねえんだよ」

「．．．以前逃がしたのは失策だった。今回はそうはいかんぞ」

メルキオルはその言葉を皮切りに自らの体から三体の聖隷を出す、ベルベット達が各々の武器を手に構える。メルキオルの出した聖隷のそのうちの一体は先ほどザビーダが撃ち抜いた聖隷だろう、様子がおかしい

「ううっ．．．私は、なぜここに．．．？」

「意思が戻った．．．あれ」の力か」

メルキオルがザビーダの持っている遺物を見るが直ぐに視線を外し手を打ち合わせ、その間から黒い塊を作り出しそれを意思が戻った聖隷に打ち込む。撃ち込まれた聖隷から蝕まれるように黒い何かがあふれ出す

「うわあああつ!!」

聖隷の悲痛な叫び声も空しく聖隷の体が黒一色になり次の瞬間、ドラゴンに変わり果てる

「聖隷を業魔に!」

「まさかそんな!」

ベルベットとエレノアが驚きの声を上げる中残りの二体の聖隷も先ほどと同じく黒い何かに蝕まれていく

「ぐあつ・・・!」

「ううっ・・・!」

その後ろでメルキオルは眉一つ動かすことなく消え、残った二体もドラゴンに変わる。三体の業魔となった聖隷達はベルベットの上空を飛び回る。メルキオルは広場の出入り口に姿を現す

「死神の力が連鎖させたか・・・大した負の影響力だ」

その言葉を最後に広場から出ていく

「逃がすかよ!!」

ザビータはメルキオルを逃がすまいと追いかける

「ワイバーンが来るぞよ!」

マギルウの声に呼応しベルベット達は武器を構えなおし対峙する。ワイバーン達は一斉に向かってくる

「対魔士が業魔を生み出すなんて・・・」

「相手はドラゴンだぞ!悩むのは後にしろ!後手に回ったら潰される!」

動揺するエレノアの横をロクロウが小太刀を構え走り抜ける

「今はこいつらを始末しないと!」

「そういうことじゃ。このまま美味しく頂かれるわけにはいかん!」

「ここで立ち止まってちゃいけない!」

ベルベットもロクロウに続いて走り出す後ろにマギルウとライフィセットが聖隷術を唱え始める

「対魔士なら業魔を倒すのが使命だろ。こいつらはもう聖隷じゃない!覚悟を決めろ!」

アイゼンがワイバーンの噛みつきを避けたと同時に横顔に拳を叩

き込む

「ッ……!!」

エレノアは意を決し槍を構えて術を唱え槍を前に突き出し氷の針を繰り出す

「描け蒼穹、霊槍・氷刃！」

く

ベルベット達とザビーダが塔の内部でやりあっている中、その一角で電流が流れ始める。その流れは大きくなりあたり一面を閃光が包み込む。やがてそれも収まり電流が収まったと同時にその中心にケンの姿があった

「ここは……どこなんだろう。元の世界に帰ってこれたことは間違いないんだけど」

ケンは辺りを見回し状況を確認する。部屋一面石畳と壁、とか四方八方壁に囲まれている。暗くないのは部屋の両脇に流れる水路の水が光っているからである。周りの壁や床を触れながら出口を探していると左目に画面が現れる

「そうだ、早速こいつの機能を試してみるか」

左目から長い文字列が流れ始めそれが数秒で終わり直ぐに分析が始まる。ケンはそれが終わる間部屋全体を見回す

「ん……？なんだあれ？」

部屋の真ん中に古く痛んでは豪華な装飾がされた大きな箱が置いてあった。ケンは警戒しながら近づいていくと眼もその箱をロツクして分析に入る、が箱の素材は金属でできていることは分かったが肝心の中身はX線とγ線の透視もできず、結局UNKNOWNとしか表示されなかった。ケンはこの箱の前でどうするか思索している

「どうしよう。箱についても気になるけどまずはベルベットさん達と合流しないと、あの人たちは近くに送ると言っていたからこの建物内にいるはず……これが隠し扉かでも天井に？」

眼の分析が終わり箱の反対側の天井に空間があることがわかり一安心する。だが問題がまだある

「だけど壊すわけにもいかない。一見古い物みたいだし崩れるかもし

れないし・・・となると、仕掛けで開くのかな？」

一通り壁を触り反対側にある箱に目をやる、その瞬間上から衝撃と衝突音が響く。目がマーカーを表示する小さい物が6つと大きい物が3つ、かなり激しく動いている。更に解析したのか丸いマーカーが人とドラゴンの形に変わる、その形に見覚えがある、ベルベット達だ「居た！よかった、無事だったんだ。こうしてはいられない」

ケンはベルベット達の元へ急ぐため箱に手をかける

「・・・ええい！一か八か！」

両目を閉じて意を決したケンが蓋を押し開ける。が、なにも何も起こらない。恐る恐る目を開けると目の前に淡く光る小さな光の塊があった

「な、なんだ・・・これ」

ケンはその光の塊を両手で静かに添えて抱え上げるが程なくして光が霧散して消えてなくなる。同じタイミングで後ろの天井が開くと同時に壁が階段状に分かれ出口が現れる、ケンは自分の手を見る

「一体あれは何だったんだろうか、あれ」

そこまで喋りながらも頭を切り替え空間へ出る。ケンが出るとまるで見計らったと同時に床が閉じ出口を塞いだ。この出来事に疑問符を浮かべるが前方に気配を感じ直ぐに警戒する。そこには聖主の御座で相對したメルキオルが走ってきた

「あなたは！」

「ぬっ・・・貴様、生きていたのか。あれだけやられながらも死なぬとは、誤算だったか」

「待ちやがれ！クソジジイ!!」

メルキオルの後ろからザビーダが走って追い付くとケンの存在に気づく

「お、おめえは！」

「ザビーダさんまで」

ケンとザビーダに挟まれる形になったメルキオル、お互い十メートル間隔で動けなくなる

「グッドタイミングだぜ。俺はそのじいさんに用があるんだが聞く耳

持たなくてな。ちと乱暴だが無理やりとつ捕まえて話をしようと思ってるんだ」

ザビーダはペンデュラムを構えて臨戦態勢だ。ケンはザビーダの思惑は依然聞いていたので答えずとも目で合図する

「一匹狼だったと思っていたが他人に協力を求めるとは」

「そいつは別だぜジジイ。あいつと俺の流儀はある程度一致しているからな、それにマジな命のやり取りだったら俺は此処にはいねえ。準備はいいか!? 兄ちゃん!」

「はい、いつでも」

ケンも両手を上げザビーダと前後から近づく、メルキオルはその場から動かず抵抗する素振りを見せない

「ふん。殺るなら好きにするがいい、それで貴様の気が済むのならな。だが儂を殺せばアイフリードの居場所は永遠にわからんぞ」

ケンが目の前まで行き後ろでに両手を捻り上げる。ザビーダがペンデュラムを操りながら近づく

「ああそうだろうな、だが殺りはしねえ。俺はケンカ屋だ、方法は他にもある」

ケンと変わりメルキオルを縛るザビーダ、銃口を後頭部に当てながら階段の方へ向かう

「あんがとよ兄ちゃん。おめえのお仲間ならこの上だ、来るか?」
「ええ」

ザビーダと並んで歩きだし階段を上り始める

「ふふふ・・・」

その様子にメルキオルは不敵な笑みを浮かべた

、

それから少しして元の広場に戻ってきた三人は目の前の状況を見る。そこにはベルベット達が三体のワイバーンを片付けた所だ

(よかった、みんないる。あれ? エレノアさん一緒なんだ)

「策士策に溺れるってやつだな、ジジイ。これでテメエもしまいだ」

ケンはワイバーンの方を見る。あれも聖隷が穢れを取り込んだの成れの果てと思うと心が痛んだ。その横でメルキオルが不敵な笑み

を浮かべる

「溺れたのはどっちかな」

「なに？」

ワイバーン三体の内一体が首を上げてまだ戦おうとするがアイゼンとベルベットがすぐに動き出すアイゼンが顔面を殴りつけベルベットが業魔手で喰らおうと振りかざす。殴られたワイバーンの目とケンの目が合う。ケンには第6感というものは無いがワイバーンの目には僅かに穢れに抗おうとしているようにも見えた

「まだ・・・間に合うかもしれない」

小さく呟いた横でザビーダがメルキオルからペンデュラムを離し跳躍、ベルベットに向かって振りかぶる。ペンデュラムがベルベットの手を弾く

「貴様は行かなくてよいのか」

「・・・!!」

自由になったメルキオルが余裕の表情でケンを見据える。ケンはメルキオルを代わりに捕まえておこうとするが業魔となった聖隷をなんとかできるかもしれないという事態に板挟みになり何度もベルベット達とメルキオルを見返す。

「あんたどういうつもりよ！」

「黙れ！」

ベルベットは業魔手を横なぎに振り払うがザビーダは屈んで躲す、次に刺突刃で切り上げて断ち切ろうと振り上げるも半身になって避けるザビーダ、お返しにがら空きの左に蹴りを放つ、ベルベットは業魔手で防ぐがバランスを崩したところでペンデュラムを繰り出しベルベットの足を払い、倒れこんだ所にペンデュラム跳ね上げて吹き飛ばす。空いた右手で銃口をワイバーン達に向け発砲する。撃ち込まれたワイバーンは持ち直したのか翼を広げ飛び立とうと舞い上がる

「レジェンドワイバーンを助けた？」

ライフィセットがベルベットを助け起こす横でエレノアはザビーダの行動に戸惑う中ザビーダが怒りを露にする

「あつさり殺そうとしやがって！それが、てめえらの流儀かよ!!!」

「素晴らしい。『ジークフリート』——まさに求めていた力だ」

メルキオルがザビーダの後ろから姿を現し手を打ち合わせる。先ほどとは違い緑色の光の線がジークフリートに隅々まで照射される
「なに!？」

ザビーダが気付き後ろを振り返るが瞬時に姿を消し広場の入り口に現れる

「目的は達した」

メルキオルはそれを最後に立ち去る

「何をしやがった!!待ちやがれ!!」

ザビーダがメルキオルを追って走り出す。アイゼンがザビーダ達を追うべく声を上げる

「奴らを追うぞー!」

ベルベツト達も走り出す

ベルベツト達が地上へ階段を下りているころケンは一人塔の階段を上っていた。ケンの横で三体のワイバーンが塔から出るべく高度を上げる

「くっ!急がなければ!!ベルベツトさん達に合うのももう少し先か!」

ケンは足を速め、塔の頂上に着く。僅かに息を切らし中央の穴を見るそこから三体のワイバーンが飛び立とうとしていた。ケンは僅かに悩み、意を決して走り出す

「手荒なことしてしまうが許してください!」

思い切り飛び上がり両腕で横からワイバーン達の首根っこを捕まえて塔の外側まで飛び越える。ワイバーン達の叫び声が響いたがそれも徐々に薄れていき最後には風の音だけが残った

第22話 終わり

第23話

「ちっ、ジジイのくせに逃げ足が速え……」

一足先に追いかけたザビーダが外で悪態をつく後ろで後から追ってきたベルベツト達が追い付く

「無事だったんだね。ザビーダ……」

「俺はな。だが——」

ライファイセツトが走り寄る中ザビーダがジークフリートを見つめる

「あいつ、それ〴〵にこだわってたみたいね。特等対魔士が本気を出せば、奪うことだってできたはずだけど」

ベルベツトが疑問を呈するとマギルウが口を開く

「奪う必要はない。それに秘められた術式さえ読み解ければの」

マギルウに皆の視線が集中する、そのまま彼女は続ける

「瞬きするほどの間に、術の仕組みを読み取る術がある。あやつの得意技じゃ」

そこまで言うとう手を後ろ手に組む。エレノアは何かに気づいたようだ

「退く時に目的は達したと言っていました」

「用途はようと知れぬが、別大陸よりもたらされた未知の技術を、聖寮は必要としておるのじやろう」

一杯食わされたザビーダが舌打ちをし、声を荒げる

「ちっ！ だったら、その用途とやらをぶっ潰すまでだ！」

「一つだけ聞かせろ。なぜ、ジークフリートを持つてる？」

そのザビーダにアイゼンが近づき以前から聞きたかった質問をするとザビーダが先ほどの激昂から打って変わって静かに話し出す

「……『頼む』って渡されたんだよ。対魔士部隊に使役されてアイフリード捕獲作戦に駆り出された時にな」

「ザビーダも、使役聖隷だったの？」

「ああ。カノヌシの領域で無理矢理意思を抑えつけられてた。だが、

アイフリードが撃ったこの一撃で目が覚めたんだ。そっからのアイフリードとのケンカは最高だった」

ライファイセツトはザビーダが自分と同じ境遇であったことに少し驚く中。ジークフリート取り出す。その表情は楽しそうだ

「あいつ、人間のクセにやたら強くてよ・・・魂が震えたぜ」

アイゼンもいつもの固い表情はなくどこことなく笑顔だ

「なのに、ジジイが幻術で割り込んで、アイフリードをさらっていきやがった。気にいらねえんだよ！人の意志に小細工しやがって」

メルキオルの乱入に怒りを露にするザビーダの後ろで今まで聞いていたロククロウが質問する

「なぜジークフリートではなく、アイフリードを連れ去ったんだ？」

「探してるお宝がジークフリートだと知らなかったんだろうよ。その時はな、狙いに気づいたアイフリードは、連れ去られる直前、ジジイの目を盗んで俺に寄越したんだ」

「・・・」

「これが俺の知ってる全部だ。信じようが信じまいが勝手だがな」

「なら、いい」

「は？いいってお前」

アイゼンのあつさりな対応に唾然とするザビーダに背中を向け数歩歩き立ち止まる

「アイフリードは、信じた相手にしか『頼む』と言わん」

「・・・そうかよ」

「お前、これからどうするつもりだ？」

「捜すさ、アイフリードを。こいつを返して、あの時のケリをつける」
「けど、残された時間はあまりなさそうね」

「察するに、メルキオルは、さっきまでジークフリートの正体を知らなんだ。それはすなわち、アイフリードから何も聞き出せなかったことの証じゃ」

ベルベットが腕組みしながら思案する横でマギルウも同じように腕を組む

「その必要が無くなった今、アイフリードを生かしておく必要は・・・」

ない」

「・・・」

「わかってんだよ、んなこたあ!」

「アイフリードを救うというのなら、共に戦えばいいじゃないですか」

エレノアが共闘を持ち掛けるも、ザビーダはそれを拒否する

「・・・てめえらとは手は組めねえな」

「どうして?」

「てめえらは、目的のためなら『殺せる』」

「!!」

「生憎、俺はケンカ屋でな。殺し屋じゃねえんだよ、どんな命も奪わねえ。そいつが俺の『流儀』さ」

主義主張が相反するものが一緒にいてもいずれ反発し合い。誤解するだけ、それをわかってザビーダは拒否する。そこにアイゼンが口を挟む

「・・・俺も、海賊の流儀を変える気はない」

「・・・そうかい・・・まあ、あんたらのお仲間が頼んでくれたらちつたあ考えたんだがな」

「お仲間?」

ザビーダのこぼした言葉にライフィセットが反応する

「ん?なんだよ。てつきり別行動をとってたと思ってたぜ。ガタイのいい兄ちゃんとロウライネの中でばったりな」

ケンと会ったことに皆が驚く、ライフィセットが駆け寄り詳しく聞いてくる

「お願いザビーダ!ケンはどこに行ったの!?!」

「ああ、逃げてきたジジイをしょっ引いてくるときに手を貸してもらったのさ。入口の所でよ。んで、一緒にお前たちの所まで来たんだが・・・」

ザビーダはそこまで話すとベルベットに顔を向ける

「あたしが喰らおうとしてそれを止めにメルキオルから手を離れた・・・ってわけね」

「だがそれじゃメルキオルが逃げれるとは限らん、お前が止めに入つたとしても代わりにケンが見ているはずだからな」

ロクロウが顎に手をやり考える。アイゼンがロウライネの塔を見ながらぼやく

「もしかすれば、まだ中にいるのかもしれん。だが、塔の中ですれ違つたとは考えにくい。あいつの性格を考えるとしたら・・・」

「まさか、ワイバーンを追いかけていったと言うんですか!？」

エレノアが驚きの声を上げる。塔の入り口を見ていたアイゼンが一瞬ベルベットと目を合わせすぐさま顔を上げて塔を見上げる

「あいつがワイバーンに気にもかけなければそのまま俺達と合流してここにいるはずだ。だが、それを声もかけずに行ってしまうのなら、あいつなりに思い立った事があるんだろう」

「ともかく、ケンが生きていた事はわかった。それでどうする？追いかけるか」

ロクロウがアイゼンと同じように塔を見上げるなか、マギルウが気怠そうに独り言ちる

「うええくまた上るのかえ？もう儂はくたくたじゃしここで待っててええかのく・・・」

「そう固いこと言うなよマギルウ。だが約束の10ガルド忘れるなよ」

「ひくん、大赤字じゃく・・・」

ロクロウとの賭けに負け泣いているマギルウを他所にベルベット達が塔へ入ろうとした時ライフィセットがふと立ち止まり疑問に思つたベルベットが声を掛ける

「どうしたのライフィセット?」

「・・・なんか声が聞こえない?上の方から・・・」

ライフィセットの言葉に従い全員が上を向くと塔の壁を縫うように黒い点が落ちてくる。だがその黒い点は徐々に大きくなり輪郭が露になるとそれは吠えながらなんとか逃げようともがくワイバーン3体を首根っこを両腕で万力のように掴んで離さないケンの姿だった

「うおお!?ケンの奴、意外に大胆だな!」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ!!まったく何考えてんのよあのバカ!」

「どど、どうしよう!」

「このままじゃ地面に激突して・・・!」

「そしたら赤い花が咲くのくピンク色のコントラストの」

「・・・それ言っている場合か・・・?」

約二人を除いて慌てふためいている中ザビーダが飛び出し聖隷術で突風を巻き起こす

「たくよお!これで貸し一つだぜ!!」

「ありがとうございます!」

ザビーダの突風で落下速度が落ち始めケンも体勢を整え荒く着地する。ケンは片膝を着きワイバーンを抑えながらベルベット達と顔を合わせ報告する

「すいません。ただいま戻りました」

「あんたねえ・・・すいませんじゃないでしょ!あんな真似して死んだらどうするのよ!」

「す、すいません・・・これしか考える時間がなくて・・・」

ベルベットに怒鳴られ萎縮しているケンにロクロウが彼が抑えているワイバーンを見る

「こいつらをどうするんだ。わざわざ捕まえて止めを刺すわけでもないだろう」

「はい、自分に考えがありました一緒に・・・」

「考えてなんだよ兄ちゃん?」

ザビーダがベルベット達の後ろから話しかける

「自分の持つ技を使えばもしかしたらこの人達を元に戻せるかもしれない」

「ドラゴンになった聖隷を、ですか!」

エレノアが前に出てケンに掴まれているワイバーンを見る

「でも一度ドラゴンになってしまった聖隷はもう元には戻れないって・・・」

「そうだ。ケン、俺もドラゴンになった奴が元通りになった、なんてのは聞いたことも見たことがない。見捨てられないのは分かるがな」

ライファイセットが悲しそうな顔を浮かべ、アイゼンは表情を変えることはないがケンに諦めるように諭すように話す

「はい、わかっています。ですが何もしいまま逃がすことも、命を奪うこともしたくないのです。止めを刺すなら手を尽くした後、自分の手で始末します」

「・・・」

ケンの目を見ながら暫く黙っていたアイゼンは観念したのか後ろを向く

「・・・わかった。そこまで言うならやってみろ」

「ありがとうございます」

「兄ちゃん・・・おめえホントにできんのか？元に戻すことがよ」

「最善を尽くします、ですがその前にこの人たちに手荒なことをしてしまうことを許してください」

「・・・ああ、いいぜ・・・」

ザビエダの了解を得てケンは両腕に力をこめワイバーンの首を締めあげる。ワイバーンから絞り上げるような声が一瞬響いて気を失う。ケンは優しく頭を地面に置き数歩離れる

「ベルベットさん、実はあなたの力をお借りしたいのです」

「あたしを？」

「自分が今から使う技でこの人たちから穢れを引き離します。その穢れをあなたの手で」

「穢れを・・・引き離す？」

ケンは右手を腰の所で構え光線の準備をする

「自分の使うこの技ではあくまで引き離すのが精一杯なのです。ベルベットさんにはその取り除いた穢れの始末をお願いしたいのです」

「・・・わかったわ。穢れの方は任せなさい」

了解を得たケンが右手に集中させたエネルギーをワイバーンに向かって放つ。コスモスの技の一つ、ルナエキストラクトがワイバーンに当たり体から光を放ち始める

「うわぁ・・・」

「これは初めて見る技だな」

ライファイセットの横でロクロウは感心したように腰に手をやって様子を見ている。数秒ほどしてケンが突き出した右手を今度は逆方向に引つ張り始め、光の中からドス黒い塊が徐々に引つ張り出されていく

「あれがメルキオルが打ち込んだ穢れか」

「凄い・・・」

「マグロの一本釣りならぬ穢れの一本釣りとはあやつもやりおるの
〜」

「ベルベツトさん、もうすぐです。用意を」

「わかったわ」

お互いに合図を交わしケンが一気に引つ張り上げワイバーンから穢れを引き離す。

「はぁ!!」

ベルベツトが素早く業魔手で穢れを掴み上げ呑み込む。するとワイバーンは形を失い徐々に元の聖隸の姿に戻っていった。

「本当に戻った!!」

「ライファイセット、お願いできるかな?」

「うん!」

ケンがライファイセットに合図しすぐ様倒れた聖隸に駆け寄り聖隸術を発動する

「ケン」

声を掛けられた彼がみんなの方を向くとロクロウがケンの胸に拳を当てる

「よく戻ったな」

「・・・ええ、すいません。心配をおかけしまして」

「構わんき。なっアイゼン」

「ああ」

アイゼンもケンの肩をすれ違い様に二回叩き倒れている聖隸の方へ向かう。そこへマガイルウがケンの足を小突く

「こりやーケン！なんで生きとつたんじやー！」

「？、自分が生きてたらまずかったですか？」

「そーじゃ、御座から逃げて来た時にベルベットにロクロウと10ガルド賭けをしたのじゃ。だがあやつは生きとつてロクロウに10ガルド巻き上げられた拳句お主まで帰つてきたお陰でさーらーに10ガルドじゃぞ?!全部で20ガルドじゃー!この代償、諸々ツケて払ってもらうからの〜！」

「え、まあ10ガルドなら補填しますけど諸々ツケも自分が払うんですか？」

ケン は身に覚えのない請求に困惑するなかザビーダが近づいて来る

「おめえすげえよ。まさかドラゴンを元の聖隷に戻すなんてよ」

「いえ、あくまで元を取り除いただけです。あの人達が変わった時間が短かったのも幸運でした」

「・・・あれ以外にも出来んのか？」

「消耗が激しいですが、出来ます」

「なら・・・いや、今はやめとくぜ」

ケンの話を聞いたザビーダは目線をずらし何か話そうとしたが打ち切る。その横で無視するでなーい!!とケンに駄々っ子パンチをかます哀愁漂うマギルウの姿があった

「ケンー！」

「どうしたんだいライフイセット？」

「こつちに来て見て欲しいんだ！」

ライフイセットに呼ばれたケンはザビーダと目を合わせる。ザビーダは顎をしゃくって一緒にそちらに向かう。なおマギルウは肩で息をして疲労困憊の様子だった

「何か問題が？」

「ああ、お前が穢れを取り除いたおかげで聖隷に戻れたが・・・」

アイゼンがそこまで言つて聖隷の方を見る、その身体からは黒い塵のような物が発せられている

「これは」

「大元を取り出した残りの様な物だな、これを放置すればまたドラゴンになるかもしれん。早いうちに対処しなければならん」

「ライファイセットやアイゼンみたいに器があればいいんじゃないの？」

ベルベットの提案にアイゼンか硬い表情のまま顔を横に振る

「いや、この状態になって器を用意しても無駄だ」

「それではこの人たちは・・・」

「ああ、いずれな」

エレノアの落ち込みアイゼンが残酷な宣告をする。そこでふとケンは己の両手のひらを見、あの言葉を思い出す

それは浄化の力、役に立つはずだ

(ルシフェルさんはあの時浄化の力と言っていた・・・もしかしたら) ケンは手のひらに意識を集中しあの時の感覚を思い出す。そうすると手のひらから碧がかった光が溢れだす

「ケン、お前の手どうしたんだ？やけに光ってるが」

「これを試してみます」

ロクロウがケンの手のひらに僅かに驚くも興味深そうに見ている

「それ、なに？」

「ある人からの数少ない貰い物の内の一つだよ」

ライファイセットの目の前で聖隷の体の上から手を翳し光りを当てる、そこから頭から足先までなぞると黒い塵は完全になくなっていった、そして直ぐに他の聖隷にも同様に光を当て穢れを払う

「ふう、これで大丈夫かな」

「あんた何でもできるのね」

「いえ、少人数で精一杯です。これが大規模なろうものならとてもじゃありませんが・・・」

ベルベットが腕を組みながら浄化した聖隷を見る

「さて、で、この聖隷はどうする？連れてくか？」

ロクロウがアイゼンの顔を見ながら話す、アイゼンは横目でそちらを見るが直ぐに視線を外す

「いや、今の状態で船に乗せたとしてもかえって足手まといだ。」

「ならこのままここに置いていくのですか!？」

アイゼンを咎めるエレノアの後ろにいたザビーダが声を上げる
「俺が連れてく、取り合えず人が来ない場所ならいくらでも知ってるからよ」

「いいの? あたし達とは組まないんじゃないの?」

「てめえらとは組んだ覚えはねえし組もうとも思わねえ。だがその兄ちゃんなら別だ、お前の頼みなら聞いてやってもいいぜ。ただし、聞いたら貸し二つだ」

ザビーダはケンの方を見る。ケンは表情を僅かに緩ませる

「どんどん貸しが増えていきますね。これは早々に返さないと、お願いできますか?」

「よし、これで貸し二つだ。んじや、またどつかでな」

ザビーダが意識を失っている聖隷達に近づき一緒に風となって消えた

ザビーダが去った後ケンと合流したベルベット達は目的を終え、バンエルティア号の待つレニード港へと戻る為帰路につく。

「そうだ、ねえケン」

「ん? どうしたんだいライファイセット?」

「はいこれ」

ライファイセットは懐からサレトーマの花を取り出す

「これは?」

「サレトーマの花だ。その絞り汁を飲め、乗組員の中から懐賊病が出たからな、予め飲んでおけば予防できる」

ケンはアイゼンの説明に歩きながら花を観察する。相も変わらず毒々しい紫色の花弁と枯れているのかと思わせる茶色の茎と葉のクツソ汚いコントラストの花だ

「だが気を付けろ、その絞り汁は凄まじく不味いみたいだ。ここに来る前エレノアもそれを飲んでぶっ倒れたからな」

ロクロウは笑いながら後ろを歩いているエレノアの方へ振り替える

「ちよつ・・・ちよつとロクロウ！」

「おつと、すまんすまん」

「エレノアさんが倒れるぐらいのもの、ですか。これは厄介そうですね」

二人の様子を見ながら花を握りつぶしそこから出てきた花汁を飲み込む。何とも言えない、ただ言えることは日常生活では絶対に味わうことはない不快な味が口の中で広がる

「うくん・・・これは中々・・・できればもう口に入れたくないですね・・・」
「病気で苦しむよりはマシでしょ、我慢しなさい」

顔をしかめるケンの半歩先を歩くベルベットが肩をすくめる様子を見ながらエレノアがライファイセットに近づき、気になったあることを質問する

「・・・あの、ライファイセット。ひとつ訊いてもいいですか？」
「なに？」

「メルキオル様の幻術で現れた傘の女の子・・・あの子は、アイゼンとどういう関係なのでしょう？アイゼンには、直接聞ける雰囲気ではなくて」

「わかんない。僕も気になってただけど・・・でも、かわいい感じの子だったよね」

その言葉を言った瞬間マガルウが目を光らせいつの間にか二人の後ろにいた

「ほっほうっ♪坊は、ああいうちよつとすましたキレカワ系がタイプだったのかえ？」

「そうだったのか？俺は、てつきりベル——」

「うわあ、やめてー！」
ロクロウが言いかけた時ライファイセットがすかさず止めるもベルベットに気づかれる

「どうしたの？」

「ちよいとデリケートな話をしとったんじゃよ。具体的にいうと、坊の初恋相手について」
「へえ」

「違うつてば！幻術で現れた傘の女の子は誰かって話だよ」

「傘の子か・・・あのアイゼンが虚を突かれ動きを止めた。よつぽと大切な人なんでしょうね」

「じゃな。しかも、かなり複雑で深い関係と見た！」

「おいおい・・・」

マギルウの推測にロクロウがあきれ返る。そこにエレノアが加わる

「つまり・・・別れたくても離れられない奥方？もしくは清算不可能な愛人？」

「極端過ぎるだろ・・・ていうか、若すぎる！」

「いやいや。勝手気ままな海賊にふさわしいのは、ボロクズのように捨てた、もしくは捨てられた偽りの名しか知らぬ女との間にできた娘とか！」

そこにベルベットも入る

「実は、結ばれなかった初恋相手が亡くなって、その娘を、なにも言わずに引き取った可能性も・・・」

「それなら、お互い別の人と結婚した後、真の恋心に気づいてしまった幼馴染み・・・とか！」

どこぞの昼ドラめいた展開のような推測で女性陣が盛り上がる

「・・・こいつら、どんな恋愛観してるんだ？ライファイセット、とにかく女には気を付けるよ」

「・・・うん」

ライファイセットは力強く頷いた

(こういう話はこの世界も変わらない・・・か)

女性陣の前を歩くケンは一瞬だけため息をつきながらそう考えた

）

レニード港へ着いたベルベット達はバンエルティア号に近づくと波止場にいたベンウィックが気付いて走ってくる

「副長、無事だったんですね！」

「心配かけたな」

「船長の件は・・・」

「やはり偽者だった。だが、アイフリードはまだ生きています」
「あつたりまえですよ！」

「残された時間は多くはないがの」
だがそこにわざわざマギルウはアイゼンとベンウィックの間を通り抜ける

「どういうことだよ？」

「焦るな。事情は後で話す」

「アイゼンも・・・」

そのすぐ後ろでライフィセットが声をかけアイゼンが振り向く

「あ・・・焦らないでね」

「・・・」

アイゼンはその言葉に表情を僅かに緩ませると直ぐに頭を切り替え、ベンウィック達に号令をかける

「全員サレトーマは飲んだな」

「もちろん！」

「くたばった奴は、いねえだろうな」

「みんな生きてますよ」

「副長の呪いに比べたら、壊賊病なんてチョロいもんさ！」

「よし、出港準備に取り掛かれ」

「とつくに終わってますぜ！」

「いつでも出られるっての！」

「ふっ・・・」

船員たちの用意周到さにアイゼンは笑みをこぼす

「あともう一つある、ケンと合流した」

ベンウィックはアイゼンの後ろを見るとケンがいた

「おうおうケン！生きてたのか！」

「すいません、遅くなりました」

ベンウィックが駆け寄りケンの胸を軽くたたく

「まったくよ、心配したぜ？血翹蝶と一緒にローグレス中探したのに見つけれなかったから、てっきりくたばってたのかと思ったぜ。で、副長たちに会うまで何処にいたんだ？」

「あくそれは、その・・・」

ケンが言葉を詰まらせるとベンウィックが察する

「ま、いいさ。言えないことなんて誰だってあるさ。よし！休んでた分仕事してもらおうぜ！」

「はい、わかりました」

ベンウィックはケンの首に腕を回し他の船員と一緒に船に向かい、アイゼンもそれに続く

「海賊の流儀、か」

「悪くはないのー」

ベルベットの言葉にマギルウも一応の賛同をし共に船へと向かう中エレノアは一人、神妙な表情を浮かべていた

「・・・」

）

バンエルティア号は本来の目的地であるイズルトへと進んでいる中一仕事終えた乗組員は暫しの休息をとっている。ケンは船底の倉庫で上半身ボディスーツ姿で遅れた分を取り戻すためにパンチョンタイプの500リットル満タンの樽を二つ括り付け、それを片腕で一つづつ抱え上げながらスクワットと重量挙げを同時にこなして鍛錬をしていた。

「フッ!!フッ!!」

規則正しい呼吸音と同時に樽が上下に持ち上がる光景は何かとシニールであったが彼の後ろで足音が響き、ケンは手を止める。彼が後ろを向くとそこにはエレノアが立っていた

「あれ？エレノアさん、どうしました。自分の声うるさかったですか？」

「あ、いえーそのようなことは・・・」

エレノアは申し訳なさそうな表情を浮かべながら次の言葉を探している。ケンはその表情でエレノアの言いたいことを察して鍛錬を再開し言葉を続ける

「もしかしてっへラヴィーサやっ！ローグレスのっ！事ですかっ！」
「・・・」

何も言わないとなると凶星だろう

「自分はっ！特に何もっ！気にしていません・・・よっ！」

「ですが・・・！それでは！」

「あの時はっお互いにつ目的があったからっ！敵対することになったのですっ！」

途切れ途切れに語るケンにエレノアは反論する

「ですが、今は・・・」

手を止めて樽を抱えたままエレノアの方に向き直る

「今は違う、このように今は一緒に居る。それでいいではありませんか」

「でも、あの時私をかばって」

「ああ、あれはつい無意識にやってしまったんです。他意はありません、とにかくこの事はもうおしまいにしましょう」

それを聞いたエレノアはいつもの表情に戻る

「・・・わかりました！この事は終わりです」

エレノアが船底から出ようとしたときケンが声をかける

「あーあと、自分に対しては畏まらなくても大丈夫ですよ」

「え？あなたは私より年齢は上だと思って・・・」

「こう見えて自分17なんで・・・」

「へ・・・？」

そこまで言い終えたケンはエレノアに背を向けスクワットと重量挙げを再開した。エレノアは呆氣にとられながらも柔らかい表情で答えた

「・・・うん、わかったわ。ケン」

ケンの後ろ姿を見てエレノアは部屋を出た

(あと500回やってから休むか・・・)

ケンがそんなことを考えてた時、指を弾く音と共に周りの景色が止まる

「やあ、しばらくぶりだね」

「ルシフェルさん」

ケンの目の前にある荷物の木箱にルジフェルが足を組みながら

座っていた

「体の具合はどうだ？まっその様子だと何ともなさそうだな」

「ええ、大丈夫ですけど。あの人たちは」

ケンの問いにルシフェルが足を組み替えながら答える

「君の推測道理、あの者たちは此処とは全く別の次元にある科学者集団だ。すまない、君の了承なしで施術をしたからね」

「いえ、逆にあの時連れ出してもらえなかったらあそこで死んでいました」

「その左目、いけそうか？」

「ええ」

そこまで聞くとルシフェルが立ち上がる

「ならいい、ところで君に渡すものがある、今は手が空かないみたいだから君のリュックの中に入れておくよ」

「その渡すものとは一体？」

「実際見てみればわかる。あと伝えておくことが一つ、君の師が近々この世界に来る」

「師匠が!？」

ケンの驚く傍でルシフェルは木箱に寄り掛かる

「ああ、君の近況を報告したらえらくカンカンだったぞ？まっ、あれじゃ仕方ないか」

「・・・ええ、自分の力不足です」

「そう気を落とすな、君の事が心配だったのさ。じゃ、私は戻るよ、また来る」

「はい、ありがとうございます」

ルシフェルは指を弾き時が動き出す。ケンはルシフェルが居た場所から視線を外し、鍛錬を開始する

「師匠が来る・・・か、気を引き締めなければ」

ケンは静かに一人呟いた

く

第23話 終わり

第24話

あれから数日してサウスガンド領、イズルトに到着したバンエルティア号。船を波止場に着け、ベルベット達は棧橋を渡り、船員たちは物資の載せ替えの作業を始める

「マギルウ、例のグリモワールというのはどんな奴だ？」

ベンウィックと打ち合わせを済ませたアイゼンが例の人物の特徴を聞いたです

「端的に表すのであれば・・・」

頭に指を当てて思い出すしぐさをした後に

「ふう・・・はあ・・・あつそ・・・こんな感じじゃ」

「・・・全然わからん」

アイゼンの横にいたロクロウが抑揚のない声音で短く突っ込みを入れる。本人の声真似をしたのであろうがかなり特徴的で皆はどう反応すればいいかわからないようだ、マギルウは両手を上げてあきれ返る

「やれやれ・・・想像力の乏しいお主らに合わせて言う。グリモ姐さんは『アンニユイな有閑マダムの黄昏』・・・的な空気を纏ったオトナの女じゃ」

「ベルベットやエレノアとは違う感じの女の人ってこと・・・かな？」

ライファイセツトは考えながら後ろにいるベルベット達を振り返る

「ははは、違う。要するにオトナの女を捜せばいいんだな」

ロクロウが笑いながら余りに安直な言葉にアイゼンは呆れてため息をつく

「うん、捜すのは、オトナの女の人」

「名前がわかってるんだ。聞き込みで捜し出せるだろう」

「そういうことじゃのー♪」

ライファイセツトはおもむろにマギルウの方を向く。マギルウはそれに気づく

「なんじゃ、坊？」

「マギルウも大人の女の人でしょ。なのに、自分の気持ちを素直に出せないの?」

その発言に一瞬面くらったマギルウだが直ぐに表情を変え、はぐらかす。だがその笑顔はどことなく固い

「自分の気持ちか・・・生憎、当の昔に砕け散ってしまったのじゃよ。バリーン!グシャーン!っての♪」

「気持ちが砕けた・・・?」

ライファイセットがマギルウの言葉に疑問を感じている後ろにバンエルティア号からケンがやってくる

「お待たせしました。物資の運び出しは終わりました。あとはベンウィックさん達が済ませるそうです」

「そうか」

「そつちも終わったなら、町の連中に聞き込みよ」

ベルベットはそれを聞き皆に号令をかけ街の方へと歩き始めた

く

街に到着した一行はさつそく住人達にグリモワールについての聞き込みを開始する、が、いくら名前が判明しているとしても身体的特徴がなければ難航するのは目に見えている。搜索は思った通りうまくいかない。皆はそれぞれに分かれて情報を集めている。ケンは露店の店主に話しかける

「ごめんください。少しお尋ねしたいことが」

「おっ、なんだいガタイのいい兄ちゃん」

日焼けした気の高さそうな店主が陽気に返事をする

「実は人を捜しております。グリモワールという名の人を捜しているのです。連れの話ですとここにいますということなのですが、何か知りませんか?」

ケンの質問に店主は顎に手を当て思い出す仕草をする

「うくんグリモワールか・・・すまねえな。その事は心当たりはないんだ、ここサウスガンド領は見ての通り船と人が多いからな」

「そうですか・・・ありがとうございます」

ケンは店主に頭を下げた後。店を後にする

「ここもダメか・・・この分だと残りを当たっても駄目そうだな・・・ん？」

ケンは何ぼしい所はすべて聞き込みをしても情報が得られない事のため息を突こうとした時、人通りの中に亀の甲羅を背負っている人物が歩いてきた。ケンはその人物をよく知っている

「あれ？かめにんさん？」

「え？あ、あなたは！」

かめにんがケンに気づいて小走りで近づいてくる

「いやゝ暫くぶりっす！御座に行つたきり姿を見なかつたもんでちよつと心配したっすよ」

「まあ、紆余曲折ありましたけどなんとか。とその前に場所を変えましょう」

「へ？・・・あ！」

かめにんケンの後ろの方を見るとベルベット達が情報収集をしている姿が見えた

「そ、そうっすね」

「ええ、見つかったらまた通常料金で赤字になりますよ。さ」

かめにんを促し、二人は住宅の陰へと移動する

「どうですか商売の方は？」

「はいっす！手数料分はあなたに補填してもらって他のお客からの利益もあってかなり儲からせてもらってるっす」

「それはよかった。破産してたらこちらも何かと不便ですからね」

かめにんがにししと笑う横で表情を緩めるケン、そこにかめにんが何か気づいてケンに話しかける

「あっそうそう。あの時の投資の事なんすけど」

「そうでした。そちらの方は」

「うっす、あの資金を使って仲間と一緒に事業の拡大を進めてるっす。その際に出た利益をヘラヴィーサの復旧に当ててるっす、最初は怪しまれましたけど事業提携を結ぶ形でということにしたっす。今はまだ一部分しか援助できてないっすけどこれからどんどんでつかくしていくっすよ！」

かめにんの商売根性に火が付いたの炎のオーラをだすその横でケンは少し驚いている

「そうですか、それは何より。では自分はみんなの所に戻ります、あなたもベルベットさん達に見つからないように気を付けてくださいね」
「わかったつす。運営の方はお任せくださいつす！では！」

かめにんが手を振りながら人通りに紛れて消える。ケンもそれを見届けてベルベット達と合流しようと歩き出すと同時に、徐に懐から一つのペンダントを取り出す

「ルシフェルさんから渡されたものだけど・・・一体どんな効果があるんだろ」

ケンが握っているペンダントは宝石などの装飾はされておらず、すべて銀で出来ており彫金がかなり凝っている。ペンダントヘッドには騎士の装飾がされている

「・・・まあ、とりあえずベルベットさん達と合流しよう」

ペンダントを戻し皆の元へ向かう。ちようど全員集合していたようだ

「そつちはどうだった？何か情報は掴めた？」

「いえ、目ぼしいものはありませんでした」

ベルベットがケンに気づき収穫を聞くが、ケンは首を横に振る。一同は場所を変えて情報を纏めようと移動を始める

「グリモ姐さんの手掛かりは、さっぱりだな」

「あんたが受け取った手紙って、いつの話？」

「ごちるロククロウの後ろでベルベットがマギルウに手紙が届いた時期を聞く」

「さて、去年じゃったか、十年前じゃったか・・・」

「ふざけ続けるならサメのエサにするぞ」

「後生じゃ・・・せめてクラーケンのオヤツにしておくれ」

あまりにも適当な答えにアイゼンが脅しをかけるもマギルウは相も変わらず皆あきれ返る

「なんなら、あたしが喰らって——」

ベルベットがいら立ちながらふと前を見ると通りの向こうに二人

の対魔士が横切るのが見えるその二人はオスカーとテレサだった

「あいつはー」

ベルベットの声に反応して全員が住宅の陰に隠れる

「引き継ぎは、すべて済ませておきました。着任と同時に、あなたの指揮で皆が動けるように」

「助かります。でも、姉上の手際と比べられて、僕の至らなさが皆に知られてしまいそうだ」

テレサからしてみれば弟の負担を少しでも減らそうという配慮なのだろうが。オスカーからしてみれば自分がさぼっているように感じたのだろう、軽いジョークを飛ばす

「バカなことを。あなたには特別な力と素質がある、パラミデスの派遣も、アルトリウス様の期待があればこそです。臆せず、いつものあなたであればよいのです。自分の力を信じて」

「はい。しっかりと努めます、姉上」

建物の陰でベルベット達が聞き耳を立てる中、エレノアはある言葉は耳に止まる

(パラミデスへの派遣・・・この島に、そんな施設があったかしら?)

エレノアの表情にライファイセットが首をかしげる

「もう行かないと」

「道中お気をつけて」

テレサは出発するため歩き出すが五歩進んだところで立ち止まりオスカーの方を振り返る

「そうそう・・・ハリアの業魔には注意してください。思いのほか手強く、手負いの者も出ています」

「心得ました」

オスカーの返事にテレサは頷きまた歩き出すが今度は三步目で止まりまた振り返る

「それから・・・生水は飲まないように」

「姉上・・・」

さすがのオスカーも少し呆れている

「・・・おせっかいすぎますね。わかっているのですが、どうしても」

オスカーは強くうなづくのを見た後に、改めて歩き出す

「ハリアの業魔・・・派手に暴れてる業魔がいるみたいだな」

建物の陰で片膝を着いて身を隠していたロクロウが呟く

「事実なら、利用できるかも」

「それにしても、奇遇じゃのー。儂らがここに来たタイミングでオスカー参上とは」

反対側の建物に隠れていたマギルウが街道へと出たと同時にエレノアの方へと顔を向ける

「・・・私を疑うのはわかります。でも、証拠があるのですか？」

「証拠はない。でも対魔士のアんたは聖寮の“理”と繋がってる」

「儂らには仲間の繋がりはないがのー」

疑う根拠がそろっている状態で反論できないエレノアをライフィセットが擁護する

「・・・エレノアは、告げ口なんてしてないよ」

「どうかのー？お風呂に入る時も監視しとるのか？」

「「えっ!?!」」

マギルウの言葉にエレノアとライフィセットが反応するのは分かるがなぜかベルベットも声を上げる

「・・・お風呂の時は・・・僕、外にいるからわからない・・・けど・・・」

「その間に聖寮とコソコソ話をするくらいはできるといいうわけじゃろ」

マギルウの前をベルベットが通りエレノアの前に立つ

「死ぬまで従う約束だったわね？」

「・・・その通りです」

ベルベットとエレノアはお互いににらみ合う中ロクロウとアイゼンが割って入る

「お前たちが潰し合っても聖寮が喜ぶだけだぞ」

「やっかいな業魔と裏切り者が一度に片づく」

「もめてる間に、グリモ姐さんが暴れてる業魔に襲われるかも・・・」

そこにエレノアの後ろにいたケンも入る

「マギルウさんの推理も可能性は十分にありますが。内通できたとし

たら態々陸地で襲う必要が無いですし海上で戦艦を引き連れて沈めた方が圧倒的に楽でしょう。それに本当に此処にあの二人がいたのは偶然だったのかもしれない」

「ふむ」

ケンの発言にマギルウは僅かに不貞腐れる横でベルベツトが口を開く

「・・・確かにそうね。とりあえずこの話は後、行くわよ」

ベルベツト達が先に行くのを確認した後エレノアは大きなため息をついた

、

ベルベツト達は聞き込みをしながら街を散策していると土産屋であろう店にビエンフーそっくりの人形にライフェイスツトが興味を持ったのか店に駆け寄る

「この人形、ビエンフーに似てる」

「坊や、気に入ったかい？これは、聖主アメノチ様の人形だよ」

店主が気づいて人形の説明をする

「聖主アメノチ様・・・これが？」

エレノアが人形を手に取りながら質問する

「ああ、まちがいない、俺はアメノチ様を見たんだ。威厳たつぷりで、たいそうお怒りのようだったよ」

「見た？怒ってたってなんで？」

「聖寮はサウスガンドで盛んだったアメノチ信仰を禁止したんだよ。それでアメノチ様はヘソを曲げちまったんだろ。話しかけてみたんだが、なにを言っても『ふう・・・はあ・・・あつそ』しか言わないんだ」

「それって！」

特徴的なワードにライフェイスツトが反応する

「土産屋よ、そのやる気のないカミサマはこの人形の姿をしとったんじゃない？」

「ああ、ほほほほな」

「おお、なんとという奇遇じゃくく!!その気怠いカミサマこそグリモ姐

さんじゃー！」

「人間じゃないのかよ!？」

まさかマギルウの師相がノルミンだったとは思わなかったロクロウがつっこみを入れる

「人間とは一言も言ってはおらぬ。土産屋よ、どこで見た？」

「この先のマクリル浜だけど．．．」

「渚で黄昏ておるとは、ますます姐さんらしい!さあ、海へ急ぐぞー!」
「はあ．．．」

ウキウキ気分で浜へと向かうマギルウにベルベツトは唯々ため息をつくしかなかった

グリモワールの確かな情報を掴んだベルベツト達は目的のマクリル浜へと足を踏み入れる。珊瑚礁と白い砂浜が美しい場所で観光には最適な場所だ。土産屋の話だと此処にいるということなので皆は辺りを探索しながら砂浜を進む。ケンはず目の望遠機能を使って捜しているとかかなり離れた所に人形と同じとんがり帽子をかぶったノルミンが流木に座っていた。左目の解析で特徴が一致していることを確認する

「もしかして、あの流木に座っている方がそうですかね」

「え?どこにいるのよ」

「ほら、あそこの流木」

「ビエンフーと同じ種族の聖隷．．．でしようか?」

ケンが指差す方向をベルベツト達を見るとビエンフーが声を上げる

「あの後ろ姿．．．間違いないでフー!あの気怠そうな雰囲気醸し出しながらそれと同時に威厳さ漂うあのオーラー!グリモ姐さんでフー!」

皆はグリモワールであろう人物と接触を図るため流木に歩み寄りベルベツトが話しかける

「あんたがグリモワール?」

「ふう．．．」

「頼みたいことがあって捜してたんだけど」

「はぁ・・・あんた、誰？」

「ベルベット。魔法の知り合いよ」

「あつそ・・・」

退屈そうに興味なさそうな話し方とは正反対にマギルウとビエン
フーが師とあいさつを交わす

「グリモ姐さん、ご無沙汰じゃのー！」

「ご無沙汰でフー！」

「ああ、あんたたち・・・相変わらず、どっちも妙ちくりんね・・・」

「どういう関係なんだ？」

「魔法の修行をしておった頃の先輩じゃよ」

ロクロウがマギルウとグリモワールの詳しい関係を聞いているさ
なかにグリモワールが急かす

「で？」

「なかなか興味深い古文書があつての、その解読を頼みたいんじや」

「へえ、あんたが他人に肩入れなんて、珍しいこともあるもんね・・・」

「ヒマつぶしにちようどよくての」

「あたしはヒマじゃないけど」

いかにも協力したくない雰囲気を出すグリモワールにビエン
フーが泣きつく

「ビエーン、グリモ姐さん、そこを何とかお願いでフー！」

「そういうの、やってないから」

「ふむう、残念無念・・・引き受けてはもらえぬかー」

「やる気なら出させてあげるわよ」

ベルベットが刺突刃を出しグリモワールの首に突き付ける。だが
当の本人は眉どころは平然としている

「・・・殺れば？」

「脅しじゃない」

「でしようねえ・・・」

「・・・」

お互いそのままの状態が僅かに続いた後グリモワールは口を開く
「あんたみたいな目をしたこと聞わると、とんでもないもの背負わさ

れるのよ……この年になるとね、そういうのは重くついていけないわ……」

「……何歳なんだ」

ロクロウがグリモワールに年齢を聞く。少なくとも女性に年齢を不用心に聞くものではない

「それ以上踏み込むと、あんたのケツに花火突っ込むよ」

「応……これは失敬」

ロクロウが頭を下げ謝罪する

「取り付く島がないようだな」

「南の島なのに、ごめんねえ……」

「……」

拉致のあかない状況にベルベットがため息を吐く横でライファイセツトが意を決したように頭を上げる

「古代語、どうやったら読めるようになる？ 勉強する本とか、あるかな？」

ベルベットが刃を下げるのと同時にグリモワールは意外な反応を見せる

「……へえ、自分で勉強して読む気？」

「僕、本が好きだし……昔の事とか知りたいし……必要なんだ」

「坊や、随分熱心じゃない……」

「坊は、ベルベットとの役に立ちたいんじゃないやなー？」

「……うん……」

それを見て観念したのかグリモワールが口を開く

「授業料、高いわよ？」

「教えてくれるの!？」

グリモワールの了承に表情が明るくなるライファイセツト

「うっそ。健気さに免じて読んであげるわ。古文書はどこ？」

ライファイセツトは直ぐ様グリモワールに古文書を渡そうとする

「これです、グリモ姐さん」

「姐さんはいらさないから」

「……は、はい……姐さん」

グリモワールの視線にちよつぴり怖気ついたが先ほどの言葉を復唱しながら改めて渡す

「姐さんはいらぬい．．．うん」

「さて、どんな本なのかしら．．．」

グリモワールは本を開き数ページめくる

「古代アヴァロスト語．．．また厄介なやつね．．．傷みもあるし、ササッと読めないわよ．．．」

「可能な限り急いで」

「急ぐにしても、こんなところじゃなんだ。落ち着ける場所に移ろうぜ」

ロクロウの言う通り現在いる地点では外敵の襲撃の心配がある、提案したロクロウの方にグリモワールが顔を向ける

「さっきの失言忘れてあげる．．．この先にハリアって村があるわ」

「応。かたじけない」

「さっさと行きましょう。そのハリア村とやらに」

ベルベットの掛け声と同時に目的地であるハリア村へ歩き出す一同。だがグリモワールがケンを呼び止める

「．．．ちよつとあんた」

「？、はい、なんででしょうか」

ケンはグリモワールに歩み寄り片膝を着く

「あたし、ここまで来るのにだいぶ歩いたから少し疲れたのよね．．．あんた、エスコートして頂戴」

「へ？エスコート．．．ですか？」

ケンは突然の注文に少し困惑している中、先に歩いているベルベツトが声を上げる

「なにしているの、早く行くわよ」

「ああ、はい！」

ケンはグリモワールから本を受け取りグリモワールを腕に腰かけさせる

「あら、意外と紳士なのね、てつきり抱きかかえられると思ってたけど。まあいいわ、さ、行つてちようだい」

「はあ、わかりました」

ケンはグリモワールの自由奔放な行動に振り回されながらベルベット達の後について行った

、

ベルベット達は砂浜を歩ききり、門を抜けてハリア村に入った。ここハリアは昔からとある巫女の一族が治めていた土地で聖主アメノチを崇拝しており、巫女がアメノチからの信託を人々に伝え、ときにアメノチへと祈禱を捧げるというここでは独自の聖主信仰が行われてきた。今では聖寮によるカノヌシ信仰の動きにより人々は表面上は従ってはいるが、根底には土着信仰が今だに根強い。夕日も沈みかけたハリア村に落ち着ける場所を見つげるためベルベット達は宿を探す

「イズルトで聞いた限りじゃ、村を襲う業魔が出たり、聖寮への不満を抱く住民も多いって話だったが。想像していたよりも落ち着いた印象があるよな。このハリア村ってここは」

「対魔士の私が同行していることで、村人たちが警戒しているのかもしれません」

「へえ、世の中には裏表があるってこと、あんたもわかってはいるのね」

「表層しか見えていないようでは、聖寮の巡察官は務まりませんから。私だって、色々と見て来たのです。人の世の、光も闇も」

「・・・」

苦い表情で絞り出すように話すエレノアを、ベルベットは黙って聞いている

「でも・・・いえ、だからこそ、私はその闇から目を逸らさず、正直に向き合いたいです。その上で、信じたいと思っています。人の心にある光を」

決して光だけを見ず闇を見つめる。人の二面性を理解していくという真つすぐなエレノア

「闇ね・・・」

「はい、あなたのような闇です」

その言葉に驚くベルベット、まさか自分の事を言われるとは思わなかったのだろう

「・・・案外、はつきり言うのね」

住民から宿の場所を聞いて海側の一番大きな建物、そこが宿屋らしい。ケンがそこで部屋を二つ取り全員は一つの部屋に集まる

「じゃあ、解読を始めるわ・・・」

「皆さんが集中できるように、俺たちは外で待とう」

ロクロウがそう提案し皆は一旦部屋の外を出ようとした時ライフェイスツトがグリモワールに駆け寄る

「あの・・・僕、残ってもいいかな。古代語、勉強したいんだ。静かにするし、グリモ先生の邪魔はしないから」

「・・・坊や、今なんて言った？」

グリモワールはなにかに引つかかったのだろうか、ライフェイスツトに聞き返す

「えっと・・・静かにするし——」

「じゃなくて、あたしをなんて呼んだ？」

「グリモ先生・・・“姐さん”はいらないって言ってたから」

グリモワールはその言葉を聞いて表情が少し和らぐ

「それ、気に入ったわ。あんたに古代アヴァロスト語、教えてあげる」

「ありがとうございます、グリモ先生！」

ライフェイスツトは嬉しそうに礼を述べながらグリモワールと一緒に古文書の方へ向き直る

「・・・話をついたみたいね。なにかあったら声をかけて」

ベルベット達は二人の姿を見届け、宿を出た後自由時間として解散という形になった

）

夜は更けベルベット達がハリア村で自由時間を取っているそのころ、ケンはいつもの鍛錬のために一度村を出てマクリル浜に出ている。彼は手ごろな場所を探して砂浜を歩いているとき、左目のセンサーが起動しケンの前方にいる一つの人影をマークする

「こんな所でなにをしているのだろうか・・・」

ケン是不思議に思いつつも海を見ている人物に歩み寄る。その姿はケンが元居た世界で見たことがある托鉢僧の姿だった。網代傘を被っており、左手には錫杖を持っている。傘のせいでケンからは顔は見えない、数メートルまで近づいた時僧衣の人物が声を上げる

「・・・ケンよ」

「・・・！なぜ、名前を！」

横にいたケンが驚く中、その男が向き直り網代傘を取る。そこには鋭い目つきでまるで獅子のように威厳のある男の顔があった。ケンはその人物は誰なのか、初対面であるはずなのにそれはすぐにわかった。ケンは砂浜に両膝と両拳をつけ頭を下げる

「暫くぶりにございます！師匠！」

「うむ」

その正体はケンの偉大な師の内の一人、ウルトラマンレオの人間態であるおくとりゲンその人であった。レオは数歩近づきケンを見る

「俺が見ていなくとも、精進を怠っていないようだな」

「はっ、自分でできる範囲ではありますが、鍛錬を続けていました」

「そうか、ならいい」

ケンは顔を上げレオの質問にはつきりと答える

「・・・失礼ではありますが、なぜここに？」

「ああ、実はお前の動向を彼から聞かされてな。お前も、俺がここに来るといふ事は聞いているはずだ」

それを聞いてケンは頭を少し下げ、返事をする

「・・・はい、師匠はかなりご立腹と・・・」

「そうだ、なぜ俺が腹を立てているか・・・わかるか？ケン」

ケンは少し言葉に詰まるも意を決して答える

「自分めが・・・力不足であったからと」

「・・・」

「もし、あの人たちが助けてくれなかったら、自分にはいませんでした。そのことは痛感しています・・・」

ケンは地面を見ながら悔しそうに語る、レオはその姿を見ながら語り掛ける

「聖主の御座で、お前は最後までコスモスと同じ戦い方だったそうだな。最後の―撃を除いては。俺はその事に関してはなにも文句は言わん、だが、いつまでもそのままという訳にはいなくなってくる。いずれその拳を固めて戦わなければならぬ時もある、それを忘れるな」

「はい」

レオの言葉にケンはしつかりと頭を下げながら返事をする

「では、お前のこれまでの修行の成果を見せてみる」

「！」

レオの言葉にケンは驚いた様子で顔を上げる。依然として鋭い眼差しで見つめているレオにケンは静かに立ち上がる

「・・・わかりました！全力で行かせていたただきます!!」

「うむ」

ケンは数メートル後ろに飛び退き携行品を外し、傍にある珊瑚礁に投げて引っ掛ける。レオは僧衣に錫杖のまま立っている

「行きますー！」

ケンはレオと同じ宇宙拳法の構えを取り、相手を見据える。その額には汗が浮かび上がる

(やはり、この威圧感尋常じゃない・・・でもここで怖気ついては!!)

ケンは砂浜を物ともせず数メートルほど跳躍し、レオに向かって手刀を振り下ろす。ここに師と弟子の組手が始まった

第24話 終わり

番外編・師と弟子

「でええええやっ!!」

落下速度と上から下への腕の動作のスピードが加わり外から見れば、肘から先が見えないほどの右手刀がレオの顔面に迫る、が、次の瞬間彼が見たものはレオの手がケンの手刀を内側から添えるように当てられていた

「うおおおっ!!」

それを認識した時、ケンの体は半回転しており頭部が地面の方を向いていた

(これが・・・合気ツ!!)

激流の様に流れる景色とレオの技に驚愕する中、一つだけはつきりとした像が飛び込む。ケンの腹に錫杖の石突がめり込みそこから鈍い嫌な音が響く

「~~~~~ツツツ!!」

錫杖に吊られる形でケンの巨体がまるでピンに止められた紙の様に宙ぶらりんになる。だがこれはほんの数舜、目にもとまらぬ速さで石突が引き抜かれ体制の崩れたケンの体が横向きになり地面に向かって落ちる瞬間顔面にレオの縦蹴りが打ち込まれる

「がツツ!!」

蹴りの衝撃で砂浜に思いっきり叩きつけられ砂にも関わらずケンの体が大きくバウンドする。ケンは跳ね上がり意識が飛びかけ、頭ではわかっていても体が言うことを聞かずに防御もままならない。レオはそれをお構いなしに錫杖を素早く地面に突き立て右拳を腰に固める

(あっ・・・だめだ・・・避けっ)

ケンが心の中で言いかけたその時、今度は腹の同じ個所に右正拳が打ち込まれ凄まじい速度でケンは吹き飛ばされる。その衝撃で海の方へ飛ばされたケンは数十回水面を跳ね、勢いが落ちたと同時に水中へと沈んでいった

「・・・」

レオは服装を整え助けるわけでもなくただ数百メートル飛ばされたケンの方を見ている。その頃ケンは海中に沈みながら心の中で自分の未熟さを恥じていた

（今まで鍛錬を続けてきてもやっぱり師匠には勝てないな・・・まだ、遠い・・・まだまだ遠い、果てしなく遠い・・・でも、一歩でも近く）
夜の海底に足を着け顔を海面に向ける。満月の明るい光が水面を通りケンを照らしている

（月とすつぽん・・・いや、まだ地の底と宇宙の外だな）

心の中でそこまで眩いた後浜に向かって水中を泳ぎ始める。最初はゆっくりだが次第にどんどん速度が上がる。

（だからこそ・・・！）

凄まじい潜水速度で浅瀬まで泳ぎ足が底に着いた瞬間水の抵抗を物ともせずにレオに向かって全力で走り出す

「あなたに近づきたい!!」

ケンの間合いにレオが入ったと同時に構えを取り速力と腕の速さを合わせた右打拳をレオに向かって放った

く

一方ハリア村の中で自由行動を取っていたベルベット達。砂浜に所々生えている草むらに腰を下ろしていたアイゼンの後ろから声がかかる

「アイゼン」

「・・・なんだロクロウ」

アイゼンに声をかけたのはロクロウだったがその声はいつもと違ってどことなく張り詰めたものだった

「アイゼン、お前は感じないか。覇気というものを、圧倒的強者から発せられるような重い物をな」

「・・・お前もかロクロウ。確かに、今まで感じたことのない物。靈力や魔力だとかそんなもんじゃない、もっと別の物だ」

アイゼンとロクロウはケンが出かけて行ったマクリル浜へと続く門の方を見る。二人は目を合わせアイゼンが立ち上がりロクロウと

共に門へと向かうがその後ろで今度は二人に声がかかる
「アイゼン、ロクロウ、二人ともどこに行くのですか?」

エレノアは今夜は此処に留まる事になっていたものの、何も言わずに村の外に出ようとしている二人を見つけ呼び止める

「ああ、鍛錬に夢中になってるだろうケンを呼びに行くだけだ。心配はいらん、すぐに戻る」

「ですが、もう日も沈みましたしいくら近くでも万が一の時危険ですよ。私も行きます」

ロクロウがいつもの調子で約束するも同行者としてついて行くこととするエレノアにアイゼンが制す

「エレノア、お前は此処に居ろ。ライファイセツトの器であるお前にもしもの事があればまずい」

「ですが」

「心配するな。あいつを見つけたらすぐに戻る」

そこまで言うとうとエレノアの返事も聞かず二人は門を開けマクリル浜へと向かっていった

「あつ!ちよつと!...もう!」

エレノアは返事を聞かなかつた二人に肩をすくめるしかなかつた

く

アイゼンとロクロウの二人はケンがいるマクリル浜を注意深く歩きながら辺りを見回す

「さて、と...あいつはどこにいるか。そこまで遠くに行っていないはずだが...」

「しつ、待てロクロウ...!」

アイゼンが一步先を歩いていたロクロウを呼び止めそれに反応したロクロウがすぐさま物陰に身を潜める。アイゼンも素早く別の場所に隠れて目の前の少し離れた浜を見る。そこにはケンが誰かと戦っているのが見えた。必死に打拳と蹴りを繰り返して喰らいつく後ろ姿を見て、相手はかなりの手練れと二人は判断した

「...一体誰とやり合ってるんだ、まさか聖寮か!」

「聖寮の二等対魔士だったらあいつの敵じゃないはずだ、最低でも一

等対魔士が束にならない限りあいつはあそこまで苦戦しないはずだ」
「となると、特等か!？」

「下手すればそれ以上だ……」

それを聞いたロクロウの右目が開き屈んだ状態で二刀小太刀を取り出すのを見たアイゼンが首を横に振りため息をつく

「そうと決まれば話は早い！助太刀するぞ！」

「おい待て！二人同時に……なっ!？」

今にも飛び出しそうなロクロウを止めようと声を上げようとしたときケンのいる所で大きな音が響く、二人が音の出た方向を見るとケンが動きを止めて立ったまま痙攣していた

「くっ!？」

「ちいっ!？」

それを見た二人は跳ねるように走り出し小太刀と拳を構え、レオに向かって走り出す。レオは腹に打ち込んだ右拳を引きこみ飛び膝蹴りでケンの顎を捉える

「ごっ!？」

ケンの体が宙を舞う中レオは弟子の後ろから二人の男が走ってくるのが見えた

(ほう……彼らが例の……)

レオが地面に着地し、ロクロウとアイゼンを観察する中二人はケンの両側をすり抜けロクロウが最初にレオに小太刀を振りかぶる

「先手は頂く!!」

ロクロウの二刀小太刀の横一閃がレオを捉える。並の敵なら真つ二つの攻撃だが

「間合いが甘いぞ」

「なっ!？」

レオに攻撃が当たっていないかった事実には驚くのも無理はない、ロクロウからしてみれば自分の斬撃が相手の体をすり抜けたようにしか見えなかったからだ。レオは必要最小限の動きで刀の間合いから離れ地面に突き刺した錫杖を抜きその柄でロクロウの足を引っかける

「うああっ!？」

「ぬおおおっ!!!」

ロクロウが盛大に転んだと後ろで今度はアイゼンがボディブローの構えを取り間合いを詰めレオの鳩尾にパンチを叩き込む。重量感のある音があたりに響く中、ロクロウが起き上がりアイゼンの方へ顔を向ける

「アイゼン!!」

「ぐ……ぐおおっ!!」

アイゼンは歯を食いしばりながら腕に力を込めながら前に進めようとしますが全く動かない。レオの手がアイゼンの肩を抑えていた。肩の動きを押さえつけられパンチが出せないとわかるとすぐさま膝蹴りを繰り返す

「オラアツツ!!」

「ふむ」

膝蹴りが来ることをわかっていたように錫杖の柄でそれを防ぎ片足立ちになったアイゼンの足をレオが蹴り払う。体制を崩した地面に倒れるアイゼン

「ぐっ!」

「まだまだああ!!参の型!!」

レオの後ろで立ち上がったロクロウは走りながら眼前で印を切り、刀身から水流を発生させる。レオもロクロウの方へ体を向け仕掛けてくるのを待つ

「水槌!!」

圧縮された無数の水流の刃がレオを襲い、その体が切り刻まれ消える。ロクロウが荒々しく着地して勝利の雄たけびを上げる

「はあ……!はあ……!討ち取ったっ……!」

「ほう、初めて見る技だ。」

片膝を着くロクロウの背後にレオは静かに立っていた

「なっ!」

「威力、技量も悪くない。だが」

ロクロウが振り向いた瞬間レオの拳が顎の先端を掠るように叩く。その直後ロクロウは小太刀を落とし両手と両膝を着いてしまう。ア

アイゼンが叫ぶ

「ロクロウー！」

「ぬっ……なんの……っ!!」

ロクロウは地面に落ちた得物をなんとか拾い、ふらつきながら立ち上がるが足も覚束なく、体は前後左右に揺れて軸も定まらない

「うつく！まだ……やれる！」

「……」

レオは脳震盪を起こしているロクロウへ黙ったまま歩み寄り手で体を軽く押す

「うおおっ!?!」

たったそれだけでロクロウは大きく後ろにバランスを崩し大きく数歩下がって尻餅を着く

「ぐっ!!」

「クソッ!!」

アイゼンはレオがロクロウに止めを刺すと思ったのだろう、直ぐ様立ち上がり聖隷術を発動させ、彼の周りに風の刃を発生させる

「風の刃よ斬滅しろ！エアスラスト！」

「なるほど、風の刃か……」

アイゼンが声を上げたと同時にレオの周りにあつた無数の刃がレオに向かって飛来する。これも並の相手なら成す術なく切り刻まれる。だがそれは並の相手ならの話だ、アイゼンの前にいるのは正しく達人である

「ッ!?!なんだと!?!」

驚愕したアイゼンの目の前には四方八方から飛来する刃を目で追うことなく確実にこちらへ最小限の動きで避けながら向かってくるレオの姿だった。さらには錫杖と払い手で刃を打ち消している

「……までとは……だがな!!」

レオが最後の刃を打ち消したと同時にレオの懐に飛び込み冷気を込めたフック・冬木立（クラスター）を胴目掛けて叩き込む

「アイゼンー！」

「ぐおおっ!?!」

ロクロウがアイゼンの名を上げた瞬間彼の体が宙に浮きあがり回転する。アイゼンの拳はレオに掴まれており、それを軸に投げられ地面に押さえつけられる。完全に勝負が決まった

「ぐ……」

「どこまでか……!」

押さえつけられているアイゼンの横でロクロウが片膝を着けながら顔を伏せているとレオはアイゼンの手を離す

「!?……どういうつもりだ」

「飛び込みで参加するのは構わんが、せめて一言断りは入れてほしいものだな」

「参加?断り?あんた、聖寮じゃないのか?」

アイゼンは拳をさすりながら立ち上がり、脳震盪から回復したロクロウも得物を拾いながら質問する

「聖寮……初めに言っておくが、俺はお前たちの言う聖寮ではない」「違うならどこで何をしていたんだ」

「ふむ、説明する前にやるべきことがある。ケン、いつまでそのままにいるつもりだ。早く立て」

レオの声と同時に仰向けに倒れていたケンが両足を上半身に引きつけ一氣に出し、その反動を利用して跳ね起きる

「ケン!?大丈夫なのか?」

「まったく、世話の焼けるやつだ」

「すいません。お二人方がやってきたので起き上がるタイミングを計り損ねていました」

「場を読む暇があるなら一撃でも多く叩き込まんか。まだまだ修行が足りん」

レオとケンの会話を聞いてロクロウは以前ケンから聞いていた話を思い出す

「もしかして、あんたがケンの言っていた……」

「ん?なんだ、あいつから聞いたのか。どこまで知っているは知らんがケンに修行を付けた内の一人が俺だ」

「ケンの師匠だと……道理で手も足も出ないわけだ」

ロクロウの質問に答えるレオに苦々しく言葉を漏らすアイゼンにレオが声をかける

「・・・大方、あいつを捜しに来たのだろう。よしケンよ、今回は此処までとする」

レオの掛け声にケンは素早く正座をし両手を地面につけお辞儀をする

「はいっ！ありがとうございます!!」

「うむ、あれから腕を上げたようだがまだ体にブレと乱れがある。それを直せるよう精進を怠るな、わかつたな」

「はい！わかりました！」

ケンの姿を見た二人は改めてレオを見る

「改めて一つ聞きたい。あんたは何者だ、人にしちや余りにもかけ離れた身のこなし。只者じゃない」

ロクロウの問いかけに波打ち際の手前まで歩きながら答える

「そうだな、全ては答えられん。だが一つだけ言えることはくぐつてきた場数の違いというものぐらいだ、俺もお前たちのように修練と実戦を重ねて力を付けた。それだけだ」

「修練と・・・実戦・・・」

アイゼンが二つの言葉を復唱しているうちにレオは支度を整える、

ケンは皆から離れた所で腹筋をしている

「あいつもそうだ。ケンは俺のところまで修練を積んだ、だがまだお前たちに比べれば実戦経験が少ない上に甘いところもある。あいつほどではないが、手のかかる弟子だ」

「手のかかる弟子か」

「そうだ。では俺は行く、またどこかで会うかもしれないがな」

網代笠を被りイズルトの港町へと足を向けて歩き出すと同時にケンが動きを止め師の後ろ姿に頭を下げる。それはレオが見えなくなるまで続いた

「ケン、戻るぞ」

「はい、あんまり遅いとベルベットさんに怒鳴られちゃいますからね」
「できるだけ急いで戻ろうぜ。ベルベットどころかエレノアにも説教

されちやたまらんからな」

アイゼンが声をかけ。ケンは珊瑚にかけていた装備を取り三人はハリアに向けて歩き出す。少し歩いてハリア村に門に戻ってきた時ロクロウが立ち止まる

「今更言うのもなんだがなケン」

「はい？」

「お前、顔の状態の言い訳考えといた方がいいんじゃないか？流石に、な」

「・・・あ」

今のケンの顔は青アザがいくつもありその上ずぶ濡れだ。とても何事ありませんでしたという言い訳は通じそうにない、アイゼンは肩をすくめながら提案をする

「どうする、俺の聖隷術で顔だけはマシにすることもできるが」

「・・・いえ、どっちにせよ見つかった瞬間問い詰められるだけですよ・・・何とかします・・・」

く

三人はハリア村に入るとベルベットとエレノア、ついでにマギルウの三人が集まって何か話しているのが見えた。正面を向いていたエレノアがアイゼン達を見つけ駆け寄り、二人も後に続く

「あつ、戻ってこられましたね！あれから姿が見えなかったので心配しました」

「すまんエレノア。なんせケンが修行に入り込んでいたから、な？」

「大まかにいえば、その通りだ」

ロクロウの理由にアイゼンはとてもあいまいに答えるエレノアの後ろで呆れながら腕を組んでいたベルベットがこちらに近づくと

「まったく、あんたが修行バカなのは知ってるけど此処を出るならあたしらに一言いいなさいよ・・・なんでずぶ濡れなのよ、それにその痣」

「あく、いえ。実は・・・」

「え!?!誰かに襲われたの!?!」

ベルベットがケンの見てくれを観察して問い詰めようとした瞬間

エレノアが横から入ってきてケンの体をペタペタ触り始める。その横でアイゼンとロクロウが諦めたかのように顔と腰に手を当てる

「ちよつとー！あたしが聴いてんのよ。人が話してるんだから勝手に横から入らないでちょうだい」

「あなたはケンに対して少し威圧的です！もう少し優しくできないのですか！」

「あんただってケンが話そうとした時に割って入ったじゃない」

「そ、それは怪我してると聞いたから無意識に入りましたけど、条件反射です」

ベルベットとエレノアはケンの目の前で言い合いをしている中少し離れてマギルウがその状況を煽てる

「ほくほく、正しく両手に花じゃなケンよ。お主を巡って二人の女が相争う様は一人の男を求めて奪い合う禁断の三角関係の如しじゃ」

「マギルウさん・・・そういう事言わないでくださいよ」

「なんじゃ？遠慮せんでもええんじゃぞ？この際儂がお主らの恋のキューピットになってやつてもいいぞ？」

(勘弁してくださいよ・・・)

マギルウが煽てにケンは困った表情を浮かべ二人の言い合いを見ている

(これじゃ言い訳も言えないな、なんとかこの場を流して空気を変えないと)

ケンは内心諦めながら小言の言い合いになっている二人を仲裁する

「ままつ、お二人とも落ち着いてください。今回は自分が予め言っておかないのが悪かったですから、次からはちゃんと伝えますからね？」

「・・・まあ、あなたが言うなら」

「・・・わかったわ、次からは気を付けなさい。ほらさっさと宿屋に戻って風呂にでも入ってきなさい、ライファイセツトの解説ももしかしたら進んだかもしれないし」

ケンはそれを聞いて一足先に宿屋へ向かおうと歩き始めるとロク

ロウが肩に手を置きその後ろにアイゼンがいた

「ケン・・・今回は助かったな・・・」

「・・・はい・・・」

「女というのはわからんものだ、十分気を付けろ」

「・・・はい」

二人に見送られケンは宿屋へと入っていった、その背中からは肉体的な疲れとはちがう雰囲気をもとっていたように見えた

番外編・師と弟子 終わり

第25話

「古文書の解読は進んだ？」

あれからベルベツト達はライフィットとグリモワールによる解読が進んだであろうと考え一度宿の一室に集合した。ケンも体を洗い、皆と一緒に居る

「ええ・・・坊やおかげでね。この坊や、語学センスが抜群にいいわよ」

「グリモ先生の教え方が上手だからだよ」

「そんな風に言われると本気になっちゃいそう・・・」

「は？」

褒めるグリモワールにライフィセットが恥ずかしがりながらの謙虚になっている所にベルベツトが機嫌が悪そうに腕を組んでいる。グリモワールはそれを流す

「さて・・・坊や読んであげて。古文書に書かれてた『歌』を・・・」

「はい、先生」

「歌・・・？」

ベルベツトは古文書に書かれている事が只の文章ではなく歌になっていることは予想外だったのだろう。ライフィセットが読み上げ始める

「八つの首もつ大地の主は 七つの口で穢れを喰って 無明に流るる地の脈伝い いつか目覚めの時を待つ」

四つの聖主に裂かれても 御稜威に通じる人あらば 不磨に喰魔は生えかわる 緋色の月の満ちるを望み

己み名に聖主心はひとつ 己み名の聖主体はひとつ」

(喰魔・・・?)

ライフィセットの解読にベルベツトは顎に手を当て文章の意味を考えている

「カノヌシを表す図と、かぞえ歌。この古文書は、その意味を解読した『注釈書』なの・・・」

「もったいぶらずに、その注釈つてやつを教えて」

「ごめん・・・まだ、かぞえ歌の歌詞しか解読できてないんだ」

「・・・そう」

「全部解読するには、かなり時間がかかりそうじゃのー」

表情を曇らせるベルベットにマギルウが座りながら言葉をかける

「だが、聖察の目的と狙いを知るためには重要な情報だ。時間がかかってもやるべきだろう」

(聖察の目的と狙いを・・・知る)

ロクロウの提案を聞いたエレノアは僅かに思考した後、口を開く

「歌詞だけでも得られる情報は少なくないと思います」

エレノアはそう言いながら古文書の置かれている台に近づく

「図にある首は全部で八つ。一本が本体で、他の七つは、カノヌシの口〆七つの〆口〆は〆穢れ〆というものを食し、地脈経由で本体に送り、カノヌシを覚醒させる。そういう性質をもつ七つの魔物を——」

「〆喰魔〆と呼ぶ」

ベルベットの答えにエレノアが相槌をうつ

「・・・はい。〆穢れ〆が、なんなのかはわかりませんが」

「・・・」

エレノア後ろで台に座っているグリモワールが同じ聖隷であるアイゼンへと視線を移すが彼は僅かに顔を逸らしエレノアに質問する

「後半部分はどう考える？」

「古代史はあまり詳しくないのですが、この世界を創ったのは地水火風に四聖主と言われています。でも、カノヌシも聖主と呼ばれている。カノヌシと他の四聖主の間に争いが起こり、カノヌシは封印されたのではないのでしょうか」

「じゃが、御稜威——神の威光に適う物があれば、喰魔は何度でも生まれ、カノヌシは復活する・・・」

ベッドに腰掛けているマギルウがもう一つの仮説を述べる

「おメガネになかった導師アルトリウスが、カノヌシを覚醒させようとしておるとすれば、話は合うの」

「なら、七つの喰魔を探し出して、〆カノヌシの首〆を潰せばいい」

「だが、喰魔はどこにいる？」

ベルベットの思惑にロクロウが口を挟む。この広大な土地で情報もなく七体を探すのは明らかに至難の業だ

「この歌によれば、喰魔とカノヌシの本体は地脈で繋がっている。喰魔が、カノヌシにエサを送る靴なら、*地脈点*に配置するのが最も効率がいいはずだ」

アイゼンは今までの話を聞いたうえで敢えて一つの推測を唱える

「地脈点？」

「地脈の力が集中する特別な場所のことじゃよ」

ベルベットの疑問に答えるマギルウの横でライフィットは数秒考えた後何か閃いたように顔を上げる

「この印の場所って・・・ね、この虫がいた場所に結界があったよね」

ライフィセットはクワブトを取り出す

「まさか、この虫が喰魔だと?・・・いえ、だとしたら聖寮が捕獲していた説明がつく」

「あと、離宮にも同じ結界があった」

「あれも喰魔・・・?喰魔の姿はそれぞれ違うってことか」

「ローグレスに行つて確かめるか？」

ベルベットの言葉にロクロウは確認するために移動を提案するもベルベットは首を横に振る

「解読を始めたばかりだし、焦って無駄足を踏みたくない。古文書の中身をもう少し知っておきたいとこだけど・・・」

「・・・」

そこに先ほどからなにやら考えているグリモワールにマギルウが気付く

「なにか気になるのかえ？」

「喰魔が*生えかわる*」つてというのが・・・ねえ・・・」

グリモワールそのフレーズの意味について考えているとき横にいたライフィセットが何かを感じ取る

「あっ!!ワァーグ樹林と同じ感じがした!」

ライフィセットは直様羅針盤を取りだすと針が激しく動いている、

その針の動きに合わせて方角を安定させるとその針はある方向へと向いた

「この方角は、聖主アメノチの聖殿パラミデス・・・今は聖寮の施設じゃったか？」

「聖殿や祭壇は、霊的な力に満ちた場所につくられると聞いたことがあります。地脈点を意味している可能性はありませんか？」

「地脈点は世界中に数多くある。喰魔が七体なら、ほとんどの場所はハズレだ」

「しかし、決定的な手がかりもない。可能性があるなら行ってみるべきじゃないか？」

「解読を無為に待つ気はないわ。ライフィセットの感覚の正体もわかるし」

ベルベット達がこれからの予定を話し合っているとグリモワールが呟く

「・・・ひよつとしてだけ喰魔を殺すと——」

「なに？」

「・・・どの道確かめないとわからないか・・・いいえ。今日はもう遅いから明日、目的の場所に行きなさい。焦って何かあるとあんたも困るでしょ」

「・・・わかったわ」

グリモワールの提案を渋々承諾したベルベットは今日は宿で休むことを皆に伝え男女分かれて明日に備えることになった

夜も更け、村の住人達は宿の従業員を除き全員が寝静まった頃。ケンはこっそり宿を抜け出し、近くにあった岩に腰掛け先ほどの会話について思考していた

（僕がいない間に喰魔に一体は地脈点から連れ出していたみたいだけど。さてはて、残りの六体どこにいるのか、あとグリモワールさんが言っていたはえかわるといふフレーズ、解釈によっては意味が異なる・・・古文書の翻訳は流石にこいつでは無理だったな・・・）

ケンは自分の左目に意識を向けるがそれもすぐにやめ僅かにため

息を吐くと後ろから声が聞こえた

「あら、まだ起きてたの。明日は忙しくなるんだからちゃんと寝ておかないと後に響くわよ」

「グリモワールさん」

ケンの後ろにグリモワールが立っていた、グリモワールは話しながらも移動し近くにあった流木に腰掛ける

「大方、あの時の古文書の意味でも考えてたんでしょ。何か気になる部分でもあったのかしら」

「ええ、貴女が貴女が言いかけたはえかわるとい言葉の部分について考えていました」

グリモワールはそれを聞き僅かに目を細める

「へえ、なら聞かせてもらおうかしら。貴方の考えをね」

「あくまでも憶測でしかありませんが・・・」

ケンは姿勢を正し自分の考えを話し始める

「あの時のライファイセットの感覚が当たっており明日行く場所に喰魔がいたならば、いくつかの選択が迫られることでしょう。ですがその選択の後に何が起こるかが気になります」

「ふうん・・・」

「喰魔がいて、それを殺めた場合周りの環境にどう影響するか、そして喰魔の発生が一度きりかどうかということ。ベルベットさんの言う首を潰してカノヌシの力を弱めるといならそれが一番の近道でしょう、ですが・・・」

ケンがそこまで言い終わるとグリモワールが先に口を開く

「それで終わるとは到底思えない、でしょ」

「はい」

「あたしもそこ、気にしてるの。事がそんなにいい方向に進むなんて最初から考えていないわ。そう、はえかわる・・・あの時言っただけこれだけは確かめなくちゃわからない。さ、この話は今日はお終いよ、早く寝なさい」

「はい、ではお先に失礼します」

ケンは腰かけていた岩から立ち上がり宿へと戻っていく後ろ姿を

見ながらグリモワールは呟く

「あの子、なかなか鋭いわね。さてと、どうなることかしら」

グリモワールは空を見上げた、空いっぱい星は何も答えることな
くただただ輝いていた

く

次の日の朝、予定通りにベルベット達は聖殿パラミデスに向かうた
め宿を出発する。グリモワールは安全の為に宿に待機することに
なった一行は目的地へと続く村の門へと歩いていると村の住人の話
し声が聞こえる。大体は宗教関係の話だ、カノヌシ信仰に転向したも
のとアメノチ信仰との言い争いなどだ。だが今はそれに構っている
時間がない、足早に進んでいると門の前で一人の少女が立っていた、
その少女がこちらに気づくと近づいてくる。ベルベット達は立ち止
まり何者か聞き出す

「あんたは？」

「宿の娘です。あの・・・パラミデスへ行くと話されているのを聞いて
しまったのですが・・・」

少女の一言でベルベットが警戒し構える

「聖察に通報したのか」

ベルベットの言葉に首を傾げる少女

「通報？対魔士様がご一緒なのに？」

「・・・用があるなら、対魔士様に言って」

ベルベットは忘れていたのかはわからないが怪しまれないように
取り繕い。エレノアの方へ顔を向ける。エレノアははつとして会話
に合わせる

「・・・聖察対魔士エレノア・ヒュームです。どんな御用でしょう」

「人捜しをお願いしたいんです」

エレノアが少女に歩み寄り話を聴くと少女が事情を説明する

「ある母娘が、聖察の施設に行ったまま帰らないのです」

「二人とも行方不明に？」

「母親はアメノチ様の巫女、マヒナさん。娘は、モアナちゃんという小
さな女の子です」

「アメノチ様の巫女ということは……」

「はい。アメノチ様の聖殿が接収されてから、マヒナさんは何度も聖寮に抗議しました。でも、ある日帰って来なくなって……そして、モアナちゃんまで消えてしまったんです。きっとマヒナさんを捜しに行っただんだと思います」

エレノアがそこまで聞いた後に質問する

「その二人が聖寮の施設にいると？」

「いえ……でも、あのマヒナさんがモアナちゃんを捨てるなんて考えられません。巫女の後継者として、厳しく育てていましたが、本当にモアナちゃんを愛していたから……抗議のことはお許しください。どうか聖寮の御力で、二人を探していただきたいのです」

エレノアすべての話を聞き力強く頷く

「できる限り調べてみましょう」

「ああ、ありがとうございます！私も、母と二人で育ったものですから他人事とは思えなくて……」

「……母娘か」

母と二人で育ったというフレーズに反応したのかエレノア表情が少し暗くなる。ベルベツトはこの空気から少しでも離れるべくエレノアを促す

「行きましょう、対魔士様」

ベルベツト達はそれから何も言わずに門をくぐろうとする後ろ姿を見つめる少女にケンが近づき質問をする

「すいません、いくつか聞きたいことがあるのですが」

「は、はいなんでしょう」

「そのマヒナさんと娘さんの特徴を教えてくださいませんか？」

少女はケンの質問に思い出すようなしぐさをして話し出す

「マヒナさんはアメノチ信仰の証である首飾りを掛けています。他の首飾りとは形や見た目が違うのですぐにわかるはず。モアナちゃんの方は頭に白い花を挿しています」

「なるほど、ありがとうございます。では」

ケンは身なりの特徴を聞きすぐにベルベツトの後を追った

「エレノア、どういうつもりなの？」

「母娘の件は、私が個人的に捜します」

「それはいい」

村を出てパラミデスへと続くマーナン海礁へと入った一行だが、ベルベットは早速エレノアを問い詰める

「では、なんのことですか？」

「あたしが聖寮の計画を潰そうとしてるのに、なぜ積極的に古文書の解読を手伝うの？」

聖寮に反抗する中で正真正銘の対魔士であるエレノアが協力している時点でベルベットではなくても疑問に感じるはずである

「・・・私が故意に謝った方向へ誘導し、罠にかけようとしている・・・と？」

「そうなの？」

「そんな罠でどうにかできるほど愚かな相手とは思っていません」

「・・・」

「私は、アルトリウス様がなされようとしていることを・・・今、この世界で起こっている真実を知りたいのです。悔しいけど、私は真実を教えてもらえないほど信頼を得ていませんでした。だったら、自分で見つけ出すしかない」

「自己分析は出来てるのね」

「聖寮が表の道なら、あなたたちは裏の道。表裏は違ってもただどり着く先は同じはずです」

「だから、あたしたちにウソをつく必要はないって？」

「はい」

エレノアの表情からは何かから吹っ切れた印象が見て取れる

「・・・真実が、あんたの信じていることと違ったらどうするつもり？」

「今は・・・わかりません」

「はつきり言うのね。けど、もうしばらくは協力できそうね」

「ええ、今は」

エレノアは会話を切り上げ先に進み始める、そこへベルベットの後

ろからロクロウが声をかける

「俺も、お前に聞きたいんだが」

「なに？」

「喰魔についてだ。お前、前に自分のこと喰魔だって言ってたよな？
なにか知ってるんじゃないのか」

「・・・知らない。アルトリウスがそう言っただけだから」

「気にならないのか？」

「あんたは気になるの？」

「いや、全然。お前が気にしてないならそれでいい」

ベルベットから逆に質問されたロクロウはきっぱりと答える。ただ単に聞いただけのようだった。ロクロウも先に歩いていく

「妙な奴ばかりね・・・けどシアリーズがあたしを選んだ理由はおそらく・・・」

海礁を通り抜け、いよいよパラミデスが見えてきた。聖主アメノチを祭る聖殿であるパラミデスは元々は海岸に建造されていた。4聖主が眠りについたことで起こった地殻変動により海中に沈んだという。その聖殿へと続く門の前にたどり着くと門の前に警備であろう対魔士が数人倒れていた。ある者は地面に倒れ、ある者は壁にもたれ掛かり、ある者は水につかっている通路で倒れ伏し、血の海が広がっている

「これは・・・!？」

ベルベットがその惨状を見て驚き、アイゼンやエレノア達は倒れている対魔士の様子を確認している。ベルベットが現状から経緯を考えていると奥から獣の叫び声が響いた。それと同時に門の先から何かが叩きつけられる音や金属音と

「うわああっ!!!」

切り裂かれる嫌な音と同時に悲鳴が響き渡る

「業魔ー!」

「噂の業魔かの？派手に暴れておるようじゃな」

「この混乱に乗じるわよー!」

エレノアが驚くのを他所にマイペースのマガルウ、好機を逃すまいとするベルベットの掛け声に応え、一同はパラミデスへと侵入した

パラミデス内部は水の聖殿という事もあり。いたるところにある水路と石造りの壁がいかにもな雰囲気醸し出している。本来なら此処には信者が往来し祈りを捧げているであろう場所も、今は対魔士や兵士の死体があちこちに転がっている。中には無事なものもいたが、業魔の襲撃でまともに指揮も取れずにベルベット達により無力化されていった。ひたすら奥に進むとひと際開けた部屋に入る。部屋の中央には円形の足場と四方からの通路、その周りは水が流れている。そこに対魔士達を襲撃したであろう獣人の業魔がいた

「警備は蹴散らしてくれたけど、こいつは……」

ベルベットの言葉に反応したのか業魔がこちらを向くと威嚇するように吠える

「こやつ、胸にアメノチ様の紋章をつけておる！あれは巫女証じゃぞ！」

「じゃあ、この業魔は……」

「さっき聞いた母娘の母親の方——マヒナか」

「そんな……！」

皆が個々の反応を示している横でアイゼンはケンの傍まで近づき小声で話しかける

「ケン、お前はと思う」

「……恐らく、マヒナさんが業魔と化したのはこの聖殿を取り上げられただけが原因ではないのかもしれないかもしれません」

「なぜそう思う」

「仮に聖殿を接收されて業魔になるとすれば狂信者位の者です。ですが村の人からの反応を見れば宗教に依存していたなんて聞いていません。」

アイゼンとケンが話している間にマヒナは一方の通路を通せんぼするかのように移動し吠える。まるで何かを守るかのように思えると同時に四足走行で向かってくる

「それでお前は どうする。あの時のように助けるか？」

「・・・わかりません。自分の選択が正しいかどうか・・・」

マヒナが爪を振りかざし引つ掻こうと飛び掛かる、アイゼンとケンを除きベルベット達は左右に分かれ躲す

「選択か、遅かれ早かれその時が来る。急ぐなどは言わない、だが、覚悟はしておけ、いいな？」

「はい」

目の前にマヒナが迫り二人を喰らわん牙と爪を振りかざすマヒナにケンは直ぐ様反応し懐にもぐりこんだと同時に体当たりでマヒナを押し飛ばす。マヒナは空中で体勢を変え着地し尚もこちらに咆哮を上げ、次はベルベット達の方へと走り出す。皆はそれぞれ構えを取るがエレノアだけはなにやら深刻な顔でタイミングがずれてします

「ぼけつとしないで！喰われるわよ！」

「わかっています！でも・・・！！」

「でもじゃないわよ・・・くっ！」

ベルベットが激を飛ばそうとしたがマヒナが飛び掛かり、回避を優先するベルベット。ロクロウはマヒナの横に回り込み小太刀を構え接近する

「ライフイセット！」

「重圧碎け！ジルクラッカー！」

ライフイセットの聖隷術による重力場に捕らわれたマヒナは必死にそこから逃れようと藻掻く、ロクロウはその隙を逃さず小太刀で斬りつける

「切り捨て御免！」

「はあ!!」

ロクロウの攻撃により数メートル飛ばされたマヒナの横からベルベットの中段蹴りが脇腹に刺さる。激痛に耐えながらもがむしやらにベルベットに喰らいつく背後にマギルウの水球が当たる

「人数ではこちらが上、いくら業魔といえどちとかわいそうじゃな」

エレノアはアイゼンとケンの傍まで駆け寄る

「ケン、なんとかならないの!?!ロウライネのときみたい！」

「・・・可能性はありますが。」

「だがあの時は外部から打ち込まれた穢れで聖隷が業魔になった、だがマヒナは自分の穢れで変化したはず。今回ばかりはどうなんだ」「ですが、やらないわけにはいきません」

マヒナは今度はアイゼン達に狙いを定め四足で一気に距離を詰め爪を振りかざす

「ふんぬっ！」

ケンはアイゼンとエレノアの前に一歩進み振り上げた腕を掴み止める。マヒナはもう一方の腕を上げようとするもケンはそれを予想していたのか振り上げる前に掴む

「でいやあー！」

両腕を掴んだまま三回ほど振り回し放り投げる、がマヒナは本能で空中で体勢を立て直し着地しようとする。だがその数瞬前にケンはルナエキストラクトを放つ。マヒナの着地と同時に光線が命中するが変化がなく掻き消える

「・・・やはり無理か」

「そんな・・・！」

マヒナは先ほどの攻撃を警戒してケンに狙いを定める。アイゼンとエレノアはそれを阻止するために術を発動させる

「風の刃よ斬滅しろ！エアスラスト！」

「もう・・・マヒナさんは・・・！っ、貫け緑碧！霊槍・空旋！」

風の刃と疾風の竜巻がマヒナを吹き飛ばし石畳に叩きつけられるよろめきながらも立ち上がろうとするがそれをエレノアが槍の刃先を突きつける

「エレノア・・・？」

「もう元には戻れない。こうするのがせめてもの・・・『理』である」と

その時ライファイセットは何かを感じ取る

「あっ・・・これって!？」

槍を突きつけていたエレノアがライファイセットに気を取られた時マヒナは吠えその隙について飛び退き逃げていく

「しまった!!」

エレノアが呆気にとられている横をベルベットが通り過ぎる

「業魔は放っておけばいい」

ベルベットに続いて各々が進みだす中ケンはエレノアに話しかける

「すいません、自分の力不足です」

「・・・ううん、あなたのせいじゃないわ。もうここまでできたら・・・」

「いえ、まだ手段はあります」

ケンの言葉にエレノアは顔を見合わせる

「本当に!？」

「ええ、まだベルベットさんにも見せていませんが・・・」

「それを使えばマヒナさんは助かるの?」

「そこまではまだ・・・やってみてどうなるかですが」

「あの業魔・・・娘さんを捜しているうちに業魔病になっちゃったんだよね」

「ああ・・・宿屋の娘が、そう言ってたな」

「降魔になっても、娘さんのこと捜してるんだよな」

ライフィセットは、ふと思いつきロクロウに尋ねる

「ロクロウやクロガネ、ダイヤルは業魔になっても人間だった時にやりたかったこと覚えてるでしょ?お母さんだったら、やっぱり娘さんのことずっと捜してるんじゃないかなって・・・」

「そうかもしれないが、そうじゃないかもしれない」

「・・・そうだったらいいな」

エレノアをそれをきいて少し間が経ってから口を開く

「・・・人間だった頃は、きつとそうだったでしょう。でも業魔には、そのような母性はありません。業魔に成り果て、心も愛情も失ってしまった。哀しいことですが、それが現実なのです・・・」

(ベルベットやロクロウには心があるけど・・・)

「一体の業魔を放置すれば、百人の命が奪われます。ましてや、聖寮の施設で暴れ、対魔士を襲う業魔です。百人どころか、村や街を滅ぼし

かねないのです。私の村もそうでした」

「!!」

「・・・だから、私は」

「ま、そうだな。エレノアの言う通り、ケンの力でも元には戻せないんだ。斬って成仏させてやるのも、情けつてもんかもな」

「・・・」

エレノアの考えに肯定するロクロウにライフィセットはなにも言わなかった

）

それからマヒナが奇襲してくることもなく聖殿を搜索する、どうやら生き残りの対魔士や王国兵士がいたようだ。指揮系統には著しくダメージを負っているようだが侵入者であるベルベット達を迎撃せんと突つ込む者もいれば、穢れによる影響だろうか業魔とかしたかつての同胞と交戦する者もいた。時には戦い、時にはやり過ぎしながらとうとうパラミデスの最深部にたどり着く。一際大きな部屋の中央で何かがいるのが確認できた。ベルベット達が近づくとその造形がはつきりわかる。朽ち果て折れた木の幹の様に見えるそれと爪のついた触手のような二本の木の根、そのほかは焼け焦げたかのようなもの見える他の根と枝、顔のようにも見える幹の中には人間のような物が入っている、だがその人間も全身緑色でとても普通には見えなかった。ギシギシと軋みとこすれ合う音を響かせベルベット達に向かって吠える。その遠吠えには人間交じりにも聞こえる

「やっぱりいたわね・・・」

業魔はベルベット達に向かってその巨体を跳躍させるがそれが届く前に結界に阻まれ、跳ね返る

「またあの結界!!」

「当たり前だな。こいつも“喰魔”ってわけだ」

「ベルベットの予想通り、“七つの首”は個体ごとに姿が違うようだな」

ライフィセットも何かを感じたようだ

「感じてた場所はここだよ！」

「どうやら、坊の方も大当たりのようじゃな」

「ワアーグ樹林の時と同じ感覚・・・僕が感じてたのは地脈点だったんだ」

「さて、こいつをどうする？クワガタみたいに小さくなれば連れて行けるが・・・」

「生き死になんてどうでもいいわ。喰魔こいつを倒してカノヌシの首を潰す、それだけよ」

ベルベットが刺突刃を出し走り出すと皆もそれに合わせて戦闘態勢を取りながら喰魔に接近する。喰魔もそれを反応し大きく吠えた

第25話 終わり

第26話

喰魔はベルベット達が結界内に入ってきたのを見計らい、先ほどと同じく飛び掛かる。先ほどより勢いの乗った攻撃に皆は左右別々へ分かれる、その数舜後に喰魔が地響きと共に地面に落下する。

「おおっと！お構いなしだな!!」

「喰らおうものならぺちゃんこじやぞー」

「喋ってる暇があるなら手を動かさないよ!」

ロクロウとマギルウの台詞に怒鳴りながらも刺突刃で幹を切りつけるベルベット。通常の木であれば傷をつけられたであろうが相手は喰魔、朽ち木のような外見から想像もできないほど硬く、刃が食い込まずに止まる

「チツ!」

「破碎しろ!ストーンエッジ!」

アイゼンの聖隷術に反応してベルベットは喰魔を蹴り離れる。石柱が喰魔の足元から突き出て跳ね飛ばすが重量があるのか思った程より手応えがない。

「なんて重さだ」

喰魔はアイゼンの方を向き脚を動かしながら接近しようとして動き出す。マギルウが止めに入る

「無視するとはいただけんな、フラッドウォール!」

水で出来た壁がアイゼンの前に現れ喰魔の行く手を遮るが強引に破ろうとしている

「そうはいかんど、大人しくせい!ブラッドムーン!」

「マギルウぼくも!鏡面輝き熱閃手繰れ!カレイドイグニス!」

深紅の霊場に囲まれると同時に周囲に鏡の破片が散らばり熱線が破片から破片へと乱反射を繰り返す。霊力と熱線に晒されて喰魔は吠える。そこへロクロウが滑りこむ

「隙あり!四の型・疾空!」

印を切りそこからかまいたちが繰り出され幹を削る。ロクロウは

好機と判断して追撃をかける

「このまま押し切るぞ！零の型!!」

後ろへ滑り込み死角から素早く間合いに入り込み左の小太刀で斬り上げる。僅かに浮き上がった所へ右の小太刀で渾身の突きを放つ

「破空!!」

跳ね上がった喰魔は地面にぶつかり流石に効いたのか転げまわる。ベルベットとエレノアがそれを見逃さず業魔手と槍を振るい追撃をかける

「やるからにはしつかりしなさいよ!」

「わかって、います!!炎月輪!」

炎を纏った槍を振り上げ喰魔を後方へ下がらせる。そこへ同じく炎を纏ったベルベットの連続蹴りが放たれる

「炎牙昇竜脚!!」

蹴りの連撃を受け何度とも知らぬ衝撃に喰魔は我慢の限界なのか触手の様にしなる二本の腕を闇雲に振り回す

「くっ!」

「きやつ!」

ベルベットとエレノアは腕からの風圧で動くことができず、おおきな隙ができてしまう。それを知ってか知らずか、お構いなしに腕を振るう。そこにケンが間に入り喰魔の体を抑える

「大丈夫ですか!」

「助かったわ」

「あ、ありがとう」

ケンは二人の無事を確認し喰魔を押し返そうとした時あることに気づく、口の中、正確には幹の中に人型の物体があった。一見見ると作り物のようにも見えたがそれは正しく人だった

「一体これは?・・・うおっ!」

ケンがそれに気を取られた瞬間に喰魔は二本の腕でケンの胴体を掴み上げ石の床に叩きつけ始めた

「ケン!!」

「一体どうしたんだ!」

「さあな！今はアイツを助けるのが先だ!!」

ライファイセツトの隣でロクロウはケンの行動に疑問を抱くがアイゼンが喰魔の懐に潜り込み拳を固める

「ハアアアア!!ウエイストレス・メイヘム!」

拳の殴打で喰魔の体勢が崩れる、だがケンを掴んでいた腕は未だに離さない

「なんて野郎だ!・・・」

「ここは儂に任せい!伸びろー!」

マギルウは式神を取り出し伸ばす、本来なら縦に叩きつけるはずだがマギルウはあろうことか横に振りかぶる

「皆の者!当たるでないぞー!!」

「おいおい本気か!?!」

「ライファイセツト!伏せろ!」

驚くロクロウとアイゼンはライファイセツトを引つ張り地面に伏せる

「ちよつと待ちなさいよ!ケンはどうするのよ!」

「ケンを巻き込むつもりですか!?!」

マギルウは二人の非難にニヤケながらもケンに向かって叫ぶ

「ケンよ!覚悟はよいか!」

「仕方ありません!お願いします!」

「じゃそうじゃ!光翼!!」

マギルウがさらに振りかぶる。ベルベットとエレノアは声を上げる暇もなく屈む

「天翔!!」

マギルウは式神を横に振るい喰魔に当たる。軋むような音を響かせる

「くん!!」

「うおわっ!!」

ケンは喰魔ごと打たれ結界の壁にぶつかり落下する。背中を打つもすぐに立ち上がる

「ケン!大丈夫!?!」

ライフイセツトが走り寄る横でベルベットとエレノアが駆け抜け
各々の全力をぶつける

「とにかく隙ができた！リーサル・ペイン！」

ベルベットの奥義が炸裂し喰魔がのけ反った後にエレノアは槍を
構え突撃する

「奥義！スパイラル… ヘイル！」

槍による連続の刺突攻撃で喰魔を突き上げ最後に渦を纏わせの最
大の突きを放つ流石の喰魔も堪えたのか大きく吹き飛ばされ石畳に
巨体を叩きつける。喰魔は呻き声を上げながら起き上がる

「この喰魔は小さくならないようだな」

「…」

ロクロウの横でベルベットは顔をしかめる。が直ぐに己の左腕を
業魔手に変える。その後ろから何者かが走りながらベルベット達
の後ろ姿を飛び越え喰魔の前に着地する。それは入り口で出くわし
た業魔だった

「さっきの業魔！」

エレノアが驚く中業魔はベルベット達に向かって威嚇する。エレ
ノアは目を閉じ数秒立って何かを決意したように槍を握り、歩き出そ
うとした時横から手が伸び制止する

「えっ…」

エレノアがそちらを見るとその正体はケンであった。その顔は何
か迷っているようだが確かにエレノアを見つめていた

「ここは自分に任せてくれませんか？」

「…策があるのか」

背中からアイゼンの声が聞こえる

「先ほど最後の手段と言っていたものとはもう一つあります。それ
を」

「…できるの？」

ベルベットの問いにケンは数瞬沈黙する、が口を開く

「このまま何もしないより、自分にできることをするまでです」

ケンはそこまで言い数歩前に歩み出、構えを取る。左手に意識を集

中させる、業魔は尚も威嚇を続けるがその後ろで喰魔が這いよる姿があった。ケンはそれを見て何かに気づき左手を突き出し七色の光を二体の業魔に晒す

「これは！」

「ほっほっ」

「ケンの奴、まだ隠し玉があったのか」

ケンのルナレインボーが業魔達を掻き消すほどの光の流れの中、さらに左手を前に突き出し光線を強める。やがて獣と朽ちた大樹の姿が少しづつ煙のように霧散して徐々にそのサイズが小さくなる

「っ……くっ」

ケンは少し表情を変えながらも最後まで光線を当て続け、そして遂に二体の業魔はその姿を大きく変えることに成功した。ケンは息を切らし両膝に手を付ける

「成功したのか……？」

「すごい……！」

アイゼンとライフイセットが驚きながらも他のメンバーは人型のサイズまで縮んだ業魔達の元へ向かう、ベルベット達は警戒しながら倒れている業魔に近づく。獣だった業魔は人間の女性の姿をしているが少女の方は人型ではあるがそれはどう見ても普通ではなかった

「……やはり、無理だったか……」

「無理だったって、どういうこと？」

アイゼンに肩を借りていたケンにライフイセットが言葉の意味を聞いただす

「さっきの技は対象から穢れや憑りついた物の類を切り離す技、本来だったらもう一つの技を使うべきだったかもしれない。でもそれはまだ完全に扱いきれてないんだ、それを使ってもし何かあったら……」
「いや、それはお前しかできないことだ。それがお前の選択であれば、何も言わん」

「……はい」

ケンが息を整え終わりアイゼンから離れ、先に女性と少女の元へ向かったメンバーと合流する。少女は気を失っているだけだがその姿

は黒と茶色の甲殻のような物が覆い、頭部からは触覚のようなものが付いている。女性の方は普通の人間だが外傷が酷い。一応マギルウが回復の術をかけている

「うっ……」

女性は苦しそうな声を出しながら目を開け。ベルベット達を見る

「貴女……達……は……?」

エレノアが傍にしゃがみ手を取る

「私は一等対魔士のエレノア・ヒュームです。貴女がマヒナさん、ですね」

「……ええ……そうよ」

マヒナと聞かれてそう答えた女性は話すこと自体億劫のようだ。

エレノアはできるだけ負担にならないようマヒナの体を起こす

「村の宿屋の人から行方不明になった貴女をモアナを捜して欲しいとの依頼を受けました……ですがまさか貴女が業魔になっていたなんて……」

「……」

エレノアはタイミングを見計らいながら言葉を続ける

「ここパラミデスが、聖寮に接收された事に対する……憎しみ……ですよね……」

「ちがう……わ……」

エレノアがこの祠を取り上げられたことが原因だと思っていたが、予想外の反応に目を見開く

「娘を……モアナを、あんな姿に……したことが……」

マヒナの声に反応してモアナと呼ばれた少女が目を覚まし、起き上がる

「ん……お母さん……?」

「モア、ナ……」

「!!お母さん!!」

母親の姿を見て一瞬安堵したようだが顔を見た瞬間血の気が引いて直ぐにマヒナの傍に寄り添う

「お母さん!お母さん!」

「・・・ごめんね・・・モアナ・・・貴女に次代の巫女を受け継がせるためにあんなにきつく当たって、ダメな母親ね・・・ここまで追い詰めてたなんてのも知らずに」

「そんなことないよ！モアナ、聖寮の人に強くしてもらったの！お母さんが喜んでくれると思って、戻ってきてくれると思って・・・」

モアナの言葉にマヒナは表情を暗くする。彼女はそれを見て押し黙る

「モアナ、お母さんはね・・・聖寮を許せなかった、そして自分も許せなかったのよ・・・」

「え？・・・」

「貴女をそのような姿にした聖寮を・・・貴女の苦しみに寄り添ってあげられなかった自分を・・・」

マヒナはそこまで言うとうろたえ、咳込み始める。ケンはずっとマヒナの傍に寄り左目で彼女の体を分析する、左目に映し出された情報から出された答えは『外傷及び内臓の致命的な損傷により延命不可』というあまりにも単純で残酷なものだった。ケンはマヒナに視線を合わせると、本人もわかっていたように最後の力を振り絞り、娘に最後の言葉を伝える

「・・・モアナ・・・これから貴方は一人で生きていかなくちや・・・ならないわ」

モアナはその言葉を聞いた瞬間顔が青ざめ母の手を取る

「そんな・・・いやだよお母さん!!やっと会えたのに！いやだよ！」

「お母さんだって・・・モアナとずっと一緒に・・・居たいわ・・・でも、それも叶いそうにないわ・・・いい・・・モアナ・・・どんなに辛くても・・・生きるの・・・どんなに、辛くても」

声が途切れ途切れとなり徐々に顔から生気がなくなっていく。モアナと握っていた手を放しそつと頬に添える。大粒の涙を流すモアナに微笑みかける

「お母さん・・・」

「モアナ・・・大・・・好きよ・・・」

その言葉を最後にゆつくりと目を閉じ、力をなくした手がモアナの

頬から落ちる。その時彼女は理解したのだ、母親はもういないと

「お・・・かあ・・・さん・・・うわああああん!!」

モアナが泣き叫ぶ中、今まで黙っていたベルベットは業魔手を出しモアナの横に立つ

「始末するのか？」

ロクロウは腕を組みなんの躊躇もなくベルベットに聞く

「この様子じゃ足手まといになるわ」

「喰魔に手を出すことは許さない」

後ろから不意に声が響く。声のした方向にモアナ以外顔を向けるとそこには一等対魔士であるオスカーが武器を構え立っていた。皆が構える中エレノアがケンにマヒナの遺体を預け立ち上がり、オスカーに問い詰める

「オスカー！ 聖察はなにをしているの？ お願い、教えて！」

「エレノア・・・君は知らなくていい」

「よくない！」

オスカーはエレノアの後ろにいるケンに気づく、ケンは遺体を抱え上げ泣いているモアナと一緒にいる

「生きていたのか、報告には聞いていたが」

「生憎、ただでは死ねないもので」

オスカーは遺体に目をやり気づく

「・・・例の業魔を・・・だが、エレノア、君が気を病むことはない。すべては世界の痛みを止めるために必要な犠牲なんだ」

エレノアはその言葉に爪が食い込むほどに手を握る

「業魔じゃない！ この人は母親だった！ この娘の、たった一人の——お母さん・・・だった・・・」

絞り出すような声と同時に涙を流すエレノアにオスカーは視線を落としながらも言葉を続ける

「だとしても強き翼をもつ者は——」

言いかけた所でベルベットがオスカーの懐に飛び込み回し蹴りを繰り返す

「ぐあっ!!」

蹴り飛ばされたオスカーが壁に背中を打ち付ける
「!!?」

「女の涙には気をつけなさい」

ベルベットが冷たく言い放つ後ろでモアナはマヒナの亡骸の手を握り泣いている

「うう……お母さぁん……」

「モアナ……」

「やるなら今だ」

ライファイセットが何かを訴えるようにベルベットに顔を向けるもベルベットはモアナの方へと歩き出す

「どいて、ライファイセット」

「待つて！あなたには優しさがありませんか!?!」

エレノアが必死に言葉で止めようとするがベルベットは止まることなくライファイセットとエレノアの間を通り過ぎる

「そんな議論をするつもりはない」

「目的はカノヌシを弱めることでしょう！繋がりがさえ断てば、殺さなくても——」

ベルベットはモアナとケンの前まで行くと業魔手をだす

「ケン、退いて」

ケンは何も言わず視線だけをベルベットに向けその次に数秒モアナの方を見るが直ぐに横に避ける。それを確認したベルベットはモアナに業魔手を振りかざす

「はあっ!!」

「ベルベットオツ!!」

エレノアの悲鳴が響く、その業魔手がモアナを喰らうことなく顔の横を通り抜け結界を食い破る。業魔手を引つ込め皆の元へ戻る、それと食い違う形でエレノアとライファイセットがモアナに走り寄る

「ほう、情にほだされたか？女の涙は実に危険じゃのう」

「グリモワールの言葉が気になったのよ。殺すのは後でもできる」

マギルウの弄りにベルベットも問答に続きロクロウが急かす

「連れてくなら、さっさと引きあげよう。敵の拠点に長居は無用だ」

モアナの元へ駆けつけたライファイセットとエレノアは姿勢を下げ
る

「僕は、ライファイセット。モアナ、一緒にここから出よう？」

「・・・お母さんは？此処に置いていくの・・・？」

エレノアは涙を拭きながらもモアナを励ます

「いいえ、置いていきません。空の見える場所まで連れて行きましょ
う、そうすればお母さんはずっと、あなたを見守っていますから」

「どうしてわかるの？・・・」

「・・・私のお母さんも、そうですから」

ライファイセットがモアナの手を取り立たせる

「行こう、モアナ」

「うん・・・」

ライファイセットに連れられ部屋の入口へ向かう一行。エレノアが
気絶しているオスカーを見る

「・・・」

曇る表情でオスカーを一瞥した後、改めて皆の後に続いて歩きだし
た

パラミデスの入口に戻る途中でエレノアが遺体を抱えているケン
に質問する

「ねえ・・・ケン、マヒナさんの遺体はどうするんですか？」

ケン
ケンはエレノアの方へ顔を向けた後でまるで眠っているようにし
ているマヒナの方へ視線を移す

「何がどうあれ、死者は弔わなければなりません。できるだけ遺体を
回収した後で一緒に火葬しようと思います。土葬では掘り起こされ
たりするかもしれません」

それを聞いていたアイゼンが何か気づいた後、皆に忠告する

「まずい・・・穢れが強まっている」

「ほお・・・早くも影響が出始めたようじゃの〜」

ベルベット達が見渡すと黒い塵のようなものが漂い始めて
いる

「おっと、ケン。あまり時間がないようだな」

「・・・せめてマヒナさんだけでも」

ロクロウがケンの方へ顔を向ける。表情を曇らせながらも足を速める

地上へ出た後入口付近に置いてあった聖寮の物資から火葬で必要な物を調達し砂浜に上で簡易的な火葬を行った。布で包まれた母親が炎に包まれるのを涙を滲ませながらも見届ける後ろ姿にケンは何も言わず炎に目を移した。火葬した後、遺灰の一部を調達した革袋に入れモアナに持たせ残りを海に散骨した

ハリア村の門にたどり着くまでには穢れがさらに強まっていた。この様子だと村にまで影響が出ているのではないかと不安を抱きつつ中に入ると状況は一変していた。村人からは生気がなくもたれ掛かる者もいれば座り込むもの、立っているのもやっとなものもいた。その様子を見ていた一行の元ヘグリモワールが歩いてきた

「グリモ姐さん、どうしたんじや？解説で、なにかわかったのかえ？」

マギルウの質問にグリモワールは答える

「違うわ・・・穢れが強すぎて・・・宿屋で本読んでる場合じゃなくなつたのよ」

「穢れ・・・」

ベルベットが穢れというワードに引っかけりを感じ村人たちに視線を向ける。村人たちの苦しむ声と共に体から何か靄のようなものがでてくる

「なに・・・あの体から出てるのは!？」

「“穢れ”じや。こりゃあ限界じやのう」

ケンもその様子を見ていたが何か違和感を感じバックパックをまさぐる、違和感の正体はルシフェルから贈られた銀のペンダントだった。そこから光が発せられている

「ケン、そのペンダントなに？」

「あ、うん。これも贈り物の内の一つなんだけど・・・」

「今はペンダントの話をしてる場合じゃないでしょ」

「あー、はい。そうなんですけど」

ケンがベルベットに謝っている最中にペンダントからあふれ出す光がますます強くなっていく。さすがに皆が驚きの声を上げる

「ちよつとー！それなによ!?!」

「こりや眩しいな」

「感心してる場合かー!」

やがて光が大きくなり辺り一面が真っ白になり数秒後、それが収まりベルベット達が目を開けると周りに漂っていた穢れは無くなっており村人たちは気を失い倒れている

「これは一体!?!」

「間一髪だったな、危うく村人が溢れた穢れで全員業魔化するところだった」

「穢れ……?村人の身体から出てた“アレ”が、業魔病の原因だともいえるの?」

アイゼンはその問いに答えることなく黙り込む中エレノアが迫る

「業魔病とは——業魔とはいったい何なのですか!?!」

その時門の外から声が響く

「まだ遠くには行ってはいないはずだ!絶対に捜し出せ!」

恐らく聖寮の増援であろう。ここにいてはいずれ見つかる

「……後で話す。この状況を見た対魔士達はここで足止めを食うはずだ、その隙に船に戻るぞ」

アイゼンが先頭を走りその後には皆が後に続く。因みにグリモワールはロクロウが背負っている。一行はそのままマクリル浜を通り抜け一気にイズルトに入る。幸いここまでは穢れの影響を受けていない様で特に問題もなく港にたどり着いた。バンエルティア号の近くでいよいよ業魔病についての本題に入る

「話してもらおうわよ、業魔病と穢れのことを」

ベルベットの質問に、グリモワールはアイゼンの方を見る

「あんだ、聖隷の禁忌を破るつもり?」

「こいつら次第だ」

「聖隷の禁忌？」

エレノアの疑問にグリモワールが答える

「ことは業魔だけの話じゃないのよ。この世界の仕組みといってもいい真実。下手に知れば人間そのものの足場が崩れるかもしれないほどのね・・・だから聖隷は、この件を人間に語ることを禁忌としてきたんだけど・・・」

その言葉にベルベットとエレノアの目つきが鋭くなる

「それでも知りたいか？」

アイゼンの忠告にベルベットが答える

「あたしは、もう人間じゃない」

ベルベットはそう言い切り視線をエレノアの方へ向ける

「知らないままで・・・自分をごまかして進むことはできません」

「・・・いいだろう」

アイゼンはその覚悟に応え、組んでいた腕を下ろし皆の方へ向き直り、真実を語りだす

「そもそも、『業魔病』なんて病気は世界に存在しない」

アイゼンの言葉にベルベットとライフィセット、エレノアは驚愕の表情を浮かべる

「人間は、元々誰もが業魔になる。心に抱えた『穢れ』が溢ればな」
「『穢れ』とはなんなのですか」

エレノアの質問に横にいたマギルウが代わりに答える

「理性では抑えきれぬ負の感情——人の心が本質として抱えている『業』じゃよ」

「知っていたのか」

「魔女じゃからのう。穢れは誰もがもつ心の闇。お主らの心当たりが
あろう？」

「言われてみれば、かなり心当たるな」

「・・・」

ロクロウの話す隣でベルベットは黙り込む

「人間は業に突き動かされる生き物だ。容易に負に傾き、穢れを発する。ほとんどの人間が、穢れを発しながら生きているといっただ

ろう」

「むしろ業魔が本来の姿で、ささやかな理性で人間の形を保っているだけかもしれない」

「民衆が、そんな事実気づけば大混乱になる。だから聖察は『業魔病』という仮病を広めた」

「だろうな」

ベルベットの考えに概ね当たりを付けるアイゼンにエレノアが反論する

「嘘です！だって開門の日以前に業魔はいなかった！」

「本来、業魔の聖隷も、特別な霊的才能——『霊応力』のない人間には見えない存在だった」

「並の人間には、突然狂暴化しただけに見えたんじやよ。その異常さは『悪魔憑き』や『獣人化』などと呼ばれて伝わったがな」

「なんで急に見えるようになったんだ？」

「人間全体の霊応力が増幅されたからだろうが、理由はわからん。だが、同じように降臨の日を境に、聖隷まで人間に見えるようになり、大量の対魔士が生まれた」

「きつとアルトリウスが絡んでいる」

ベルベットの脳裏にハリア村での光景がフラッシュバックする

「……でも、病気でなければ、村人が一斉に業魔になるはずがありません

「八つの首もつ大地の主は七つの口で穢れを喰って……喰魔は、人が出す穢れを吸収して、カノヌシに送る。なのに僕たちが地脈点から喰魔モアナを連れ出したから……」

「坊はかしこいのうそう、吸収されなくなった穢れが溢れたのじゃ」
「つまり、あたしのせいかな」

ベルベットが小さく呟いた横でエレノアも表情を暗くする

「ねえ、どうしたの？なんかみんなこわいよ……」

そこへ港の露店を覗いていたモアナが戻ってきた。彼女からしてみればこの重い空気は不安を煽るらしい

「おかげで、古文書の記述が信用できることが分かったわ。地脈点か

ら、すべての喰魔を引き剥がす。カノヌシの力を削ぎ、覚醒を阻止するために」

「でも、喰魔を奪ったら人間がどんどん業魔になっちゃうんじや・・・
「やらないきゃアルトリウスを殺せない」

「げに恐ろしき女よの〜」

「真実を知って進むか・・・いいだろう」

アイゼンの言葉を最後に皆は出航するため船に向かう。ベルベツトの歩いている横でロクロウがこれからのことについて話し出す

「外見が違う喰魔を捜すとすると、やっぱり地脈点を潰していくしかなさそうだな」

歩いていくロクロウ達の後ろでエレノアは視線を下げ立つ尽くしている。その表情はなにか葛藤しているようだ。

「人と業魔の違いは・・・」

そこにモアナがエレノアに近づく

「・・・えっと・・・」

モアナは何か話したいようだが言葉が詰まる、そこにライフィセツトが助け船を出す

「エレノアだよ」

「元気だして、エレノア。エレノアのお母さんも、ずっと見てるよ」

「・・・はい。その通りですね」

モアナの言葉を聞いたエレノアはほんの僅かに心が軽くなるのを感じ、改めてバンエルティア号へと歩を進めた

第26話 終わり

第27話

バンエルティア号へと乗船する時、ベンウィックから血翅蝶が依頼があるのでローグレスまで来るようにとの報告を受け、一行はゼクソン港へと舵を切るようになった。目的地に着くまでは暫くかかるので皆はしばしの休息时间となりそれぞれの時間を過ごしている。保護されたモアナはライフセットとエレノアが見るとのこと、今は船内に居る。ケンも甲板から海を見ていたが、表情は硬い。そこにアイゼンが後ろからコートに手を入れたまま歩いてくる

「パラミデスの事を考えているのか」

「はい」

アイゼンはケンの問答を聞いた後、後ろ向きに手すりに寄り掛かりケンの隣に着く

「モアナとマヒナの事だろ。お前はできることをしたんだ」

「ですが、母親を助けることができませんでした。・・・もつと力があれば、助けることができたはずなのです。・・・自分は無力です、一人助けることもできなかった。」

ケンは表情を変えることはなかった。だがその目は後悔の念が浮かんでいた、アイゼンは目線だけを向けていたが直ぐに空を見上げる「だがあそこで動かなければモアナは母親の死を看取ることすらできなかつた。お前も気づいているはずだ」

アイゼンの言葉どうりにパラミデスでマヒナに腕を伸ばしている場面を思い出す。寄り添う様ではなく明らかに捕獲しようとしていた行動だった、あのままだったらモアナはマヒナを喰らっていたのは十分予想できた。だがケンがいたことで最悪の展開は回避することはできた。

「いいか、お前は最善を尽くしたんだ。少なくともモアナの心は救ってやれたんじゃないのか」

「・・・そう願いたいです」

ケンはそこまで言うとう気持ちを切り替えるように表情を変える

「お〜い！あんちゃん。すまんが手を貸してくれ！」

「ゼクソン港に降ろす荷物がどうも多くてな。儂らだけでは時間がかかる」

「はい、わかりましたすぐ行きます」

ダイルとクロガネに呼ばれたケンはいゼンに僅かに頭を下げ船員達の手伝いへと向かった。ケンの後ろ姿を何も言わずに見送るアイゼンは、そのまままた空を見上げた

く

そこから暫くしてグリモワールによる古文書の解説が進んだため皆はデッキに集合する、ベルベットが船室にいるエレノアとライフィセツトを呼んできた。なぜかライフィセツトの顔が赤らんでいたが・・・

「かぞえ歌の二段目・・・覚えてる？」

「四つの聖主に裂かれても 御稜威に通じる人あらば 不磨の喰魔は生えかわる 緋色の月の満ちるを望み」

「そう。それについて話しとかなきゃと思つて、集まってもらつたわけ・・・」

『選ばれし者によつてカノヌシと喰魔が蘇る』つて、解釈したわよね』『どうにも『生えかわる』が引つかかるのよね・・・で、少し考え方を変えてみた・・・』

グリモワール自身、言葉の意味に疑問を持っていたようだ。一つの言葉で複数の意味に分類できる故に介錯が異なるのはどこも同じだ「カノヌシに選ばれた誰かが喰魔をつくるのではなく、カノヌシが喰魔になる誰かを選ぶ・・・としたら？」

「・・・？」

グリモワールの推測にエレノアは疑問符を浮かべる

『御稜威に通じる人あらば不磨の喰魔は生えかわる』・・・ここをどう読める？』

「・・・カノヌシの力に適合した人間が喰魔に生まれ変わる」

「モアナ・・・！」

ベルベツトの見解にエレノアはその被害者であるモアナを思い浮

かべる

「聖寮は人間を喰魔につくり変える方法を得て、実践してるってわけか」

「そんな・・・」

「驚くこと？ 『個よりも全』——それがアルトリウスのやり方でしょ（アルトリウスの・・・）」

ベルベツトは最後の言葉を飲み込み己の内にとどめる

「しかも『生え変わる』ではなく、あえて『生えかわる』と書かれている・・・『生え変わると』『生え替わる』の二つの意味が込められていると読み解けるのよ・・・」

「・・・喰魔は生まれ替わる。それなら『不磨』・・・不滅という意味が通じる」

「どうやら、全よりも“子”を優先してモアナを殺さなくて正解じゃったようじゃの」

ベルベツトの推理にマギルウがしゃれを言う

「・・・『殺さない』じゃない。カノヌシの覚醒を阻止するためには——喰魔は『殺せない』」

「ええっと」

今までの会話を聞いていたライファイセットが内容を理解しようとしたところでアイゼンが助け舟を出す

「殺したら、別の適合者が喰魔に生まれ変わるという事だろう」

「けど、穢れを喰らう口は七つ——喰魔の数は決まっているらしい」

ベルベツトの発言にライファイセットはその真意に気づく

「殺さなければ、次は生まれない」

「そうだ。つまり俺たちは、七体の喰魔を地脈点から引きはがした上で聖寮に奪還も殺害もされないよう、守らねばならん」

「難易度高すぎじゃろー」

「僕の虫も守らないと」

「ああ、ますます大事に扱えよ」

「うん、ますます」

ライファイセットはクワブトを大事に保護する決意を改めてする、因

みにケンが戻ってきてからクワブトを見せてもらった。アイゼンとロクロウはやれカブトムシだのクワガタだの主張していたが顎が大きくないし独立で稼働する角もない、形もどちらとの特徴が合わない事を踏まえ、左眼の分析も考慮に入れたとしてもカナブンの可能性が高いという結論が出たが、三人の期待を込めた視線にその事を伝えることができなかった

「しかし、こうなってくるとアジトが欲しいな。アイゼン、秘密基地とかないのか？」

「男のロマンだが・・・ない」

ロクロウの言葉にアイゼンはきっぱりと答える、秘密基地という言葉は男心をくすぐる

「人知れない場所で、かつ安定した『食事』を提供できる『穢れ』に満ちた場所」

「人気が無いのに、穢れに満ちた場所か。難儀なトンチ問題じゃのー」

「聖寮が管理するこの大陸にそんな都合のいい場所なんて・・・」

「こうしている間にもカノヌシは覚醒し続けてる。アジトを探しながら、残りの喰魔を集めるしかないわ。まずはローグレスに向かうのが先よ」

皆の意見が一致するのを横目にグリモワールは何かを考えこんでいた

途中の港で補給をしながら次の日の昼前にはゼクソン港に到着した、船から降りた一向の前方には同業の船乗りがひと悶着を起こしていた、

「なんか、すごい・・・」

「船乗りには短期なのが多いだけよ。怖がらなくていいわ」

ベルベットがライフィセットに教えてる横でベンウィックの荒げた声が響く

「おい、どういうことだよ!？」

「どうしたの?」

ベルベットがベンウィックに声を掛け近づく

「船止め料を上乗せしてきやがったんだ」

「ほう……いい度胸だな」

「そりゃあ、あなた方を船止めを受ける男ですから。だが、一級手配の海賊団だけではなく、特級手配犯まで匿うとは承知していない。追加分には別料金を請求するのが筋でしょう？」

商会の男の言い分には癪に障るところもあるが裏を返せば、金を払えば今まで通りの待遇であるということ。アイゼンはそれを承知の上で首を縦に振る

「……たしかにそうだな。ベンウィック、言い値で払ってやれ」

「へーい！副長も船長も、やっかいな奴に甘いんだから」

「さすがアイゼン副長。今後ともごひいきに」

商会の男はそれだけをいうとその場から離れる、船止めの手続きをするためだろう

「……迷惑をかけたようね」

「想定の内だ。気にするな、短期じゃない船乗りもいるという事だ」

アイゼンは一行の方に向かう、言い方からして根に持っているともとれる

「覚えておくわ」

く

港を出てしばらくして目的地であるローグレスの門を潜る、道中ひと悶着あったがそれから後は問題なく建物の前にたどり着く

「エレノア、あんたは外で待ってて。対魔士と一緒にいることは、血翅蝶のボスも知ってる。でも——」

「……わかりました。聖寮に顔を見られたくない客もいるでしょう」

ベルベットの言いたい事を理解したエレノアが了承する

「ライファイセット、あんたはエレノアについてなさい」

ベルベットは同時に目線で合図をする

「うん」

ライファイセットもそれに応える

「すぐに戻るから」

エレノアとライファイセットを外に残し他はギルドに入っていった

「わざわざ来てくれてありがとう。久しぶりね。ピーチパイ、食べる？」

「ピーチパイ」

ピーチパイというフレーズにケンが反応する

「そう、丹精込めて作った特製ピーチパイよ。食べてみて」

「わかりました。では」

タバサから出されたピーチパイ丸々ワンホールを受け取り椅子に腰かけ器用に切り分けて食べ始めるケンの横でベルベットが話を切り出す

「要件は？」

「ふっ……もう少し心に遊びを残しておきなさい。張り詰めた弓の弦は切れやすいわよ」

「要件」

急かすベルベットに忠告を無視されたタバサはため息を吐くと本題に入る

「この人を王都から連れ出してほしいの」

タバサが顔を横に向ける。それに釣られた先にローブを目深に被り、その座る姿の傍らに一羽の鷹のような鳥が居た

「……キナ臭い依頼ね。目的地は？」

「お上の手が届かないところまで」

「そんな場所があったら、こっちが知りたいわ」

「……俺たちもそんな場所が必要なんだが、なかなかうまい話がなくてな」

それを聞いていたタバサがふとあることを思い出す

「そういえば……ここしばらく聖寮本部と監獄島タイタニアの連絡が途絶えてるって噂よ」

「監獄島……！」

その言葉にベルベットが反応する

「監獄島は聖寮が管理している施設。それが連絡もつかないほどの状況になったというのか？」

「灯台下暗し・・・監獄島は使えるかもしれない」

「アジトにか。確かにあそこなら喰魔が喰べる穢れも多そうだ」

「しかも、逃げ出した囚人が好き好んで戻るとは、お行儀のいい聖寮は考えんじやろーしなあ」

「少なくとも状況を確かめる価値はある」

「お役に立てたかしらね」

タバサはケンにお代わりを渡しながら言う

「ええ。でも、もうひとつ。聖寮が業魔を匿っているって情報はない？」

「・・・離宮にいた業魔なら別の場所へ移ったようよ」

「どこへ？」

タバサの含みのある発言にベルベットが問いかける

「今言えるようなことはないけれど、近いうちに必ず」

「・・・わかった。こいつを逃がす報酬は、業魔の情報よ」

「承知したわ。アイゼン副長、メルキオルとやりあった件は聞いたわ。情報をつかめなくてごめんなさい」

「あれは完敗じゃったな」

「いい、もう済んだことだ」

「アイフリードのこと、諦めるの？」

アイゼンは組んでいた腕を解き、ベルベットの方を見る

「いいや。アイフリード海賊団は聖寮の計画を潰しに動く。俺たちでかい被害を与えれば、聖寮はアイフリードに人質の価値を見出すはずだ。罠を仕掛けてきた時を狙って、あいつを奪い返す」

「攻撃で活路を開こうってわけか」

「さすがだな」

「アイフリードなら、この策を取る。それだけのことだ」

↳

一方その頃ギルドの外の広場でライフィセットとエレノアがベルベット達の用事が済むのを待っている。日が沈み、もう夜だ

「遅いですね・・・」

「うん」

ライファイセットの方へ顔を向けたエレノアの脳裏にアルトリウスの言葉が浮かぶ

お前に、導師の特命を授ける。ライファイセットと名乗る聖隷を保護し、ローグレス聖寮本部に回収せよ

「……」

エレノアはその言葉を思いだすと苦い表情と手を握り締める。その様子にライファイセットが声を掛ける

「どうかした?」

「……ちよつと街を歩きませんか? 私が王都を案内してあげます」

「でも……」

「私のこと……信用できませんよね」

「ううん……そんなことないよ。僕、エレノアと王都を見たいな」

ライファイセット前にでてエレノアに微笑みかける

「……ライファイセット……あ、えつと……でも、また今度にしましょう」

「どうして?」

「それは……ほら、ベルベットが起こるし——」

「あたしがなに?」

エレノアが言いかけたと同時に横からベルベットの声が聞こえ、彼女ははぐらかす為話題を変える

「話しは終わったのですね。そちらは?」

エレノアがローブを被った人物を見つけ尋ねる

「闇の組織の親分から預かったお宝じゃ。悪党に奪われぬよう、監獄島へ隠しに行くぞよ」

「なぜ監獄島に!? 一体、どういう方なのですか?」

「聞いてない」

「はあ?」

「……」

話の内容に慌てるエレノアの横でライファイセットが何かに気づき鼻を鳴らす

「……なんかいい匂いがする」

「え・・・?」

エレノアも同じように鼻を鳴らすが何も感じないようだ

「クンクンしてないで、行くわよ」

ベルベツトは少し呆れながらも皆を連れて港へと向かって歩き出した

く

ゼクソン港へ到着した一行はそのままバンエルティア号が泊めである船着き場へ向かうがその船の横でベンウィックが商会の男と問答を打っていた

「だから高いつて! 足元見すぎだろ!」

「これ以下をお望みなら、どこかの慈善家を捜していただいた方がよろしいかと・・・」

「また何か揉めてる」

ベルベツトが仲裁に入ろうと歩き出した背後で何かが広がっていく

「!」

ライフィセットがそれに気づいたと同時に直前まで言い合いをしていた二人が突然黙りこくりに無気力に立ち尽くす

「・・・」

ベンウィック達だけではない、船着き場近くの露店の店員や客さえも同じように虚ろな目で茫然と立っていた

「ハ、これは!」

驚くエレノアの傍でベルベツトがベンウィックの肩を揺らす

「しっかりしなさい、ベンウィック!」

肩を揺さぶられベンウィックは頭を抱えながら意識を取り戻す

「あ・・・れ・・・? 俺、補給の交渉をしてて——」

その後ろで商会の男がぶつぶつと話し出す

「・・・物資は適価で・・・いえ、自由にお持ちください」

「え!」

先ほどの発言とは逆の言葉にエレノアが驚愕する

「人間は、営利行為などではなく、私心なく公益に奉仕することでの自

「己実現を達成するべきであり……」

「は？本当にいいのかよ？」

ベンウィックが確認の為だろうか声を掛けると商会の男がはつとしたように顔を上げる

「あ……いや……私はなにを……？」

ライフィセットは何かをやってきた方向、正確にはローグレスの方を見る

「坊も、今を感じたかえ？」

「うん……もう消えたけど、北の方から強い波みたいなのが来た」

マギルウの言葉にライフィセットはその力の特徴を話す

「聖隷がもつ力の支配圏——『領域』だ」

アイゼンの説明を聞いたエレノアが領域が迫ってきた方向を見る

「……この北って……」

「聖主の御座からか」

ベルベットが表情を強張らせてそちらの方を見る

「カノヌシとアルトリウスがなにかやったってことか？」

「……わからない」

ロクロウの疑問にベルベットが顎に手を当てる。このような芸当ができるのはアルトリウスしかいないがその行動の真意がわからない以上、考えようがない

「嫌な予感がする。急いで此処を離れた方がよさそうだな」

アイゼンの提案で皆足早に船へと歩き出す中フードの人物がポツリと呟く

「沈静化……か」

誰にも聞こえないようにつぶやいた一言にケンが気付く

「……？いかがされました？」

「……いや、なんでもないよ。今行く」

ケンはその聞いてすぐ歩き出す。言葉を発した本人もすぐに後続に続いた

夜間に出航したバンエルティア号の甲板でタバサから受けた以来

の本題に入る

「さて、無事に出航したことだし、そろそろ顔ぐらい見せたらどうだ？」

「・・・そうだね。失礼した」

ロクロウの催促にその人物は一言謝罪してフードを上げる。その人物の正体に大体見当がついていたのだろうエレノアが声を上げる

「やはり、パーシバル殿下・・・！」

「パーシバル・イル・ミッド・アスガード。ミッドガンド王国の第一王子とはな」

「次の国王か」

「私の正体に気付いていたんだね」

「お召し物から、王家の方々のみを使うことを許された高木の香りがしましたから。なぜこのようなことを？」

エレノアの質問にパーシバルが皮肉を込めて返す

「話さなければ、連れて行ってもらえないかな？ 対魔士が裏社会の者という理由も知りたいものだが・・・」

「そ、それは・・・」

「理由なんてどうでもいいわ。こっちも、こっちの都合で利用させてもらうだけよ」

「好きにしてくれていい・・・もう私は戻れないのだから・・・」

それを最後にパーシバルは甲板を後にする

「なかなかの食わせモノじゃな、あの王子さまは」

「パーシバル殿下は、穏やかで公正無私。智と徳を併せ持ったと評判の御方です。あの方がいれば、次代のミッドガンドも安泰だと皆が――」

エレノアの話にベルベットが割って入る

「とぼけてたけど、あの香りは、最初からこっちに気付かせるためにつけてたのよ自分の地位を明らかにして利用価値があると知らしめるためにね」

「・・・私は乗せられたのですね」

「監獄島への誘導も罠か？」

「その可能性は捨てないでおくべきだな」

「いざとなれば、王子を人質にする」

「その王子の命を狙ってる者が相手なら盾にならんかのー」

マギルウの言う通り闇ギルドに依頼を出したのがパーシバル本人ならば少なくとも身の危険を感じ聖寮を頼ることができない状況であることは確かである

「ま、気を抜くなってことだな」

「王子様・・・もう戻れないって言った」

「戻れない？」

ライファイセツトから出たフレーズにエレノアは首を傾げた

バンエルティア号は道中補給を受けながら次の日の昼頃には目的地であるタイタニアへと到着した。島の様子は依然と変わりない

「島全体が監獄なんだ・・・秘密基地みたい！」

ライファイセツトはその光景を見て男のロマンを刺激されたのだらう

「やけに静かだな」

「見張りの対魔士も見当たらんのだー」

ロクロウの疑問にマギルウも賛同する。暴動があつたとはいえ既に鎮圧が完了しているならば警備もあつていいはずである、それがなというのはかなり怪しい

「・・・」

アイゼンは横目でパーシバルを見る。アイゼンからしたら彼が一枚かんでいると見ているのだろう

「中の様子を確かめる」

ベルベツトは此処にいても埒が明かないと判断し監獄内部へ直接侵入することになった、波と風の音しかしない其処は嫌に不気味だった

第28話

自分たちが来るまでほぼ放置状態であった監獄島。しかし内部の状況がわからない以上慎重な行動が必要だ、ベルベット達はできるだけ音を立てないように扉を開け中に入る。屋内に明かりはないと思われたが所々に松明が壁に掛けてあり思ったより明るかった

「・・・どうやら先客がいるようだな」

「そのようね。けど、ここが監獄島だって知ってて自分からわざわざ来る奴なんてそうそういないはず・・・来るとすれば」

アイゼンが周りを確認しながら何者かが此処に来てしていると推測する。ベルベットも同じ考えで島の状態を考慮して試行していると

「聖寮ってどこか。大方、此処をまた使おうとか考えて生き残った業魔の始末に来た・・・か」

ロクロウが腰に手をあてつつ油断することなく辺りを窺う。その時前方、正しくは階段を上った先にある通路から金属音の混じった衝突音が響いた

「噂をすればなんとやら、じゃなく」

「近くなってきたな、来るぞ」

マギルウのいつもの調子にアイゼンが皆に警戒を促すと同時に先の通路から大きな音と共に何かガベルベット達目掛けて飛び込んで来た。血にまみれているが白い装束には見覚えがあった

「対魔士!?!」

エレノアが驚愕する中飛び込んでくる対魔士をケンが無意識に受け止める、対魔士は体中傷だらけで息も絶え絶えだった

「大丈夫ですか!?!」

ケンが床に対魔士を降ろす傍に走り寄る、対魔士はうわ言のように何かを呟く

「・・・うっ・・・首のない騎士・・・う・・・う・・・ま・・・」

それだけを口にして体が一度跳ねた後ぐったりと動かなくなった、エレノアは一しきり観察した後首を横に振り立ち上がる

「亡くなりました・・・」

ベルベットは対魔士の最後の言葉に疑問を浮かべる

「首のない騎士の業魔？」

思考する暇も与えないまま奥の通路からまた何か飛び出してきた。対魔士の言っていた騎士ではないがゴリラのような業魔が威嚇するように吠える

「対魔士を襲ったのはやはり業魔か」

「また暴動起こつとるのかえ？」

業魔がより一層吠え全員が各々構える

「クロガネ！ダイル！お前たちはモアナと王子を守れ！」

「おう!!」

「承知!!」

ロクロウの指示に二人は返事をしてモアナ達を下げさせる。それが合図となって業魔が飛び掛かってきた。全員は一度その場から散り業魔の攻撃をやり過ごす

「サルめ！去るなら追わんで！」

「油断しないでちゃんとしなさい！暴動の生き残りよ！」

業魔が吠えると奥の方からそれと同じ遠吠えが響く、最初は小さかった重い音がだんだんと大きくなる。先ほどと同じように飛び出してきたのは同じタイプの業魔、ブッシュエイプであった。それも二体

「こいつ仲間を呼んだのか」

「自分だけじゃ分が悪いと理解して頭数を増やしてきたか」

ロクロウとアイゼンが毒づくが向こうがそれに何か思うはずもなく三体になったブッシュエイプは本能のまま襲い掛かる。散開したことで近くにいた者同士で敵に対応することになった、内の一体はベルベットとエレノアとライフィセット、もう一体はアイゼンとロクロウとマギルウである。

「聖寮が鎮圧を行ったはずなのに、これほどの業魔が・・・！」

ブッシュエイプの太い腕から繰り出される大雑把で大振り殴り、だがそれに当たれば致命傷は避けられないと判断したエレノアが後ろ

に飛びのく

「対魔士でも手に負えない奴がいるって事よ！」

ベルベットが隙をついてブツシユエイプの顔に横蹴りを当てる、のけぞったと同時にライファイセツトの聖隷術が発動する

「エレノア！気を付けて！」

「はい！」

地面から黒い手が伸びブツシユエイプを捉えようとするがそれを本能で危険と察知し強靱な脚力で大きく飛びのく、エレノアは気を取り直し自身の獲物である槍を構え突撃する、その少し離れたところでロクロウとマギルウがもう一体のブツシユエイプと戦っている

「ロクロウや、あのサルの手は任せたぞよ！」

「承知！」

小太刀を構えたロクロウはこれから始まる敵との闘いに右目を赤く光らせブツシユエイプに向かって跳ねる、ロクロウの放つ殺気に反応して吠え剛腕を力任せに振り上げ叩き潰そうと脳天目掛けて振り下ろすがその寸前に横に飛び退き隙ができた胴体に斬撃を加える、任せたと言いながらもマギルウも聖隷術を発動させ掌から水圧弾を発射しロクロウをアシストする。そこからまた別の場所でアイゼンとケンが残りの一体とやり合うことになった。アイゼンは対魔士の遺体を安全な場所まで運ぼうとするケンに襲い掛かるブツシユエイプの顎を拳で殴りぬける、敵意がアイゼンへと向けられその腕から繰り出される攻撃を躲しながら時間を稼ぐ、ケンは遺体を部屋の隅に寝かせアイゼンの援護へと向かう

「アイゼンさん」

「ケン、さっさとケリをつけるぞ」

「はい」

ケンはアイゼンと向かい合っているブツシユエイプに速足で近づくと、それを察知して背後へ腕を振るうがケンはそれを受け止めると同時に勢いを利用して横回転をしながら体勢を崩させ腕を固め地面の叩き伏せる。アイゼンは伏せられた顔を助走をつけて思い切り蹴り上げる。ケンは前にも似たような構図を思い出しながらも今度は

脚を掴み後ろに放り投げ背後の壁にぶつける。ブツシュエイプは距離を取ろうと離れようとした時目の前にアイゼンがいた

「逃がしはしない」

アイゼンは敵に隙を与えぬように聖隷術を展開し瞬時に敵の目の前に移動し打撃を加える、反応できない怒涛のラツシュで怯えたように声を出して逃げようとするブツシュエイプの後ろでコインの弾く音が響く

「敵わないと判断して逃げるか、まあ生き物の本能とすれば当然だ。だが、俺がみすみす見逃すと思うか？」

その言葉を皮切りに敵の背中に連続の拳が叩き込まれる、背中は正面に比べ耐久力があると言われるが限界があり、打ち込み終えたところにはいくつもの打撃痕の後を残しブツシュエイプは倒れた、アイゼンは周りを確認すると他の面々も片が付いたようで各々の武器を収めていた

「一通り、片づいたな」

「はい、その様です」

「聖寮は囚人たちの制圧に失敗したようね」

「だが、此処にはかなりの対魔士が配備されていたはずだ、時間がかかるとしても全滅することはないはずだ」

数年此処で監禁されていたロクロウとベルベットは自らの経験を元に監獄島の状況を思い出していたがその横でアイゼンがある一つの推察を口に出す

「・・・蟲毒が行われたのかもしれない」

「コドク？」

初めて聞く言葉にライフェイスットが疑問符を浮かべる

「業魔同士を食らいあわせることでより強力な業魔を生み出す外法だ」

「囚人業魔が喰いあって、対魔士も敵わない業魔を生み出しちまつたってことか？」

ロクロウの推理にエレノアが苦虫を噛みつぶしたような表情を浮

かべる

「暴動が起こったからですね」

「誰かさんのせい、のう？」

マギルウは伸びをしながら片眼を薄く開きベルベットのの方を見る
「なにがあつたかは問題じゃないわ。ここを手に入れるために、なにをするべきかよ」

「死んだ対魔士は『首のない騎士の業魔』って言ってたよ」

ライファイセツトは対魔士の最後の言葉に引っかけかきを感じていた、多種類の業魔が潜んでいるはずにもかわらずその一個体に絞っているのだ、疑問を浮かべるのは当然のはずだ。アイゼンはその情報を元にある程度の目星をつける

「そいつが元凶かもな」

「なら、捜し出してぶっ潰そう」

どちらにせよ制圧しない限り事は始まらない、ロクロウは行動あるのみと判断したのでらう

「島を制圧するまで、この広間を拠点にするわ。王子とモアナは、あんなたちに任せる。侵入する敵がいたら全て排除して」

「わかった」

「あんまり期待しないでくれよ」

ベルベツトはダイルとクロガネに拠点の防衛と護衛の指示を出す。
ダイルは自信なさげのようにあらかじめ断っておく、エレノアがモアナの傍まで歩いていきしやがみ込み視線を合わせる

「モアナ、なにかあつたら私を呼んで。必ずあなたを守りに戻るから」
「うん、エレノアも気を付けてね」

遠目でそれを見ていたベルベツトが奥へと続く通路へ視線を向ける

「行くわよ」

皆がベルベツトに続く中ケンもそれについて行こうとすると後ろから声がかかる

「ケンよ」

ケンが振り返ると首のない武者甲冑のクロガネが歩いてくる

「クロガネさん、なにか?」

「ああ、この監獄の奥から強い気を感じる。アイゼンが言っていたこともあながち間違いないだろう、十分に気を付けていけ」

「はい、自分もそれを微かに感じていました。肝に銘じます」

ケンも同じことを考えていたようで奥の方を見ると気配を犇々と感じながらもベルベットの後に続いて行った

↳

監獄は予想通り業魔が闊歩していた、蟲毒紛いなことが行われていたように襲ってくる業魔は手ごわい者が多かった。だが実力を着実に高めているベルベット達は確実に仕留め奥へと歩を進めていく。監獄も中ごろにまで差し掛かったころエレノアが疑問に思っていたことをマギルウに聞く

「マギルウ、暴動の原因が『誰かさん』と言っていました、ここで何があったのですか?」

「なんだ。巡察官なのに聞いていなかったのか?」

ロクロウがその言葉に反応し意外そうに聞き返す

「大きな暴動が起こったことは聞きましたが、あなたたちを追いかけ始めたために詳細までは・・・」

「それほどの事件ではないわい。ベルベットも儂もロクロウもそしてケンも、この島に捕まっておつての」

「え!?ケンも監獄に!?!」

盛大に勘違いされそうなので訂正しておく

「いえ、自分は海で遭難して偶然ここに流れ着いただけなので・・・といってもベルベットさん達について行った以上言い逃れはできませんが」

「おや、そうだったのか。まあよい。脱獄するためにベルベットが囚人たちをそそのかして、暴動を起こさせただけじゃよ」

「囚人たちを利用したのですか!?!」

「そうよ。あたしらしいでしょ」

ベルベットは表情を変えることなくあっさり言い放つ

「・・・」

やりきれない表情を浮かべるエレノアの横で今度はライファイセツトが口を開く

「暴動はどうなったの？」

「最後まで見届けたわけじゃないが、鎮圧されかかっていた。はずなんだが・・・なぜか対魔士達は消えちまつてる」

「オスカーは報告のために帰還しましたが警備対魔士たちは、駐屯を続けていたはずですが・・・」

「・・・撤退したのでなければ、駆逐されたと考えるべきだろうな」

アイゼンはこれまでの経緯を聞き、推測を立てる彼の推理が正しければ強力になった業魔の餌食になったのだろうか

『首のない騎士の業魔』とやらにかえ？やれやれ、自業自得、因果応報とはいえやつかいそうじやのゝ

「後始末はつけるわよ」

ゝ

ベルベツト達、一部の者にとっては以前通った道に戻るように進みやがて最奥部、ベルベツトが捕らえられていた牢のある部屋にたどり着くとその奥から禍々しい穢れを出しながら重厚な足音を鳴らしながらこちらへ近づいてくる

「おいでなさったってやつか？」

「構えて、来るわよ」

暗がりから出てきたのは黒い鎧を纏った業魔ではなかった。その業魔は首がなくなっただ単に鎧が斧槍を握り立っているようなものだったからだ、だがそこから道中倒した業魔よりはるかに強い穢れを出していた

「首なしの騎士！」

「こいつが蟲毒の親玉か」

鎧の騎士はどこから声を出しているかわからないが吠えながら斧槍を構える

「なるほど狂暴そうだ」

「なあに、ベルベツトほどじゃないわい」

ロクロウのボヤキにマギルウは悪いジョークを無視してベルベツ

トが駆け出す、それを合図に他の皆も走り出す。ケンも後に続こうとした時左目から警告の表示がでる

「え」

首無し騎士、アンテイクアーマーが出てきた暗がりからも一つの陰が猛スピードで飛行してくる、アンテイクアーマーに集中していたメンバーは反応が遅れ、それを飛び越えアイゼンの胸目掛けて杖と槍が合わさった武器を突き出す

「なに!?!」

「アイゼンさん!危ない!」

アイゼンの右隣りにいたケンがアイゼンを押しつけた。だが次の瞬間ケンの左胸に敵の武器が突き刺さる

「うおっ!」

ケンはそのまま後ろへと飛ばされ、部屋の反対側の壁に叩きつけられそれを破壊しながら背中がめり込む

「新手!?!」

「まだ隠れていやがったのか!」

ベルベットとロククロウが急いでケンの元へ向かおうとするが彼らに行く手を斧槍が突き刺さる。アンテイクアーマーが目の前の獲物を逃すわけがなく、どこから声を出しているのかもわからないが鎧の中から音が反響しながら吠える。

「行かせないつもりね・・・」

「ライフセット、エレノア、お前たちはケンの方を任せる」

「うん!わかった!」

「皆さんもお気をつけて!」

アイゼンが二人に指示を出すと即座に返事をして後ろへと走り出す

「あ奴らだけで大丈夫か?まあ、儂らも人のこと言えぬがの」

「心配いらんさ、ライフセットを行かせた方が攻撃の手段も増えるし。何より時間がかからない」

「制圧なら早い方がいいからな」

「話はそれまで、行くわよ!」

斧槍を引き寄せて振りかぶりながら接近するアンティークアーマーに向かってベルベット達が駆ける

ベルベット達の方から金属と衝突音が響く中ケン自身は自身の左胸に突き刺さった武器を掴みめり込んだ壁から出る。不意打ちをした業魔を見ると女性型の業魔だった、その背中から禍々しい紫色の鳥の翼が生えておりその肌も翼と同じく紫色、その顔と体は妖艶な女性というにふさわしいものであったがその表情の奥からは獲物を甚振ることを至上の喜びにしているといったどす黒い感情を隠すことなく口角を吊り上げケンを見ている

「なんで自分の時はこういうのばかりなんだろう・・・か！」

左手で掴んでいた武器を引き抜き敵の業魔サキュバスクイーンの腹に前蹴りし距離を取る、エレノアがサキュバスクイーンの後ろから槍を振りかぶる

「裂駆槍!!」

エレノアの槍が相手の背中を貫かんとばかりの速さで迫るもサキュバスクイーンはそれを横に避けることで回避、避けた所で自身も同じやり方で反撃しようとするが

「旋独楽！」

エレノアは槍の石突を地面に突き立てそれを軸にして遠心力を使った回し蹴りでサキュバスクイーンを蹴り飛ばす

「鏡面輝き熱閃手繰れ！カレイドイグニス！」

蹴り飛ばしたエレノアの後ろからライファイセットが聖隷術を発動させる、サキュバスクイーンの周りに砕けた鏡の破片のような鏡面体が現れ、そこから一斉に光線が発射され敵の身を焼く、さらにその光線は他の鏡に当たると乱反射を起こし四方八方からの攻撃に敵は対処に手こずっている。

「お返し！」

聖隷術の攻撃が終わった瞬間にケンが走り出しサキュバスクイーンに体当たりをする、同じ不意打ちに対応できない敵はケンとは別の壁にぶつかり崩れ落ちる

「ケン！大丈夫!？」

「大丈夫、大したことはないよ」

ケンの身を案じてライフィセットが駆け寄り回復させるための聖隷術を使おうとするが、それをケンが止める

「自分のことは後、まだ相手はやる気十分みたいだ」

サキュバスクイーンは先ほどの楽しむような表情から怒りに染まり切ったように顔をゆがめる、自分に傷をつけたことが許せないのだろう

「さすがに手強いですね」

「こつちも全力を出さないとやられかねないわね」

エレノアも合流し槍を構えなおす。向こうは肉体よりも精神的なダメージが大きく叫びながら武器を構え突撃してくる

「避けて！」

エレノアの声が合図となり皆一斉に横に避ける。エレノアが敵の真正面に立ち聖隷術を唱え自身の槍を前に突き出す

「貫け緑碧！・霊槍・空旋！」

槍の先から竜巻が発生しサキュバスクイーンを吹き飛ばさんとするも、向こうも負けじと突き進む、その時足元から黒い手が伸び脚を絡めとる

「ケン！今だよ！」

「わかった！」

聖隷術で動きを止めたライフィセットの反対側からケンが走り出し、サキュバスクイーンの横つ腹に力を溜めたウルトラショットを放つ。小さな爆発が起こり敵が吹き飛ばす際の隙をエレノアは見逃さない

「参ります！」

エレノアの怒涛の連続突きが敵の身を削る、相手も消耗が激しく防戦一方になる

「奥義！」

エレノアが大きく踏み込み槍を突き上げる、武器で何とか防いだがこのままでは終わらない

「スパイラル・・・」

渦を纏った突きで体勢が大きく崩れる

「へイル!!」

渦に巻き込まれままたも吹き飛ばされるサキュバスクイーン。だがそこへ紙葉が舞いそこから放出される霊力で動きが止まる

「霊子解放！仇なす者に、秩序を齎せ！」

顔を動かすと両手を構えているライファイセットが視界に映る。サキュバスクイーンは本能で危険を察知して足掻くが既に時遅し。

「バインド・オーダー！」

霊力の衝撃波がサキュバスクイーンの体を砕き穢れと共に霧散し消えてなくなる

「やったー！」

「やりましたねライファイセット！」

ライファイセットとエレノアがお互い駆け寄り勝利を分かち合う。ケンも止血をしながら歩いてくる

「あつケン!?すぐに治すから」

「これぐらいならなんともないよ」

改めて聖隷術を発動しようとするのをケンが制止する

「その・・・本当に大丈夫?・・・血が」

エレノアが心配そうにするがケンは大丈夫とジェスチャーをする

「大丈夫、内臓までは達していません。それにまだ鎮圧が終わったわけではないですから体力は温存しておいた方がいいですよ」

三人の後ろから衝突音。みなが音のする方向をみると4人がアンテイクアーマーを責め立てているのが見えた

「ベルベット達の方も決着がつきそうですね」

「うん」

、

ベルベットとロクロウ、アイゼン、そしてマギルウはアンテイクアーマーとの戦闘も終盤に差し掛かった

「向こうは終わったようだなー！」

ロクロウが紙一重で斧槍を半身で躲し、小太刀による突きで鎧にダ

メージを与える

「おやおや？その鎧もガタが着ておるようじゃのー新調するのを手伝ってやるわい。ブラッドムーン！」

「さっさと片付けるぞー！冬木立!!」

真紅の霊場が鎧を焼き、高熱になった金属にアイゼンが冷気を纏ったフックで罅が入る。

「こいつはオマケだ、ウェイストレス・メイヘム！」

アイゼンのダメ押しの手打の連打でその体勢を崩す。ベルベットが後ろからアイゼンを飛び越え業魔手を振るい一部を喰らう。

「これでどうだ！空破絶掌撃！」

左腕で喰らい隙の無い動きで滑り込み右手の刺突刃を接触させた状態で刃を飛び出させる。その攻撃で鎧の一部が砕け穴が開く、砕けた所から穢れが漏れ出す

「ロクロウー！」

「承知!!」

ベルベットがアンテイクアーマーを蹴り後ろに飛び退くと同時にロクロウが目を光らせながら突撃する

「一転突破ー！」

アンテイクアーマーがロクロウを近づけまいと斧槍を振るうがロクロウの小太刀で手首を切り裂かれる。抵抗する手段を失ったアンテイクアーマーに小太刀を構え懐に飛び込む

「零の型・破空ー！」

鎧の穴へ小太刀を突き入れ横に切り裂く、アンテイクアーマーは限界に達しボロボロに崩れ落ちながらやがて霧散して消える

「よし、これで一件落着だな」

「そうね・・・」

ロクロウが小太刀を収め、ベルベットが返事をするがそれはどこもなく影を落とすようなものだった。その後ライファイセット達と合流し周囲が安全になったのを確認する、その時ライファイセットが何かを感じ取る

「また感じた！」

「また穢れが？」

「ううん、地脈点だよ。この島にもあるみたい」

「俺も感じる。直ぐ近くだ」

ライファイセットの感覚にアイゼンも賛同する。心当たりのあるベルベットが足元に視線を向ける

「・・・多分、この真下でしょ」

ベルベットが言い終わり地下牢への格子に手をかける。先に降りるベルベットに続いて皆も梯子へ続く

「ここは・・・？」

「監獄島で、一番嚴重に閉ざされた特別監房よ。ライファイセット、どう？」

ベルベットはライファイセットに確認を取る

「うん。ここが地脈点だと思う」

「地脈点に造られた特別監房という事は、此処に捕まっていたのは喰魔・・・？」

エレノアの推測にベルベットは上を見上げ静かに答える

「そう、餓えた『喰魔』が繋がれていた。そいつは、毎日放り込まれる業魔を喰らって腹を満たし、血まみれの唇をぬぐった。島に何百という業魔や悪党の発する『穢れ』をカノヌシに送っているとも知らずに」

ベルベットは此処にいた経緯を話し続ける

「ある日、絡繰りを知る女聖隷が現れ、結界を解いて喰魔を檻から出した。喰魔は、その聖隷すら容赦なく喰らった。そして」

ベルベットは左手を握り、それから業魔手を出す

「あたしは手に入れた。弟の仇を討つための『力』を」

「ベルベットが・・・喰魔・・・！」

「監獄島は、囚人の出す穢れを喰魔に喰わせる『餌場』だったんだな」
「だが、ベルベットが脱走したせいで穢れが溢れた」

「モアナの村と同じことが、ここでも起こったんじゃない」

ライファイセット以外は大方察しがついていたのか特に驚くことはなかった、だがエレノアは違った

「アルトリウス様が、そんなことをするはずが・・・」

「そんな・・・ってどれのことよ？」

エレノアの否定にベルベットが食いつく

「病弱な義弟を生贄にしたこと？喰魔になった義妹を監禁したこと？全部、あんたが讃える導師様がやったことだ！カノ又シの力を手に入れるために!!」

「きつと・・・なにか・・・お考えが——」

「どんなっ!!」

尚も食い下がるエレノアにベルベットが掴みかかる

「世界の痛みを止める？ふざけるな!!あの子の痛みは誰がとめるんだ!!あの子の絶望は誰が癒すんだ!!世界の為なら・・・ラファイは！あたしの弟は殺されて当然だっというのかっ!!」

ベルベットは言い切るとエレノアを突き放す

「・・・」

エレノアはなにもいう事が出来ずただ黙るしかなかった。身内が犠牲になったベルベットとそれを外から見ているエレノア。それぞれ異なる視点では見方も違う、他人事か、そうじゃないかで対応が変わるのがヒトというものである

「・・・」

ベルベットもやりきれない表情で顔を伏せるが少しして顔を上げる

「とにかく、これで喰魔を一匹探す手間が省けたわね」

「ベルベット・・・」

ライファイセットも深刻な面持ちでベルベットを見る。なんとも言えない空気の中エレノアに声が届く

(・・・たすけて・・・エレノアア・・・)

「モアナ？」

「なんじゃ？怒鳴られて幻聴が聞こえるようになってしまったのかえ？」

「・・・嫌な感じがします。モアナになにかあったのかも」

マギルウのジョークを流し辺りを見回すエレノア

「でも、もう首無しの騎士は倒したよ」

ライフィセツトの言う通り鎮圧の目標であったアンテイクアー
マーも徘徊していた業魔も排除している。だがエレノアには言いよ
うのない不安が拭えない

「でも、気になります。お願いです、広間に戻りましょう」

エレノアの必死な様子からとりあえず拠点の広間に戻るため皆は
梯子を上がり、モアナたちの待つ広間に向かって走り始めた

第28話 終わり

第29話

「ベルベットが喰魔じゃったとはのー。前々からミョクな奴じゃと思っておったが」

一行はエレノアの予感に従い拠点の広間に戻るため駆け足気味で移動中マギルウがベルベットに対しての印象を呟く

「それより、ベルベットが叫んだ言葉が気になります。ライフィセット、ベルベットがアルトリウス様の『いもうと』というのは本当なのですか？」

「・・・僕も初めて聞いた」

ライフィセットも初耳なので彼自身も少なからず動揺している

「もし事実なら、アルトリウス様の戦訓を知っていたのも納得ですが・・・」

「気になるなら聞いてみればいいだろう。ベルベット、お前とアルトリウスはどんな関係なんだ？」

「ちよ・・・無神経すぎますよ、ロクロウ！」

躊躇なくドストレートにベルベットに質問するロクロウをエレノアが咎める

「・・・いいわ。全部聞こえてるし。アルトリウスは、死んだあたしの姉セリカの夫よ。あたしと弟にとって、あいつは義理の兄だった。十年以上、一緒に暮らしたわ」

「やはりそういう関係じゃったか」

「アルトリウスは、義弟を生贄に、義妹を喰魔にしたということだな」

「そんな・・・自分の家族を——」

「関係ないのよ。家族なんて、あいつの『個』の問題、『個よりも全』理想の『理』を实践しただけなんですしょう」

「・・・」

ベルベットの言い分に当事者ではないエレノアは何も言えない

「おしやべりは終わり。港に急ぐわよ」

」

それから足を速め間もなく拠点の広間に到着する、その直後金属同士の強い力で擦れる音が響く。エレノアが手すりから下を見るとクロガネが腕を交差させ自らの体を盾にしてモアナ達を守っていた。ダイルも後ろから支えて後退を防いでいるが明らかな防戦一方であった

「ぐぬう・・・！」

「ちくしょう！なんて馬鹿力だ!!」

「させません！」

エレノアが身を乗り出し業魔に向かって槍を突き下ろす。だが敵は開いていた左腕に持っていた盾を構えエレノアの突きを防ぐ
「ぐう!!」

硬い物を突いた衝撃が自分の手元に還り、両手が痺れる。業魔はそのまま左手を払いエレノアを弾き飛ばそうとするがそれより前に盾を蹴り上げ攻撃範囲から飛び退き、モアナ達の前に着地する。その後ろで他の面々も飛び降りる

「エレノア!!本当にきてくれたね・・・」

「はい、約束ですから」

エレノアはモアナを振り返りそう答える

「首のない騎士を——馬の業魔!!」

「強い穢れを出してやがる」

「こいつが蟲毒で生まれた本物の親玉か」

ライファイセットとアイゼンとロクロウの後ろで控えてきたマギルウは何か分かったのか閉じていた目を開ける

「ピーンと納得じゃ！死んだ対魔士は『首無し騎士の業魔』ではなく、

『首のない騎士と』と『ウマ』と言いたかったのじゃな！」

「なんでもいい。全部倒して監獄島を制圧する！」

マギルウの解を流したベルベット達が構えるとそれに反応した首無しの騎士、デユラハンがグレイブを回しながら馬の腹を蹴り駆けだす。騎乗しているため馬と人の速さはけた違い、ましてや馬の業魔、異常なスピードであつという間に一行の前まで接近する。ベルベットも危険を察知しメンバーに声を張り上げる

「避けてー！」

ベルベットの声に反応し一斉に横に避ける、グレイブの範囲からは逃げられたが風圧がびりびりと伝わる

「これは二筋縄でも上手くいきそうにないなー！」

「さつさとケリをつけるわよ」

ロクロウが小太刀を構えながら走り、ベルベットも走り出す。別々の方向からの攻撃で一気に畳みかける

「鎧通しー！」

「崩牙襲!!」

二方向からの攻撃にデュラハンはすかさず盾でロクロウの小太刀を、グレイブの柄でベルベットの踵落としを受け止める

「ぬう！なんて硬さだ！」

「こいつ、予想以上に素早い!?!」

デュラハンは両腕を突き出し二人を弾き飛ばし今度はアイゼン達に向かって接近してくる

「ライファイセット！マギルウ！まずは奴の脚を止めるんだ！」

「わかった！重圧砕け！シルクラッカー！」

アイゼンの指示でライファイセットが聖隷術を発動させデュラハンの足元から無数の手の陰が伸びるが本能で察知したのか手綱を振り上げ大きく飛び上がる

「躲された!?!」

「まだ儂がおるぞー！アクアスプリット！」

マギルウの繰り出した水弾の連射、空中にいるデュラハンに盾を構え弾を防ぎながらグレイブを振りかぶり飛び込んでくる

「なんじゃと〜!?!」

「クソツ！喰らいなストーンエッジ!!」

アイゼンが地面に両手に手を付き目の前から石の柱を出現させデュラハンを弾き飛ばすも直ぐに体勢を立て直し着地する。

「(今なら隙がある、攻撃するなら今!) たあ！」

後ろに回り込んだエレノアが空きの背中に槍を突き立てようと跳躍する、槍の穂先がデュラハンの背中に突き刺さる、敵は一瞬の

け反るも騎手の状態に応呼したように騎馬がすかさず後ろ足でエレノアを蹴り上げる

「くうう!!」

咄嗟に槍を引き抜き柄で蹄を受け止めも馬本来の脚力に加え、蟲毒に生き残った業魔であるゆえにその力は凄まじく、エレノアの両腕が悲鳴を上げる。空中で受け止めたのが幸いしてそのまま後方へ吹き飛ばされる。

「ああっ!!」

「エレノアー!」

ロクロウがすかさず地面に激突しかけたエレノアをギリギリの所を滑り込みながら受け止める、デュラハンは次の標的をエレノアからアイゼン達に切り替えグレイブを構えながら馬を走らせる

「ストーンエッジ!!」

アイゼンが石柱を足止め代わりに出すが二度も通じず振りかぶったグレイブで碎かれる

「通じないのはわかっていた!」

アイゼンは碎かれた石柱の陰に隠れて懐に潜り込み拳の連打を叩き込む

「うおおおっ! ウエイストレス・メイヘム!」

拳の連撃がデュラハンの鎧を歪ませ金属が悲鳴を上げる。敵も為すがままにさせまいと盾でアイゼンを振り払う様に弾き飛ばす

「ぐはあー!」

アイゼンが壁に背中から激突し床に倒れ込むとデュラハンは止めを刺そうと接近しグレイブを振り上げる

「アイゼンが!! シェイドブライト!!」

「これは流石にマズすぎじゃぞ!! アクアスプリット!」

首を刎ねようとするデュラハンを阻止しようと二人が聖隷術で攻撃するがそれも盾に防がれるが少しでも時間を稼ごうと何度も術を放つ

「あんちゃん! 行ってくれ!」

今までモアナ達の護衛をしていたケンの後ろでダイルが声を上げ

る

「マイルさん」

「儂らは大丈夫だ、お前が今為すべきことを為せ」

クロガネもマイルの横に並んでケンを促す

「・・・分かりました！」

ケンは顔を前に向け走り出す。脚に力を込めグレイブが振り下ろされる寸前にアイゼンの前に滑り込み左腕で敵の刃を受ける。刃は肉を切り裂き骨を両断するかのように鋭利で鋭い物であるがケンの頑強な肉体はそれを良しとせず、10ミリほど食い込んで止まる

「馬の足を潰す！」

腰から短剣を抜き騎馬の脚目がけて投げる。前脚に短剣が突き刺さり悲鳴を上げながら暴れる馬にデュラハンが手綱を引つ張り大人しくさせようとケンの腕からグレイブを引き抜く、誰がどう見ても隙だらけであるのは明白だった

「今だー！」

ケンが右拳にエネルギーを集中させ赤く発光させ跳躍し騎馬の首目がけて振り上げる

「ふんっ!!」

レオパンチが首を貫き完全に無力化すると腕を曲げそのまま引き倒す、騎馬を失ったデュラハンは直ぐに起き上がりケンにグレイブを振り下ろそうとする

「隙あり!!」

横からロクロウがデュラハンの手元へ小太刀を差し込み上へ弾き返すと無駄のない動きで鎧の胸部目掛けもう片方の小太刀を突き立てる

「盾は弾かれるがお前自体はそうでもないようだな!!鎧通し!!」

もう片方の小太刀を重ね傷ついた鎧を叩く、斬撃ではなく衝撃での攻撃にデュラハンの鎧が耐え切れず胸部が碎かれる

「止めは任せたぞーベルベット!!」

「わかつてる・・・さっきはよくもやってくれたわね・・・」

ロクロウがデュラハンの腹部を蹴り飛び退く、体勢を崩して大きく

後退した後ろでベルベットが業魔手を出し立っていた。苦し紛れの反撃で振り返りながら武器を振るうがベルベットがそれを弾き飛ばし、跳び蹴りで胸部を攻撃するとデュラハンが胸を押さえ苦しみだすがベルベットは攻撃は止むことなく続く

「消えない傷を!!」

刺突刃で絶え間なく斬撃を加え反撃させることなく追い詰める

「刻んで果てる!!」

刃を突き刺し上体に飛びつき斬りあがる

「リーサル・ペイン!!」

業魔手で胸部を掴み握りつぶすとデュラハンは盾だけを落とし跡形もなく消える。脅威がなくなった事を確認したロクロウがライファイセットとマギルウに指示を出す

「ライファイセット、マギルウ、エレノアを見てやってくれ」

「うん!」

「やっと終わったと思ったら雑用かえ」

先に走るライファイセットにぶつくさ言いながらも後に続くマギルウ、その横でケンがアイゼンに肩を貸しながら起こす

「アイゼンさん、大丈夫ですか?」

「ああ、大丈夫だ」

アイゼンは頭を抑えながらも立ち上がり、ベルベット達の方へ歩き出す

「・・・あれもお前の師匠の技か?」

「はい、あれだけはある程度ちゃんと使えるので」

ベルベット達と合流したアイゼンとケン、そこでライファイセットが聖隷術でエレノアの傷を治しているが、彼女は今だに顔を歪めている
「エレノアさん、どうしました」

「傷はライファイセットに治してもらったけど、腕に痛みが・・・つう」

ケンは目を泳がせ考える

「(傷は治ったけど痛み・・・骨かな?) エレノアさん、ちょっと失礼します」

エレノアの両手を取り片手で器用に腕を捲る。一見外傷がないよ

うにも見えるが左目の機能の一つであるX線モードで見ると骨の一部が砕けてバラバラになっていた

「これは・・・骨折していますね、あの時の蹴り上げを防いだ時に腕が耐え切れなかったのでしょうか？」

「ケン、なんとかなる？ 制圧はしたけど万が一の事があってエレノアが動けないと戦力が落ちる」

ベルベットの言葉にケンが頷きエレノアの腕に手を当てコスモフォースを発動させる、手の隙間から光が漏れだしそれが十数秒、もう片方の腕にも同じ方法で光を当てて

「これで大丈夫なはず、いかがでしょうか？」

エレノアから手を放しながら立ち上がる、彼女は腕をさすったり回しながら感触を確かめる

「痛みが全くない。大丈夫よ、ありがとう」

「いえ」

エレノアがケンに礼を述べる

「流石は蟲毒だ。さっきの首無し鎧よりかなり強かったな」

「首無し鎧？」

「お前のことじゃない」

「ふふっ・・・」

ロクロウの言葉に反応したクロガネにツッコミを入れライファイセツトが吹き出しそうになっていると後ろから叫び声が響く

「きゃああっ!!」

皆が後ろを振り返るとデュラハンの盾が一人でに浮きあがりモアナがそれに驚いて尻餅をついてしまっている

「モアナッ!!」

エレノアが急いで走り出し皆も後ろに続くが盾は今にもモアナに飛び掛かろうとしておりとても間に合わない、必死に手を伸ばすエレノアの後ろを大きな影が追い越す、その陰は盾に喰らいついでモアナから引き離す。盾を地面に叩きつけ穢れを喰らい始める

「離宮にいた業魔!」

「いや、穢れを吸い込みおったぞ。そやつは喰魔じゃ」

正体が以前離宮で遭遇した業魔に驚くベルベットにマギルウが補足する

「いや、その鷹は私の唯一の友——グリフォンだよ」

ダイルとクロガネの間から声が響く、皆がその方へ顔を向けると以前に見たことがある人物がいた

「・・・タバサが『近いうちに必ず』と言ったのはこういう意味だったのね」

「殿下、なぜあなたが喰魔を!?!」

殿下と呼ばれた男こそミッドガンド王国時期国王、パーシバルその人であった。パーシバルの行動の真意を測りかねるエレノアが問いを投げる

「だから言った通りさ。グリフォンは子供の頃からの親友なんだ。喰魔になってしまっても、こいつは私の・・・」

パーシバルがグリフォンに歩み寄ると喰魔から元の鷹の姿に戻り彼の腕に乗る

「喰魔と知って逃がしたんだな。何を企んでいる?」

「なにも。私はグリフォンを、ただ逃がしたいだけなんだ」

アイゼンの質問にパーシバルの答えは単純なものだった

「流石は未来の国王、第一王子殿下。わがまま放題じゃのー」

マギルウが皮肉るとパーシバルは自傷気味に笑う

「ふふ、わがまま・・・か。そんなもの、一度だって許されたことはないよ。王子とは人ではなく、公器だ。自分のことより国と民を優先するように、つくられるんだよ」

パーシバルはライフィセットに顔を向け質問をする

「・・・例えば、法律の勉強中に背中がムズムズしたら、君ならどうする?」

「背中をかくよ。普通に」

「私が、そうすると傳育係に皮膚が裂けるほどムチ打たれたものさ。国の為の勉強より、痒いという個人の感情を優先させた・・・という理由でね」

「・・・」

パーシバルの受けた教育は帝王学に近い物だろう。実際貴族の教育には虐待レベルの躰があつたらしい。ライフイセツトはパーシバルの言葉に何も言えない

「そんな私にとって、こいつが空を飛ぶ姿を見て自由を想像することが、唯一の慰めだつたんだよ。だが・・・こいつがカノヌシの力に適合してしまった」

「聖寮が喰魔をつくつてることをミッドガンド王家も知っているのね」

「もちろんだ。王国は、導師アルトリウスの理と意志を全面的に支持している。だが、私は・・・こいつが閉じ込められ、空を奪われることだけは許せなかつた・・・どうしても」

パーシバルは苦虫を噛み潰したような表情でグリフオンを見つめる

「私は警備の対魔士を欺き、結界を解除させた。その時・・・対魔士はグリフオンに襲われて命を・・・」

「だから、もう戻れないって」

「対魔士一人の問題ではあるまい。喰魔をはがせば、王都の穢れも増大するじやろう」

水を差すマギルウだが彼女の言っていることも事実、喰魔が居なければ遅かれ早かれ穢れが溜まる

「・・・全部わかつていた。それでも私は・・・友としてグリフオンを犠牲にしたくなかつた」

「殿下・・・」

喰魔を失えば国と国民が危険にさらされる、だがそのために友人を見捨てなければならぬ。板挟みの中で苦しんだ結果なのだろう

「世界より一羽の鷹か・・・鳥はなぜ空を飛ぶと思う？」

「それはアルトリウス様の！」

そこまで聞いていたベルベットがパーシバルに問う。エレノアがアルトリウスと同じ質問をしたことに驚く

「解剖学の本には、骨が軽くて、翼を動かす筋肉にすごい力があるからだって——」

勤勉のライフイセットがベルベットの質問をそのまま解釈して答える

「いや・・・飛べない鳥は鳥ではないからだ。私はそう思う」

「・・・事情はわかった。この島の中なら自由にしていいいわ。ただし、逃げようとしたら殺す」

「いいだろう。聖寮に対する人質として使えるしな」

ベルベットとアイゼンが了承する

「承知した。グリフォン共々よろしく頼む」

「話をついたな。じゃ、アジト造りといくか！」

ロクロウの一声で監獄島の整備が始まった

あれから数刻が経ち、整備が一段落したところで皆がそれぞれの場所ですんでいた。ベルベットとも同じなのだがそこへモエナが歩いてくる

「ねえ、ベルベット。エレノアしらない？」

「あんと遊んでたんじゃないの」

「うん。でもいつの間にかいなくなっちゃったの。なんか悲しそうな顔してたから心配・・・おねがい、さがして」

「なんであたしが」

モアナの願いにベルベットは面倒そうな表情を浮かべる

「う・・・」

それを見たモアナが今にも泣きだしそうにしていたので渋々了承する

「・・・わかったわ。もう、すぐ泣くんじやないの」

ベルベットはそれから船員からエレノアの場所を聞き込みをし、彼女がいる場所を突き止めた。ベルベットはそこへ続く梯子を上り顔を出すと海を見つめるエレノアがいた

「・・・」

ベルベットは少し間を置きながら近づく

「こんなところにいたのねモアナが心配してたわよ」

「わざわざ捜しに来てくれたんですか？」

「泣く子には勝てなくてね」

その言葉にエレノアは笑みを浮かべる

「・・・そうですね。喰魔だけどモアナは小さな女の子です。あなた達と旅をして、初めて知ったことです。恐ろしい業魔も喰魔も、道具だと思っていた聖隷も、人と同じ想いを抱えて生きている」

「・・・」

「私は、なにも知らなかった。教えられたことを、ただ信じていただけで。業魔病の真実も、聖寮が何をしているのかも、なにひとつ・・・」

「知らない方が幸せってこともあるわ」

ベルベットが一つの例えを出す、知ってしまった故、知ろうとした故に後悔してしまうことは多々ある。だがエレノアはそれに異を唱える

「それは対魔士にとって卑怯な道です！なにも知らず！だから責任もとれない！私は、そんな生き方は——」

その眼には涙が湛えていたが流すことなくまた海の方へ顔を向ける

「・・・もう少し、ここで頭を冷やします。モアナには大丈夫だと伝えてください」

「ほどほどにね、海風は冷えるわよ」

「・・・ありがとうございます」

エレノアの感謝の言葉にベルベットははぐらかす

「違う。あんたが倒れでもしたら、モアナやライファイセットが心配するからよ」

そう言い、足早に中へ戻るベルベット。単に照れたのだろう

く

一夜明け、皆は広間に集まっておりこれからの行動を会議する者、談笑する者で様々だ。だがそこへエレノアの声が響く

「お話があります」

その声に皆がそちらに顔を向ける、その先には真剣な表情で歩いていくエレノアがいた。彼女は立ち止まり間を置かずに話し始める

「今まで隠していましたが、私はアルトリウス様の特命を受けたスパ

イです『聖隷ライファイセットを保護し聖寮本部に回収せよ』味方の命すら奪うことすら許された最重要の特命です」

「僕を回収……」

ライファイセットの回収という言葉に反応する、あくまでも物扱いする聖寮に対していい思いはしていないだろう。そこにエレノアがライファイセットに頭を下げる

「ごめんなさい。最初は、あなたを油断させて連れ出すつもりでしたが、もう聖寮の命に従うつもりはありません」

「アルトリウスを裏切るってわけ？」

ベルベットの言葉に首を振るエレノア

「いいえ。アルトリウス様が目指す世界も、その志も、人の世を慮ってのことと信じます。でも、その方法を信じられない自分があるので、ですから……」

エレノアはモアナへと視線を移し優しく微笑むと直ぐに表情を真剣なものへと戻しベルベット達の方へと向けなおす

「喰魔の保護に協力します。私自身の“答え”を見つけるまで」

「エレノア……」

「私は、本当のことを知りたいんです。自分に恥じない生き方をするために」

そこで笑い声が聞こえエレノアが驚く

「ははは！思いつきり感情論だな」

笑ったロクロウの横で腕を組んでいるアイゼンがつぶやく

「それがお前の“流儀”か」

「ようこそ、悪党の世界へ」

マギルウの煽りには直ぐ様反論する

「一緒にしないでください！感情で納得できないのに行動することこそ“理”に反するんです」

「ほんと面倒なヤツ……」

「面倒でもないかと困るでしょう！」

ベルベットのテンションの低い言動に言い返すエレノア

「うん、エレノアは僕の器だからね」

「はいはい」

ライファイセットのどこか嬉しそうな表情にベルベツトは観念したように呟いた

「エレノアの事が終わったことを察したロクロウが声をかける
「さて、俺達は次の喰魔を探そうぜ！・・・と行きたい所だが、手がかりがないな」

「エレノアが聖寮から喰魔の情報を盗んでくる、というのはどうじゃ？」

「それは・・・」

「無駄だ。裏切り者に機密を漏らすほど聖寮もマヌケじゃない」

「そうね。ライファイセットを危険に巻き込むわけにもいかないし。というか、エレノアにスパイなんて無理でしょ」

「・・・否定はしません」

ベルベツトの本音というか事実のエレノアは複雑な表情で睨む。
言い訳しない当たり自分でもわかっているようだ

「昨日行った一番地下の特別監房、行ってみよう。試してみたいことがあるんだ」

「・・・わかったわ」

「ケンって、こういう時あんまり話さないよね」

モアナが黙って話を聞いていたケンの隣で言う

「・・・喋ることないからね」

それから地下監房に行く途中、どうやらライファイセットも薄々感づいていたようでエレノアがショックを受けていた。一行は昨日訪れた監房へと降りライファイセットが羅針盤を取り出す

「・・・で、どうするの？」

「えっと・・・『地脈』は大地を流れている自然の力。そして『地脈点』は地脈が集中している場所の事」

「そうだ。カノヌシは地脈を利用して穢れを喰らい、覚醒しようとし

ている。お前は、地脈を感じる力に長けているようだ。ある程度近づけば地脈点の位置を……」

「近づかなくても感じたんだ。昨日ここに来た時、ずっと先にも、此処と同じ場所があるって」

「地脈を通じて、離れた地脈点を探知できるのか？」

ライファイセットの思わぬ才能にアイゼンが詳しく聞き出す

「多分。どこまでやれるか、喰魔が居るかどうかは、わからないけど……」

「それでも重要な手がかりよ。お願い、試してみてください」「うん」

ライファイセットは目を閉じ意識を集中させる。意識を集中させた先にある水面、そこに一つの雫が落ち、波紋が広がる。羅針盤を周りに動かし、何かを感じたライファイセットが目を開く

「どう？」

「はつきり感じた。地脈点は何十個もあるけど、特に大きいのをいくつか見つけたよ」

「大ききまで感じ取れるのか」

「うん、この島の地脈点是他より大きいみたい。同じぐらいのが東と南東の方にもある。多分、虫がいたワァーグ樹林と、パラミデスの場所だと思う」

「だとすると、大きな地脈点のどれかに喰魔がいる確率が高いわね」

「残る喰魔は三体。数が絞り込めれば総当たりもできますね」

「だな。お手柄だぞ、ライファイセット」

ロクロウに褒められたライファイセットが少し恥ずかしそうにしてると今まで座っていたマギルウが立ち上がる

「いやはや大したもんじゃわ。やはり坊は只者ではなさすぎるのー」

「そんなことないよ」

ベルベットはライファイセットの仕草に眉を一瞬動かす

「善は急げです。喰魔探しの準備をしましょう！」

「儂らは全然善じゃないがの♪」

一足先に梯子に向かうマギルウの寒いギャグなのかどうかははわ

からないがマイペースすぎる彼女にエレノアは頭を抱えた

広間に戻るとダイルとクロガネ、そしてモアナが集まっていたのが見えた。彼らの足元、正確にはクロガネの足元に折れた刀が打ち捨てられている

「また折れたか・・・未熟!」

「刀が弱いんじゃないかって、あんたが馬鹿みたいに硬いだけだろう?」

「いや、俺を斬れないようでは話にならない。もつと硬い素材で、硬い刀を打たねば・・・」

ベルベツト達に気付いたモアナがエレノアとライファイセットに走り寄る

「金剛鉄を試したいが・・・流石に夢物語か」

「『金剛鉄』って、この世で一番硬い金属だよな?」

ライファイセットがその金属のことについて質問する

「太古の遺跡で極稀に発掘される超希少金属だな、俺も欠片は見たことがあるが、刀が打てるほどの塊は聞いたこともない」

ライファイセットの横でアイゼンが答える、聖隷であるアイゼンできえ見たことがないのだ。

「いや。二百年ほど前。ある古代遺跡で金剛鉄の塊が発掘されたという噂があった。だが、運んでいた船が嵐で沈んでしまったと」

「地の底から海の底へか」

「沈没船か・・・海の底の財宝とか船乗りのロマンだよな」

ダイルが横で呟く、ロクロウは腕を組みながら考えている

「場所がわかれば引き上げられるんじゃないか?」

「船乗りも全員沈んだ。場所も知る者はない。そもそも何百年も昔の噂だ。当てにできん」

「そりやそうだ。ない物ねだりしても仕方がない。きつと別にいい材料があるさ」

「ダイルのくせに、真面な事を言う」

「ダイルのくせにとはなんだよ!」

「ダイルのくせに、怒ってるー」

「その使い方はおかしいだろ、モアナ!?」

クロガネの真似をしてモアナもダイヤルを煽る、言葉の選びがあれだが

「モアナのくせに、おかしいかなー?」

「ふふふっ!」

ライフセットが思わず吹き出し、モアナもそれに釣られて笑いだす。そこには和やかな空気が確かにあった

「さあて、目的は此処と似た大きさの地脈点。タイタニアから近い順に調べるわよ。方角はどっち?」

「近い順・・・それなら西の方角に一つあるよ」

「わかった。しつかり案内頼むわよ」

「うん!」

ベルベットに仕事を任せられライフセットは元気よく頷く、一行は西へ向かうためバンエルティア号の待つ波止場へと足を向けた

第29話 終わり

第30話

ライファイセツトの地脈点の感知による喰魔捜し、手短な場所として監獄島から西に一つあるとのことだったので一行は早速バンエルティア号で出航。目的の場所まで来たがそこに島なのはなく一面の海が広がっていた

「……ここが地脈点だよ！」

「……見渡す限り大海源じゃな。地脈点は海の底かえ？」

「あう……」

落ち込むライファイセツトにアイゼンが助け舟を出す

「世界の大半は海だ。海底にある地脈点も多い」

「いくら聖寮でも、海底に喰魔を捕まえておくのは難しいですね」

「ここはハズレみたいね」

「……ごめん」

ライファイセツトが謝るが何やら考えていたロクロウが口を開く

「いや、虫喰魔がいたんだ。魚の喰魔つてこともあるんじゃないか？」

「……一理あるな。奥の手を使って調べてみるか？」

「奥の手？」

「これだ」

ベルベツトの疑問にアイゼンが自信満々にあるものを取り出す。

その手には一本の竿が握られていた

「ええっ!?!」

意外過ぎてライファイセツトとエレノアは驚愕する、ここいらで秘密兵器か何かとと思っていたのだろうがそれが釣り竿だったのならなおさらである

「なんだ、その反応は？これは「フジバヤシの船竿」だぞ」

多分それではない

「長さ九尺三寸の一本竿。材は五年物の伊賀栗竹。生き物の如く粘る四分六の胴調子に——」

急に説明しだすアイゼンに流石のベルベツトもぽかんとしている。

無理もない

「腕と一体化するような握りの巻き具合。そして蠟色漆の品格ある仕上げ……」

ロクロウとマギルウも呆気に取られている。まったくの他人が見たら何言っただこいつと言われても仕方がないだろう

「文句の付けようのない名竿だ」

「そ、そういう事ではなく、喰魔相手に、なぜ釣りなのかと——」

「喰魔だからこそだ……忘れるなよ」

「……はい？」

何言っただこいつ

「ちよつと、釣りなんかしてる場合じゃ……」

ベルベットが言いかけるとロクロウとマギルウが割り込む

「まあ、やってみようぜ。丁度腹も減ったし、魚が釣れたら飯にしよう」

「儂は、コイかヒメマスが食べたいの♪釣れぬようならケンに素潜りさせればよい♪」

マギルウの言葉に竿を調べていたケンが目を少し開き驚く

「……まあボウズでしたら最後の手段でやりますけど。名前は変わりますけどヒメマスだったら海にいますよ。釣れるかどうかは別ですが」

「ほほく中々博識ではないか、では頼むぞく」

「え、それも釣るんですか？」

振り回すマギルウと振り回されるケンを見ながらベルベットは肩をすくめる

「……ツツコまないわよ」

アイゼンの提案通り理由がどうあれ釣りをすることになった。皆は甲板から釣りをすることとしたようだ、ケンは一人船尾の方へ回り海面を見る。

「これだけ沖ならいいのが釣れそうだ。でもものべ竿で船釣りだから……何か釣れるのかな……」

彼は船室に置いていた背囊から持ってきた複数の物を取り出す、それは彼が元居た世界にあった市販の仕掛けセットだった。鯛からチヌやらメバルやキスやら様々な種類があったがリールがないのベ竿になる。だかのベ竿での船釣りは経験がない

「・・・こりや素潜りのほうがいいかな。いやまずはやってみよう、ん？」

視線を動かすと何か大きい影が泳いでいるのが見えた。魚にしては形が不恰好だったのでケンは直ぐに気付いた

「あれは、まさかね」

手早く仕掛けを用意して試しに垂らしてみる。早速かかったので釣りあげてみると元居た世界と何ら変わらない鯛が釣れた。

「鯛か・・・普通は沿岸近くで回遊してるはずだけど、まあいいか」

一度上げて籠を取り付け同じく背囊になぜか入っていてそしてなぜか凍っていたオキアミを解凍して籠に詰め込みサビキ釣りを始める

「とりあえずこれなら夕食は大丈夫だろう」

甲板ではベルベット達が釣りを始めている、が、一人を除いて魚を釣るのに夢中で本来の趣旨とは離れている

「あ!!エレノア、引いてる!」

「焦らないで。釣りは力じゃなくてタイミングです」

「う、うん・・・!」

エレノアのアドバイスを元に竿を引き起こす

「来るぞ。準備はいいな」

「応!空中で刺身にしてやるぜ」

「喰魔だったら殺しちゃだめよ!」

なんかそれぞれ違うような気もするが

「今です!」

「ええーいっ!」

ライファイセットが思い切り引き上げるとそれは魚ではなく頑丈そうな箱が引つかかっていた、海藻や貝類が付いていないきれいな状態

だ。釣りあげたはずみで箱が開き中から角のようなものが出てきた
「魚でも喰魔でもなかったわね」

ベルベツトは少し驚きながらもすぐに表情をもどす

「腹の足しにはならんなあ」

「・・・」

「でも、ライフィセットに似合いそうですよ。着けてみたら？」

「名案じゃ。坊だけの個性が出るかもしれないぞ」

「僕だけの個性・・・」

ライフィセットが呟くとその角を取ると躊躇なく頭につける

「やっぱり似合う！いい感じですよ、ライフィセット」

左右に立派な角が生えたライフィセットを称賛するエレノア

「そ、そうかな・・・」

「うむ、グツと個性が強まったぞ」

ベルベツトはそれを見るが直ぐに釣り竿に目を向ける

「喰魔釣りを続けるわよ」

「・・・」

ライフィセットはベルベツトの反応に一瞬悲しそうにしたが直ぐ

に釣り竿の所へ向かい釣りを再開する

「ライフィセット、そんなに根を詰めないでも」

「喰魔を釣らなきゃ・・・そしたらベルベツトは僕を認めて——」

ライフィセットの言葉がどこか焦っていた

）

それからしばらく時間が流れるが未だに釣果はない

「むむう・・・釣れんなあ・・・」

「愚痴るな。思い通りにいかないのが釣りと人生だ」

「つれないなあ」

ロクロウの愚痴にアイゼンが付き合っているとエレノアの竿に辺りが来た

「あつ、私の方にきましたー！ええい!!」

エレノアが竿を上げるとその針にはライフィセットと同じ箱がかかっていた、その中から今度は瓶底メガネが出てきた

「ぬうう、儂もなんか来とおおる！のああく!!」

マギルウにも来たがこの流れだと予想がつく。釣りあげたのはエレノアと同じで今度は付け髭が出てきた。この海域で劇団か何かの嵐にあったのだろうかど勘繰ってしまふ

「ろくなものが釣れないわね・・・」

あれから釣果もなく独り言ちるベルベット。だがその独り言がライフィセットの耳に届いた

「・・・ろくなものじゃなくない」

「え・・・?」

竿を手すりに立てかけるライフィセットの方へ顔を向けるベルベット。だがライフィセットはわき目もふらずなにやらごそごそし始めた。しばらくして気になった他の皆の前にライフィセットが現れる。そこには先ほどエレノアとマギルウが釣り上げた仮装道具を全て付けたライフィセットであった

「おほく！まさに個性の塊！若さじやのく♪」

「お前、結構突っ走るタイプなんだな」

ライフィセットの奇天烈な行動に喜ぶマギルウと少し驚くロクロウ。黙り込むライフィセットにエレノアは気になったようど話しかける

「・・・どうしたんですか、ライフィセット?」

ライフィセットの恰好に呆れたベルベットが僅かにため息をつく

「おかしいわよ。とりなさい」

ベルベットが近づき身に着けている物を取り外そうとしたがライフィセットがその手を振り払う

「やめてよ！ベルベットに、なにがわかるの!」

「わ、わかるわよ。そんな変な恰好・・・」

声を荒げて手を振り払ったライフィセットに驚きながらも自身の感想を告げる。それを聞いたライフィセットが顔を上げる

「わかるのは、ライフィのことでしょ!!」

「・・・!!」

それを聞いたライフィセットの言葉にベルベットは目を見開き何

も言えずにいた。重苦しくなる空気の中クロウがベルベットの竿が引いていることに気づく

「ベルベット、お前の竿が引いてるぞ！」

「えっ!? ああっ!!」

ベルベットはすかさず竿を取るが予想以上に引きが強いのか防波壁に足を掛ける

「でかいぞー！」

「気合いをいいいい！」

アイゼンとマガルウが水面を走る糸を見ながらベルベットに告げる

「わかってる・・・わよっ!!」

その声と共に竿を振り上げ掛かった獲物を一気に引き上げる。引きからみてかなりの大物だろう、大きな物体は甲板の上に落下する重い音が響く。だがそれは魚でも業魔でもなく装飾の入った人間サイズの壺だった

「これは!!」

「たしかに大物だが・・・」

「壺・・・ですね」

「はあ・・・はあ・・・なんでこんなものが・・・？」

みなそれぞれの感想を言う中ライフィセットが何かに気づき横倒しになった壺を覗き見る

「なんか入ってる」

するとその暗がりから蛸の脚のようなものが出てきて這い出てくると思いきや次の瞬間勢いよく飛び出してきた

「うああっ!?!」

壺を住処にしていたのだろうか蛸が巻貝を背負った業魔ダンブオクトパスの群れが最初の一匹を皮切りに次々と出てくる

「蛸壺かいな!?!」

そのころ船尾で釣りをしていたケンの所にベンウィックやってくる

「おーい、ケン！大変なんだ。ベルベットのやつがでかい壺を釣り上げたと思ったら中から業魔がうようよ出てきたんだ。直ぐに来てくれ！」

「すみませんベンウィックさん。自分も大きい当たりが来てしまつて手が離せないんです」

そこには竿を立てながら格闘するケンの姿があった

「だああ！俺が変わるから早く行つてくれ!!」

「え、ああ大丈夫ですか？では」

ベンウィックがケンから竿を受け取つた瞬間思いつきり引つ張られて海に落ちそうになる

「どああああ!？」

「ベンウィックさん！」

すかさずケンがベンウィックの腕をつかみ間一髪で助ける

「一体何がかかってんだよ!？こんなの今まででなかったぞ！」

「自分もわかりません。ですがこれが釣れば夕食は豪勢になると思います」

同時刻、ダンプオクトパスを倒したベルベット達。奇襲された形だったが大した損害もなかった

「ふう・・・びっくりした」

「怪しいものに、うかつに近づいちやダメよ」

ベルベットに注意されたライファイセットが険しい表情をしながら顔を背ける

「・・・ライファイだったら近づかなかった？」

「そんなこと言つてないでしょ!!」

一見したら反抗期の弟とそれを説教する姉に見えるその様を他の皆がやれやれといった表情で見守る中先ほどの壺がまたゴソゴソと動く

「おい・・・まだなんか入つてるぞ！」

ロクロウが注意を促した瞬間壺の口から今度は腐乱死体、いわゆるゾンビがはい出てくる

「今度は動く死体が出てきたぞ!？」

「これは骨壺じゃったか!」

ゾンビが掴みかかろうとした瞬間すれ違いざまにロクロウが首を刎ねる

「だいぶ骨に身がついてるがな!」

く

その頃ベンウィックとケン

は「くつそく!なんて体力だ、全然へばらねえぞ!？」

「この主かなんですかね、これだと竿が持たなくなりそうです」

息を切らせたベンウィックと交代し、相手の体力が切れるのを待つ作戦に出たが一向に落ち着く気配がない。竿もかなりしなる。こつちはこつちで戦いが繰り広げられていた

く

蝮の次にゾンビの群れを撃退したベルベット達、息を切らせながら毒づく

「はあ・・・はあ・・・タコ軍団に死人の群れ・・・なんなのよこの壺?」

だがアイゼンはそんなことをしり目に壺の傍で屈みこむその目ははどことなく輝いて見える

「・・・素晴らしい。まさか、この目で見る事ができるとは」

アイゼンの変なスイッチが入ったようだ

「は?こんな悪趣味な壺に興味あるの?」

「ふっ・・・悪趣味か。素人はこれだから困る」

アイゼンは立ち上がり皆の方を向き直り説明を始める

「いいかーこれはクローデイン王時代の陶芸家グリユウネの『ミヅガメ』に間違いない『千年の至宝』といわれたが、二百年前の第二戦国期に失われてしまった伝説の壺だ凜とした形から、ほのかに匂い立つ色気。誘うように自己を主張しつつ、それでいてしつこくない」

勝手にこの壺の歴史を話し始めるアイゼンの後ろでエレノアが小声でつぶやく

「アイゼン・・・またですか!？」

「うむ。まったく理解できんが・・・男にはよくあることじゃよ」
そんなことを言われているとはつゆ知らず説明を続ける

「なにより、現在は失伝した『モフモフ釉』が醸し出す景色が、今にも動き出しそうな躍動感を――」

そこまで言いかけた時壺の方から何やらうめき声が始めると壺が黒く変色しはじめ形を変える

「なにいつ!?!」

変調に気づいたアイゼンがすぐその場から飛び退くとその壺が禍々しい物に変わった

「おお! 本当に動いたな」

「この壺は業魔だよ!」

壺の業魔パンドラポットは半分に分かれたドラゴンを象った彫像のようなものを腕がわりにしながらベルベット達目掛けて振り下ろす。皆は一斉に避けると腕が甲板に当たり船全体が振動する

「くっ! このまま暴れられたら船が持たない!」

「そうなる前に叩つ斬る!!」

「駄目だ! 業魔といえど歴史ある作品だ! 斬るのも割るのも許さん!!」

エレノアが腕を避ける。ロクロウが小太刀を抜き放ち斬りかかろうするがアイゼンが釘を差す

「そんなこと言っただって無理だよ! 壊さないようにするっただって!」

「儂は正直どーでもええがの〜」

「兎に角こいつを黙らせる!!」

ベルベットが走り出す、力は凄まじいが大振りなので隙が大きい。叩きつけた際の際を狙いパンドラポットの顔に蹴りを入れる、が、脚絆とパンドラポットから硬い音が響く

「くっ・・・! こいつ、硬い!!」

「監獄島にいたやつと同じような業魔か! 鎧通し!!」

ロクロウが後ろから小太刀を突き立てもう一つの小太刀で叩くように押し出す。パンドラポットが前にのけ反るも反撃とばかりにロクロウに腕を振り払うもそれを後ろに避ける

「おっと！やはり外は固いが中はそうでもないらしい！ライフイセツト！マギルウ！」

「うん！これなら、漆黒渦巻き軟泥捉えよ！ヴォイドラグーン！」

パンドラポッドの足元からどす黒い沼が出現し足が沈み始める。重量があるせいでまともに身動きできなくなる

「水浸しになるが構わんな？フラッドウォール！エレノアよ巻き込まれるでないぞ〜！」

「え？」

エレノアの後ろから水の壁が押し迫る！

「ちよっ・・・ちよっとマギルウ!?」

「跳べー！エレノア！」

「うわあ!?!」

ロクロウがマギルウを抱え上げ上に放り投げる。ロクロウはそのまま流れにのまれかけるが防波壁の上に飛び乗るパンドラポッドは沼から何とか脱出し逃げようとする

「割らないといったが逃がすとは一言も言っていないぞ」

横からアイゼンが指を鳴らした次の瞬間大きく踏み込む

「拍子（ダンディスト）！」

腰を踏み込んだ正拳から打ち出される空気が僅かながら巨体を揺らす

「無碍（ブランク）!!」

素早く一歩下がりが最小限の動きで鋭いフックをパンドラポッドの顔に叩きこむ

「蜃気楼（ミラージュ）!!」

駄目押しと言わんばかりにスウェイバックをして右拳に炎を纏わせ今度は頬に当たる部分をぶん殴る

「ベルベット！」

「わかってる!!崩牙襲！」

アイゼンの後ろから飛び上がったベルベットがパンドラポッドを蹴り潰した瞬間水の壁が敵を押し流す。パンドラポッドはそれに押しされ仰向けに倒れる

「エレノア！」

「はい！参ります！貫け緑碧！霊槍・空旋！」

空中にいるエレノアが槍を構え聖隷術を発動する。槍の先から竜巻を繰り出しパンドラポッドを巻き込み空中に巻き上げる

「行つけー!!」

甲板に着地した後も竜巻を繰り出し続け敵は少しづつ浮き上がる

「エレノア手伝うよ！鏡面輝き熱閃手繰れ！カレイドイグニス！」

「これはおまけじゃ。遠慮せずにもらつておれ、ブラッドムーン！」

ライファイセツトとマギルウの援護も入る。それが決定打となりパンドラポッドは徐々に形を失い、元の壺に戻り甲板にごとりと落ちる
「ふう・・・」

「よくやったぞエレノア！」

「急に放り上げないでくださいよクロウ！びっくりしましたよ」

「ああ、すまんすまん。丁度いい位置にいたからな」

「もう・・・」

能天気な声をかけるクロウに怒るエレノア夫婦漫才みたいな風景を尻目にベルベットが壺の方を見る

「やっとおとなしくなったか」

「待て！喰うなよ、ベルベット！」

アイゼンが後ろから声を荒げすぐさま壺の状態を確認するため走り寄る

「食べないわよ、壺なんて」

「結局、ここに喰魔はいないようですね」

「じゃな。いるなら『死神の呪い』でひっかかるはずじゃからの」

そこでエレノアが何かに気付いたのか大きな声を出す

「あっ！変なものばかり釣れるのは、そういう事だったんですね！」

「トラブルが当たり前で忘れてたわ。タコも壺もアイゼンのせいかな」

はいはい呪いのせい

「慣れとは怖いのー」

「僕の方・・・役に立たなかった・・・」

その時ライファイセツトの落ち込んだ声が響くその言葉にベルベツ

ト達は言葉を発することなく波と風の音が響く、しばらくした後、ベルベットが口を開く

「そうね」

「・・・」

「でも、あんたはこれくらいで諦めるヤツじゃない。そうでしょ、フィー？」

フィーという聞きなれない言葉にライフィセットが顔を上げる

「フィー・・・って？」

「あんたの愛称よ。特に意味なんてないけど——」

少しの間顔を背けるが直ぐに視線を戻すベルベット

「あんたは、あんただから」

「・・・ベルベット」

ベルベットの不器用な優しさにライフィセットの表情に笑顔が戻る

「フィーか。なかなか個性的な愛称じゃな」

「うん！」

「あきらめるなら、やめてもいいけど？」

「やだ！次の地脈点を探す！」

ベルベットのからかいにライフィセットは即答で拒否する。その顔はやる気に満ち溢れ一皮むけたとばかりの凛々しい顔つきだ。ベルベットもそれを見て柔らかい笑みを浮かべる

「む・・・壺の中にまだなにかあるぞ」

ベルベット達の微笑ましい場面はどこ吹く風といわんばかりに壺を探っていたアイゼンが何かを発見する。壺の中に手をつ込みそのブツを取り出す。中に入っていたのは金色に輝く鉱石だった

「この黄金の輝きは・・・金剛鉄（オリハルコン）！そうか・・・ここがクロガネが言っていた輸送船が沈んだ場所だったのか」

「やった！これをクロガネに渡せば金剛鉄の太刀ができるかもしれない。お手柄だぜ、アイゼン！ライフィセット！」

「大変でしたが、無駄足じゃなかったですね。私も、久しぶりに釣りができて楽しかったし」

「僕も、釣り、面白かった!」

「儂もじや。特に個性的な扮装がの〜♪」

マギルウに煽てられ赤面するライフィセット。それを見ていたベルベットは夕日が沈む水平線をみる。もうすぐ暗くなる

「そろそろ日が暮れるわね。タイタニアへ戻りましょう」

一同はベルベットと同じく沈む夕日を見つめていた

「はあ〜、微笑ましいシーンは結構じゃが。なにも釣れんかったことには変わりはないの〜」

船を動かす準備をしている中マギルウが樽の上に座りながらため息を吐く

「しよがないよマギルウ。釣れなくてもいい思い出になったでしよ」

「よよよ、坊にまたも言われるとわ・・・」

ライフィセットの慰めに涙をこぼす真似をするマギルウ。エレノアがアイゼンの方を向く

「今日の夕飯、どうしましょうか?」

「魚は干したやつしかないが食糧は他にもある、問題ない」

「なにかメニューを考えないといけないわね・・・」

それを聞いたベルベットが指に手を当て献立を考えていた時船尾の方からベンウイックの声が聞こえた

「だあ〜!!惜しかったあ!あれを釣り上げれば何日かはうまい魚料理食えると思っただのによ〜」

「バレちゃったものは仕方ありませんよ。それにほらこれがありますから」

皆が声のした方を振り向くとベンウイックと大きな桶をもったケンが下りてきていた

「随分遅かったなケン。いままでなにしてたんだ?」

「すみませんロクロウさん。さつきまで大物釣りあげようと頑張ってたんですけど」

ロクロウに質問され謝罪するケン

「そうじゃそうじゃ！お主が呑気してる間儂らは大変だったんじゃぞ
〜」

「いや〜はは・・・」

マギルウはポカポカと駄々っ子パンチをケンに繰り出す。アイゼンが桶に視線を向ける

「なにか釣れたか」

「はい、大きいのは逃がしてしまいましたが。程々の大きさのものが
だいぶ」

「そつす副長！あとちよつとつてとこで針が外れたんです」

甲板に桶を置くとライフイセットとエレノアが中を見る

「うわ〜いっぱい釣れてる！」

「これだけの量、どうやって釣り上げたの？」

桶の中にはアジやアジゴ、鯖などの回遊魚が一杯に入っていた

「ええ、特別な仕掛けを使っただんです。後でお教えします」

「これだけあれば船員全員どころか数日持つな、よくやったケン」

「ようし！今夜はこれを使って豪勢に行くとするか！いいよなベル
ベットー！」

「はいはい、その代わり下ごしらえ手伝いなさいよ」

ベルベットは二つ返事で了承するがどことなく楽しそうにしてい
た

第30話 終わり

第31話

アジトであるタイタニアで暫く過ごした一行は、ライファイセットの地脈探知の結果により、バンエルティア号をミッドガンドへと進めていた。出航するまでにタイタニアではいろんなことがあった。ロクロウが落ちていた手紙を拾ったのがアイゼン宛てのものだったようでそれで一悶着、同じくロクロウがクログガネに頼んで作ってもらった両方表の金貨でアイゼンに表を出させようとするも鳥に奪われるはグリフォンに喰われるは雷が落ちて木っ端みじんになるわで散々であった。王子のグリフォンも飛び回ってわ獲物を捕まえてくれて食料調達には困らないが獲物がどんどん大きくなってきてベンウィックも困っていたが王子の嬉しそうな表情を見て言うに言えないとのことだった。そしてついにワアーグ樹林で保護したクワブトの正体が判明した。エレノアが頼んでいたようでビエンファーから「ミッドガンド希少昆虫図鑑」なるものを受け取って早速調べてみたら、名はグロツサアギト。種としてはカナブんに属する昆虫であった、が、ライファイセットは断固その事実を受け入れるのを拒否してライファイセットクワブトを譲らなかつた

ミッドガンドに到着しゼクソン港に入港したバンエルティア号、船員達が積み荷を降ろしている中でベルベット達は波止場で今後の予定について話し合っている所で後ろから声が聞こえた

「ボスから、あんた達に伝言を預かってきた」

左腕に赤い布を巻いた男、血翅蝶の組員が歩きながらこちらに向かってくる

「ローグレスの東にあるアルディナ草原に、狂暴な業魔が出るらしい。あんたらの探してる奴かもしれない」

そこでマガルウが質問する

「ローグレス東の街道は封鎖されとったはずじゃが？」

「一時的にな。今は解かれてる、アルディナ草原の先にある村、ストー

ンベリイに件の業魔を目撃した仲間がいる。詳しい話は、そいつから聞いてくれ」

「・・・わかったわ」

「同じだね、僕が探知した——」

「タバサに礼を言っておいてくれ」

ライフイセットが言いかけたのを割り込んだアイゼンが組員を返す。ライフイセットの探知能力がばれた場合のリスクを考慮したのだろう

「喰魔がいる可能性が高まったな。今の情報、確認してみようぜ」

「ええ、まずはストーンベリイに行ってみる」

ロクロウとベルベットが打ち合わせしている横でライフイセットがアイゼンに近寄り先ほどの出来事を質問する

「アイゼン、僕、なんか失敗した？」

「いや。血翅蝶やっちらにタダで情報をくれてやる必要はないと思ったただだ」

「？」

頭に疑問符を浮かべるライフイセットにロクロウが答えを出す

「地脈点のことだよ。俺達だけが知っている情報だろ」

「でも、血翅蝶は味方でしょ？」

「敵ではないが、味方とは言い切れん」

「裏同士というだけじゃ。それも、時と場合によってはクルリと変わる」

「こちらが信頼しなければ、相手も信用しないでしょう」

エレノアの意見を聞いたアイゼンは組員が去っていった方角を見る

「初めて会った遣いの者が、俺達の顔を知っていた。告げてもいない行き先に、先回りしてな」

「あつー！」

これまでの行動を思い出し驚愕するライフイセット

「こっちは血翅蝶やっちらのことをろくに知らないのに、向こうは全部お見通しってわけね」

「儂らを売るのは造作もないと、暗に言うておるわけじやな」

マギルウの言う通り、国家を相手にする闇組織はありとあらゆる手段を使って自らを強くするのは当然のこと、使えるものは使い利用する。よくあることだ

「俺たちが聖寮に対抗する『戦力』であるうちは協力できるだろう。だが、切り札は多いほどいい」

「互いにナイフを突き付け合っているのを承知で背中を預ける・・・それが裏社会の『信用』ってことね」

「厳しいね」

裏社会の実態にライファイセットは表情を暗くする。だがそれも直ぐに終わる

「タバサのお店の料理の味は、簡単に信用できるけど」

「ああ、それは同感だ」

アイゼンもそれには賛同していた

く

貨物積み下ろしをしていたケンと合流した一行はアルディナ草原へと移動中にライファイセットが話を切り出す

「ストーンベリイは、行くのは初めてだよね」

「なんで通行止めされてたんだ？業魔か」

ロクロウも疑問に思っていたようで、詳しいであろうエレノアに質問する

「いえ、アルディナ草原で巨大な竜巻が発生して、輸送キャラバンが何百人も行方不明になったのです」

「寒冷化の影響による異常気象だな。雷が頻発した地域や、豪雨に見舞われた街もある」

アイゼンがエレノアの証言に補足する

「ええ・・・そういった地域への街道は、聖寮によって厳しく往来が制限されています」

「解除されたってことは、竜巻は収まったって思っているのよね」

「どんな街なのかな・・・」

「結構いい所でフよ～～!!」

ライフィットが想像している所でビエンフーが割り込む

「東に広がる森林地帯では、宝石が採取できるし、珍しい植物も昆虫もたくさん生息してるでフ〜。数少ない住民たちは、動物の肉や毛皮を必要な分だけ売り買いして暮らしてるし、静かで良いところでフよ」

「随分詳しいんだね」

ビエンフーの説明にライフィセットが感心する

「こやつ初恋相手のノルミンの故郷なんじゃよ」

ビエンフーの後ろからマギルウが話に入り込む。それを聞いたビエンフーが恥ずかしそうに声を上げる

「ビエ〜ン、姐さん、恥ずかしいじゃないでフかく、今は離ればなれになってしまったでフけど、あの娘とは、心が通じ合っているんでフよ〜」

恋人に思いはせる横でマギルウが話を切り出す

「儂とお主が契約して旅に出た直後、あの娘は男前のノルミンと恋仲になり村を出たがの〜」

「ええええっ!? そんなの初めて聞いたでフよ!! 姐さん、いつその話を?」

驚愕したビエンフーがマギルウに詳細を聞き出す、マギルウはわざとらしく頭に指を当てる

「儂から逃げ出したお主を探す旅の途中じゃったか?」

通じ合ってる○

「いや、村を出て数分後、忘れ物を取りに戻った時じゃったか…ま、ど〜でもいいがの〜」

「よくないでフ〜!!」

「男が女にふられたぐらいで泣くな。ストーンベリーへ急ぐぞ」

涙をまき散らすビエンフーを横目で見ながらきっぱりと言った

↳

ダーナ街道を歩きながらストーンベリーに向かう道中も中ごろ。山道へ入った一行は丁度閉鎖されていた交通路付近の聖寮の拠点を通り過ぎていた。その間にライフィセットに関してまた一悶着あったがそれはまた別の話。山道が少し険しくなってきた道を進んでい

たベルベット達の後ろから強い風が吹いてきた

「……ん？」

通常の風とは異質な物を感じたベルベット達が吹いてきた方向を振り返る。その方向から巨大な物体が空を飛んでいた

「あれは！」

「ドラゴン……!!」

アイゼンの言う通り、ドラゴンはこちらに気付いていないのか、そのまま飛び去って行く

「アレじゃな。アルディナ草原の業魔というのは」

「自由に飛んでたが、喰魔なのか？」

ライファイセットが羅針盤を取り出して地脈点を探る

「地脈点！感じた！あっち！あの岩山の上あたりだよ」

ライファイセットがそちらの方を指さす

「確かめてみましょう」

それからしばらくして岩山の頂上付近へとたどり着いたベルベット達

「ここ！僕が感じてた地脈点だ」

「喰魔もいないし、結界もないようですね」

「またハズレかな……」

エレノアが辺りを見回す、彼女の言う通り喰魔を閉じ込めておくはずの結界もない。喰魔が飛び回っている時点で矛盾が発生している
「決めつけるのは早いわ。ドラゴンが結界を破ったか、聖寮が制御しきれいていない可能性もある」

「……ありうるな、ドラゴンは最強の業魔だからな」

「問題は、ドラゴンが喰魔かどうかだ」

「そこね、予定通りストーンベリイで情報を得ましょう」

ドラゴンに見つからない内に移動を始めるメンバーの後ろでマジルウがため息をつく

「やれやれ、一番の問題は敵がドラゴンというトコじやろうに……」

岩山を下りしばらく進むと大きめの門が見えた、そこを開け村に入

る。ここストーンベリイは開拓の村と言われる通り豊富で育ちの良い樹木、良質な石材、清純な水資源。ここに集まった職人は恵まれた環境で多義に渡る産業を模索している食料の品種改良や心水の開発も盛んにおこなわれているらしい

「さて、血翅蝶がいそうな場所と言えば――」

「宿屋をあたるのが定石だな」

アイゼンの提案に従い、村の中にある宿泊施設へと入る。手っ取り早く捜すために受付へ聞こうとしたところアイゼンの視界にテーブルに腰かけるザビーダの姿が入った

「ザビーダ」

「よう、副長」

「・・・」

険しい表情をしたアイゼンは何も返さなかった。ライフィセットがテーブルの上に置いてある心水の入った氷入りグラスが二つ置いてあった

「誰かを待ってるの？」

「いや、あいつ」との願掛けさ」

「あいつ・・・？」

ライフィセットはその言葉に疑問を浮かべるがアイゼンがそれを遮る

「・・・行くぞ。ここに血翅蝶はいないようだ」

アイゼンが宿屋から出ようとするところでザビーダが呼ぶ

「いいのかよ？俺を放置して」

「誰にも、邪魔されたくない時間がある」

振り返ることなく外へ出るアイゼン。何のことかわからないライフィセットがザビーダの方を向く、ザビーダ本人ははぐらかすようにはにかむ

「フィー」

「う、うん」

ベルベットがライフィセットを呼び他の面々が出る。ケンも後に続こうとしたが横からザビーダが声をかける

「よう兄ちゃん、しばらくだったな」

「はい、ザビーダさんも。そう言えば貴方に借りましたね、なにか自分にできることはありませんか」

「ああ、そうだな・・・いや、まだいいさ。それより早く行きな、外で連れが待つてるぜ。話はまた今度だ」

「?・・・ええ、わかりました。では」

ケンが合流するとライファイセットが先ほどのザビーダの言葉を思い出す

「願掛けって、なんのことだろう?」

「ザビーダが呑んでいたのは『いばらの森』だった」

「おお! 大切な人と呑み交わせば、永遠に添い遂げられるというロマン無双の逸品じゃな」

「だが、めったに手に入るもんじゃない。俺も一度呑んでみたいと思ってるんだが」

「きつと、ザビーダにとって特別なものなんだね。だからアイゼンは・・・」

アイゼンは後ろ姿を見せたまま呟く

「・・・そんなんじゃない」

しばらく沈黙が続いたがベルベット達の後ろから声が響いた

「ベルベットさんですね」

「あんたね。例の業魔の目撃者は」

左手首に朱色の布を巻いた女性が歩いてきた。間違いなく組織の組員だ、組員は静かに会釈した

「来る途中、空を飛ぶ蛇みたいなドラゴンを見た。あんたが見たのも?」

「はい、同じ業魔です。あいつの巢は、アルディナ草原の岩山の上で・・・」

「岩山には行ってみたけど、いなかったわ」

「戻ってくるのは『雨の日』だけです」

組員がそれを言うと同時に雷の音が辺りに響いた

「雨の日だけ・・・か」

ベルベットの言葉と同時に元から雲だった天候が雨に降り始めた
「ぬわく、あつらえたかのように雨がく！嫌な予感がピンピンじゃ
わ・・・」

「わかったわ。もう一度行ってみる」

ベルベット達は再び岩山の頂上へと赴く、雨でぬれた草を踏むたびに大きな音がしたが雨音で気づかれることはないはずだ。そして目的地に着くと組員の言う通りドラゴンが佇んでいた。皆は素早く身を低くし、隠れる

「なんて殺気・・・」

「それに、ものすごい穢れを発しておるわい」

「つまり喰魔じゃないってことか」

「このまま退くわよ。無理にこんなのとやり合う必要はない」

各々の意見が交差する中今まで黙っていたアイゼンが口を開く

「・・・俺にはある」

「お、やる気か！」

立ち上がるアイゼンにロクロウが静かに声を上げるがベルベットがそれを止めようとする

「は？何言ってるの!？」

「そうです！戦ったらただじゃ済みませんよ！」

エレノアが隠れているのはずなのに辺りに響くくらいに大きな声を出してしまった。それと同時に唸り声が辺り一面に広がった

「あ・・・すみません！」

皆はエレノアの方を何やってんだ見たいな表情でみる。人は彼女のこのことをこういう『ポンコツ』と

「ふん、もうやるしかないぞ」

アイゼンの声に呼応するかのように吠えたドラゴンがこちらを睨みつけていた

第31話 終わり

第32話

エレノアが見事にやらかしてくれたので逃げられるわけもなく各々構える、その瞬間ドラゴン型の業魔シエンロン突っ込んでくるのを寸での所で横へ避ける

「つたくー！余計なことをー！」

「こんな修行相手はそういないぜー！」

毒づくベルベットの横で尻尾の叩きつけを躲しながら戦闘意欲丸出しのロクロウがシエンロンに向かって間合いを詰める

「先手は戴くー！波ア!!」

横腹目がけて小太刀を振り上げ切り裂こうとした瞬間、シエンロンの爪がロクロウ向かって力任せに横薙ぎに振るわれる。ロクロウは回避こそすれども風圧で大きく体勢を崩される

「うおっと!!」

「気を抜くな！しくじれば一撃だぞ!!」

「それがいいんだよ!!」

ロクロウは目をぎらつかせシエンロンに向かって飛び掛かる。その反対側からベルベットとアイゼンが仕掛ける

「ライファイセット！奴の足を止めて、このままじや喰いつけない!!」

「わかった！漆黒渦巻き軟泥捉えよ！ヴォイドラグーン！」

ライファイセットの聖隷術が発動してシエンロンの真下の地面から黒い沼のようなものが出現しそこから無数の沼と同じく黒い手のようなものが伸び始めシエンロンの身体に掴みかかる

「いぞライファイセット！そのまま抑え込め、風の刃よ斬滅しろ！エアスラスト！」

アイゼンは動きを封じられたシエンロンに真空の刃で攻撃するために聖隷術を同じく発動させるが

「そんな!？」

「チィ!!」

シエンロンが拘束を抜け出すために胴体を動かす。それだけでか

なりの力がかかったのか漆黒の手は千切れ、アイゼンの繰り出した真空の刃も同時に吹き荒れる突風にかき消される。ベルベツトはそれを見越していたのか近くの岩に足を掛け大きく跳躍する

「真上ならから空き!!崩牙襲!!」

風圧を受けていない真上からベルベツトの踵落としを迎撃するためシエンロンが顔を上げる

「よそ見はさせんぞ〜!フラッドウォール!」

「両面攻撃なら!!連なれ真紅!霊槍・獣炎!」

ベルベツトを援護するべくマギルウの水の波とエレノアの槍から繰り出される火球、三方向からの攻撃。さすがに避けきれないと判断したのか離脱できる前方へと飛び上がるようにするが後方から引つ張られる、正確には自らの尾が掴まれていることに気づく

「逃がすわけにはいかない・・・!」

ケンが尾をガツチリ掴み動きを封じる、ベルベツトの踵落としが頭部に命中するが頭部の鱗が想像以上に固く衝撃がベルベツトの脚に跳ね返る

「ぐっ・・・!!だあ!!」

苦痛に顔を歪めるベルベツトだが間髪入れずにもう片方の足で回し蹴りを見舞おうとしたがシエンロンが己の角でベルベツトを突き飛ばす

「ぐあああ!!」

「ベルベツトー!」

ロクロウが飛ばされてきたベルベツトを受け止めながら地面を滑る。その先で波と火球がシエンロンを両面で押し流し、爆ぜる

「やった!?!」

「いや・・・まだじゃ!!」

水蒸気の中からなんの外傷のないシエンロンが姿を現す。シエンロンはまず自らの行動を阻害しているケンの方へ牙を向ける

「マズい・・・!」

ケンはすかさず尾を離し屈む、頭上スレスレで顎が通り過ぎたが素

早くシエンロンが反応しその体を捻り上げお返しとばかりに鋭くしなつた尾をケンに叩きつける

「ぬぐううー！」

胸に叩きつけられた尾に弾かれるように飛ばされたケンはその先にある岩に背中からぶつかり岩は砕け土煙と共に瓦礫に巻き込まれる

「野郎・・・！」

アイゼンは背を向けているシエンロンに向かって走り出す。それに反応して向き直した時にはアイゼンは懐に潜り込む

「ストーンエッジ!!」

聖隷術を発動させ地面から岩の柱を繰り出すも、シエンロンはそれを物ともせずはその腕でまるで麩菓子のように叩き壊す、だがアイゼンの狙いはこれではない壊される寸前に岩を駆け上り頭部へと接近する

「ウェイストレス・メイヘム！」

何度も拳を叩き込むアイゼンの攻撃が効いたのか、はたまた目障りなのかわからないが首を動かし角で弾き飛ばす

「くっそ・・・!!」

空中で体勢を立て直し何とか着地するとその後ろからロクロウが飛び込む

「瞬撃必倒！」

一瞬で間合いを詰めたロクロウが小太刀をシエンロンの首元目がけ突き出す

「零の型・破空！」

並の業魔であれば小太刀が敵を貫いているはずであった、が「な・・・!!」

あろうことかシエンロンが小太刀の刃先を牙で挟み止めていた、首を振りまわしロクロウを放り投げる

「うおおおおっ!!」

「フィー！」

「わかった！」

飛ばされたロクロウに代わるように立て直したベルベットがライ
ファイセットに声を掛けそれに応える

「重圧砕け！シルクラッカー！」

重力場でほんの一瞬でも動きを抑えることができればベルベット
に攻撃のチャンスができる。ライファイセットの繰り出した術がシエ
ンロンを捉えるが数秒で抜け出されるがそれで十分だ

「これでっ!!炎牙昇竜脚!!」

炎を纏った回し蹴りが顎と頬を捉える。シエンロンはそれを受け
て首をのけ反らせる

「ぐっ……!」

ベルベットはシエンロンの鱗の硬さを承知の上での攻撃、両足が痺
れ、苦悶の表情を浮かべながら着地する。シエンロンはゆつくりと首
を戻す、むしろ怒りを助長させたようだ。突風が吹き荒れる

「やはり、並の業魔とは手応えが違うな……」

「倒せるのですか、こんなやつを……」

エレノアとロクロウに尾が叩きつけられるがそれを大きく横に跳
び躲す。アイゼンは握りこぶしを作り立ち上がる

「なんとしても殺る……それが俺の……!」

特攻が如く突撃するアイゼン。だがそれに向かうもう一つの陰が
現れる

「うおおおっ!」

アイゼンの拳をシエンロンの代わりに飛び出してきたザビータが
受ける

「ぐはあ!」

「ザビータ!」

アイゼンは驚愕するが反射的にもう一発打ち込んで殴り飛ばす。
ザビータは地面に転がるが数秒してよろめきながら立ち上がる

「痛え……相変わらず殺す気満々……だな……」

アイゼンを睨みつける

「……全部知ってるんだよな、お前は?」

「……そこをどけ」

アイゼンはザビーダの質問に答えることなく忠告する。ザビーダは歯を食いしばりシエンロンを守るように獲物であるペンデュラムを構える

「守りたいの？そのドラゴンを——」

ライファイセットのドラゴンといった瞬間ザビーダが怒気を込めて遮る

「ッドラゴン〃じゃねえ!!」

「えっ!？」

ザビーダはジークフリートの銃口を自らの顛顛に当てる

「退かねえなら、こっちも本気になるぜ」

その瞬間背後にいたシエンロンが尾でザビーダを叩き飛ばす

「ぐああっ!!」

ザビーダを薙ぎ払ったシエンロンはアイゼン達に目をくれることなくそのまま飛び去って行った。アイゼンが走り出して追うとしたが時すでに遅しであった

「くそ、逃がしちまった・・・」

「ひでえなあ・・・久しぶりに会えたつてのによ・・・」

ザビーダが暗い表情を浮かべながら立ち上がるとそのまま踵を返そうとするところをアイゼンが止める

「待て。あのドラゴンは、お前の——」

「あいつを・・・ドラゴンなんて呼ぶんじゃねえよ」

「・・・」

それだけを言い残しザビーダが立ち去って行った

「なるほどの・・・あのドラゴンはケンカ屋と因縁のある者のようじゃな」

「因縁って・・・相手はドラゴンですよ?」

「だからじゃよ」

「だから・・・?」

エレノアとライファイセットはマギルウの含みのある言葉の真意を聞き出そうとするがアイゼンが代わりに答える

「ドラゴンは、穢れに侵された聖隷の成れの果てだ」

その事実二人とも驚愕する。ベルベットとケンはそのを知っている、因みにケンはあの後難なく瓦礫の山から脱出したがシエンロンの渾身の一撃を喰らったのだろう服の一部が破れている

「じゃあ、さっきのドラゴンは…ザビーダの知り合いだった聖隷!？」

「…以前、願掛けをしていた相手」

「恐らくな」

そこでロクロウはアイゼンに質問をする

「聖隷も人間のように穢れを発するっていうのか？」

「いや、聖隷が穢れを発することはない。だが、穢れを出す人間や業魔に接し続けていけば、やがて冒されてドラゴンになってしまう」

「坊は、聖主の御座から地脈に飛ばされた時、調子がおかしくなったんじやろう?」

「なった」

マギルウの確認にライフイセットが答える

「あの空間には穢れが漂っておった。カノヌシへ送られる途中のものが」

「あのままだったら、僕もドラゴンに…」

「器を得ても防げないのですか？」

「影響は軽減できる」

エレノアの質問に腕を組みながらアイゼンが答える

「聖寮の対魔士どもは、さらに聖隷の意識を奪うことでドラゴン化を防いでいるようだ。だが、完全なものなどこの世にはない」

「じゃあなんでケンの技であの時元に戻せたの」

「あの時は業魔かしてさほど時間がたってはおらぬし、聖隷としての意識が僅かながら残っておったから…じゃろ」

マギルウが推測を立てながらケンの方を見る

「はい、確証はありませんでした、偶然できたのかもしれませんが。かなりの幸運だったと」

「聖隷の意識や心がなくなったら…」

「…お前にはどう見えた？」

「それは・・・」

エレノアが答えに詰まるなかロクロウが呟く

「それでも殺せない。ザビーダの流儀の理由か・・・ケン、お前には最後の手段があると言っていたな。そろそろ教えてくれてもいいだろう」「はい、隠すつもりはありませんでしたが。本来は被害者に取り付いている対象を直接破壊する技なのですが・・・ザビーダさんとアイゼンさんの話からして大分時が流れています。仮にこれを使用した結果どんな事態になるかわかりません」

「そうか・・・」

いままで黙っていたベルベットが口を開く

「・・・あんたやザビーダがドラゴンをどうしようが、興味ないし、好きにすればいいわ。けど、さつきみたいに巻き込まれるのは御免よ。覚えといて」

「わかった」

「ならいいわ。さ、喰魔探し続行よ。タイタニアに戻りましょう」

ベルベットが話を切り上げ移動を始める。皆もそれに続くがライフィセットとエレノアが少し出遅れる

「今の話が本当なら・・・いつかはドラゴンになっちゃうのかな？僕やアイゼンも」

「・・・それは・・・」

エレノアは言葉に詰まる。いざという時はケンがいるが彼は一応人間である。聖隷との寿命差は天と地以上にある。ライフィセットに異変が起こった時。対処できる可能性はまずないといってもいいだろう

それからしばらくしてバンエルティア号はアジトであるタイタニアへと戻ってきた。強敵であるドラゴンとの事もあってアイゼンがため息をつく

「ふう・・・」

「さすがの死神もドラゴン戦は厳しかったようね。少し休んだ方がいいわ」

「・・・全員な。次の出航準備は進めさせておく」

「頼むわ」

アイゼンはベルベットの返事を聞きつく扉の方へ向かう

「ライファイセット、あんたも——」

ベルベットは疲労がたまっているであろうライファイセットに休むよう声を掛けようとする

「・・・僕は平気。それより次こそ喰魔を見つけなきゃ。地脈点の場所、もう一回調べてくるよ」

「・・・」

ライファイセットもアイゼン続いて先に扉の方へと歩いて行った

「まったく・・・フィーって結構頑固よね」

「では、儂も一眠りするかのー。ビエンフーや、例の如く儂がスヤッと眠るまで子守唄を頼むぞよ♪」

「ビエ〜ン〜！毎晩、三時間も歌うのは勘弁でフよ〜！」

マギルウがベルベットの横を通りビエンフーに指示を出す。指示というか拷問クラスの所業にビエンフーが涙をまき散らしながら彼女の後を追う

「相変わらずね・・・」

「ベルベット！お疲れさん」

ベンウィックが声を掛けてこちらに向かつて歩いてくる

「船の整備と準備は俺達でやっておくから、あんたも休んでおきなよ」

「ええ、お願いね」

ベルベットも少し遅れてアジトに入っていた

）

それから暫く休息を取った一行、ベルベットはロクロウからライファイセットが地下牢へと行ったと聞いてかつて自らがいた独房へと向かう牢の入口へ近づいた時声が聞こえた

「無理はしすぎるなよ、ライファイセット」

「ありがとう、けど・・・」

アイゼンとライファイセットの声が聞こえる

「僕が喰魔を探せるかもって言い出したのに、全然駄目で・・・ねえ、

アイゼン。聖隷の力を強くする方法ってないの？」

ライファイセットはアイゼンに質問する。躊躇なく聞く当たり役に立ちたいという気持ち強い

「・・・お前には教えてもいいだろう」

数秒沈黙していたアイゼンが了承する

「今、大半の聖隷は意識を封じられて対魔士に使役される道具と化している。だが聖隷は本来、人の“祈り”を受けて人や自然に“加護”をもたらす存在だった」

「聖隷は、人間に祈ってもらおうとすごい力が出る・・・ってこと？」

ライファイセットの答えにアイゼンが肯定する、その声はどこか優しさがあつた

「そうだ、まあ、中には加護が反転して不幸を与えてしまう、俺のようなひねくれ者もいるがな」

「そうなんだ。でも、僕に祈ってくれる人なんて・・・」

「ハズレだったけど、無駄じゃないわよ」

ライファイセットとアイゼンの会話を聞いていたベルベットが梯子を降りてくる

「対シグレ用の金剛鉄が手に入ったし、ドラゴンとだって戦えることがわかった」

「ベルベット・・・」

「次はどこに行けばいい、フィー？」

ベルベットがライファイセットに次の行き先を聞くその表情は柔らかい。ライファイセットは直ぐに次の地脈点を伝える

「ノースガンド領！ヘラヴィーサの北の方に大きな地脈点があるよ」

「わかった。アイゼン——」

「俺は直ぐに出発でも構わんぞ」

ベルベットがアイゼンの方を向く、アイゼンはいつでもいいと言わんばかりの表情を浮かべる

「あたしもよ。港へ行きましょう」

ベルベットが先に梯子を上り牢から出る。ライファイセットとアイゼンがそれに続く中アイゼンが言い聞かせる

「『祈り』とは『崇める』という意味じゃない。聖隷に向けられた『純粋な意志と感情』のことだ」

「うん。僕は、もう『祈り』を持ってるんだね」

「」

この後広間で皆を集めこれからの予定を説明した

「目的地はヘラヴィーサの北・・・フォルデイス遺跡のあたりですね」

エレノアはライフィセットの地脈点の情報を元にそこにある遺跡に目星を付ける

「今までの情報を照合すると、喰魔がいる確率が高いと思います」

「今度こそ！」

エレノアの推測にライフィセットに気合が入る

「ヘラヴィーサ港から向かうのが最善だな」

「前に大騒ぎを起こしたから、街に入るのは難しいかもな」

「ベンウィック、ヘラヴィーサは今どうなっている？」

ロクロウの言う通り、あそこで派手にやったので警備が厳しい可能性がある。アイゼンはベンウィックにヘラヴィーサの現在の状況を聞く

「前に俺達の船止めだった商船組合はガタガタだよ。けど、なぜか聖隷の管理も弱まってるみたいだ。救援物資を運ぶ不定期便の船があるみたいだから、輸送船のふりをすれば入り込めると思う。その物資を横流しすれば、新しい『船止め』も見つかるはずだし」

「・・・救援物資か。呆れた自作自演ね」

ベルベットの言うのも当然である。自分たちが騒ぎを起こして景気が悪くなったところへ助けに入る。これほど滑稽なことはない

「だからこそ付け込む隙もある」

「そうね。その策でいきましよう」

「了解！ソツコーで用意するよ」

ベンウィックは仲間に指示するために港の方へ走っていく。ふとライフィセットはエレノアに質問をする

「エレノア、聖隷の対魔士たちは使役してる聖隷に祈ったりしないよね・・・」

「『誓約』のごことは違いますよね？」

「誓約って、自分に特別な規律を課して、限界を超えた力を得る術式でしょ？」

「ええ・・・簡単に言えばそういう事になりますが」

「人の祈りを受けて、聖隷は人や自然に加護をもたらす・・・人間に祈ってもらおうと聖隷は強くなるって、アイゼンが教えてくれたんだ」

「祈りと加護・・・そのような話は、初めて聞きました」

エレノアはこの手の事実は初耳のようだった

「以前の私がそうだったように、聖寮の対魔士にとって聖隷は術技を使うための道具に過ぎません」

「やっぱり、そうだよな」

「・・・でも、聖主カノヌシは別です。対魔士は皆、聖主の大いなる力を信じ崇めています。そればかりか、この国の人々も、聖主の救済を願っています・・・アルトリウス様の導きとともに」

「・・・あっ！だからなんだ！」

エレノアの話を聞いていたライフイセットは何かに気づいた

「坊は、からくり気づいたようじゃのー」

「・・・えっ？」

マギルウの言葉にエレノアはその真意に気づいていないようだ

「アルトリウスが聖寮を聖主協会の内部組織にしたのは、人間の意識をカノヌシに向けるためだった。人間たちがアルトリウスを英雄視したとしても、その向こうにカノヌシの存在を感じるように」

「世界中の人達がカノヌシを信じて、その心が・・・祈りが集まってるってことは・・・カノヌシの力は」

「聖主教を人々が信じなくなっていたこの数百年間とは比べものにならないほどに、高まっていると？」

「そうじゃろうのー。誓約も、祈りも加護も、業魔化も・・・この世の沙汰はココロ次第。心とは、実に便利で難儀な魔法の力じゃ」

聖寮が他の宗派の改宗を迫っている理由もはっきりわかった。祈り手が多くなれば多くなるほどその分カノヌシの強化の速さが増す。それに仮に古文書に記されていた穢れを吸収する行為も自身の強化

に使われていたのなら正の感情も負の感情もどちらにしても得しかない。最初から出来レースとなつていていることになる。どちらかかなくなつても速度は変わらない

「・・・私たちは、本当に世界全てを相手に戦いを挑もうとしているのですね」

エレノアはそのスケールに表情を暗くするエレノアにライファイセットが声を掛ける

「エレノア、そんなに困つた顔しないで。がんばって強くなるから、僕を信じて。僕だつて聖隷なんだから」

「ライファイセット・・・なんだか、急に頼もしくなりましたね」
「・・・そうかな?」

「そうやって照れるところは、かわいいですけどね」

そこへ他の所で準備していたベルベットが合流する

「どうしたの、顔が赤いわよ?」

「えっ・・・そ、そんなことないよ」

「・・・?」

ライファイセットが慌てている様子をベルベットは不思議そうに見ていた

く
バンエルティア号前に集合した一行、アイゼンは組員から状況を聞

く
「ヘラヴィーサへの届け物は、すべて積み込みました。あれだけ積みめば、疑う人はいないでしょうね」

「新しい船止めに心当たりはあるか?」

「どこの誰つてのは分かりませんが最近ではヘラヴィーサの漁師の羽振りの良さが目に付きますね」

「漁師か・・・救援物資に燃料と心水を多めに入れておけ、心水は——」
「琥珀心水の十二年物ですよ。ヘラヴィーサの船乗りは、琥珀浸水に目がないそうで」

「ダイルの情報か。抜け目ないな」

「情報量だと一本持つてかれましたけど、多めに見てやってください。」

みんな、なんだかんだで一目置いてるんです」

「二本目を持ちだしたら大目玉と伝えておけ」

「はい。こっそり抜かれないう、目を光らせておきます」

いよいよ出航という時港にダイルとパーシバル、そこにモアナがやってきた。ちよつとぐずづっている

「モアナ、どうしたの？」

「モアナはエレノア達がまた出るのが寂しいんだとよ」

ダイルは頭を掻きながらモアナの方を見る

「私たちではどうにもできなくてね・・・母親の事もあるから無理もない」

「そうでしたか・・・」

「エレノア、またどこか行っちゃうの・・・？」

モアナが涙目になりながらエレノアの方を見る。エレノアは膝を着きモアナに視線を合わせる

「ごめんねモアナ。でもちゃんと帰ってくるからいい子で待っててね？」

「・・・」

エレノアが何とか諭そうとする。モアナも理解したいのだろうが感情が混ざってしまい何も言わない

「・・・」

ケンはそのを遠目で見ていたがアイゼンと目が合う。アイゼンは何も言わなかったが視線だけでケンを促した。ケンは少し考えた後モアナに歩み寄り片膝を着く

「モアナ、みんなの事が心配なんだよね」

「・・・」

ケンの質問にモアナはコクンと頭を縦に振る

「よし、じゃあ一つ約束をしよう。これを君に預ける」

彼はバックバックに取り付けてある短剣をモアナの手を取りそれを掴ませる

「僕らが戻ってくるまでそれを持っておいてくれ。それを取りに来るから必ず帰ってくる、君は僕と違って強い子だ。君を信じてる、待て

るかな？」

モアナはその短剣をじつと見つめていたがこの短剣が約束の証明であることを理解し顔を上げる

「・・・うん！。待つてる！だから必ず帰ってきてね！」

「ええ、約束ね」

ケンに代わりエレノアが返事をし改めて船に乗り込みいよいよ出航となった。波止場からモアナが手を振るのをエレノアとライフィセットも同じく手を振りながら応えていた

「いいのか？お前にとつては大事なものなんだから」

それを少し離れて見ているアイゼンがケンに聞く

「ほとんど使う事はありませんが確かに大事なものです。ですがあれは自分にとつては証明です」

「証明？」

「ええ、大事なものである以上取りに行かねばなりません。であれば必ず戻ってこなければならぬ。まあ説明は得意ではありませんが」

ケンの言いたいことを理解したアイゼンは表情を綻ばせながらヘラヴィーサの方向を見ていた

）

第32話 終わり

第33話

アジトであるタイタニアから出港したベルベット達は進路を北に取り、ライファイセツトの探し当てた新たな地脈点のあるヘラヴィーサへと入港した。其処は相も変わらず雪が降り、冷たい風が吹いている「くしゅんーふううー・・・ノースガンド領って、こんなに寒かったんだね・・・」

ライファイセツトが体を震わせる

「でも・・・テレサの管轄はノースガンド領でしたし、その頃、あなたも此処にいたはずでは？」

エレノアはライファイセツトの寒がりように疑問を浮かべる

「多分、意識を制御されていた時は、他の感覚も鈍くなってたんだと思う」

「なるほど。。でも、アイゼンが寒がっている様子は一度も見たことはありませんね・・・というか、皆さん、平気そうですよね？」

改めてエレノアが皆の方を見る

「この程度の寒さでガタガタ言うようでは、海賊などやってられん」

「俺は子供の頃から、夏は炎天下、冬は吹雪の中で素振りさせられてたから慣れっこなんだ。もつとも、業魔になってからは、暑いも寒いも関係なくなっちゃったがな」

「あたしも、喰魔になってから関係なくなった。冬は苦手だったから、都合がいいわ」

「かくいう、お主こそ、平気そうじゃぞ？」

マギルウが横から迫りながら逆にエレノアに聞く

「いえ・・・とても寒いです。あなたが平気そうにしているのが、信じられません」

「三度の飯より寒さが嫌いな儂じゃぞ？全身くまなく、防寒用の秘密兵器を忍ばせてあるわ。服の裏から靴の中まで、薄くて貼れて温もりキープ。その名も『ポツポカイロじゃ〜♪』」

いつもいい加減なマギルウのいい加減な防寒具に素直に信じた工

レノアが迫る

「そんな素晴らしいものがあるのですか？」

「ハトマネするなら分けてやってもよいぞ？」

「えっ？」

ハトの真似を要求するマギルウにエレノアが驚く

「ハ・ト・マ・ネ！」

エレノアはかなり躊躇したが寒さに対処できるならと渾身のギャグを披露する

「ポツポカイロを分けてほしいポツポ・・・」

「ベルベットほどの衝撃はなかったのー」

辛口な反応にエレノアは呆れて頭を抱える

「・・・」

それを見ていたベルベットはため息しかでない

く

それからしばらくしてヘラヴィーサの北を進みそこにあつた洞穴に入る、しばらく進むとその奥に建造物があるのを見つけた。それが例のフォルデイス遺跡だろう

「お、警備がないぞ。これは裏か表か？」

ロクロウは重要施設であるはずの遺跡の入り口に兵士や対魔士がいないことに警戒する

「・・・表よ！ここは一気に踏み込む！」

ベルベットは臆することなく扉に近づき開ける、遺跡の中は対魔士姿こそなかったが人員不足を埋めるべく多くの聖隷がいた

「かなりの聖隷を配備してるわね」

「喰魔を守るため・・・だよな？」

「ええ、おそらくね」

「操っている対魔士がいるはずですよ。警戒してください」

ベルベット達に気づいた聖隷の集団が一斉に向かってくる

「先に進めば本体がいる、さっさと片づけるわよー！」

く

「・・・この遺跡は、なにか哀しい感じがする」

聖隸の集団を退け遺跡の奥に進むベルベット一行、遺跡の内部見回していたライフイセットがそうつぶやく

「哀しいって・・・どういことですか？」

エレノアはライフイセットの言葉の意味を聞く

「うん・・・ここで辛い思いをしたり、亡くなった人の哀しい気持ちが溜まつてるような気がするんだ。遺跡を見て、そんな風に感じるなんて、なんかヘンだよな」

「いや、その感覚を否定する必要はない。案外そういうものが事実を導く場合がある。ライフイセットの観点でこのフォルデイス遺跡を見てみると、説明がつくものがある・・・」

アイゼンがライフイセットの感想を肯定する。アイゼンも遺跡の構造を観察する

「本当・・・？」

「この遺跡の造りは、派手さや豪華さよりも、通路や建造物としての堅牢さが優先されているようだ。それはつまり――」

「火山性の地震を考慮しているのと・・・この通路で、誰かが暴れるような状況が考えられたってことかな・・・」

「悪くない考察だ。そして、そんな猛者どもがここを素通りするとは考えにくい」

「・・・つまり、ここには通路だけじゃなくて、もっと奥に部屋や施設があるってことだね凶悪犯の牢屋とか・・・闘技場みたいなものかな」
「哀しいと感じた理由は、それで説明できるな」

ライフイセットはこれまでも仮説と遺跡の現状をまとめて推理をする

「闘技場だとすると、勝者に与えられる宝みたいな何かが見え隠されてるかもしれないね・・・」

「なぜ隠してあると思うんだ？」

「だって、猛者たちがいい人とは限らないし、ここを設計した人は、用心深い感じがするから」

「隠し財宝か・・・お前はどの隠し場所をどう――」

話が長引きそうになるところをベルベットが口をはさむ

「二人とも、考察は後にして。今は喰魔が最優先よ」

「あ、ごめん……」

「……」

ベルベツトに注意されて会話を中断する二人、だがアイゼンがこっそりライファイセットに声をかける

「宝の隠し場所だが……」

「アイゼン！」

ベルベツトに聞こえてしまい注意される

「……ライファイセット、続きは必ず後でするぞ」

「う、うん……」

）

遺跡も終盤であろう最奥に近づいてきた。石畳の坂を下るとその方向から声が聞こえる、皆は素早く壁際に移動し姿勢を低くする。その先には聖寮の一等対魔士が三人いた

「メデイサの様子はどうか？」

「大人しくしている。やはり真実を告げたのが効いたようだ」

それを聞いたエレノアの表情が険しくなる

「よし。これで管理しやすくなるだろう」

そこまで聞いたベルベツト達は顔を見合わせ死角から飛び出す。予想外の侵入者を発見した対魔士は驚きながらも即座に武器を構える

「何だ、お前たちは!!」

ベルベツトは何も言わず刺突刃で斬りかかる、対魔士は自身の武器である双剣で受け止める。ロクロウは小太刀を振りかぶりもう一人の対魔士と武器を打ち合わせそのまま押し込む

「でやあ!!」

「チッ！」

エレノアももう一人の対魔士に槍を振りぬく、対魔士は押し負けながらも自らの聖隷を繰り出す。他の対魔士も食い下がりながら所持している聖隷を出す。一体は重厚な鎧を身に着けた大型の聖隷、他の二体は脚がなくくたびれた幽霊みたいな聖隷である。ベルベツトと

つばぜり合いをしていた対魔士の所持する鎧の聖隸『純白の鎧塊』がベルベットに目がけてエレノアの使う槍より重厚かつ長大なパイクを突き立てようとする

「ふんっ！」

「!!」

その横からケンが体当たりで純白の鎧塊の体勢を崩しベルベットから離すように押す

「ライファイセツト！マギルウ！」

「任せて！」

「しよ〜がないの〜」

アイゼンの声に呼応して聖隸術を発動させるライファイセツトとマギルウ。アイゼンが幽霊のような聖隸『徘徊の流霊』二体を相手取り素手と聖隸術で抑え込みその後ろから二人で援護するという形だ

「修行の相手にはなりそうだ、いざ勝負！」

「くっ！業魔がっ!!」

ロクロウの小太刀の連撃を受けながら後退する対魔士の横でベルベットが蹴りで対魔士の攻撃を弾き後ろ回し蹴りを相手の胴に叩きこむ

「ぐう!?!」

「さっさと終わらせる！」

追い込むベルベットとは離れた場所でエレノアが敵の攻撃を槍で弾き距離を取る

「裏切り者の分際で！」

「・・・」

自らと相對しているのが聖寮を裏切ったエレノアという事実が怒りを助長させる。対するエレノアは何も言わず槍を構えなおす

「鏡面輝き熱閃手繰れ！カレイドイグニス！」

「赤く染まるのか？ブラッドムーン！」

ライファイセツトとマギルウの聖隸術が的確に徘徊の流霊を追い詰める。アイゼンが敵を引き付け、抑えつけてくれるおかげで術の発動に集中できる。光の線と赤い力場が敵の体力を削る

「これで終いにする・・・！ライファイセツト！マギルウ！」

「足を止めるよ！重圧砕け！ジルクラッカー！」

ライファイセツトの聖隷術で動きを抑えつけ、身動きできなくなった徘徊の流霊にアイゼンが拳を振るう

「蜃気楼（ミラーージュ）！」

スウエイからの高熱を纏ったフックが流霊の身に突き刺さる。大きく後ろに飛ばされた所で

「これはオマケじゃ♪フラッドウォール！」

水の波が流麗の足元から吹き出し大きく吹き飛ばす。流霊は力なく地面に落ちる

「向こうはケリをついたようだな、ならば此方も手短に済ませるか!!」

ロクロウがアイゼン達の方を見てから向かい合っていた対魔士の方へ向き直るとその右目が光る

「ツツ・・・!?!」

その気迫に声にならない声で距離を取ろうと後ろに下がろうとした対魔士だが気づいた時にはロクロウが眼前に迫ってきていた

「はっ早っ!?!」

「隙あり！」

ロクロウは小太刀で下から上への切り上げで対魔士の双剣を跳ね上げ、がら空きになった所で印を斬る

「壺の型・香焰!!」

「うあああっ!!」

爆発が対魔士を襲い後方の壁に叩きつけ無力化する。倒れた対魔士から少し離れた所でエレノアとベルベットがすれ違いざまに膝蹴りと突き立てた槍を軸にしての跳び蹴りで残り二人の対魔士弾き飛ばす

「はああ!!」

ベルベットが業魔手で荒々しく振り上げ砕いた床毎対魔士を殴り飛ばす。対魔士は勢い余って天井に背中からぶつかり数瞬張り付いた後地面に落ちる

「せいっ！やあ!!」

エレノアは柄を使い膝裏を打ち体勢を崩した対魔士の顎先を石突で叩き人為的な脳震盪をおこし無力化する。そのころ丁度ケンも純白の鎧塊を正気に戻す技を使い混乱したところを気絶させた、これで戦闘が終わり皆が一カ所に集まる

「これではつきりした、メデイサはここにいます」

ベルベツトが情報をまとめた結果この遺跡にいと断定する

「事実を告げて・・・管理しやすく？」

エレノアは先ほどの対魔士の言葉に疑問を抱いていた

↳

遺跡の最奥、構造的にみればここにメデイサがいるであろう部屋の扉を開ける。その奥には一人の女性が座っているのが見える。ベルベツトが先に入り左手を静かに前に出す、左手に反応して監禁用の結界が姿を現す

「結界！喰魔です！」

「三度目の正直だな」

ロクロウは後ろを振り向きライファイセットを見る

「・・・うん」

だがライファイセットの返事はいまいちよくない

「はあああっ！」

その間にベルベツトが業魔手で術式を喰らい結界を破る。一同は座っているメデイサであろう人物に近づく

「・・・メデイサね？」

メデイサと呼ばれた女性は静かに顔を上げ答える

「・・・ええ、そうよ。あなたたちは？」

「あなたと同じく聖寮を——導師アルトリウスを恨む者よ」

「安心してください。私たちは、あなたを助けに来たんです」

メデイサはエレノアの言葉に顔を伏せ力なく呟く

「・・・助かりませんよ」

「えっ?」

「諦めないでください。私は・・・」

メデイサの意味深な発言にライファイセットが疑問を浮かべる。エ

レノアはそれを自棄と判断したのか説得しようとするが彼女がそれを遮る

「いいえ、助からないのは、貴方たちです」

メデイサは立ち上がりながら続ける

「導師アルトリウス様の理想を！聖寮の理を汚す者たちは、私が殺します！」

その瞬間メデイサの左目の模様が変わり怪しく光る。それに呼応してベルベツト達の背後から大型の蛇が多数這いよってきた

「なぜ？あなたは・・・!?!」

無理やり喰魔にされたはずと続けようとしたのだろうがスネークが飛び掛かってきてそれ処ではなくなる

「ちっ、こいつは聖寮の手下よ！」

ベルベツトは毒づき足元に近づいてくるスネークを蹴り飛ばし、刺突刃で切り裂く

「やっぱり裏目じゃったの〜！ひい！近づくでないわ！ブラッドムーン！」

「こいつらどっから出て来たんだ？まあいい、修行相手にはちと物足りんが容赦せん！」

マギルウの術で数体纏めて霊場で片付けロクロウは素早い身のこなしですれ違いざまにスネークを斬り捨てていく

「ライフィセット、ケン、離れるなよ。この数だ、囲まれたらまずい」「うん！」

「はい」

アイゼンは二人に注意を促し自身は風の聖隷術で牽制、近づいてきたものはストーンエッジで撥ね飛ばし、拳で殴り対処する

「聖泡散り行き魍魎爆ぜよ！セイントバブル！」

ライフィセットは聖隷術を発動させ前方に無数の水泡を射出する。スネークはそれに警戒はするが臆することなく飛び掛かる、それに触れた瞬間水泡は大きな破裂音と共にスネークが爆発の圧で吹き飛ばされる。ケンはまわりついてくるスネークを引き剥がして投げている。だがいくら倒しても倒した分が次から次へとでてくる

「きりがないよ・・・」

「あの蛇女が召喚してやがる。本体を叩かねば埒があかんぞ」

ライフィセツトとアイゼンが毒づく後ろで業魔手で薙ぎ払うベルベットの姿にメデイサが気づく

「その左手・・・そう、貴女が噂の——」

「なぜです、メデイサ！貴女は、聖寮に無理矢理喰魔にされたのではないのですか!？」

エレノアは攻撃を凌ぎながらメデイサに真実を聞き出そうとする。エレノアが忙しく動いている先でそれを淡々と見つめながら冷たく言い放つ

「違うわ。私は自らの意志で喰魔になったのよ」

「でも、貴女の娘さんは業魔になって対魔士に・・・それで聖寮を恨んでいるじゃ・・・?」

「ええ、恨んでいるわ」

メデイサが一瞬間を置き憎しみを込め答える

「人間の“穢れ”が業魔を生んでしまうこの世界を!!」

「貴女穢れのことを・・・!」

「対魔士様が教えてくれたわ、ディアナが業魔になったのは、あの子が“穢れ”を発したせいだって。だったら、私は穢れを喰らう“喰魔”になる!二度とディアナのような悲劇が起きないように!」

メデイサは右手を上げるとスネークではなく岩のゴーレム、ロツクゴーレムが頭上から降りてきた、メデイサが召喚したのだろう

「どんな醜い姿になろうが構わない!カノヌシ様を復活させ、この悲惨な世界を変えるのよ!」

メデイサはそう叫ぶと姿を変える、肌の色が変わり下半身が蛇のそれと同じになる、頭部からは伸びた髪ではなくその先は蛇の頭部に変わっている

「・・・ああそう、なら、強引に攫うまでよ」

エレノアの説得が通じないとわかったベルベット。もはや言葉は意味をなさない、己らの意地と目的をぶつけるしかない

「終わらせるのよ!あの子の死に報いるために!」

メデイサは尾でベルベットとエレノアを叩き潰そうと振り上げる。二人はそれぞれ左右に飛び退いて回避する。尾が叩きつけられた地面にヒビが入り陥没する

「この人は・・・母親として・・・」

「関係ない！全部蹴散らす！」

葛藤するエレノアに対して既に覚悟を決めているベルベットは業魔手を振り上げメデイサに飛び掛かる。エレノアも意を決しベルベットに合わせる

「喰魔の方はあの二人に任せるとしよう。俺達はこの岩を叩つ斬る！！」

「叩き斬るのはお主だけじゃろう、俺は後ろからのんびりとさせてもらおうぞ」

ロクロウがストーンゴーレムの巨腕を小太刀で受け止める。その後ろでさぼり宣言をするマギルウだがしっかりと術を唱え援護する準備をしている

「オラア!!」

アイゼンがゴーレムの大振りの攻撃を掻い潜り懐に拳を叩きつける。岩の欠片が飛び散るがそんなのお構いなしに力任せに腕を振るう

「チイツ!!」

「アイゼン、危ない！シェイドブライト！」

アイゼンに迫っていた腕に光弾が命中しゴーレムが体勢を崩す、その隙にアイゼンがゴーレムの胴体に足蹴りをしその反動で後ろへ宙返りしながらケンの後ろに着地する

「ケン、俺とお前で二体片付けるぞ」

「わかりました」

アイゼンとケンは背中を合わせ、その傍で後衛であるライフイセツトを守るように立つ。それぞれのストーンゴーレムが重量感のある足音を響かせながら近づいてくる。

「ストーンエッジー！」

聖隸術で岩の柱を作りそれをゴーレムの胴に打ち込む、岩に岩が当

たることゴツンと硬い音が響き渡る、その反動がゴーレムを数歩後退させる。ケンはもう一体の敵を抑えようと動こうとしたとき足に違和感を感じる

「ん？」

ケンは自らの足の方を見る。そこには足元から徐々に石化していく己の足だった

「こ、これは・・・!?」

「ケン!!」

ライファイセットも事態に気づく、何とかしようとするがライファイセットはそれを解除する術がない

「ベルベット!!」

「ちっ！あんたの仕業ね！」

ライファイセットの声で気づいたベルベットがメデイサを睨む

「対魔士様から聞いたわ。貴方達の中に背が高い大男がいる、かなりの曲者だってね」

メデイサは蛇の形となった髪でベルベットとエレノアを牽制しつつケンの方を睨み続ける

「させません!!旋独楽!!」

石突を地面に突き立てそれを軸にして回し蹴りを放つ、がそれをメデイサは髪を動かして防ぐ

「水蛇葬！」

ベルベットは地面を滑りこみながらメデイサの攻撃を阻もうとするも相手も尾を使い近づけまいと振るう

「不味いぞ！このままじゃ完全に石になってしまう！邪魔するな！鎧通し！」

「じゃがこいつらのおかげで近づけんぞ！フラッドウォール！」

ロクロウは小太刀を重ねてゴーレムの銅体を穿つが岩でできているため砕けても動き続ける。マギルウの術で起こした波で押し流そうにも重量があり上手くいかない

「邪魔だあ!!」

アイゼンは必然的に二体を相手にすることになる。聖隷術と拳で

猛攻を続ける、だが二体の内一体がアイゼンの攻撃を引き受けもう一体がライファイセツトとケンの方へと近づき始める

「ライファイセツト！」

「くっ・・・!!」

ベルベットが叫ぶように彼の名を呼ぶ。ケンはもう首の方まで石化しつつある、ゴーレムが迫っている中術が間に合わない判断したのかライファイセツトが庇う様に前に出る

「ライファイセツト、駄目だ、自分の事はいい身を守ることを優先してくれ」

「いやだ!!いつも守ってばかりだから！今度は僕がケンを守るんだ!!」

ライファイセツトの目は決意に満ちている。サイズ差は明らか、それでも彼はゴーレムを睨みつける

「なんとかしなければ・・・でもなぜ？」

ケンはあの時科学者達から聞いた話を思い出していた。その瞬間彼の周りの動きが止まった

「やあ、暫くぶりだね」

「ルシフェルさん」

アイゼンからの攻撃を受けているゴーレムの上に足を組んで座っているルシフェルがいた。ルシフェルはそこから降りる

「中々大変な状況のようだな」

「ええ、そうですね。ですがなぜ、あの人たちの説明では外部からの損害は受けないはずでは？」

ケンは首が回らないので視線だけ動かす。ルシフェルは指を顔に手を当て若干申し訳なきような風な感じで説明を始める

「すまない、向こうはこの事は想定してなかったみたいでね、主に毒閥系の類は一切受け付けないんだが、こういう摩訶不思議な物は未知数なんだ」

普通に考えれば人体が石になるなんてありえないことなのでそれも当然である

「さて、どうする。私が手を貸そうか？」

「いえ、初めは驚きましたがなんとか行けそうです」

ケンは体を動かしてみよう。言葉では言い表すことはできないが体の表面が固まってるだけのような感覚だ

「ふむ、完全ではないにしろ君の肉体はそれなりの抵抗力を獲得しているようだ。それじゃ時間を進めるぞ?」

「はい、知らせていただきありがとうございます」

「気にするな、じゃ後で」

ルシフェルが指を鳴らすと時が動き始める。それと同時にあたりは再び戦闘の音が響き始める

「ふんぐう!」

ケンは右腕に力を籠める、表面を覆っていた石の部分にひびが入り始め数瞬で石を砕きライファイセットに殴りかかるゴーレムの水晶のような蒼い左腕に拳をかち合わせる。常人なら拳が砕け腕が潰れるであろうが水晶を逆に砕きめり込ませる

「ケン!」

「ライファイセット、大丈夫!」

そのまま全身の石を砕きゴーレムに前蹴りを加える。その衝撃でゴーレムの左腕が取れ体勢が大きく崩れる。ケンは砕き入れた水晶の腕ごとゴーレムを殴りつける。体はバラバラに砕け左腕も崩れ落ちる

「ライファイセット!」

「うん!」

ケンがライファイセットに合図を送る、彼はそれに呼応してアイゼンが戦っているゴーレムに聖隷術を発動する

「アイゼン! 漆黒渦巻き軟泥捉えよ! ヴォイドラグーン!」

漆黒の腕が敵を絡め捕り拘束する。アイゼンはそのチャンスを逃さない

「手間取らせてくれたな。これはその礼だ!!」

アイゼンは跳躍すると自身の背中から黒い瘴気に様なものを出す。それはさながら翼に見える

「遠慮するなよ! ドラゴニックドライブ!」

アイゼンが巨大な火球を繰り出し爆発音と共にゴーレムが吹き飛ばぶ

「間一髪だったな、こっちも決めるぞ！マギルウ！」

「言われんでもわかっとなるわ〜い」

ロクロウはマギルウに合図をし当身で距離を取り小太刀を構える

「瞬撃必倒！」

素早く間合いを詰め胴体に小太刀を突き立てる

「零の型・破空！」

突きで岩の身体にヒビを入れるロクロウがゴーレムの身体に足を掛け上へ跳ぶ

「マギルウ！」

「かつ飛ばすぞ〜！伸びろー！光翼、天翔くん！」

マギルウが伸ばした式神を横へ振りかぶりロクロウが付けたヒビへ当てる。弱っていた所へ圧力が掛かり体が耐え切れず粉々になった

「そんな!?石化を脱してゴーレムも倒すなんて・・・」

メデイサが驚愕し狼狽える。その横でベルベットとエレノアが構えながら跳躍する

「よそ見してる場合?こっちも決めさせてもらわよ!!エレノア！」

「はい！貫け緑碧！霊槍・空旋！」

エレノアが術で槍の先から竜巻を繰り出す

「くうっ・・・これしきの事で！」

メデイサは飛ばされないように耐えるがそれが隙となる

「隙だらけよ!!」

「あぐっ！」

後ろに回り込んだベルベットがメデイサの背中に回し蹴りを放つ、ケリを喰らい体勢が崩れた所にエレノアが飛び来む

「旋独楽！」

エレノアが先ほど不発だった技を繰り出す。先ほどは邪魔されたが今度は綺麗に決まる。槍を軸にした回転蹴りが一発と二発目が胴を捉える

「ぬう!!」

「止めえ!!ブレイク・ブースト!!」

ベルベットが高く跳び上がり業魔手で地面を叩きつける地割れが起ると同時に地面が吹き飛びメデイサを壁に叩きつける

「あああ!!」

数秒張り付いて地面に落下するメデイサは喰魔の姿を維持できず元の姿へ戻る。戦闘が終わり皆が集まる

「ここまでよ」

「災禍の顕主……め!」

メデイサは顔を上げ憎しみを込めた目でベルベットを睨む

「災禍の顕主?」

「災厄の時代をもたらす魔王の名よ……欲望のままに世を乱し……混乱と災厄をまき散らして省みない穢れの塊!始末に負えぬ人の業を体现した……お前のような『悪』のことだ……!」

メデイサは戦闘のダメージがあるにも関わらず絞り出すように声を上げる

「……業魔、喰魔、災禍の顕主……好きに呼んでくれるわね。でもあたしが魔王だっていうなら、あんたは魔王に利用される。それだよ」

「させない……あの子は私のせいで……だから私はっ!死ぬまで戦わなきゃいけないのよっ!」

メデイサはボロボロになりながらも立ち上がりベルベットと相対する、だがその間にライフセットが割り込む

「やめてっ!」

「邪魔をするなっ!」

メデイサは声を荒げるがライフセットはそこから動こうとしな

い
「嫌だ!もう『お母さん』が死ぬのなんて見たくない!モアナもエレノアもお母さんが死んじゃった……!それって、すごく悲しいことなんだ!」

「モアナ……?」

ライファイセツトが口にしたモアナという名にメデイサは疑問符を浮かべる

「聖寮に無理矢理『喰魔』にされた少女です。娘を助けようとしたモアナの母親とその子を彼が何とか助けようとしたのですが・・・」

エレノアがケンの方を見る、メデイサもそれに続いて彼の方へ視線を向ける

「結局、助けることはできませんでした。人の姿に戻すことはできませんでしたが、命を助けることは・・・」

「モアナは最後にお母さんとわかり合えた、でも、お母さんの事を思い出しても皆に見せないように泣いてる。だから！お母さんが死んだら・・・ディアナだつてきつと悲しむよ・・・」

「ディアナ・・・！」

ライファイセツトの説得でメデイサは何か気づいたのか娘の言葉を思い出す

『お母さんは、ワタシがいららないんだね・・・新しいお父さんの方がスキなんだ！』

メデイサは気づいた、ディアナが業魔に変わってしまった理由が、再婚という出来事は幼い少女にはあまりにも過酷なものだったことを

「違う・・・！私はあなたのために・・・でも、あなたは自分が邪魔者だと悩んで、穢れ・・・業魔になってしまった・・・私のせいで・・・ごめんね・・・ごめんなさい・・・ディア・・・ナ・・・」

メデイサは娘の謝罪の言葉を口にしながら糸の切れた人形のように倒れる

「メデイサ・・・」

「大丈夫、気絶しただけだ」

ライファイセツトがメデイサに駆け寄る、ロクロウは歩み寄り容体を看る。肉体と精神の負担で気を失っているようだ

「・・・このまま連れて帰るわよ」

「念の為、拘束術をかけておく」

ベルベツトが次の予定を告げる横でアイゼンがメデイサに術を掛

けるため通り過ぎる

「ふうむ・・・どうやら聖察はメデイサの後悔を利用したようじゃな。喰魔として自分達に従う様に」

作業をしている後ろでマギルウはメデイサと聖察の関係の答え合わせをする。家庭、親子、夫婦、様々な状況が重なって起きてしまった悲劇、自責の念に聖察はそこに付け込んだ。ネガティブになつている状態で精神誘導は絶大であるからだ

「そんな・・・残酷すぎます」

「じゃが、理には適っておる」

「・・・そうですね。『理』に反しているのは私の方です。ここからメデイサを連れ出せば、ヘラヴィーサがどうなるかわからない。例えケンの持っている力を使つたとしても」

エレノアはそう言い今から連れ出そうとするメデイサの方を向く
「なのに私は、自分の拘りのために、それをしようとしている。メデイサ本人の決意まで打ち砕いて・・・」

「理でいうなら、穢れる人間個人が悪いのよ。あんたが責任を感じる
ことじゃないわ」

「・・・だとしても、私は目を逸らしたくありません。自分が選んだ道の先にある現実から。それが理に反する私の、せめてもの義務です」
ベルベットは理から外れようともそれでも己の選択した道を真っ直ぐに歩もうとするエレノアに小さく呟く

「本当に面倒ね。あんたも、この女も・・・」

呆れとも取れるが自分自身も同じ事をしている事実は変わらない。
ベルベットは出口の方へ向き顔を逸らす

「ゴチャゴチャ考えないで、悪事は全部『災禍の頭主』のせいにも
しとけばいいのよ」

「そういいながらベルベットは出口に向かって歩きだす」

「ベルベット・・・」

エレノアはベルベットの彼女なりの優しさに気づいたのだろう

「別に気を遣ったわけじゃない。あたしは気にしないってことよ。道の先になにがあるうとね」

それからベルベット達はディアナを連れて遺跡を出る。聖寮は撤退したらしく警備という警備もほとんどいかなかった。フィガル雪原を歩いている途中でライファイセツトはエレノアに話しかける

「ね、エレノア。僕・・・メデイサを苦しめちゃったのかな？」

「そうかもしれません。でも私はあなたと同じことを思いました。お母さんが死んだら・・・悲しいです。だから、止めてくれて嬉しかったです」

「うん」

二人が話している後ろで見ていたベルベット達

「エレノアのヤツ、随分無駄な責任を背負おうとしてるみたいね。無理をしすぎて、穢れる危険が高くなってるんじゃないの？」

「・・・『穢れ』とは人間の心にある『エゴ』や矛盾から目を逸らす『独善』から生まれるものだ。だがエレノアは、自分のエゴを自覚し、矛盾と向き合おうとしている」

ベルベットがエレノアの精神状態を危惧するがアイゼンは穢れの性質を説明する

「それこそが対魔士に必要な資質——穢れを生む感情に染まらない『純粹さ』というものじゃ」

「つまり、大丈夫ってこと？」

「今はな。だが、人の心は一瞬で移ろう、この先どうなるかは誰にもわからない」

「ま、さほど心配せずともよからうて。大抵の対魔士の純粹さは『理』で作り上げたものじゃが、あの娘のは『天然』のようじゃからの」
マギルウはエレノアの才能を評価しているエレノアの純粹さは紛れもなく才能である

「ふん、対魔士の才能ってわけね」

「貴重な才能だが、特殊な資質でもある。エゴや矛盾を持たない者などいないし、己が醜さと正直に向き合うことも簡単にはできない。程度の差はあれ、穢れを持って生きてるのが普通の人間というものだ」
「穢れは、必然に存在するもの・・・か。でもアルトリウスは——」

ベルベットは最後にアルトリウスの事を呟いたが、それは誰にも聞
こえることはなかった。一行はヘラヴィーサへ続く道を歩き続ける

）

第33話 終わり

第34話

雪原を過ぎヘラヴィーサの街に帰り着いたベルベット達、エレノアは市街に入ったと同時に住民の様子を遠目から確かめる

「異常は・・・でていないようですね・・・」

エレノアの言った通り周りに穢れや体調不良に陥っている人はいない。一安心しているとその横をベルベットとロクロウが通り抜ける

「今のうちに街を抜けて、タイタニアに戻るわよ」

ヘラヴィーサで一悶着起こした面子からしてみれば長居したくないのは当然である。幸い騒ぎを起こした時には住民は避難して顔自体は見られておらず、街を通り過ぎるときに住民からは見られていたがエレノアが対魔士という事もあり護送かなにかと思われ怪しまれることはなかった。港からバンエルティア号で出航し、拠点であるタイタニアへと戻った

「・・・ここが貴方達のアジトか。私を逃がしたら致命傷になるわね」
聖隷術で拘束されたメデイサがベルベット達の拠点を見まわしながら中へと続く扉へと歩きながら呟く

「寝首を搔かれないように、精々気を付けなさい」

「・・・言うわね」

ベルベットとメデイサの間で空気が張り詰める、エレノアも後ろにいるがその空気の中てられたのか緊張した表情で二人を見る

「お帰りー！」

そこへモアナがエレノア達の所へ走ってくる

「あの子がモアナだよ」

「!!」

ライフェイスットがメデイサにモアナの事を紹介する、メデイサはモアナの姿を見てある事に驚いている

「ディアナと同じくらい・・・！聖寮は、こんな小さな子を無理矢理喰

魔に・・・!?!」

モアナはライフイセットとエレノアの方へ走り寄るがそこにメデイサがいたので立ち止まる。知らない人がいるので驚くのも無理はない

「・・・・・・・・」

メデイサとモアナの目が合い、モアナは人見知りかそれとも怖いのかケンの後ろに隠れてしまう。エレノアはメデイサを拘束している術に手を当て解除する

「エレノア!」

ベルベットが拘束を解いたエレノアに声を荒げる。メデイサが自由になった事に困惑する、エレノアが後ろから話しかける

「お願いします、メデイサ。あの子と話してあげてくれませんか?」

「・・・・・・・・どういうつもり?」

メデイサはエレノアの言葉の意味が分からず彼女の方へ向き直る
「モアナは喰魔です。だけど、お母さんを恋しがる普通の女の子なんです。私じゃ、あの子の悲しみを、不安を埋められない。でも、貴方なら・・・・・・・・」

エレノアは悲痛な面持ちでメデイサに懇願する。母親になった事のないエレノアではモアナを慰めることは難しい、メデイサはそれを聞きモアナの方へ歩み寄る

「ごめんなさいね。怖がらせちゃったかしら」

「・・・・・・・・うん、大丈夫・・・・・・・・」

メデイサは屈みモアナに視線を合わせる。モアナも申し訳なさそうにケンの陰から出てくる

「私はメデイサっていうのよ」

メデイサはモアナの手を取り自己紹介するもその表情は不安がある

「怖い・・・・・・・・わよね?」

「・・・・・・・・ちよつと。でも、ベルベットやダイルより怖くないよ。それよりおぼちゃんは・・・・・・・・モアナが怖くないの?」

その言葉にメデイサは驚く

「夢を見たの、モアナのお母さんが・・・モアナを怖いって・・・いら
ないっていう夢・・・でも、最後にお話しした時、愛してるっていつ
てくれた。夢だからそんなことないってわかってる」

そこまで聞いたメデイサはモアナを抱きしめる

「怖いのですか・・・！お母さんが、子供をいらなんて思うわけ
ないわ。私も・・・お母さんだから・・・お母さんは、自分が死んで
も・・・世界がどうなっても・・・子供を愛しているのよ・あなたを・・・
誰よりも一番・・・」

メデイサは涙を流しながらそう言い切る

「泣かないで、おばちゃん・・・」

その様子を少し離れた所で見っていたライファイセットが呟く

「モアナとメデイサ・・・寂しくなくなるといいけど」

「そうね。泣き止ませるの大変だし」

ライファイセットはふと気になったのかベルベットに質問する

「聞いてもいい？ベルベットのお母さんって・・・」

「亡くなったわ。あたしがあなたより小さい頃に」

「あ・・・ごめん」

「別にいいわ」

ライファイセットはよくない質問をしたと思い謝罪するがベルベッ
トは気にしていないようだ

「つまり、あたしも、あなたと似たようなもの。だから一人で寂しがっ
ちや駄目よ？」

「ぼ、僕は平気だよっ！寂しくなんかないんだから！」

ライファイセットは恐らく子供扱いされたと思ったのか強がって否
定するベルベットはそんなつもりは毛頭なかったので逆に驚いてい
る

「なんで怒るわけ？変な子ねえ」

「変じゃないよ、もう・・・！」

「・・・エレノア、モアナとメデイサの監視は任せるわよ」

「は、はい！ありがとうございます」

エレノアはまさかベルベットがメデイサの保護に了承するとは思

わなかったのだろう

「いいの？対魔士が災禍のなんとかにお礼なんか言って」

「いい、いいじゃないですか。魔王が細かいことを気にしないでください」

エレノアはさらつと魔王呼びしているが誰もそのことに突っ込まない。毒されてきたのだろうか、そんな中拠点の中にいたベンウィツクがベルベットに声を掛ける

「ベルベット、グリモワールが呼んでたぜ。ライフィットを連れて監視塔に来てくれって」

「わかったわ」

「すぐに行こう」

グリモワールからお呼びがかかったということはいうことは古文書に何か重要なことが明記されていると判明したに違いない。ベルベット達は足早にアジトの中に入っていった

「ね・・・ロクロウたちは、お母さんいる？」

「ん、急にどうした？」

監視塔へ向かうため廊下を歩いている最中ライフィセットがそう切り出す。ロクロウはそんな質問をしたライフィットに尋ねる

「うん。モアナやエレノアもだけど、ベルベットにも両親がいなくてわかったから気になって・・・」

「俺の母親も、メチャクチャ厳しくて怖い人だったが、やっぱり随分前に死んじまったよ」

「そう・・・」

ロクロウは特に躊躇することなく答える

「儂に親はおらん。儂を拾った悪くい魔法使いによれば、川を流れていた桃の中から生まれたそうじゃよ」

「お前なら本当にそうかもな・・・」

マギルウはどこかで聞いたことがあるような事をいいます。少なくとも桃の中から生まれたのは嘘だろう

「ア、アイゼンは？」

「俺たち聖隷は、清浄な霊力が集まって生まれる存在だ。稀に人間から聖隷に転生する者もいるが、生前の記憶を維持することは、まずない。つまり、人間と同じような血縁関係はないということだ」

「そっか・・・僕も気づいた時には二号って呼ばれて使役されてた。その前の事が思い出せないのは、お母さん自体がないからなんだね。僕はメデイサに『お母さんが死ぬのはすごく悲しいこと』なんて言っただけど、本当の辛さは、わからないものかもしれない・・・」

「子供にも容赦ないの〜」
「単なる事実だ」

マギルウがアイゼンの横で愚痴るがアイゼンは事実を伝えただけ。誤魔化しても仕方ないのだ

「だがな、ライファイセット。血縁関係がないからと言って、特別な絆は感じられないわけじゃない。聖隷であっても、掛け替えのない存在の——家族や友との繋がりをもっているんだ」

「だよな。お前の言葉が本気じゃなかったら、メデイサは止まらなかつたはずだ」

「そうなのかな・・・」
「きつとそうさ」

血の繋がりはなくとも、心は繋がることはできる。ライファイセットにはそれがあつたからこそメデイサに届いたのだ

「桃から生まれた魔女よりは、ずっとな」

「こりゃあー！桃生まれを舐めるでないぞ！儂にじやって、犬、猿、雉とビエンフーとの特別すぎる絆があるわいー！」

「そうだといいな・・・所で、さ、ケンの家族はどうしてるの？」

マギルウが猿のようにキーキー騒いでる横でライファイセットがケンに聞く

「まあ、健在なんじゃないかな。もう会ってないし、連絡も取れないから」

「それってどういうこと？」

ライファイセットはケンの物言いに疑問符を浮かべる。家族の事なのにどこか他人行儀だからだ

「なんじやなんじやケンよ。まさかお主、勘当されたのかえ〜？」
「勘当という訳ではないのですが・・・とにかく自分の事は後回しにして、グリモワールさんの所に行きましょう」

ケンは話を切り上げて皆を急かす。ライファイセットやアイゼン達はその事を疑問に思ったが監視塔への廊下を進んでいった

「来たわね」

監視塔の屋上へと続く梯子を上ると縁の所で寝転んでいるグリモワールがいた

「グリモ先生。解読が進んだの？」

「ええ。『かぞえ歌』にはね、二番があつたのよ・・・読み下しておいたから・・・坊や、読んであげて」

「うん。ええと・・・」

ライファイセットがグリモワールの側までより、古文書を受け取りながら読み始める

「八つの穢れ溢るる時に 嘆きの果てに彼之主は無間の民のいきどまり 一つづの姿に還らしめん 四つの聖主の怒れる剣が 御食しの業を切り裂いて 二つにわかれ眠れる大地 緋色の月夜は魔を照らす 忌み名の聖主心はひとつ 忌み名の聖主体はひとつ」

「おふう・・・なんじやか不吉な文句ばかりじゃのー」

ライファイセットが歌を詠み終わると不吉な言葉ばかりでマガルウがため息をつく

「二番の歌詞は・・・カノヌシの性質を表してる？」

「おそらくそうよ」

ベルベットの推測にグリモワールが肯定する

「八つの穢れ溢るる時に 嘆きの果てに彼之主は無間の民のいきどまり・・・か」

「世界に穢れが満ちた時、カノヌシがその力で『民のいきどまり』をもたらず・・・と読めるな」

「人間を滅ぼすというのですか!？」

「おいおい、聖察はそんな目的でカノヌシを復活させようとしてたの

か？」

アイゼンの解釈にエレノアが勘ぐり、ロクロウはそれが事実なら自滅じみたことをしようとする聖寮のやり方に驚く

「違うーアルトリウスは、そんな男じゃないー」

そこにベルベットが声を上げる。皆はそれに驚き彼女の方を見る

「…あいつの理想は『個より全』、『理を意志による秩序の回復』よ。だから、世界を守るためにラファイを犠牲にした」

『お主の知つとるアルトリウスは』じゃろ？」

マギルウは横から割り込む、ベルベットの言い方だとアルトリウスがそういう目的で動いてくれないと自らの同一性が揺らいでしまう。故にそう決めつけないといけないのだ

「じゃが、人は変わるぞ。導師とて絶望したのやもしれん。業に流されて穢れを出し続ける、愚かな人間どもに…のう」

いくら自らを戒めても、どんなに導こうとしても、人が皆それに賛同し一つの道に向かおうとする者はまずいない。そしてこの時代なら尚更だ、負の側面が強いこの時勢であれば

「…そんな奴じゃない。もしそうなら、ラファイはなんのために…」

生贄として犠牲となったのか

「古文書の続きには、なにか書かれていないのですか？」

「それが、この古文書は完本じゃなかったの。まだ続きがあるはずだけど欠けてしまっているのよ…だから、今できる解読はここまで」
「ちっ…」

手持ちの古文書ではこれ以上情報が得られないことにベルベットが舌打ちする

「だが、原本はどこかにあるんだよな？」

「あつてこそそのカノヌシ復活計画だろう。聖寮はカノヌシの性質を完全に把握している」

「でも、王都の離宮にあったのがこれだし、原本の手がかりはないよ…」

行き詰まり皆がこれからどうするか思案しているところにエレノアが窘める

「今日はもう遅いです。ここまでにして休みましょう」

「・・・そうね」

埒が明かない上に一日中動きばなしだったので皆の疲労も溜まっている。エレノアの提案に従い会議は終了。全員屋上から降りそれぞれ休息を取ることになった。

く

深夜、夜も更けアジトは見張り以外は皆寝静まり今聞こえるのは風と波が打ちつける音のみが響くのみとなっている。先に就いていた乗組員と交代したケンは一入波止場から海を見ている

「あの時ははぐらかしてしまっただけど・・・そろそろ隠し通すのも難しくなってきた。今度聞かれたらどうしようか」

側にある木箱に腰掛け考え込む。ルシフェルからも、あの科学者からも言われた。自分がこの世界の人間じゃないということ、家族とはもう何の繋がりが無いということを感じられてしまえばじゃあ何だという話になる

「ふう・・・」

溜息しか出ないケンそこに声が響く

「ついにこの時が来てしまったようだな」

ケンが声のした方向へ顔を向けるとルシフェルが積まれた物資箱の上で膝を組みながら座っていた

「ええ・・・向こうは何気なく聞いたつもりでしたでしょうけど。少し焦ってしまいました、次聞かれたら話すしかないでしょう」

「だろうな。君のあの話し方をしたら誰だって怪しむし興味も出る、まだ時間はある。決心だけはしておいた方がいい」

スマホでゲームをしながら話すルシフェルから視線を外し見張りを再開するケン

「少しは寝ておいたらどうだ。あれからほとんど休んでいないだろ」

「一時間ほど眠りましたので大丈夫ですよ」

ゲームを一時中断したルシフェルが木箱から降りケンの隣に立つ

「見張りぐらいならできさ。どうせ暇だしね、何かあったら起こすよ、今日ぐらいサボっても罰は当たらんさ」

「うーん、そこまで言うなら・・・わかりました」

しばらくして腰かけたまま眠るケンの横で海を見ているルシフェル

「これから物語が大きく動き出す・・・か、どうなることやら」

彼の視線の先で徐々に明るくなる空を見ながらそう呟いた

く

日も登り切り船を整備している波止場でこれからの事を相談しあうためベルベット達が集まる

「ライフイセツトー！モアナ、昨日はメデイサと寝たんだよー。蛇だけど、あつたかかった」

そこへメデイサと一緒にモアナがライフイセツト達に手を振りながら走り寄る

「よかったね」

「今からメデイサとお風呂に入るの。ライフイセツトも、一緒に入るー」

いきなりとんでもない誘いにライフイセツトが固まる

「え！困るよ・・・」

「いいよー、モアナは困らないから」

ライフイセツトは異性と入浴なんてしたこともないし聖隷ではあるが思春期に差し掛かっているであろうライフイセツトにはとてもできることではない。困らないといってもこっちが困る

「ええつと・・・」

逃げ道がなくなつたライフイセツトにエレノアが助け舟を出す

「モアナ、知っていますか？ダイルの尻尾が、新しく生えかかっているんですよ」

「本当!?みたい!」

モアナがそれに反応して興味がダイルの尻尾の方へ向く。簡単に言うとは生贄である

「ダイルは監視塔に行ったようです」

「いつてみる！メデイサもいこー!」

モアナがダイルの所へ行くこうとメデイサの腕を引っ張る

「……ええ。でも、走ると転ぶわよ」

モアナはお構いなしにメデイサを連れて監視塔へと向かっていった

「……ありがとう、エレノア」

安堵の溜息をつきながらお礼を言うライファイセット

「女の子の扱いが下手ですね。私の聖隷は」

それにベルベットが反応しエレノアを睨む

「モアナ、元気になってよかった。メデイサも」

「はい。問題が解決したわけじゃないけど、笑ってくれるのは救いです」

「重要なのは、こっちの問題よ。早く次の地脈点を感知して」

「う、うん」

ベルベットはどことなく怒った表情にライファイセットがたじろぎながら羅針盤を取り出す。どう見ても嫉妬だ

「もう少し言い方があるでしょう?」

「時間がない。相手は聖寮。遅かれ早かれここも見つかるわ」

「それはそうですが……」

ベルベットの言い分はわかるが問題はその言い方であるといいた
いエレノア

「別の隠れ家を探すか?」

「ううん、守るより攻める。見つかる前に残りの喰魔を捕らえるのよ」

「剣術でいう『先の先』だな」

「守り切るのは難しいものな――」

マギルウはベルベットにどこか皮肉の聞いた言葉にベルベットが
小さく呟く

「……守る義理なんてないからよ」

「地脈点があった! イーストガンド領の……東の方……みたい」

「そこって……」

心当たりのあるベルベットが言葉に詰まるもすぐに続ける

「……了解。イーストガンド領の東ね」

「なら、まずタリシエンの港に向かおう」

アイゼンは乗組員に出向の準備をさせるため号令を掛ける。それから数時間後、バンエルティア号はモアナやメデイサ、ダイルとクロガネ、パーシバル達に見送られながらイーストガンド領へ向けて出港を開始した

↳

第34話 終わり

第35話

ベルベットは以前にもいた白い空間に立っていた。辺り一面真っ白、壁があるのかもすらわからないほどの空間、窓のような物からベルベットは外の景色をみているのだろう。だが、その窓も宙に浮いているのか壁に取り付けられてるのかもわからないし、窓も外の景色を移しているのかすらわからない。ベルベットは手に持っているリングを一口かじる

「……すっぱい」

顔を顰めるベルベットの後ろで声がした

「味がわかるのですか？」

ベルベットの後ろでテーブルに手を乗せ立っているシアリーズがいた

「味がするのよ、夢の中と、アイツに技をかけてもらった時だけは」

「……これが夢だと？」

「わかるわよ。だってあんたは……」

一拍の静寂

「あたしが喰らったんだから」

「そうですね。忘れないでくださいね」

その言葉にベルベットが声を荒げシアリーズの方へ顔を振り向く

「忘れられるわけないでしょっ！」

ベルベットが持つていたリングを握りつぶす

「——の血の味をっ!!」

その瞬間意識が覚醒しベルベットは夢から覚め顔を上げる

「……!!」

辺りは霧に包まれている。ベルベットはそれを気にすることなく自らの左手を見る

「忘れられるわけ……」

もうすぐイーストガンド領海に入るが相も変わらず霧が立ち込め

ている

「霧が出てきましたね」

「・・・じゃの」

船首から辺りを見渡すエレノアに答えるマギルウ

「そういえば、エレノア。一つハッキリさせておきたいんだけど」

その横に立っていたベルベットがエレノアに話しかける

「なんですか、改まって」

「ライファイセットは、あなたの“じゃないから”

「え・・・？」

エレノアは一瞬戸惑ったようだが直ぐにその真意を理解し反論する

「言いたいことって、それですか!? 貴女のもでもないでしょう!」

「そうよ。あの子は、あの子。誰のものでもないわ」

その言葉にエレノアはハッと気づき、申しわけなさそうにする

「そうですね。聖隷は対魔士の道具じゃない、以後気を付けます」

「わかればいいけど」

ベルベットはまさかエレノアがすんなり意見を聞くとはい思っていなかったようで驚いた表情をしていた

「くくく・・・危ない、危ないのう。ベルベットや、儂との賭けは覚えておるか?」

そんな二人のやり取りを見ていたマギルウが笑いながら含みのある質問をベルベットに投げかける

「ああ・・・あたしが折れたら1000ガルドってやつ? それが?」

「忠告しておくぞ。人は苦痛には耐えられるが、“幸福”には逆らえない。賭けに勝ちたかったら、似合わぬ“夢”は見んことじゃ」

マギルウの忠告、もしくは警告に近い言葉

「生憎、見るのは悪夢ばかりよ」

く

バンエルティア号は程なくしてイーストガンド領の港町、タリエシンに入港した。此処タリエシンはイーストガンド領では中心的な港町で貿易などは基本此処で行われる。海に面した崖に沿う形で町が

作られているため、高低差が激しい上に平地が少ないため道路や階段は建物の隙間を縫うように敷かれている。ついでだがこの町は猫が多くタリエシンではなくネコエシンと改名されかかっていたらしい「霧も、すっかり晴れましたね。迷わなくてよかった」

「当然だ。俺たちを何だと思ってる」

入港する前は濃霧が掛かっていたので一安心するエレノアにアイゼンは不服そうだ

「違法で無法で、腕のいい海賊だと」

「・・・わかっていればいい」

「しかし、普段は霧が出る海域じゃないんだけどなあ・・・」

ベンウィックはあの霧について疑問を持っているようだ。海を渡り歩いている海賊、各海域の特徴を知り尽くしているはずだ。故にあの濃霧を不審に思ったのだろう

町の門を抜け港から町に入るライフイセットが皆より先に階段を上りそこから広がる街を一望する

「お城みたい！」

「ここは、貿易で悪どく儲けた一族の拠点でね、攻められた時に備えて、こうなってるんだって」

「へえ・・・敵が多かったんだ」

ベルベットが後ろからこの町について簡単に説明する

「けど、栄えたのは昔の話。今はただの田舎街よ、それでも、あたし達には憧れの都会だったけど」

「詳しいですね」

エレノアがベルベットの知識に感心する

「一応地元だから。この先のアバルって村が、あたしの故郷」

「じゃあ、喰魔がいるのは——」

「多分、あたしの村よ」

エレノアはベルベットがどう思っているのか察して慎重に切り出す

「・・・いいのですか？」

「どうせ知り合いはいないわ。みんな、あたしが喰い殺したから」

アバルへと向かうために門へと進んでいた一行。階段を上っている途中の踊り場で中年の男女の横を通り過ぎようとしたところで思いもよらぬ会話を聞いてしまう

「しまった、今日はニコが来る日だった！特製キツシュを買い損ねちゃった……」

「えっ!？」

「残念だったわねえ。でも、ニコもここに店を出せばいいのに。なぜ、態々アバルから通ってくるのかしら」

「村を離れたくないんだとき。行方不明になった友達の帰りを待っているとかで——」

男性のその言葉に動揺したベルベットが詰め寄る

「冗談言わないで！アバルは滅んだはずよ！」

「はあ？縁起でもないことを。確かにアバルは、三年前、業魔に襲われたが、滅んでなんかいない」

「怪我人も多かったけど、アルトリウス様の御力でね。ほとんどの人は命拾いしたのよ」

「う、うそ！」

記憶と現状が一致しないベルベット、声が震える

「嘘ってなあ……現に毎週、ニコって子がアバルから行商に来てる」

「うちの亭主も、昨日アバルの雑貨屋に薬を納めたのよ。代わりにウリボアの肉を仕入れてきて——」

「うそだ……みんな……あたしがこの手で……」

「ベルベット……」

頭を抑え、狼狽えるベルベットをライファイセットは今は見ているだけしかできなかつた

「ベルベットは、アバル村は全滅したみたいには言っていましたが、行商に来ている人がいるようですね。新たな人々が住み着いたということでしょうか」

エレノアは先ほどの男女とベルベットとのやり取りに疑問を抱く
「ベルベットは、行商に来てるニコって人を知ってるみたいだった……」

「アルトリウスが村を救ったと言っていたな。地脈点だからか？」
「……わからん。どうも情報が錯綜しているな。どういうことだ？」
「……聞きたいのはこっちよ……」

皆はベルベットの言っていた話ときっきの会話の辻褄が合わないことに疑問を浮かべる

「なんだかすごく嫌な予感がするんでフが……」

ビエンフーが不安そうにしていると

「ここで悩んでおっても真相は闇の中じゃ。進むしかあるまいの」
「だな。今更引き返す選択肢はない」

「姐さん……進んだ先が闇だったらどうするんでフか？」

「闇の中で仲良くお昼寝じゃろうな。多分永遠に……のう」

「ぞおお……」

「行つて確かめるしかないだろうな。お前の故郷は？」

「ずっと東よ。モルガナの森を抜けた先」

ロクロウの質問に答えるがその声には動揺と不安が見て取れた

↳

モルガナの森に入った一行、此処は一带全ての木々が落葉と紅葉で
景観が美しいことで有名だが、近年の寒冷化で植生が崩れつつある
「ベルベットの故郷……どんなところなんだろう」

「アバル村か。随分昔だが、船乗り仲間から噂を聞いたことがある。
特別なものは何もないが、素朴で愛想のいい人たちが多いとか」

「それは……どこにでもある田舎の村でフね」

アイゼンの話を聞いていたビエンフーがツツコミを入れる

「昔のベルベットも素朴で愛想がよかつたのかなあ」

「ほっほうく？つまり『今は凶悪で愛想が悪い』と！」

ライファイセットの何気ない一言でマギルウが燃料を投下する

「そうじゃないよ!？」

「ははは！いいじゃないか、大体事実だ」

「きつと……素朴で真面目な少女だったんじゃないでしょうか」
「おや、そんな風に思うのかえ？」

マギルウはエレノアが精いっぱいベルベットをフォローしていると気づいて真意を問いただす

「あ……いえ、なんとなくですけど」

「……僕も、明るくて弟想いのお姉さんだったと思う」

「ああ、そうかもな」

「……」

「それが今では、災禍の顛主とは。昔の仲間と会えば、今のベルベットが失ったモノが浮かび上がるやもしれんしろう」

黙って聞いているアイゼンの横でマギルウが横目で先に歩くベルベットを見る

「ベルベットが失ったモノ……」

↳

「そういえば、ベルベットはなんで監獄島に入れられてたんだろうな？」

ロクロウは今までの情報からベルベットが監獄にいた理由に疑問を浮かべる

「それは……監獄島の囚人の穢れをカノヌシに送るため……だよ」

「だが、アバル村も地脈点なんだろう？そこに放置すれば、手っ取り早いだらうに」

「エサがなかったからじゃろう。ベルベットは村人を全員喰い殺したと言ったからの」

「あの話は事実……ということですか？」

「儂は知らんよ。アイゼンのコインで占ってみい」

エレノアはまだ確信を持っておらずマギルウに問い詰めるが、あくまで予想である

「だから、それでは——」

「別の理由も考えられる。ベルベットがアルトリウスが初めて捕らえた喰魔だったとすれば……」

「まさか……古文書の情報を確認するために!？」

「そうだ。アルトリウスは、地脈点と穢れが揃った監獄島に特別房をつくり。ベルベットを使って喰魔の実態を確かめたのかもしれない」

アイゼンの推理が合ってたとすれば身内が目的達成に使える人材であるなら態々探す必要もないし実験もでき、穢れも集めれる、一石二鳥以上である。人としてどうかと思うかは別として

「なるほど。導師の立場としては、ありうるな」

「でも、家族を実験台にするなんて・・・」

「推測にすぎん。だが、義弟を生贄にする男は、義妹にも手加減はしないだろう」

アイゼンの言葉にライフィセットは暗い顔をしながら呟く

「なんで、そんなことができるのかな・・・？」

「そうまでして救いたい世界があるからか・・・そうまでしないと救えない世界があるからか・・・」

「え・・・？」

「きやあああー！」

森も終盤、目的の村まで目と鼻の先になった時、奥の方から悲鳴が響いてきた

「この声は・・・!？」

ベルベットはその声に覚えがあるのか走り出す。皆もそれに続く、声のした方へ近づくとそこに一人の少女が倒れていた。それでも驚きだがその横には一体の業魔が今にも少女に飛び掛かろうとしていた

「はあ!!」

ベルベットが走りこんだ勢いを使い後ろ回しの飛び蹴りで業魔の腹部を蹴り飛ばす。巨体のため対して距離は開けられなかったが少なくとも少女に危険が及ぶことはない、がベルベットは動揺を隠せない

「なんで・・・!？」

近くで見たからわかってしまった。分かりたくなかった。他人であってほしかったと彼女は思っただろう、だが違った

「なんでニコがいるのよ！」

ベルベットが狼狽している中禍々しい蠅螂の業魔、ゼノマンティスが吠えながら標的をベルベット達へ変える

「よそ見をするなベルベット！」

アイゼンはゼノマンティスの頭部目掛けてウインドランスを撃ちこむ、だが攻撃力が足りないようでゼノマンティスはアイゼンに狙いを定めその巨体に似合わぬスピードで急接近する

「ちっ！」

振り上げる鎌を避けるために横に飛び退く、アイゼンがいた所は地面が割れ刃が大地に深々と突き刺さっている

「とんでもねえ馬鹿力が」

「刃物対決なら俺に任せてもらおう!!いざ尋常に勝負！」

ロクロウが僅かに止まった隙に生物の急所である目に向かって小太刀を突き立てようと飛び掛かる。ゼノマンティスも本能で察知したのかももう片方の腕で防御する

「やるなあ!!そうでなければ修行にならん！」

ロクロウは救出より戦いの方に意識がいつているが目的は果たせている

「ロクロウ！無茶しないでください！」

エレノアも槍を構えロクロウとは反対の方向から攻撃を加える、ロクロウの斬撃とエレノアの槍術の同時攻撃を前足の鎌を振るい防戦気味だが二人は気を抜かない。先ほどの攻撃を受ければ致命傷は免れないからだ

「二人とも下がって！鏡面輝き熱閃手繰れ！」

ライファイセットが聖隷術を発動させようとした時、ロクロウとエレノアが術の範囲に逃れる

「カレイドイグニス！」

「ついでに喰らえじゃ！エクस्पロード！」

ゼノマンティスの周りに散らばる鏡の破片で熱戦が乱反射を繰り返し光が圧縮されそこから爆発を起こしその身を焼く。火に弱いのかダメージが怒りを助長させゼノマンティスが二人に向かってくる

「この儂が堂々とお前の目の前にこの可憐な姿を見せたのに疑問に思わんかえ？まあ本能でしか動いとらんしわかるはずもないかの♪」
それと同時にゼノマンティスの目の前に無数の赤い球が浮かび上がる

「いずればすぼす燃えるじやろ！ブレイジングマイナー！」

マガルウの仕掛けた罠にかかったゼノマンティスに爆風が襲う。黒煙が舞う中、その切れ目からロクロウとエレノアが飛び出す

「まだ倒れるなあ！翠波活殺!!」

「これで！炎月輪」

小太刀を一瞬で右に振りぬき、その真空刃と炎を纏った斬撃が鎌を持った前足を切り落とす。激痛に悶え後ずさりして逃げようとするゼノマンティスの首をケンの太い腕が巻き付き裸絞めにする

「ベルベット!!」

アイゼンは未だにニコの前で立っているベルベットを呼ぶ

「・・・え!?!」

「その娘は後だ！今はこいつを片付けることに集中しろ!!」

アイゼンの声で我に返ったベルベットに指示をしてゼノマンティスに向かって走り出す

「蜃気楼（ミラーージュ）!!」

高熱を纏ったフツクを首に何発も叩き込む。ゼノマンティスの口から泡が出始める

「決める!!」

「っ・・・!!岩斬滅碎陣!!」

意を決したベルベットが刺突刃を出し跳躍する。ケンはそれに合わせて裸締めを解き飛び退く。刃をゼノマンティスの喉奥に突き立てる。刃から伝わる衝撃波で内臓を破壊したのか紫色の血液を端から垂れ流しながら倒れた

く

「うそ・・・ニコが本当に・・・」

あれからしばらく経つてもベルベットは未だに信じられないようだ
「うう・・・」

そこでニコと呼ばれた少女が意識を取り戻し上半身を起き上げら
せる。辺りを見回しベルベットに気づく

「ベル・・・ベット・・・!?」

「どういうこと!?なんで、あんたが生きて——」

咄嗟にベルベットが刺突刃をニコに向ける。ライファイセットが止
めようとするがニコがベルベットの言葉に割り込む

「こっちのセリフだよ!!今までどこにいたわけ!?突然いなくなつて
!みんなは業魔に食べられたんだって言ったけど。あたしは、そんな
はずないって・・・だつてベルベットは強いんだから・・・!!」

ニコの積もりに積もった思いを聞いたベルベットは驚いた表情を
する

「・・・やっぱり生きてた・・・うう・・・うわくくん!!」

ニコは涙を流しながら死んだはずの友人に抱き着く

「・・・・・・・・」

ベルベットはそこに実体があることがわかりニコの手に自らの手
を重ねた

「・・・ごめん。お連れの前でみつともないとこ見せちゃつて。早くみ
んなに知らせないと!ベルベットが帰つて来たつて!」

ニコはベルベットの返事を待たずにアバル村へと走り出す

「ニコが・・・生きてる・・・」

ベルベットが友人の背中を見ながら呟く

「気を許すな。嫌な予感がする」

「そうじゃぞ、死神が一緒じゃしなー」

アイゼンの警告にマギルウがお墨付きを与える

「とにかくアバルへ。なにがあつたのか聞いてみようよ」

「・・・う、うん」

ライファイセットに促されて一行は村へ向けて歩き出す

「ベルベット、そもそも、村人が死んだのを確かめたのか?」

「あの時、そんな余裕なんて・・・」

アイゼンが横に来て確認を取るがベルベットはそこまでできな

かつたらしい

「こんなはずなのに……この村はあたしが……あいつがラファイを殺した日に……」

「ベルベット、大丈夫？」

「……もちろんよ。こんなことあるはずないって、あたしはちゃんとわかってるんだから」

「とにかく、落ち着いて確かめましょう」

「落ち着いてるわよ……あたしはちゃんと……」

ライファイセットとエレノアに窘められながらも気丈に振舞うも明らかに落ち着いていない

「別人がニコって娘になりますましてるようには見えなかったが……」

「本物だからこそ、逆に不自然ということ。ロクロウ」

「応、ここは『用心堅固』だな」

く

一行はアバル村の門を潜り村の中央広場へと向かうとそこには大勢の村人が待っていた

「ベルベット！本当に無事で！」

「ああ、よかった！お帰り！」

「ずっとどこにいたの？連絡もしないで……」

村人が口々にベルベットの帰還を歓迎するがそれに信じられないとばかりに首を振る

「こんな……あたしは……あの日、村は滅んだって……」

「ああ、全滅するところだった」

「危ういところを、アーサー——アルトリウス様の力で救われたのよ」

アルトリウスが村を救ったと聞いたベルベットは声を荒げ否定する

「違う！あの男がやったのよっ!!あいつがライファイセットを生贄に！」

ベルベットの声に皆が驚くが一人の男性が諭す

「……ライファイセットのことは、残念だった」

「残念で済まず気!!?ラファイは!あの子は死んで——!!」

「本当にすまない。だが、希望を捨てないでくれ」

「そうだよ。あの子は、まだ生きているんだから」

「!!?」

男性の必死の謝罪もそうだがニコのその一言でベルベツトは声にならない声を上げる

「生きて……る……?」

「あなたの家にいるわ。安心して。みんなで世話をしてきたから」

「そんな……」

「ベルベツト……」

「……」

ベルベツトとラファイセットの後ろでアイゼンがなにか臭うのか考え込んでいた。その後村人と別れ放心状態のベルベツトにラファイセットが話しかける

「あの子が……ラファイが生きてる……」

ベルベツトは真相を確かめるかのように先に自らの家に向かって走り出す。ラファイセット達もついていこうとしたがアイゼンが立ち止まる

「どうしたの?」

ラファイセットがアイゼンの様子を不思議に思ったその時。アイゼンがロクロウの前に立つ、ロクロウはアイゼンの行動に疑問を持ったがその瞬間彼の鳩尾にアイゼンの拳が刺さる（U）

「ぐはっ!!」

不意の攻撃にロクロウが咳こみながら体を曲げる

「……解けないか」

「幻術を疑うなら、自分で試せよ……」

「僕たちみんな、幻を見るかもってこと?」

「可能性だ。前に一度かけられたからな」

ロウライネの事があったので警戒して試してみたのだろう、ロクロウで

「でも、村全部が幻覚だなんてありえません」

「普通は……の」

エレノアはこんな大規模な幻術を仕掛けられる者がいるとは思えないとばかりに否定するが、後ろにいたマギルウは何か心当たりがあるようだ

「どうする？片っ端から斬り倒してみるか？」

物騒な提案をするロクロウにアイゼンが待ったをかける

「……いや。敵も俺たちも目的は同じだ、喰魔を探す。手伝え」

「わかった」

「……僕は、ベルベットと一緒に行く」

「好きにしろ」

「側で見ててやれ。あいつ、ちよつと普通じゃないからな」

「うん」

ロクロウの言いつけにライフセットは頷きロクロウとアイゼンが別行動を取るため別れようとした時ケンも動き出す

「自分も一緒に行きます」

「これは俺が勝手に決めたことだ。お前がついてくる必要なんてないぞ」

「喰魔探しであれば、頭数が多い方がいいですから」

アイゼンは一度断ろうとしたが、ケンの言い分も一理あるので了承する

「わかった。行くぞ」

「それじゃ、ライフセット、ベルベットさんの事お願いするよ」

「うん、気を付けてね」

二人にケンが加わり、ライフセット、エレノア、マギルウはベルベットの走っていった方向へと向かった。アイゼン達は喰魔を探すため歩き出す

「……」

ケンは村人とすれ違う、その表情は固い。右目の視界には人の姿で移っているが左目の視界には

(……これが幻術だとすれば、相当力の持ち主、間違いなく聖寮だろうし恐らくは……)

その視界は人の姿ではなく獣人型の業魔を捕らえていた

）

第35話 終わり

第36話

アイゼン達と別れたライファイセットとエレノア、マギルウはベルベットの後を追い離れにある一軒家へとたどり着く。家の扉に手をかけているベルベットにライファイセットが直ぐ様近づく

「家・・・全然変わってない」

「気をつけて、ベルベット。アイゼンは、敵の罠かもって・・・」

ライファイセットが注意を促した時ベルベットが彼の方を向き声を上げる

「ニコ達が操られてるってどういうの？」

「わからない・・・けど・・・」

「メルキオルの術か。だとしても」

ベルベットは刺突刃を出し自らの右手の掌に刃を当て引き切る

「ぐっ・・・!」

「ああっ!!」

ライファイセットは直様右手からの出血を止めるため回復の術を掛ける

「あたしには通じないわ」

「あなたという人は・・・」

ベルベットの無茶にエレノアがそう呟く

「人は苦痛には耐えられる。じゃが・・・」

3人から少し離れた所にいたマギルウが意味深な事を言っていた。それから家に入りベルベットは弟の部屋の扉に手を掛ける、僅かに躊躇っていたが意を決して部屋に入ると窓際のベッドに一人の人間が眠っていた

「!!」

ベルベットは目の前の光景に小さく悲鳴を上げた、ベッドの上で眠っているのは間違いなく。3年前に失った弟のライファイットだったからだ。ベルベットはそれを警戒してか、自己を保つためか左手を握り締める

「騙されない・・・わよ・・・」

「傷が開いちやうよ」

ライファイセットは傷が塞がったばかりの左手を握り締めるベルベットに近づくがその前に彼女は弟に近づき、左手を弟の頬に添える。そこから伝わる温もりにベルベットは自分の中にあるものが崩れた

「・・・あつたかい・・・」

涙を流すベルベットは力が抜けたのか床に両膝を着く

「ラファイ・・・本当に生きて——ラファイ？」

ベルベットは両手で弟の左手を握るが目を覚ます気配がない事に戸惑う。そこに後ろから声がかかる

「あの日以来、ずっと眠ったままなの」

ニコがこれまでの経緯を説明する

「祠で倒れてるのを見つけてね。怪我は治ったけど、ずっと目を覚まさなくて・・・」

「・・・それでも・・・生きてるならいい」

ベルベットは徐に弟からもらった櫛を取りだす

「あたしが絶対見つけるから・・・ラファイの目を覚ます方法」

ベルベットは自らの額をラファイの額に当てる

「櫛のお礼・・・ちゃんと言わせてね・・・」

（ベルベットの櫛は、この子が・・・）

ライファイセット達はベルベットとラファイを二人にするため部屋を出た

（アルトリウス様は、あんな小さな子を生贄にしようとしたっていうの・・・？）

外でベルベットを待つ間エレノアはこれまでの状況を整理していた。モアナだけではなく義理の弟でさえも犠牲にしようとしていた事実、導師の所業にエレノアはますます不信感を募らせてゆく

「どうした、ライファイセット？元気がションボリのようにじゃが？」

先ほどから何もしゃべらないライファイセットにマギルウが声を掛

ける

「そんなことないよ・・・ベルベット、よかった」

「へえ、あなたもライフィセットっていうんだ。すごい偶然ね」

ニコはラファイと同じ名前であることに驚く

「う、うん・・・」

伏し目がちに応えるライフィセットの前方で扉が開く音が聞こえる、皆が反応したとき丁度ベルベットが出てきた

「・・・悪かったわね、なんか」

「気にしていません。これからどうします?」

ベルベットの謝罪に気にしていないというエレノアは、これからの行動をどうするか質問する。そこにニコが一つ提案をする

「今晚は、久しぶりにライフィセットの好きな物を作ってあげてよ。スープとかなら飲めるし、匂いにつられて目を覚ますかもしれないよ」

「そう・・・しよっかな。買い出しの間、見ててくれる?」

「うむ!苦しゅうない!」

ベルベットはその提案に乗りニコに留守をお願いする。親友の頼みにニコは快く引き受ける

「僕も・・・手伝っていい?」

「お願い。味見してもらわないといけないから」

ベルベットはライフィセットの申し出を了承し買い出しに向かう

「アイゼン達、喰魔を見つけたでしょうか?」

「それは・・・アイゼンとロクロウとケンに任せておこうよ」

エレノアは別れた3人の事を考えながら歩く。ライフィセットは今はベルベットの事に集中するべくエレノアを促す

「気にならないのですか?」

「もちろんなるけど、今はベルベットの側にいたいんだ、なんか、すごく嫌な感じがして・・・」

「喰魔探しよりも大事なほど?」

「・・・うん。胸がモヤモヤして、体の芯が冷たくなるみたいで・・・すごく怖いんだ」

エレノアはライフイセットの言いたいことを理解したのか表情を引き締まる

「・・・わかりました。貴方の感覚を信じます。喰魔のことはロクロウ達に任せて、私たちは

ベルベットと一緒にいましょう」

「ありがとうございます」

「マギルウ、貴女はどうします?」

後ろを歩いていたマギルウについてくるのかどうするのかを聞く

「もちろん儂は、どっちでもいいわい!」

「ですよ」

「でも、マギルウもありがとう

呆れるエレノアだったがライフイセットはついてきてくれるマギルウに感謝する。先に進む2人を見ているマギルウの横へビエンフーが近づくと

「・・・いいんでつか、姐さん?」

「どーせ、なるようにしかならぬ。なるようにならんのだよ・・・」

マギルウは胸に手を当て自分に言い聞かせるようにそう呟いた

く

弟をニコに任せ夕食の買い出しに出かけたベルベット達、ベルベットは真つすぐに一人の男性の元へ向かう

「おじさん、卵と牛乳、ホウレン草にトマト。あと、チーズのいいところを頂戴」

先ほど広場で会った馴染みの商店主に必要な材料を注文する

「あいよ!ベルベットが戻ったお祝いだ。食材はサービスするよ。お前が、ごちそうを作ってやればライフイセットだってすぐ目を覚ます

「さ」

「ありがとう。じゃあお言葉に甘えて」

ベルベットは感謝しつつ店主が包んだ食材を受け取るがその横でエレノアの表情はよろしくない

「ホウレン草は・・・苦手なのですが・・・」

「好き嫌いすると大きくなれないわよ」

「個人的には十分ですけど!？」

エレノアが全力で遠慮するのでベルベットが折れた

「仕方ない。今回は入れないであげる。一個貸しよ」

「ベルベット。対魔士様と友達とは大したもんじゃないか」

「友達じゃないってば!」

「ははは! 仲のいいことだ」

エレノアをベルベットの友人と勘違いしたのか煽てる店主に真っ先に否定するベルベット。だが彼女は一つ材料がない事に気づき、店主に在庫がないか尋ねる

「そうそう、ウリボアの肉はある?」

「おっと、それは売るきれちまったな」

「じゃあ、いつも通り鎮めの森で狩るわ」

店主が在庫切れであること伝えるとベルベットは自分で調達してくると言い森へ向かおうと踵を返そうとした時店主が警告する

「それが近頃、鎮めの森にはウリボアがないんだ。モルガナの森を探したほうがいい」

「わかったわ。行ってみる」

店主に手を振りながらベルベットが狩場へ向かうため歩き出す。ライフセット達もそれについていくがライフセットは先ほどの会話でエレノアの意外な秘密があったことに少し驚く

「エレノアは、ホウレン草が苦手だったんだね」

「ええと、あれは・・・」

エレノアは誤魔化そうとしたが観念したのか顔を赤らめ恥ずかしそう白状する

「・・・実はそうなんです。内緒ですよ?」

「それにしても、お店でのベルベット、楽しそうだったね」

「本当に、栄養のバランスが摂れた無駄のない食材選びも見事でした。なにより明るくて自然だった」

普段のとは違うベルベットを見たエレノアの率直な感想にライフセットも同じ意見だ

「きつと、あれが本当のベルベットなんだね」

「……ええ。家庭的で弟想いな普通の女の子」

「あのままでいられたらよかったのに。そしたら、友達と『苦しゅうない』って笑っていられたのにな」

「アルトリウス様の義妹のベルベット・クラウとして……」

「あ……普通の女の子は、あんまり『苦しゅうない』なんて言わないのかな？」

ライフィセットはニコのあの言葉を思い出し疑問に思う。普通それは目上の人が使う言葉なのだから当然だろう

「ふふ、そういう普通じゃない会話を普通にできるのが、幸せな普通の女の子”なんですよ”」

まあ簡単に言うつもりである。エレノアの言いたいことを理解したライフィセットが笑みを浮かべていた

「これだけあれば十分かな」
「……」

店主の勧めに従い、モルガナの森で狩りを行ったベルベット達。彼女たちの前には数頭のウリボアが横たわっている、ベルベットが解体しようとする中ライフィセットの表情は思わしくない

「どうかした？」

「うん……ちよつと可哀想だなんて……」

「わかります。このウリボアたちも家族だったのかもしれませんが。残酷ですね、人間も」

エレノアもそう思ってたらしい、生きるためとは言え己の都合で殺生をするのは抵抗があったのだろう

「……そうね。そんな感じ、忘れてた。けど、仕方のないことよ。生きるためには、食ばなきゃならないんだから」

「……仕方がないことじゃな、確かに」

ベルベットの言い分にマギルウは遠目から呟いた。狩りを終え帰路についている最中、ライフィセットは雰囲気を変えるため話題を振る

「買い物をして、狩りをして、友達と笑って……ベルベットはこんな風に暮らしてたんだね」

「はい、私も昔を思い出します」

「え？でもエレノアの村は業魔に……あ、ごめん」

業魔により壊滅したはずと言いかけたがその発言は悪いと思い、エレノアに謝罪するが彼女は気にしていないようだ

「いいんです。家族と過ごした幸せは、今も大切な思い出なんです。それに、家族を失った後にも、嬉しいことはちゃんとあったんですよ。お腹いっぱいご飯を食べたり、新しい友達ができたり……」

「そして恋をしたり」

ビエンフーが横から余計な口をはさむ

「そう、恋を……」

「恋……!?!」

紛れもなくビエンフーにつられて言った事なのだがライフイセツトはそのフレーズに驚く

「あっ……何を言わせるんですか、ビエンフー!」

「照れなくていいんでフ。普通の女の子の幸せ第一位は『初恋の思ひ出』なんでフから〜」

ビエンフーはエレノアが照れ隠しで言っていると勘違いしたのかそのまま続ける

「多分ベルベットにも、想いを寄せた男子がいたんじゃないでフかね〜?」

「初恋の思ひ出……ベルベットにも……」

「そういう言い方はやめてください、ビエンフー!はつきり言ってオジサン臭いですよ!」

「ガ〜ン!ボクはまだ150歳なのにオジサン扱いされたでフ……ビエ〜ン!」

エレノアはビエンフーのねちっこい言動を注意するがビエンフーは年齢の事だと思ったようで涙を流し泣いている、重要なのはそこではなく会話の仕方なのだが

「……とはいうものの、ベルベットの初恋の相手には会ってみたい気がしますね」

「僕は……別に……」

ライフイセツトは興味がないのだろうそつぽを向く。どことなく不服そうな表情だ

「ふふ、そうですか」

エレノアはそれがやきもちやいと直ぐにわかった。年頃の男子であることをわかっているエレノアにはかわいく見えたのだろう、つんつんしている彼を微笑みながら見ていた

）

村に戻って来た頃には日も暮れはじめ、ベルベツトは夕食を作るべく自宅の方へ向かう。家が見えてきた時玄関前でロクロウとアイゼンがケンがいた

「弟の事は聞いた。よかったな」

「・・・で、お前はどのような気だ？」

「村を・・・調べてたのね」

「ああ。岬の祠を探ろうとしたら止められた。聖寮に立ち入りを禁止にされているそうだ。喰魔がいるなら、そこだろうな」

「俺は、喰魔を引きはがす。罨なら戦いになるはずだ。罨でなくても、この平穏はなくなる」

村の現状とベルベツトの証言の食い違い、最重要の祠にも近づけさせようとしない村人の行動に不審な点が多い時点でアイゼンとロクロウが目星をつける

「あたしがしてきたように・・・ね」

「お前がここで止まっても、俺は聖寮と戦う」

「止めたければ力づく・・・よね」

全てを察したベルベツトが左腕に手を掛ける。その向かい側に立っていたロクロウの視界にニコがこちらに歩いてくるのが見えた
「待て、ベルベツト！」

ロクロウが慌てて止めるも間に合わずニコの目の前で業魔手をだしてしまった。ベルベツトの姿を見たニコが悲鳴を上げる

「ひっ・・・！」

「!!？」

ベルベツトがニコに気づいて動揺する。だがアイゼンは驚くわけ

でもなくただ冷静にベルベットの横を通り過ぎる

「・・・一日だけ待つ。覚悟が決まったら岬に来い」

「俺もそうするよ。明日どうするかは、お前次第だ」

ロクロウもアイゼンと同意見で集落の方へ歩いてゆく

「自分もアイゼンさんとロクロウさんの意見と同じです。貴女の選択に委ねます」

ケンも二人の後に続いてベルベット達と別れた

「そ、その手は・・・」

ニコの問いかけに誤魔化しても仕方ないと判断したベルベットは正直に答える

「見ての通り『業魔』よ。三年前、あんたたちを襲ったのも、あたし――」

「聞かない!!」

ベルベットが全てを打ち明けようとするもニコがそれを遮る

「業魔でもベルベットはベルベットだよ・・・怖いけど・・・怖くない――」

ニコはそう言い切りベルベットに走り寄り左手を握る

「あたし、誰にも言わないから・・・また前みたいに暮らそ？みんな・・・一緒に」

「ニコ・・・」

その言葉を返すことなくベルベットは無言でニコの手に己の手を重ねた

く

「結構なお味でした」

夜になりエレノア達はベルベットの自宅で夕食を摂った。エレノアはベルベットの料理はいつも美味しいが今日は特別に良かったようだ

「うむ！味見をしたライフィセットに花マルじやなー」

マギルウも珍しく料理を称賛している後ろでライフィセットとベルベットは弟の部屋で看病をしている。ベルベットが一しきり看病を終える

「明日はシチューを作ってあげるね」

ライファイセツトはその姿を後ろから見えていたが手持ち無沙汰だったので部屋を見回しているとき一冊の本が目に残る。見覚えのある装丁にそれがなんなのかすぐに気づいた

「これって!?!」

ライファイセツトは直様それを取り本を開く

「カノヌシの古文書! しかも最後まで書いてある。ベルベット——」

「ねえ、フィー」

ベルベットがライフィットの声を遮った。もちろんそんな心算はないのだが

「ちよつとでいいから、あなたの羅針盤を貸してくれない? お願い」

「う・・・うん」

ライファイセツトは本を机の上に置き羅針盤を取り出しベルベットに手渡す

「この子、すごく羅針盤を欲しがってたの」

羅針盤を弟の枕元へ静かに置く

「あなたと同じように、海の向こうのことを考えていつか旅に出た
いって言ってた」

「そう・・・なんだ」

フィーはベッドで眠っているライファイセツトを見ながら答える

「目が覚めたら、あなたとはいい友達になれるかもね」

「・・・ずつとこんな風に暮らしてたんだね、ベルベットは」

「なによ突然」

ベルベットは床に両膝を着きフィーに視線を合わせると彼の頬についているデザートプリンを取り除き口に入れる

「ん? プディングちよつと甘すぎたわね・・・!!?」

味覚が戻っていることに気づきすぐさま立ち上がるベルベット

「ベルベット、なんで味が・・・?」

フィーもそのことについて疑問を浮かべている。ベルベットは眠っているライファイセツトの方を見る。味がわかる、三年前の出来事の不一致、ありとあらゆる辻褄が合わない。心音が外にまでに聞こえ

るかのように高鳴る

「ふあく、そろそろお寝むじやわい」

「しかし、明日はどうするつもり——」

そんなことは知ってか知らずかマギルウは欠伸をかき、エレノアは明日の予定をどうするのかと聞こうとした時ベルベットがこちらに早足で近づきテーブルを両手で叩きつく。その音でエレノアが驚きベルベットの顔を見る

「……マギルウ。『夢』を操る術ってある？」

「え……夢がなんですか？」

エレノアが何のことかわからずベルベットに聞き返すがそこにマギルウがテーブルに肘をつきながら答える

「あるぞ。とある特殊な聖隷を使った術じや。霧とともに相手の『後悔』を取り込み、『幸福な夢』に閉じ込めるといふ」

「後悔を取り込んだ……幸せな……」

全てを理解したベルベットは右手を握り締め玄関の方へ歩き出す
「岬に行くわよ」

「今から？突然どうしたんですか」

事態を呑み込めていないエレノアが事情を聞こうとした時、小さい
が声が響いた

「お姉……ちゃん……」

フィーがそれに気づいてベルベットを呼ぶ

「ベルベットー！」

「行かない……で……僕のそばに……いて……」

ラファイが目を覚まし、羅針盤に向かって手を伸ばす。ベルベットは弟の側まで行くが無言でフィーの羅針盤を取る

「ああ……」

「これはフィーの羅針盤なの」

ベルベットはそれだけいい部屋からである際にフィーに羅針盤を渡す。部屋から出る瞬間震える声で静かに呟く

「ごめんね、ラファイ……」

「やだよ……待って……お姉ちゃん……僕を捨てないでえっ!!う

ああ・・あああゝゝ!!」

ラフィの悲痛な叫びを背中に受けながらベルベツトは家を出るために玄関へ向かっていった

ラフィを置いて家を出た時当たり一面に霧が出ているのにエレノアが気づく

「霧が・・・!?まさかこれって!」

「岬の祠へ!喰魔を引きはがす」

ベルベツトはこの原因が祠であることをすぐさま見抜き鎮めの森へ行くため走り出す。集落への道を抜け広場にたどり着いたとき、目の前でアイゼン達と村人たちが何やら揉めているようだ。ベルベツトは歩きながら人だかりに近づくと

「ベルベツト」

「来たか」

「ベルベツト、お連れさんを止めてよ。どうしても祠に行くって聞かないの」

ニコがベルベツトに二人を止めてほしいとお願いする。商店の店主も口添えする

「聖寮が立ち入りを禁止してるんだ。そんなことされたら俺たちが罰を受けちまう」

その話を聞いたベルベツトが静かに話し出す

「・・・ニコ。やっぱりあたしはひどい奴だよ。全部取り戻せるかも・・・忘れられるかもって思った。自分のために、ラフィを言い訳にしようとしたの」

ライフィセットはその言葉に視線を下げる

「けど、忘れていいはずがない。あの子が死んだんだから。理由もわからず殺されたんだから!許せない・・・絶対に許せないっ!!」

自らの思いを吐き出し顔を上げる。その表情には迷いが無い

「どけ。さもないと、また喰い殺すっ!!」

それを聞いたニコが表情をなくす

「なんでよ、ベルベツト・・・」

ニコと、そして周りの村人たちの足元からどす黒い靄のようなものが上がってくる次の瞬間村人は次々と業魔に変化していく

「なんであんたはくっつ!!」

「そう！それが本当よ！」

ベルベットの声に呼応したかのように業魔が一斉に襲ってくる

「どけええく!!」

ベルベットは飛び掛かってきた鎧を着た狼の業魔、ウールヴヘジンを左腕で掴み地面にたたきつける

「こりゃあ驚いた！まさか折れずに耐えるとはの！」

マギルウはベルベットの精神力の強さに感心した素振りを見せながら鳥人型の業魔のガルーダを誘い込み水玉の罠に引っ掛ける

「どういう意味です！」

エレノアは槍を振るいもう一体のウールヴヘジンの攻撃を防ぎ蹴りで反撃しながらマギルウにその言葉の意味を問いたただす

「細かい事気にしとると死ぬぞい！」

マギルウはそれをはぐらかすかのように術を発動させ攻撃を加えていく

「ベルベットのやつ、どうしたん・・・だ！」

ロクロウは目の前にいる業魔を切り捨てながら暴れまわるベルベットの方を見る

「・・・」

アイゼンはなにも話さずガルーダの顔面を叩き潰す

「ベルベット・・・」

ライファイセットもベルベットを不安そうな表情でみていた

「

村人に化けていた業魔を倒した一行、ベルベットはそれにも目もくれず走り出す

「・・・こっちよ！祠は森を抜けた先！」

「おい、何がどうなっている？」

ロクロウはわけもわからずもベルベットの後を追い始める

「敵の罠じゃよ。全部ベルベットの夢を利用した幻じゃ」

「ちつ、悪趣味な術だ」

「ベルベットが見破ったんだな」

「はい。でも、夢とはいえ、あんなに容赦なく……」

エレノアはベルベットのやり方に疑問を抱くがマギルウが遮る

「驚くべきはそこじゃないわい。あやつが夢を振り切ったことの方じゃ。夢と現の区分けなぞ、己の心のさじ加減にすぎんというに……」

「え……？」

意味深な事を呟いたマギルウにライフイセットが反応するが彼女は直にはぐらかす

「大した奴ということじゃよ。急ぐぞ、者ども！」

皆がついていく中先に走っているベルベットは呟く。自らに言い聞かせるように

「夢だ、全部……じゃないとしても。あたしは退かない……！」

鎮めの森の最奥、岬の断崖絶壁にある祠が見えた。だがその前に巨大な物体が動いている、これほどの巨体は業魔以外にはないのはすぐに分かった

「いました！・喰魔です！」

エレノア達の視線の先には首が二つある獣の業魔が一行を睨みつけ咆哮を上げる。その巨体は禍々しい穢れの色に染まり一頭の片目は青、もう一頭の目は赤、その色はお互いの顔半分を覆っているように耳まで流れている。鋭い爪と強靱な脚、当たれば並みの人間なら致命傷は免れない。喰魔オルトロスが走り出し距離を詰める。ベルベットにはその姿を見て何かに気づく

「そうか、あんたたちは……ニコが飼ってた……！」

ベルベットはこの喰魔が友人の飼い犬であることを思い出す。すぐに切り替え刺突刃と業魔手を構え走り出した

第37話

ベルベツトはオルトロスに業魔手を振り下ろす。が、それを直様察知して俊敏な動きで横に躲し攻撃を空振りに終わらせる。その僅かな隙を狙ったのだろうオルトロスがベルベツトの首を狙い牙を向け噛みつこうと飛び掛かる

「ぐうっ!!」

ベルベツトは右腕の籠手で左の首の牙を、刺突刃でもう片方の牙を受ける。ギリギリガリガリと金属の擦れる音が響く、オルトロスは首を振りまわす

「うああっ!!?」

体格差も重量差もかけ離れているの力で敵わないベルベツトは振り回され遠心力が付いた状態で振り飛ばされる

「ベルベツト!」

「あの喰魔、ベルベツトをしつこく狙っているようだな!ケン!」

ライファイセットがベルベツトを助けるべく走りはじめロクロウはオルトロスを抑え込むことができる可能性があるケンに指し示を出す、ケンが頷きベルベツトの元へ走る出そうとした時足音と地響きが響き始める。それが徐々に大きくなる、それはこちらに近づいてきていることを表している。

「なんだ・・・!?」

「なにかが近づいてきます!」

アイゼンとエレノアが音のする方を警戒する。視線の先には土煙が舞い上げオルトロスより大きい物体が一直線に突っ込んでくる

「躲せエレノア!!・・・ストーンエッジ!!」

アイゼンが直感的に岩の柱を繰り出すが、突進力の前には成すすべなく粉々に吹き飛ばされる。二人はすかさず横へ逃げる、眼中にないのか二人の間を通り抜けケンに向かう

「ケン!危ない!!」

猪が巨大化したような業魔ベヒーモスがその赤く染まった牙でケ

ンを突き殺そうと構えて突っ込んでくる。ケンはその牙を受け止めるが勢いを殺すことはできず右の太ももに突き刺さりそのまま背後にあった岩に叩きつけられる

「ぐあ．．．!!」

ケンは僅かに声を上げるも直ぐに腕に力を込め押し返すが脚を刺され無理な体勢のためうまくいかない

「エレノアー!」

「はい!!」

アイゼンの呼ぶ声に反応して二人はベヒーモスに向かって走り出す。そこから離れた所でマギルウとロクロウがオルトロスとベルベットから引き離すべく戦っている。ライファイセットが聖隷術でベルベットを治している

「大丈夫?」

「．．．そうよね、憎んでいないはずないわよね．．．」

「え?」

ベルベットは静かに呟く、そうなることをわかっていたように。そうしてしまったように、恨みを向けられることをして逃げられるはずがないとわかっていたように。ベルベットは静かに立ち上がる

「ライファイセット。喰魔を倒すことに集中して」

「う、うん」

ベルベットはそれだけ言うとおルトロスに向かって走り出す

「四の型!・疾空!」

ロクロウが印を切り小太刀から真空刃を繰りだしオルトロスの身体に傷をつけるがそれに意を介さず邪魔をするロクロウの喉笛を噛み切ろうと飛び込む

「そうはいかんぞ!・フラッドウォール!!」

マギルウがそれを阻止すべく水の壁で押し流そうとするもおルトロスがその強靱な脚力で強行突破し前脚の鋭い爪をロクロウに向けて振り下ろす

「なんて馬鹿力じゃ!・ロクロウ躲せい!!」

「うおおっ!!」

小太刀で受け流すが相手の力の強さに金属の削れる音とロクロウは弾き飛ばされる。オルトロスは次にマギルウに狙いを定め。詰め寄る

「喰魔の腹の中に収まるのは御免被るわい!!」

「させない！ライファイセット！」

ベルベットは指示をして走り出す、その後ろでライファイセットが聖隷術を発動させる

「漆黒渦巻き軟泥捉えよ！ヴォイドラグーン！」

オルトロスの足元から黒い沼が現れ後脚が嵌る。動きが鈍った所にベルベットの回し蹴りが一方の頭を蹴り上げる。反撃に前足で叩きつけようとするがそれをロクロウの一閃で弾き返す

「さつきの御返しをさせてもらおうぞ！翠波活殺!!」

がら空きになった胴にロクロウが小太刀を振りかぶり右に振りぬく。斬撃の一瞬後に放たれる真空波がオルトロスの巨体を吹き飛ばし沼から抜け出す。オルトロスはまだ戦うようですぐに体を跳ね起こし追撃するベルベットとロクロウ、その二人に二頭の首が口を開け火炎と冷気を繰り出す

「ぐおおっ!?!」

「くうう!!」

熱気と冷気が二人を襲うがマギルウとライファイセットが素早く妨害する

「儂を忘れるでないわ!!ブレイズスウォーム!!」

「これで！鏡面輝き熱閃手繰れ！カレイドイグニス！」

マギルウの爆炎とライファイセットの熱戦がオルトロスの体を包み攻撃を妨害する。途切れられた隙を二人は見逃さない

「活路を開く!!決めろベルベット！」

ロクロウの目が光りオルトロスに向かって疾走する、オルトロスが気づいた瞬間ロクロウの姿が消える

「上だ!!枝垂星！」

一瞬で上空に跳び上がり頭部に向けて小太刀を叩き下ろす。体が

動いたのを確認しロクロウは後ろへと跳躍する、ロクロウの陰に隠れていたベルベットが刺突刃をオルトロスの左脚に突き立て自らの体を反動で吹き飛ばないように固定する

「容赦しない！一撃じゃ生温い！」

ベルベットは業魔手を振り上げる

「これで終わり！絶破、滅衝撃！」

オルトロスの胸部に業魔手を平手で叩きつける。そこから巻き起こる衝撃はでオルトロスの巨体は吹き飛び地面を跳ね、地面を擦り静止した

「はあ……はあ……」

「ふう……強敵だったな」

「ベルベット、ロクロウ！大丈夫？」

「ふいふやれやれ、危うくこやつの夕飯のなるとこじやつたわい」

ライフィセットとマギルウが走り寄り、ライフィセットが二人に術を掛け回復する

「こつちは何とかなったが、アイゼン達の方はどうなってるんだ」

ロクロウが自分達とは離れた所でベヒーモスと戦っているアイゼン達の方を見た

く

「描け蒼穹、霊槍・氷刃！」

エレノアが聖隷術を発動し槍先から繰り出される無数の氷刃がベヒーモスの体を切り裂くが表皮と肉体が予想以上に硬く有効打にはならない

「駄目！通じない!!」

「奴を引き離す！耐えろケン!!」

アイゼンは警告した瞬間聖隷術を発動する

「冷気の渦よ凍結しろ！フリジットフォトン！」

射出された氷塊がベヒーモスの巨体に向かって放たれる。着弾と同時に破裂に氷の華が咲く、胴体の一部が氷に覆われ動きを制限する

「今だエレノア!!」

「はい!!」

エレノアが呼応し走り出す。ベヒーモスの巨体を止めていた氷が直に砕け散るが彼女が接近するには十分な時間を稼いだ

「これで!!影土竜!!」

地面を抉るように薙ぎ払う様に振りかぶった槍を辿り地面から霊力を破裂させる

「いい加減に離れなさい!!昇掃泡撃!」

次は水の霊力を籠めた槍を振り回し追撃する、怒涛の連撃で流石のベヒーモスもよろける。ケンはその隙を突く

「これなら・・・ふん!」

ケンはベヒーモスの鼻に足を掛け脚に深く突き刺さっている牙の根元を握る。力を籠め牙を握り締めると徐々にヒビが入りついに握り折る。解放されたケンは素早く鼻を蹴り飛び降りると腰の短剣を抜きベヒーモスの下顎に突き刺し動きを封じる。痛みに唸り声を上げ振り払おうとするのをケンは出血し痛みの走る脚を踏ん張り抑え込む

「アイゼンさん!エレノアさん!今です!」

「仕留めるぞエレノア!」

「ケン、無理はしないで!!」

アイゼンとエレノアが素早く走りこみ懐に入り込む

「覚悟はいいか?」

「参ります!」

アイゼンが黒い瘴気の様なもの放出し広がりまるでドラゴンのような姿を取る。アイゼンが跳び上がり後ろからエレノアが槍を振り上げる

「響け!集え!全てを滅する刃と化せ!」

「明日はいらねえ!今お前を殺す為の、詰みの一手だ!」

槍を縦横無尽に振りベヒーモスの体に攻撃を加える。着実にダメージを与える連撃にベヒーモスが吠えるがその上からアイゼンが拳を何度も叩き込む。その拳圧に耐え切れなくなりベヒーモスが倒れる。ケンは倒れる瞬間短剣を抜き脚を庇いながらローリングして距離を取る

「ロストフォン・ドライブ!!」

「ドラグーン・ハウリング!」

槍から放たれる白いレーザーと漆黒の衝撃波によりベヒーモスの肉体は瘴気なつて消えていった

「か、勝った・・・!」

「ちつ、手こずらせやがって」

息を切らせるエレノアとアイゼン。こちらも勝利を収めた

「終わったみたいだな」

「ええ・・・後は」

ロクロウ達がアイゼン達の無事を確認した後ベルベットが業魔手で喰魔を閉じ込めていた結界を喰らう。オルトロスが起き上がりベルベットに唸り声を上げる

「悪いけど、一緒に来てもらおうよ」

ベルベットがオルトロスに近寄るがそれを拒否するように噛みつくこうとする

「ベルベット!」

ライファイセットが声を上げるがベルベットは業魔手で右の方の頭を掴む

「・・・いいのよ。あたしは、この子たちのご主人を殺した仇なんだから」

その事実にはライファイセットは驚き何も言えない

「けど、今はだめなの。あたしが仇を討ったら、好きだけ食べていいから・・・だから、力を貸して」

オルトロスはベルベットの協力に応えたのだろう。その巨体を消し二匹の白犬と茶色の犬に変わった。それと同時に回りを覆いつくしていた霧も晴れた

「術の解けたようじゃな」

マジルウが幻術が解けたのを確認する中ライファイセットが鞆の違和感に気づき探る

「古文書も消えちゃった!」

「古文書って?」

別行動を取っていたロクロウは知らないので質問する

「最後まで書いてあるカノヌシの古文書だよ。ベルベットの家にあつたんだ」

「アルトリウスの本―」

ベルベットは覚えがあるようでその持ち主がアルトリウスであるのもすぐに分かった

「本物が残っているかもしれない。ベルベットの家に戻ってみましょう」

エレノアがこちらに歩きながら促す、その後ろでアイゼンの肩を借りながらケンも合流する

村に戻る前にケンの処置が済むまで僅かな休憩となった

「すごいな。ここまでの幻術を操る奴がいるのか」

ロクロウは今の今まで操られていたことに怒りを覚えるわけでもなく逆に感心している

「多分、俺の“死神の呪い”と同系統の特殊な力をもった聖隷を使役しているんだろう。こんな悪趣味な罫を仕掛けるのは、おそらく奴だ」

「だが、おかげでカノヌシの手がかりが手に入るかもしれない。ライファイセット、カノヌシの古文書は見つけたんだよな？」

「うん、ベルベットの家で・・・」

「よし、ベルベットの家へ急ぐぞ、ケン。いいか」

「はい、こちらは終わりました」

ライファイセットは確かにベルベットの家で本を見つけたはずである。アイゼンはそれを頼りに家へ向かうことにした。止血と縫合も終わり包帯も巻き終わったケンに声を掛け一行は移動を開始した

アバルに戻ったベルベット達、夜が明け日が顔を見せ初め周りを照らす、家からも広場にも人の姿はなく木々と草の風で揺れる音のみが響いている

「誰もいない・・・」

「・・・現実よ、これが」

自宅に入りラファイの部屋の机の本棚を調べるが古文書はなかった

「本・・・ない・・・」

「当然か。奴が見落とすはずがないもの」

ライファイセットが探るもない事に落胆する、ベルベットもアルトリウスがこんなミスをするはずがないとわかっていたのだろう

「見つけた時、僕がちゃんと見せてたら・・・」

「気にしなくていいわ。どうせグリモワールでないと読めないし・・・夢だったのよ、全部」

その後皆は船へと戻るため家を後にする。ライファイセットは庭にある二つの墓に気づき近づくと

「お墓よ。あたしのお姉ちゃんと、生まれる前に殺された甥っ子の」

「・・・荒れちゃってるね。お花供えようよ」

「・・・いい、意味のないことよ」

長い期間手入れされてないので大量の落ち葉と伸びた草で石が幾分か隠れている、清掃する時間もないのでベルベットはその提案を断る。その瞬間後ろから声が聞こえた

「卓見だな。食すならまだしも、追悼のためになんの関係もない花を手折って捧げるとは。生贄ですらない。無駄を通り越した残虐な行為だ」

ベルベット達が振り向いた先に落ちてきた木の葉を掌に載せたメルキオルが立っていた

「メルキオル！」

アイゼンがにらみつけ臨戦態勢に入る

「・・・相変わらずじゃのう」

マギルウが静かに呟く

「『夢の霧』はあんたの仕業ね」

「よくもあの術から脱した。その覚悟、喰魔でなければ我が後継者にしたいところだ」

「態々誉めにきたの？」

「そうだ。この書を回収するついでにな」

メルキオルが懐からアルトリウスの書を取り出す

「返してもらおうわよ」

「これは我が友——アルトリウスの師でもある、先代筆頭対魔士がまとめたもの。身を捨てて世を憂えた高潔な魂が残した希望だ。穢れた業魔が触れてよいものではない」

「てめえの許可なんかいるかよ!」

アイゼンとベルベットが走りだし古文書の奪還と首を跳ねようと刺突刃と拳を振った瞬間、それが一對の手により阻止される

「!!」

掴まれた拳と刺突刃を振り払われ投げ返される。メルキオルの前に頭部から角の生えた一体の人型業魔が立ちふさがった

「ふん、珍しく従ったな」

メルキオルの言葉からしてこの業魔には手を焼いているのだろう。髭を触りながら呟く

「こいつは・・・まさか!？」

アイゼンはその姿になにかに感づく

「焦らずとも、まもなく知ることになる。我らが希望——草花の如く穏やかで美しい秩序の完成をな」

その言葉を最後に術で転移したのかメルキオルと業魔は姿を消した

「秩序の完成・・・?」

エレノアはメルキオルの発言に疑問を浮かべた。ベルベットはメルキオルのいた場所を見ていたが直に踵を返す

「行きましょう。もうここには、なにもないわ」

ベルベットは村の門へと向かうため歩き始める

「・・・」

ライフィセットはそれを悲しそうな表情で見ているほかなかった

村を出るため広場を歩いているベルベット達、ライフィセットはふと商店の方を見る。ベルベットと楽しそうに話していた店主も村の人も全て幻であったと事実がこの静寂が物語っている、だがその商店

の商品棚にポツンと何かが置いてあった。開いたページには見覚えのある絵が描かれておりそれはまさしくベルベットの家に置いてあった古文書と同じものだった

「あっー!」

ライファイセットはそこに駆け寄り本を確認する

「見て!カノヌシの古文書!」

「なぜこんなところに?」

皆が驚き本の所に向かう。ベルベットはその本に見覚えがあった

(その本!義兄さんの!?)

(ライファイセットが書き写した写本だ)

記憶がフラッシュバックしそれが弟が写したものであることを思い出す

「:ライファイが写した写本だ、あの子、それを売ってあたしに櫛を買ってくれたの」

ライファイセットがベルベットに歩み寄り写本を差し出す

「なにもなくないよ、ベルベット」

ライファイセットから本を受け取りその表紙を触る。手掛かりを残してくれた弟を思い浮かべる

「ライファイ・・・」

「完全な物なら、カノヌシの秘密がわかるかもしれん」

「グリモワールに見せてみよう」

アイゼンとロクロウが提案している後ろでマギルウは静かに笑っていた

「くくく・・・あのジジイを出し抜くか。本当に面白すぎじゃやて♪」

「オルとロスを送り届けて、グリモワールに古文書を解読させる。一度、タイタニアへ戻るわよ」

モルガナの森を通っている時、アイゼンはその人型の業魔の事を推理していた

「あの角の野郎は・・・」

「応、メルキオルが連れていた奴だな。あの気迫は只者じゃないぞ。」

しかし、あいつは聖隷じゃなかったよな」

ロクロウもその事で気になっていたようだ。だが聖寮が業魔を使役するとは考えにくいと睨んでいる

「……」

「うん、業魔だと思う。だけど変だよ、聖寮が業魔を使うなんて」

「……喰魔という可能性はありませんか？メデイサや、モアナの例もありますし」

ライファイセットも疑問符も浮かべエレノアは喰魔ではないかという予想を立てる

「それはいいはず。結界まで張って地脈点に繋ぎ止めておきたいのが喰魔よ。地脈点から剥がして連れ歩いたら、カノヌシに穢れを送ることができなくなるから」

「……そうですね。そもそも、ここには別の喰魔がいたわけですし」
「なんにせよ、メルキオルには幻術に加えて手強そうな用心棒がおるといふことじゃ。そう簡単には倒せんぞ」

「……ああ、それが事実だな」

マギルウの結論にアイゼンは詰まりながらも肯定した。

「

タリエシンに着いた一行は町の状態を確認した、此処も幻術に掛かっていたようでアバルの村はとつくに崩壊していたことになってた。現在も交易が行われていたと言っていた話も以前になっており住民の中には記憶と現実の相違に混乱しているものもいた。住民の話ではこの町が霧が出たことは全くなかった、つまりベルベット達がつく以前に幻術にかかっていたのだった

「お帰り。喰魔は見つかったか？」

港で待っていたベンウィックが成果を聞いてくる

「ええ。この子たちをタイタニアまでお願い」

「クウーン……」

「キュウーン」

ベルベットが後ろにいるオルとトロスが不安そうに鳴く

「犬!?待った!トカゲも動く鎧もいいけど、犬を乗せるのは、ちよっ

と……」

ベンウィックがやたら渋る、渋るというか嫌がつているようにも見える

「犬、苦手なの？」

「……子供の頃噛まれたんだ」

「なら安心して。この子たちが喰い殺したいのは、あたしだから

「……大丈夫か？」

「本当よ」

「いや、あんたが……」

「……」

ベンウィックは普段とは様子が違うベルベットが気になったのだろう。そこには優しさがあつた。ベルベットの表情から察して促す

「……わかった。タイタニアへ戻ろう」

出航の準備が始まり皆が忙しく動いてる中ライフィセットがオルとトロスを見る

「オルとトロス、ちゃんと世話をしてあげないとな」

「任せるわ。あたしは近づけないから」

「あ……」

ライフィセットが表情を暗くする

「じやの。ワンコらにとつてベルベットは飼い主の仇。放っておくのがせめてもの思いやりじやろうて」

「……大丈夫だよ。僕が面倒をみるから」

「それは危険でフよー！あいつらはかなり凶暴でフから！」

そこにビエンフーが割って入ってくる

「さつき、仲よくしようと話しかけたら、いきなり噛みつかれたんでフー！」

ビエンフーがこういうこと言うとその前になにか失礼なことをやらかすのが目に見える

「どーせ『僕の子分にしてあげるでフ』とかイラっとくる言い方したんじやろ？自業自得じゃ」

「よ、読まれてるフ……！」

「しかし、ライファイセットは喰魔探しをしなきゃならん。面倒を見続けるわけにはいかんだろう?」

「そうか・・・どうしたらいいかな」

ロクロウの指摘にライファイセットはその対策を考えるがロクロウが提案する

「モアナとメデイサに頼んだらどうだ?モアナは、昔犬を飼っていたと言っていたし。万一犬たちが暴れても、メデイサがついていれば安心するだろう」

「二人にお願いするのがよさそうだね。僕、頼んでおくよ」

「よろしくね。喰魔を殺すわけにはいかないし、なにより・・・あの子たちは、ニコの形見だから」

「ベルベット・・・」

沈んだ表情で二匹を見るベルベットを心配そうに見つめているライファイセットにビエンフーがすり寄り

「ライファイセットは、犬も飼ってみたいんでフか?なら、聖寮に行くといいでフよ〜!」

「聖寮に?なんで?」

「お上のイヌ」がワンさかいるだワン♪」

「そ、そうなんだ・・・」

なんとも寒いギャクで引いたライファイセットであった

タリエシンを出航してしばらく、沖を航行中の甲板の上でベルベットが縁に寄りかかり自らの左腕を見ていた

「また喰らった・・・いや・・・」

アバルの事を思い出していたのだろう。ニコ達を村のみんなを今一度喰らったことの精神的圧がベルベットの気分を沈ませるだがあれは化けていた別の業魔であった。それを否定したいのだろう。その時後ろからライファイセットがやってきた。ベルベットがそれに気づきそちらの方を向く

「これ・・・ベルベットの弟が写したんでしょ?すごいね、古代語が読めるなんて」

ライファイセットが写本の内容を確認したのだろうその完成度の高さに感心している。本をしまう時その姿にベルベットの視界が一瞬弟の姿を連想させた

「・・・」

ベルベットは一瞬驚いた表情をするが直に元に戻してもらった櫛を取り出す

「ちよつと変わった子だったの。体が弱かったから本ばかり読んで、『いつか世界を旅するんだ』って、いっぱい勉強してた。怖い夢を見ると、あたしのベッドに潜り込んでくる甘えん坊のクセに・・・」

「そうなんだ」

ベルベットはライファイセットの方を見る。だがその視界に移るライファイセットが彼女の過去を思い出させる。彼にはなんの責任もないのだが

「けど・・・甘えんぼでいいから・・・生きてて欲しかった・・・だから・・・仇を・・・」

ベルベットはふらつきはじめ足を崩して座り込んでしまう。ライファイセットはそれに気づき素早く支える

「ベルベット・・・!?!」

「何度でも喰らって・・・殺さなきゃ・・・」

「ベルベット!!」

うわ言の様に眩き視界が暗転する。いままで気丈に振舞ってきたが元は普通の村娘である彼女は精神的限界を迎えたのだライファイセットの呼ぶ声が遠くで聞こえてくる感覚を覚えながら意識が遠のいていった

第37話 終わり

第38話

精神的疲労でベルベットが倒れてしまったとほぼ同じころ、聖主の御座で特等対魔士であるシグレとメルキオル、そしてアルトリウスの前にオスカーの姿があった。オスカーはその三人の前で聖寮式の敬礼をしアルトリウスが左手を彼の前にかざす、手のひらから翡翠色の光の玉が現れそれと同時にオスカーの体もそれと同じ色に光る、そしてその背中に翼が描かれた紋章のようなものが浮かび上がる。一瞬だけ浮かびあったあと彼の頭上に陣が現れ体を上から下へと流れるように降りてゆく。それが収まるとアルトリウスが手を下ろし閉じていた眼を開ける

「・・・よし。術は適合した」

「オスカーは敬礼を解く」

「ありがとうございます。今度こそ、使命を果たしてみせます」

「しかし、お前ももの好きだなあ、オスカー」

その様子を横で見っていたシグレが顎に手を当てながら口をはさむ

「シグレ様に言われたくはありません」

霊力を抑えて自身の実力だけで戦っているシグレも十分にもの好きなので人に言えたものではない

「アルトリウス様！」

その時オスカーの後ろからテレサが走ってくるその様子はかなり慌てているのが見える

「下がれ、テレサ。貴様の用は後だ」

メルキオルが制するも食下がる事もせずアルトリウスにオスカーの事について聞き出す

「オスカーに“あの術”を実験させるといふ噂は本当なのですか！」

「事実だ」

アルトリウスが抑揚のない声で躊躇なく答える。聞きたくなかった答えにテレサは手で口を抑え驚愕する

「あれは、まだ未完成と聞いています。それも・・・」

「そう、術者の命に関わる欠陥が残ってやがる」

手を下ろし視線を下げながらもその術に対しての危険性を問おうとしたがシグレが割って入り代わりに答える

「理論は完成した。あとは、実戦で制御法と確立せねばならん」

恐らくメルキオルが開発中の術式が完成し、それをオスカーが志願したという事は容易に想像がついたであろうテレサが何かに気づき顔を上げる

「まさか、あの喰魔にぶつける気では!?!」

アルトリウス達が何も答えない時点でそれがはつきりした。テレサは一度オスカーの方を見つめ再度アルトリウスを向き懇願する

「私にお任せください! 実験なら私が——」

「お前では力不足だ」

その願いもアルトリウスが冷たく拒否するもなお食下がる

「で、では、せめて同行を!」

「オスカーが、あれを、使う前に奴らを仕留めるってか? 心意気は買うが、それじゃあ都合が悪いらしいぜ」

シグレに完全に見透かされていたが最後の言葉にアルトリウスが横目で睨みつける。シグレはにやけながら手をひらつかせる

「都合・・・?」

「私から志願したのです、姉上」

テレサの疑問にオスカーが答える

「タイタニアで敗北し、パラミデスでは喰魔を奪われた。この失態を償わねばなりません」

「なら、私も一緒に!」

弟が死地に赴こうとするのを黙って見送ることなどできないテレサが同行しようとするがアルトリウスが止める

「お前には別命がある」

テレサはアルトリウスの命令に一途の望みを掛けるかのようにならぬを向くもアルトリウスの言葉は彼女の希望を潰す冷たい物だった

「テレサ・リナレス。対魔士の任を解く。使役聖隷を返還せよ」

「解任!?なぜ!」

「ある計画のために、強力な聖隷が必要なのだ」

突然の聖隷の返還、事実上の戦力外通告に納得いくはずもない。理由を求めるテレサにメルキオルが淡々と答える

「貴様の聖隷の潜在能力を調べたが、相当なものだ。敵に寝返った小僧と同様にな」

「お前じゃ、使いこなせないってこった。才能がねえんだよ」

遠回りせず単刀直入にシグレが代わりに答える。霊力を使わず己の腕一本でのし上がったシグレほど実力者に言われてしまえば反論の余地がない。アルトリウスが腕を上げ指を立てる、足元から白いオーラが沸き上がり頭上にあるカノヌシの印が輝きだす。腕を横に振ってと同時にテレサの体から陣が現れそれが砕け散り霧散する。そして彼女の体から一つの光が抜けるように現れ目の前にテレサの聖隷である一号が現れる、だがそれもつかの間再び光となりメルキオルの方へと移ってしまった

「そんな・・・」

聖隷がない以上どうすることもできないテレサにオスカーが歩み寄る

「姉上、この任務が終わったら手料理を食べさせてください。昔よく作ってくれたキツシユがいいな」

オスカーがテレサの頬に手を添える。落ち込む姉を元気づけようとしているのだろう

「こんな時に、なにを・・・」

この状況で料理のお願いをするオスカーに戸惑うテレサを見つめた後、彼がアルトリウスの方を向く

「アルトリウス様」

「・・・わかっている。使命を果たした暁には、テレサを対魔士に戻そう」

「オスカー、あなたは――!」

オスカーの思惑に気づいたのかテレサが声を掛けるもそれに彼女は彼女に微笑みながら口を開く

「心配しないで。姉上のキツシユの為なら、地の果てからだつて戻りますから」

それだけを言うと一步下がり、テレサに敬礼をし、任務のため出入口へと歩きはじめるオスカー。それを追いかけようとするがオスカーの決意を揺るがしてはいけけない気持ちと行かないでほしいという願いの板挟みになり、その場からオスカーの後ろ姿を見つめるしかない

「ああ・・・行かないで・・・オスカーーツ!!!」

その後アルトリウス達が退出した後の御座で一人となったテレサがどうにかしてオスカーの助けになろうと思案していたがうまく思いつかばない状況に焦っていた

「どうしよう・・・このままでは、あの子が・・・」

その時彼女の頭上にあるカノヌシの印がまた輝き始める

「え・・・なに・・・?」

テレサには何かが聞こえたのだろう、顔を上げ印を見上げる。声自体が聞こえないがカノヌシがテレサに語り掛けているようだ

「私は・・・適合する?あの術に・・・?あなたに・・・!!」

カノヌシの語り掛けはテレサにとって天使の助言か、それか悪魔の囁きか、それはわからない

「うう・・・あたし・・・?」

ベルベットが重い瞼を開き、船室で目を覚ます。頭を抱えながらも起き上がるのをライファイセットが気づき近くに駆け寄る

「無理しないで。三日も眠ってたんだよ」

「・・・三日も無駄にしたのね。状況は?」

思った以上に時間が過ぎていたことにベルベットの意識が覚醒し直に現状を確認する

「えっと、古文書はグリモ先生に渡して解読してもらってる。前の本で欠けてたところが、全部書いてあるみたいだつて。あと、犬たちは、モアナと仲良くなったよ」

「わかった。じゃあ、最後の喰魔を探さないと……」

ベルベツトは立ち上がるようにするが声からして無理をしているのがまるわかりだ

「無理したらダメだってば！」

ライファイセットが止めようとした時彼の腹から音が響いた。顔を赤らめる

「あんた、もしかして……食べてないの？」

「……ベルベツトも……食べてないから……」

「なにバカなことしてるの！食べないと、あんたも死んじやうのよ！」

三日も食事を摂っていないライファイセットにベルベツトが怒鳴る。傍からみれば正気の沙汰ではない

「でも、僕は——」

「死にあせんよ。聖隷は食事で命を維持しておるわけではないからの。物を食うのは一種の趣味みたいなものじゃ」

ライファイセットが言いかけた時、部屋の入り口にマギルウが立っており聖隷について説明する

「……ならいい。趣味で我慢するのは勝手だけど、あたしに付き合う意味なんてないから」

「……」

「元気が戻ったようだな。とつくにタイタニアに着いてるぞ」

そこにロクロウが部屋に入ってくる。本来ならアジト内に運ぶべきだろうが念の為船内に寝かせていたのだろう

「待たせたわね。みんなを集めて」

ベルベツトが召集の指示を出し直に部屋を出てゆく

「また派手にやられたな」

ロクロウが落ち込むライファイセットに声を掛ける

「僕は……苦しんでるベルベツトの気持ちを知りたかったんだ……だって、一人で苦しむのは辛いでしょ？」

「ふうむ……なんとというか、真面目な奴だなあ」

「じゃが、下手な同情ほどこいらつくものもないぞえ」

マギルウの言い分ももつともだ、いわゆるお節介焼き

「とにかく飯を食おうぜ。食える時に食っておくのは戦士の鉄則だ。聖隷だって、ハラペコより満腹の方が力が湧くだろう?」

「・・・うん」

ロクロウに促されてライファイセットも部屋の出入り口に向かう、その後ろ姿を見つめながらマギルウが呟く

「空いた腹は飯で満たせるが、欠けた心を満たすには・・・さてさて、どーすればいいのかわかる・・・」

それはベルベット達ではなく自らに問いているように聞こえた

↳

「フィー、次の地脈点を探知して」

メンバーがアジトの広間に集合したのを幾にベルベットがライファイセットに地脈点の捜査を指示する。ライファイセットが羅針盤を持ち意識を集中させる、暫くしてライファイセットが目を開ける

「・・・地脈点、見つけた。すごく遠い・・・北東のずっと先・・・」

「北東の先・・・おそらくエンドガンド領ですね」

エレノアが手がかりを元に地理の情報を照らし合わせ、場所を突き止める

「エンドガンド領は小島の集まりだ。リンネル島という比較的大きな島があるが」

「・・・うん。地脈点は、そこだと思う」

アイゼンは喰魔の監視と警備する対魔士と兵士の規模、それを支える兵糧類などを推測し、リンネル島に目をつけるとライファイセットも肯定する

「エンドガンドといえば幽霊船が出るという海域じゃよな」

「幽霊船・・・」

そこにマギルウがエンドガンド周辺海域の噂を話だしライファイセットが怖気づく

「うむ。航海を抱えた罪人を捕らえて、永遠の航海へ連れ去るといわれておる」

「罪人を連れ去る・・・」

「エンドガンド沖は世界を巡る海流が何本も合流する。各地で難破し

た船が最後にたどり着く場所だ」

「なるほどな。それが幽霊船の正体か」

アイゼンが海域の特徴を説明する。沈没した船がまったく別の場所で見られるのは基本これである

「なんじゃよく、夢のない奴らめ」

「幽霊船が夢なのか？」

「気をつけていこうね」

「平気よ。幽霊だろうが対魔士だろうが、みんな引導を渡してやる」

タイタニアのアジトから出港して数日、バンエルティア号は王国領土の東の果てエンドガンド領海域に入った。アイゼンの説明の通り比較的大きさの島があるが後は島と呼べるかどうかの岩礁か岩島しかなくまた気候と地脈の流れがこの一帯に集中しており特に穢れが集まりやすい

場所となっている。今は地表がまだ出ているが気候変動と地殻変動で少しづつ沈みつつあり、数百年程度で海面に沈みゆく運命である「もうすぐリオネル島だよ」

海図と羅針盤で位置を確認し方向を確認する

「幽霊船は出なかったわね」

「待ち伏せへの対策はどうなった？」

ロクロウは待ち構えているであろう聖寮への対処法をアイゼンに聞く

「血翅蝶を使って、俺たちが別の聖寮施設を襲撃するという噂を流した」

「効果は、やらないよりマシって程度だろうけど」

「強行突破なら、わかりやすくいいさ」

その時甲板の方からベンウィックがアイゼンの元へ走ってくる

「副長！前方に漂流中の船を発見！」

「幽霊船かのー！」

マギルウが期待に胸を膨らませるがベンウィックの報告は無情な物だった

「聖寮の船です！救助信号旗をあげています！」

「・・・わかった。接舷しろ」

報告を聞いたアイゼンがバンエルティア号を着けるよう指示する
「助ける気？敵の船よ」

ベルベットがアイゼンに反対意見を述べる

「救助信号旗に敵も味方もない。これは船乗りの鉄則だ」

「罨に決まってる」

「海賊だって救助信号旗で騙し討ちなんてしないよ。助けた後、身ぐるみ？ぐけど」

「万一、罨なら皆殺しにする。それだけの事だ」

救難信号を罨に使うものならその制度に対する信用は失われ結果的に大問題に発展する、筋を通さないものは始末をつける。割り切るアイゼンにベルベットが舌を打つ

「ちっ、面倒ね・・・」

それから暫くして船を着けた後渡り板を掛け聖寮の船に乗り込む、甲板には対魔士が複数倒れていた。対魔士の状態と船の状況、以前にも自らが遭遇したのと同じだった

「これは・・・！」

「海賊病！」

「ベンウィック、サレトーマは残ってるか？」

アイゼンは直ぐ様ベンウィックに確認を取る。ベンウィックは対魔士の人数を確認し答える

「はい。この人数なら、船に積み込んである分で足りると思う」

「聖寮の船にしちやあ、やけに人数が少ないな？」

ロクロウは船のサイズとそれを運用するだけの人数が合っていないことに疑問を抱く。そこに奥から聞き覚えのある声が聞こえた

「私が・・・船員を脅して無理に出航させたからです」

「テレサ！」

エレノア達の目の前に息を切らしながらテレサが近づいて来た

「無謀は承知でしたが、まさか懐賊病に罹るなんて・・・でもいいわ。こうして貴方達に会えたのですから」

「そんな体で勝てるっても？」

ベルベットが腕を組みながらテレサに向かって言い放つ。その状態だと彼女も懐賊病に罹っているのは明白、どうやっても全員とやりあえるとも思えない

「勝つのは、貴方たちです。私を利用して」

テレサの言葉に一行は僅かに体を揺らす

「どうということ？」

「聞かなくていい。どうせ罨よ」

ライファイセツトの質問をベルベットが遮る。だがテレサはそれに構うことなく話を続ける

「リオネル島には喰魔デイスがいます。警備対魔士は、私の弟オスカー」

「・・・あいつなら問題ないわ」

二度も退けているベルベットとしてはオスカーの実力を把握しているので遅れを取らないという意味での発言だろうがテレサは口をはさむ

「オスカーが、メルキオル様が新たに開発した決戦術式を身に付けていてもですか？」

決戦術式というフレーズに一行は反応する。メルキオルが開発していたという情報を得ていたので脅威と判断しての事だ

「聖隷の力を限界を超えて引き出す術——その威力は、通常の聖隷術とは比較にならない。勝てたとしても、無事では済みませんよ」

「・・・なぜそんな情報を知らせる？」

ベルベットの疑問は確かだ、敵であるはずに目的地に配置されている戦力と機密に近い術式の情報を話すテレサの真意がわからない

「その術はまだ未完成なのです。使えば命の保証はありません、私は、オスカーを助けたい！私を人質にすれば、オスカーは手を出せません。貴方たちは、その隙に喰魔を奪って逃げればいい」

「聖寮を裏切るっていうの？」

「あの子に代えられるものなんて、この世にないわ」

「・・・」

テレサの言葉に詰まるベルベット。これはベルベットにも刺さるものだった

「信用できないのも当然・・・薬はいりません・・・私の命を預けますから・・・」

体力の限界か膝をつくテレサ

「オスカーを・・・助けて・・・」

「テレサ様・・・！」

その言葉を最後に倒れこむテレサ。ライフィセットとエレノアが駆け寄る

「・・・それなりに役に立ちそうな話ね。とにかく船に乗せて、薬を飲ませて」

ベルベット達はその後倒れたテレサたちをバンエルティア号へと移し、改めてリオネル島へと向かった

リオネル島に到着した一行は聖寮が揃えたであろう棧橋と必要最小限の野営地を見つけそこに上陸した。ベルベット達が船から降りこれからの事で打ち合わせを始める、ちなみにサレトーマでの治療が阿鼻叫喚だったのは言うまでもない

「さて、あやつの言うことを信用するのかや？」

皆はそれが真実かどうかまだ判断がつかない中クロロウはテレサの話に心躍っているようだ

「聖隷の力を限界を超えて引き出す術・・・か。本当なら手強そうだ」

「メルキオルの野郎が作ったと言っていたな」

「ジークフリートを追っていた件と関係あるのかもー」

「・・・もしそうなら、まともなぶつかるのは得策じゃないな」

聖寮の中で一番の曲者であるメルキオルの事だ、油断できない

「しかし、なぜテレサはあそこまでオスカーを守ろうとするんだ？」

「オスカーは、アスガード王家を祖にもつ名門貴族ドラゴニア家の次男。聖寮との結びつきを強める思惑から、聖寮に入れられたそうです」

「家の都合か。よくある話だな」

「テレサも、彼を追う様に聖察に入り、ずっと影日向にオスカーを助けてきました」

「つまり、あやつも貴族か。大人しくお嬢様しとればいいじやろうにー」

マギルウの言い分もつともだ。貴族なら将来も約束されているようなものだがエレノアの表情はよくない

「いえ、テレサの母は正式な妻ではなく・・・その・・・身分が・・・」
「よくある話です。それも」

テレサがエレノアに代わって船から降りながら続ける

「正妻に疎まれた母は死に、私は、只の召使いとしてドラゴニア家に仕えました。暗く冷たい家・・・でも、あの子が——」

ベルベット達に向き合う

「オスカーだけは、私を『姉上』と呼び、家族として慕ってくれた。姉が弟を助けるのに、理由が必要ですか？」

「・・・体調は戻ったようね」

ベルベットの事情を知った上での発言なのだろうか。それはわからない

「薬の事は感謝します」

「死なれたら人質にできないからよ。喰魔はどこ？」

テレサは島の奥の方を指さす

「この先のバイルド沼野を進むと、古代王国の遺跡があります。そこが地脈点。オスカーも一緒にいるはずですよ」

ライフィセットはずっと気になっていたのだろう事をテレサに聞いてみる

「あの・・・一号は？」

テレサは僅かに詰まるがすぐに答える

「『あれは』、アルトリウス様に取り上げられました。今の私に對魔士の力はない。つまり、生かすも殺すもそちらの自由です。オスカーを助けたら、気の済むようにして結構」

「・・・望み通りにしてあげるわよ。全部ね」

ベルベットがそこで切り上げ島の奥へと歩き始めた

第38話 終わり

第39話

設営された聖寮のキャンプで一通りの準備をし、山道の入り口へ向かう途中エレノアがテレサに改めて話しかける

「テレサ・・・久しぶりですね」

「会うのは御座以来になりますか。ですが、それほど久しぶりとも思えません。裏切り者エレノア・ヒュームの情報は、よく耳に入っていましたから」

テレサの鋭い言葉にエレノアが表情を暗くするがそれをすぐにやめテレサの体調を確認する

「・・・懐賊病は大丈夫ですか？」

「問題ありません。サレトーマはちゃんと飲みました」

「相変わらずひどい味だったでしょう？新人対魔士の歓迎会で飲まされたことを思い出しますね」

エレノアが昔の事を思い出しているとテレサが単刀直入に質問する

「なぜ聖寮を裏切ったのですか？巡察官という重職を任されていたのに。本当なら巡察官にはオスカーがなるはずだった。内示だつて出していたのに」

ほぼ決定されていたオスカーの職務を自らが横取りしていた事実
にエレノアが驚く

「あなたが強く希望したせいで、優しいあの子は役目を譲ったのです」
「知らなかった。オスカーに内定していたなんて・・・」

公に発表する前の事前通達である以上知らないのは仕方のない事だ。だがエレノアは知らなかったとはいえそれを奪った事に表情を暗くする

「その結果、オスカーは危険な監獄島へまわり、あんな大怪我を負ってしまった。そして今、あなたはオスカーを倒した敵の元にいる。私には理由を知る権利があるはずです」

テレサとしては裏切つてまでエレノアがベルベット達という理由

を知りたいのだろう。現にここまでしているなら答えるのが筋というものだ

「人々を救いたいという想いは今も変わりません。ただ、私は聖寮とは別の道を見つけないです」

「・・・許せる理由ではありませんね」

「許してもらえないとは思っていません。あなたが、オスカーの事で妥協しない人なのは、よくわかっています」

「・・・その通り。私がそういう人間であることを仲間によく伝えておいてください。オスカーを守るためには、あなた方に信用してもらい必要がありますから。話すことは、それだけです」

テレサは先に歩き出す

「・・・わかりました」

↳

一行は山道を進み、上り切った所で開けた場所にでる。ベイルド沼野、そこは広大な湿地帯で、湖や岸には巨大な柱や建物の残骸があちこちにありかつてそこには大いなる文明があつたことが伺える。だがそれも今は名残を残すのみとなり、今では罪人の流刑地などと噂される程に落ちぶれた地となっている。オスカーがいる喰魔の拘留場所まで道半ばに差し掛かろうとした時、ふとライフィセットが樹木の方へ視線を向けると何かに気づく

「あ・・・!!」

ライフィセットが樹木に近づく、その視線の先に幹にくっついていゝる一匹の虫がいた。二股の牙の先が外側に向いている変わった昆虫だった、それを獲ろうと手を伸ばすが高い位置にあるので届かない。しょんぼりしていると後ろからテレサが歩いて来た

「クワガタですね」

「は、はい。リオネルイカツチオオクワガタ・・・です」

「呪文のような変な名前」

テレサに変な名前と言われ、彼の中にヒビが入ったような音がする「格好いい・・・と思うけど・・・」

「またもションボリするライフィセットを見かねたのかテレサがク

ワガタに手を伸ばす。テレサの方が背が大きいので余裕で届いた
「まったく・・・なぜ男の子はこんなものを好きなのかしら」

そういいながらクワガタをライファイセットに差し出す

「え・・・？」

「なんです？欲しかったのでしょうか？」

テレサの意外な行動に戸惑いながらもライファイセットはクワガタを受け取る

「あ、ありがとう・・・」

クワガタをしまうライファイセットを見た後視線を外しどこか遠い目をして話し出す

「小さい頃のオスカーも、虫を探してよく森を駆け回っていました。夢中になって、すぐに怪我をしないか心配で・・・」

今もやってる

「とってあげたの？」

「気持ち悪かったけれど、その頃は、私の方がずっと背が高かったから。お礼だと言って、蟬の抜け殻をたくさんくれた時は、悲鳴を上げてしまいました」

それを聞いたライファイセットが口を開く

「・・・自分の気持ちを伝えたかったんだと思う」

テレサが僅かに驚いた表情でライファイセットを見る。当時のオスカーはそれが自分ができる精いっぱい表現だったのだろうが本人からすると流石に御免こうむりたいのだろう

「僕も、そうだから・・・」

少し引きながらもライファイセットが答える。僅かに間を置いたあとテレサが口を開く

「おかしな聖隷ですね。そんなことを思うなんて」

「思うけど・・・難しい・・・です」

テレサはそれを聞いて自身の耳に指を当てる

「・・・人間も同じね。ひどく難しいのに、諦めることもできない・・・結局、自分の信じるものを不器用にぶつけるしかないでしょう」

「信じるものを・・・」

ライファイセットがテレサの言った言葉を復唱する、その時少し離れた所からベルベットの声が響く

「フイー、遅れないで！」

ライファイセットが慌ててベルベットの方へ走る、テレサもそちらの方へ歩いて向かっていった

）

「ライファイセット、新しいクワガタを見つけたんだって？」

「うん、テレサ様に探ってくれたんだ」

ロクロウに新種のクワガタについて聞かれ、ライファイセットが懐から取り出す

「ほほう・・・鋭い鋏。アイゼン、こいつは間違いなく完璧にクワガタだぞ！」

「・・・いいや。新種の『二本角カブト』の可能性もある」

アイゼンが屁理屈じみた事をいうがこれが仮にカブトだとしたらクワガタもカブトも同一種というぐらいの暴挙である。前もってライファイセットがケンに確かめてもらいクワガタの特徴と一致しているのでクワガタで間違っていない

「二人とも。喧嘩するなら、この虫を『新種のカナブン』ってことにしちゃうよ」

「おっと！そいつは勘弁」

「ライファイセットに一本取られたな」

「ふふふ！」

三人の様子を見ていたテレサがエレノアに近寄り質問する

「エレノア・・・あれは、あなたが言わせているのではないのですか？」

「いいえ。私はライファイセットと器の契約をしましたが、使役はしていません」

「聖隷が、まるで人間みたいに・・・」

経験したことのない風景に戸惑うテレサ

「私も聖隷にいた時には思いもよらなかった。聖隷にも人と同じ心があるなんて。でも、ライファイセットやアイゼンと出会って、知ったんで

す。彼らもうれしい時には笑い、哀しい時には涙を流すと。お腹だつて鳴るんですよ」

「お腹が……?」

「今では聖隷だけでなく、業魔や喰魔にも心があると自然に思えるのです」

それを聞いていたテレサがエレノアに反論する

「あなたは業魔を憎んでいたはずです」

「もちろん、憎しみがなくなったわけじゃない。けど、憎しみだけじゃなくなつたんです」

「聖隷の心……業魔や喰魔の心……」

聖隷だから、業魔だから、種族の違いで分けるのは正しくない

「テレサも、ライファイセットに心を感じたからクワガタを獲つてあげたのではないですか?喜んだあの子の笑顔は、幼い頃のオスカーと変わらなかつたでしょう?」

「……一緒にしないでください」

最後の言葉にテレサは否定をした

（『あの術』には命の危険がある……絶対にオスカーに使わせてはいけない）

「テレサ様、具合が悪いの?」

テレサは歩きながらオスカーをどう助けるかを思索していた。そこにライファイセットが近づいてくる。表情が思わしくなかつたのが体調不良だと思つたようだ

「いえ、問題ありません」

「でも今、すごく辛そうな顔をしてたよ」

「あ……それは少し考え事を……」

「懐賊病が治つてすぐに出発したし、無理はしないでね。テレサ様は自分にも厳しい人だから……」

それを聞いたテレサが口を挟む

「……『他人にはもっと厳しい』というわけですね?」

「そ、そう意味じゃないです……」

「構いません。冷酷な女だと自覚しています。ですが、『器の心、聖隸知らず』ですね」

その言葉にライファイセットが首を傾げる

「私は、あなたがこっそり出歩いたり書庫に入ったりするのを見逃してあげていたのですよ?」

「知ってたんですか!？」

ライファイセット本人はうまくやってたつもりだが周りからはバレバレだったのだろう

「当然でしょう。放し飼いの子犬と同じと思って放置してただけです。一号の方は、ほとんど動かないでじっとしていたのになぜこうも違うのかしら」

「・・・ごめんなさい」

「まあ、『男の子らしい』ということなんでしようけど。あのまま勝手を続けるようならお仕置きをするつもりでしたよ」

「どんな・・・?」

ライファイセットがおそろおそろ聞いてみる

「それは、聞かない方がいいでしょう。多分、あなたの具合が悪くなつてしまいますから」

「テレサ様・・・」

「ふふふ」

びくついているライファイセットだがテレサの表情から見てほぼ冗談だろう。その様子を見ていたマギルウがベルベット、アイゼンに話しかける

「随分打ち解けたようじゃのう。本当に協力すると見るかえ?」

「全てが嘘とは思えんが、全部正直に話しているとは、もっと思えん。ベルベット、わかっているとは思うが・・・」

「ええ、油断しないわ、妙な動きをすれば殺す。対魔士じゃないなら、簡単な事よ」

沼地の奥へあと少しへと近づいたところでベルベットが足を止めテレサの方を向く

「テレサ。敵陣に乗り込む前に、策戦を確認しておくわ」

「・・・はい」

「あたしたちは、あんたを人質にして、オスカーの武装と聖隷を解除させる。オスカーを拘束して喰魔を回収した後、港まで撤退。喰魔を船に乗せ、出航準備が整った時点であんたを開放する。後は好きにしないさい」

「結構。ですが、ひとつだけ約束してください。決してオスカーを傷つけない、と」

約束を取り付けるテレサにベルベツトは間をおいて答える

「・・・それはオスカーの出方次第よ。約束はできない」

「・・・」

「ベルベツト」

「私からも頼みます、テレサの願いを・・・」

ライファイセツトとエレノアがベルベツトに懇願する

「オスカーを助けたいなら、テレサ、あんたが死ぬ気で説得しなさい。弟を守るのは、姉の役目なんだから」

「・・・ええ、必ず守ります。私の命に代えても・・・」

その後、地脈点に到着した一行の前あたり一面花が咲いている場所にオスカーが剣を地面に立て、その眼前に一体の業魔が倒れていた。恐らく喰魔だオスカーは背後から近づいてくる気配に閉じていた眼を開ける

「来たな、喰魔ベルベツト」

オスカーがこちらを振り向いたと同時にベルベツトが刺突刃をテレサの首筋に添える

「姉上!？」

「見ての通りよ。剣を捨てて、聖隷を話しなさい。さもないと、こいつを殺す」

「卑怯な・・・!」

身内を人質を取るベルベツト達に憎悪の視線を向けるオスカー、だが義姉の命を握られている以上むやみに動けない

「見逃してください、オスカー。私は聖寮が語る『理』の本当の意味を見極めたいのです」

「人質を取って脅すのが君の『理』だというのか!」

エレノアの説得を聞こうとしないオスカーにテレサが謝る

「ごめんなさい・・・足手まといになってしまった」

「そんな・・・姉上は・・・わかった。武装を解除する」

オスカーは人質の安全を優先したのだらうゆつくりと武器を地面に置こうと片膝を着く、剣を地面に置こうとした瞬間オスカーが剣をベルベットに向かって投げつけてきた

「!」

ベルベットは直ぐ様反応し刺突刃で剣を弾き飛ばす。が、その隙を突かれテレサが走り出す

「ちっ!!」

「下がっててくださいい!」

テレサがオスカーの元へ走りきりオスカーが義姉を自分の後方へ下がらせる。家族の安全を確保したオスカーがベルベット達の方を睨むとテレサが彼の後頭部を杖で殴る

「!!?」

そのまま意識を失うオスカーにテレサが謝る

「許して・・・あなたを救うにはこうするしかないのです」

「・・・約束を守ったわね。そいつを連れて消えなさい」

予定が狂ったが目的を達成したベルベットはテレサにそう言い放つ

「それはできません。この子の失点になってしまふ」

「テレサ様!」

突然の発言にライファイセツトが驚愕する

「どうしようって言うの?ただの人間が」

「・・・そう。私は力も才能もない人間です」

そこに丁度倒れていた喰魔が目を覚ましたのか起き上がる。テレサがその喰魔に近づいていく

「でも、あの方」が教えてくれた！私の体は、カノヌシの力に適合すると。こうすれば、すべてを守れると!!」

喰魔の前に立ちベルベット達の方へ向き直る。直後喰魔がテレサの首元へ噛みついた

「あああ・・・っ!!」

一瞬瘴気に包まれた後喰魔の姿が消えそこにはテレサだけがいた。姿が完全に変わっていた

「喰魔になった!?!」

「違う、融合したんじや」

喰魔を融合したテレサが目を開きベルベット達を射抜く

「・・・全員殺します。オスカーの為に!」

喰魔となったテレサが禍々しい羽で宙に浮きながらベルベットに向かつて突進し、杖から槍に変わった黒い刃を振りかぶる。ベルベットはすかさず刺突刃で攻撃を受け止める。喰魔となったテレサの力は予想以上で圧が押し掛かる

「ぐっ!!自分を喰魔に・・・ここまでやるのか!」

「ふふ、あの子の為なら」

テレサが横から向かってくるエレノア達の方へ左腕を向ける。それには手がなく代わりに砲のように口を開けていた。そこから火が揺らめきそれが強くなる

「なんでもないわっ!」

テレサがベルベットを弾き飛ばしそれと同時に火球が発射される。

「させるかよっ!!ストーンエッジ!」

アイゼンが危険を察知し聖隷術で石柱を出現させる。火球がそれに接触した瞬間大爆発を起こし石柱が粉微塵に消し飛ぶ

「うおおおっ!?!」

「きやあああっ!!」

「これをまともに喰らったら肉片一つ残らんぞ!!」

強烈な爆風に皆が驚愕するがロクロウとアイゼンが爆風に紛れながらテレサに向かって走り出す

「だが、これほどの威力を出せるということは連射はできないはずだ

!!そこを突く!」

「そういうことだ!間合いに気をつける!」

二人が左右に分かれ挟み撃ちを仕掛ける

「テレサ様・・!!漆黒渦巻き軟泥捉えよ!ヴォイドラグーン!」

テレサの足元から漆黒の腕が伸び拘束する

「こちとらやられるワケにはいかねえんだよ!蜃気楼!」

アイゼンがスウェイからの高熱フックがテレサの顎目掛けて振られる

「邪魔をするなあ!」

槍を振り回しその風圧がアイゼンを吹き飛ばす。その余波でライファイセツトの術も解けてしまう

「ぐおおっ!!」

「駄目!食い止められない!」

「ならばその前に仕留める!!」

テレサが上空へ舞い上がりロクロウが枯れた木を駆け上がり食らいつく

「斬り捨て御免!」

「跳べるだけで飛べる者になうと思うか!」

「やってみなければ分らん!!」

ロクロウが一回転して勢いをつけ縦に小太刀を一閃する

「破あ!!翠波活殺!」

真空波がテレサに向かって飛ぶ。攻撃が迫る中テレサが左腕を突き出す

「何!?!」

「連発ができないなど誰が言った!」

火球が放たれ真空波とぶつかり爆発する。爆風でロクロウが体勢を崩す、その瞬間頭上にテレサが現れる

「ぬうう!!」

「業魔は地面に這いつくばっていないさい!」

「それはお互い様だろう!」

テレサはロクロウに高速で突っ込み踏みつけるのを小太刀で受け

止める

「ぐううー！」

ロクロウを踏みつけたまま地面へと急降下しロクロウの背が地面に叩きつけられる

「ぐはあっー！」

地面に叩きつけられた衝撃とダメージで意識が朦朧とするロクロウにテレサが止めを刺そうと喉元に槍を突き立てる

「させない!!」

エレノアが槍を振るいながら接近しテレサが反応して同じくの柄で攻撃を防ぐエレノアが押し込んでロクロウから引き離す

「お願いテレサ！こんなこともう止めて!!」

「黙れ！死地に向かうあの子を止めることもできない気持ちかわかるかあ!!」

「それは・・・」

テレサがエレノアの槍を弾き反撃を開始する

「たった一人の家族を!!大切な弟を失うかもしれない私の気持ちをわかってたまるかあ!」

「くっ！ううー！」

エレノアも槍を振るうが喰魔と融合し増大したテレサの力に次第に打ち負けていく

「だああ!!」

「ああっー！」

猛攻に耐えられなくなったエレノアの槍が弾き飛ばされ地面に転がってゆく。間を置くことなくエレノアに槍を振りかぶる

「ふううっー！」

「ふんっー！」

そこにケンがテレサの腕を掴み合気の要領で投げ飛ばす。

「この死にぞこないが！」

「ええ、確かに自分は死にぞこないです」

空中で体勢を立て直したテレサがケンを睨む。ケンの後ろでライファイセツトが聖隷術を唱える

「シエイドブライト！」

ケンの横を二色の螺旋の光弾が飛来する。テレサがそれを武器で弾き少し後方へ下がる

「小癩な！」

「気合い入れんと皆殺しじゃからな！小癩結構ブレイズスウォーム！」

丁度死角になっていたマギルウが聖隷術を発動させる。僅かな隙を突かれたテレサに炎の奔流が襲う

「うううっ！」

「こつちもなりふり構ってられないのよ!!」

背後からベルベットが迫る。テレサが右腕を構えたが偶然かオスカーが倒れている方向だった

「っ……！ぐああ！」

動揺している僅かな瞬間にベルベットの蹴りが腹に突き刺さる。

「くっ……この！」

「こつちも忘れてもらっちゃ困るな」

声の方向からアイゼンが術を発動している

「ちい！」

「冷気の渦よ凍結しろ！フリジットフォトン」

テレサが右腕から火球を発射すると同時にアイゼンが氷塊を繰り出す。双方がぶつかり、熱気と冷気が入り混じり水蒸気が広がる

「しまったーどこにー！」

「こつちよ!!」

敵を見失ったベルベットが霧の中から飛びだし刺突刃で斬りかかる。不意を突かれ槍で弾くも対処が間に合わない。横なぎと切り上げの連撃で武器が勝ちあげられ

「ぐっ!!」

「ロクロウ!!」

「応!!」

飛び上がり攻撃を逃れたテレサの背後にロクロウがいた

「今度はこつちの番だ!!」

「しまっ……！」

ロクロウが印を切り小太刀を構える

「伍の型・斑裂!!」

圧縮した空気を放ちテレサを巻き込み地面に向かって突き落とす。テレサはもがくがそれ以上に圧が強くそのまま地面に叩きつけられた

「ああああっ!!!」

土煙を上げながらテレサの悲鳴が響く。皆が集まりお互いの無事を確認しながらもテレサを警戒する

「負け……ない……負けるわけには……」

「テレサ……様……」

テレサが尚も戦おうと顔を上げ此方を睨む、ライファイセツトが悲痛な表情で見つめるがベルベットは非情に徹する

「これ以上抵抗するなら、手足を喰い千切って大人しくさせる。!?!」

双方の間から人影が現れる。ベルベットが気づくを意識を取り戻したオスカーがテレサにゆつくりと歩み寄り膝を着く

「もういいのですよ、姉上……」

「見ないで……こんな醜い姿……」

テレサが懇願し顔を伏せる、オスカーは静かにテレサの右手に自身の手を添える

「ドラゴニアの家では、父上も母上も跡継ぎである兄しか見ていなかった。でも、貴女だけは、ずっと僕を見てくれた。案じて、励まして、微笑んでくれた」

オスカーがテレサの頬に手を添えて、顔を合わせる。中世貴族では家督は基本長男が継ぐので次男以降は替え玉としか見られない非情な現実がある。お互いが心の支えだったのだろう

「……ずっとありがとう、姉上」

「ああ……オス……カー……」

オスカーが手を放し立ち上がる

「……ここで見ていてください。貴女が見守ってくれば、僕は……世界を滅ぼす魔王にだって勝てる!」

オスカーがベルベット達の方を向き使役する聖隸を出す

「見せてやる！我が神衣を!!」

オスカーの体が光り始めそれと同時に聖隸が彼の体内に入ってゆく

「ぐうう・・・あああああっ!!」

一層光り輝き、それが収まった時オスカーの背中には三対の金属で出来た刃のような翼が現れる。風の神衣を纏ったオスカーが声を上げる

「いざ参るー!」

く

第39話終わり

第40話

神依を纏ったオスカーは僅かに浮遊しベルベット達に向かって突撃する。そのスピードは予想を遙かに上回るほど早い

「おおおっ!!」

ベルベット達が構える暇もなくその中を通り過ぎた風圧で大きく後退る

「な、なんじゃこりゃあ〜!」

「聖隸と一体化した!?!」

マギルウがバランスを取ろうと両腕を振り回し、ベルベットが片手で地面を削りながらその力に驚愕する

「これほどの術だったか!」

「一瞬でも油断したらやられるぞ!!」

「オスカー・・・!」

ロクロウとアイゼンは足を踏ん張り、エレノアが柄を地面に突き立て静かに彼の名を叫ぶ

「うわあ!!」

「なんて力だ・・・!」

ライファイセットがケンのズボンにしがみついて風圧に耐える。オスカーが体の向きを変え両腕を前に構える

「千の毒晶!!」

オスカーの周りから剣の形をした結晶が無数に現れベルベット達目掛けて飛来する

「不味い!」

ケンがウルトラショットを素早く連射して結晶の剣を相殺する。撃ち漏らしたものはベルベットとロクロウ、エレノアが武器で弾きながらオスカーに向かって走り出す

「奴に速さで対抗するのは無謀だ、隙を突くしかないぞ! ウィンドランス!」

アイゼンが牽制のため聖隸術で反撃するも容易く躲されるがそこ

にベルベットが跳躍し業魔手を振るいあげる

「だああっ！」

「しっ！」

オスカーが手元から神依の力で作り出した半透明の光る剣でベルベットの業魔手を受け止める。上から押さえつける形でオスカーの動きが止まる。左右に回り込んだロクロウとエレノアが攻勢をかける

「動きが止まった！仕掛けるっ！枝垂星!!」

「っ・・・!!裂駆槍！」

ロクロウが頭上から斬撃を、エレノアが槍のリーチを生かした刺突を繰り出す

「無駄だあ!!」

オスカーが背中の翼を自身の周りへ動かし二人の攻撃を防ぐ。金属特有の音が響く

「ぐっ!？」

「ううっ！」

予想外の行動でロクロウとエレノアが体勢を崩す。オスカーはそれを逃さず翼を広げ二人を弾き飛ばし今度はベルベットに攻撃を仕掛ける

「神依の力を見せてやる!!」

「何ならそれごと喰らってやる!!」

ベルベットが刺突刃で斬りかかる、オスカーがそれに素早く反応し剣でベルベットの業魔手を押しつけサマーソルトキックで刺突刃をかちあげる

「速い!？」

「竜の裂華あ!!」

神依の力で竜巻を纏った蹴りがベルベットの腹部を捉える。寸前でベルベットが右腕を戻し手甲で蹴りを受ける。直撃は免れたが衝撃と風圧で後方へと弾き飛ばされた

「ぐうう!!」

オスカーが追撃しようと走り出すがそこにアイゼンが割って入る

「邪魔をするな!!」

「こつちも引けねえんだよ!」

オスカーが結晶の剣で斬りかかる、アイゼンはそれをスウエーで躲し彼の脇腹目にかけてフックを叩き込む

「うおお!冬木立(クラスタ)ー!」

「甘い!」

アイゼンのフックはオスカーの翼に阻まれる

「甘いのはそつちだ、ライファイセット!マギルウ!」

「白黒混ざれ!シェイドブライト!」

「隙ありじゃ!アクアスプリット!」

ライファイセットの光弾とマギルウの水弾がオスカーの両側から迫る。アイゼンはオスカーを逃がさぬようさらに喰いかかる

「はあああ!!ウエイストレス・メイヘム!」

拳の連打を叩き込み押さえつける。が、オスカーが目を見開き地面を抉るかのように擦れ擦れの下段蹴りを放つ、それがアイゼンの足を払う

「薙ぎて斬刀!!」

「うおおつ!」

アイゼンが一瞬宙に浮きあがる、オスカーが両手を広げる

「衝きて刹陣!!」

オスカーから放出される波動がアイゼンを吹き飛ばしライファイセットとマギルウの術をかき消す。その余波で二人も大きく体制を崩す

「ひよえええ!!」

「うああつ!」

オスカーがライファイセットに目をつけ彼目掛けて走り出す

「先ずはお前からだ!」

「ううっ・・・!漆黒渦巻き軟泥捉えよ!ヴォイドラグーン!」

ライファイセットが圧に僅かに押されながらも聖隷術を発動しオスカーの足元から漆黒の沼が現れその足を止めようとするがオスカーが反応し素早く躲す。結晶の剣がライファイセットに迫る

「させん!!」

ロクロウが小太刀の片方をオスカーに向かって投擲する

「ちっ!」

小太刀を弾き返すオスカーにロクロウはもう片方の小太刀を構え印を切る

「四の型・疾空!!」

小太刀から鎌鼬を放ちライファイセットから引き離す為接近するロクロウ、オスカーが鎌鼬を打ち消し迎撃しよう構えたその時後ろからベルベットが向かってくる

「旋月華!」

「くっ!」

風を纏った回し蹴りを咄嗟に翼で受け止める、動きが止まり投げた小太刀を拾い上げながら助走をつけたロクロウの突きがオスカーの喉元を狙う

「風迅剣!!」

「うおおっ!」

結晶の剣を目の前で交差させロクロウの突きを受け止める。そこに横からエレノアが槍を回転させながら向かってくる

「炎月輪!!」

「ぐおおっ!!」

もう片方の翼で受け止める、三人の攻撃を防いだがそれは同時に手が塞がってこれ以上防御できないことを意味する

「ライファイセット!」

「しまった!?!」

ベルベットが合図を送りオスカーが眼前に術を発動するライファイセットに反応するが遅かった

「シェイドブライト!!」

「ぐああっ!!」

光弾がオスカーに命中する直前に三人が離脱、圧がなくなったことに僅かに意識がそれた事で術の直撃を許す

「ダメ押しじゃ!!フラッドウォール!」

「ううっ！」

水の壁がオスカーの身体を押しやりさらに体勢を崩す。其処に波を掻き分けケンがオスカーに体当たりで攻撃する

「ふん!!」

「ぐふっ!!」

ケンの巨体に弾き飛ばされ地面を擦りながらも立て直したオスカーが息を切らしながらも立ち上がる

「はあ・・・はあ・・・まだだ・・・！まだ崩れるな・・・神衣!!」

「え・・・!?」

オスカーは苦しそうに呻くがその目に宿る闘志は以前燃えたままだ。エレノアがオスカーの言葉に不信感を覚えるが彼は止まらない。彼の体が輝き神依の力をさらに引き出す

「ここで止まらない！止まるわけにはいかない!!お前たちを倒すまで！」

「次で仕留めに掛かってくるぞ!!何としてでも止めろ！冷気の渦よ凍結しろ！フリジットフォトン！」

「死なば諸共なぞ死んでもごめんじゃぞ!!ブレイズスウォーム！」

吹き飛ばされたアイゼンが立て直し氷の塊を発射、マギルウが爆炎を発生させる。

「うおおおっ！千の毒晶!!」

神依の力で結晶の剣の数が数倍に増大し圧倒的な数で二人の攻撃がかき消される

「くそっ!!ストーンエッジ！」

「ひええく!!」

アイゼンが岩石の槍を繰り出しそれを盾代わりにして防ぐ。マギルウもアイゼンの後ろに隠れる、だが強化された剣が徐々に岩を削り始める

「あのままじゃ串刺しだ！次で仕留める！」

「相手も必死ということ！あと少しで・・・！」

「ここで止めないと・・・！」

三人が走り出し、ケンも意を決し後に続く。オスカーがベルベット

達に気づき一気に勝負を仕掛ける

「はああ！剣よ貫け！！」

オスカーが手を振りかざし大量の結晶の剣を繰り出し射出する。そこにロクロウとエレノアがベルベットの前に出る

「瞬撃必倒！相伝の秘技、刮目せよ！嵐月流・白鷺！」

「参ります！響け！集え！全てを滅する刃と化せ！ロストフォン・ドライブ！」

ロクロウの神速の斬撃、エレノアの刺突が結晶の剣の剣を迎撃し破壊する。全てを破壊した後エレノアが槍を突きあげ白色の光線がオスカーに向けて放たれる

「そして爆ぜよ！！」

オスカーに光線が直撃する寸前は赤色の波動を放出しそれを掻き消し相殺し間髪入れずエレノア達に突撃する

「シルフィードブレイズ！！」

捨て身ともいえる特攻に二人は避ける時間はなく身構える。その時二人の間からケンが飛び出し跳躍する

「イヤア！！」

ケンの右足が赤く発光し、レオキックとオスカーの突撃が激突する

「うおおっ！！」

「ぬがああー！」

数瞬の拮抗、だがそれが直に終わり両者が大きく弾き飛ばされる。オスカーは機動力に優れる風の神依の力で素早く体勢を立て直しケンの方を睨みつける。ケンは慣性の法則に従い落下しながらも同じく持ち直す

「仕留める！！」

それを見逃さないオスカーが再度急降下しケンの眼前に迫る

「不味い！アイゼン！」

「駄目だ！間に合わん！！」

ロクロウがアイゼンに向かって叫ぶがアイゼンもこの状況では援護できない。だがケンはチャンスを伺っていた彼の下にはオスカーが投げた剣が地面に刺さっておりそれに両足を掛け踏ん張りもう一

度飛び上がる、死角に隠れていたためオスカーからしてみれば飛行したように見えただろう

「レオキック二段蹴りい!!」

不意を突かれたオスカーの腹をしたから蹴り上げる

「ごふう!?!」

「ベルベツトさん!!」

「はっ!?!」

蹴り上げた先にベルベツトが業魔手を構え降下していた

「容赦しない!一撃じゃ生温い!絶破、滅衝撃!」

業魔手がオスカーの背中を叩き衝撃波で地面に叩き落とす

「うわああああ!!」

大きな土煙が上がりやがて晴れる、俯せのオスカーが倒れていた。ベルベツトが地面に降り立つ

「はあ・・・はあ・・・何とか・・・勝てた・・・」

「今度ばかりは、どうなる事かと思っただわい・・・」

「あれが神依の力か、力は劣るとはいえ集団で来られたら対処は難しいぞ」

皆が口々に言う中オスカーがふらつきながらも立ち上がる。ボロボロの状態ではもう戦えない、エレノアが止めるよう説得する

「お願いです、オスカー!これ以上は——」

「許さない・・・!姉上を傷付けたお前たちを!!がああああ・・・!!」

「聖隷の暴走か!?!」

オスカーが無理矢理力を開放するが先ほどとは様子が違う。勘で気づいたロクロウが再度構える

「いかん!ドラゴン化するぞ!」

「喰らってとめい!ベルベツト!」

「待って、この人は・・・!」

ライファイセットが制止しようとするがオスカーが彼目掛けて突っ込んでくる

「うおおおお!!」

「!!」

ベルベットがライフセットの前に立ち業魔手を振りかぶる。それをオスカーが躲し刃を纏った手刀を振り下ろす。それを回転しながら横に躲し後ろ回し蹴りで反撃、オスカーが屈んで躲すが体力の消耗か反応が鈍くなる。ベルベットは刺突刃で振り払い後ろへ追い詰める。オスカーはそれを何とか躲すが業魔手が迫りそれを回避する手段がなく防御するが振り上げに腕を弾かれる大きな隙が生まれた。ベルベットはそれを逃さず飛び上がり体を捻りながらオスカーの後ろへ飛び上がり業魔手を振り下ろした、間合いも隙も入り確実に背中へ当たる寸前、オスカーの体から神依が消え去り人間の状態になった彼の背中に業魔手が振るい降ろされた

「うああああああ!!」

「!!」

手応えがありすぎたベルベットの表情が驚愕に染まる。だが気づいたときには押すかは糸の切れた人形のように力なく倒れた。即死だった。ベルベットがオスカーの死体と自身の左腕を見る、神衣だけを喰らうつもりだったベルベットの本意とはまったく違う結果になった。自らがされたことを自らが行ってしまったのだ。そこへテレサが目を見開き力なく近づいて来た

「殺した・・・な・・・」

「違う・・・」

涙を浮かべるテレサの前で必死に否定するベルベット

「いい子だったのよ? 誕生日にイヤリングをくれたの。本当は、婚約者に渡す家宝なのに、そうとは知らず私に・・・一番大切な女性にあげるものよって返そうとしたら、あの子・・・それは姉上だよって笑って・・・無邪気で・・・とても・・・優しい子だったのにつ!」

テレサの殺意の籠った視線がベルベットに突き刺さる。動揺するベルベットに叫ぶ

「オスカーを殺したなつ!!」

その言葉にベルベットの脳裏に三年前のあの夜の記憶が蘇る

「よくもつ!!」

祠の大穴に落ちていく弟を

「よくもっ!!」

命が潰えた弟の体が小さくなっていく様を

「よくもおおっ!!」

テレサが叫びながら向かってくる。その時脳裏に仇であるアルトリウスの顔が浮かぶ、自らがアルトリウスと同じことをした事実、ベルベットが叫ぶ

「うあああああゝゝッ!!」

それを否定するかのよう、に業魔手を出しベルベットが駆け出す

「やめてっ!!」

「殺すな!」

ライファイセットとアイゼンが止めようと声を上げるが距離が開いてしまっているため間に合わない。テレサがベルベットの首を掴み飛行しながら後ろの岩に叩きつけようとす

「ぐう!!」

「ああっ!!」

だがベルベットは咄嗟に腕を払いのけテレサが大きくバランスを崩す。直後に跳び上がり捻りながらテレサの背中に業魔手を振るつた

「きやあああああっ!!」

「!!」

ベルベットが着地し元の姿に戻ったテレサが地面に落ちるその光景にライファイセットは声を上げることすらできない。テレサはオスカーの亡骸のすぐ傍まで這いずり、その手に自らの手を重ねる

「ひどい怪我・・・すぐに手当を・・・泣かないで・・・あなたは強い子・・・よ・・・」

眠っているような表情のオスカーに涙を浮かべながら必死に励ますテレサ

「オス・・・カー・・・」

テレサもそこで事切れ手を重ねたまま亡くなった。そこから赤黒い瘴気が出始めそれがベルベットの業魔手に取り込まれていく。二人の魂を回収したのだろう

「テレサ・・・オスカー・・・」

ベルベットが二人の名を呟く、マギルウが一人溜息を吐く

「・・・喰魔の回収は失敗じゃな」

「・・・先にやったのは・・・そっちよ・・・」

聞いていないのかではなく聞く余裕がないかのようにベルベットが震える声でぼそぼそと話す。懐から櫛を取り出す。それがないと壊れてしまいそうだから

「だから、あたしは・・・ラフィの・・・！弟のため・・・に・・・」

精神が限界に達したベルベットが力なく膝を着き倒れる。そこへライファイセットが走っていくのが見えた

）

ベルベットはいつぞやの白い空間にいた。花が咲き誇り朽ちた石柱はオスカーとテレサと戦った場所だ。違うとすれば景色が真っ白であるということ。ベルベットの視界には自分の殺したオスカーとテレサが目を見開き自らを睨んでいる死体だった

「・・・死んだ・・・違う・・・殺した”・・・あたしはアルトリウスと同じことをした。テレサあいつの目の前で弟を・・・」

「同じじゃないよ」

ベルベットの後ろにはいつの間にか姉のセリカと弟のライファイセットが立っていた。ライファイセットがやんわりとベルベットの言葉を否定する。だがベルベットが振り向きながら叫ぶ

「同じよっ！けど、仕方なかった！仇を討つには、ああするしか！！あんなのためよツ！！あんなのために、あたしはツ！！」

ベルベットが弟の肩を掴みながら叫ぶ。弟の為、生きる為、だが違う視点から見れば弟の死を盾にしているようにも見えた。自身の心を良心から来る圧から守るために。その時何かが潰れる音が響く、ベルベットの左腕が業魔手になっており倒れたライファイセットが変わり果てた姿をしていた

「ああ・・・あ・・・」

“為”ではなく責任にってしまったベルベットは自身の体を抱く

「もうこんなの・・・」

「どこにも逃げ道はないのよ」

「お前にも、俺にもな」

セリカとアーサーの幻影が無情にそう語りかける

「・・・」

ベルベットはそれにただ耐えるしかなかった

）

ベルベットが意識を取り戻す少し前、二人の遺体を火葬するための準備が終わろうとしていた。モアナの母親と同じく放置や土葬では穢れが集まり業魔になる可能性があるためだ。薪を集め組み上げ遺体を安置し顔に布を掛ける。準備を終えたケンがアイゼン達に報告する

「準備終わりました。では早速」

「ああ、始めろ」

アイゼンが答え薪に火を着け火葬を始める、遺体が炎に包まれるのをアイゼン達が見守る中ベルベットが目覚めます。傍で見ていたライフィセットが駆け寄るがその表情は優れない

「・・・その通りね」

意識の中で欠けられた言葉に独り言のように肯定し立ち上がる

「大丈夫か？」

「一気に喰べ過ぎただけ」

ロクロウが調子を聞く、ベルベットはいつものようにそう答える

「・・・あの二人は。仲のいい兄弟でした。幼い頃から互いに支えあつて――」

エレノアがオスカーとテレサの事を思い出を話す、だがベルベットが口を挟む

「やられたことをやり返しただけよ」

「それで誰かが救われるのですかっ!!」

「ええ。殺されたラフィの魂がね」

「・・・」

「・・・」

友人で仲間だったエレノア、聖寮に弟を奪われたベルベット。正反対の主張は平行線になる、そこに能天気なマギルウが口を開く
「とにかく喰魔の回収は失敗じゃ。今頃、別の喰魔が生まれているじゃろうて」

「行くぞ。後始末も終わった、港に戻ってそいつを探す」

話している内に処理も終わり遺灰を葬った一行は港に向かってもと来た道を歩き出す

「・・・そうね」

もと来た道を戻り拠点が見えてきた時ベンウィックの元に一羽の鳩が止まる。鳩の脚には小さな筒が取り付けられていてベンウィックがそれを外し書かれている内容を見る。それを見たベンウィックが慌てた様子で丁度戻って来たベルベット達の方へ走ってくる

「大変だ、副長！ゼクソン港から緊急連絡！数十人の対魔士を乗せた船がタイタニアに向かって出航！目的は『災禍の頭主の討伐』だつて！」

「ぶしゆく、隠れ家がばくれたく・・・」

マギルウがそういうが隠れ家といってもデカすぎてバレやすいと思うんだが。ベルベットがエレノアの方を睨む

「違う！密告なんてしていません！」

「だったら、手伝ってもらおうわよ。喰魔たちを救出しなきゃ」

「させません。モアナに、またあんなこと・・・」

緊迫した空気の中アイゼンがベンウィックに情報の確認を取る

「待て。その情報の出所は血翅蝶か？」

「ううん。いつも取引してる商人からです」

アイゼンがその報告に目つきを変える

「本来、作戦情報は開始するまで部下にも知らせない機密だ。それが一般人にバレてやがる」

「罨ってこと？」

「退く選択肢はないわ」

「事情は敵も見抜いている。その上で罨を仕掛けるのは、必勝の手段

があるからだ」

アイゼンの推測にライフイセットがオスカーの事を思い出す

「神依!!」

「今度の敵は、神依を使う対魔士共かもしれん」

「あれは業魔手でも喰い剥がせん。ケンの技ももつともじや、謂わば、お主の天敵じゃぞ?」

マギルウに言われ間が開いた後ベルベットが答える

「喰えないなら、普通に殺すまでよ」

「だな。神依は受け切れれば勝てる」

ロクロウもそれに賛同する

「オスカーの様に・・・か。確かに、まだあれは未完成のようだ」

「どうやら、一定時間を過ぎると融合した聖隷がドラゴン化してしま
うらしいのドラゴンの暴走を防ぐために、限界を超えた時、対魔士と
聖隷を自壊させる術を組み込んでいるようじゃ」

時限爆弾を抱えながら戦う様は正に狂気ともいえる

「自壊・・・そこまでやるのですね」

「・・・」

「全ては推測にすぎんが、できるだけ準備は整えて行こうぞ。思い残
すことがないようにのう・・・」

皆がこれからの事を話し合っている時その様子を遠くからビエン
フーが見ていた

「・・・」

「・・・」

それを横目でマギルウが見ており溜息をついた

「」

大急ぎで出航準備をしている中。アイゼンが今回の事に疑問点が
あった

「・・・今回の聖寮の行動・・・どうにも腑に落ちん」

「はい。情報を漏らしたのがわざとだとして、私たちを放置するのは
おかしいですね。普通、私たちを追い込む作戦を同時に進行するは
ずです」

エレノアも同じことを考えていたようで推測を述べる

「監獄島の仲間を人質にとったつもりかもしれないが、計略に穴がありすぎる」

「俺達がモアナ達を見捨てて逃げたら、ベルベットを取り逃がしちまうもんな」

顎に手を当て考えていたマギルウが呟く

「やつらは本当に喰魔を取り返したいのかのー？」

「・・・何が引つ掛かる？」

「なぜ、メルキオルはアバルに幻術を掛け、ベルベットを追い込んだのか・・・じゃ」

「それは・・・ベルベットを捕まえる為でしょ？」

「それが無理なら、あいつを殺して別の喰魔を作ろうって腹積もりじゃないのか」

「じゃが、そこまで喰魔を確保したいなら何故オルトロスをはっばつておいたのじゃ？」

マギルウの考えは至極全うだこれではいつでも逃げれるし情報も筒抜けだ

「確かにおかしいな。メルキオルがいたってのに、オルトロスを守ろうとしてなかった」

「意味がわからない・・・なんか嫌がらせみたいだ・・・」

「それこそ意味がないですよ。嫌がらせで、私たちが諦めるはずもないですし」

「いや・・・案外、正解に近いかもしれん。タイタニアへの襲撃も、俺達への揺さぶりが目的だとすれば、辻褄は合う」

「なににせよ、不吉な予感がするのう・・・」

マギルウの予感は的中することになる

↳

その後バンエルティア号は出航し、大急ぎでタイタニアへと向かうがいくら世界一の船といえど数日はかかるだろう。甲板には一人ピエンフーが一羽の鳥に何かを吹き込んでいた

「頼むでフよ。一行は後一日、二日でタイタニアに到着と伝えてほし

いでフ……」

「密偵はお主じやったか、ビエンフー」

ビエンフーが声のする方向へ顔を向けると其処にマギルウが立っていた

「マ、マギルウ姐さん……」

驚くビエンフーを他所にマギルウが手を翳すと光が現れそれと同時にビエンフーの身体から術式が浮かび上がる

「気がつかなんだ。儂の契約術に強制術を重ね書きしてある。流石は、お師さんじやな」

マギルウの表情はどこか嬉しそうだ、次に重ね掛けしてある術を解除する

「まさか、お主が最初に逃げた時点から、あのジジイの策だったとは。儂をタイタニアに捕らえたのも、ベルベットと出会わせる計算か……見事すぎるわ」

「許して欲しいでフ……メルキオル様の術には逆らえなかつたんでフ……」

ビエンフーも本意ではなく何とか抗おうとしているのだろうが当のマギルウは興味なさそうにしている

「別にどーでもいいわい。どーでもいいと感じる儂の心すらも、の」
そう呟く後ろにベルベットとライフィセットが立っていた。ビエンフーが驚き、マギルウは分かっていたようにそちらの方を向き直る。後伝書鳩も飛んで行った

「マズイ所を見つかつてしまつたあゝ！儂が聖寮の密偵とバクレくたゝかあゝ！」

おちゃらけているように見えるがビエンフーを庇っているのがバレバレである

「違つてフー！悪いのは僕なんでフー！」

「聞いたわよ、全部」

「なんじやつまらん。では、煮るなり焼くなり好きにせい」

多分自分じゃなくてビエンフーの方だと思つ

「……元々信用してないし。密告がなくても、いずれはこうなつた

わ。どうせ反省しないんだから、せめて戦力として働きなさい」

「・・・随分甘く残酷なことを言うのう」

「あんた達に構ってる場合じゃないからよ。お望みなら、全部終わった後に喰らってあげるわ」

マギルウは僅かに口を歪めベルベットに質問をする

「・・・のう、ベルベット。『憎い』とはどんな気分なんじゃ？どれほど辛い？どんなに苦しい？身を焦がすほどの憎悪は、生きている意味を、実感を与えてくれるのか？」

「・・・」

それに対して沈黙しているベルベット、暫し波と風の音だけが響くがそれをベンウィツクの声が打ち消す

「みんな来てくれ!!ケンから話があるんだって！」

「わかったわ！すぐ行く」

ベルベットが返事をしマギルウの方へ顔を向ける

「答えが知りたかったら手を貸しなさい。アルトリウスを殺す瞬間に見せてあげるわ」

それだけ言うと集合場所に向かうベルベットとライフイセット。

その後ろ姿を見ていたマギルウが呟く

「そんなボロボロの様で、まだ吠えるか。まったく・・・むかつく奴じゃて・・・」

）

後部船室に集まったベルベット達、皆好きなどに座ったり壁に寄り掛かっている

「それで、話って」

ベルベットがケンに問いかける

「タイタニアに着くのが早くて明日。タイタニアにはクロガネさんやダイルさん、喰魔であるメデイサさんがいても相手は神依を装備した聖寮の集団、籠城してもいつまで持つかわかりません。」

「ああ、だがいくらコイツでもこれ以上の船速は出せない」

「はい、実は自分の技に瞬間移動ができるものがあります」

モアナの事が気がかりだったエレノアがそれを聞いた時顔を上げ

続けるように近づくと

「それは本当なの!?!」

「はい、ですがこれ程の物体を移動させるのは初めてですが……どちらにせよ時間がありません」

「だがケン、そんなことして大丈夫なのか」

ロクロウが椅子に腰かけ腕を組みながらケンに聞いてくる

「問題はそんな大技を使ってお前の体力が持つかどうかだ。途中で倒れられたら敵わんぞ」

「……自分はこれまでほとんど役に立てていませんでした。ですからこれは自分なりのケジメです」

ロクロウはそれを聞いて頷く

「わかった。そこまで言うなら俺からは言うことはない。ま、ぶつ倒れたら船室に放り込んでくさ」

「ありがとうございます。アイゼンさん」

「……いいだろう、やってみろ」

アイゼンも静かに承諾する

「無茶はしないで」

「ケンの種明かしがもう一つ見られるなら儂はどーでもよいぞー」

「ははは……」

マギルウの言葉に苦笑いしながら甲板へと向かう、扉の横にいたベルベットが呼び止める

「無茶するのは勝手だけど対魔士と戦う分の余力は残しておきなさい。いいわね」

「わかりました。善処します」

「大丈夫?」

「ライファイセット達に比べれば大したことないよ。心配ないさ」

不安な表情のライファイセットに方に手を乗せ、安心させる。甲板に向かい腕をクロスさせる

「ぬううう!!」

エネルギーを集中させ自身の周りからオーラが放ち始める。徐々にそれが大きくなりやがてバンエルティア号を包み始める

「これは・・・！」

「聖隷術の類じゃないな」

様子を見ていたベルベット達はその光景に驚いている

「行きます!!」

ケンがエネルギーを開放しバンエルティア号が光に包まれた時、そこに姿はなかった

）

第40話 終わり

第41話

ベルベット達の拠点、タイタニア。いつもバンエルティア号が着ける北側の船着き場とは違う南側の船着き場の端で対魔士に追い詰められている三つの影があった

「貴方達・・・禁術を仕込まれてる？メルキオルの仕業ね・・・」

そこにはグリモアールとそれを守るようにオルとトロスが彼女の前に出て対魔士を威嚇している。聖隷を従えた二人の一等対魔士はそれに応える事はなくグリモアールを始末しよう構える、その時彼女達の背後から小さな光が現れそれが徐々に大きくなり辺りが光で満たされる

「あら、何かしら・・・」

背を向けていたグリモワール達は光の影響を受ける事はなかったが正面を向いていた対魔士はそれをモロ喰らって腕で目を庇う。光がバンエルティア号を形作り、それが治まったと同時に着水し波飛沫を立てる

「おおっと!!:どうやら到着のようだ!」

ロクロウが船の衝撃に耐えながらも辺りを見回しここが拠点である事を確認する

「うわああっ!」

「ひく船が折れるわいく!!」

「これしきの事でバンエルティア号が壊れてたまるか!」

アイゼンが転びそうになるライフセットを掴み縁起の悪い事を口走るマギルウを怒鳴る。

「グリモアール!!」

「お帰りなさい、意外に早かったわね」

エレノアが叫ぶが当のグリモワールは平然とこちらを見る。ちよつとやそつとでは驚かないようだ。ベルベットは甲板の手すりに足を掛け船から飛び出す。光に目が慣れた対魔士がそれぞれ剣ではなくオスカーが神依を使用するときと同じ、聖隷を取り込み彼が

神依で使用していたのと似た装飾が施された武器を出す。巨大な籠手のような武器を持った対魔士がベルベットの刺突刃をそれで防ぐ。「予定より早い！災禍の頭主！」

青色の線が入った弓を持った対魔士が剛腕の対魔士の背後から光る矢を放つ

「またそれ!?御大層な名前ね!!」

業魔手で籠手を弾き矢を回避すると同時に対魔士に蹴りを放つ

「ぐっ！名付けたのは貴様が傷付けた人々だ！己が罪の重さを知るがいい!!」

蹴りを喰らった対魔士が接近し剛腕を振り下ろす。ベルベットがバックステップで後ろに下がり代わりに地面を砕く

「いや・・・今までの罪を、その身に刻んでやる!!」

弓を引き絞り霊力が籠った矢が放たれる。対魔士の矢は普通のそれと違い速度が圧倒的に早い

「破！」

ロクロウが横から入り小太刀で矢を弾き返す

「刻まれるのはどちらかな?」

ロクロウの右目を光らせ剛腕の対魔士に向かって走り出す

「止めてください！神依の危険性をわかっているのですか!？」

「愚問よ！これは命の喰らい合いだ!!」

ベルベットも吐き捨てるように叫びロクロウと同じ対魔士に斬りかかる

「エレノア、諦める。向こうはもうお前に耳を貸すことはない」

「アイゼン・・・!」

「気持ちにはわからなくてもない、だがな、相手が命を取りに来てる以上こちらにも殺るしかない」

弓を持った対魔士がアイゼン達に向かって矢を放つ、それが途中で無数に分裂し飛来する

「躲せ!!」

アイゼンの声で剛腕の対魔士と戦っている二人を除いて左右へと別れる。その真ん中を通り過ぎた矢が急旋回し追跡してきた

「追ってくる!？」

「聖隷と一体化したのなら武器自体も体の一部!こんな芸当分けないということじゃ!!」

エレノアは槍を振るい迫りくる矢を弾きとばしマギルウが水弾で相殺する

「クソ!あの対魔士をどうにかしないと埒が開かんぞ」

「でも矢がどんどん増えてきてる!!」

アイゼンはライファイセットを抱え上げながら聖隷術で迎撃しつつ回避行動を行う、だがライファイセットの言う通り対魔士が矢を番え放つ度に分裂する本数が徐々に増えてきている。矢を受け流していたケンがアイゼンに声を掛ける

「自分があの対魔士を肉薄にします!」

「何言ってやがる!串刺しにされるぞ!!」

「ですがこの状況を脱するにはこうするしかありません」

それを言うときケンは近くに置いてある樽や木箱をまとめて抱え上げ対魔士目掛けて投げる。弓の対魔士は蛮族めいた攻撃に一瞬驚いたがすぐ様矢を放ち飛んできたものを撃ち落とす。だがそれにほんの僅かに意識が向いたことでケンが走ってきているのに遅れる

「な!？」

「うおおっ!」

ケンが懐に潜り込み体当たりからの胴へ肘打ちを叩き込む

「がはっ!!」

「ふん!!」

追撃に前蹴りを打ち対魔士を蹴り飛ばすが向こうも反撃で今まで撃っていた物とは一回り大きな矢でケンのの腹を射抜こうとするが寸前で掴むが矢に押されて後方に飛ばされる

「どああっ!？」

対魔士と同様にケンも逆の方向に吹き飛ばされるも体勢を立て直し粗々しく着地し膝を着く。ロクロウとベルベットの方も剛腕の対魔士を追い詰めたようだ。ベルベットの蹴りが腹を打ち弓の対魔士の近くへと押し戻す。対魔士も苦し紛れに腕を振るい二人を後退さ

せる

「ぐ……ううう……！」

二人の対魔士が辛そうに呻く前でベルベットが業魔手を出す
がその表情はかなり苦しそうだ

「ころ……す……殺さなきや……ううっ!!」

突然の頭痛で頭を抑えるベルベットに反応して対魔士が立ち上
がり腕を振るいあげながらこちらに向かって走りだす。弓の対魔士も
矢を番える

「ベルベット!!」

「……!!」

ライファイセツトがベルベットの前に立ち庇う。自爆覚悟で向かっ
てくる対魔士にエレノアが恐怖の表情を浮かべる、だが次の瞬間対魔
士達は体勢を崩しその体が霧散していく

「ああ……ああああ」

「……まで……か……」

消えていく様を見ながら各々構えを解く

「自滅したな」

「儂の予想通りじゃったの」

「聖寮は、全部わかってやっているのですね……」

ベルベットは対魔士の最後を見たあとグリモワールの方を向き、ア
ジトの状態を確認する

「グリモワール、喰魔達は？」

「わからないわ……聖寮にここを攻め込まれて対処している内に散り
散りになってしまったのよ……」

「解読はどうなった？」

アイゼンが次いでに古文書の解読の状況を聞く

「ほとんどできたけど、肝心の最後がまだなの」

「あんた達はバンエルティア号へ。喰魔達はあたしが捜す」

「できるかろう？神依の集団を掻い潜って」

「……いやなら来なくていい……痛っ……！」

マギルウの煽りにも聞こえる言葉と視線にベルベットは踵を返す

が眩暈を起こしふらついてしまう。そのせいかベルベットの櫛を落とす。それにライファイセットが気づき拾おうとするのをベルベットが声を荒げ制する

「触らないでっ!!」

櫛を拾い上げるベルベット、だがその様子から見てももう精神が限界に近い事は誰の目から見ても明らかだった

「・・・ひとりで無理しないで。みんな一緒だし、僕も・・・僕がベルベットを守るから」

「守る・・・昔、ラファイも同じ事を言ってくれた・・・けど、そんな甘い事言ってるよ死ぬわよ」

ベルベットが冷たく言い放つ

「いくら誓ったって現実には通じない。ラファイも、あつさり死んだ・・・殺された! あたしも、あの子を守れなかったあんなにあたしを想ってくれたあの子を・・・たった一人の弟を・・・胸を刺されて・・・痛かっただろうに・・・」

「ベルベット・・・」

ライファイセットの目に映るベルベットは身も心も弱りはて、今にも崩れてしまいそうに見えた。その彼女が鋭い目つきでライファイセットの方を向く

「あんたは自分の心配だけしてればいい。これは命令よ」

「命・・・令・・・」

ライファイセットが言葉を復唱する。この命令はどちらととれるのか、だがベルベットはそれを言うことはない

「カノヌシを抑えてもらわなきゃならないのよ。アルトリウスを殺すために」

ベルベットは顔を伏せるライファイセットを尻目にアジト内部へと続く扉へ向かう。ライファイセットもエレノアに促され入口へ進んでいく、ケンがそれに続くがグリモワールが声を掛ける

「ちよっと待って」

「はい?」

「さっきのアレ、貴方でしょ。だいぶ無理してるんじゃない」

「いえ、そんなことは・・・」

的中されて少し焦ったケンにグリモワールが続ける

「そんなことはないって言っても無駄よ。辛いんでしょ、見ればわかるわ」

グリモワールの指摘した通り、ケンは少し肩で息をし顔から汗が滲んでいる

「・・・グリモワールさんの言う通りです。ですが、まだいけます」

「頑張るのは勝手だけど。倒れたら元も子もないわ、人生の先輩からの忠告」

「・・・はい」

ケンはそれに答えベルベット達に追いつくべく走っていった

く

「こんな時でフが、皆さんにお話がありまフ」

廊下を走っている最中ビエンフーが突然切り出す。全員一旦足を止めビエンフーに注目する、何人かはもう知っているが

「ごめんなさい!!ボクは、メルキオル様のスパイだったんでフ!」

「貴方が・・・聖察に情報を流していたのですか?」

「そうでフ・・・ごめんなさい!!」

実際には強制されていたためビエンフー自身には責任がないのだがそれでも頭を下げる

「おお、すげえところに仕掛けたな、メルキオルは。まさかマギルウの側にスパイなんて・・・いや・・・『木を隠すには森の中』怪しい奴は、怪しい奴の側についてことか」

「マギルウの契約術の上から命令を強制する術をメルキオルがかけてたんだって」

「ちっ・・・やってくれたな」

ライファイセットがバンエルティア号での事を説明する。アイゼンが舌打ちをする、当然だ、自分のすぐ近くで情報を聞かれていたこと、それに気づけなかった自分に毒づく

「ビエ〜ン。許してくださいでフ〜!」

「お前じゃない。メルキオルだ」

「えっ……?」

ビエンフーはアイゼンが舌打ちした原因が自分であると思い泣きついて許しを請うが、アイゼンがそれを否定したことに驚く

「自分の舵を自分で取れないようにするのは、アイゼンの流儀に反することだから。ビエンフーの意志じゃないってことはわかってるよ」
「でもボクが密告したせいで、皆さんが危機に陥ったのは事実でフ……」

「血翅蝶」にだってバレてたんだぜ。お前抜きでも、聖察は俺達の動きを掴んでたさ。で、他にはどんな情報を漏らしたんだ」

ロクロウに問いただしにビエンフーは洗いざらい告白する

「それは……ベルベットが意外といいお嫁さんになりそうなことか。アイゼンの釣り竿への拘りや、マギルウ姐さんの寝言の内容、それにダイルの尻尾の再生スピードも……」

「えっ、そこ……?」

ビエンフーの証言から考えると100の情報の内8ぐらいは全く役に立たないだろう、メルキオルはたぶんそれも覚悟でスパイをやらせたのだろうが、それともビエンフー自身が有利な情報を与えないために行っていたのか、それはわからない

「もういい、終わったことだ。だが、ケジメはつけねばならんな」

「ケジメ?」

アイゼンがそういうとエレノアの方を向く

「エレノア、疑ってたことを謝る。すまなかつた」

「アイゼン……!?!」

アイゼンがエレノアに謝罪する

「それでフよね……ボクが、まずしなくちゃならないのはそれでフよね……ごめんなさい、エレノア様」

「……はい。二人の気持ち、確かに受け取りました」

エレノアは二人の謝罪にそう応えた

く

アジトの地下へ着き広間へたどり着いた、その時前方横から影が勢いよく飛び出しそのまま壁にぶつかる

「ぎゃああ!!」

地面に落ちたのは対魔士、飛んできた方向を向くと腕を変化させたメデイサが立っていた。その後ろにモアナとクロガネがいた

「無事の様ね」

「面目ない。逃げるのが精一杯だった」

「元々顔はないじやろうが」

マギルウがツツコミを入れる横でモアナがエレノアに抱き着く

「うわあぁくん!こわかったぁ・・・」

「・・・大丈夫、もう酷いことはさせませんよ」

「メデイサが助けてくれたんだよ」

「ありがとう」

「・・・子供を巻き込むのが許せなかっただけです」

エレノアがメデイサにお礼を言う。メデイサは顔を背けながら応える

「クロガネ。モアナ達を守って裏の港へ行つて、王子とグリフォンを見つけたら、バンエルティア号で脱出する」

「承知した。ロクロウ、これを持っていつてくれ。お前がくれた金剛鉄で打った征嵐だ」

「刀にできたのか!」

クロガネが懐から一振りの太刀を取り出しロクロウに差し出す

「一切の欲望を捨て、無心で打ち上げた。この世に、これ以上硬い太刀はないはずだ」

「金剛鉄の征嵐か・・・」

ロクロウは鞘から太刀を抜き刃を見る。銀色に輝く金剛鉄の刃にロクロウは目を見張る

「使わせてもらうぜ、クロガネ」

クロガネ達を裏の港へと続く通路へと走っていくのを見送り、ベルベット達は奥へと進むと物陰に隠れていたパーシバル王子を発見した

「捕まっていなかったわね、王子」

「君たちこそ。よくアルトリウスの目を掻い潜れたね」

「アルトリウス様がここに!？」

「ああ、対魔士達が話しているのを聞いた」

聖寮のトップが乗り込んできているということは、完全にベルベツト達を殺り来ているということだ

「アルトリウス……!」

ベルベツトがその名を聞いて今にも飛び出していきそうになるがそこでアイゼンが口を挟む

「特攻には付き合わんぞ。喰魔たちの保護が先だ」

「古文書の解読も、あとちよつとでできるし……」

「……わかってるわよ。裏の港から脱出する。ついてきて」

喰魔を奪い返されないうこと、カノヌシの対策を見つげるためのグリモワールの保護が最優先目標であることもベルベツトはわかっている

「気をつけい、王子殿。グリフォンに遅れたら置いていかれるぞ」

「わ、わかった」

王子を連れてきた道に戻り、港へと続く広間にたどり着くとそこにベンウィックがいた。ベンウィックがこちらに気づくと慌てた様子で走ってくる

「やばいよ、副長! 敵がバンエルティア号に気付いた! 敵の船が何隻かこつちに回り込んで来てます!」

「直に出航だ!」

アイゼンは状況を素早く理解し指示を出す。皆はバンエルティア号の待つ港へ走り出すがベルベツトはアルトリウスの事が気になるのだろう立ち止まり後ろを見る。それに気づいたライフイセットがベルベツトに歩み寄る

「……よかったね。みんな助けられた」

「……」

複雑な表情を浮かべるベルベツト、だがそこに通路の奥から対魔士達が2階の踊り場から現れ飛び降りる

「逃がさんぞ、災禍の頭主!!」

対魔士は躊躇することなく神依を纏う。魔王を倒せるなら自己の

生命など平然と投げ捨てる覚悟の表れだ。ベルベツトは一人前に出て構える

「ベンウィック！あたしに構わずバンエルティア号を出しなさい！」

「馬鹿言うな！あんたはどうするんだよ!？」

「こいつらを叩く！さもないと狙撃される！」

ベルベツトの言う通り対魔士の中には弓を持った者もあり、仮に出航したとしても神依の力を持った矢はバンエルティア号に被害を与えるだろう

「ちっ・・・出航しろ！こっちはなんとかする！ケン、お前も行け。俺達が突破された時は船を護衛しろ。行け！ベンウィック！」

「わかりました。船が出たらそちらへ」

「りよ、了解！みんな死ぬなよ！」

「無茶言いはよる」

「死ぬんじゃない・・・殺すのよ」

ベンウィックの無茶ぶりに愚痴を吐くマギルウ、誰にも聞こえないように呟くベルベツトはそのまま走り出した

裏の港に到着しモアナ達を船に乗船させケンは船を留めている舳い綱を解き始める。指示を出していたベンウィックが甲板から乗り出しケンに向かって叫ぶ

「ケン！早く乗れ！」

「いえ、自分はベルベツトさん達と合流します。きっと脱出するための手を考えているはずです！急いで出航を」

解いた綱を投げ渡し次の綱に取り掛かりながらそう促す。ベンウィックはじれったそうにしたが意を決したのか首を縦に振った、それを確認したケンが横に立っているパーシバルに乗船するように促す

「殿下も急いでください。時間がありません」

「いや、私も残ろう」

殿下の言葉に少し驚くケン

「しかし」

「聖寮の狙いが喰魔だというのなら私はそのついで程度だろう。グ

リフォン」

腕に留まっているグリフォンに語り掛けそれにこたえるように船の方へ飛んでいく

「私も一応は国の王子、何かの役には立つだろう。さあ行こう」

「・・・わかりました。ベンウィックさん」

「ああ！わかった！みんな行くぞ!!」

ベンウィックの号令で船が動き始めたのを確認しケントとパーシバルは入口の方へ向かう、戦闘の音がなくなったということは済んだとみて間違いないだろう

「これからどうするの?」

ベルベット達は対魔士達を退けライファイセットがベルベットに質問する

「表の港へ行く」

「聖寮の船を奪うんだな」

ロクロウはベルベットの考えを察する

「そこには聖寮が本陣を置いているはず。きっとアルトリウス様がいます」

「元々に狙いよ」

「でも、カノヌシへの対抗策はまだ・・・」

ライファイセットが言いかけた時アイゼンがベルベットに近づく腕を組む

「特攻には付き合わんと言ったはずだ」

「付き合ってくれなんて頼んでない」

ベルベットとアイゼンがにらみ合う、険悪な雰囲気は漂い始めるがそこにケントと一緒にパーシバルがやって来た

「私を利用してくれ」

「王子・・・!」

ベルベット達もまさかパーシバルが残っていたとは思わなかったように驚いている

「安心してくれ。グリフォンは逃がしたよ。私を人質にすれば、船を

奪うことくらいはできるだろう」

「・・・あんたには貸しがある。感謝なんてしないわよ」

「結構だ」

「この目に継るしかなさそうじゃの」

「ちっ・・・」

マガルウの言う通り現状最も有効な手はパーシバルを盾にしての脱出しか残っていない。アイゼンは舌打ちをするしかなかった

表の港へ向かうために移動中ライファイセットは前を歩くベルベットの後ろ姿を見ながら呟く

「・・・大丈夫なのかな・・・」

「人質策戦が・・・ではないの？」

「うん。それもだけど・・・ベルベット、全然普通じゃないよ」

「元々普通じゃないかのー」

「マガルウ！」

ライファイセットはそれが侮辱に聞こえたのかマガルウを咎める

「儂に怒っても、状況は変わらんぞ。今のあやつは殺気は、まるで氷じゃ。同時に手負いの獣のように余裕を失くしておる。はたしてあんな状態で、無事に脱出できるかどうか・・・」

「ベルベットは、ずっと切り抜けてきたよ・・・今度だつて・・・」

大丈夫と言いたいのだろうがマガルウが口を挟む

「・・・じゃといいがの。しかし、どんなものにも限界はある、絶対におれぬ刀がないように、絶対に壊れん心もない。『いざという時』にどうするか・・・今の内に算段しておいた方がいいぞよ」

「いざという時・・・」

いざという時はすぐそこに迫っていた

その頃バンエルティア号はタイタニアを離れ沖を航行していた

「ふう・・・追手は振り切れたようだな」

ダイヤルが後方を見ながら大きく息を吐く。あらゆる造船技術の結晶であるバンエルティア号に追いつける船はそうそういない

「バンエルティア号なら当然さ」

ベンウィック達の後ろで古文書解読の続きをしていたグリモワールは突然目を見開き声を上げる

「まさかそんな！なんてこと！」

何事かと思いダイルたちがそちらを向くとグリモワールがベンウィックとダイルに指示を飛ばす

「船を戻して！」

「はあ!?無理に決まってるだろ！」

ダイルの言う通り視界では見えなくとも聖寮の船が未だに追跡している可能性もあるし船を戻すのは危険がありすぎる

「古文書が最後まで解読できたのよ！事実なら、カノヌシは、もう——」

ベルベット達は表の港の出入り口である広間へとたどり着く。幸いそこには聖寮の姿はなくフリーの状態だった

「誰もいない！」

「しめた！このまま港へ抜けるぞ！」

「・・・」

この機に乗じて広間を駆け抜けようとした時背後から声が響いた
「逃げるのか？」

ベルベット達が振り返ると二回の踊り場奥、術の類で転移したのか姿を隠していたのかわからないが自分たちが通ってきたところから現れた、少なくともベルベット達の行動は筒抜けだった可能性が高い

「アルトリウス様だけじゃなく・・・！」

エレノアが驚くのも無理はない、踊り場から飛び降りたのは同じ特等のシグレだったのだから。ロクロウは征嵐を抜き放つ

「シグレエツ!!」

ロクロウが走りだしベルベットもアルトリウスに向かおうとした時、それをライファイセットが手を握って止める

「ダメだよ！」

「そうだ。ここは彼らと交渉して逃走を・・・」

パールも自分を使い脱出するという計画を勧めるがそれをアルトリウスが遮る

「殿下はお下がりを。その者の目的は、私を殺すことなのです」

「その通りよっ!!」

ベルベツトはライファイセットの手を振り払い走り出す。ライファイセットが追いかけてようとするがそれをアイゼンが止める

「退くぞ。これは罠だ!」

「放して、尚更助けなきや!」

「そうはいかん。俺にとつても、お前は切り札だ」

ライファイセットがアイゼンに手を乱暴に振り払う

「僕はモノじゃない!!」

アイゼンの腹部にパンチを叩き込む（U）

「邪魔するなら、アイゼンだって倒して行く!」

「・・・」

その覚悟にアイゼンは何も言えずエレノアは走っていくライファイセットに付いて行く。アイゼンは僅かに顔を顰めたが放っておく理由にもいかずエレノアに続く。それをマギルウとケンが続く、征嵐と真打號嵐が鏢迫り合う横でベルベツトが業魔手で護衛の対魔士を一撃で切り裂く

「・・・神依じゃ、あたしを止められないわよ」

「問題ない。切り札は別にある」

見下ろすアルトリウスが淡々と言い放つ。切り結んでいたロクロウとシグレは一旦距離を取る

「その太刀、金剛鉄か!? すごいえじゃねえか! 初めて見た!」

ズバリの中させたシグレにロクロウは隠すことなく応える

「応! 最硬の太刀だ!」

「素材はそうだな。だがよ・・・」

シグレが號嵐を振り上げ剣気を発する、そこから発せられる風圧でベルベツト達の動きが止まる。だがロクロウはそれに屈することなく斬りかかる。しかしその傍で光が集まり徐々に人の形を形成し始める

「時間だ。下がれ、シグレ」

アルトリウスが斬り合うシグレに命令するがそれを拒否する

「野暮言うな。興が乗ってきたとこだ」

「巻き込まれれば、お前でもただでは済まんぞ。ベルベットの相手は、カノ又シがする」

アルトリウスの言葉に皆が驚愕する。シグレはつまらなそうにしていたがアルトリウスの指示に従い退く。ライファイセットはベルベットの前に立ち庇う様に両手を広げる。一度強烈な光が辺りを照らしそれが治まる、ベルベットは光の正体を目にしたとき、目を見開き言葉にならない声を上げる

「なっ!!?」

ベルベットの目の前には見間違うことがない、弟のライファイセットがいた。その姿は神々しくも冷たさと虚無感があった。ライファイセットが目を開く

「久しぶりだね、お姉ちゃん」

く

第41話 終わり

第42話

「ラファイ・・・!!」

ベルベツトは目の前にいる実の弟に上ずった声を上げる

「ベルベツトの弟?!」

「こう来たか」

エレノアはまさかカノヌシがベルベツトの弟であることに驚愕し、対してマギルウは聖寮のえげつなきに呟く

「そう、僕はライファイセット・クラウ。そして、鎮めの聖主カノヌシ」
「嘘・・・なんでカノヌシが・・・」

ベルベツト達の見立てでは喰魔を地脈点から引き離し、穢れを送れないようにすればカノヌシは復活しないはず。だが現にカノヌシは目の前にいるそこへ風の槍がベルベツトの横を通りカノヌシに向かつて飛んで行く。だがカノヌシは防御をするわけでもなく驚くわけでもなく直撃する寸前で槍が止められ消滅する

「やるなら覚悟を決めろ！こいつは敵だ！」

風の槍を飛ばしたアイゼンがベルベツトを叱咤する。それに反応しベルベツトはカノヌシを睨みつける

「・・・わかってる！こんなの・・・前と同じ幻覚よ！全部喰らってやる!!」

これもアバルで見せられた幻術だ、この弟の姿もアルトリウスが動揺を誘うために聖隷が化けた偽物だ、そう思わないともう保てないから。ベルベツトは偽物を喰らうべく走り業魔手を振り上げる

「うあああぁっ!!!」

叫びとも悲鳴とも取れる声を上げ顔面向けて業魔手を叩きつける、だがそれはカノヌシの障壁に阻まれる

「お姉ちゃん、そうやって今まで無理してきたんだね」

「黙れ！ラファイの声で!!」

刺突刃を突き立てるもそれも通らない

「しゃべるなぁぁっ!!!」

がむしやらに業魔手を振るい、刺突刃で斬りかかるがそれがカノヌシに届くことはない

「もういいんだよ、苦しみも痛みも・・・」

カノヌシが手を翳す

「僕が終わらせるから」

その手からライファイセットが使うのと同じ二色の光弾が放たれる、ベルベツトはそれを刺突刃で弾き返そうとしたが刃と接触した瞬間ベルベツトの体が後方に飛ばされ地面を跳ねる

「ガッ・・・!!ハッ!!」

「ベルベツト!!」

ライファイセットがベルベツトに駆け寄る、その横をロクロウが走り抜ける

「聖主だろうがなんだろうが斬り捨てる!!」

上段に構えた征嵐を振り下ろす。カノヌシは手元から紙葉で作った細剣でロクロウの征嵐を受け止める

「ぬおおおっ!!」

体重と力を掛けるがビクともしない。アイゼンとエレノアが横に回り込む

「ロクロウの打ち込みが通じないとはな・・・!」

「こんなの勝てるの・・・!?!」

カノヌシが横目で二人を見据え細剣に力を入れロクロウを押し飛ばす

「うおおっ!!」

「・・・!!幻影よ交わり滅して裂けろ!ビジュゲイト!」

「貫け緑碧!霊槍・空旋!」

複数の風の刃と竜巻がカノヌシに迫るが紙葉を召喚し両手を真横に向け二人の方へ向ける

「うっとおしいよ」

紙葉から術を発動し大型の竜巻が繰り出される。アイゼンの風の刃がかき消されエレノアの術もそれに飲み込まれる

「ぐあああっ!!」

「きゃあああああつ!!」

二人は風に飲まれそのまま後ろの壁に激突する

「これは不味い、大いに不味いの!! エクスプロード!!」

マギルウが術を発動しカノヌシの足元から爆発を起こす。爆発に巻き込まれるカノヌシにさらに追い打ちをかける

「まだじゃ!! ブレイズスウォーム!」

爆発に続き炎の奔流がカノヌシを呑み込む。やがて晴れるもそこには傷一つついていないカノヌシが蔑む様にマギルウを睨む

「く・・・ちよつとは苦しそうな顔してもよかろうに・・・」

「目障り」

カノヌシが細剣をマギルウに向かって投げる。軽く投げたとは思えない速さで彼女の眼前に迫る

「トアアツ!!」

その横からケンが走りながらウルトラショットで細剣を相殺しマギルウの前に立つ

「ああ、君が例の・・・丁度いいや。始末するつもりだったから」

カノヌシは空中に浮き術を発動し始める

「ゲホッ・・・!! いかん!! 止めろ!」

壁に叩きつけられ膝を着き咳き込むアイゼンが叫ぶ

「白黒混ざれ! シェイドブライト!」

「応!! 四の型・疾空!!」

ライファイセットの術とロクロウが印を切り鎌鼬でカノヌシを妨害する。だが

「全てを鎮める」

カノヌシが既に術を発動させていた

「ジェノサイドレイ」

黄金色の光線がカノヌシの周りから何本も繰り出される。二人の術と技がかき消され光線が周りを手当たり次第に巻き込んでいく。攻撃が止んだ頃、立っている者はいなかった

「はあ・・・はあ・・・」

ベルベツトは息を切らしながら上半身を何とか起こそうと両手を

着く

「この力・・・本物の聖主・・・なのか」

アイゼンが壁に手を着き吐き出す様に眩く

「そう、この方が鎮めの聖主、カノヌシ様だ」

重要人物なので巻き込まれないよう加減されたパーシバルが肯定する

「でも、なぜ・・・？力は削ったはず・・・」

柄を地面に突き立て何とか立ち上がるエレノア。その疑問にシグレが種明かしをする

「喰魔を攫った事か？残念だが、ちよいと遅かったな。カノヌシ覚醒に必要なのは、喰魔が喰らった穢れの『量』じゃねえんだよ」

「八つの『質』だ」

アルトリウスがシグレに続く

「貪婪、傲慢、愛欲、逃避、利己、執着・・・お前たちが喰魔を引きはがす前に、既にその内六つは得ていた。後は、ベルベットの中にある『残る二つ』を得ればカノヌシは完全覚醒する」

「地脈を通して吸い取るまでもないね」

カノヌシがベルベットに近づき手を伸ばす

「直接喰べちゃおう」

「うう・・・」

ライファイセツトがベルベットに手を下そうとするのを止めようとするが自身もダメージを受け思う様に動けない

「させるかよっ！」

ロクロウが征嵐を構えて走り出す。カノヌシが新しく細剣を作り出し征嵐を振り下ろすロクロウの刃がかち合った瞬間金属特有の高い音とともに征嵐が中ほどから折れ飛ぶ

「なっ!?ぐあっ!!」

征嵐が折れたのに動揺したロクロウの胴を突き飛ばす

「邪魔しないでよ。弱いくせに」

蔑むようにロクロウを見るカノヌシに黒い影が迫る

「ううっ!!」

黒い影の正体はベルベットで、彼女の刺突刃がカノヌシの腹部を貫き、ふらつきながら離れる

「・・・痛い」

カノヌシは光が漏れる自らの傷を見ながら呟く

「・・・全部幻だ」

ベルベットは自らに言い聞かせる様に呟く。幻と決めつけなないと自分が保てない程に追い詰められている

「痛いよ、お姉ちゃん」

「五月蠅い、黙れっ!!」

姉と呼ばれそれを否定するように吠えるベルベットにカノヌシが追い詰める

「お姉ちゃんは僕を殺すの?」

その一言でベルベットが限界に達した

「う・・・うああっ!!消えろッ!消えろッ!消えろッ!!」

頭を抑えがむしやらに刺突刃でカノヌシを切り裂き再び貫く

「・・・僕は、ずっと苦しかったんだ」

「あ・・・あああ」

体が弱いせいで迷惑ばかりかけて・・・やっぱりお姉ちゃんは・・・」

ベルベットは自分の手に付いたカノヌシの血を見る

「僕が消えた方がいいって思ってた?」

「ああ・・・あああ・・・」

その言葉にベルベットは涙を流しカノヌシを抱きしめる。もう折れてしまった

「そんなはずない・・・生きて欲しかった。傍にいて欲しかった・・・なのに、あんなことになって・・・仇を討たなきゃって・・・あんなの為に、あたしは・・・喰らって・・・殺して・・・」

「よかった」

どういう意味のよかったなのか、ベルベットは構わず続ける

「ごめん・・・ごめんね、ラファイ・・・!痛かったよね・・・ファイ!

この子の傷を治してっ!!」

「でも、そいつは・・・」

ライフイセットは敵であるカノヌシを警戒するがベルベットが叫ぶ

「ライフイセットよ!!あたしの・・・弟だよっ!!」

ライフイセットが驚愕する中、カノヌシが口を開く

「・・・でもね、僕は仇討ちなんて望んでないんだ。だって、そういうエゴこそが穢れを——業魔を生む元凶なんだから」

「え・・・!?!」

弟の為の仇討ちを弟に否定され驚愕するベルベット

「だから、僕はアーサー義兄さんを手伝って鎮めるんだ。この世界の“痛み”を」

目を見開くベルベットに最後の追い討ちを、カノヌシが掛ける

「お姉ちゃんみたいなの “醜い穢れ” をね」

「醜い・・・穢れ・・・」

「覚醒したカノヌシは、全ての業を鎮め、人の穢れを生まぬ存在に変えてくれる」

アルトリウスが目的を明かす

「業を喰らわれたら、俺は俺じゃなくなっちゃうんだが?」

「それをやるってことなんだろう。聖隷の意志を奪ったように」

「だが、痛みのない穏やかな世界が訪れる」

アルトリウスのいう穏やかな世界、少なくとも人にとってよい世界でないことは容易に想像がつく

「人の意志を消すことが、貴方の目的だったのですか!」

「対魔士であるお前も、感情のままに我らを裏切った。こうするしかないのだ」

「・・・」

正論を突きつけられ、エレノアは何も言い返すことができず顔を伏せてしまう

「業魔のいない優しい世界を創る・・・それが僕の夢なんだ。安心して、この傷だってすぐ治るんだ。お姉ちゃんを喰べればね・・・」

カノヌシがそう言った瞬間、床から紋章のようなものが現れそれが広がる。その床が黒く染まりベルベット達の足が黒い地面に?まれ

始める

「うああっ!?!」

「これは!?!」

「いかん、喰われるぞ!!」

徐々に吞まれる中、ベルベットが這いつくばり、カノヌシに付かづく

「待ってよ……あたしは、ずっとあんたのためにとって……なのに……
こんなのって……」

カノヌシはベルベットを見降ろす

「ありがとう。だからこそ、ちゃんと償わないとね。ずっと無意味に、
みんなを傷つけてきたんだから」

「そんな……ラファイ……」

全てを否定され、絶望し、弟に手を伸ばすベルベット。ライファイ
セットがそれに気づき両手を合わせる

「ベルベット!!」

ライファイセットが結界を張った瞬間、周囲から牙が現れ呑み込もう
迫るが結界がそれを防ぐ、だが呑み込まれるのは防ぐことができず地
面に吸い込まれていった。紋章が消えた後、そこにベルベット達の姿
はない

「……邪魔が入ったな」

「けど、地脈には取り込んだ。追いかけるよ」

カノヌシはそれだけ言うとうらも地面に穴を開けそこから降りて
行った。ベルベットにつけられた傷はない

「ただ硬えだけじゃダメなんだよなあ。それじゃ、弾みでボツキリ折
れる」

シグレは鞆に納めた號嵐を担ぎながらアルトリウスに含みを持つ
た言葉で煽る

「……私に言っているなら、試してみるか?」

「いいや、待ってやるよ。お前とカノヌシの神依が完成するまでな」

「導師アルトリウス、貴方という人は……」

一人取り残されたパージバルはアルトリウスを恐れながらも睨み

つける

「全ては計画通りです。王都へ戻りましょう、殿下」

そこは摩訶不思議な空間だった、下には雲の海、上はダークブルーの空が広がり無数の巨岩が浮島のように浮かびそれを石の橋と階段がお互いに繋がっている。その浮島の一つ、その上から地脈の裂け目が現れ、そこから二つの影が飛び出す

「ふー」

「なにが起こったんでフカー?」

「地脈に喰われたんじゃよ」

二つの影の正体はマギルウとビエンフーだった

「前にも同じことがあったでフよね?」

「前とは違う。どうやら覚醒したカノヌシは“大地”を“器”にしておる。今や地脈は、あやつの体そのもの。儂は、地脈の裂け目を咄嗟に感じたおかげで逃げられただけじゃ」

マギルウの言う通り、地脈はカノヌシの手足同然、一度?まれば抜け出すべはほぼないだろう、それを考えるとマギルウは幸運だったようだ

「じゃあ、ベルベット達は・・・」

「・・・賭けは儂の勝ち、そういうことかの」

勝ったという割にはどこか儂く、納得いかない表情のマギルウの背後から声が響いた

「その通りだ。才能だけは申し分ないのだがな」

マギルウがそちらを向くと、メルキオルが一号を引き連れこちらに向かって歩いて来た

「ほほう・・・お主がおるといふことはここは重要な場所のようじゃの?」

「退け。地脈の綻びを閉じねばならん」

それを聞いたマギルウが地脈の裂け目の前に立ち障壁を張る

「ビエンフー、裂け目を守れ!裏切りの件は、それでチャラにしてやる。じゃが、逃げたら百代呪うぞ!」

「ビエ〜！了解でフ〜!!」

マギルウの脅しにビエンフーが即答し裂け目に靈力を送り始める
「どうやら賭けに勝ったようでのう。閉じられては賞金が回収できないのじゃ」

メルキオルは両手を重ね紫色の水晶を取り出す。マギルウはメルキオルが何をするかわかっているようだ

「儂に幻覚は効かんど。壊れた心は壊せまい？」

「・・・あの時は、お前の心が割れた時点で術を止めた。師弟の情けでな」

メルキオルの言葉で不敵に笑っていたマギルウが何かに気づき目を開く

「だが、今度は容赦せん。心が砂と化すまで完全に磨り潰す」

メルキオルが術を発動させそれをマギルウに向ける。それと同時にマギルウが苦しく呻きだす

「うぐっ!!?ぐっうっう・・・!!ぐあああ〜っ!!!」

「うう・・・」

今まで気を失っていたライフイセットが目を覚ます

「よかった、気がつきましたね。どうやら地脈に取り込まれたようです」

エレノアが見ていてくれたようで安心している。エレノアの言う通り此処は以前迷い込んだ地脈そのものだ

「エレノアは大丈夫？みんなは？」

「・・・私は、でも——」

エレノアが視線を動かす。ライフイセットもそれに続いて後ろを向くとベルベットが立っていた。だがそこに彼女は動くこともなく呆然と立ちブツブツと何かを呟いている

「殺す・・・殺す・・・あんなに・・・殺したのに・・・だってあの子が・・・あの子の為に・・・なのに醜い・・・あたし・・・無意味に・・・よくも・・・殺さなきや・・・死ぬ・・・死ぬ・・・」

弟の為に押し殺してきた罪の意識を、その弟に全否定され、今に

も決壊しそうだ

「・・・」

「ずっとあんななんです」

エレノアの声に気付いたベルベットがこちらに顔を向ける

「起きたのね、行くわよ。地脈を出て奴らを殺す」

「でもカノヌシはベルベットの・・・」

「幻覚だつて言ってるでしょっ!!じゃなきや偽物!毘よっ!」

ライファイセットがいいかけたのを遮り叫ぶ。だがその直後、それは逆に冷めたように呟く

「・・・うん、本物だつたらどうだつていうの?あの子があたしを裏切つたつてことでしょ。そんな奴を殺せないと思うの?なぜ?どうして?」

ライファイセットに問い詰めながら詰め寄り掴みかかる

「あたしがどれだけ殺したか・・・散々見たあんたが」

「ごめん・・・なきい・・・」

「ベルベット!」

エレノアがベルベットを引きはがそうと肩を掴んだ時。地面から光る球体が現れる。その球体が光を放つた時、声が響いた

起きて、ライファイ。朝だよ

もく、ライファイって呼ぶのやめてつてば。子供っぽい・・・

いきなり文句とは、調子いいかな?

恐らく過去の出来事だろう。ベルベットがライファイと呼ばれて嫌がる弟の額を自らの額に当てる、ライファイセットはその姿に驚く

「カノヌシ!」

「・・・違うようです。これは・・・過去の幻?」

「うああああッ!!!」

突然ベルベットが叫び業魔手で球体を切り裂く

「!!」

「ほら、殺せた!当たり前でしょ、慣れたものよ。さあ、ここから出るわよ。あんたの力で」

「けど・・・」

「早く!!」

ライフィセットが言いかけたのを割り込みまくし立てる

「アイゼン達を捜さないと・・・」

ベルベットがライフィセットの頭を掴む

「早くって言うてるの」

「うぐうっ・・・!」

ライフィセットが痛みを耐えながら術を発動させるが焦りか痛みで術が不発に終わる

「いい加減にしなさい!」

ベルベットのあまりの行動にエレノアがベルベットの頬を叩く、乾いた音が周囲に響き渡る。ベルベットはエレノアの胸倉を掴む

「いい加減にするのはあいつらだっ!!だってそうでしょ!?!殺してやるッ・・・絶対に・・・ッ!!」

「落ち着いてください!!」

エレノアが肩を掴み必死に説得する。ベルベットはエレノアの言うことを聞いたのかはわからないが手を放す

「・・・落ち着いて出口を探すわ。それでいいんでしょ」

いきなり激昂し、いきなり冷静になる。感情の起伏が激しくなる、精神が脆くなっている鬱状態とよく似ている。ベルベットがまさにそれだ。先に進むベルベットから櫛が落ちる。だがそれさえも気づかないライフィセットがそれを拾いエレノアと目を合わせベルベットに付いて行った

地脈の出口を探し、奥に進んでいくとまた球体が現れる。まるで見計らったように。光を放ち今度は森の中の光景が見える

「これは・・・!?!」

「見て!」

ライフィセットが木に寄りかかって座り込むアルトリウスに気付く。そこに一人の女性が歩いて来た

「!!」

女性はアルトリウスに気づき走り寄る

「もし！しっかりとってくださーい！直ぐ人を呼んで——」

「いいのです・・・もう、疲れた・・・」

アルトリウスが憔悴した表情で女性の申し出を断る

「・・・旅を・・・してこられたのですか？」

「十年・・・師に後を託されたのに、何も成せなかった・・・」

「十年も・・・」

「なんて弱い翼・・・だから・・・もう・・・いいんだ・・・」

自身の未熟さ打ちひしがれ。生きる気力もなくなったアルトリウスが顔を伏せる

「・・・そうですね。そんなに働いたなら少し休まないと。丁度、ウリボアの肉が手に入ったんです。夕食はお鍋なんですけど、ご一緒如何ですか？」

手を合わせ夕食の誘いをする女性にアルトリウスは全く予想していない展開に驚く

「は・・・？いや、私は・・・」

断ろうとした瞬間腹が鳴る、肉体は正直なようだ。セリカはそれに微笑みながら手に持っていたバスケットから林檎を取り出す

「今は林檎しかありませんが、どうぞ」

アルトリウスはそれに顔を背ける

「お腹がいっぱいになれば、きつと立ち上がる元気が出ますわ。貴方の体は『生きるぞ！』って言ってるんですもの」

アルトリウスの手を取り林檎を持たせる

「恥知らずな・・・生きる資格もないのに・・・」

「資格がいるんですか？ただ生きること」

「それは・・・」

理由を聞かれ口籠るアルトリウス

「自然なことですよ。お腹が空くのも、辛くて泣くことも。だって、私たちは生きてるんだから」

立ち上がる女性にアルトリウスが顔を上げる

「・・・生きている・・・」

「お名前は？私はセリカ・クラウドと申します」

手を差し出すセリカにアルトリウスが手を取り立ち上がる

「私は、対魔士アルト・・・いや、アーサー。アーサーです」

アルトリウスではなくアーサーと名乗ったのはこれが初めてだったのだろう

「アルトリウスッ!!」

ベルベットが業魔手で球体を握りつぶす。肩で息をしている後ろで声が響く

「なんなんだ、今のは?」

ライファイセットがそちらを向くとロクロウ達が歩いて来た

「ロクロウ、アイゼン、ケン!」

「貴方たちにも見えたのですね?」

「応、アルトリウスがアーサーと呼ばれてた」

「『大地の記憶』というやつだろう。地脈には、地上で起こった出来事が写し絵のように記憶されていると聞いた」

「要するに昔の幻ってワケか」

ロクロウの言葉にベルベットが口を挟む

「・・・幻じゃない。あれはあたしの姉さんよ。セリカ姉さんも騙されたのよ・・・ね?そうか、だからあたしを監獄から出して・・・」

ボソボソとうわ言を呟きながら歩いていく

「ロクロウ、怪我は大丈夫なのですか?」

「ああ、打たれ強いのが取り柄でな、俺よりも、ベルベットは大丈夫なのか?」

「・・・」

ロクロウはベルベットの後ろから付いて行きながら様子を伺う

「平気なワケがありません。カノヌシの正体が、あんな・・・」

「・・・只硬いだけじゃ、不測の力を受けたら割れちまうってことか・・・
本当の『強さ』を見誤っていたのかもな。アイツも俺も」

「他人の心配をしている場合でもないがな。ここは、完全にカノヌシの領域に覆われている。奴の体内とっていいだろう」

「うん。だから僕力じゃ出られない・・・」

先ほどライファイセットの術が霧散したのはそのせいだろう

「用心しろ。大地の記憶も奴が再生しているのかもしれない。奴らの狙いはベルベットだからな」

「ベルベットの中にある『二つの穢れ』」

「そうだ。それを逆手にとれば脱出の機が掴めるかもしれない」

アイゼンの口ぶりからライフイセットが察し食いかかる

「ベルベットを利用するっていうの!?!」

「必要ならな」

あくまでもブレないアイゼンにライフイセットが睨む

「なんにせよ進もうぜ。止まっても罅が開かん。マギルウも捜してやらんと可哀想だしな」

、

「なあ、アイゼン。さっき言ってた『大地の記憶』ってのはなんなんだ?」

ロクロウは先ほどアイゼンが漏らした大地の記憶について質問する

「前にも話したが、地脈は大地を流れる自然の力だ。風が吹き、水が流れ、鳥が羽ばたき、草花が咲く。それら自然の営みは、地脈にも伝わり痕跡を残す。痕跡は、人の記憶の様に大地に刻まれ、地脈の中に留まり続けている」

「それが大地の記憶か」

「人間や聖隷の行動も・・・?」

「大地の上で起こる全ての事象を自然と呼ぶ。当然、人間も聖隷も、業魔すらも自然の一部だ」

「では、今こうして、私達が話していることも、大地の記憶に刻まれているのですか?」

「俺が人知れず行った悪事も、お前が漏らした悪口も、大地に見られている、そういうことだ」

エレノアの質問にアイゼンが応える

「私は悪口なんて・・・!?!」

「只の例え話だ、動揺するな」

エレノアの性格から考えて他人の悪口なんて考えにくいのはアイ

ゼンだつてわかっている

「カノヌシは、大地の記憶からベルベットに関係するものを呼び出して、見せてるつてこと?」

「恐ろくな、だから、別の場所にいたロクロウとケンも俺も、同じ物を見たんだろう。大地を器とするカノヌシならではの芸当だ」

それが本当なら自分は安全なところからベルベットの精神を砕いていく。趣味が悪く、えげつないが有効な手段であることは確かだ

「聖主なんて名乗ってる癖に悪趣味な野郎だな」

「だが、今のベルベットには効果的な攻撃だ。地脈を脱出するまで、アイツから目を離すなよ」

「う、うん・・・」

ライファイセツトの視線の先に無表情で歩いているベルベット。まるで人形のようなだ

(・・・カノヌシに見られているということは、自分とルシフェルさんの事も、師匠の事も把握されている可能性は高い、自分の技や技術も・・・まだ見せていないモノがあるのが救いだ・・・)

皆から一歩後ろで歩いているケンが心の中でそう考えていた。自らの事情が発覚するのがすぐそこまで近づいているのを感じながら

第42話 終わり

第43話

あれからしばらく出口を探しながら奥へと進む、警戒しながら移動する一行の前に球体が現れ辺りが光に包まれる

お帰りなさい、アーサー

ただいま、セリカ。家の周りの柵を補強しておいたよ

光の中見えたのはベルベットの自宅、玄関から入ったアーサーが屋根裏にいるセリカに仕事の報告をしている場面だった

ありがとう、アーサー。最近、野盗の被害が酷いって村長さん達が心配していたけど、これで安心ね

セリカがそれを聞き安心したようでセリカの方も仕事を終えたのだろう梯子を下り始める。その様子を見ていたアーサーが顔を伏せ
咳く

・・・いや、もし野党が業魔化していたら、この程度では・・・

梯子を下りたセリカがブツブツ言っているアーサーに近づく。彼女には何を言っているのか聞こえていないようだ

え？

なに、心配いらないよ。大工仕事には自信があるんだ、ベルベット達は？

アーサーははぐらかし、話題を変える。ベルベットとラファイがいないのでセリカに聞いてみる

多分また岬よ。危ないって何回言っても聞かないんだから

ライファイセットがせがんだんだろう。大丈夫、ベルベットはしっかりした子だ

・・・そうね。この子も、あの子みたいに強く育ってくれればいいんだけど

セリカはそういい自らの腹部を撫でる

え・・・？

・・・喜んでくれる？

その言葉の意味、アーサーはセリカに近づき抱きしめる

決まってるだろう！ああ、世界にこんな幸せがあるなんて!!

アーサーはセリカの中にある新しい命に、自身が父親になった喜びを噛み締める。だがセリカから離れるとどこか浮かない表情をした。しかし、参ったな。こんなことなら、もっと高価な物を用意するべきだった

アーサーは懐からある物を取り出す、羽が重なった飾りのペンダントだった。それをセリカに差し出す

貴方が作ってくれたのね？

君の為に、心を込めて

一生大切にするわ。今日の幸せの記念に

ペンダントを持ったアルトリウスの手に自分の手を重ねる

俺は、約束の証にしよう。誓うよ。命に代えても「君たち」を守ると

次の瞬間ベルベットがそれも業魔手で切り裂く

「アルトリウス様の過去……」

「くく……あははっ！」

エレノアが呟いた時ベルベットが高笑う

「笑えるわね、あんな言葉を信じちゃって！……全部嘘なのに。笑顔も、誓いも、なにもかも」

突然冷めた声で呟きそのまま歩きはじめる。それを遠くから唸り声を出しながら監視する者がいると知らずに

それからしばらく進むベルベット達、道中襲い来る業魔を退けながら道を切り開いていく。その目の前で狙ったかのように大地の記憶が地面から現れ、光を放った。必死に否定するベルベットを嘲笑うかのように、その景色はカノヌシの祠、アバルでの出来事が映し出されていた。違うことは赤い月が輝きその下で業魔で溢れていた

「緋の夜!ここはベルベットの村の……」

エレノアが驚愕する中、セリカが獣の業魔に祠の大穴の淵に追い詰められている場面が映し出される。その反対側でアーサーが長刀で業魔を斬り伏せながらセリカの元へ向かったいた

くそっ！業魔化した野盗がこんなに！

アーサーに気付いた業魔が飛び掛かるがそれを躊躇なく斬り割く
セリカツ！今助ける！！

無理よ！ベルベット達と逃げてっ！

馬鹿を言うな！！

首を掻き切り、胸を刺し貫き蹴り飛ばしセリカを襲おうとした業魔
を両断しセリカの元へたどり着く

俺は生きたいんだ！君と俺達の子と一緒に！

庇う様に前に立ちセリカの方へ一瞬顔を向けた時、一体の業魔が飛
び掛かりアーサーの長刀を弾き飛ばす

しまっ！！

業魔の爪が迫る、その時セリカがアーサーを突き飛ばし爪が当たる
ことはなかった。が、代わりにセリカに当たり穴へ飛ばされる

アーサーッ！

セリカアアッ！！

アーサーが必死に手を伸ばすもそれが届くことはなくセリカは暗
い穴の底へ消えていった。アーサーの手を伸ばす先にセリカが大き
な口に飲み込まれた

ああ・・・あああ！！

アーサーは悲壮の声を上げながらやり場のない怒りに己の右拳を
地面に何度も打ちつけた

く

はあ・・・はあっ・・・！

それから全ての業魔を殺戮したであろうアーサーは左手に長刀を
握り締め祠の大穴の前へ歩みよる。右手は血に塗れ、皮は破け骨が折
れている。まるで自らの無力さと罪を表すように。大穴の淵に何か
を見つけ。両膝を力なくつき長刀が滑り落ちる。そこにはアーサー
がセリカに送ったペンダントがあった、それを拾い上げる

なぜ・・・こんな・・・！なぜ俺はっ！たった二人の家族すら守れ
ないっ！！

アーサーが空に向かって叫ぶ己の無力さと情けなさに、だがその時

背後から声が聞こえた

よくわかつていよう、アルトリウス。人が弱く、罪深いからだ
アーサーは振り向かずともその声の主が誰かわかっていた
メルキオル!?

この村が、お前たち一家を業魔化した野盗共に差し出したのだ
アーサーがその言葉にメルキオルへ振り向く

自分達を見逃す代償としてな

嘘だ・・・そんな・・・

アーサーは赤く染まった月を見る

よくあることだ。人間が背負った業の “理” は変えられん。だ
が・・・

メルキオルが言いかけた瞬間祠の大穴から巨大な光の柱が出現し
た

“理” を調える手段は見つかった

領域・・・!?なんだ、この巨大な力は!?まさか・・・こんな所に探
し求めていた聖主が!

アーサーがそう理解した瞬間二人の横に二人の聖隷が現れる。彼
がその姿を見た時驚愕する

こ、この聖隷は・・・

転生したか。姿は同じでも別の存在だ

彼の目の前にはまさしくセリカ、シアリーズがいた。姿は違えどそ
の顔はまさしく彼女そのものだ。だがそれはセリカ本人ではない、そ
の隣にいる聖隷は紛れもないライフィセット。なぜここにいるのか
理由は語らずとも明らかだった。無慈悲な運命にアーサーはペンダ
ントを顔を伏せ握り締める

なぜだ・・・なぜこんな残酷な縁が・・・

そんなアーサーに声を掛けるわけでもなくメルキオルはカノヌシ
の祠と月を見る

どうやらカノヌシの復活は不完全のようだ。その原因を明らかに
し、聖主を導かねばなるまい。この聖隷共はもらっていくぞ

メルキオルはアーサーには一瞥もくれず聖隷を手駒にすべく横を

通ろうとする

・・・待てえ!

それをアーサーが叫び止める。彼は立ち上がりシアリーズへペンダントを差し出す

・・・約束を守れなくてごめんよ

何も反応しないシアリーズに向けていた手を下ろす

償いはする。今から俺は、俺を捨てる

苦悶の表情で伏せていた顔を上げアーサーがシアリーズに告げる

名も無き聖隷よ。契約を交わしてもらおうぞ。私は、世界の痛みを止めなければならぬのだ

できるのか? 我が友の理想を投げ捨てて逃げた貴様に

亡き師と妻子の魂にかけて、今度こそ成し遂げる。我が名はアルトリウス・コールブランド、先代筆頭対魔士クロードイン・アスガードの意志と力を継ぐ者だ

アーサー、アルトリウスは左手をシアリーズとライフィセットの前に翳す

・・・よかろう。今宵の悲劇を、救世の宿縁に変えてみせろ

く

「今の聖隷って!」

「・・・僕?」

「覚えていないですか?」

「全然・・・」

エレノアがライフィセットに聞き出すが本人は身に覚えがないようだ

「聖隷に転生したって言ってたぞ。つまり・・・どういうことだ?」

「死んだ人間の魂が、なんらかの切っ掛けで聖隷に生まれ変わることを「転生」という」

ロクロウはあの場面でライフィセットがいた疑問にアイゼンが答える

「ライフィセットは、アルトリウスの子供が転生して生まれたっていうのか?」

「さっきの記憶が本物なら、な」

「・・・」

「・・・」

ベルベットとライファイセツトは言葉を発さない

「じゃあ、一緒に生まれた女性の聖隷は・・・」

「あたしの姉の転生ってことね。もうとっくに喰らったけど」

「し・・・知らなかったからでしょう?」

「・・・知ってたわ。あたしはシアリーズの正体に気づいてた」

「ベルベット・・・」

「けど関係ない。だったら何?」

ベルベットは表情一つ変えることなく、平然と答える

「目的の為ならなんだって喰らう。姉さんだって、弟だって、世界だって・・・それが・・・“あたし”なのよ」

ベルベットはそのまま歩きはじめ

「ケン、お前は知ってたのか?」

ロクロウはシアリーズと同行していたケンに質問する

「・・・あの時タイタニアから脱出する時に」

「止めなかったの?」

「シアリーズさんの選んだ選択であり、あの時自分はやかく言える立場ではありませんでした。あの人の犠牲があつたからこそここま
で来れたのも事実です」

「・・・」

エレノアはケンの答えになにも言えなかった

「アイゼン。死んだ人間の魂が“何らかの切っ掛け”で聖隷に転生するって言ったよな?その切っ掛けは簡単に起こるようなものなのか?」

「・・・わからん、としか言えん、人が転生した事実はあるが、その原理は解明されていない。霊応力の高い人間が、転生しやすい傾向はあるが、生まれ変わりの方法が確立しているわけじゃない」

「ふむ・・・つまりは、そう簡単に起こるものでも、起こせるものでもないってことだよな。普通なら」

「でも、ベルベットののお姉さんは、シアリーズに、お腹の子供はライファイセットに転生した。どうしたらこんな偶然が起こるのです……？」

ロクロウとエレノアの言う通り生まれ変わる可能性があるのはわかるが都合よく二人連続で転生できるとはとても考えにくい

「偶然ではないのかもしれない。二人の死は、緋の夜……カノヌシの生贄儀式に絡んで起こったものだからな」

「つまりカノヌシの意思が関わっていると？」

「あくまで状況からの推測だ。如何に聖主といえど、人や聖隸の生死を自由に操れはしないはずだ」

「偶然じゃなくて『因縁』なのかもしれないぜ」

ロクロウは出来すぎた事実こそ結論を出す

「ベルベットは、シアリーズを喰らったと言っていた。自分のお姉さんだった聖隸を……！そんな酷い因縁があるっていうんですか!？」

エレノアはベルベットの家族に起きた残酷な結末をそう結論付けるロクロウに反論する

「すまん、嫌な言い方をしちゃったか。だが、いいも悪いも、誰かの意思も関係なく、繋がっちゃうのが『因縁』ってもんじゃないか？

「そうですね……でも、こんなものって……」

「落ち着け、エレノア。事実を知って一番動揺しているのはベルベットとライファイセットだ。こんな時こそ、あいつらに一番近いお前が見守ってやれ」

アイゼンはこれから起こりうる事態に備えエレノアにそう諭す

「……はい。私が冷静にならないとですね」

「見てーあそこー！」

地脈から出れる場所を探し続け奥に進んでいたベルベット達、開けた場所に出るとライファイセットがとある方向を指さす、その先には聖主の御座で出現したものと同じ裂け目があった

「地脈の裂け目だ。外に出られるかもしれないぞ」

その時前に立っていたベルベットの足元から光の球体が浮かび上

がる。ベルベットの目線と同じ高さまで浮かび上がり皆が警戒する
中声が聞こえる

アーサー義兄さん。二人きりで話したいことがあるんだ

「!!」

ラフィーとアルトリウスがセリカとその子供の墓前で向かい合っ
ている場面が映し出される

緋の夜に、強い霊応力をもった穢れなき魂を、ふたつ生贄に捧げる
こと

・・・そう。それがカノヌシ復活の儀式だ。俺の本を読んだんだな
?

古代語が全部分かったわけじゃないけど、義兄さんが書いた注釈に
はカノヌシが復活すれば、業魔のいない世界が創れるって

アルトリウスはラフィーの理由と決意を聞き口を開く

七年前、強い霊応力を持った魂が・・・生まれる前の私の息子が生
贄となった。今、カノヌシは半分だけ復活している

ラフィーはセリカとその息子の墓の前でしゃがみ込む

だから、みんなの霊応力が強まって業魔が見えるようになったんだ
ね

それが「開門の日」の正体だ

じゃあ、もう一人生贄を捧げれば・・・

カノヌシは完全に復活する。その力で、多くの対魔士も揃うだろう
：もうすぐ、また「緋の夜」が来る。ねえ、アーサー義兄さん・・・

ラフィーが立ち上がりアルトリウスに顔を向ける

ラフィーセット・・・

僕なら生贄になれる？

「!!」

弟の口から出た言葉にベルベットが絶句する

お前は、なぜ鳥は飛ぶのだと思う？

鳥は、飛ばなきゃならないんだ。だって、空を飛べる翼を持つてる
んだから。僕にだって弱いけど翼がある。だから、今飛ばなきゃダメ
なんだ!

ラファイのその言葉か使命感からなのか、それとも責任から来るものなのか

次の次の『緋の夜』は三年後。その時・・・僕は生きていない
ライファイセット、お前は

「十二歳病」・・・それが僕の病気だから

・・・やはり知っていたんだな

・・・病気は怖くない。でも僕は、守られただけで死ぬなんて・・・
絶対に嫌だ

ラファイは顔を上げ覚悟した目をする

お前の意思こそ『翼』——強い翼だ

「ふざけるな・・・」

アルトリウスとラファイの会話に静かに口から漏らす

この事は、お姉ちゃんには黙っててね

約束だ

僕が創るよ。お姉ちゃんが幸せになれる世界を

その時ベルベットが叫びを上げその風景を切り破る

「あああああッッ!!!」

ベルベットはそのまま喉が枯れる勢いで叫ぶ

「何が意志だ！翼だ!!よくも・・・よくも二人して・・・!!!あたしを裏切ったなアッッ!!!」

その時周りに大地の記憶が現れる

ゴメンもスマンもなし！家族なんだから当然、でしょ？

うん。お姉ちゃん直伝のキッシュ作って待つてるから

あんたなら、義兄さんに負けない対魔士になれるかもね

そこに移されたのは以前のベルベットの家族の記憶、これまでの交流を嘲笑うかのように

「黙れ・・・」

あの子が落とされた祠ほどじゃない

あの子の・・・ライファイセットの仇を討つ！

ライファイセットは、もつと痛かった・・・なのにあたしは・・・なにもできなくて・・・ごめん・・・ごめんね・・・

それはまるでベルベットを道化であると表しているようだった
「黙れええッツ!!」

それに呼応するように次々に大地の記憶が地面から現れる、ベルベットは怒りのまま業魔手でそれを消し飛ばす

「こんな嘘を！よくもつ！全部！全部あいつらの嘘だつ！なのにあたしは・・・!!」

ベルベットは狂ったように手当たり次第破壊する

「死ねッ！死ね、死ね、死ねええッ!!」

その時巨大な業魔がベルベットの前に地響きを立て着地する。その姿は獣の首に虫や魚、植物や鳥の手足や触腕やらヒレが合わさった禍々しいものだ。それはまるでベルベットの写し鏡のように、本来なら警戒する所だが今のベルベットには自分の邪魔をする獣にしか見えな

「邪魔をするなあ!!!」

ベルベットは躊躇することなく飛び掛かり業魔手でキメラの頭を掴む

「この醜い化け物があッ!!」

掴んだ頭をそのまま地面に叩きつけ刺突刃でキメラの首元に突き刺す。キメラは暴れ出しベルベットを振りほどこうとするがその勢いを利用し胴体の上にしがみ付く

「だああっ!!」

キメラが背中の触腕で叩き落とそうとするがベルベットは業魔手で掴みそれを引きちぎる。触腕を放り捨て

後から頭を掴み突き刺していた刺突刃をさらにねじ込む

「死ねええええッ!!!」

刃が骨まで達したのか鈍い音とともにキメラが崩れ落ちる。ベルベットが飛び降りたと同時にその体は黒い瘴気と共に霧散し徐々に形がなくなる。だが完全になくなることはなく縮小しながらもやがて別の形に変わりそれが露になった。その残ったものにベルベットが悲鳴を上げる

「ひいッ!？」

ベルベットの目の前には監獄に捕まっていた自分自身の亡骸が転がっていた。キメラはある意味ベルベットの所業を表していたのかもしれない

「うあああッッ!!」

「こ、これは・・・」

「あ・・・あたしが・・・死んで・・・」

頭を抱え震えるベルベットにライフィセットが走り寄りなんとか落ち着かせようとする

「落ち着いて、ベルベット!!こんなのカノヌシの幻だよ」

「『こんなの』はひどいな。『それ』はお姉ちゃんの正体なのに」

声が響きベルベット達の前に光を放ちながらカノヌシが現れる

「!!」

ベルベットの脳裏に過去の出来事、所業がフラッシュバックする

「憎んで、恨んで、喰らって、殺す。他人も、世界も、『理』も踏みにじってただ感情のままに生きる・・・『醜い憎悪^{けがれ}』の塊だ」

「ち、違うー!」

「君が口を出すことじゃない。本当かどうか、お姉ちゃんにはわかってるんだから」

「・・・違わない」

ベルベットは震えた声と共に両膝を

「だって、全部あたしの勝手な思い込みだった。なのに、あたしは――」

「罪のない人を大勢傷つけたよね?」

「数え切れないほど・・・いっぱい喰い殺した」

「アーサー義兄さんの決意も知らずに――」

「人も街もメチャメチャにした」

「その上、セリカお姉ちゃんが転生したシアリーズまで――」

「食べ・・・ちやった・・・」

「・・・」

カノヌシのシアリーズに対する発言にケンは何も動かさず

「それでも僕は、お姉ちゃんが大好きだったんだよ。だから、お姉ちゃ

んの為に生贄になることを選んだ。なのに、復活の邪魔をされたら僕は無駄死にじゃないか？本当はすごく怖かったんだよ、死ぬのは」

「ごめん・・・ごめんなさい・・・」

「認めるんだね？お姉ちゃんが今までしてきたことは、全部——」

「うん・・・誰の為にものならないことだった・・・」

ベルベツトはついていて膝を力なく崩し、完全に折れてしまった

「あたしは無意味にみんなを苦しめた・・・『化け物』です・・・」

ベルベツトは涙を流しながら懺悔する

「わかったなら、罪を償わないと。最後の穢れ——お姉ちゃんの『憎悪』と『絶望』を喰べれば、僕は完全に覚醒する」

カノヌシは静かに浮上すると彼の体から光り輝く紋章の輪が現れ、彼が両手を広げた瞬間紋章が頭上に移動し巨大な物に変化した

「そうすれば、世界の痛みは止められるんだよ」

紋章の中心から気流が流れ出す。だがそれは吹き飛ばすのではなく吸い込むように風が吹き荒れる。それは急激に強くなり、全てを呑み込まんとしている。ベルベツトが気流に吞まれ引き寄せられていく

「お姉ちゃんには、痛みのない世界で幸せになって欲しかったけど・・・

『化け物』になっちゃったんじゃ、仕方ないね」

「ああ・・・あ・・・」

抵抗する気力もなくなったベルベツトをライフィセットが追いかける

「ベルベツトッ!!」

後ろにいたアイゼン達もそれに抵抗している

「う・・・!!きゃああ!!」

槍を地面に突き立てていたエレノアが耐えられなくなり、吸い込まれそうになるがロクロウが手を掴む

「ぬうーうおおおっ!」

ロクロウがエレノアを抱きかかえ反対側へ飛び込む

「ぐっ!くうっ・・・!!」

アイゼンは耐えながらも穢れの一つであるベルベツトの亡骸に対

処しようとしたが。その目の前で亡骸が浮き上がり吸い込まれる
「ふんっ！」

寸での所でケンが腕を掴むも今度はケンごと浮き上がってしまう
「なんのおー！」

吸い込まれながらも地脈に点在する水晶のような柱に右手をを掛ける。それにしがみ付こうとした時ケンの右腕に紙葉で出来た刺剣が突き刺さる

「ぬっ……！」

「邪魔しないでよ。ああ、でもちようどいいや、君は消えて欲しかったしそのまま穢れ毎喰べてしまうのも悪くないかな」

カノヌシはもう一本刺剣を作り出し投げ今度は右肩に刺さる

「……！」

「前から気になってたんだよ。大地の記憶を探って君に関する記憶がなくなつてね。特の出生の物が無いんだ。でもね、タイタニアでお姉ちゃんに出会った時の記憶が一番最初なんだよ。どういうことかな」
「……」

ケンは何も答えることなく、カノヌシもそれをわかつて続ける

「まるで何も無いところから突然現れた。そして君の力、人間でありながら業魔を浄化するその能力。聖隷術でも魔術でもない異質な物、この世界でありえないんだ……君、何処から来たの？ いや、どうやってこの世界に来たの？」

「[?:]」

アイゼン達がカノヌシの言葉に反応する

「最初はね、大したことないと思つて早めに消そうとしてたんだよ。お姉ちゃんには悪かったけど」

「……なるほど、タイタニアとヘラヴィーサでベルベットさんが襲ってきたのも納得です。喰魔、カノヌシからしてみれば動く口、それぐらいの事はできるってことですか。でもそれっきりで何もなかった」
「うん、君の力が予想より強かったから僕自身で始末しようって、だから途中で止めちゃった。でもそれも終わるから君が気にすることないよ」

ケンとカノヌシが問答している中ライフイセットがベルベットの
手を掴み呑み込まれるのに逆うらが少しづつ引きずられていく

「放して・・・あたしは消えなきや・・・」

「嫌だ・・・!!」

「このままじゃ・・・あんたまで無意味に殺しちゃう・・・」

「嫌だっ!!」

「こんな穢れた化け物は、生きてちゃいけないのよ・・・わかるで
しょ・・・?」

「うう・・・!!」

「二人目の生贄の転生体——君も僕の一部だ。先に二人とも一緒に喰
べてあげるよ」

カノヌシがライフイセットの方を向きそう告げる。ライフイセッ
トの体が浮き上がってしまう

「ああっ!!」

宙に浮いた足をアイゼンが掴む

「ライフイセット、この自惚れ屋に言つてやれ!」

アイゼンが地面に手を翳すと、そこから複数の光で出来た鎖が現れ
自分に体に巻き付け地面に固定する

「お願い、もう手を・・・」

「煩い、黙れえっ!!」

それでも懇願するベルベットをライフイセットが一喝する
「!!?」

「解るわけないよ!ベルベットは、すぐ怒って!怖くて!僕を食べよ
うとする!でも、優しくて・・・こんなにあつたかい!!」

ずり抜けていくベルベットの左手に力を籠め放さないように握り
締める

「ベルベットのことなんて、全然わからないよ!!」

「・・・」

「けど、ベルベットは僕に名前をくれた!羅針盤を持たせてくれた!
僕が生きてるんだって教えてくれた!だから僕は!僕のためにベル
ベットを守るんだっ!!」

「・・・ファイ・・・」

「穢れてたつていい!!意味なんかなくたっていいよ!皆が間違ってるって言うなら、世界とだつて戦う!ベルベットが絶望したって知るもんか!!僕はっ!ベルベットがいない世界なんて・・・」

その時ベルベットの左腕が業魔手に変わり、ライファイセットの腕に喰らいつく

「ぐううツ・・・絶対に嫌だあツツ!!」

痛みに耐えながらライファイセットは自身の想いを叫ぶ

「ダメよ・・・手が勝手に・・・」

「腕くらい喰べていいよ。でも、こっちは残しておいて。ベルベットの泣かせたカノヌシを殴つてやるんだから!」

ライファイセットは左腕をベルベットに向けて差し伸ばす

「あたし・・・大好きだったの・・・」

ベルベットが右手を伸ばす

「ライファイも、セリカ姉さんも、アーサー義兄さんも、みんな・・・だから『あの時』を奪われたことが・・・あたしを選んでくれなかったことが・・・」

涙を流しライファイとアルトリウスが家族より世界を取り、自身を置いて行った事、切り捨てていかれた者の想いを吐き出しながらライファイセットの左手を握る

「悔しいーっっ!!」

その思いと共にカノヌシが何かを感じ取る

「『絶望』が・・・消えた!?!」

「ベルベットさんは乗り越えて・・・いや、踏み越えたようですね。貴方の計画も見事に狂ったようで」

焦るカノヌシを煽るケン、カノヌシは気に入らないような表情でケンを睨む

「ならせめて憎悪だけでも喰らうよ!」

手を翳し刺さっていた刺剣を乱暴に抜き自身の手元に引き寄せ握ろうとした時、指を弾く音が響いた瞬間、周りの動きが止まった

「また手ひどくやられたな。大丈夫か?」

「・・・正直少し辛いです」

顔を上げるとケンの掴んでいる結晶の上にルシフェルが立っていた

「気になっていたんですが、カノヌシが大地の記憶で自分だけの記録しかないとか言っていましたけど」

「ああ、感づかれるのも面倒だからな、私が関わった記録、大地の記憶とやらは予め消させてもらったよ」

ルシフェルは止まっているカノヌシの方を見ながら答える

「そんな事簡単にできるんですか？」

「心配するな。君が気にすることは無い、さて、どうする？彼女は誰かの為ではなく、自分の道を選択した」

「ええ・・・ベルベットさんは絶望から小さな希望を掴んだ。それがどのような結末になるかはわかりません。ですが自分はそれを手助けし、見届けたいと思います。最後まで」

ライファイセツトの手を掴み目に光を取り戻したベルベットを見て改めて決意を固める

「わかった。君がそう言うなら私もまた少し手を貸すとするよ。まあ、最初からそう言うと思ってこれをもって来てたんだ」

ルシフェルがどこからともなく一つの物を取り出す

「・・・銃・・・ですか？それにしてもなく一つの物を取り出すね」
ケンが疑問に思うのも無理はない。それはグリップや引き金は大きく変わったものではないが銃身が自身の認識とは全く違ったものだった。銃身には左右にリング状の部品が銃身上部に沿う様に取り付けられその中にさらに球状の部品が三つ三角型に組み込まれている。上部には狙いを定めるための光学サイトのようなものがついていて銃口であろう場所には弾丸が出るための穴はなくガラス状の青い球体部品が着けられその中にカットされた宝石のような丸型の石が嵌め込まれている。用心金の前には金属状のガードが銃身とグリップに繋がっている。グリップ底にもそれと同じようなものがあるがグリップに嵌め込み穴が確認できるので恐らく折り畳み式のストックだろう

「変わっているのも当然だ。地上の物ではないからな。これは『魔銃ガンゴール』という」

「魔銃？物騒な名前ですね」

「そう言うな、本来は一丁しかないが。伝手でもう一丁用意してきた」
「はあ、ですが自分は銃なんて使った事ありませんよ？それを渡されてもどうすればいいか」

ケンが苦言を呈する中ルシフェルはケンの元まで空中を歩き腰のバックパックのガンゴールを差し込む

「二つ伝えておこう、その銃には特別な銃弾が一発装填されている。言いそびれてたが単発式だから注意してくれ。それは君に渡した浄化の力と同じものが強力に込められている、使い道は君の選択に任せる。予備も二発入れておくよ」

ルシフェルはもう二つの銃弾をベルトに入れる。ケンは自身が掴んでいるベルベットの亡骸を見る

「…わかりました、有効に活用させていただきます。これを撃ち切った時、ベルベットさん達に自身の選択を示してみせます」

「ケン、人が持つ唯一絶対の力…それは自らの意思で進むべき道を選択することだ。お前は常に人にとって最良の未来を想い、自由を選択していけ。さあ、行こうか」

ルシフェルが指を鳴らし時が動き始める。ケンは柱を掴んでいた右手を離し素早く腰に入れられたガンゴールを引き抜き亡骸の胸に当てる

「あんなものいつの間にな…！止めろーっ！」

カノヌシは突然の出来事に驚きながらもケンがやろうとしたことを止めようとしたが既に引き金は引かれていた眩い光が亡骸に照射され光に包まれる

「憎悪が…！消えていく!?!」

それと同時に頭上にあつた紋章が砕け散る

「しまった…!?!」

カノヌシは落下し地面に乱暴にぶつかる

「く…こんなことが…!?!」

カノヌシがそう零しながら上半身を起き上がらせる。ベルベット達も立ち上がろうとした時ベルベットの目の前に一つの光が現れ閃光を放つ。そこから声が聞こえる

「私の心にもあるのです。貴方と同じ、消したくても消えない炎が」
そこにはシアリーズが立っていた。ベルベットが立ち上がり向き合う

「・・・貴女の気持ち、やっとわかったわ。でも、あたしは自分の為にしか戦えない」

「十分です。それが生きるということなのですから」

ベルベットは歩み寄りシアリーズの顔に両手を添えると、彼女の体は光となって消えそこには一つの指輪が残った。それを握り締め、ベルベットは地脈の裂け目に向かって走り出す。もうその目に絶望はなかった

「うおおおおっ!!」

業魔手を振りかぶり走るベルベット、次の瞬間その手に紅蓮の炎が走りそれを裂け目に叩きつけた

「はあああっ!!」

裂け目に叩きつけた炎の余波がカノヌシを吹き飛ばす

「うわああああっ!!」

裂け目が大きく開きはじめベルベット達はそこへ向かって走り始める。自身の道へ進むために

第43話 終わり

第44話

先に地脈から脱出したマギルウとビエンフーはベルベット達が戻ってくるまでビエンフーが裂け目に霊力を送り込み、マギルウはメルキオルからの術に耐えていた。だが幾度とない攻撃にマギルウは倒れこんでしまう

「ね、姐さん……！」

「心配……無用じゃ……ベルベットにできて……儂にできんわけがあるまい……」

マギルウの無謀な強がりやをメルキオルが近寄りマギルウを見下ろす

「自ら心を砕いての覚醒——何度繰り返す気だ？」

「……今ので百と七……いや八回目かの……？ま……どーでもいいかの……」

「愚か者が」

マギルウは立ち上がりながら自身の心を砕いた回数や答える、メルキオルからしてみればまさしく愚か者に見えるだろう

「必要なのは、年々歳々生長を繰り返す草木の如き不動の精神と教えただけだ」

メルキオルがマギルウの眼前で手を翳し、さらに術を掛ける。マギルウは倒れながらも尚抵抗する

「ぐう……お主の様に……そこの坊のようにか……？」

「それでこそ人の業から脱し、理想世界の礎になれる」

「理想世界……のう……」

マギルウは鼻をならす。鼻血が流れ出ているがメルキオルは容赦なく術を使う、マギルウは膝を着く

「坊や、お主の相方じゃったか坊——ライフイセツトは“生きて”おるぞ。恐ろしい女業魔を追って、海の広さを知り、大地の渴きに耐えておる……あ奴らは、儂らとは違う……悩み、苦しみ、それでも己の鼓動を抱きしめて……」

マギルウは足を震わせながら立ち上がる

「この醜い世界を懸命に“生きて”おるんじや！」

「……」

血をまき散らすのも構わず1号に叫び訴える。それに僅かに反応する1号

「その仲間の為に……とでもいうつもりか？」

メルキオルが再度術を使い遂にマギルウが障壁を解いてしまう

「ふん、逆じやわ。あ奴らには、心底イラついて仕方ない……チクチクと儂の胸を突き刺しおる……じゃからのう……この結末だけは見届けねば……どーにも収まりがつかんのじゃっ……!!」

何事にも興味も示さず、どうでもいいと生きてきたマギルウにとって必死になって生きているベルベット達は憎いと同時に憧れになっていたのかもしれない。自分には持っていないものがあるなら尚更である

「無意味な事を。やはりお前は失敗作だ」

マギルウの想いをバツサリと斬り捨てる

「……最高にどーでもいいわい……!」

メルキオルが止めを刺そうと聖隷術を発動する

「やめてでフー!!!」

ビエンフーが叫んだその時、霊力を送っていた裂け目から炎が噴き出す

「ぬおおおっ!?!」

炎がメルキオルを襲うが透かさず術で防ぐメルキオル、炎が晴れた時マギルウの前にベルベット達が立っていた

「……ひよつとして、いいところに来た？」

「遅いわ！おかげでいらん事を口走っでもうた」

ケンに肩を貸してもらいながら立ち上がるマギルウ達の前にメルキオルが立ちふさがる

「カノヌシとは出会ったな。ならば、お前の復讐には意味がないと分かったはずだ」

「……ええ、よくわかったわ……世界が悲しい理由も、人が背負っ

た業の深さも」

メルキオルの言葉にベルベツトは肯定する

「アーサー義兄さん——そしてラファイは、全てを捨てて、その悲劇を終わらせようとした。それが・・・あの人たちの願いなよね」

世界を救うという大きな目的の為に数多くの物を犠牲にしなければならぬ、それが例え身内であっても。だが逆に捨てられる方の気持ちはどうなるのだろうか

「そうだ。良く弁えた」

「でも、だから許せない。あの二人・・・アルトリウスとカノヌシが、矛盾した醜いエゴだつてわかつてるけど、あのあつたかい日々は、あしたが——あたし達家族が生きて証だったのよ」

ベルベツトは姉と弟、そして義兄との思い出を告白する。あの時の出来事が起きるまでの幸せな日々を、ベルベツトはメルキオルの方へ顔を向ける

「だから、どんなに苦しくても悲しくても。あたしは、この『復讐』をやり遂げる」

「ベルベツト！」

弟の為に生きてきたベルベツトが自分の為に生きると言い切った。幸せだったあの頃を奪われたことへの復讐であった

「ふぎけるな!!潔く諦めて死ね!絶望こそが、お前の宿命なのだ!!」

メルキオルが青筋を立てながら語気を強める。自分勝手に利己的なベルベツトは尚更許せないのだろうか

「家族を奪つて、体を化け物にして、今度は“心”を寄越せつて・・・？」

ベルベツトは業魔手を繰り出し構える

「そつちこそふぎけるなつ!!覚えておきなさい。災禍の頭主は、死んでも諦めないのよ」

「己が業を恥もせず、よくも・・・!」

「くくく・・・あくはっはっはっはっはっ!!」

そこにマギルウが高笑い、鼻血を拭う

「儂も混ぜい!賭けに負けた八つ当たりじゃ♪」

「行けるの？そんな様で」

「誰に向かって言っておる！自分で言うのも楽しいが、地獄の沙汰もノリ次第！正義の対魔士を蹴散らす悪逆無動の魔法使い！マギルウ・メーヴィンとは、儂の事じゃ!!」

マギルウは半場無理矢理にいつものポーズを取る、ベルベット達が構えるとメルキオルが紫色の球体を作り出し戦闘態勢に入る

「痴れ者どもがあ!!」

メルキオルは速攻で始末しようと灼熱の炎の壁を繰り出しベルベット達に迫る

「かっこよく決めた傍から焼かれたらたまらんわ!!フラッドウォール!!」

マギルウが前にでて聖隷術で水の壁を繰り出しお互いに相殺する。火が水を熱し水が火を呑み込み水蒸気が立ち上る

「くっ!!小癩な・・・!!」

「皆の者！心配かけてすまんかったの〜!」

「別にしない」

ベルベットが横を走り抜ける

「心配されるようなタマカ」

「だよな」

アイゼンとロクロウが左右に分かれながらそうごちる

「これも、ある意味の信頼ですよ!」

「うん」

エレノアとライフィセットが聖隷術を発動させながらベルベット達の意見に賛成する

「こんの恩知らず共々!!ケンはどうじゃ!?お主はわかってくれるよのう!?!」

マギルウは地団駄を踏みながらケンに賛同を求める

「まあ、はい。それなりに」

「それなりじゃとく!?別の意味でチクチクじゃわい!!」

ケンが頭を掻きながらフォローにならないフォローでマギルウは頭をガツクリさせるが直に向き直る

「まあよいわー！このうっぷんはあ奴で晴らせてもらおうわ！」

マギルウはいつものにやけ顔で術を展開する

「飛燕連脚!!」

「風迅剣！」

ベルベットの回し蹴りとロクロウの突きがメルキオルの顔面と腹部目掛けて迫るがその攻撃は障壁に阻まれる

「ちっ!!」

「ぬっ！」

「穢れた業魔が儂に触れるなあ!!」

ベルベットは空中で体勢を整え後ろに下がりその隙にロクロウが前に再び出る

「そうと言われて引き下がる奴がいるかよ!! 鎧通し！」

「聖隸だったらいいわけだな!!」

アイゼンが横から拳を構えて殴りかかる。その距離では防御は間に合わないだろう、だがその拳とロクロウの腕が黒い手に捕まれる

「んなあ!？」

「コ、コイツ!!」

アバルで遭遇した黒い業魔が二人の攻撃を受け止めそのまま振り回し投げる。二人が崖際まで飛ばされすんでのところで淵に捕まる

「うおおっと！」

「あの業魔は・・・！」

「道具風情が粹がるな。それにしても相も変わらず御し難いやつだこいつは」

業魔はロクロウとアイゼンを放り投げたと同時にベルベットに向かって姿勢を低くし走る

「上等!!」

「ライファイセット！マギルウ！そちらはお願いします！」

「わかった!!」

「言われんくてものう！」

ベルベットは刺突刃を繰り出し走り出す。エレノアがベルベットと元へ援護すべく駆ける。ライファイセットとマギルウは1号への攻

撃を加え続ける

「はあ!!」

ベルベットが横薙ぎに刺突刃を振るい業魔はそれを最小限に後ろに下がり躲す、業魔は反撃で貫手をベルベットに向けて放とうとするのをエレノアが槍で牽制する

「エレノア!」

「この業魔の力は未知数です!! 一人では危険ですよ!」

「わかってる!!」

二人が構えお互いに攻撃を開始する。ベルベットが蹴りと刺突刃で食い掛り。エレノアが聖隷術と槍術でカバーする。だがそれでも業魔は直ぐに対応し始め二人が徐々に押され始める

「・・・!!強い!!」

「二人がかりでも押されるなんて!?!」

業魔は消耗していく二人に地面スレスレの回し蹴りで足を払う。突然の行動に二人は対応しきれず転倒する

「くうあ!」

「しま・・・!」

業魔は足を振り上げ近くにいたエレノアに踵落としをしようとした瞬間横からケンがタツクルで突き飛ばし妨害する

「!!」

「うおおっ!!」

体勢と取り直し着地した業魔に右の拳を固め打拳を放つ。業魔はそれを受け止め逆の拳で彼の顔を一度殴るが二発目はケンがそれを掴みフィンガーロツクに近い状態でお互い拮抗する

「・・・!!」

「ふんぐう・・・!」

だがそれも長くは続かず徐々にケンが押され始める

「ぐう・・・」

「なんと! ケンが力負けしてる!」

「カノヌシのダメージが響いてきたか・・・!!」

ロクロウとアイゼンが崖から這い上がる、アイゼンの言う通りケン

の右肩からどんどん血が滲みそれが背中にもまで広がり始めている。業魔はケンの腹に蹴りを放つ

「ぐ……!」

ケンを蹴り飛ばし距離を取った業魔はそのままベルベット達の方へ向かう。それを止めるべく立ち上がったその時彼の足元に光り輝く聖隷術の紋章が現れる

「崇高で清浄な場を愚か者の血で汚すわけにはいかん。貴様を相応しい場所に送ってやる」

「なに……!?!」

ケンがそう発した瞬間紋章と一緒に姿が消えていった

「ジジイ!!あいつをどこにやった!!」

アイゼンが語気を荒げメルキオルに問いただす

「あ奴の力は厄介極まりない。こちら痛手を負うだろうが上手いけば穢れの良い餌になる」

「アイゼン!直ぐに助けに行かないと!ここから遠くには飛ばせないはずだよ!」

「メルキオルの事じゃ!!ドラゴンをぶつけても可笑しくないぞ!!」

マギルウとライフィセットが横目で叫ぶ

「ベルベット!貴女だけでも行ってください!!」

「アイツの心配するなら信じなさい!!ここを乗り越えなきや捜しにも行けないわよ!!」

ベルベットは構えながらエレノア達を鼓舞する

「そういうことだエレノア!!あいつはしぶとさは並大抵じゃないってこと知ってるだろう!!」

ロクロウが小太刀を構える

「……うん!今僕たちができることを!」

「仮に仏になっても骨ぐらいは拾ってやるわい!」

「その為にも決着をつけるぞ!エレノア!」

アイゼンが聖隷術と拳で業魔に仕掛ける

「……はい!!」

エレノアも槍を構えメルキオルに向かって走り出した

空中に紋章が現れそこからケンが乱暴に放り出される

「ぐー！」

何とか着地するも体力の消耗で体がぐらつく。その時前方から喉を鳴らす音が聞こえた、ケンが顔を上げるとそこには一体のドラゴンが牙をぎらつかせ咆哮を上げた。その姿は燻ぶった灰色の体表に紫色の結晶のような物が体の所々に生えている。体長だけで30メートルはあるだろうか、尾を足せばもっと大きい。拡げた翼膜はそのドラゴンよりさらに大きいだろう。そんな巨体を前にケンは思わずつぶやく

「・・・結構辛いな・・・」

ドラゴンが前脚を振りかぶり薙ぎ払う様に振るう。ケンはすかさずガードするが圧倒的重量でドラゴンを閉じ込める障壁まで殴り飛ばされる

「ぐっ!!」

障壁からずり落ちる間もなく今度は長い尾で薙ぎ払う

「どあっ！」

地面を数回跳ね、地面を擦り止まる。ケンは俯せの状態から起き上がろうとするが前脚で踏みつける

「ぐうう・・・!!」

ドラゴンは体重を掛け何度も踏みつける。地面がひび割れケンの体がめり込んでいく

(普通の人間ならともかく業魔でもこれを喰らったら死んでいた・・・！だが自分なら耐えられる！反撃の隙を見つけないければ・・・もしかしたらこのドラゴンを元に戻せるかもしれない！)

前脚と尾を何度も打ちつけ十分弱ったと判断したドラゴンは止めを刺そうと脚を通常より高く上げた時ケンは直ぐ様立ち上がりドラゴンの脚を受け止めた。だがダメージと体力の消耗で押し返すことができない

「流石に今の状態ではキツイ・・・」

「おいニイちゃん!!」

ケンが声のした方向へ顔を向けるとザビーダが障壁越しに立っていた

「どうもザビーダさん、こんな所で奇遇ですね・・・！」

「なに？気な事言ってるやがる!!待ってる今助ける！」

ザビーダが障壁に手を当てようとしたが弾かれる

「ぐっ・・・!?この障壁、メルキオルのジジイだな!!」

「ザビーダさん！自分の事よりベルベットさん達の救援をお願いします」

「何!?アイツ等もここに来てるのか！」

その時遠くの足場から光と轟音が響く

「あそこです。自分はメルキオルの術でここに飛ばされました、あの黒い業魔もいますからベルベットさん達の方が危険なはずです。さあ急いで！」

突然左目のナビゲーションが起動し上方への表示と共にHEATINGと警告文がでる。上を見ると指の隙間からドラゴンの口から炎が漏れ出しているのが見える

「さあ早く！」

「くそつくたばんじゃねえぞ!!」

ザビーダがベルベット達がいる方へ続く階段に向かって走り出す。ケンは片腕で受け止めつつ懐から一本の緑色のペン状の物を取り出す

(あの科学者の人が密かに用意しておいた薬と書いてあったな・・・)

ケンはロウライネから帰還した時にバックパックに入っていた注射器とメモについて思い出していた

(強い副作用があるといったけど・・・この状況で迷っている暇はない!!)

口でキャップを咥えて外し後部を押し針を出す、片方の腕に刺し薬剤を注入する。直ぐに疲労感と痛みが消える

「うおおおっ!!」

ブレスを吐こうとした瞬間前脚を押し上げドラゴンは体勢を崩す。ケンがへこみから抜け出しドラゴンの顎に組み付き口を塞ぐ、その勢

いを使いドラゴンを仰向け状態で地面に叩きつける。ケンは直ぐ様離れドラゴンの尾を抱え上げ大きな巨体をジャイアントスイングの様に振り回す。数回振り回し遠心力が最大になった所で放り投げドラゴンを地面に叩きつける。片膝を着きながら腰に差していたガンゴールを抜き銃身を折り地脈で撃った薬莢を取り出しよう一発を装填する。射撃は経験がないので左目が自動でナビゲーションを行い狙いを補正する。ドラゴンが起き上がりブレスを改めて吐こうと首を起こした時ガンゴールから光輝く光弾が発射される

「どうだ・・・!」

ドラゴンの胸に命中した光弾の光が体全体を包み込みあの時と同様に徐々にサイズが小さくなっていった。やがて人の形に落ち着いていき光が治まった時には一人の少女が地面に仰向けに倒れ気を失っていた。セミロングで髪の毛の先に赤いグラデーションが掛かっておりザビエダと同じ毛質である

「はあ・・・はあ・・・せ、成功だ」

ケンは立ち上がり少女に近づき外傷がないかを確認する。見た限り問題はないようで一安心した。それと同時に障壁が消えてなくなる

「問題はないようだな・・・はあ、少し疲れた。こんな姿見られたら師匠にまたどやされる・・・」

「ケン!!」

そこへライファイセットとエレノアがこちらに向かって走ってきているのが見えた、どうやら向こうも終わったようだ

く

「ケン!!」

「ライファイセット、そっちも無事だったんだね」

「私達の心配より自分の心配をして!!」

エレノアがボロボロのケンを見て怒る

「あー・・・すいません」

「どうやら骨は拾わずに済んだようじゃの〜」

「お前本気か冗談かどっちなんだ・・・」

マギルウのぼやきにロクロウが突っ込む

「こいつが余計な事をしてくれてな」

「そこは『助けていただいた』だろうが」

ロクロウとアイゼンは反発しあっているように見えるが案外そうでもなさそうだ

「・・・あんたも自分の道を決めたようね」

「ええ、自分はベルベットさんの行く末を見届けますよ。そして選択します、自分の道を」

「そう。ま、精々頑張りなさい」

「この人はどうするの？」

ライファイセツトが聖隷の側に立ちどうするかベルベット達に尋ねる

「ここに置いていくわけにもいかねえからな、おぶっていかか。にいちやん頼めるか、怪我をしているところわりいけどな。今満足に動けるメンツを揃えておきたいしな」

「それは構いませんがよろしいのですか？自分は人間ですからこの人に穢れが・・・」

ケンは穢れについての懸念を質問する

「直接穢れを打ち込まない限り直ぐには影響はない。それにお前の浄化の力なら十分対処できる」

「ここを出るまででいい、後は俺が何とかするからよ」

アイゼンの提案にケンは了承し自身の治療を施し血と汚れの付いた上着を換え聖隷の少女を背中に背負う。そこでケンは見覚えのある銀髪の聖隷がいることに気付く

「君は確かメルキオルと一緒にいた・・・」

「俺が着いたときには勝負が決まったたからな。んであのジジイがまだあきらめてなかったんで俺が地脈へご退場させてやったんだ。その時コイツが残って連れてきた。名前はシルバだ、副長が付けた」

「ちっ・・・」

アイゼンは舌打ちをしながらそっぽを向く。恥ずかしいのだろうか
「シルバ・・・いい名前ですね。よろしく、シルバ」

「うん」

「ねえケン、あの時みたいに技で意志を取り戻すことってできる？」

ケンはシルバに挨拶を交わす。シルバはほぼ初対面なので短く言葉を交わした。ライファイセツトはシルバの意志を開放することができないかとケンに質問する

「とにかくやってみよう。でも今ここではできない、敵陣だしなによりこの人を安全な場所に連れて行かないとね。護衛は任せたよライファイセツト」

「うん、わかった」

「意志を開放できるなんて初耳だぞ?!どうりでロウライネで連れてきたあいつ等も意志を取り戻していたわけだ」

ケンはザビーダの言葉に疑問符を浮かべる。ルナエキストラクトはあくまで切り離す技なので意志を取り戻すような効果はないはずだ。あるとすれば穢れを払った時に使った浄化の力だろうが

「その聖隷もドラゴンだったのですね。ですがいくら聖寮といえどドラゴンを操りここまで導くことは不可能なはずです。つまり——」

「ここに来るまではドラゴンじゃなかったこと!?!」

「そう考えるのが自然だな。恐らく聖隷を拘束し、その後ドラゴンに変えたんだろう」

「前にメルキオルの野郎がやったようにか・・・どこまでも聖隷を踏みにじりやがってー!」

エレノアはケンに背負われている聖隷を見ながら予想を立てた。態々危険を抱えてまでドラゴンをここまで連れてくることはしない。アイゼンの考えはまさしく的中するだろう。ザビーダは語気を荒げながら毒づく

「言葉ありません・・・」

「エレノア様のせいじゃないでフよ・・・」

直接的には関わっていないが対魔士であるからには責任を感じているエレノア。ビエンフームすかさずフォローする

「しかし、喰魔だけでなくドラゴンまで生み出すとは・・・その内人間

を生む方法を発見するかもしれんのー」

「ベルベット……」
「なに？」

ザビーダがこの施設に入るために開けておいた出入口に向かつて進んでいたベルベットの後ろからライフィセットが声を掛け彼女が顔を後ろに向ける

「僕って、ベルベットのお姉さんの子供……だったんだよね？お父さんは……」

「転生のこと、ね」

「……うん」

「生まれ変わるってどんなものか……正直、あたしにはよくわからない。でも、あたしにとって大事なものは、自分で見て、聞いて、感じた事よ。例え、誰かの生まれ変わりだったとしても、あたしはあたしで、あんたはあんた。それだけだと思う」

「ベルベット」

あくまで大切なのは意思と心であるライフィセットは確かにセリカのこの転生であるが、それも表面上のことである

「そうそう、アイゼンが言ってたが、聖隷の前世は、必ずしも人間とは限らないらしいじゃないか」

「それじゃあ、動物や鳥や魚の生まれ変わりということもあるのですか？」

ロクロウはアイゼンの例を出しエレノアはそれをもとに推理する
「なくななくななくななくなく♪じゃが、仮にワンコの生まれ変わりがじゃとして、今の坊が、自分をワンコの兄弟だとは思わんじやろ？」
「うん……僕は僕だし……」

「ベルベットのかわいいワンコじゃがのー」

一言多いマギルウにベルベットが口を挟む

「マギルウ」

「後で噛みつくから、覚悟しといてね」

「ひええ、御勘弁を〜！前言撤回、噛みつき撤退じゃ〜！」

冗談かはわからないがライフイセットも言う様になってきた

「前世とは『大地の記憶』のようなものだ。過去の積み重ねの上にお前は生まれた。だが、特別なことじゃない。誰もが、過去の繋がりの上に生きている」

人に歴史があるように、聖隷にも歴史がある。過去があるから現在がある、必然でもあり偶然の事象に皆生きている

「僕は、僕なんだよね」

「そ、他の誰でもない。あんたはフィーよ」

「・・・」

ケンはベルベット達の会話を無言で聞いていた

、

「おい。副長。ジジイが連れてた角の業魔は、なんなんだ？」

「・・・わからん」

「一瞬だったが、妙な気配を放ってやがった。お前は感じなかったのか？」

「わからんと言っている」

「・・・そうかい。やっぱりてめえとは合わねえな！」

アイゼンはかなり歯切れが悪そうに答えた。その表情は浮かないモノだった、まるでわかっているが理解したくないようにもみえた

「あの大角の業魔には前にも会ったのよ。恐らくメルキオルが、幻術で操ってるんだと思うわ」

「そうか。守りに入っていたのは正解だったな。まともに殺りあったら、タダじゃすまなかつたはずだ」

「・・・なぜわかるの？」

「勘さ。ただ、なんだかやけに匂うのさ。キナクせえ、不吉な匂いがよ・・・」

「・・・あの顔の傷・・・あいつは・・・」

「大丈夫、アイゼン？顔色が悪いよ」

表情の優れないアイゼンにライフイセットが声を掛ける

「・・・いや、どうということはない。今はここを出ることが先決だ。急ぐぞ」

その後ザビーダが作り出していた出入口とみられる紋章の上に乗ると辺りが光に包まれそれが晴れた時には海を臨む島に出た。ここカーstrandはアイルランド領近郊に浮かぶ島で聖寮が立ち入りを厳しく制限しており入れるのは聖寮でもごく一部の対魔士のみであり此処の存在自体聖寮内で知るものがほとんどいない。船乗りの間でも業魔やドラゴンが現れるとして『不帰の海』と呼ばれ恐れられている。実際はメルキオルなどが実験場と牧場を行うための隠れ蓑となつている

「外に出れた!」

「俺の乗ってきた船がある。島の南東の浜だ!」

ザビーダの後を走って付いて行き岩が点在する丘を通り過ぎようとした時その遠くから黒い穢れの塊がシルバに当たった

「あああっ!」

シルバが穢れを受け後ろに飛ばされる

「なんだ!」

一瞬の事で反応できなかつた。ロクロウが声を上げる

「ふふふ、昔よく鬼ごっこをしたよね」

ベルベット達は声のした方を向くと穢れを撃ち込んだ張本人であるカノヌシが裂け目から現れた。どうやら追いつかれたようだ

「逃がさないよ、お姉ちゃん」

第44話 終わり

第45話

「逃がさないよ、お姉ちゃん」

「カノヌシー！」

地脈でベルベツトに吹き飛ばされたカノヌシ。あれで大分引き離れたと思われたがやはり聖主、すぐに追いついてきた

「……」

ベルベツト達がカノヌシと対峙する

「あああ……や……っ！怖い……よお……！」

「やめてー！この子がドラゴンに！！」

エレノアがカノヌシに向かって叫ぶ。対魔士の支配から解放されほぼ無関係の状態になったシルバに対する凶行を

「そうするつもりでテレサから取り上げたんだ。『それ』も、鎮静に必要な犠牲なんだよ」

「！！」

頭を抱え苦しむシルバにケンが駆け寄り浄化の力を使うため額に手を当てようとした瞬間その手をシルバの小さな手が受け止める

「……なぜ!?!」

「だ……め……その……ひ……と……が……あ……」

シルバは涙を流し焦点があつていないながらもケンがおぶっている少女の聖隷に穢れが伝染してしまう可能性を心配していた

「でもこのままでは君が危ない！」

「おね……がい……僕を……ころ……して……」

あらゆる負の概念が自身の身を蝕み、自身の意識がなくなってしまい聖隷でなくなってしまう。そうなったらベルベツト達を傷つけてしまう、そうなる前に自分を殺すようにケンにお願いする

「……大丈夫。必ず君を助けてみせる、信じてほしい」

その声が聞こえたのかは定かではない。シルバから溢れだした穢れがケンを押しつけ一層溢れた後、そこには黒い体表に禍々しい翼、後頭部から流れるような一對の角、何より特徴的なのは赤く光る単眼

のドラゴンがいた

「カノヌシ、てめエ!!」

「前門のカノヌシ、後門のドラゴン……死神より質が悪いのう……！」

同族であるシルバを目の前でドラゴンに変えられたアイゼンがカノヌシを睨みマギルウが今の状況を分析する。結果は相当やばいが

「『絶望』するには丁度いいでしょ」

「勝手に決めるな」

シルバの事を気にも留めていない上に「丁度いい」と済ませるカノヌシにライファイセツトは語気を強める

「あなたのお姉ちゃんは、この程度じゃ折れないのよ」

「……抵抗すると苦しむことになるよ」

ベルベツトとカノヌシがにらみ合うが彼女の横からザビーダが歩み出る

「ベルベツト。こいつのお仕置きは、俺にやらせろ」

「無理だよ。ただの聖隷には」

「『ただの』じゃあねえ」

カノヌシの言う通り、聖隷の主たる存在である聖主は云わば神も同然、力関係で言えば明確の差がある。ザビーダはそんな事は気にも留めずジークフリートの銃口を自らの齧谷に当て引き金を引き。霊力を撃ち込む

「下種野郎にブチ切れたー!」

引き金を再び引きさらに撃ち込む

「限界突破の!!」

三度撃ち込みさらにブーストする

「ザビーダ様だツ!!!」

ジークフリートで強化された聖隷術を発動し圧倒的な風圧でカノヌシを吹き飛ばす

「おいにいちちゃん!!シルバを助けることができるのか!」

ザビーダは後ろを向き岩陰に少女を下ろすケンを見る

「全力を尽くします。借りは一つお返しですよ!」

「わかった！お前を信じるぞ!!!」

ザビーダはカノヌシを追撃するため風の如く走り始めた

「ザビーダ！」

アイゼンが彼を呼び止めようと声を荒げる。いくらザビーダでも一人でカノヌシに対抗するのはとても難しい、それで止めようとした時地響きと共に咆哮が響き渡る

「ええい、大騒ぎがすぎる!!」

ロクロウが小太刀を構えドラゴンと対峙する

「問題ない！ケン!!策はあるのね?」

「はい自分ができる最善を尽くします」

立ち上がり様ザ・カリスで使った注射器をもう一本取り出す

(一度打ったら数日は使うなど書いてあったが・・・約束したからには・・・!)

ケンは意を決し針を腕に刺し薬剤を注入する。そこにはもう躊躇も迷いもなかった。ガンゴールを使う手もあるが弾丸は残り一発、今使い尽きた後ライフイセットやアイゼンにもしもの事があつた場合どうなるか様々な可能性を考えた。今できる最善の手は自身のあの技しかない

「私の器が、もっと大きければ・・・」

「後悔するのはまだ早いで、シルバを救いたければアイツを信用してやれ！今は戦うことに集中しろ！」

ドラゴンは翼を広げ飛び上がりエレノア達目掛けて突撃してくる

「コイツ、今まで見てきたドラゴンより素早いぞ!!」

「常に浮いてるなんて卑怯じゃろく!!」

皆が左右に分かれ突撃を躲す。ロクロウとベルベットが追撃しようとするが相手は空を飛んでいる上に飛行速度が速い、これでは立ち向かうどころか一撃離脱戦法や遠巻きからの攻撃で一方的にやられてしまうのは明白だ

「アイゼン！お前の術で動きは止められないか!？」

「大地からあれだけ離れていては流石に届かん、何とかして地上に引き摺り下ろすんだ！」

ドラゴンは再度降下し口から黒い炎のブレスを吐きながらベルベット達を焼き殺そうと迫る

「蒸し焼きは死んでも御免じゃわい!!フラッドウォール!!」

マギルウが繰り出した水の壁で黒炎を打ち消そうとするがなんと炎が水の壁を吹き飛ばしてしまう

「ちい!?あれはただの炎ではないぞ!!」

「なら!!聖泡散り行き魍魎爆ぜよ!セイントバブル!」

ライファイセットは前方に無数の水泡を出現させ一斉に爆発させそこでやつと黒炎が止まる。攻撃を防いだと同時にドラゴンが迫るも二人は済んでの所で左右に分かれ避ける

「ここはやつの経験値の低さを突く!あいつは今本能で俺達と戦っている、動きもあらかた単純でわかったからな!」

岩の天辺へロクロウが駆け上がりそこから跳躍する。ドラゴンの背中目掛けて小太刀を振るおうとしたがそれを察知したのか体を捻り尾を振るいあげる

「ぬおっ!!?」

鞭の様にしなりながらも岩石の様に硬い尾をロクロウが小太刀で受け止め防いだが勢いは殺せずそのまま打ち上げられる

「ぬかったっ!?!」

「描け蒼穹、霊槍・氷刃!」

ドラゴンが口を開けてロクロウに噛みつきこうとしたがその横顔を無数の氷の刃が傷をつける

「ロクロウ!」

「エレノア!かたじけない!!」

「三人で畳みかけるわよ!!」

「応!」

エレノアの聖隷術で隙を作りベルベットがロクロウと同じように跳躍する

「翠波活殺!」

「飛天翔駆!!」

「連なれ真紅!霊槍・獣炎!」

ロクロウは空中で体勢を整え横薙ぎ一閃、ベルベットが縦に回転してから遠心力を乗せた蹴り上げで首の前と後ろの同時攻撃、二人が離れた瞬間にエレノアの駄目押しの火球炸裂と爆炎が広がる。ドラゴンは子の連撃で体勢を崩し地面に落下する

「畳みかけるなら今じゃ!!ブレイズスウォーム!」

「ここで終わらせよう!!鏡面輝き熱閃手繰れ!カレイドイグニス!!」

「冷気の渦よ凍結しろ!フリジットフォトン!」

マギルウの炎の奔流がドラゴンを包みライフィセットが繰り出した鏡の破片に熱線が幾度となく屈折しドラゴンの身を焼く。追い込みにアイゼンが撃ちだした氷塊がドラゴンに当たり破裂、氷の華を咲かせながら巨体が倒れる

「やったの!?!」

「いや・・・まだだ」

着地したベルベットの呟きにアイゼンが答える。ドラゴンから穢れが広がり始め今まで全員が付けた傷が塞がり始めていく

「はりきって回復しとるぞ〜!!」

「一気に押し切らないと勝てんな」

マギルウが焦りロクロウが冷静に分析する中後ろで音が聞こえた。振り向くとザビーダがボロボロの状態で立っておりその直後糸の切れた人形のように倒れこむ

「だから苦しむって言ったのに」

その後ろにいたカノヌシは傷一つ付いておらず倒れたザビーダを見下ろす。ザビーダも時間稼ぎが精一杯であることは承知だったのだ

「ザビーダ・・・」

アイゼンが倒れたザビーダを静かに呼びライフィセットは数秒目を閉じ、そして開く

「僕が、カノヌシを防ぐ。みんなはドラゴンを追い詰めて」

ライフィセットの突然の提案にエレノアがすかさず止める

「一人でなんて無茶です!せめて私も一緒に――」

「これは命令じゃないよ。僕の策戦」

ライファイセットは有無を言わせずカノヌシに向かって進み始める
「・・・任せるわよ、フィー」

ベルベツトは振り向くことなく静かにライファイセットの名を呼んだ

「随分格好つけるね、僕の一部のクセに」

「僕は、聖隷ライファイセット」

ライファイセットは術を発動し光弾を周りに浮遊させる

「僕は僕だよ!!」

手を出し光弾をカノヌシに向かって放つ、カノヌシは手を翳しそれをいとも簡単に防ぐ。だがライファイセットの態度が気に入らずその声が低くなる

「・・・手加減はなしだ。さつきはそれで手こずっちゃったからね!!」

カノヌシも術を発動し同じように光弾を無数に繰り出す。エレノアはライファイセットの覚悟を信じドラゴンの方へ向き直る

「こつちもお出ましょー!」

ドラゴンの傷は塞がりやはりロクロウの予想どおり、隙を与えず倒すか浄化して戻すかの二択しかない。ドラゴンが前脚でベルベツト達を踏みつぶそうとするのを散開し的を絞らせないようにする

「これでは状況は変わりません!」

「変わるわよ、あの子は変えようとしている!」

「賭けだな・・・乗った!」

尾による薙ぎ払いを石柱で防ぐアイゼンもロクロウの賭けに乗る

「俺もだ、部の悪い賭けは嫌いじゃない」

「お主は裏目しかでんじやろーが!!」

黒炎を水球の乱発で相殺しながらマギルウがツツコム

「なら、逆に張れ」

「断る!ここは大穴狙いじゃ!」

アイゼンが言い返すもマギルウは口角を上げそれを拒否する

「皆さん。何とか持ちこたえてください。自分の技でシルバを元に戻してみせます」

ケンは腕を下側で交差させながらベルベツト達に援護を要請する

「どれくらい持ちこたえればいいんだ？」

「すいません、自分もかなり消耗してましてね。無理はしますがそれでも少しかかります」

ロクロウの質問しケンは何苦しそうに答える

「あたし達じゃどの道殺すしかなくなる。アイツに賭けるしかないわ」

「ケンが倒れてもライフセットが倒れてもどちらにせよ儂らはお陀仏じゃ、分の悪いどころか勝ち目がほぼないが、それでこそやる価値があるわい！」

ベルベットは業魔手を出しマギルウも札を追加で出す

「お前ら堪えろよ、此処が正念場だ」

「シルバ・・・必ず助けてみせます！」

ベルベット達がドラゴンに向かって走り出す。ケンは気力を振り絞り両腕から金色のオーラを浮かび上がらせる

(・・・やはり思ったよりエネルギーを放出するのが難しい、二本打つてもこれか・・・！)

「クソ！やはり飛ばれると厄介な相手だ・・・!!」

アイゼンは術で動きを止めようにもドラゴンが戦いに慣れてきたのか機敏さも上がって来ていることに毒づく

「せめて地面に下ろすことさえできれば・・・！」

エレノアは跳躍し槍を高速で回転させドラゴンの表皮を削るもそれ以上の攻撃を前脚と尾を振るい許さない

「破あつ!!」

ロクロウも小太刀を振るうも硬い物を引つ搔く音が響き手応えがないと感じすぐに離れる

「やはりあの時攻撃を受けた時に刃が割れたか・・・!!」

尾が振るい上げを受けた時に小太刀が片方刃こぼれを起こしていた、これでは満足に戦えない

「ロクロウさん！これを使って下さい！」

ケンが腰のバックバックに刺していた短剣を抜き投げ渡す

「かたじけない!!借りるぞ！」

刃毀れた小太刀をしまい短剣を受け取り戦線に復帰する

「翼に穴を開ければ奴は飛べなくなる！そこを狙うぞ、素早く終わらせるならそれしかない！」

アイゼンは風の槍を飛ばし翼膜に風穴を開けようとするがドラゴンもそれを理解しているので大きく動いてできるだけ当たらないようにしている

「ベルベット！ロクロウ！儂らがドラゴンを惹きつけ囷になる！その間に翼を三枚におろしてやれい！」

「風の刃よ斬滅しろ！エアスラスト！」

「描け蒼穹、霊槍・氷刃！」

「弾けおるのか？アクアスプリット！」

アイゼンの無数の風の刃とエレノアの氷の刃、マギルウの水弾を無数に繰り出す。ドラゴンを狙う攻撃と敢えて外す攻撃を混ぜることで逃げ道を塞ぐ

「今だ！行け！」

アイゼンの合図でベルベットとロクロウが左右に分かれ岩壁を蹴り三角飛びで跳躍する

「許せよ！！斬っ！！」

「だああっ！！」

ロクロウが小太刀と短剣を交差させすれ違いざまに翼膜を×字に斬り割り、ベルベットが業魔手で破くように引き裂く浮力を生み出す翼をやられたドラゴンが地面に落下する

「今よ！アイゼン！」

「言われるまでもねえ！詐欺師（フラウド）！！」

アイゼンが大地に手を当てドラゴンの周りから光の鎖がその体がかんじがらめにする

「動きは止めたぞ！！ケン！まだか！！」

ロクロウがケンのいる方向を見ると金色の光が右拳に集まりそれを頭上に上げている

「行きます！！」

左腕を右腕の下に回し右拳を前に突き出す独特の構えから撃ちだ

された金色の光線、コズミューム光線がドラゴンの胴体に命中する。ドラゴンは咆哮を上げながらその背後から黒い塵のようなものが徐々に流れていく。ドラゴンは藻掻きながら攻撃の元であるケンに向かって足を動かし始める

「うおおおっ!!?」

鎖が引つ張られ軋んでいくアイゼンは思わぬ抵抗に驚く

「まだ動けるのか!」

「それほど穢れが莫大ということ!」

「足を止めるか!!」

「駄目!あたし達の攻撃がアイゼンの術に当たりでもしたら策が台無しよ!!」

詐欺師の鎖が五体と翼に絡まりなおかつ動き回るので手が出せない

「アイゼン!!」

「気合を入れたいアイゼン!!正念場と言ったのはお主じゃぞ!!」

エレノアとマギルウに 咤激励されアイゼンが顔を上げる

「言われるまでもねえ!!舐めるなあ!!」

強く大地に手を押し当て霊力を気合の限り籠め鎖が太くなる。ケンもさらに拳を突き出し光線を太くする

「うおおお!!」

ドラゴンは最後の反撃と言わんばかりに深紅の単眼をケンに向けて怪しく光る、その瞬間ケンの体が激痛に襲われる

「ぐああっ!」

血管や筋肉の筋が浮き上がり皮膚が裂け体中から出血し始める、ケンは一度声を上げたが技を解くことなく光線を強くする。ドラゴンの最後の抵抗も穢れが破壊されていくことで弱まっていき徐々に姿がなくなる。

「戻っていくぞ!成功だ!」

光線を撃ち切り光が晴れた時にはドラゴンがいた場所にはシルバが倒れていた。ケンは片膝を着き肩で息をし脂汗と血が流れる

「ケン!?しっかりして!!大丈夫!」

エレノアが駆け寄り触れようとするがそれを手で制す

「自分の事よりどうですか?・・・シルバは無事ですか・・・?」

「ええ、大丈夫よ。でもそれより自分の心配をして!」

エレノアが自分を顧みない行動で無茶をしたケンに怒鳴る

「すいません・・・ですが約束したんですよ、必ず助けると」

若干口角を上げ答え、アイゼン達がシルバの元へ駆け寄る、その時ケンの後ろでライファイセツトの声が響いた。皆がその方向を向くとカノヌシによつて穢れを撃ち込まれたライファイセツトがいた、彼の足元には砕けた羅針盤、なぜかカノヌシの肩頬が腫れあがっており状況からみると殴られたようだ

「ライファイセツト!!」

「うあああーっつっ!!」

ベルベットが異変に気付き走り出そうとした時、ライファイセツトの体から白銀の炎があふれ出す。その炎は彼を蝕んでいた穢れを焼き払いその状況にカノヌシが混乱する

「なんだこれ?!?!ひ・・・あああああつ!!」

炎がカノヌシを呑み込みライファイセツトがその反動か気を失い倒れる

「穢れを焼いた!?!」

ベルベットがその力に驚くが今はそれどころではない、カノヌシを退けた事で時間ができた直に駆け寄りシルバを抱えたアイゼンがライファイセツトを小脇に抱える

「早くぞー!急げ!!」

アイゼンの掛け声と共にベルベット達が後に続くザビーダは口クロウが肩に担ぎケンが少女をおぶる。そのまま全速力でザビーダが乗ってきた船に乗り込み大急ぎで島を脱出した

↳

船が水平線へ形が小さくなるころ、島からその姿をカノヌシが覗んでいた。あの炎を喰らって無事だったようだ

「逃げられたな」

その後ろからアルトリウスが現れた

「白銀の炎・・・あいつ、変な術を使った。それにあの男も対魔士でも聖隷でもないのにドラゴンを自分の力で元に戻した、魔法や霊力でもない、異質の力だ」

「喰らった穢れを消化する、お前の力だろう。欠片だが、あいつも聖主の一部だからな、あの男の力もお前の読みが当たっているかもしれないな」

「ドラゴンが浄化された時一瞬油断したせいだよ。じゃなきや、欠片の力なんかには負けない」

「わかっていればいい。二度は通じぬ奇策だ。所詮『聖隷』は『聖主の隷属物』だ油断さえしなければ、我々の理想は揺るがない」

二人の後ろから声が響く

「ほぼ覚醒したカノヌシの領域には、地水火風の四聖主が揃いでもしなければ対抗できん。だが今彼らは地脈の底で眠っているのだからな」

メルキオルが髭を撫でながらライフセットの力を過小評価する

「・・・追いかけるよ」

一時的にせよ退けられた事でプライドを傷つけられたカノヌシは追撃に出ようとするがそれをアルトリウスが止める

「待て。我らは御座で『鎮めの儀式』の準備をせねばならん」

「奴らは、コイツに追わせる」

メルキオルの横から件の角の業魔が現れる

「業魔でしょ。使えるの?」

「確かに制御は難儀だ。業魔に墮とした時も、七昼夜も幻術に耐えおった。しかも、未だに本能的に抵抗しておる。だが、かつて最凶と呼ばれた海賊。戦闘力は、我ら特等にも引けを取らん」

メルキオルは淡々と所業を話す。人からしてみればとんでもない事をしでかしているが気にもしていない

「喰魔ベルベットを捕らえよ。生きてさえいれば、状態は問わん」

「いや、まずは・・・」

「まずはアイツを——ライフセットを殺すんだ。お姉ちゃんの目の前で、お姉ちゃんを支えてるのは、あいつだから」

カノヌシが角の業魔にそう命令するが業魔は呻き声を上げる

「本当だ。業魔のクセに変な誇りが残ってる。そんな無意味なモノは、僕が喰べてあげる」

カノヌシが業魔の首を掴み上げ喉元に噛みつく、業魔はそれに危険な何かを感じ取り咆哮を上げた

「ふう、なんとか逃げ切れたな」

ロクロウが小さくなる島を見ながら安堵の溜息をつく。ライフイセツトとザビーダとシルバ、聖隷の少女は船室で寝かせている。ベルベット達はこれからどう行動するかを会議する

「さて、とりあえずこれからどうするんだ？ 聖寮に殴り込みを掛けるか、体を休めるか」

「今は体を休めることを優先する、アイゼン、此処から一番近い所は？」

「アイルガンドのカドニクス港が一番近い、行くならそこだな」

アイゼンが海図と方角を確認し現在地と最寄りの港に目星を付ける

「ぷひゅやつと休めるわい、土と埃で汚れてしまったから早く風呂に入りたいわい」

「ですが、そこを突かれて聖寮の追撃が来る可能性がありますか？」

マギルウは宿で休める事を楽しみにしている様で逆にエレノアは刺客の心配をする

「その可能性はある、が、向こうは俺達の実力をわかっているはずだ。手負いといえど普通の対魔士を送り込んでも返り討ちに会うことは目に見えている、聖寮の戦力は無限じゃない。態々出てくることはないだろう」

「そういうことじゃ、それに各地における血翅蝶が農らの足取りを隠してくれる。今はこのピチピチの体を真珠の様に磨き直すのが先じゃよ」

アイゼンの読みにマギルウが賛同する

「決まりね、このままカドニクス港に向かう、いいわね」

ベルベットの号令に皆が言葉に出さず顔を合わせる。そこにケンが船室からでてきた

「これからの予定は決まりましたか？」

「ええ、これから最寄りのカドニクス港に向かい宿に行く。貴方も疲れたでしょ？」

「はい・・・まあ」

「後、武器ありがとうな。助かったぞ」

「お役に立てて何よりです」

ベルベットはケンにこれからの行動を説明する。アイゼンがそこで口を開く

「ライファイセツト達はどうかだった？」

「ライファイセツトに関しては疲れて眠っているだけです。一人でカノヌシとやり合い穢れも焼いたのですからそれは疲れたでしょう・・・。ザビーダさんは怪我こそしてませんが命に別状はありません、怪我は自分がエネルギーを分け与えて治しました・・・。シルバもあの女性の方も問題ありません」

「そうか、すまん」

「いえ・・・」

アイゼンが謝意を示しケンはそれを短く返した。ロクロウは彼が所持していた武器がない事に気付く

「それはそうとケン、お前が持っていた短剣と銃はどうした？」

「ええ、シルバと女性の方は器を持っていないので銃の方をシルバに、短剣は女性の方に渡しておきました。自分は武器は滅多に使いませんし、彼らが持つていれば何かの役には立つでしょう」

「ほう、大胆だな」

「いいのか？あれはお前にとって大切な物じゃないのか」

ロクロウはケンの行動に若干驚きアイゼンは理由を聞く

「自分が持つていても宝の持ち腐れですからね・・・きつといつか役に立つでしょう」

「・・・わかった」

「ええ・・・ちよつと失礼します」

ケンは甲板の手すりの方へ向かう。ベルベットはロクロウ達の方を向き直る

「それじゃ船をアイルガンドに向け……」

「げほお……!!」

言いかけた瞬間ケンのいる方から苦しそうな呻き声が聞こえた。皆がそちらへ向くとケンが手すりから身を出し吐瀉物と血を吐き散らしていた。嘔吐した後手すりに片手で掴み両膝をつく

「どうしたの!?!」

ベルベット達が駆け寄りベルベットがケンの顔を見る。顔面蒼白で体中に筋のようなものが浮き上がっている。過労の極限状態であることは一目瞭然だった

「すいません……気張っては……いたんですが。ここまでが……限……界の……よう……です……」

「マギルウ!」

ロクロウがマギルウに指示を出す

「わかつとるわい!ハートレスサークル!」

回復の術を発動するがケンには効果が表れない

「そんな!?!どうして!」

「術が効いていないというのか……!」

本来であれば万人に効果があるはずの術がケンには効かない。本来であればありえないことだった

「この事については……後で……せつ……め……い……します……から」

ケンはその最後に体がぐらつき横に倒れた

第45話 終わり

第46話

「いやあ、いい修行になったが、神依と聖主とドラゴンにぶつかって生き残るなんて奇跡だな」

カドニクス港に着いたザビーダの船からロクロウが先に降りボラードにロープを巻き付ける

「・・・ファイのおかげよ」

「まだ眠っています。力も気力も振り絞ったのでしようね」

エレノアは前もってライファイセット達を宿へ移す為に甲板に連れてきていた。まだ寝息を立てている

「穢れを焼く炎・・・とんでもない力をもっておるのう」

「この子がカノヌシの一部だから？」

「じやろうな。最高の切り札じゃが、同時に・・・」

「・・・」

マギルウは言葉に出すことはなかったが言わずともわかるだろうとベルベットに視線を合わせる

「なんでもいいが、儲け損ねたわい。賭けは儂が勝つはずじゃったのにー」

「どーでもいいでしょ、1000ガルドぐらい」

雰囲気を変える為か、マギルウが話題を変え未だに拘る賭けの話になる

「ちいゝゝともよくない！1000ガルドを笑う者は10000ガルドで大爆笑!!この恨みは深いぞよ・・・」

「・・・で、次はどうするんだ？」

船止めを終えたロクロウがベルベットに今後の方針を聞く

「変わらないわ。カノヌシを封じてアルトリウスを討つ。カノヌシが覚醒したという事は、封印する方法もあるはずよ」

「やはり手掛かりはグリモワールの古文書ですね。ベンウィックたちと合流しましょう」

「・・・いいのね？」

「正解かどうかは、わかりません……でも、アルトリウス様が必要とする犠牲を『仕方ない』と済ませることもできない。だから、自分の心に従って戦います。例えば間違っても、後悔しないように」

「とことん面倒くさい性格ね」

「あなたに言われるのは心外です」

聖察の命令にただ従っていたあの時から、ありとあらゆる矛盾を見てきたエレノア。アルトリウスの理想に疑問を持っている今、真実を確かめるまで止まることはないだろう。その真つ直ぐな意志にベルベットも呆れているが表情はどこことなく柔らかい

「アイゼン、ベンウィックたちへの連絡を頼む」

「やはり、あの業魔は……」

「アイゼン？」

ロクロウはアイゼンに連絡を頼んだが当の本人は独り言を呟いている。ロクロウが再度声を掛け気づいたアイゼンは独り言を切り上げる

「……まずは休息をすべきだ。かなりの連戦だったからな、あいつもかなりつらいはずだ」

アイゼンが目を向ける先にボラードに腰掛けながら休んでいるケンの姿が見える。倒れた後一時間ほどで目を覚まし港に着いた後アイゼンは休むように指示を出していた

「じゃの。坊もザビーダも聖隷達も起きんしのー」

「今日は宿で休みましょう。エレノア、ライフイセットをお願いします」

「あなたが背負ってあげたら？ライフイセットは、あなたの為に――」

エレノアがそう言いかけた時ベルベットから黒い靄が湧き出てくる。それがどういう意味かベルベット自身がよく知っている

「お願い」

「……わかりました」

エレノアもそれを察し、承諾しエレノアから踵を返す。ロクロウはそんなベルベットにエレノアの隣まで歩いてきた

「おぶってやればいいのに。つれない奴だなあ」

「……逆ですよ」

エレノアはロクロウの言葉に一人呟いた。その後エレノアがライ
フェイストを、アイゼンが女性の聖隷を、体力が少し戻ったケンがザ
ビーダを背負いシルバを抱きかかえ港にある宿に向かった。宿に着
き男性女性でそれぞれ別部屋を取り、それぞれ自由時間となった

ベルベットはあの時と同様に真っ白な空間にいた。椅子に座り長
机の向こうにはシアリーズが座っている

「お姉ちゃん……って呼んでいいんだよね？」

ベルベットはシアリーズにそう語りかけるが、彼女は首を横に振る
「私は聖隷シアリーズよ。セリカの記憶を受け継いだだけ」

「それは、同じ人ってことじゃないの？」

「なにをもって、同じ人というのかしら？姿や記憶が同じでも……」
記憶はあくまでも記憶でしかなく姿を似せても完全に他者に成り
代わる事はできない

「そうね。心が変わってしまえば、それはもう同じ人じゃ……」

「もし私がセリカだとしても、姉と呼ばれる資格はないわ。アルトリ
ウスの命ずるままに、妹と弟を生贄にしまったんだもの」

自らを卑下するシアリーズをベルベットが止める

「あたしこそ……あなたを食べちゃった。あたしに責める資格なん
て……」

「あれは私が望んだことよ、ベルベット。あの時無事に済んでも、いず
れああするつもりだった。私の力を、あなたに与えるために」

「どうして……？」

「降臨の日の直後……私にセリカの記憶が戻ったの」

シアリーズがその時セリカの姿に変わる

「!!」

「わかってしまったの。自分が何をしたのか、あの優しかったアー
サーが……」

次の瞬間セリカからシアリーズに変わる

「冷酷なアルトリウスに変わってしまったことが」
「なぜ記憶が？」

「わからない。転生した聖隷には、ごく稀にそういうことがあるらしいけど……うん……これはきつとあなたたちを苦しめた罰ね。だって、アーサーを愛しく思うほど、アルトリウスが許せなくなるんだもの……あの人を憎んでしまう私は、セリカじゃないのよ。シアリーズでは、あの人をアーサーには戻せない。かといってアルトリウスを倒すこともできない。でも、あなたなら！私の力を完全に身に着けた喰魔のあなたなら、導師アルトリウスを……！」

「わかったわ。必ず」

アーサーとアルトリウス、ベルベット達にとっての家族はアーサーであり、緋の夜でアーサーは死にアルトリウスとなった。あの時何もわからず命令されるがまま二人を傷つけた自分を許せず、だが自身自身では戦うことすらできない情けなさ、そしてその決着を他人に託さなければならぬ残酷な運命。自身を責めても責めても責め切れぬだろう

「ごめんね、ベルベット。自分の憎しみの決着をあなたに押し付けちゃった。最後のお別れに……謝りたかったの……」

シアリーズの謝罪にベルベットが首を横に振る

「あなたに会えてよかった。あたしは、ラファイのお姉ちゃんで……セリカお姉ちゃんとアーサー義兄さんの妹で……幸せだったよ」

その言葉をきいたシアリーズ／セリカは穏やかな笑みを浮かべながら消失していった

ベルベットはその後目を覚まし、宿から外に出る。夜も更け寝静まった港には波と風の音しか聞こえない

「……」

「ベルベット」

ベルベットは右手を上げ何かに気付くがその時後ろから足音が聞こえた。振り向くとライファイセットが歩いてきた

「もう起きて平気なの？」

「うん。それより——」

ライファイセットが近づこうしたがベルベットが身を引いて止める

「危ないわよ」

「あ……！」

ライファイセツトはベルベットからあふれ出ている穢れに気付く
「どうとうこんなになっちゃった、当然よね。平穏な世界より、自分の復讐を願ったんだから。災禍の頭主なんて呼ばれても、言い訳できないわ」

ベルベットは自嘲気味に笑うが構わずライファイセツトが歩み寄る
「人間でも業魔でも魔王でもベルベットは……」

ライファイセツトは櫛を取り出しベルベットに差し出す
「ベルベットの髪は奇麗だよ」

ライファイセツトから櫛を受け取ったベルベットはそれを大事そうに両手で持つ

「昔ね……ラファイも同じことを言ってこの櫛をくれたの」

「胸が……痛いね……」

ベルベットは海の方を向き直る

「うん……それでも……ううん、だからあたしは決めたのアルトリウスとカノヌシと『決着』をつけるって。あたし自身と——あたしが大好きだった人たちのために」

「僕もだよ。羅針盤がなくても……進む方向は自分で決める」

あの時羅針盤を盾にしたのはライファイセツト自身の成長の証ともいえた

（アルトリウスは、あたしが倒す。けど……カノヌシを殺したら、ライファイセツトと、あたし達喰魔は……）

その後ろでケンを除いた四人がその姿を見守っていた

「羅針盤……か……」

アイゼンが静かに呟いた

）

その後ベルベットとライファイセツトは宿屋に戻りそれぞれの部屋に分かれようとしたがエレノアに呼び止められ男性陣の部屋に皆が集まっているということで皆が集まる。ちなみにアイゼン達は一足先に戻っていた

「どうかしたの？みんな集まって」

「ああ、ケンのことについて、な」

ロクロウの視線の先にはベッドに眠っているケンがいる

「地脈でカノヌシとやり合った時奴が気になることを言っていた『どこの世界からやってきた』ってな」

「ああ、ケンに向かって言ってたからな、間違いない」

椅子に座ったアイゼンと壁に寄り掛かるロクロウ

「私も聞こえました。呑み込まれないように必死でしたけど確かに」

エレノアも頷く

「まあ、それどころじゃなかったけどあたしも微かに聞こえてた。あんな誰も近づかないようなタイタニアでばったり出くわしたものの異海からやって来たのなら知らないで当然だけれど雰囲気でわかるはずだし」

「ぼくもカノヌシがそうだったのも聞こえたよ。大地の記憶を覗いたけどケンだけの過去の物がないって」

ベルベットもなんとなくであるが気づいていたようだ。当の本人から聞き出してもよいが深く眠っている様で起きる気配がない、だからと言って無理矢理起こすわけにもいかない

「本人に直接聞いてもいいがこんな状態だからな。正直今じゃなくても問題はない。こいつが回復してからでもいい」

「儂はそこにいなかったから知らなんだが、カノヌシの言いぐさはちと気になるの〜」

机に肘を着いていたマギルウが前髪を弄りながら疑問を呈す

「気になる？」

「大地の記憶は過去の全てを記録し聖主であるならば余すことなく見ることができはずじゃ。それがケンだけ全くないなんておかしいじゃろ。ましてや監獄島からしか記憶がないのでは魔訶不自然じゃ」

マギルウの言う通り人や自然の営みを記録するはずの大地の記憶が抜け落ちることなど万一にもありえない

「もし本当に異世界から来たとなればそこには第三者の力が働いているはずだ。こいつ自身の力では此処に来れるとは思えないしな」

「ですが、一体何のためにその誰かがケンを此処に連れてきたのですか？理由がわかりません」

アイゼンが顎に手を当て推理するなかエレノアもアイゼンの仮説を元に思考する

「監獄島が最初っていうならあたしと初めて出会う直前・・・船で流れついたとか言ってたけど、まあ出来すぎだとは思うけど」

「ベルベツトがいた独房に行く通路は一本、それまでに他の囚人のいる独房を通らにやならんし警備もある。その場しのぎの嘘だつてのは薄々気づいてはいたけどな」

ベルベツトに続いてロクロウもケンに付いての感想を述べる。謎が深まり議論が平行線を辿ろうとしたその時、窓の方から声が聞こえた

「なら、私が代わりに説明しよう」

「!!!」

全員が声のした方向を向くと窓際のスペースにルシフェルが脚を組みながら座っていた。ベルベツト達は驚愕していた、音もなく気配も感じなかった。その時点でこの人物は只者ではないと理解した

「てめえ・・・なにもんだ」

アイゼンが椅子から立ち上がりルシフェルに質問する。ベルベツト達も警戒を解くことなく身構えているが当の本人は特に気にすることなく淡々と答える

「私の名はルシフェル。まあ形式的に言えばケンの上司って所かな」

「上司だと？」

「ああ、かなり無茶をして彼はこんな状態だし、君達も気になるんだろう？何故彼がこの世界に来たのか、そして何故私が此処にいるのか」

「・・・」

ベルベツト達は黙ったままだが、その様子から肯定と受け取ったのかルシフェルが話を続ける

「まず最初に彼についてだ。彼はこの世界の人間じゃない。君達も感づいているだろう？」

「そんなことはわかっている。問題はなぜあいつがこの世界に来るこ

とになったのか。お前は何か知っているのか？」

「知っているさ。なんせ私が彼をこの世界に連れてきたのだからね」
「なに？」

ロクロウはルシフェルの発言に反応する

「ケンはい前いた世界で事故により死亡した。だがそれは偶然起こったことなんだ」

「偶然？」

「本来であれば彼は寿命で人生を終えるはずだった。だが稀に……所謂輪廻というやつかな、それから外れる魂があるんだよ。そういう時は私や部下がその魂を導き新しく生まれ変わらせるのが通常なんだがね、だが」

ルシフェルが言い終わる前にアイゼンが口を開く

「だがあいつは違った。曲がり曲がって輪廻から外れた挙句元居た世界で生まれ変わることができなくなったということか」

「察しいいんだな、まさしくその通り。これは私でも予測できなかった初めての事だったからな。彼の魂ははじき出されそれを神が掬い上げた」

「神……聖主ではないのですか？」

エレノアはルシフェルの神というフレーズに疑問を感じた

「君達にとつては聖主と思ってくればいいさ。神はケンの魂を私に預けた、神は君達がいるこの世界の声……まあ意志といった方がいいか。その声を神が聞き届けそれに応えるためにケンを鍛えたのさ。理不尽かもしれないが私がいる所には一部人間に寛容じゃない奴がいるからな。そこにケンを連れてくればどうなるか、大体想像つくだろう？」

「あんたの言う神はこの世界を護るためとケンを守るために此処に連れてきたってこと？」

「簡単にいえばそうなるな」

ベルベットの問いに携帯を弄りながら返答をする

「さて、これで大体の説明は済んだ。私は失礼するとするよ」

「失礼するって言っても、何処に行く気なんじゃ？もう夜じゃし心水

でも飲むのかえ」

窓際から立ち上がり携帯をしまいながら部屋の扉へ向かうルシフェルにマギルウが質問する

「なに、私の心配をする必要はない。こう見えても今仕事なんだ、他に聞きたいなら彼に聞いてくれ、それじゃ」

ルシフェルは扉を開けるまでもなくすり抜けるようにして消えていった

「な……」

「消えた……!?!」

「瞬間移動? いやでも気配はあったし……」

「まさかとは思いますが、幽霊?」

「んなことあるかい!」

マギルウはエレノアにツツコミを入れると改めてルシフェルが座っていた場所を見る

「はあ……ま、ケンも変わっておるならあやつもまた変わっておるわい。今日は摩訶不思議な事が多すぎて流石の儂も疲れたわ、先に寝るぞえ〜」

マギルウは伸びをしながら部屋へと戻ろうとする

「まだ情報の整理が必要だが。今日は流石に疲れた」

「……そうだな、マギルウの言う通り詮索は後回しにする。今日はお休むぞ。いいな」

「そうですね。かなり気になりますけど今考えても仕方ないですし」

「わかったわ」

「応」

「それじゃ、お休みなさい」

アイゼンの号令で女性陣は自分の部屋に戻っていった。三人は床に入った後。暫くしてエレノアが呟く

「ケンは……今までそんな事一言も言っていませんでしたね……」

「……気にするほどのことじゃないでしょ」

隣の寝台に眠るベルベットが寝返りをしながら答える

「そんなに気になるなら直接あやつに聞けばよからう。ふあ〜」

「それは、そうですねど……」

「あいつがこの世界に来たのは、少なくとも自分の意志ならそれでいいじゃない。知りたいなら直接相手に聞きなさい」

ベルベットは目を閉じそれを最後に寝息を立てはじめ。マジルウは既に夢の中である、エレノアは窓から夜空を見上げた

次の日の朝ケンは小鳥の朝の囀りに目を覚ます。寝台から上半身を起こし部屋を見渡すが皆の姿はない

「……どうやら結構な時間眠っていたようだ。こんなに長い時間寝たのは久しぶりだな」

寝台から立ち上がり体の調子を確認する為腕や足、胴体捻りながら動かす

「疲労は大丈夫そうだ。昨日の過労が嘘みたいだ、さて……」

手早く準備を済ませてベルベット達がいるであろう一階に向かうと扉の方を向いた時、そこからライフイセットが顔を出す

「あ、ケン。おはよう。体は大丈夫なの？」

ライフイセットが歩み寄る。ケンは軽くストレッチをして大丈夫であることを証明する

「ちゃんと休めたから問題ないよ。ベルベットさん達は？」

「下にいるよ、こつちも準備できたから起こしに来たんだ」

「ならこうしちやいられない。待たせるわけにはいかないね、直ぐに行こう」

ケンはライフイセットに続いて一階へと降りて行った。外に出ると全員いたのだがアイゼンとザビーダが向かい合って険悪な雰囲気を出していた

「アイゼン！ てめえ、なんで黙ってやがった！」

「……」

「落ち着け！ お前が気絶してたからだろう」

アイゼンに詰め寄るザビーダをロクロウが止める

「ちつ、俺は行くぜ！ あいつを止める！」

あいつとは角の業魔、その正体は誰だかはもうわかっているのだろ

う。ザビーダはシルバの方へ歩みより膝を着き目線を合わせる。そこにケンを呼び寄せる

「何事ですか？」

エレノアが事の次第をアイゼンに質問する

「・・・バンエルティア号から連絡が届いた」

「よかった。みんな無事？」

「今は、まだな」

「？」

ライフィセットがそれを聞いて一安心したようだがアイゼンの表情は優れない。代わりにロクロウが説明する

「ベンウィック達は、逃げる途中でアイフリードがエンドガンド領にいるという情報を掴んだらしい。リオネル島で合流しようとして伝えてきたんだ」

「その情報って・・・」

あまりに都合の良いすぎる事の運びにベルベットが眉を上げる

「罨だ。仕掛けたのは、あの大角の業魔・・・おそらくアイフリード自身だ」

「あの業魔がアイフリード!？」

「マジなのかえ？」

「?おそらく」だ

おそらくと言葉を濁したがアイゼンの表情と口振りからして本人であることは間違いないだろう。業魔と化したアイフリードが船員に被害を与えるのは何としても阻止しなければならぬ

「リオネル島に向かうわよ相手が誰だろうと、手掛かりとバンエルティアを失うわけにはいかない」

「足はどうする?ここへ来た船はザビーダが乗って行ったぞ？」

ベルベット達がこれからの行動を検討している間ザビーダがケンにシルバと聖隷の女性を託し港の方へ向かって行った。船は使われただろう

「港で適当なのを奪う」災禍」というにはセコイけどね」

「ベルベットさん、お待たせしました」

そこにケンが二人を連れて戻ってきた

「その様子だと二人を任せられたみたいだな。どうする」

「できればどこか安全な場所にと考えているんですが。心当たりがありませんからね・・・」

ロクロウがケンに質問する、大方頼まれて断り切れなかったのだろう。頭を掻きながら困っているその後ろから声が聞こえた

「なら、私が連れて行こう」

「ルシフェルさん。人前に入るつもりはなかったはずでは」

ベンチに座っていたルシフェルが立ち上がりこちらに向かって歩いてくる

「そのつもりだったんだがね、君が休んでいる間に君自身の話題が上がったから疑問を解消してあげるために出てきたのさ」

「連れていくと言っていましたか、安全な場所があるのですか？」

エレノアの質問にルシフェルが聖隷の二人を観察しながら答える

「とある場所に聖隷達が暮らす隠れ里があつてね。そこなら保護してくれるだろう、それまでこの二人は私が預かるよ」

「・・・わかりました。ベルベットさん、これからの予定は」

「港で船を奪ってエンドガンドまで行く。そこにベンウィック達がいる、あの大角の業魔がアイフリードの可能性が出てきていても立つてもいられなくなったみたい」

「それでしたら自分の技で」

ケンはあの時の様にルナポジションで瞬間移動しようと提案したがアイゼンがそれを制する

「待て、いくら少人数と言え体力の消耗は抑えるべきだ。万が一の為だ」

「・・・でしたら自分に考えがあります時間をください。アイゼンさん、ある所に連絡をお願いしたいのですが」

「なんだ」

「船を奪うとなれば騒ぎになりますから、伝手があります。ではルシフェルさん、よろしくお願いします」

ケンはアイゼンに説明し連絡の準備をしてもらうことにした。そ

れと同時に港の方へ向かっていった

「さて、私たちも行くとしようか。準備はいいか？」

「あの」

ルシフェルがケン達の後ろ姿を見ながら残された二人に合図を送る、その時シルバがルシフェルに声を掛ける

「ん？どうした」

「貴方は？聖主？」

シルバのそんな質問にルシフェルが応える

「少なくとも私は聖主じゃない、それに聖隷でもないんだが・・・似たような物さ、さ、行くぞ」

ルシフェルが指を鳴らした時三人の姿はそこにはなかった

↳

第46話 終わり

第47話

ベルベット達を乗せた船は一路エンドガンド領に向けて航路を取っていた

「この船、いい速さで走るじゃないか。これならリオネル島までそうかからないな」

ロクロウが今乗っている船の船速に感心している

「まさかあのかめにんが船を持てるぐらいに規模を拡大していたとはな・・・」

アイゼンが舵を取りながらつぶやく

「ケンがかめにんに投資をしていたなんて初めて聞きましたよ」

「あの時二人で話し込んでいたのはその為だったのね」

エレノアとベルベットが風を受けながらケンの方を見る

「自分もここまですると思いませんでした。ですが結果的にいい方向に進んだということですよ」

ホワイトかめ屋はケンが密かに行っていた莫大な投資を元に各地の商会や組合に取り入り事業参入、そこに他のかめにん達も加わり生来の商売の才能を遺憾なく発揮し販路を陸路と海路に伸ばし今では指折りの商会にまで成長していた。ケンはかめにん一族から超優待会員として登録されており、ケンが船を借りたいと連絡をしたとき彼らは超特急で快諾、その港に停泊していた数隻から一番いいのを貸し出してくれた

「ところであの時ルシフェルさんが自分の事でベルベットさん達と話したということですが・・・」

「うん・・・実は・・・」

ライファイセットが皆に代わり昨夜の事をケンに説明した

「ええ、その話で間違いありません。隠すつもりもなかったのですが」「意外と壮大だったから最初は驚いたがな」

「事故で死んだあげく世界からはじき出されてとアイゼン以上に運が悪いの〜」

箱の上に座るマガルウがアイゼンを引き合いに出す

「その……寂しくないの？」

「うん？」

ライフィセットがケンにそんなことを聞くケンはその意味に疑問符を浮かべる

「家族の人と離れ離れになって……こと？」

エレノアがライフィセットの質問の意味を聞く。ライフィセットが頷く

「……初めてルシフェルさんと出会い、自分の死因と経緯を聞いた時、確かに愕然としたよ。でもそれ以前に君と同じで家族の事が気がかりだった……でも」

「あやつの言う通り生き返る処か元の世界にも帰ることもできぬ……八方塞がりじゃった」

その先に言葉をマガルウが続ける。ケンは小さく頷く

「その時考えたんです、置いて来てしまった家族が今どんな気持ちでいるのか。両親が絶望して後を追ってしまったら……と、その時ルシフェルさんにある事を頼みました。自分勝手すぎる事でしたが」

「あること？」

ベルベットがそれに眉を上げる

「ルシフェルさんに以前いた世界で自分自身がいたと云う存在と事実を完全に抹消してもらおうように頼みました」

「……その事はあの男からは聞いていないな」

「存在と事実の抹消って……」

アイゼンが顎に手を当てる。エレノアが驚くのも無理もない。それが本当ならば

「はい。もはやその世界では誰も自分の事は知りません、寧ろ最初から存在していません。家族は両親と姉だけになっているはずです……その時はそうせざるを得ませんでした。ベルベットさんに怒鳴られてしまいますが」

「寂しくないの？」

ライフィセットの問いかけにケンは微笑みながら答える

「いや、今はベルベットさん達や海賊の皆さんがいるからね、寂しくないよ。一方的だけど元の世界にいる家族の幸福を祈るだけさ」

「・・・」

ベルベットは一瞬目を閉じ沈黙するが直に開きケンを見据えた

「今更どうこういうことじゃないわ。あたしだってもし同じ立場になったとしたら頼んでいただろうから」

「・・・ありがとうございます」

「礼なんかいらさないわ、・・・それよりもこれからどうするか、よく考えなさい」

「はい、わかりました」

「」

「・・・」

舵を取りながら浮かない顔のアイゼンの所にライファイセットがやってくる

「アイゼン、順調？」

「もうすぐ到着するはずだ。この船には、いい羅針盤がついていたからな」

「うん」

ライファイセットの的確な方角の測定で最短で島に進んでいる。アイゼンはライファイセットを誉める

「・・・だが、俺の針は揺れているようだ。初めてあの業魔を見た時から、アイフリードの気配を感じていたはずなのに・・・無意識に認めまいと押し込めちまった」

アイフリードが業魔になってしまったことを認めなければならぬ。頭ではわかっていたとしても心ではそれを認めたくない。現実と願いの板挟みになっていたアイゼンが遠くを見る

「アイフリードが大事な友達だから・・・でしょ？ 『死神の力もアイゼンの流儀だ』 って言ってくれたんだよね」

『冒険を盛り上げる、いい道連れだ』ともな。一緒に二十日も漂流して、死にかかった海の上で」

「・・・すごい人だね」

救助が現れるまで二十日も海の上、それでも文句や恨み言など一つも言わずむしろ楽しんでた時点で相当な変人である

「お前も、同じ事をベルベットにやっただろう」

「アイゼンが教えてくれたからだよ。自分の舵は自分が取れ”って”
「・・・そうだな。それが――」

アイゼンが何か言いかけた時ライファイセットが前方を指さす

「リオネル島が見えた!」

アイゼンが言いかけた言葉を呑み込み頭を切り替える

「まずい・・・バンエルティア号がもう着いてやがる」

リオネル島付近に到着した一行の前に、栈橋に係留されているバンエルティア号を見つけた。先についてしまっていた、ベルベット達は船を向かい側に着け島に上陸すると陸地にベンウィック達が倒れていた。その中にはクロガネやダイル達もいる

「・・・遅かったか」

「エレノアー!!」

そこにモアナがエレノアに向かって走り寄り彼女の腰に抱き着く。後ろにはメデイサが腕を抑えふらつきながら歩いてきた

「なにがあったのですか!」

エレノアがモアナから事情を聞くためしゃがみ目線を合わせる。

泣きじやくりながらモアナが続ける

「いきなりツノの業魔が襲ってきたの・・・」

ロクロウは倒れているダイルの様態を確認する。痣や出血はあるが肩が僅かに上下している

「かろうじて息はある」

「ザビーダが駆けつけてくれたのよ。じゃなかったら全員殺されていたわ・・・」

そこにグリモワールが近づきながら事の詳細を説明する恐らく彼女が襲われそうになった時ザビーダが到着したのだろう

「・・・俺が迷ったせいだ」

「やつらはっ!」

「ザビーダが引き付けて、島の奥に向かったわ」

グリモワールの言う通り小さなクレーターや引っ掻いた後、小さな穴が無数に奥へと続いていた。ライフセットは回復の聖隷術で、ケンは救命措置とコスモフォースで治療に当たっていた。だが数人は致命傷をおい息を引き取っている

「がんばってください．．．どうか諦めないで！」

ケンが傷口にガーゼを当て強く押しながらコスモフォースでなんとか助けようとするがおびただし出血で船員もはや虫の息だ

「む．．．無駄だ．．．どの道俺はもう．．．助からん．．．」

「しかし．．．！」

船員はケンの肩に手を置き止めるよう諭す

「．．．あの角の業魔．．．船長．．．なんだろう」

「なぜそれを」

「俺達だけが、使つ．．．てる．暗号で．．．連絡が．．．届いたん．．．だ．．．それに長年．．．ついて来たんだ．．．なんとなく．．．わかるのさ．．．」

船員は血を口から流しながらも続ける

「俺達はな．．．最初見た時から．．．確信．．．したんだ．．．あの業

魔は．．．船長だつてな」

咳き込み吐血が多くなる

「駄目です。これ以上喋らないください」

「ゲホツ!!頼む．．．!船長を．．．助けてやってくれ．．．!!」

「!!」

敵になってしまい、殺められた仲間もいるにも関わらずケンにそう懇願する

「．．．落ちぶれて、行く宛てのない俺達を．．．拾ってくれた．．．船長には．．．感謝してたんだ．．．みんな船長と．．．副長に．．．命を預けてたんだ．．．ごほっ．．．いつ死んでも、後悔はない．．．つてな」

「．．．」

船員の目が段々と虚ろになり遠くを見るがそれでも気力を振り絞り続ける

「頼む．．．船長が．．．責任を感じ．．．たら．．．生きてくれつて．．．」

言ってくる……れ……俺……達の……分……ま……
で……」

置かれていた手が落ち船員は息を引き取った、ケンは処置を止め船員の両脇を下ろす。負傷者を船室に運び、遺体は陸地に安置する。茶毘にするのは後である

「アイゼンさん……終わりました」

「……すまん、だがまだ先にするべきことがある。行くぞ」

グリモワールから詳しい情報を聞いていたアイゼン達は島の奥へと歩を進めた

「本当に、あの業魔はアイフリードなのかな……」

「本人を一番よく知っているアイゼンが言うんだから、間違いないだろうな」

島の奥に向かいながらライフイセットは角の業魔について疑問を口にする

「でも、貴方やクロガネのように、強い意志を持った人間は、業魔になっても自分を失わないのでは？アイゼンの話を聞く限り、アイフリードも相当な意志の持ち主だと思いますが」

「自分を失わないといっても業魔は業魔だ。残った自分つても、人間の時と同じじゃない」

業魔であるロクロウは人間の時の自身を現在の自身を比べる

「人間だった頃の気持ちは忘れちゃったが、多分人間のロクロウから見たら、今の俺は立派な化け物さ」

「……」

感情が希薄になり、文字通り戦闘狂になってしまったロクロウは過去の自分をその様に評価した。エレノアは何も言えない

「業魔化したアイフリードに残った、自分」が聖寮への服従を選ぶこともあり得るわけか……」

「いや、メルキオルとあやつ呼吸はいまいち合っておらんようじゃった。多分、幻術を利用して操っておるのじゃろう」

ロクロウの経験を元にアイフリードが敵に回ってしまう可能性を

考慮するがマガルウがその考えに異議を唱える。カリスで業魔を出した時メルキオルがいい顔をしなかつたのを思い出す

「ロウライネやアバルで見たような幻？それで業魔を操れるの？」

「現にできておる。ま、操ることよりも。あのアイゼンが認めたほどの強靱な精神の持ち主を業魔に墮とす方が、よっぽど難しそうじゃがの」

「おそらくメルキオルは、相当えげつない幻術を使ったんだろうな」

ロクロウが見立てを立てる横でライファイセットが呟く

「アイフリード……アイゼン……」

く

ベイルド沼野にたどり着き奥に進むとそこから大きな衝突音が響き渡る。音の響いてくる方向へ向かうとそこには角の業魔と相対したザビータがいた。だがそのザビータも手ひどくやられたようで体中ボロボロだった

「ぐうう……」

「ザビータ！お前は！」

ロクロウの声を皮切りに皆が構えるがそれをザビータが止める

「やめろ!!この拳は間違いない……こいつはアイフリードだ」

眼前の業魔を睨みつけるザビータ、その目はどこか悲しみもあった

「なぜやり返さない？」

「こいつには……俺を、俺」に戻してもらった借りがあるからよ……

今度は、俺が元に戻してやる番さ」

「……業魔は、もう人間には戻らん」

「……にいちちゃん……シルバを戻したあの技、もう一度頼めねえか？」

「自分としては構いませんが……」

「止めるザビータ。これは俺達とアイフルードの問題だ、これ以上ケンを巻き込むな」

「……」

ベルベツトはその言葉に反応するようにライファイセットとケンを見る

「だからって流儀を変えられるかよ・・・なあ、アイフリード!!」

ジークフリードを嶮谷に当てようとした時、アイフリードが急速に接近し発勁の如く平手で突き出しザビーダを後方へ突き飛ばす

「ぐああ・・・っ!!!」

「ザビーダっ!!」

アイフリードが次にライファイセットに狙いを定め走り出す。予想外の行動にベルベット達は反応に遅れるがケンはそれに直に気づきライファイセットの前に出る。拳が眼前に迫るがそれを横からアイゼンが掴みとめる

「・・・子供まで狙うのか・・・ベンウィック達は、共に命を張った仲間だ」

アイゼンがザビーダの腕を捻り上げる

「ザビーダは馬鹿だが、仁義を通した。奴らの流儀を踏みにじる野郎は・・・」

捻り上げたままライファイセット達から離れアイゼンは右の拳を握り締める

「てめえでも許さねえっ!!!」

体勢を崩しているアイフリードを腕を起点にして放り投げる倒れたアイフリードはすぐ其処に落ちていたザビーダのジークフリードに気づきそれを素早く拾い上げ立ち上がる。それを自らの嶮谷に当て引き金を引き。力を増幅させる

「お前には、でかい借りがある。それを今返すぜ、アイフリードっ!!」

ジークフリードを投げ捨て走り出すアイフリードにベルベット達が構えるがアイゼンが手を横に出し制する皆がそれに反応する

「アイゼン!?!」

「俺一人でやらせてくれ、わがままだがな」

ライファイセットがアイゼンの行動に驚く、表情は見えなかったが横顔から覚悟を決めたように見えた

「・・・わかったわ、その代わりアンタがやられたらあたし達がアイフリードを殺す。いいわね」

「ああ」

ベルベットの条件を呑みアイゼンはアイフリードに向かって走り出す

「うおおおっ!!!」

アイゼンが拳を振りかぶりアイフリードが貫手をつきだしお互いの攻撃がかち合う

「ぐっ!!」

「がっ!」

お互いに弾かれるが両者は今度は回し蹴りでを繰り出しそれもぶつかり合う。ベルベット達がそれを見守る中ケンはザビーダの元に駆け寄り抱え起こす

「ザビーダさん、しっかり」

「ううっ……っう……すまねえ。また世話掛けちゃった」

「いえ。自分は構いません」

ザビーダが前を見るとアイゼンとアイフリードが拳と蹴りの一進一退の攻防を繰り返していた

「……アイゼンはアイフリードを殺る気か……」

「恐らくは……アイゼンさんはこれ以上アイフリードさんを苦しめたくないのでしよう」

「もう……どうすることもできねえのかよ……」

ザビーダはそう呟き顔を伏せる。ケンはそれを数瞬見つめ前を向く

「ここに到着した時団員の皆さんを介抱しました……残念ですが手遅れの人もいました……」

「……」

ザビーダは黙ったままだがケンはそのまま続ける

「ですが息を引き取る直前団員の人がいきました。船長を助けてやってくれと」

ザビーダはその言葉に反応したように僅かに顔を上げる

「こんな俺達を拾ってくれた船長に感謝していると。その時から船長と副長に命は預けていたと、だから後悔はない、船長が自分らの死に責任を感じているのなら。生きてくれと」

「あいつらが・・・」

ザビーダは胡坐をかき立っているケンの顔を見る

「自分は団員の人たちに託されました。であれば、自分はそれに応えます・・・まだアイゼンさん達には伝えていませんが・・・」

アイゼンはアイフリードの蹴りを受け流しカウンターのジャブを腹部に叩きこむ、だがアイフリードは倒れることなく拳でアイゼンの頬を殴る。ぐらつくアイゼンだが踏みとどまる。エレノアがたまらず声を上げる

「アイゼン！」

「心配するな!!」

口内からの出血した血を吐き捨て今度はアイゼンがアイフリードの顔面に拳を打ちつける、若干揺れたアイフリードはの胸倉を掴み自身の額をアイゼンの額に打ち付ける。鈍い痛みで一瞬意識が飛びかけたがお返しとばかりに角を掴み同じく頭突きを叩き込む。二人は一歩後退り同時に拳を繰り出し交差しながらお互いの頬に拳がめり込む

「アイゼン!!もう止めてください!!このままでは死んでしまいます!!」

エレノアが助けようと走り出すがロクロウがそれを止める

「無駄だエレノア。これはアイツの意地の戦いだ、今止めようとすれば例えお前でも容赦しないだろうさ」

「ですが・・・!!」

「ロクロウの言う通りじゃぞエレノア、そんなにあやつの事が心配なら祈ってみたらどうじゃ。死神に祈りなぞ滑稽極まりないがの」

マギルウが岩に腰掛け足を振りながら二人の戦いを見ている

「エレノア、ここでアイゼンが倒ればそれまでの事よ。この戦いを見届ける」

アイフリードはアイゼンが繰り出した拳を躲し腕を掴むと一本背負いの要領で投げ飛ばす

「ぐはあ!!」

地面に背中から打ちつけられ息を吐き出すアイゼン。アイフリー

ドは倒れたアイゼンに胸を踏みつける

「ぐああっ……!!」

急激な圧迫で声を漏らすが右手を地面に当て聖隷術を発動する

「!!」

アイゼンの横から突き出てきた石の柱がアイフリードの胸部を打突し踏みつけていた足が離れる。その隙を見逃さずアイゼンが素早く立ち上がり攻勢に出る

「うおおおっ!!」

拳を連続で腹部に叩きこみ体勢が崩れたところを頭を掴み膝蹴りを喰らわせる。アイフリードが顔を抑え後退るが尚喰らいつく

「これで終わりだあ!!ウエイストレス……!!」

左右からの高速ジャブの連打、何発のボディブローで大きくよろける。アイゼンは右の拳を構え、振るう

「メイヘム!!!」

トドメのアッパーが顎に入りアイフリードは遂に膝を着く。勝負はついた

「はあ……はあ……」

手に膝を着き空いた片手で鼻血を拭うアイゼン。その後ろからベルベット達が近づいてくる

「終わったようね」

「すまん……手間を掛けた」

その時アイフリードが立ち上がりベルベット達に向かって走り出す

「向かってくるぞ!!」

「ちっ!諦めが悪すぎるわよ!」

真っ直ぐに向かつてくるアイフリードにアイゼンが吠える

「アイフリードオツツ!!」

拳を固め顔面に向かつて振るうがそれをアイフリードが屈んで躲し通り過ぎる

「何ッ!?!」

「斬り捨て御免!!」

小太刀を横薙ぎで切りつけたがそれを跳んで躲させる

「早い！」

ベルベットの刺突刃での斬り上げを半歩下がり躲し突破される

「コイツツ!？」

ベルベットの後ろにはライファイセットがおり狙いはまさしくそれだろう。エレノアとマギルウも走るが間に合わない。そこにケンがアイフリードの前に立つ、アイフリードが邪魔をするなど言わんばかりに走りながら回し蹴りをケンの首目掛けて放つ

「ガアアアツツ!!」

「うおおっ！」

回し蹴りを右腕で防いだがそのまま勢いよく横に飛ばされ、ケンは沼に落下する

「ケン!!」

「あれだけの力がまだ残っておろうとわのうー！」

アイフリードがライファイセットの首を掴み上げる

「あうっ!!」

首を絞め上げもう片方の手でライファイセットの腕を捻り上げベルベットの方へ向ける

「ファイー!!」

「今度は人質か・・・！」

アイゼンがアイフリードの行為に怒りの表情を滲ませる。ライファイセットは首の圧迫に苦しそうな表情を浮かべるがその瞳には決意が見られた

「ごめん・・・でも、構わないで！僕だって・・・覚悟を決めてるよ・・・！」

どのような結果になろうとも自らの意志で決めた事、自分のせいで足手まといになるならば自分毎止めを刺してくれと言葉では言わなかったがアイゼンはその真意をすぐに見抜いた

「・・・わかった。お前はもう一人前の“男”だ」

その覚悟にアイゼンはライファイセットを遂に一人前と認めた。コインを弾きながらアイフリードに向かって進み始める

「・・・家族・・・仲間・・・かつて俺が掴もうとしたものはみんな掌から零れ落ちちまった・・・だが、あるバカは『どうせ掴めないなら拳を握って勝ち取れ』と笑って言いやがった・・・この拳で取り戻すぜ」

アイゼンの言葉に僅かに正気を取り戻したのか、その気迫に押されたのか、アイフリードが驚きの表情を浮かべたじろぐ。アイゼンは金貨入った拳を握り締め走り出す

「お前の言った通りにな!!」

「ふんっ!」

アイゼンが拳を振りかぶったと同時にライファイセットは後頭部でアイフリードの顔面に頭突きをかます。突然の顔面のダメージに思わず手を放すアイフリード

「おおおおおっ!!!」

アイゼンの拳がアイフリードの腹部にめり込む

「ゲホオ・・・!!」

内臓を損傷したのか吐血するアイフリード。だがその後ろから腹部に手を当てる者がいた

「ケン!?!」

アイフリードの背後からケンがコスモフォースで傷を塞ごうとしていた

「ライファイセット!」

「!!」

ケンは傍に居たライファイセットに声を上げる。彼の目を見たライファイセットは自分が何をすべきか直感で理解した

「うあああっ!!」

すかさずライファイセットは自身の体から白色の炎を出しそれがアイフリードの体を包み込む。次の瞬間彼の姿は元の人間の姿に戻っていた

「業魔が人間に戻った!?!」

マギルウが驚愕する。ケンのルナレインボーであれば業魔を元に戻すことができるのは知っていた、だがライファイセットの白い炎はま

だ本質が未知数故に思わぬ発見であった。ベルベット達が走り寄る中、ケンはアイフリードを後ろから抱えたまま静かに座らせる

「ああ・・・お前の、拳だな・・・悪い・・・世話掛けちまったな・・・」
「・・・いいさ、親友だからな・・・」

「ライファイセット、力を貸して欲しい。自分だけじゃ不安だからね」
「うん！」

ライファイセットも傷に向けて回復の聖隷術を使う。少しずつではあるが内出血している箇所が少なくなっていく

「すまねえ・・・な・・・礼を言うぜ・・・」

「いえ、礼を言うのであればアイゼンさん達に、そして団員の皆さんに言ってくください。自分は団員の方たちの頼みを果たしただけですの
で」

「あいつらが・・・」

アイフリードは仲間たちに本意ではないにせよ自らが犯した事を
思い出す

「残念ながら何人かは亡くなりました。ですが息を引き取る直前自
分に託されました。船長を助けてやってくれと」

「・・・」

「・・・」

アイフリードとアイゼンは黙ってケンの言葉に耳を傾ける。ベル
ベット達も黙ってそれを聞いている

「自分達の命は貴方に拾われた時、既に預けていたと。自分達の死に
責任を感じているなら生きてくれと、そうおっしゃっていました」

「あの大馬鹿共が・・・」

アイゼンは亡くなった団員達に吐き捨てるように言うがその本心
ではアイフリードについて来てくれた部下達の覚悟に思うことがあ
るのだろう

「アイフリード」

そこにザビーダが肩を抑えながら歩み寄る

「ようザビーダ、久しぶりだな・・・」

「久しぶりとか言ってる場合か。アンタには借りがあるからそれを返

すまでは死ぬわけにはいかねえのさ。まあ危うくアンタに殺されそうになったがよ」

「へっ……無駄口を叩くぐらい元気ならもつと殴っておけばよかったぜ……」

ザビーダの減らず口にアイフリードが口角を上げる。次に彼はライフェイストへ顔を向ける

「坊主、いい事を教えてやるよ。お前の力はカノヌシの一部なんだとさ……うまくヤツの領域を封じ込めることができれば。面白れえケンカができるかもしれないぜ」

「領域を、封じる?」

ライフェイストはアイフリードの領域について疑問符を浮かべる

「地脈に眠る地水火風の四聖主……そいつらを叩き起こすことができればな。急げよ、今、アルトリウスとカノヌシは鎮めの儀式とやらで動けねえ……出す抜くなら、今だぜ」

「わかったよ、アイフリード」

アイゼンはアイフリードの肩を担ぎ立たせる

「残念だが、この怪我じゃ当分の間満足に動けねえだろうな……これから面白くなるうって時によ」

「その分俺達が派手に動くさ。帰るぞ、俺達の家」

そこにザビーダがジークフリートをアイフリードに差し出す

「これを返すぜ。預かりもんをいつまでも持つてるわけにわいかねえからな」

アイフリードはジークフリートを差し出された手毎押し返す

「それはもうお前のもんだ、ザビーダ。俺が持つても持ち腐れだからな。そいつもお前に使われる方がよっぽど幸せだろうさ」

「アイフリード……わかった。んじゃありがたくもらっていくぜ」

「世話になったな、ザビーダ」

アイゼンなりの感謝の言葉にザビーダは僅かながらに驚くが直に表情を元に戻す

「まさか副長に礼を言われるとわな。明日は雹でも降るか?」

「言ってる」

「まあいいさ、またな・・・兄ちゃん、ありがとな」

ザビーダはアイゼン達の後ろにいたケンに感謝を述べる

「いえ、個人としてはまだ貴方に借りがありますので。また何かあれば」

「・・・ああ、わかった」

ザビーダはそれを最後に一足先にその場を後にした。アイゼン達も自らの船、団員とバンエルティア号の待つ棧橋に向けて歩き始めた

第48話

アイフリードの救出に成功したベルベツト達は一路バンエルティア号の停泊している栈橋に到着。ベンウィック達はアイフリードの生存を知ると歓喜に湧くもの、涙を流すものなど、様々な形で大騒ぎになった。それからアイゼンの指示で亡くなった団員を荼毘に付した後バンエルティア号はリオネル島を出航。借りた船はその後ろに付いて行く形で島を後にした。アイフリードは大事を取り船長室で休養を取っている

「四聖主の復活か・・・確かに、それが叶えば、カノヌシの領域を抑えることができるでしょうね」

甲板に置かれている樽に座っていたグリモワールがアイフリードからもたらされたの情報を元に推測を立てる

「カノヌシが封じている聖隸の意思も解放されるかもしれません」

「きつと対魔士に従わない聖隸も出てくるよ」

「対魔士の戦力を大きく削げるわね」

エレノアとライファイセット予想が確かなら、今現在対魔士に従っている聖隸はカノヌシの力によって強制的に使役されている。ベルベツトの考えも当たっておりそれがなくなれば反旗を翻し離反し聖寮の戦力は大幅に低下する。対魔士が業魔と戦えるのは聖隸の力が加わっているからこそなのだ

「そもそも、カノヌシによる霊応力の増幅がなくなればほとんどの対魔士は、以前の様に聖隸そのものを認識できなくなるはずじゃ。儂の様に元から才能があれば別じゃがのー」

「私も・・・ライファイセットが見えなくなる？」

「それはやってみねばわからん」

エレノアの疑問も然り、アルトリウスやメルキオル、シグレなどのトップは生まれながら強力な霊応力を持つ者はカノヌシの力がなくとも問題はないだろうがエレノアの様には一等は兎も角二等対魔士は

まず脱落するだろう

「エレノア」

「・・・なら、やってみましょう。どんなことになっても後悔はしませ
ん」

ライフィセットが不安そうにエレノアを見るがマガルウの言う通り
こればかりはやってみないとわからない。エレノアは覚悟を決め
る

「しかし、四聖主って神様なんだろう？叩き起こして兵器なのか？」

「地水火風を司っている奴らじゃ。自然のバランスが大きく乱れるや
もしれん」

ロクロウの質問にマガルウが予想を立てる。自分らがやろうとして
いる事は世界の在り方を一変させるかもしれないのだ、大あれ小あ
れ天変地異が起きても不思議ではない

「平気じゃなさそうだなあ」

「しかも復活させる方法は、おそろく——」

「開門の日と同じだとすれば、緋の夜に地脈点に”生贄”を捧げるこ
と・・・」

「誰かを殺すの!？」

ベルベツトは自身の経験とこれまでの情報を元に一つの答えにた
どり着く。あの日の夜弟が祠に投げ込まれた事が決定的だった

「“殺すこと”が生贄の本質じゃないわ・・・必要なのは“穢れなき魂”よ」
「ふうむ・・・じゃとしたら、ベルベツトは既に持つておるのではない
か？」

グリモワールの補足にマガルウはあることに気付きベルベツトに
問いかける。ベルベツトもそれを理解し目を開く

「喰らった対魔士たち・・・!」

「誂えたように、お主は喰らった力を撃ち出せる喰魔じゃ。高位対魔
士共の魂なら生贄として申し分あるまいて」

「オスカーやテレサの魂で四聖主を・・・」

「試してみる価値はある。次の日の夜はいつ？」

「暦によれば、降臨の日の三年後・・・もうすぐよ」

グリモワールは日にちを計算し長く見積もって大体の予想を立てる

「うくん時間が足りるかな。四聖主は別々の場所に眠ってるんだろ？」

「ええ。各々地脈の奥底に眠っているはず・・・でも“地脈浸点”を利用すれば、一気に全員を目覚めさせられるかもしれないわ・・・」

「地脈浸点？」

ロクロウの疑問にグリモワールが一つ助け船を出す

「地脈の流れは基本水平なんだけど、極稀に縦の流れがあるの。力が地脈の底に潜っていく場所を“地脈浸点”・・・逆に奥底から力が沸き上がってくる場所を“地脈湧点”というのよ・・・」

「ふむふむ。その地脈浸点を使えば、地脈の底における聖主どもに、一度に生贄を届けられるやもしれんの」

循環し尚且つ全ての地脈に繋がる地脈点があるなら大幅に時間を節約できる。それを選択しない余地はない

「場所は？」

「ミッドガンド領の北部に、浸点の一つあるわ。最近大きな神殿が建ったらしいけど・・・」

「そこは“聖主の御座”じゃ！カノヌシがおる本拠地じゃし」

「あら、マズいわね・・・」

グリモワールが提案したところは選りによって自分らが手ひどくやられた聖寮の本拠地。そこに行くなど死に行くようなものであり当然却下である

「・・・湧点じゃダメかな？同じように地の底に繋がってるんでしょ？流れに逆らうことになるけど——」

聖寮、アルトリウスとメルキオルはカノヌシの力を行き渡らせ易くかつそれを利用されないため、そしてそれを予想して要塞化したのだろう。だが湧点なら手付かずである可能性がある

「押し込んでみせろって言うのね」

「湧点は、そこにあるんだ？」

「恐らくキララウス火山のあたりだろう」

そこにアイゼンがやってくる

「アイゼン」

「大丈夫だ、話は済んだ」

「キララウスといええ、ノースガンドの最北にある火山じゃな。氷と溶岩の地獄じゃが」

「まさに。キララウス火山こそ最大の湧点よ」

「要するに、その火山に対魔士の魂をぶち込めばいいんだな」

「そうすれば四聖主が復活し、カノヌシの領域を封じられる。あくまで推論ですが……」

浸点より明らかに聖主覚醒の難易度は高い。だが現時点でそれしか方法はない

「あたしは賭けるわ」

「僕も」

二人の決意に皆は言わずとも付いて行くだろう

「ノースガンド領に向かうぞ。キララウス火山はヘラヴィーサの北だ」

ベルベット達がこれからの行動を決めていた頃。ケンはアイフリードの船長室で左眼のスキャンモードを使い彼の様態を確認していた

「損傷した内臓はほぼ回復したようですが脊椎、背骨の一部が損傷しています。足に違和感がありますか？」

「ああ、あの時から左足がうまく動かねえんだ」

「……どうやらアイゼンさんの一発が効いたようですね」

ケンは左眼から送られてくる情報を見る。アイフリードの証言が確かなら脊椎が損傷により歩行障害を起こしている、これでは手の施しようがない

「……すみません、この怪我は自分ではどうすることもできません……杖などの補助がなければ歩行は難しくなるでしょう」

「お前が謝る事じゃねえだろ、本当なら俺はあの時死んでたんだ。それをお前とあのボウズが俺の命を拾ってくれたんだ」

「・・・」

アイフリードは左脚を摩りながら答える

「これは戒めだ、部下を傷つけ、命を奪った俺へのな。一生十字架を背負って生きていく、あいつ等の為にもな」

「・・・」

「それにこれからの事はアイゼン達に任せると決めたんだ。そしていつかはベンウィックが次の船長だ、それまで色々叩き込んだかねえとな」

その時扉が開きアイゼンが部屋に入ってくる

「どうだアイゼン、これからの事は決まったか」

「ああ、まずカノヌシの領域を封じるためキララウス火山へ向かうその地脈点を利用する」

「キララウス火山：ノースガンド、こりや寒さが脚に響きそうだけ」
「ほう、天下のアイフリード海賊団の船長は寒さ如きで弱音を吐くとは。そろそろ引退か？」

アイフリードが毒づくどアイゼンは腕を組みながら煽る。それにアイフリードが反応し船内から調達した資材で制作した杖を取り立ち上がる

「引退だあ？馬鹿言うんじゃねえよ。脚は不自由になっちゃったがそれ以外はこの通りまだピンピンしてるぜ」
「ふっ」

アイフリード未だ衰えず、それを確認したアイゼンは口元を緩ませた

アイフリードを部屋に残しケンとアイゼンは甲板に出た。ヘラヴィーサに着くまでは今しばらく時間があり皆自由に過ごしている。ベルベツトは縁に座り海を眺め、ロクロウはクロガネと何やら話している

「・・・そうか。金剛鉄征嵐は簡単に折れたか」

クロガネはロクロウから刀がどうなったかを聞いていた

「ああ。やられたのはカノヌシにだが、シグレが相手でも同じだった

だろう」

「硬いだけでは・・・な・・・すまなかつた。柄にもなく”無心”などと自惚れた・・・」

「自惚れていいさ、お前の腕は間違いなく超一流だ。次の刀、期待してるぜ」

「お前は・・・まだ俺を信じてくれるのか？」

「当然だろう。世界のどこに金剛鉄を刀にできる鍛冶がいる？」

クログガネの質問にロクロウはきっぱりと答える。世界で最も硬く加工も難しいである伝説の金属を武器にできる職人はクログガネにいないはずである

「そんな名工が、何百年も迷って悩んで足掻いた末に生まれる刀を、俺は振るってみたい」

「・・・ロクロウ」

「それとも、もう號嵐に勝つのは諦めるか？」

ロクロウの言葉にクログガネは鼻で笑う

「諦めた男の顔に見えるか？」

「ははは！全く見えないな！」

クログガネは頭があつた場所に手をやる。言葉の綾も込めてロクロウはそう言い切つた。その様子を見ていたベルベットにライフイセツトが声を掛ける

「後悔は順調だよ」

「問題は、アルトリウス達の”儀式”とやらにどの程度の時間が掛かるかだ」

アイゼンは聖寮が行おうとしている儀式についてベルベットに質問する

「アイフリードは”鎮めの儀式”って言った。恐らくカノヌシの力を解放するためのものよ」

「だろうな。ベルベットの”絶望”とライフイセツトを喰えていない以上、完全ではないはずだが、発動すれば・・・」

「人の意思が奪われる」

アイゼンが言いかけた言葉をエレノアが続ける。もしそうなれば

生きていながらも死んでいる、ただ利用されるだけの傀儡になり果てる。そんな未来にエレノアは恐怖する

『そして、醜い人の業は鎮まり、穢れは生まれなくなりましたとき。めでたしめでたし』というわけじゃなー」

先ほどまでモアナの遊び相手をしていたマギルウが近づきながら結末を述べる

「意思が消える・・・昔の僕みたいに・・・？」

以前テレサに使役され意思を封じられていた時の自身を思い出すライフィセット。だがそれは無理矢理打ち切られる

「・・・何が来る！」

ライフィセットが正体がわからないなにかに感づき声を上げた。その時、ローグレスの北聖主の御座から光の柱が天に向かって伸びカノヌシの印が現れそこから無色の波動のようなものが広がっていく。その波動に飲み込まれた人達は直前まで談笑していた者、買い物、遊んでいた子供たちは動きを止め次の瞬間まるで機械の様に意思の感じられない行動を取り始めた。ゼクソン港も波動に飲み込まれ港の商店で小競り合いが起きようとした時、その喧噪も一瞬で止まり野次馬諸共別々に行動し始めた。その波動も遂にはバンエルティア号にも届いた

「これは・・・領域！」

「うん、カノヌシのだ！」

このような芸当ができるのはカノヌシしかない。その時彼女らの後ろから呻き声のような声が聞こえた

「あ・・・うっ・・・」

「うあ・・・あっ・・・」

モアナと一緒にいたベンウィックと船員の一人が目が虚ろになり明後日の方向を見ている。これがカノヌシの野郎としている事なのだ

「意識を奪われた!？」

「まだ完全には意識を封じられておらん。ロクロウ！全員殴って目を覚まさせいー！」

「任せろ！」

マギルウがロクロウに指示を出す。ロクロウがそれに応えベンウィックの方へ歩き出したその時、彼の頭の上に拳骨が落ちる。ベンウィックは激痛でしやがみこみ頭を抑える

「イツツテエエツツ!!」

「アイフリード海賊団であろうものが俺のいない間にこんな腑抜けになったのか？」

ベンウィックの背後にアイフリードが立っており隣にいた船員には杖で脛を叩く

「くくツツ!!」

「奴らを正気に戻すのは俺に任せとけ、ここでビシッと気合入れ直してやるとするか」

アイフリードはそこから一人一人正気に戻すべく歩きはじめる

「俺が殴るよりよっぽど効き目がありそうだ」

「儂らが意志を奪われなくてホント良かったわい・・・」

「ここはアイフリードに任せろ、アイゼン！」

「ああ、一旦近くの港に着ける！ゼクソン港だ」

ベルベットの合図に呼応してアイゼンが舵を取り、本来のルートから外れゼクソン港へと向かった

く

「うう・・・頭の中を引っ張られてるような感じがする・・・」

波止場のしやがみ込み頭を摩るベンウィック

「気合を入れる。意識を刈り取られるぞ、アイフリードの拳をまた喰らいたいのか？」

「ヒィ・・・！それだけは勘弁してくださいよくく!!」

アイフリードの拳骨を思い出し怯えるベンウィックを他所にライフェイストはゼクソン港の異様な雰囲気を感じ取る

「これって・・・」

彼らの視線の先には市場特有の喧噪もなく王国兵士の前に整列している老若男女の住人の姿だった。そこから別の所からアイフリード海賊団と取引している船止めの男が此方に歩いてきた

「あ、船止めの！貴方は無事だったのですね！」

エレノアは面識のある人物が此方に向かつてきたので安心して今の状態を聞こうとしたが男は歩みを止めない

「いや・・・私は無事でいいけない。私は利を貪った。他人を蹴落とし、利用した。特級手配犯にまで手を貸して、事業の拡大を図った・・・」

男は歩みを止めることなく波止場の縁まで向かう

「醜すぎる穢れ、許されざる業だ」

「え・・・？まさか!!」

エレノアは男が何をしようとしているのか気づき走る。寸での所で男を捕まえ海へ飛び込むことを阻止する

「止めてくださいー！」

「穢れは、失くさなければならぬ。私は、死ななければならぬ。死ななければ。死ななければ」

機械仕掛けの人形のように尚も歩みを止めない

「違う！そんなのって！」

カノヌシとアルトリウスのいう理想世界がこの状態というならば鎮静という名の選民思想、業のない人間などこの世にいない、死を強制するやり方にエレノアが必死に否定する。そこにベルベットが後ろから回り込み男の胸倉を掴み顔を殴る

「ぐっ!!」

男は倒れ動かない。気絶したようだ

「死ぬのは勝手よ。けど、”死ななければならぬ”ってのは気に入くない」

「己が穢れを自覚そた者は自ら命を絶つか。実に無駄のない”理”じゃない」

鎮静化した世界による道理や摂理にとって都合の悪い因子を持つ人間を自ら死に追い込む。諍いのないだけで実際の所は今まで以上に悲惨な世界だ

「舵を奪うどころか、生き死にまで押し付ける気か・・・ふざけやがって」

「何が起こってるのか調べるわよ。それとも見たくない?」

「・・・見たいはずないでしょう・・・」

エレノアは聖寮の目的が自身の目で起きている事に愕然としている。それをベルベットが煽る形で気遣いながら判断を迫る。

「でも、それ以上に逃げたくありません!」

聖寮の真意を突き止めると決めたエレノアの目に迷いはなかった

「まずは、この力の影響範囲を確かめる。ローグレスまで行ってみましょう」

「わかった。アイフリード、留守は任せるぞ」

杖を突きながら波止場に降りたアイフリードにそう伝える

「行ってこい。こいつらがまた変なこと言い始めないよう見張っとくからよ。しかし、これがあいつ等の真の目的だとしたら迷ってる暇はねえぞ」

「ああ、わかってる」

ローグレスの血翅蝶のアジトに向かうまでの間、現状を調査した。食事に対する個の道理を消し去られ生きる、活動するだけの糧食の配給へと変わり果て、街を彩っていた花や植木果てはシンボルである噴水まで無駄だと破壊されそうになり。子供達と仲良くしていた動物達は労力と食糧の浪費と判断され食事も与えられず虐待紛いな事をされていた。だが僅かだがそれに抵抗しようとする住民もいたが領域の影響下である以上それも長くは持ちこたえられないだろう。物理的に元に戻すことも考えたがこの状況下で行った時どうなるかわからない以上手出しができない。アジトに到着した一行はタバサに合うべく扉を開けたがそこに彼女の姿はなく代わりに兵士を連れた青年とそれに対応するアジトの男性がいた

「酒場など不要だと言いつづけてきた甲斐があった。もはや、心水を求める者など、この街にはいない。大人を惑わし、墮落した人間を生み出す悪の誘いなど、元より存在してはならないのだ。酒場と呼ばれた店は、歴史の遺物となるべきだ」

「赤聖水も心水も、商うべきではないと私も言い続けてきた。これか

らは、この酒場だった場所を食糧の配給場所として、活用するべきだ」
青年の隣にいた商人の男性が酒場を取り潰し配給場所にするよう
要求する

「味は問わない。空腹を満たし、生命活動に必要な栄養が得られるものならそれでよい。食事は楽しむべきものではないのだ」

青年の最後の言葉にライフィセットが不満を露にする

「お腹が減るのは、生きてる証拠・・・食べる事を楽しまなかったら、生きるのも楽しくない・・・そんなの嫌だよ」

その頃ケンはタバサを探す為先に二階の宿泊部屋に向かう。その扉の前で一人の女性が立っている、ケンに気付いているのかいないのかブツブツと呟く

「仲間たちは、この部屋で償いを果たした・・・私も・・・続かなければ・・・」

その言葉と意味にケンは一瞬わからなかったが少し考えた後理解した。女性をどかしドアノブに手を掛けようとした時ドアの隙間から匂いが漂う、それに構わずドアを開けたケンの目の前には所狭しと文字通り自身の罪を償った者達が壁に寄り掛かったり床に倒れている姿だった

「・・・」

「それが理・・・でも・・・ううう・・・こ、怖いよ・・・母さん・・・」

後で目が虚ろながらも涙を流す女性。だが危険性を考えどうすることもできない、部屋の中を見回し目視と左眼のスキャン機能でタバサがない事を確認した

「ここにはいない・・・別の場所に避難したか、それとも・・・いや、確かめない事にはな」

ケンがドアを閉めたと同時にロクロウが階段を上がってくる

「どうだ、居たか？」

「いえ、いませんでした」

「・・・わかった」

ケンの顔と扉から感じる異様な雰囲気を感じ取ったロクロウは何も言わずそう返した。その後エレノアとライフィセットが上がって

きたがロクロウが説得して止め、タバサと連れ戻されたであろうパ
シバルの搜索を再開する。最後の場所である王宮へと向かった

「意思の残ってる人、もういないのかな・・・？」

「きつといます。いるはずですよ」

その時どこからか声が響く

「ママア・・・」

「子供の泣き声!？」

ベルベツトがそれに気づいたと同時に上空から背中から翼を生や
した人型が王宮の正門へと続く通路へと飛んで行く。一行は直ぐ様
後を追う

「ママ・・・！こわいよお、ママア〜！」

「感情を出してはダメよ!」

「さもないと、こいつらが・・・」

少女がローグレスの異様な状況からの不安と恐怖で泣き叫ぶのを
タバサが必死で宥める。パシバルは二人を守るように前に立つ、少
女の傍に母親がいない事から恐らく住人と同じになったのか、それと
も彼らの周りを飛ぶ人型に処理されたのか定かではない

「パシバル王子とタバサ!」

「意思を失くしてない!」

そこにベルベツト達が駆けつけ二人が無事であることを確認する。
パシバルを取り囲んでいた人型が意思を？き出しにしているベル
ベツト達に気付き先に始末しようと手に持った武器を構える

「王都の中に業魔が!!」

「違う!、こいつは聖隷よ!」

ローグレスがこのような状態であるから業魔が侵入してきても不
思議ではない。槍を構えるエレノアの横に立つベルベツトがそれを
否定する。業魔のような穢れを発していないこの人型は聖隷で間違
いない。人型の聖隷、複数の天啓の使いは槍状の武器を構えベルベツ
ト達に向かってきた

第49話

天啓の使いが繰り出した光弾をベルベット達はそれぞれ横に躲す
「どうしてここがすぐに分かったの!? 王都だけでもかなりの広さが・・・」

エレノアが槍を構えながら聖隷が何故直ぐここに来れたのか疑問を浮かべる

「恐らく意思を残している人間を探知しているんだろう。結界内ではカノヌシの庭も同じだ」

「おお、それはなんともご丁寧な事だ!」

アイゼンとロクロウは複数の使いに向かって走り出す。マギルウとライフィセットは応戦すべく聖隷術を発動する

「意思のある人間は処分されるか徹底的に意思を奪われる・・・!」

「じゃろうな、でなければ人間を生かしておく意味がないからのう。使い潰してからでも遅くはないということじゃ」

ケンはず先ずパーシバル達の安全を確保するため彼らの元へ向かって進んでいく。使いもそれに反応したのか三体が武器を構え飛来する

「すいませんが今貴女方に構っている時間はない」

一体の使いが杖の先についている刃を向け突っ込んでくる。それを横から掴み自身に引き寄せ、使いの頭を掴み横の壁に叩きつける。使いはそのまま崩れ落ち、残る二体は同時に杖を振り下ろしてくる。ケンはそれを両手で受け止めるとそのまま握り折る

「!!」

驚いた素振りをする使いの一体に前蹴りを打ち込み後方へ蹴り飛ばす。残りの一体を体を掴み数回振り回し木箱や樽が積まれている所へ投げ飛ばす。そこに激突した使いは物に埋もれ動かなくなった。対処が終わったケンがパーシバルの方を見るとそこにはタバサしかおらずパーシバルと少女はいなかった。どうやら隙を見て連れていかれたようだ、ベルベット達も聖隷を倒したようでアイゼンが座り込

んでいるタバサの方へ向かう

「まだ意思はあるな、タバサ？」

「ええ、なんとか。でもパーシバルと女の子が・・・」

「さっきの奴らが連れ去ったようじゃな」

マギルウがパーシバルが連れ去られた方を見る

「殿下は、私達を逃がそうとしてくれたのよ『聖寮は、感情を残した人間を離宮に集めている』と言っていたわ」

この状況下で意思を残していると云う事は反乱分子と見做されるだろう。捕縛され離宮に連行されるとすれば結末は限られる

「王子達を追うわよ。離宮になにがあるのかを確かめる」

「正門は、どんな警備が敷かれてるわからないよ。裏からこっそり行こう」

「なるほど。地下道再び、だな」

「そういうことね」

離宮に集められているのであればベルベットの言う通りそこに重要な設備か術式が設置されているはず、聖寮も万が一に備えて対魔士や聖隷を配備していてもおかしくない。ライフイセツトは以前ギデオン暗殺で使用した地下水道から離宮へ向かうことを提案する、仮に発見されていたとしてもこの道を再び通る事はないだろうと聖寮は考えているかもしれない、裏を搔くにはこの方法はうつつけである。タバサとは一度分かれる

タバサとは一度分かれ、ベルベット達は依然と同じように地下道がある蓋を開け下に降りる。念の為に警戒していたが警備はいない。物音は自分らが発しているもの以外は水の流れる音のみだ。ベルベット達は慎重に進む

「さっきのは業魔じゃなくて聖隷だったな」

ロクロウは先ほど対峙していた敵について思い出す。業魔のとは雰囲気違っていただろう

「・・・はい。意思を残している人間を集めるよう、命じられているでしょう」

「カノヌシは、未だ不完全ゆえ鎮静しきれぬ者もでる。そやつらは、聖隷を使つて強制的に処理する・・・ということじゃろうて」

エレノアが肯定しマギルウがカノヌシが配下の聖隷に下している命令の真意を推察する

「処理・・・」

「たとえそれが、王子でも子供でもか」

ベルベツトはマギルウのその推察に吐き捨てるように言う。理の為に全てを犠牲にするやり方に。その後地下道を抜けローグレス離宮の書庫に入り込んだ。流石に此処に警備はいるだろうと踏んできたが、あろうことか対魔士や兵士どころか使用人の姿すらない。ケンは扉を静かに開けながら廊下を確認するが人影はない

「廊下にも警備がいません」

「罨か？」

アイゼンがそう呟くがケンは否定する

「罨にしてはあまりにも静かすぎます、これでは本当に対魔士や兵士はいないのでしよう」

「ここまで無防備だと逆に不気味ですね」

「・・・とにかく先に進むぞ。此処にいても罨が開かん」

ケンの報告にアイゼンは最奥部に進むことを判断。全員それに従い廊下を慎重に進んでいく、大理石でできた広い廊下からはベルベツト達の足音しかせず、離宮聖堂の裏手の扉、グリフォンが幽閉されていた大部屋へと進む。暗い通路に松明の明かりだけが照らす通路を進むと奥から悲鳴が響き渡る。全員が走り出し開けた空間に出る。そこには大きな術式の陣がありその中央に泣き叫ぶ少女と苦しむパーシヴァルがいた

「やああっ！助けて、ママア~~~~ッ!!」

「くうう・・・意識が・・・!!」

「カノヌシの魔法陣！」

「意思を直接喰らう気か！」

ライファイセットとベルベツトの声に反応した使いが邪魔をさせまいとそこにいる全員が向かってくる

「とにかくあの術を止めなければ殿下達が！」

「応！こればっかりは急いだ方が良さそうだな！」

エレノアが槍を構えロクロウが小太刀を構え走り出す。ロクロウが使いの一体に斬りかかり速攻で肉薄にするが他の使いが横やりを入れ思い通りに行動できない。

「術が完成するまで時間稼ぎか？」

「させません！描け蒼穹、霊槍・氷刃！」

エレノアが聖隷術で氷の刃を繰り出しロクロウに向かっていった二体の使いを倒すがその後ろから新たに現れた二体の使いがエレノアに襲い掛かる

「くっ・・・！まだいるの!？」

エレノアは槍を振るい使いの攻撃を受け止める

「敵はエレノアだけじゃないぞ！枝垂星!!」

ロクロウが空中から二体の使いを二度斬り捨てる

「あ、ありがとうございます！ロクロウ」

「気にするな。団体さんがまだまだ来るぞ!!」

そこから少し離れた場所でアイゼンとベルベットその後ろにライファイセットが倒してもまた出てくる使いと戦っている

「数が多い!!」

ベルベット刺突刃で使いの武器を弾き飛ばし首に回し蹴り打ち込み弾き飛ばす

「鏡面輝き熱閃手繰れ！カレイドイグニス！」

ライファイセットは遠目にいた数体の使いを纏めて聖隷術で攻撃する

「このままだと王子と女の子が・・・!!」

ライファイセットが焦りの表情を浮かべながらパーシバルの方をみる。パーシバルは少女を庇う様に抱いている

「いくらカノヌシの聖隷といえ数には限界があるはずだ！粘れ!!冷気の渦よ凍結しろ！フリジットフォトン！」

アイゼンは二人に鼓舞し向かってくる使いを殴り飛ばし。氷の塊を射出し数体纏めて凍らせる。ケンは敵の攻撃を受け止め投げ飛ば

しマギルウはそれに術で追い討ちを掛ける

「後何体出てくるんじゃないや〜こつちはクタクタじゃわい〜！ケン！何とかならんか!?」

「・・・」

マギルウは弱音を吐きながら打開策をケンに求める。ケンは魔法陣の方を見ながらなにやら考えている

「・・・お主変な事考えとらんじゃろうな」

マギルウはジト目になりながらケンに質問する。嫌な予感がしたのだろう。そしてそれが的中する

「マギルウさん、自分があの魔法陣に入ってみます」

「本当に変な事考えとった〜!!」

マギルウはケンが本当にとんでもないことをやろうとしている事に驚愕する

「そんなことすればお主とて無事では済まぬぞ!」

「ですがこのままでは殿下達が危ない。猶予はありません」

ケンはそれだけ言うのと魔法陣に向かって進み始める。それに感づいたのだろうベルベット達に襲い掛かってきた使いが一齐にケンに向かって飛んで行く

「どうしたんだ?」

「皆の者、ケンの邪魔をさせんようにするんじゃない!!」

突然飛び去った聖隷に疑問を浮かべたロクロウ、そこにマギルウが術を発動しながら叫ぶ

「あやつが直接陣の中に飛び込んで助けるんじゃないと!」

「ええ〜!!」

「そんな無茶苦茶な!」

マギルウの言葉に驚愕するエレノアとライフィセット、だがベルベットとアイゼン、ロクロウは既に走り出していた

「まったく世話の焼ける!!」

ベルベットはケンに飛び掛かろうとしていた使いに飛び蹴りで顔を蹴り飛ばす

「そうでなければ面白くない!!」

ロクロウが小太刀で切り捨てケンの道を切り開く

「賭けか・・・それも悪くないだろうな！」

アイゼンは詐欺師の鎖で纏めて拘束する。ケンが魔法陣の中に踏み込むと物理的ではなく精神的な重力を感じたが意に介さずパーシバルの元へたどり着く

「殿下、大丈夫ですか」

「君は・・・大丈夫・・・なのか・・・!?」

苦痛の表情を浮かべながらも驚愕するパーシバルの肩を抱え少女を抱きかかえ陣の外へ向かう。使い達は尚も止めようとするがそこにエレノアが止めに入る

「漆黒渦巻き軟泥捉えよ！ヴォイドラグーン！」

「貫け緑碧！霊槍・空旋！」

ライファイセツトの術から漆黒の手が伸び聖隷を捕らえエレノアの暴風が吹き飛ばす

「これでトドメじゃ！光翼、天翔くん！」

マギルウが駄目押しに伸ばした式神で殴り飛ばす。その間にケン達が脱出すると魔法陣が消失し残っていた使い達は形勢不利と判断したのか逃げて行った

「パーシバル王子、無事？」

ライファイセツトが駆け寄りパーシバルの無事を確認する

「あ、ありがとう。震えを感じる心は残っているようだ。君たちのおかげだよ、ありがとう」

エレノアはケンが降ろした少女に膝を着いて目線を合わせる

「もう大丈夫よ。貴女のママも、私が捜して——」

「・・・もう・・・いないの・・・」

少女は俯いたまま静かに応える

「え・・・」

「町のみんなが変になって食べ物がいなくなっていて・・・ママはあたしの為に・・・」

少女は涙ぐみながら耐えていたが遂にボロボロに泣き出してしまふ。その言葉の先は誰もが思いつく、エレノアは少女を抱きしめ頭を

撫でる

「・・・これが“鎮静化”の正体・・・なのですね」

「そう、導師アルトリウスが目指す理想世界だ。穢れと業魔化の仕組みがある以上、こうするしかない。だから王国は、彼の計画を承認した・・・だが、私は・・・!!」

パーシバルは拳を握り締め吐き捨てるように何かを言いかけた

その後ベルベット達は離宮から脱出し町の広場へと戻って来た。結局人は居らず正門から出られた、エレノアは泣きつかれた少女を抱きかかえ背中を撫でながら呟く

「悲しみはないけれど、笑顔がない・・・憎しみが無い代わりに、愛もない世界・・・」

「世界中が、こんなになっちまったのかな？」

「いや。御座に近い王都ですら、意思を残した者がいたくらいだからな。だが、あまり猶予はなさそうだ」

ロクロウの予想にアイゼンが訂正する。アイゼンの考えが正しければこの結界は恐らく試験運用でこれから本格的に広がっていく可能性は十二分にある

「うん。カノヌシの領域が広がっていくのを感じる。まだ完全じゃないけど、どんどん強まってるよ」

そこに町の様子を確認してきたライファイセット達が合流する

「儂らの意識とて、いつ鎮静化されてしまうかわからんのー」

「・・・」

パーシバルは人が人でなくなる惨状を目の前にただ沈黙している

「王子、グリフォンは元気だよ」

ライファイセットは消沈しているパーシバルを元気づけるかのようにグリフォンの近況を報告する

「そうか、よかった・・・！よかった・・・本当に」

その言葉に笑みを浮かべたが自身が喜びの感情が残っている事と友人が無事である事、その二重の意味で繰り返す

「いままで私は、自分を国の為の道具だと思ってきた。だが、心を消さ

れかかった時願ってしまったんだ」

パーシバルはあの時意思を奪われかけた瞬間を思い出す

「怖い!!・・・嫌だ!!・・・自分を失くしたくない、と・・・私は、この理想世界が恐ろしい」

自身の個性を、自分という存在がなくなる事に対しての恐怖。それが世界規模で起こる事がどれほど恐ろしいのか。パーシバルはベルベットの方へ向き直る

「身勝手を承知で頼む。人の鎮静化を・・・導師アルトリウスを止めてくれ」

「・・・貴方、前に言ったわよね? 飛べない鳥は鳥じゃないって。同じようにあたしも、心を凍らせた人は“生きている”とはいえないと思うわ」

「うん。昔の僕がそうだった」

ライファイセツトは聖寮で使役されていた頃をを思い出し呟く

「だからあたしたちは、あたしたちとして生きる為にアルトリウスを倒す。誰に頼まれなくても、勝手にね」

「・・・変わったな、君は」

ベルベットの決意にパーシバルは微笑む。その時のベルベットの声に冷たさはなかった

「そうね。以前の貴女は、憎しみに振り回される剣だった。でも今は、自分の意志で剣を振るっているのね」

タバサは今のベルベットが以前のベルベットと違う、迷いと憎しみを振り切った姿を評価する

「相変わらず鞘はないけどね」

「心配いららないよ。危ない時は僕が守るから」

「あら、素敵。そんなこと言ってくれる殿方がいるなんて」

ライファイセツトの言葉はさながら姫を守る騎士である

「でしょ。いい男よ、ファイは」

「アイゼン副長、アイフリード船長は・・・」

タバサは一瞬微笑みながらもすぐに切り替えアイゼンにアイフリードの件について質問する

「業魔としてのアイフリードには俺が片をつけた。体に問題が残ったが、救出できた。今バンエルティア号にいる、あいつのおかげだ」

「まあ・・・！」

アイゼンがケンの方へと視線を向ける

「だが、この鎮静化は、聖寮がアイフリードの誇りを踏みにじって創つたものだ。俺の手で、ぶち壊す」

タバサはアイゼンが拳を握り締める姿に僅かに頷くと、次にベルベット達に顔を向ける

「私も身勝手に、貴方達の成功を祈らせてもらうわ。この世界に生きる醜い人間の一人として」

「気合が乗って来たな！ いっそ、このまま御座に斬り込むか？」

高ぶったのかクロクロウが突拍子もない事を言い出すがマギルウがツッコんで止める

「バカモン！ 斬り込むために準備がいるんじゃないやろうが！」

「予定通り四聖主を起こして、カノヌシの領域を抑え込むわよ」

そこにパーシバルが自身が得た情報を伝える

「アルトリウスは、鎮めの儀式は“緋の夜”までかかると言っていた」

「儀式の完成が先か、四聖主覚醒が先か・・・賭けだな」

アイゼンの言葉が正しければこれからの行動にかかる時間を計算して猶予がないのだろうか

「悩んでも答えは出ないよ。キララウス火山へ向かおう」

「はい！ 鎮静化は断固阻止です！」

「エレノア、対魔士達は、この事を知った上でアルトリウスに賛同してたのか？」

バンエルティア号の待つ港に向かって移動を始めた一行、そこに口クロウがエレノアに質問する

「そんなはずは！ 私の知る対魔士達は、人々が笑って暮らせる世界を夢見て戦っていました」

「だが、対魔士達がこの状況を受け入れている事をどう説明する？」

エレノアは否定するがアイゼンの言う通り現に対魔士達も意思を

奪われ傀儡同然になってしまっている

「私が、そう信じていただけだったのでしょか・・・」

「カノヌシの鎮静化は、対魔士にも及んでいるんじゃないかな？」

ライファイセツトは道中で出くわした対魔士達が住民と同じような状態であったことを思い出す

「対魔士達も、カノヌシに意思を制御され、道具になっているというところか」

「ありそうな話だ。対魔士は融通が効かない奴らばかりだからな」

アイゼンの見立てにロクロウが付け加える。自己的に感情を押し込めているのか聖寮がこうなることを見越してあらかじめ訓練していたのかはわからないが

「あのまま聖寮にいたら、私もこんな世界を受け入れていたのかも・・・ありがとう、ライファイセツト。きっと貴方の力が私の心を守ってくれているんですね」

「そう・・・なのかな？」

ライファイセツトは自覚がないのだろうが現にエレノアは意識を保っているので恐らく事実だろう

「そうですよ。自信を持ってください」

「ふふ、あたしに捕まってよかったこともあったのね」

「そうですね。貴女に感謝します。ありがとう」

ベルベットは皮肉のつもりだったのだろうがエレノアの感謝の言葉にきよとんとしている

「本気で？」

「ええ、心を感じた事を伝えられるのは、素晴らしいことですから」

「・・・あなたには呆れるけど、同意するわ」

第49話 終わり

第50話

ベルベット達は一度ローグレスを後にし、目的地であるヘラヴィーサへと船を進めていた。救出したパーシバルと少女はタバサと共に隠れる為別れた。夜の海を走るバンエルティア号の船首でベルベツトは夜風に当たりながら眠りについていた。ベルベツトはいつかの白い空間で座っており背後から気配を感じる、それが誰なのかすぐにわかった

「・・・よかった。あんた達は、まだあたしの中にいたのね」

「居たくて居るわけではありません。貴女に喰われて仕方なく、です」

其処にいたのはベルベツトに倒されたテレサとオスカーであった。ベルベツトは立ち上がり二人に向き直る

「悪いけど誤らないから」

「私達を四聖主に捧げる為に捜していたんでしよう？」

テレサはベルベツト達が何故自分達を狙っていたのか、その凡その推測を答える

「そうよ。それも謝らないわよ」

「構いません。謝って許される罪など、その程度のもんですから」

「・・・そうよね」

罪を犯した者が言葉だけの償いをしたとしても、被害を受けた者が納得するわけではない。目の前で言われれば尚更だろう

「己が身勝手さを自覚している事だけは誉めておきましょう」

ベルベツトは前者とは違い自らの行いを自覚し、覚悟をもって行った。罪を罪と思わない者よりはマシである。ベルベツトは表情を陰しくするが事実であるが故何も言わない

「覚えておくがいい、災禍の顕主」

今度はオスカーが口を開く

「僕は、何度生まれ変わっても同じ事をする」

「私もです」

「……ええ、あたしもよ」

船首で目が覚めたベルベツトは静かに呟く。それに偶々船首近くに来たエレノアが反応する

「今なにか……?」

「夢の話よ。自分の業の深さを思い知ったわ」

「ベルベツト……前から話したいことがあったんです」

船首から甲板に降りたベルベツトにエレノアがそう告げる

「その……貴女達喰魔とライファイセットの事ですが……」

「気づいたのね?カノヌシ本体との関係に」

「はい。実際にやってみなければどうなるかわからないことです
が……」

エレノアは決戦でカノヌシを倒した時ベルベツト達喰魔とカノヌシの一部であるライファイセットの影響を考えているのだろう。だがそれをベルベツトが止める

「あんたが悩まなくてもいいわ。前にも言ったけど、悪い事は全部災禍の頭主のせいにしとけばいいのよ」

これから自分達がする行いによる罪をベルベツトは一人で受けようとする物言いにエレノアが声を上げる

「勝手に一人で背負い込まないでください!」

突然の事でベルベツトは驚く

「こんなことになったのは、対魔士の責任でもあるんです。だからモアナ達のことには私が考えます。でも、ライファイセットには、貴女が……話はそれだけです!」

エレノアはそれだけ言うと言った船室に向かって歩いて行った。その後ろ姿を見つめながらベルベツトは呟く

「どっちが勝手なんだか……けど……ちゃんと伝えなきゃいけないわよね」

その次の日バンエルティア号はヘラヴィーサの港に入りベルベツト達は波止場に上陸する。一足先に降りたライファイセットが辺りを見回すが今の所目に見えた影響はないようだ

「よかった。ここは鎮静化してないよ」

「荷を運ぶぞ。手伝ってくれ」

「・・・」

ライフィセット達の波止場を一つ挟んだ隣にいた従業員がもう一人の同僚に声を掛ける。その従業員はどこか上の空で反応がなかった

「お、おい、聞いてるのか!？」

従業員が様子に変な同僚にもう一度声を掛けると気づいたように反応する

「・・・わ、悪い。なんか頭の中を引っ張られるような感じがして・・・」
「最近、そんなことを言ってる奴が多いな。しっかりしてくれよ、ったく」

その様子を見ていたベルベット達、僅かではあるが確実に影響が出始めているようだ

「・・・性格には『まだ』という所ね」

「急いだ方がよさそうじゃの」

「ベンウィック、モアナとメデイサの領域から出るなよ」

アイゼンは鎮静化の兆候が出始めている対抗策としてベンウィックに指示を出す

「喰魔はカノヌシの一部だ。ある程度の鎮静化に対抗できるはずだ」

「了解。副長達こそ気をつけて」

ベンウィックはその後船員達に指示を出す為船へと戻る姿を見届けマギルウが火山のある方角を見つめる

「キララウス火山は、ノースガンド領の北端じゃ。ここからまだ大分あるぞ」

「途中で休める所があるといいがな」

ロクロウの懸念にアイゼンが答える

「火山の麓にメイリスオという街がある。海に面しているものの、近頃は流水が押し寄せて接舷ができません。だが、陸路からなら入れるだろう」

「ノースガンドだけではなく、大陸全体で寒冷化が進んでいるようだ」

すね」

流水氷というフレーズでエレノアはここ最近での大陸の気候変動を思い出す

「寒冷化・・・カノヌシの鎮めの力が関係してるのかな？それとも四聖主が眠ったせい？」

「どちらの可能性もあり得るが・・・」

ライフィセットの推測にマギルウも顎に手を当て考えるが

「考えると、事の大きさに寒気が増すぞ」

「そうだね。けど・・・」

「どの道目的は変わらないわ。まずはマイルシオに向かいましょう」

ベルベット達はメデイサを連れ出したフォルデイス遺跡を抜けガイブルク氷地へと出た。変わった構造だが古代の文明にとっては洞窟に加えて平地二つと行き来できるので丁度よかったのだろう。ガイブルク氷地はここノースガンド領の中でも特に気温が低い。火山から流れる溶岩による地熱で氷河の底を溶かし所々間欠泉から湯気が噴き出ているが、此処では大して役に立っていない

「北の街マイルシオまで、もうあと少しだね」

「そのマイルシオを抜ければ、いよいよ決戦の地、キララウス火山だ」
ライフィセットとロクロウは吹雪が吹き付ける中道の先を見据える

「・・・寒いとは聞いてましたけれど、本当～に寒いですね」

エレノアも流石に堪えるのか体が震えている

「地脈融点で四聖主を復活させれば、この気候にも変化が現れるはずだ」

「儂らが生きておる間に、どれだけ温かくなるかはわからんがのー」

アイゼンの推測にマギルウは当たるかどうかともわからない予測を立てる。どちらにせよ温暖化するか寒冷化するかは今は関係ないのだ

「急ぐわよ。どんな過酷な寒さだろうと、険しい山だろうと進むしかない。四聖主を復活させるまで、足を止めるわけには行かないわ」

氷地を進み一行はついにメイルシオの門にたどり着く、その横で鎧を着た門番がガタガタ震えながら立っていた。門番はイラついているようだ

「くそう．．．冗談じゃねえ．．．!」

「ここがメイルシオ?」

ベルベットは近づき門番に質問するが聞いているのか聞いていないのかブツブツ呟いている

「寝ずに警備三日だど?ふざけんな!ちよつと採掘をサボっただけじゃねえか!」

「ねえ——」

ベルベットが呆れたように再度聞くと門番は荒々しく答える

「ああ、そうだつ!用があるなら勝手に入れ!!!」

「そうさせてもらうわ」

「くそ．．．くそ．．．街の奴らめ．．．!」

ベルベット達は門番を素通りし門へと向かう。門番は呪詛の様に呟く

「街の奴らめ．．．!この恨み．．．絶対思い知らせてやる．．．つ!!!」

「あの」

門番の前にはケンが立っていた

「あああつ!?!なんだまだなんかあんのかつ!?!とつとと行きやがれ!」

「失礼ですが。どれくらいサボっていたのですか?」

「そんな事聞いてどうする!!部外者の貴様が!」

兜の目出しから憎しみに満ちた目がケンを睨みつける

「業務を怠ったのは確かにいけない事です。ですがその罰が三日不眠不休での警備はいくら何でも過剰と思ひまして」

「．．．十五分だ．．．炎石の需要が増したつていうから連日休みなしで駆り出されたんだ．．．ここは大陸で最北地、街だから人手は多いが需要が増えたから手がいくらあっても足りない．．．」

門番の言う通り寒冷化が進み僻地にも近い、この街では雇用と設備はあれど移住にしては厳しい所である

「ここ毎日朝から晩まで働き詰め、それに俺が働き手の中で一番若い

からって夜遅くまで残って仕事してたんだ……いくら体力があろうが限界があるんだ……」

脱力したように両腕を垂らしながら応える

「確かに悪かったさ……でも疲れてたんだ……」
「……」

ケンは何番の話の聞き終わり彼の腕を掴み門の向こうへと歩いていく

「お、おい!?なにすんだ!」

「この街を取り仕切っている人に合わせてください」

「そんなこととしてどうする!」

「個人としてお話したいだけです」

先に街に入ったベルベット達はケンのお節介に肩を竦める

「あいつ、また余計な事を……」

「だが、これはある意味でチャンスだろうな」

ベルベットが腕を組みながら溜息を吐き横でアイゼンがケンの行動に可能性を見出す

「?」

「あの門番、街の住民にかなり恨みを抱いていた。穢れを発してかなり時間が立っているだろう。下手すれば業魔化するほどにな」

「それを利用するってこと?」

ライフィセットがアイゼンの方を向き質問する

「さあな。あいつの事だ、利用はするだろうが悪いようにはしないだろう」

「だよな。今まであいつがそんな事する所は見たことがない」

「どちらかというと体よくつかわれてる気が……」

ロクロウはアイゼンの推測に合わせる。エレノアは今までの事を振り返り雑用をしているケンの姿ばかり思い出す

「どうでもええから僕は早く宿で休みたいわい……」

マギルウは震えながら呟いた。メンバーの中で一番薄着なので仕方ない事であるが

ここマイルシオは王国最北部の街、オーロラや温泉、さらには温泉から発生するガスを利用したガス灯まである。王国の中では一、二を争う程インフラが整っている街である。以前は北限の港町であったが流水の増加で海路による貿易ができず現在は炎石の流通で街の経済を支えている

「すごい・・・北の果てにも沢山の人が住んでるんだね」

「キララウス火山だけで採れる“炎石”の採掘で生計を立てている街だ」

「つまり、火山に異常が起これば壊滅するのう」

アイゼンとマギルウの言う通り利益を生む火山からの鉱物のしかないこの街はベルベット達がこれから行う行動で衰退するのは目に見えている

「二人の魂を使った上に、この街まで・・・」

「非道よね。罵っていいわよ」

エレノアは心を痛める。ベルベットはその気持ちをこれから全てを背負う自身に押し付けてもよいような発言をするが、エレノアがそれを拒否する

「そんな資格はありません。私達聖寮も同じことをしてきたのですから」

「こんな厳しい場所でも人が生きていけるのは、きつと、寒さを感じて寒さと戦う心があるからだよ。だから僕は、混乱が起こっても、混乱を感じなくなるより、ずっといいと思う」

何も感じずただ生きているだけの生、それなら人間である必要はなくそれ以前に人間など必要ない

「じゃな。心が動かぬ生などクソくらえじゃ」

「・・・はい、クソくらえです」

エレノアがちよつと口が悪くなったような気がするが気にしないでおう

「問題は、ベルベットが溜めた魂で四聖主全員を起こせるかどうかだな。四聖主の休眠とカノヌシの覚醒が関係しているなら、奴を封じるには四聖主全員の力が必要と考えるべきだ」

「多分、二体しか起こせない。あたしの中に残っているのはテレサとオスカー。二人の魂だけだから」

「確かなのか」

「ええ・・・わかるの」

ベルベットの言葉に嘘はない。現に夢の中で会っているのだから

「聖主二体でカノヌシに対抗できるか否か・・・」

「責任は取ります。不足は私の魂で——」

エレノアが言いかけた時横からロクロウが口出しする

「足りなきやシグレを呼び出せばいい。あいつの魂なら生贄に丁度いい」

「ならばメルキオルのジジイもじゃな。カチコチに凍っておるゆえ、穢れておらんぞ」

「特等二人を相手にする気ですか!？」

ロクロウは兄であるシグレを、マギルウは師であるメルキオルを仕留めれば丁度4つになる。最高戦力の二人を相手にするには傍からみれば狂気の沙汰だが

「俺は元々そのつもりだ。見逃してくれるようなタマでもないしな」

「むしろアルトリウスとカノヌシが動けない今が、奴らを倒す好機だ」

導師と聖主が動けない今、まともな戦力としては特等対魔士であるシグレとメルキオルの二人のみ。尚且つ聖主を目覚めさせる可能性が一番高いのもこの二人だ。どちらにせよ相手にしなければならぬ事にエレノアは頭を抱える

「安全策なんてクソくらえ・・・ですか」

「そういうことじゃの〜♪」

「わかった。あたしに任せて」

「任せるのはいいが、どうするんだ？」

ロクロウはベルベットに何か考えがあるのか質問する

「火山への道は、街の一番奥みたいね。まずは街を回ってみる」

「ベルベットさん」

そこに門番を連れたケンが近づいてくる

「自分はこれからこの街の町長に合ってきます」

「またお節介焼き?」

ベルベツトは若干呆れたようにいうがケンは気にせず答える

「個人的に思う所がありますから、一旦失礼します。なるべく早く戻りますから」

「わかった。俺達は街を調べてから宿で待つ、そこで落ち合うぞ」

く

ケンは門番に先導してもらい町長のいる家の前にたどり着く

「ここだ。だが一体どうするんだ、初対面のお前に合つてくれるかわからんぞ」

「まあ殆ど思いつきなので追い返されたらそれまでですが、やるだけやってみます」

ケンは家の扉を静かにノックする、暫くすると扉が開き老夫人が出てくる

「はい、どちら様でしょうか」

「突然のぐ訪問、失礼いたします。町長との面会をお願いしたいのですが、ご在宅でしょうか」

ケンは頭を下げ町長との面会を願い出る。老夫人は一瞬驚きながらも礼節を重んじるケンに相応の対応で返し家の中へ入れる。夫人は部屋の奥にいる町長を呼び出しに向かう、少しして町長であろう老人が現れた

「私がこのメールシオの町長です、なにか御用ですか?」

「突然の訪問に対応していただきありがとうございます。実は町長様と商談をと思ひまして」

「商談・・・ん?お前!なぜ此処に!」

町長はケンの後ろにいた門番を見て声を強めるがケンがそれを制止し一枚の紙を差し出す

「実は自分は一応こういう役職を持つ者です」

く

ケンが町長と会談をしているその後、一通り街を見て回ったベルベツト達は一足早く宿を取り休息を取りながら帰りを待っていた

「あく寒かったくあとちよつとで足が霜焼けになるところだったわ

い」

「マガルウは部屋の暖炉の前に座り足を温めている。ベルベット達は各々自由なところに腰掛け情報を整理する」

「キララウス火山は街の奥にある洞窟を抜けた先、距離は遠くないわね」

「幸いこの街に聖寮の対魔士や王国の兵士はいない。出歩く分には問題なさそうだ」

「だからといって上半身裸で素振り止めてくださいよ。やるなら夜にしてください」

「ロクロウは日課の鍛錬をしようと意気込むもエレノアが釘を刺す」

「ケン、いつ帰ってくるのかな」

「町長と話しをすると言っていた、アイツなりの考えがあるんだろう。うまくいけば俺達の行動がしやすくなるかもしれない」

「そんな事を話している時部屋の扉が開きケンが帰ってきた」

「申し訳ありません。お待たせしました」

「そこまで待つてないわ。で、町長と何をしたの」

「実は・・・」

「ケンはベルベット達に詳細を話した。門番と町長の言い分のすり合わせをした結果。労働時間の長時間化、休日の返上は炎石の需要過多による供給が足りないためだった事、町長も作業員の不満を買うことはわかっていたが街を運営するには仕方がなかったらしい。そこでケンがかめにん商会を通して炎石採掘事業の出資と人手の手配、採掘の効率化と炎石以外の鉱石の利用に関する技術の提供を条件にベルベット一行の行動を他言無用と仕事環境の改善を提示した。後費用は此方が出すので火山の様子がおかしいとか理由を付けてとして数日街を空けて欲しいと頼んだら町長はこれに快く承諾、門番の男性とも和解、お礼、とういうより交換条件としてその間この街の施設は好きに使ってよいと許可をもらったとの事だった」

「かめにん商会をうまく使ったか」

「少し譲歩しましたがかめにんさん達ならうまくしてくれるでしょう」

「あの門番に目を掛けるなんてお前もお人よしだな」

ロクロウの言葉にケンは視線を一瞬だけ下げた

「まあ・・・自分もそれに似たような事がありましたから・・・恐らく、メイルシオの住民が一斉にヘラヴィーサに行った事で聖寮も感づいて此処に来るでしょう」

「あんたが何もしなくても、あたしが災禍の頭主と脅して無理矢理街から追い出すつもりだったし。手間が省けた、感謝するわ」

その時部屋の扉が開き船に待機していたベンウィックが入ってきた

「なんか街の人間が旅行の支度をしてたけど。何事なんです副長？」

「ベンウィック、どうしてここへ？」

アイゼンは待機と指示していたベンウィック達が此処に来たということは何かあったのだろうと理由を聞く

「副長に届け物ができたんです。クロガネやモアナ達も一緒だよ」

「モアナまで!？」

エレノアはまさかモアナまで付いてきたことに驚愕する

「どうしても追いかけるって聞かないんだ。エレノアが死ぬ夢を見たんだって」

「モアナ・・・」

「シグレ達が来るまでどれくらいかかるかな？」

「そうさな・・・到着は『緋の夜』あたりじやろうて」

「なら、ちよつと時間をもらうぜ。クロガネは、俺に用があるんだろ？」

「うん、そう言った」

「丁度いい、各々休息をとっておけ」

ロクロウはわかつていたようにベンウィックに確認を取る。アイゼンは緋の夜までにはまだ時間があることを考慮し各自に休息の指示をだす

「そうね。戦いの準備も必要だし」

「最後の自由時間かもしれん。例によって思い残すことがないように」

「……」

「フィー、何かあるかわからないから街から出ちや駄目よ」

なにか考えていたライフィセットにベルベットが街から出ないよ
う言うとライフィセットは顔を上げる

「僕……ベルベットと一緒にいてもいい?」

「いいけど……いいの?」

「うん」

「なら、好きにきなさい」

↳

第50話 終わり

メイルシオにて

ケンがメイルシオの町長と話をつけ、住人は数日の間不在となり今街に居るのはベルベツト達とアイフリード、ベンウィック達団員のみである。街の中でみなそれぞれ別の場所で一時を過ごしている、ベルベツトとライフィセットは街の見回りを、アイゼンはベンウィックからの届け物を受け取ると早速でその場を後にし、ロクロウとクロガネは聖堂の方へ、エレノアはメデイサとマイルと一緒にモアナの子守りへ、ビエンフーもくっついていったが。マギルウは気まぐれにぶらぶらしているようだ。一方ケンは宿屋の一室で白紙の本に文字を書き込みながらその隣に山積みになっている書類や本を見比べ。問題がないか確認した後、書類と本を書き込んだ物を一緒に箱に納めている。そして直ぐ別の書類を取り出し同じ作業を続けている。彼の後ろから声が響く

「忙しそうだな」

「はい。此処の町長さんと取引をした以上、此方も役目を果たさねばなりませんので」

後ろから現れたのはルシフェルであり、ケンの作業風景を覗くように観察する。そしてルシフェルは無造作に一つの本を抜き取り中身を見る

「メイルシオと交渉した内容によれば採掘と鉱石の利用法についての技術提供だったはずだったと思うが」

ルシフェルが開いた書物にはそれには全く関係ない技術であった。様子を見に来たルシフェルにケンがありとあらゆる技術書類を求めてきた時点で察してはいたが

「二応聞いとくが、これをどうするつもりだ？見た所君がいた世界で近代辺りの技術だが」

「この書類達をパーシバル殿下に託そうと思ひまして」

「ほう」

「・・・恐らくこれからこの世界は自分達の行動で確実に環境が変化す

るはずです。極短期間ではないでしょうが天候や地形の状態が悪化し天災が起きます。文明は後退し、技術は失われるでしょう」

ケンはずを止めず左眼の補助も手伝ってスムーズに作業を進めていく

「これはその為の保険であり。自分からの身勝手な罪滅ぼしです」

「文明が衰退したとしても存続ができるようにという訳か」

ルシフェルは書類を戻し机に腰掛ける

「ですが急な発展は混乱をもたらします。ですからこれを殿下と王家に秘匿してもらい、時代と状況に応じて判断してもらおうようお願いするつもりです」

「ふむ・・・わかった、いいだろう。これに関しては君の選択に任せよう」

その後、街が寝静まった深夜でもケンは作業を続けていた。ルシフェルはスマホを弄りながら部屋に置いてある椅子に腰かけ時間を潰している。暖炉の薪が燃える音とペンの文字を書く音だけが響いている。準備も終盤に入る中ケンが口を開く

「ルシフェルさん、実は一つ聞きたいことがあるのですが・・・」

「ん？どうした」

「この異変が収束した後、自分はどうなるのでしょうか」

ルシフェルはスマホに目を向けたまま答える

「急に変な事を聞くんだな。どうしてそんな事を聞くんだ？」

「・・・自分はこの世界に対して罪を犯しました。理由があるとはいえ、多くの人々を苦しめたのは事実です。もしそれが許されないことであるならば自分は甘んじて罰を受ける覚悟があります」

ケンはルシフェルの方を向き直りそう告げる。ベルベット達と出会い。ベルベットが聖寮を相手にする道を選んだ時、ケン自身もそれに同行した以上罪はある事は自覚している。事が終わった後自身の魂が消滅したとしてもそれが運命であると覚悟している。ケンの決意をルシフェルは感じ取った

「すまないが、それは教えることはできない。未来は絶えず変わっている、言えることは君は最良の未来を想い、選択することだ。思う様

にやってみるといい」

「はい、わかりました」

ケンはそう応えかめになん商會に運送してもらおうように十数個の大きなコンテナに書類を納めていく。建築、各種インフラ、ライフライン、医療、農業、工業に関するありとあらゆる化学技術、最後まで悩んだが兵器に関する技術も入れておく。後はこれを間違った方向に進まない事を注意文に加えておく。作業が終わる頃には東の空が僅かに明るくなってきた

「夜が明けますね・・・」

「おつかれさんといった所か、今の内に休んでおくといい。幸いまだ日はあるから焦る必要はない。それじゃまた来る」

ルシフェルは一瞬で消え部屋にはケンのみが残った。ケンは眉間を揉みながら立ち上がる

「最良の未来・・・か」

部屋の扉に向かいながら静かに呟いた

第51話

「休憩はここまでじゃ。特等共が来おったぞ！」

宿でベルベットとライフィセットとエレノアが寛いでいると扉が開き、マギルウ、アイゼン、ロクロウがやってきて聖寮、しかも最高戦力の特等が襲来してきたのをマギルウが知らせる。そこに奥の部屋からケンが出てきて合流する、皆が目を合わせ支度をして外に出る「あの日と同じ緋の夜・・・」

ベルベットが夜空を見上げ血の様に赤い月がベルベット達を見下ろしている。三年前の出来事が脳裏の過る

「びびったかや、ベルベット？」

「誰がよ」

煽るマギルウをベルベットは突っぱねる

「心配するな。シグレは任せろ」

「クロガネは？」

ベルベットは姿が見えないクロガネを尋ねるとロクロウは背中の刀の柄に手をやる

「一緒だ。シグレは、俺とクロガネが斬る」

クロガネは文字通り刀となりロクロウの覚悟を聞いたベルベットがアイゼンの方を向く

「アイゼン。悪いけどメルキオルは、あたしが喰らうわよ」

「わかった。だが、決着は見届けさせてもらおうぞ」

僅かに口角を上げるアイゼンにベルベットが僅かに微笑む

「マギルウ、あんたは好きなようにかき回しなさい」

「言われんでものゝ♪」

「ベンウィック達は、頃合いを見てバンエルティア号に戻って待機して」

「アイ、ママ！」

ベンウィックが指示を聞いて姿勢を正すとモアナもそれを真似る

「・・・ライフィセット」

ベルベツトはライフィセットと顔を合わせる。ライフィセットは静かに頷く

「行く」

すっかり頼もしくなったライフィセットに頷き、エレノアの方を向く

「エレノア、ライフィセットをお願い」

「・・・はい。もちろんです」

「ケン」

ベルベツトはケンと顔を合わせる

「後もう少しだけ付き合ってもらおうよ」

「ええ、何処までも付いて行きます」

ベルベツトはそれを最後に火山の入り口の方へ向き直る

「行くわよ！特等対魔士を殺し、世界を混乱の炎で包む!!」

皆がベルベツトの横に並び立ち一斉に歩き出す。その後ろ姿をモアナが手を振って見送る

「いつてらっしやーい！元気で帰ってきてねー!」

ロクロウが右拳を上げマギルウは手をひらひら振り、ライフィセットはつい振り返って手を振りエレノアもそれにつられるように振り返る。ベルベツトもライフィセットの方を向いたのでアイゼンとケン以外が反応した結果若干締まらなかった

山道を上り、荒涼の風が吹きこむ洞窟を抜け一行はキララウス火山の入り口にたどり着く。エレノアは周囲を見る、狭い山道を見て待ち伏せを警戒する

「挟み撃ちに絶好の場所ですね・・・」

「奇襲の心配はない、シグレは、この先にいる」

「なぜわかる」

アイゼンがロクロウにその理由を尋ねる

「あいつは小細工なんて姑息な手は使わん、こういう時は必ず正面から待ち受ける」

キララウス火山の内部に入り少し進むと人影が見えた、そこには本当にシグレ正面から待ち構えていた。地面に座り心水を飲んでい
「おいおい、本当に正面におったわ・・・」

皆が警戒して立ち止まる中ロクロウは一人シグレに向かって歩を進める。エレノアがそれに気づいて止めようとするがベルベツトが横から腕を出し制する

「ロクロウ・・・!?!」

「大丈夫よ」

ロクロウはシグレの目の前に立ち、クロガネ征嵐を掴み胡坐をかい
て座り込みシグレに刀を差し出す、シグレは何も言わず刀を受け取る
と鞘から刀身を少しだけだし出来をみる。ロクロウはその間に心水を飲む。シグレは鞘から刀身を完全に抜く

「大した奴だ。自分を刀にしやがるとはな」

シグレは一目でクロガネが自らを刀に打ち直していることを見抜いた

「・・・ああその刃は、クロガネの数百年そのものだ」

「クロガネ征嵐か。面白え」

シグレはクロガネ征嵐を振りかぶり心水を飲むロクロウの首元の寸前で止める

「今は、まだ“クロガネ”だ。“征嵐”とは“號嵐”を征する刀の名」

ロクロウは杯を置き続ける

「俺が、お前と號嵐を叩き斬って、こいつを“クロガネ征嵐”にする」

「・・・面白えなあ!」

ロクロウの目的に嫌な顔をするわけでも嫌悪するわけでもなく鞘に刀を戻しロクロウに差し出す。それを受け取り立ち上がるとベルベツト達の所へと戻る

「待たせたな」

「気をつけて。おそらくこいつも神依を使うわ」

「神依だあ? 聖隷の力を借りる趣味はねえよ」

それを聞いたシグレが言い放つとマガルウ顔を舐めてる猫を見ながら言い返す

「対魔士がよう言うわ。猫聖隷の力を借りとるじゃろうが」
「借りてねえよ、バーカ！」

いきなりの悪口にマギルウは驚いて声が出ない

「そうよ。逆にあたしは、頼まれてシグレの霊力を抑え込んでいるのよ」

「抑え込む?・・・って、まさか！」

抑え込むというフレーズでライフィセットが感づく

「応よ、修行の為さ。最初は指一本動かすにも苦労したが・・・ムルジム、枷を外せ」

ムルジムがシグレに瞬きを一度したその瞬間シグレの体からオーラののような霊力があふれ出す

「うおおおおおっ!!!」

その圧倒的な覇気と霊力にベルベット達がたじろぐ

「これが人間の力だど!?!」

「猫をかぶせておったか！」

「人間やりやあでできるんだよ。そこの男の様にな、対アルトリウス用のとっておきだぜ」

シグレは腕を回し號嵐を抜き鞘を放り投げる

「・・・流石だぜ」

シグレの威圧感を前にしたロクロウは驚くと同時に微かに笑う

「ロクロウ！」

「悪いけど手を出すわよ」

ライフィセットとベルベットがロクロウの隣に立ち戦闘態勢に入る

「そうだ、全員でかかってこい！正々堂々なんてぬかせるほど、俺の剣は甘かあねえぞ!!」

「知ってるさ、嫌ってほどな！」

ロクロウはシグレに向かい走り出す、そして皆も構えて走り出した

「はああああ!!」

ベルベットは跳躍し刺突刃を横薙ぎに振るう

「なっ!?!」

「やるな、太刀筋は悪かねえし踏み込みもいい。だがまだまだ修行不足だな!!」

號嵐で簡単に防がれ、そのまま鏢迫り合いになり弾き飛ばされる。そこにロクロウが斬りかかるがあっさりとかわされ反撃を受ける。ロクロウはすかさず後ろに飛び退き今度はエレノアが前に出る

「裂駆槍!!」

「おっと!」

エレノアは連続で突きを放つがシグレに軽々と首だけ傾け躲かれるがそれでも食下がり槍を地面に立て回し蹴りを放つ

「旋独楽っ!!」

「足元がガラ空きだぜ!!」

シグレはそれを見切って体を屈め槍を足で蹴り払い体勢を崩したエレノアを叩き斬ろうと號嵐を振り下ろした瞬間、横からアイゼンが聖隷術で風の槍を繰り出しながら邪魔をするシグレは攻撃を止め術を號嵐で打ち消しながら数歩下がる

「ははっ!!流石アイフリード海賊団の副長!そうじゃなくちやあなあ!!」

「アイフリードが大分世話になったからな、礼はさせてもらうぜ!」

シグレはアイゼンの攻撃を避けようともせず真っ向から受ける。アイゼンがジャブとストレート、蹴りを織り交せて攻撃するがシグレは腕のガードと號嵐の刀身で防いでゆく

「ちっ、化け物が・・・」

「おいおい、この程度で終わりか?がっかりさせるなよ」

アイゼンの猛攻を受けながらも余裕を見せるシグレにベルベットが背後から攻撃を仕掛けるがこれも難なく捌かれてしまう

「ちいっ!!」

「甘いぜ!背後からの奇襲なんざ常に警戒して当たり前だあ!!」

ベルベットは舌打ちしながら後方へ飛ぶ、それを狙いすましたかのようにシグレはアイゼンを蹴り飛ばし振り向きざまに斬り上げる

「くうっ!!」

「まづは一人!」

避けきれず右腕を斬られ、着地と同時に膝をつくベルベットに追撃を仕掛けようとするシグレの前にケンが立ち塞がり號嵐を白刃取りで止める

「ベルベットさん、今の内に！」

「おお!!俺の太刀を受け止めろなんざやるじゃあねえか!!」

ケンはそのまま力で押し返し距離を取る

「ふんっ！」

「動きが止まったぞー！ライファイセット！」

「うん！」

ケンはシグレに距離を詰められるが防御と回避に徹して時間を稼ぐ。そこにマガルウとライファイセットが聖隷術を発動させる

「爪牙連なり裂傷乱れよ！ダークネスファング！」

ケンは後方に飛び込んで回避する。シグレの周りから狼の牙が無数に噛みつこうと飛来する。全て受け切るのは悪手と判断したかシグレは大きく下がる、その時地面に術の陣が広がる

「掛かったのう！氷の檻に閉じ込められてしまうのか？インブレイスエンド！」

地面から氷柱が発生し、それは瞬時にシグレを閉じ込める巨大な氷塊へと変わる

「どうじゃー！これだけ氷漬けにしてしまえば特等だろうが関係ないわい！」

その時突然氷塊に切れ目ができたかと思うと次の瞬間、氷塊は欠片になって辺りに散らばる

「んなあ!？」

「なるほど・・・考えたな、確かに身動き取れないようにしちまえば刀振ってなんぼの俺には効果的ってやつだな。だがぬるい!!」

シグレは號嵐を構えると覇気があふれ出す

「今日は今までで一番楽しめたぜ、その礼だ。嵐月流奥義を拜ませてやるー！」

ベルベット達はその覇気の圧で動けない中口クロウがクロガネを抜き放ち走り出す

「避ける必要はねえ…！」

シグレが號嵐を大上段から振り下ろすと同時にロクロウがクロガネを下段から切り上げる

「何処にいても同じだ！嵐月流!!」

「荒鷹!!」

「絶刑!!」

二振りの刀がぶつかり合いお互いに大きく弾かれ後退する

「はっはあっ!!俺の一撃を止めるか!!」

「貴様の覇気は幾度となく味わっているんだ!!こつからだぜシグレエ!!!」

「気が合うなあ!!俺もだあ!!」

「おおおおっ!!!」

ロクロウが小太刀を構え直しシグレは號嵐を肩に担ぎ二人とも同時に走り出す、凄まじい剣撃のぶつかり合いにベルベット達は見ている事しかできない

「…ここはロクロウに任せるしかないな」

「ええ、二人の意地のぶつけ合いですから。決着を見届けましょう」

ロクロウが横薙ぎ、シグレは半歩後退して躲し大上段からの兜割り。ロクロウはそれを横に跳んで躲し大きく踏み込んで突き込みシグレが號嵐を横から振るい弾き、ロクロウが体勢を崩したところで胸部に柄頭を打ち込む

「ぐふっ!」

ロクロウが息を吐き出し僅かに後ろに下がる、シグレが追い討ちを掛けようと前に出た時ロクロウが空かさず後ろ蹴りをシグレの腹に叩きこむ

「ぐおっ!」

お互い膝を付き顔を見合わせる

「大したもんだな…初めてだぜ。お前の蹴りを喰らったのはよ…!!」

「関心するのは早いぜ…!まだ俺の剣を見せていない!」

「…お前の剣?そりやあ休んでる場合じゃねえな」

「シグレ・・・！」

ムルジムが声を上げるがシグレが口を挟む

「手を出すんじゃないぞ、ムルジム」

シグレはそれだけ言うのと號嵐を中段に構える

「ロクロウ、この人はまだ力を・・・」

「わかっている。こいつはシグレ・ランゲツだからな」

ライファイセツトの言いたいことをわかっているロクロウは小太刀を中段と上段で構える。今までシグレとやり合ってきたからこそシグレという男の実力を身に染みて知っているからだ

「二刀でいいのか？」

「確かめてみる。命を賭けて」

「・・・そつちもなあ」

それからお互い構えたまま動かない。お互い手の内を知り尽くしている以上、先に動けば負ける。エレノアとライファイセツトは息を飲んで見守っている。長い沈黙が続く中溶岩が流れる音のみが響く。そしてついに二人の目が開き駆ける。シグレは跳び大上段からの唐竹割りに振り下ろす

「嘖ッ!!」

ロクロウは小太刀を斜めに重ね合わせ迎え撃つ

「雄おおおおっ!!!」

號嵐と小太刀がぶつかり火花が散る。鏢迫り合いに僅かに拮抗する。その時ロクロウが小太刀を捻り、號嵐を小太刀の上に跳ね上げる。ロクロウの裏芸二刀流が初めてシグレの表芸一刀流に打ち勝った

「おおっ・・・!!」

跳ねあがった號嵐には目もくれずシグレはロクロウを見る、そこには背中のクロガネに手を掛けるロクロウ。刀身が見えた時、シグレは驚愕ではなく笑みを見せた

「斬ッッ!!!」

鞘から抜き放ったクロガネ征嵐を斜め上段から振り下ろす。シグレの胴体から鮮血が嘖き出す

「三刀……これがお前の剣か……」

「そうだ。シグレ・ランゲツに勝つために鍛え上げた業だ」

「やるじゃねえか」

それをきいたシグレはゆっくりと後ろに倒れる。自身の傍に突き刺さった號嵐に顔を向ける

「クロガネへの花向けだ。號嵐を……持つてけ。後な……この猫は見逃してやってくれ」

「シグレ……」

ムルジムはシグレに近づく。ロクロウは號嵐を抜き咄く

「シグレ、あの上意討ちは——」

「どの道、おんで出てたさ。飼い犬暮らしにうんざりしてたんだ」

「……」

「バカ野郎……小難しいこと考えんな。斬れたら嬉しい。斬れなきや悔しい。斬られれば死ぬ……そんだけのことだ……剣は単純で……だから面白れえ……」

「ああ……面白いな」

「ふっ……いい悪い顔だ。アルトリウスの石頭も……そんな風に笑えば……いいのによお……」

シグレは目を閉じ。それから目覚める事はなかったがその顔は満足げだった

「……そうか……ベルベット」

事を終えたロクロウがベルベットを呼ぶ

「いいのね」

「いいさ。兄貴は俺が斬った」

ベルベットは業魔手を出しシグレに近づき振りかぶる

「はああああっ!!」

それと同時にロクロウは號嵐を地面に突き立てた

く

「ここに残っていると、多分巻き込むわよ」

ベルベットは地面に刺さった號嵐を見つめるムルジムに警告する。

シグレの亡骸はもうこの世にはない、だから地面に刺さった號嵐が墓

標である

「危なくなったら逃げるわ。でも、もう少しだけここにいさせて。シグレには意思を解放してもらった恩もあるし・・・何よりこの人、案外寂しがり屋だったから」

「そうなのか」

「ロクロウはシグレの意外な一面があったことに驚く

「知らないのね、兄弟なのに」

「ずっと剣の修行ばかりだったからな。俺もシグレも」

「ごめんなさい、皮肉じゃないのよ。思う様に生きて死ぬ・・・きつと、それでいいのよ。私は嫌いじゃないもの、そういう人間が」

「そうか」

シグレという人間の死生観に理解を示し、ついてきたムルジム。似た者同士だったからこそだろう

「変わった聖隷ね。あんたも」

「どういたしまして」

それを最後にロクロウとベルベットは先に待つ皆の所へ歩き出す
「戻っても構わないわよ、ロクロウ」

「忘れるなよ。俺の目的は、お前に恩を返すことだぜ」

く

第51話 終わり

第52話

「温っ！いや暑っ！いやいや熱っううっ!!」

「一々騒がないでください!」

キララウス火山の内部へと足を踏み込んだ一行、マギルウが溶岩から発せられる熱に叫ぶのをエレノアが諫める

「ふん、火山の火口で冷静な方がおかしいわい」

「吹き上がってくる地脈の流れを感じる。ここが地脈湧点だ」

ライファイセツトは周りを見渡す。彼の予想通りこの火山が地脈の出口で間違いない、入口が聖寮に抑えられている以上聖主を起すにはここしかない

「おかしいぞ。メルキオルがいない」

アイゼンは此処にいるはずのメルキオルの姿がない事に警戒する。地形や環境を把握できていないベルベット達に地の利を活かし奇襲を仕掛けることぐらい容易いはずである。その時声が響き渡る

「シグレまで喰らったか、災禍の頭主!」

メルキオルの声が火口の中で反響する

「だが、対魔士でも贄足り得る魂はシグレ、オスカー、テレサ・・・後は儂くらいであろう」

「上からだ、奴は山頂か」

アイゼンは声のする方から見て上、山頂の方を見る

「三つの贄では三聖主しか目覚めず、カノヌシの力を封じることとはできん。のみならず、一角を欠いた地水火風は、火口を巻き込んで暴発するだろう。四聖主を同時に覚醒させたくば、儂の魂を奪いにくるがいい!」

メルキオルの挑発にベルベットが後ろにいるマギルウに問いかける

「どう思う、マギルウ?」

「畏じやな」

マギルウは即答する

「メルキオルが得意とする攻撃は“氷”。火口では地の利がないゆえ、誘導したいんじゃない？」

マギルウの情報が正しければ自分らがいる火口はメルキオルのとつてもつとも避けたい地形である

「だが、あいつは長い間、聖主の復活を企んできた対魔士だ」

「そう。故に、全て偽りと決めつけるのも危険じゃ」

アイゼンの懸念にマギルウは答える。メルキオルのような膨大な経験と知略を持つ人物は真実と虚構を巧みに織り交ぜ敵を惑わせ、破滅に追い込むことなど造作もないはずだ

「・・・今更だけど、マギルウ。アンタはメルキオルの身内なのね」

「全くもって今更じゃな、昔の儂の名は、マギラニカ・ルウ・メーヴェイン。メルキオルの幼女で、破門にされた元弟子じゃよ」

「マギラニカ・・・？」

エレノアはマギラニカという言葉に心当たりがあるのか何かを思い出している、少しして目を開く

「欠番の特等対魔士！」

「名を残しておったか。十年も前に破門したくせに・・・」

「お前、結構すごい奴だったんだな」

ロクロウが感心するもマギルウは淡々と続ける

「別にすぐくはない。ベルベットとアルトリウスの関係と似たようなものじゃ。恩も怨も・・・の、ベルベット、信じてくれとは言わん。じゃが、儂はあやつとの決着を——」

「どーでもいいわ、魔女の事情なんて。あたしは頂上に行く。いつも通り勝手にね」

口癖をそっくりそのまま返すベルベットにマギルウは笑みを浮かべる

「うむ、儂も勝手について行くぞ！いつも通りにの♪」

メルキオルが待ち受ける山頂に到着したベルベット達、灼熱の溶岩からの熱気から離れ身が縮こまる冷たい風を感じながら断崖絶壁に立つメルキオルを視界に捉える

「メルキオル……」

「気をつけい、あのジジイはシグレと違って正面からは来んぞ」

「……」

「ケン、どうしたの？」

「マギルウの警告に応える事はない。今まで相対してきた経験で全く油断ならない相手であることはわかり切っている。ライフィセットは頻りに目だけを横に向けるケンに疑問を浮かべる

「……ライフィセット、注意して。アレだけ隙だらけな姿を晒すのは怪しすぎるから」

「わかった」

「ベルベツト達が警戒しながら近づくとメルキオルは背を向けたまま語りだす

「四聖主は、本来地水火風の自然を調和させ世界の秩序を維持する存在だ」

背を向けていたメルキオルが此方に顔を向ける

「お前達は、そんな四聖主が眠りについた理由を考えたことがあるか？」

「さあね、興味ないわ」

知りもしない事を問われてベルベツトは即答する

「正に貴様の様な傲慢な存在こそが理由なのだ。四聖主の力——加護の力の源は、純粋な人間達の祈り……だが、人々は穢れ、祈りを忘れたせいで聖主達は眠りについてしまった」

「人々の祈りが聖主の力……聖隷と同じだ！」

「ライフィセットはメルキオルの言葉に聖主も聖隷も規模は違えど同じ存在であることに気付く

「カノヌシが心を喰らうのも加護だっていうのか？」

「第五の聖主カノヌシは、穢れ每人の心を喰らい尽くし、無に還す役を担う。再び人に赤子のような清らかさをもたらし、四聖主を復活させるためにな」

「メルキオルの話が本当ならばカノヌシの力によってロボットの様な物言わぬ人間がただ生きて祈りを捧げるだけの奴隷になる。祈り

も邪な精神がない分本当に純粹の祈りを捧げる事ができるだろうが

「心を無に還す!?!でも、それでは——」

「そう、文明は滅び去る」

エレノアがカノヌシの力が発動した時の事態を創造する、結末は直ぐに分かった。心を失い、精神を失い、活動するだけの人間には文明や文化を維持するという事などまず不可能である事は明白であった

「穢れの拡大とカノヌシによる精神浄化は、太古から幾度も繰り返されてきた。それが人間の文明が何度も栄えては滅んだ理由。だが、これでは何時まで経つても進化はない。故に、我ら聖寮がカノヌシの力を制御し、人の心を未来へと導かねばならないのだ」

メルキオル、聖寮はカノヌシがこれまで人類の文明を0の状態まで破壊してきたのを文明を維持しつつ人類を人形にしようとしている。メルキオルはそれを自らの責務と義務と捉えているようだが、それは一種の独裁であり文明は欲があるからこそ発展する。感情を失くした人類では文明の維持は不可能だ。現在の世界の状況を変えるには一番の近道だが

「・・・なるほど。カノヌシの制御の為に創った術が“神依”か」

「そして、神依の構築には、ジークフリートに使われている技術が必要じゃったんじやな」

「だからアイフリードを巻き込んだのか」

ベルベツトとマギルウは聖寮が何故神依の作製に注力したのか理解する。カノヌシの強大な力を人の身で制御するとなると危険が及ばないようには防御策が必要だ。だが手持ちの技術では完成できない、そこにアイフリードが持っていたジークフリートの技術の情報を手に入れ戦力増強ついでに拉致したところだろう

「・・・光があれば影があるように、どんなことにも“犠牲”は必要だ。わが身も同じ。人間の理想の為の“贄”だ」

その瞬間メルキオルの足元が輝き稲妻のような霊力が迸る

「ぐおおおおお・・・っっ!!」

「神依!!」

ライファイセツトは霊力の気配からメルキオルは神依を纏おうとし

ている事を看破する

「させるかつー！」

アイゼンは神依を纏わせる前にトドメを刺すべく走り出す

「違うぞ、アイゼンー！」

なんとマギルウはアイゼンとは逆の方向へ走り出す。ケンもマギルウが走っていった方向を振り返る、アイゼンがメルキオルの顔面目掛けて拳を振りぬくが手応えもなくまるで雲を殴ったよう感触と共にメルキオルの姿が消えた

「!!？」

「消えた！」

アイゼンとライファイセツトが驚愕する後方でマギルウが式神を出しメルキオルの術を防ぐ、メルキオルは直ぐに飛び退きベルベット達が駆けつける

「言ったじやろう、正面からは来んと」

「ち・・・一撃とはいかんか」

衣の所々に破けたような青い光のラインが入り何処となく未完成な神依を纏ったメルキオルが舌打ちをした

「捻くれ者が！誰に似た、マギラニカ！」

「儂は儂！悪の大魔法使い、マギルウじゃ！」

マギルウがお返しとばかりに式神を飛ばし反撃するメルキオルはそれを障壁で防ぎ直ぐ様術を発動する。メルキオルの周りからマギルウとケンを覗いたベルベット達が現れる。全員目は虚ろだが明確な殺意を向けてくる

「これは・・・」

「ジジイの十八番の幻術じゃ、さっきのとは違って実体を持っておる。油断すれば殺されるぞ」

「言われなくてもわかってる。大方動揺を誘うつもりでしょうけど幻覚なんて通じないわ」

ベルベット達はその言葉を皮切りに各々の幻覚に向かって走り出す。マギルウとケンはメルキオルに相對する

「儂ら二人がお相手するぞい」

二人が構えるとメルキオルはケンの方に視線を向ける

「お前達二人の相手をするのは僅かに骨が折れる、貴様にはこいつの相手になつてもらうぞ」

メルキオルがそれをいうとその後ろから禍々しい鎧に身を固めた異形の人型が重い足音を響かせ現れる。その体軀はケンより二回り以上に大きくメルキオルの前に立ち止まると同時に尾を地面に下ろし地面がめり込む。怪物がケンを睨むと同時に雄叫びを上げながら突進してくる。ケンは構えようとしたが相手が間合いに入ると脚に力を入れて踏み抜いた。地面が吹き飛び一瞬でケンの眼前に迫る

「早い・・・っ!」

「んなっ!」

ケンは予想以上の速さに反応が遅れ首を掴まれるとそのまま後方へと引き摺られていく

「ジジイ!あれはなんじゃ!」

「アイフリードの代わりに新たに作り出したものだ、ドラゴンと業魔を掛け合わせた・・・な。力も速さもアイフリードの比ではないぞ。呼称など必要ないがアムスと呼んでおる」

「・・・なんとも悪趣味な事じゃな」

何とか逃れようと足掻くも万力の様な力で首を絞められているため身動きが取れずそのまま崖の下へと一緒に落ちていき直下にある岩盤に叩きつけられる

「ぐっ・・・」

背中から伝わる衝撃に一瞬息が止まり意識が朦朧とする。アムスは貫手を翳しケンに顔面掛けて突き下ろす、首を掴まれ脱出できないと判断したケンは腕に脚を絡め軸をずらしアムスの巨軀を横に引き倒す。掴んでいた指が解け直様後方へ転がり距離を取る。アムスはゆっくりと立ち上がり体を此方に向ける、ケンは直ぐに構えを取る

「ツッ!!」

「ぬあっ!」

一瞬で間合いを詰めたアムスは岩盤を抉るようなサマーソルトキックを放つ、ケンの身を削ろうとする蹴りを上半身を後ろに逸らし

避けるも着地した瞬間に腰を捻り裏拳を繰り出す、ケンは何れに腕で防御するも勢いを殺す事が出来ずに吹き飛ばされる

「ぐあっ……」

地面を転がるもすぐに態勢を立て直したが眼前には既にアムスの姿があり、右ストレートが飛んでくる。直撃を受ける直前で腕を出して防御するが、想像以上の威力に後ろへと飛ばされる。なんとか体勢を整えようとするも追撃で放たれた左アッパーカットによって更の上へと打ち上げられ、遠心力を利かせた尾の横薙ぎがケンの脇腹を捕らえる

「どああ……っ！」

地面を擦り岩盤ギリギリで止まる。ケンは直ぐに片膝を着いて起き上がる

（……まずい、力は同等だろうが速さはあつちが一枚上手だ……どうする）

今の攻防だけで相手の力量を把握し、どう戦うか思索する。あの巨体にあのパワー、しかもスピードも速いとなると生半可な攻撃ではダメージを与える事はできない、相手は構えこそ取っていないが戦い方に武術めいたものが散見される。技術は此方の方に分があるがそれも重量と身長之差で殆どアドバンテージにならない。なればこの世界にない戦法で戦うしかない。ケンは立ち上がり前傾姿勢を取り姿勢を低くする。アムスは走り出し拳を振りかざす

「うおおっ!!」

ケンはそれに防御するのではなく前方に転がり攻撃を躲すと同時にアムスの片脚を両腕で掴み持ち上げ押し倒す。掴んだ足首をジャイアントスイングで振り回し投げ飛ばす、アムスは岩肌につつかる。ずり落ちケンが追撃しようとして近づくと近づくがアムスは前蹴りで蹴り飛ばす、反撃で数歩後退るケンにアムスは最上段からの回し蹴りでケンの首を捕らえ地面が叩きつける、盛大に割れ胴体が跳ね上がるとそこにオーラを纏った突進でケンを吹き飛ばす。今度はケンが岩肌に叩きつけられる

「ぐっ……」

全身に走る痛みに僅かに眉を歪め地面へずり落ちる、立ち上がるうとする目の前に巨大な影が差す。アムスは両手を組み振り上げた腕を振り下ろす、その時ケンは真横へ転がり躲す。素早く背後の回り込み腰に腕を回しロックする

(これなら対応できないはず・・・！)

アムスを抱え上げ後方へそり投げる、所謂投げっぱなしジャーマンで投げ飛ばされ岩に打ち付けられたアムスは経験したことのない攻撃方法でのダメージに僅かに混乱している。次に前面に回り込みフロント・スロープレックスで投げ飛ばす。アムスが立ち上がる暇を与えず首根っこをロックしてその巨体を逆さに抱え上げ、ブレンバスターで地面に叩きつける。直ぐ様ケンは跳躍し胸部目掛けて全体重を乗せたエルボー・ドロップを叩き込む。身体能力が互角か相手が上回っているなら自身の土俵に引きずり込むしかない。ケンはこの世界にはないプロレス技を仕掛けることにしたのだ。立ち上がったはニー・ドロップ、レッグ・ドロップと兎に角一撃に全力を込めた攻撃を加える。鎧にヒビが入るがアムスも攻撃を許さず腕を振りかぶりケンを殴り飛ばす

「くっ!!」

「——!!」

地面を擦り転倒するケンにアムスは腹部を蹴り上げ浮いた体にオーラを纏った掌底を叩き込む、ケンにめり込んだ掌からオーラが弾け吹き飛ばす。ケンは受け身をとり片膝を着き着地する、だが受けたダメージは軽くなく咳き込む

「ゲホッ・・・ゴホッ!」

ケンは手で口を覆い、アムスを見る。鎧は確実にダメージを蓄積している

(よし、弱点は見えてきた・・・後は根比べだな・・・！)

再び駆け出し接近戦を挑む、アムスはオーラの気弾を連射してくる。だがケンは被弾に臆することなく間合いに入り亀裂の入った鎧に跳躍しながら全体重を乗せた水平チョップを叩き込む

「ふんぬうっ!」

重い一撃にアムスがのけ反り後退する、ケンは追い打ちをかけるように懐に潜りこみ連打を浴びせる

「ふんっ！せいっ！」

「――！」

怒涛の連続打撃にアムスは堪らず反撃する、殴られながらも殴打を繰り返すと遂に鎧が割れ本体が露になる。空かさずが空きになった横膝を蹴りアムスは体勢を崩す、ケンは右拳にエネルギーを集中させ赤く発光する

「許せっ！」

「！！！！」

レオパンチがアムスの胸を突き刺さる。アムスは最後の足掻きか貫手をケンの脇腹に突き刺しゆっくりと倒れる、地響きが響く。

「……」

「――……」

アムスは言葉を発する事はなかったがその表情はどこか穏やかだった。腕は力なく地面に落ち、ケンは拳を抜き降りるとアムスの肉体は霧散して消えて行った

「……」

僅かにアムスが消えた場所を見ていると上から音が響く、顔を上げるとメルキオルが岸壁の淵に立ち霊力の塊を作り出していた。恐らくあれを火口に向けて発射し自分諸共吹き飛ばす気なのだろう。次の瞬間メルキオルが足元の何かに気付き体勢を崩した。そこにベルベットが業魔手でメルキオルを掴む、メルキオルは何か言っていたが遠くからでは聞こえず業魔手によって喰われた。ベルベットは地脈に魂を押し込むようで業魔手が光の塊を掴んでいる

「少し不味いかな……」

そう呟いた瞬間ベルベットが魂を地脈に撃ち込んだ。ケンは脚に力を籠め大きく跳躍し岸壁に捕まり登り始めた

く

ベルベットが地脈点に魂を打ち込んだとほぼ同時刻。地表でカノヌシの領域の結界の外の四方から赤青黄緑の光の柱が立ち上る。火

山、平野、谷、海から上った光は結界になりそれがカノヌシの領域を狭めていく、行き場を失ったカノヌシは八つ首の竜となり上空へ逃げるように登っていく。成層圏まで登ったカノヌシはそこに集まり遺跡が要塞めいた形状へと変化した。それと同時に、ローグレスでは聖寮の対魔士達がこの現象に驚愕していた

「なんだ今のは・・・!?!」

不気味がる対魔士の後ろで金属音が響く。振り返ると使役していた聖隷が仮面を脱ぎ捨てていた

「・・・目覚めたのだ、四聖主様が」

「我らは、最早汝らの道具ではない」

聖隷はそれだけを言い残し光の玉になってそこから離れて行った

「何が起こったんだ・・・!?!」

驚愕する対魔士達の後ろで町の住人達がどよめいていた

く

第52話 終わり

第53話

キララウス火山の火口にてメルキオルの打倒と眠りについていた四聖主を復活させたベルベット達。崖を登ってきたケンと合流し、噴火の危険性を考えて反対側の登山口へと急いだ。火山を下りて氷地へ出る、灼熱の熱気から一転身も凍る冷たい風が吹き荒れる

「助かったわ、マギルウ。メルキオルに隙を作ってくれなかったら終わってた」

「儂は儂のケリをつけただけじゃよ。じゃが、感謝するなら物でおくれ」

「前言撤回」

付けあがるマギルウにベルベットは速攻に突き放す

「花を傷付けない・・・誓約だったの?」

ライファイセツトはあの時足元に現れた花をメルキオルは踏みつけないようにしていた理由をマギルウに聞く

「・・・いいや。あのクソジジイは草花が好きだったんじゃよ。生きている人間より、ずっと・・・の・・・それだけの事じゃ」

「心は自由にならないのね。特等対魔士でも」

「魔女でももう。生きるということは、まっこと難儀じゃわ」

エレノアは周りを見渡す

「四聖主は目覚めたのでしょうか?」

「さてなあ。だが、これで起きない間抜けなら当てにしても無駄だ」

「その悪口、聞かれたかもしれないぞ。カノヌシの領域が変化している」

ロクロウが四聖主を煽るとアイゼンが忠告する

「うん、四人とも起きたよ。カノヌシは地脈から押し出された」

「これで増幅されていた霊応力は低下し、多くの聖隷の意味も解放されるじやろう。対魔士共の数は激減するはずじゃが・・・」

マギルウの予想通り、聖隷を操るためのカノヌシの力が宇宙に追い出されたため効果範囲外になったため多くの聖隷が離脱してきている。だがそれは業魔に対抗する手段がなくなったということの意味

する

「エレノア、お前まで戦えなくなっただろうな？」

「残念ながら、まだ見えています。悪い業魔も、聖隷も、魔女も」

ロクロウはエレノアに確認する。エレノアは残念ながらと言っ
てはいるが微笑んでいる

「・・・わかるのね」

「感じるんだ。あいつの本体は地脈から出たよ“聖主の御座”の上だ。
導師アルトリウスもそこにいる。けど、カノヌシは四聖主の力をすご
い勢いで押し返そうとしてる」

ベルベットがライファイセツトに確かめる。ライファイセツトは目を
閉じ上空を見上げカノヌシの気配を察知する

「四聖主が押し負けたら、今度こそ打つ手なしじゃ。余りまったりし
とる時間はなさそうじゃぞ」

「行くわよ。決着をつけに」

「うんー」

皆が歩き出す中ケンはカノヌシがいる方向を見る。左眼の超望遠
機能がカノヌシがいるであろう宇宙に浮かぶ建造物を鮮明に映し出
す

「・・・」

ケンは僅かな間それを見ていたが直ぐにベルベット達の後に続い
た、アイゼンの横に着き何やら話を始めた

その後下山し一行は無事メールシオに到着した。そこにタバサの
命令で協力で来ていた血翅蝶の団員から聖寮は此処ヘラヴィーサ北
方を第四種管理区、要は管理と治安維持から完全に除外放置すること
に決定したようだ。メールシオの住人は故郷が見捨てられた事に愕
然としていたがそこにかめにん商会が入り込んだとの事だ、聖寮に変
わってメールシオの援助をするらしい。住人達は喜んでそれに応じ
落ち着くまで自由にしても構わないとの事だった。これから決戦に
向けて準備をするベルベット達はこれ以上モアナ達を危険に晒すこ
とを避けるべくマイル達を此処に残していくことに決めた。ベン

ウィック達は出航の準備をする為ベルベット達が火山に向かった後にヘラヴィーサにへと戻っている。ベルベット達もマイル達に挨拶を済ませ先を急いだ

「お帰り！特等共を倒したんだな」

「ええ。でも、まだ導師と聖主が残ってる」

出航の準備が終わって待っていたベンウィックがベルベット達に気付いて走ってくる

「いよいよ最後の決戦だな！いいものが手に入ったから、やるよ」

ベンウィックは懐から一つの物を取り出しベルベットに投げ渡す

「・・・リンゴ？」

「気休めだけど、お守りだ。"フォーチュンアップル"っていう珍しいリンゴでさ。"幸運を呼ぶ"って言い伝えがあるんだ」

「フォーチュンアップル・・・」

ライフィセットは珍しい名前のリンゴに注目する

「うーん、悪党の俺達にひつようなのは、悪運の方じゃないのか？」

「悪運なら間に合つとるぞー」

「そういうこと言うなよ・・・」

散々な言われ様にアイゼンはそっぽを向く

「ま、それなりにありがたく貰つとくわ。リンゴは好きなのよ」

「食べるなよ」

「言われなくても食べられない——」

ベルベットは言いかけた瞬間何かに気付きリンゴを凝視した

「どうかした？」

ライフィセットはリンゴを見るベルベットに声を掛ける。ベルベットははぐらかす

「味見してみる？幸運のリンゴ」

「ダメだよ！お守りなんだから」

「そうね。生きる勇気をくれるお守りよ」

「・・・？」

ライフィセットはその言葉に首を傾げる

「で、最後の目的地は？」

「聖主の御座よ」

「ゼクソン港へ向かうぞ」

「アイ・マム！アイ・サー！」

アイゼンの号令にベンウィックが大きく返事をした。直ぐに出航する為にベルベット達は船に乗り込む、アイゼンが総舵輪に手を掛けると背後から声が掛かる

「ケリはついたみてえだな」

「ああ」

杖を突いたアイフリードが横に並ぶ

「次はアルトリウスか？」

「いや、その前に・・・あのお節介焼きの手伝いだ」

「そうか、好きにしろ。舵はお前が握ってるんだ」

その言葉にアイゼンは答えることなく舵を右に切った

く

その日の夜、バンエルティア号の甲板でベルベットが海を見ながら佇んでいる。その後ろからエレノアが近づいてくる

「なんですか、私だけ呼び出したりして？」

「・・・ライフィセットは？」

「一緒に見張りをするって言い出したけど、無理に休ませました。連戦の疲れがあるはずですからね」

「助かったわ。あの子、弱音を言わなすぎるから」

「名付け親に似たんですよ」

「似てないわよ」

ベルベットは手すりに腰掛ける

「あの子の頑張りは“希望”なもの」

「希望・・・」

「・・・いい風ね」

「はい。厳しくて悲しいけれど、やっぱり世界は綺麗です。果てしない海も、南国の島も。氷の大地も、火を噴く山も」

エレノアが海を見ながら語る

「そうね。そして、そこには“人間”が生きてる・・・これが、ライフィが

旅をしたがって世界なのね。あの子が海の向こうになんを見えたのか、やつとわかったわ。エレノア、一つだけあんたに頼みたいの。あたしに何かあったら、ライフイセットをお願い」

「どうしたんですか、突然？」

ベルベットの急な申し出にエレノアは少し困惑する

「喰魔とカノヌシの力は本質的に同じものだから理論上は可能なはず……うん……理じゃない。あたしの中の憎しみとは別の“心”が『こうしたい』って言ってるのよ。世界に“希望”を残したいって」

「あなた、まさか……!？」

そこまで聞いたエレノアはベルベットが何をしようとしているのかに気付いてしまう

「ちよつとした弱音よ。万が一時は、頼むってこと」

「……わかりました。ライフイセットは私が責任をもって守ります。弱音に付け込みたい所ですが、そうもいきません。死ぬまで貴女の命令に従うのが、私の誓約ですから」

「そういえばそうだったわね。アンタを負かしといてよかったわ」

二人はそれからしばし海を見ていたがそこにアイゼンとケンがやってくる

「悪いが行先を変更する」

「どうしたの急に？」

ベルベットが突然の事で理由を聞く。アイゼンはケンに視線を向けると代わりに事情を話す

「今回は自分がアイゼンさんにお願いしました。聖主の御座に向かうとなるとどうなるかわかりませんが、その前に個人的な用事で御座に向かう前に寄る所があります」

「その目的地は？」

「カドニクス港へ向かうのは変わらん……アルディナ草原だ」

「アルディナ草原……まさか!？」

エレノアがそのフレーズを聞いてアイゼン達が考えている事に感づく

「血翅蝶の情報だ。白角のドラゴンがああ丘の付近で姿が目撃されて

いる」

「ザビーダさんも恐らくその情報を掴んでいるはずです。自分はあの人に借りが一つあります」

そこまで聞いたベルベットはケンが何をしようとしているのか容易に想像できた。呆れながら呟く

「ホント・・・あんたってお人好しというか律儀すぎるというか」

「ええ、自分はお人好しです」

ケンは微笑みながらそう応えた

）

次の日の早朝、ゼクソン港へと到着したバンエルティア号から降り立った一行。港は活気を取り戻しているがどこことなく雰囲気が違う

「鎮静化は解除されたようね」

「業魔の被害と引き換えに、のう」

「・・・それも予定通りよ。世話になったわね」

「へっ、したいことをやっただけさ！礼なんかいるかよ！」

ベルベットが改めてここまで付き合ってくれたベンウィック達に礼を述べる

「鎮静化の影響は弱まったが、その分街はザワついている感じがするな」

ロクロウは住人達からのピリついた気を感じ取る

「聖寮の対魔士が激減し、業魔への対処が追いつかなくなっているのかもしれない」

聖隷の意識を制御していたカノヌシが範囲外へと追い出されたと同時に離反者が続出したのは用意に想像できる。聖隷の加護を前提に業魔と相對していた対魔士にとっては生命線、それがなくなれば文字通り死活問題だった

「・・・」

「泣いてるの？」

アイゼンの言葉を後ろで聞いていたエレノアが顔を伏せる。ベルベットが泣いてるのかと聞くと首を横に振る

「現実を噛み締めているだけです。借りものの“理”ではない、自分の“情”で動くことの怖さ、辛さ、そして責任を・・・今が、私の本当の新

しい出発点なんです。この過酷な現実を噛み締めて、前に進まない」と

「面倒な奴ね・・・けど、嫌いじゃないわ」

「はい・・・泣き虫じゃありませんから」

「そのようね」

「だが、なんでも背負い込むなよ」

エレノアの性格を知っているロクロウからは釘を刺される

「わかっています。私にできる事をするだけです」

「そんな事言いつつ、限界を超えて頑張っちゃうのが、お前だろ。ギリギリまで頑張つて、どうにもならない時は、人に頼つてもいいんだからな」

「ロクロウ・・・ありがとうございます！」

「ま・・・俺は人じゃないけどな」

「わかっていますよ」

一行はその後ダーナ街道からノーグ湿原、そこを抜けるころには雲行きが怪しくなりその後雨が降り出してきた。雨脚が強まっている、レニードにて先回りしていた血翅蝶の構成員からの情報だとザビータはいち早くドラゴンの所へと向かって行ったようだ。ザビータではドラゴンに手を掛けることはできないのは皆知っている。最悪殺されるのが関の山だ、全員は急いでレニードを出てドラゴンがいるであろうアルディナ草原の丘へと走り始めた。それから少し後丘にたどり着いた一行の前方で脇腹を抑え息が上がり切ったザビータがいたその奥に白角のドラゴンもいる

「ザビータと白角のドラゴン・・・！」

エレノアが言い終わると同時にドラゴンが頭突きでザビータを跳ね飛ばす

「ぐああっ・・・！」

背中から地面に叩きつけられるが直に跳び起きるザビータ

「はは・・・懐かしいなあ。初めてお前に声かけた時も、こんな風にぶん殴られたっけか」

笑って昔話をするザビーダの顔面にドラゴンの尾がめり込み横に吹っ飛ぶ

「ぐはあっ・・・!!!」

地面を擦りながら止まったザビーダは文句を言いながらも起き上がる

「・・・痛ってえ・・・加減を知らねえ子供みてえだなあ・・・」

痣だらけになりながらも立ち上がるザビーダにドラゴンはもう一度頭突きで突き飛ばす

「うおおおっ!!」

「ザビーダ!!」

ライファイセツトはたまらず駆け寄ろうとするがアイゼンがそれを止める

「・・・アイゼン!?!」

「黙って見てろ」

「でも・・・」

ライファイセツトが視線の先でケンがザビーダを助け起こす

「はあ・・・はあ・・・よう、兄ちゃん・・・よくわかったな・・・」

「血翅蝶の人達からお知り合いの目撃情報を提供してもらいました。天候の変わり具合も相まって大当たりの様です」

ケンは土砂降りになった空を見上げる。風も強くなってきた

「自分はザビーダさんに後一つの借りを返すために来ました。聖主も御座に行けばどうなるかわかりません。アイフリード船長を助けた時なにか言いかけましたよね?」

「そこまで言っただけならもう分かっただけじゃねえか・・・」

ザビーダは全てこそ言わなかったがシルバを救ったあの技に全てを掛けているのだろう。そこにアイゼンが近づきザビーダを見下ろす

「よう、副長・・・あいつを始末しに来たか?」

「それは最後だ。その前にこのお節介野郎の借りを返させる、後腐れがないようにな」

「へっ、そういうアンタも随分お節介焼きになったもんだ」

「勝手に言ってる」

踵を返しドラゴンの元へ向かう。ベルベット達はシエンロンの前に立ち構えている

「ザビーダさん。最善を尽くしますが、結果がどうなるかはわかりません。心の準備だけはしておいてください」

「・・・すまねえ」

「いえ、これも自分勝手の我が儘ですから」

ケンも立ち上がりアイゼン達の所へ向かう、シエンロンは新たな敵に向かって咆哮を上げた。ザビーダは痛みで悲鳴を上げる体に鞭を打ちその行く末を見守る為立ち上がった

）

第53話 終わり

第54話

激しい雨が降りしきる中、丘でシエンロンとの戦いが始まる

「はあああっ!!」

「斬り捨て御免!!」

ベルベットとロクロウがそれぞれの獲物で同時に斬りかかる、だがシエンロンの鱗が二人の攻撃を弾き、突風が吹き荒れ吹き飛ばされる

「くっ・・・!!」

「うおおっ!?!」

「ベルベット! ロクロウ!」

飛ばされた二人を突風に顔を庇いながらライファイセツトが叫ぶ。ベルベットは空中で体勢を整え着地し、ロクロウも同じように着地し武器を構えなおす

「風がしつこい!」

「ああ! それに硬い、生半可な攻撃は通じないぞ!」

それぞれが感じた感想を言い合うがその間にシエンロンのブレスが地面を抉りながら二人に迫る。そこに水の壁と水泡が現れる。水の壁がブレスの勢いを殺し弾けた水泡が弱まった攻撃を吹き飛ばす

「二人掛かりでやっとはのお・・・」

「でも、諦めない!」
マギルウが表情を僅かに歪ませるが決意を決めたライファイセツトの言葉を聞き口角を上げる。そこにエレノアが術を発動させ氷の槍を放ち隙を作る

「今です!」

「もう一度! いくわよ、ロクロウ!」

「応!」

二人はそれぞれ別の方向から攻撃を仕掛ける。しかしシエンロンは自身に風を纏わせその強力な風圧によって押し戻され、態勢を崩した二人に尻尾による薙ぎ払いが迫る。ベルベットとロクロウは攻撃

を防御するのは悪手と判断し咄嗟に後方に下がり回避する。その直後二人がいる場所までに扇状に広がった抉れた土が露出していた

「毎度の事なんて威力だ」

「喰らったら一たまりもないわね」

二人を威嚇するシエンロンの真下の地面から腹部目掛けて岩が突き出すのが瞬間的に察知され躲かれる

「勘がいいな、だがそれが命取りだ」

アイゼンは地面に手を着けながらシエンロンを睨みつけるが直ぐに別の方向に視線を移す、アイゼンが繰り出した岩の上を駆け上がるケンの姿があった、ケンは周囲にあった半ば埋まっていた巨大な岩を引き抜きそれを持ち上げながら跳びあがる。シエンロンの頭上まで高度に達した瞬間に岩を投げる、受け切れないと判断したのか躲す体勢に入った時ケンは投げた岩に向かってウルトラショットを撃ち込んだ

(倒すわけにはいかない、勝負は一瞬！)

ウルトラショットを撃ち込まれた岩は爆散し大小の破片がシエンロンに降り注ぐ、速度の乗った破片は風圧を貫通し体表を打ちつける。鉄の様に硬い鱗と云えど衝撃までは殺せずシエンロンは体勢を崩してケンに背中を向ける、そこにケンが体当たりと共に組み付き地面に叩きつける

「皆さん、今です！」

ケンがベルベット達の方を向き合図をした、次の瞬間シエンロンに脇腹を噛みつかれ振り回されて地面に同じく叩きつけられる。だがその行動はベルベット達が動くには十分すぎる時間を与えた。先に仕掛けたのはエレノアとマギルウ

「この瞬間は逃しません！」

「手早く済ませるぞよエレノア！後が支えるでの!!」

シエンロンが尾を横に薙ぎ払う、エレノアは槍を地面に突き立て棒高跳びの要領で跳び上がり躲しマギルウは式神を巨大化させそれに乗り上昇する

「今じゃエレノア！」

「参りますー！」

エレノアが槍をシエンロン目掛けて投げる。そこにマギルウが魔力を籠める

「全て貫いて見せるー！」

「念には念のー！ビッグフュージョンじゃー！」

「ペネトレイト・エクセリオン!!」

マギルウの魔力を纏った槍がシエンロンの脇腹に命中し岸壁に叩きつける。シエンロンは直ぐに起き上がり二人に向かって飛び上がる。そこに左右から二つの影が迫る

「ロクロウ合わせろー！あいつの技の時間を稼ぐー！」

アイゼンが霊力を纏った拳を連続でシエンロンへ叩き込む

「応!!間違つてやるなよ!!」

ロクロウも衝撃波を纏った斬撃を浴びせていく

「テメエが言うなー！」

「おおっと、それもそうだなー！」

ロクロウの煽りに怒鳴りながら間合いを取って突進、ロクロウも小太刀を敵に向け走り出す

「ファイナリティ・ゼスト！」

打撃と斬撃が交差し、シエンロンも堪えたのか咆哮を上げる。ベルベットがそこへ駆け上がり顎を蹴り上げる

「フイー!!」

「うん!!霊子解放ー！」

ベルベットの合図でライファイセットがシエンロンの真下に聖隷術の陣を作り出す。準備が完了するまでベルベットが蹴りと業魔手で足止めする

「いくよ、ベルベットー！」

「決着をつけさせてもらおうわよー！」

合図でダメ押し of 業魔手での攻撃の直後飛び退くベルベット

「舞い散れ!!イニユメラブル・ワウンド!!」

陣から白色の閃光が煌めき、シエンロンが吠える

「今だ!!やれ!!」

アイゼンがケンに向かって合図する。ケンの右手には金色のエネルギーが既に集まりそれをシェンロンに向けて放ち、コズミューム光線がシェンロンの胴体に直撃する。光線の粒子と共に穢れの瘴気が破壊されていく、シェンロンは本能でこの攻撃が危険と判断し光線を受けながらも前進し始めようとしたが地面から無数の光る鎖が伸び絡みつく。アイゼンが地面に手を当てながら叫ぶ

「行かせるかよ!!」

アイゼンは全力の霊力を籠めて阻止するがシェンロンが動くごとに鎖が軋み歪んでいく

「ぐううっ!!」

「アイゼン！僕も！」

「マギルウ！」

「言われなくても手伝いぐらいするわい！」

アイゼンに手を貸すべくライファイセツトとエレノア、マギルウが横に並び霊力で鎖を強化する。鎖は太くなるがそれでもシェンロンの進みは止まらない

「これでも止められないか!!」

「なんて力……！アイツの技が撃ち終わる前に潰される！」

ロクロウとベルベツトはアイゼンの鎖に攻撃が当たる可能性がある為、手を出せない。最悪な状況を想定して構える事しかできない。シェンロンの咆哮と風圧が雨と草を縦横無尽に巻き上げる。ケンは穢れを破壊する為にさらに光線を強くするがそれでも間に合うかわからない。アイゼンが歯噛みする

「クソ……ここまでか……」

その時アイゼンの横から人影が現れ同じように地面に手を着ける。アイゼンが横を向くとザビーダがいた

「テメエ……！」

「へっ、すまねえな副長。やっぱじつとしてんのは無理だ」

「怪我人は下がってろ……！」

アイゼンが語気を強めるがザビーダはにやけながら拒否する

「いやだね、アイツに貸しを返してもらわねえとなあ!!」

ザビーダが霊力を籠めてとうとうシエンロンの動きが止まる。ケンはコスミューム光線を尚も放ち続けるがエネルギーと体力の消耗が激しいこの技に息が切れ始める

「はあ．．．はあ．．．不味いな、穢れが予想以上だった。持ちこたえられないか」

立つのも辛くなり片膝を着いてしまう。その時彼の肩に手が載せられる、ケンが振り向くと暫く見た恩師がいた

「あ．．．貴方はー」

其処にいたのは赤と青で彩られた体表に金のラインが入った太陽と月が重なる金環日食の溢れるフレアの如くエクリプスモードのウルトラマンコスモスがいた。コスモスは静かに頷き横に並ぶとコスミューム光線の構えを取り、放つ。コスモスの光線がケンの光線と合わさった合体光線はシエンロンの体全体を呑み込む、師の前でみつともない姿を見せるわけには行かないケンは着いていた膝を上げる。シエンロンは体全体に照射され光線と共に黒い靄が消え去って行きシルバと同じように徐々に形を失くし人と同じ大きさに小さくなっていく

「テオドラ!!」

鎖を解き、光線が撃ち終わり、シエンロンがいた場所には民族衣装の様な服を纏った緑髪の女性が俯せに倒れていた。ザビーダは直ぐに走り寄りテオドラを抱き起す

「テオドラ！おい！目を開けてくれ!!」

ザビーダが必死で呼びかける中アイゼン達が周りに集まる。ベルベットとロクロウは業魔である為念の為距離を取っておりケンの方向へ向かっている

「大丈夫か？」

「ぜえ．．．ぜえ．．．ええ、なんとか．．．どうですか？成功しましたか．．．？」

「まだわからないわ。今呼びかけてるみたいだけど」

ロクロウは消耗で膝を着いていたケンに手を貸し立ち上がらせる。ベルベットは腕を組みながらアイゼン達の方を見ている、ケンはさり

げなく周りを見渡したがコスモスの姿はなかった。手を貸した後混乱を避ける為直に此処を去ったのだろう、ザビーダ達の方を見やるとテオドラと呼ばれた女性は意識が戻っていないようだ

「ちよつと行つてきます」

「・・・わかった、無理するなよ」

ロクロウの了解を取り重い足取りでアイゼン達の方へと向かう。アイゼンがこちらに気付く

「意識が戻らないのですか？」

「ああ、術を掛けたがそれでも気がつかん」

ケンに気付いたザビーダが何も言わなかったが心中を察したケンは側まで歩み寄りテオドラに手を翳し掌からコスモフォースを発する。優しい光がテオドラを包む、光が収まった後彼女の瞼が震えゆつくりと開く

「!!テオドラ！俺がわかるか!?!」

「ザビーダ・・・」

久しく聞いていなかった愛する者の声を聞き彼の目から涙が溢れてくる。テオドラは優しくザビーダの頬に手を添える

「すまねえ・・・こんなに掛かっちゃって・・・すまねえ・・・!!」

「何言ってるのよ、本当だったら私は今頃この世にいなかったんですもの・・・ごめんなさい・・・」

「謝らないでくれ！謝るのは俺の方だ！何もしてやれなかった！何もできなかった！」

涙をボロボロ溢しながら言葉を吐き出すザビーダをテオドラはそつと抱きしめる

「でも、最後は助けてくれた。ありがとう」

「!!・・・ああ・・・ああ!!」

アイゼン達は二人から距離を置き再会の喜びが収まるまで見守っていた

「・・・すまねえな副長、みつともないところ見せちゃって。今度はここに借りが出来ちゃった」

「礼ならあいつに言え。貸しを作った覚えはない」

暫くして落ち着いた後改めてザビーダはアイゼンに感謝を述べる。

雨は止み、日が差し込んでいる

「なあ、やっぱり副長も・・・」

「やめろ、あいつを巻き込むな」

「ならせめて、海賊から離れたらどうだ。ちったあマシになるだろうが」

「俺は、アイフリード海賊団副長。アイゼンだ、これを変えるつもりはない」

ザビーダが言いかけるのを遮るアイゼン

「それにな、もう始まっている。俺があなる前にはあいつはもういない。ドラゴン俺達聖隷にかけられた呪いだ。呪いに自分の舵を奪われるくらいならその方がマシだ」

アイゼンはテオドラと話しているベルベット達の方を見る

「ただ、大切に思うものが。ドラゴンになった自分に囚われるのだけは、恐い」

「あんたにも、守りたい相手がいるんだな」

「妹だ。『早咲きの花』の様に賢いしっかり者でな。良く俺を子供扱いしやがる。本当は泣き虫だが、すっかりした子だ」

「——そうか、仲良くしたいもんだな」

「・・・おい」

ザビーダの言葉に眉を上げるアイゼン

「なに想像してんだ。他意はねえつての」

「・・・その時が来たら、お前に始末を頼みたい」

「嫌だね、そんなの」

「！」

アイゼンの頼みを即刻断るザビーダに驚く

「テオドラを救ってくれたんだ。今度は俺がアンタを救ってやるさ。フィルクー||ザデヤ、『約束のザビーダ』の名に懸けてな」

「・・・ちっ、勝手にしろ。ウフェミュー||ウエクスブ、俺に喰われても文句は言うなよ」

「男に喰われるのは御免こうむるぜ」

二人が密かに誓いを交わしている頃、エレノア達はテオドラを近くにあった岩に座らせ休ませていた

「ご気分は如何ですか？」

「ええ、なんともないわ。寧ろ以前より良くなってるの」

「恐らくドラゴン化するほどの穢れをこやつの技で諸々吹き飛ばしたおかげじゃな」

エレノアの質問にテオドラが応えマギルウが推測を立てる。念の為回復の術を掛けていたライフイセツトはさりげなく聞き直す

「テオドラ。やっぱりその頭の……」

「いいのよ。"これ"と"これ"は私に対しての戒めと受け取ったから」

テオドラは自身の頭に生えている小さな白角と腰から伸びている尻尾に触れる。エレノアはマギルウの見解を聞く

「マギルウ、これは」

「うゝむ、何とも言えんが恐らく後遺症の類じゃろうな。今までドラゴンから元に戻した聖隷にはそんなもんはなかったし、ドラゴンになるまでに過程でこうなったのか……わからんのおゝ」

「でも、ちよつとかっこいいかも……」

マギルウ達が頭を捻る中ケンはテオドラにある物を差し出す

「テオドラさん、これを」

「これは……ペンダント？」

「それってハリアアで使ったペンダントよね」

「はい、ですがあれ以来うんともすんとも言わなくなりました。それに今のテオドラさんには器がありませんから、取り敢えずこれを使っていただけばと」

ケンはそう言うとテオドラにペンダントを渡す

「まあ、大事な物なんでしょ？」

「いえ、自分が持つていても持ち腐れになりますから。お気になさらず」

「——ありがとう、大事にするわ」

ケンの勧めに応えてテオドラはペンダントを首にかける、其処でア

イゼンとザビーダ、ベルトとロクロウが集まる

「何から何まで世話になったな」

「これで借りはお返しできました」

「それよりか、にいちゃんには返しきれない借りができちまったぜ」

ザビーダはケンに近づき手を差し出す。察したケンは手を握り握手を交わす

「フィルクー―ザデヤ、『約束のザビーダ』。助けが必要なら直にすっ飛んでくるぜ」

「ええ、その時はよろしくお願いします」

握手を解いた時、アイゼンはザビーダとテオドラにこれからどうするかを聞く

「お前達はこれからどうする」

「先ずはテオドラを安全な場所まで連れて行く。その後副長達に付き合うぜ」

「駄目だ。お前はテオドラと一緒にいる」

「でもよ」

アイゼンはザビーダに釘を刺す

「・・・積もる話もあるだろう。今度はお前が置いていく側になるんじゃない」

「副長・・・」

「ザビーダさん、どうか一緒にいてください。アイゼンさんの言う通りです。どうか」

ケンはザビーダに頭を下げる。こうも頼まれたら引き受けるしかない

「・・・わかったよ。だがよ、生きて帰ってこいよ」

「気をつけてね」

「はい」

それを皮切りに一行はザビーダ達と別れローグレスへと向かうために歩を進める

「待たせたな」

「別にいいわ。業魔であるあたし達じゃ悪影響もあるだろうし」

「これからどうする?」

ロクロウの提案にアイゼンは待ったをかける

「その前にローグレスの血翅蝶の所に行く。念の為情報を得たい」

「次いでに休んでいきましようか。決戦に向けて英気を養う時間はあるでしょうし」

エレノアがそう提案する。少なからず皆消耗しているのは確かだ
「そうしよう。一人かなり消耗してるからな」

「ケン、大丈夫?」

ロクロウがケンに肩を貸しライファイセットが支える。体力を使いすぎた為顔色が悪く肩で息をしている

「強がってんじゃないわよ」

「はは・・・、流石にこの姿を見せる訳にはいかなかったので・・・」
ベルベット達はそんな会話をしながらローグレスへと歩を進めた

）

第54話 終わり

前夜

アルデイン草原での戦闘の後、一行は損耗を考慮しローグレスの血翅蝶のアジトである酒場に頼ることにし、アルトリウスとカノヌシとの決戦に備え英気を養うこととなった。酒場までに行く途中カノヌシによる鎮静化によって自ら命を絶った人達の埋葬や後始末で街には以前ほどの活気はなかった。だが中には店を開けて炊き出しをする店主、治安維持に努める対魔士や王国兵士、亡くなった者達に祈りを捧げる聖職者、物資を融通する商人らの働きでほんの僅かではあるが人々に生きる希望を与えているように見えた。血翅蝶の酒場にたどり着いた一行はタバサ達に迎えられこれまでの事を報告。現状と事情を理解したタバサの計らいで今日は休むことになった。二階の宿部屋は奇麗に清掃されていた、その夜ベルベット達は酒場で各自自由を過ごしている中、ケンは食事を終えた後外へと出て目の前の広場に設置されているベンチに腰掛け夜空を見上げる。世界が混乱の中にあるにも関わらず満点の星空がケンに頭上に広がっていた、暫く景色を見ていると一つの足音が此方に近づいてくるのがわかった。ケンが其方に顔を向けるとルシフェルがスマホを見ながら立っていた

「いよいよ明日か」

「はい」

ルシフェルの問いに短く答えると彼はベンチの手すりに腰掛ける。ルシフェルはスマホを仕舞い夜空を見上げる

「ルシフェルさん、事が終わったら自分はどうなります?」

「ん?ああ、そうだな。一応神に聞いておくが最終的には君の意志に任せるよ」

ケンはそれを聞いて又夜空を見上げる

「わかりました。その時が来るまで考えておきますよ」

「そうしてくれ」

その後二人は幾つかの言葉を交わしルシフェルが先に広場から去っていく。ケンは立ち上がり酒場へと歩いていく、扉の前に立つと

ふと上を見上げ左眼の望遠機能でアルトリウスがいる上空に浮かぶ巨大な物体を映す。それを確認したケンは僅かに目を細めた後中へと入っていく、早めに休むとベルベット達に伝え宿部屋の寝台に横になる。高台での出来事もあったのか眠気が直にやってくる

「さて・・・どうなるか・・・そして、どうしようか・・・」

それを呟いた後目を閉じて眠りについた

「・・・」

ケンは目を覚ますとそこは宿部屋ではなく以前ルシフェルと対話した白い空間だった。そして彼の前にウルトラマンレオとコスモスが立っている、ケンは直ぐに姿勢を正す

「ケンよ」

「は、はい！」

「次がお前の最後の戦いになる。俺はお前が出来得る限りの事を叩き込んだつもりだが、結果はどうなるかはわからん。だが俺達はお前とその仲間たちが勝つと信じている」

「私も同じ気持ちだ。これは君達とアルトリウスの意地と意地とのぶつかり合いになる、だが私は君達がより良い未来を切り開いてくれることを祈る」

「・・・はい！」

二人の鼓舞を受けしつかりと返事をする。やがて周りの色が増していき師達の姿が霞んでいく

「ケン・・・死ぬんじゃないぞ・・・」

「わかりました」

レオのその言葉に答えたのを最後に意識がそこで閉じた

第55話

血翅蝶のアジトである酒場で一夜を明かしたベルベット達は早朝、決戦の場へと向かうべく外に出る

「じゃあ、行ってくるわ」

日も上がってない少し薄暗い中、ベルベットはタバサに向かい合い告げる

「ええ、気をつけて。今の聖主の御座は対魔士の警備もなく蛻の殻同然よ。それもアルトリウスの狙いでしょうけど」

「カノヌシの完全な覚醒には足りないものがあるってこと」

ベルベットは振り返りエレノア達と話しているライフィセットを見る

「相手が口を開けて待っているなら飛び込んで、腹を引き裂いて出るまでよ」

「貴女の思う道を征きなさい。後悔しないようにね」

「言われなくてもわかってるわ」

ベルベットはタバサに一瞥する。そしてライフィセット達の方を向き歩き出す。ベルベットが先頭になるとそれに合わせて皆が歩き始める、ケンは一度立ち止まりタバサの方を向き深く頭を下げ直に後を追いかける、丁度日が出てきて彼らの道の先を照らし始める。タバサはベルベット達の背中を静かに見送った

「幸運を祈っているわ」

タバサと別れベルベット達は真っ直ぐ聖主の御座に向かって行った。情報通り御座には対魔士の姿はなく放棄に近い状態だった。長い階段を昇り頂上に着くと真上にカノヌシとアルトリウスがいる建造物が見えた

「うーん．．．『カノヌシがいる』はいいが、ちょっと高すぎるぞ」

ロクロウが真上を見上げる。衛星軌道上に浮かぶ巨大なカノヌシの根城にどうカチコムか思案する

「あの高さではグリフォンでも無理そうですね」

「儂の式神は一人乗りじゃしな」

「自分の技でもあそこまで届くかどうか・・・」

それぞれが行き詰っているとアイゼンが制する

「おそろく悩む必要はないだろう」

「え・・・？」

アイゼンが指差した先には台座のようなものから白い光が上に伸びているのが見える。マギルウはそれがなにか直に分かった

「ほほう、転送術とは手回しがいいのう」

「カノヌシが完全覚醒するには、あたしとライフィセットが要る。決戦は、向こうも望む所よ」

「こつちだつて望む所だよ！」

「・・・などとノリで飛び込むでないわ、粗忽者！ちゃんと調べんか！」
「ご、ごめんなさい」

挑発にのつて今にも飛び込もうとするライフィセットをマギルウがツツコミで止める

「おお、ここに来て初めてマギルウが正論を言ったな」

「マギルウが言うのは珍しいですね」

「儂だつてたまには言うわい！」

「不吉ね。念の為もう一度準備と確認をするわよ」

「のおお！決戦前に頼もしい仲間をデイスるとは、血も涙もない奴らじゃわ〜！」

散々に言われたマギルウの叫びが辺りに木霊した。そこへ誰かが近づいてくる

「何やら騒がしいと思ったら、なるほど。災禍の頭主か」

ベルベット達は声のした方へ顔を向けると黄色と緑の上着を其々羽織った白装束の男性が立っていた

「あんだ達は・・・聖隸ね、何の用」

「事を荒立てるつもりはない。お前達がカノヌシを倒しに行くと思いい、ここで待たせてもらった」

聖隸は手を出し戦意がない事を伝える、ベルベットはそのまま

続けるよう目で促す

「まず、お前たちがカノヌシの領域から私達を解放してくれたことに礼を言う」

「それには及ばないわ。あたしの都合でやっただけ、まだ邪魔する聖隷がいるなら、容赦なく喰らうわ」

ベルベツトがそう告げるともう一人の聖隷が口を開く

「ほとんどの聖隷は、カノヌシの力で強制的に意思を奪われている。地上にいる聖隷は解放されたが。一部の聖隷はそのままカノヌシに従った者もいる」

「共存を諦めた者達か」

「上空にあるカノヌシの聖域では力が強く、従った者も新たに生み出された者も、もはや意思を取り戻すのは叶うまい」

表情を落とす聖隷にアイゼンが口を挟む

「事情は承知の上だ。手加減をすればこっちがやられる」

「このままカノヌシの意のままに操られるならば、自由にしてやってほしい。お前達の征く道を切り開く為に、お前達の信じる道を進む為にな」

「自分の信じる道を進む・・・意思をもつことは、そういうことでしよう？」

その言葉に二人は小さく頷く

「ならば我らも、我らの信じる未来を目指す」

「聖隷は、霊力を操作する術式を刻んだ”器”を神依の型とすることで人と聖隷の力を完全に融合することに成功した。彼ら、この神依の型を”神器”と呼んでいた」

「その弓が？」

ライファイセットは聖隷が持っている弓に目を向ける

「そう、完成した神器の一つだ。我々は、この神器と神依の技術を、後世に伝え遺そうと思う」

「・・・何のために？神依は危険な力だよ」

「人と聖隷の共存の為にだ」

「人と聖隷の共存・・・」

「現在の神依は、人間が一方的に聖隷の力を搾取するものだが。人と聖隷が、互いの意志を認め合った上で発動するものにできれば・・・」
「神依は、この世界に仇なす『強大な力』と闘う為の切り札になるだろう」

聖隷の言葉にベルベットが呟く

「この世界に仇なす・・・災禍の顕主のような、ね。いいわ、好きにすればいい」

「それも、まだ見ぬ未来の可能性の一つだ」

「うん」

「ひとつ、忠告しておく。既にカノヌシの為の神器は完成している。この意味はわかるな？」

聖隷の警告に意味はベルベットは直ぐに理解した

「・・・ええ、その神器を持つのは導師アルトリウス。そういうことでしょう」

「未来の為に、お前の武運を祈ろう。災禍の顕主よ」

ベルベット達が転送術の方へ向かう。ケンもそれに続こうとした時二人の聖隷に呼び止められる

「君は、我らの同族を救ったと聞いている。代わって礼を言わせてくれ」

「いえ、自分も確証があるわけではありませんでした。無我夢中にやった結果、いい方向に向かったと言うだけです」

「その行動が同胞を救ってくれたのだ。この恩は忘れない」

「ではその恩は、自分じゃない誰かに返してください」

ケンは振り向いてアイゼンの方を見る。聖隷も彼を見て頷く
「わかった。何時か必ず恩に報いよう。それと君に会いたい者がいる」

二人の聖隷の後ろから一人の女性が歩み寄ってくる。肩まで掛かる髪と毛先の赤色、その姿に見覚えがあった

「貴女は確か、聖寮の施設でドラゴンになっていた」

「はい、貴方に助けていただいた聖隷です」

その聖隷は少し恥ずかしそうに自己紹介をする。おそらく人と話

したことがないのだろう

「確か貴女とシルバはルシフェルさんが安全な場所に連れて行つたと聞いていましたが」

「そうなんですけど・・・その、あの時はお礼を言えなくて申し訳ありませんでした」

聖隷は申し訳なさそうな表情で頭を下げるもケンは空かさず制する

「どうか頭を上げてください、貴女を助けることができたのは全くの偶然で意思が解放されて直ぐ別れたのです。仕方ありません」

「ですが・・・」

「それより、なぜ此処に？」

「どうしてもお礼がしたくて・・・それであの人たちに連れてきてもらいました」

「はあ・・・」

意外な行動力にケンは少し驚いたがふと聖隷が腰に下げている短剣に気付く

「その短剣、使ってくれているんですね」

「あ、はい！器として使わせていただいています」

聖隷は短剣をケンに差し出す。ふと彼はルシフェルの言葉を思い出す

（確かこの短剣は別の機能が使えるとか言ってたな・・・）

鞘から短剣を抜き取る、藍玉の装飾が施された本身を見ながら縦に持ち取り敢えず刀身が伸びる様に意識してみると刀身が藍玉色の結晶を纏い細身の剣状の刃が出来上がった

「すごい・・・奇麗」

「ルシフェルさんから使い方聞いていなかったけどなんとなくあったな・・・」

聖隷は結晶の美しさに見とれ、ケンはうまく行った事に呟く。結晶を解き鞘に戻して返しやり方を教えた

「これなら何か危険が迫った時でも自分の身を守ることができるでしょう」

「何から何までありがとうございます」

ふと後ろを見ると皆が待っている

「では、そろそろ行きます。これで」

「はい・・・貴方も、どうかご無事で・・・」

聖隷はどこか寂しげな表情を浮かべながら別れを言う。ケンは二人の聖隷に目配せをした後ベルベット達の方へ歩き出す

「あの一！貴方のお名前はー！」

聖隷がケンに向かって叫ぶ、ケンはルシフェルが自分の名前教えなかつたのかなと思ひ振り返る

「ケンです」

「私は・・・私はライラと言います!!」

「ライラさん、どうかお元気で」

それを最後にベルベット達と合流する

「覚悟はいい?」

「いつでも」

短い会話をした後、転送術の中に入り込み辺りが光に包まれる。光が収まると自分達がいた大地が眼下にありここが紛れもなくカノヌシの聖域であるとわかる。白い岩のような足場と青い結晶がそこかしこに浮いており冷たい印象を伝える

「どうやら対魔士はいないようね」

「でも、かなりの聖隷がいます」

ベルベットとエレノアが周囲を警戒するが遠くからベルベット達の存在に気付いた聖隷達が此方に向かってくるのが見える

「カノヌシと直接契約した聖隷、陪神達だ。気をつけろ、奴の力を分け与えられているはずだ」

「厄介そうね」

「そうでもないさ、全部切り倒すだけの事さ」

ロクロウは小太刀を構えると皆も同じく構え陪神達を相対した